卄**ざえ**[才](名) ㊀さい。才智。㊁學問。技藝。「一皿し」。——の-**おぼえ**[才覺](名) 才智又は學藝に秀でたりとの評判。(才)。

さえ-かへ-る（エル/カ）（らりるるれれ）[冴返](自、ら四) つよくさゆ。

さえ-ざえ-し（しく、しき、しけれ）[冴冴](形、二) 殊によく「さゆ」。(冱)。

卄**ざえ-ざえ-し**（しく、しき、しけれ）[才才](形、二) 才智あるさまの外貌擧動にあらはれ見ゆ。

さえ-さえ-て(副) さえたる上に尙はさえて。いとさえて。「更けにけり、外山の嵐—」。

さえだ[小枝](名) こえだ。こずゑ。「ときはなる松の—をわれはむすばな」。卄——**ぐさ**[小枝草](名) 【植】竹の異稱。

卄**さ-おり**[狹織](名) 幅狹(セマ)く織りたる布、後世の倭田(サナ)織の類なるべしといふ。「—の帶」。

さか[坂](名) 平坦ならずして彼方高く此方低き路。のぼりくだりする道。(𨺗、阪)。

さか[酒](名) 「さけ」の轉。「—槽」。

さか[逆](名) ぎやく。さかさま。

卄**さか**[冠](名) とさか。肉冠。

卄**さか**[斛](名) 量の名。「こく」に同じ。

卄**さか**[尺](名) 度の名。「しやく」に同じ。「髮は見はじめ侍りし容は、たけに—ばかりあまりて」。

卄**さが**[性](名) ㊀もちまへ。うまれつき。性質。「人の—」。「秋の—」。㊁ならはし。ならひ。習慣。「世の—なれば詮なし」。

さが[祥](名) ㊀志るし。きざし。(徵)。㊁めでたき志るし。よろこびのきざし。(吉徵)。

(さ-が[槎枒](名) 木の枝の縱橫に相交はること。

(さ-が[嵯峨](名) ㊀山の高くしてけはしきこと。㊁古代錦の一種。

(ざ-か[座下](名) 書翰にて、先方の名宛の下に添へて敬意を表する語。(案下、机下)。

卄**さか-あぶら**[酒膏](名) にごりざけ。(醪)。

(さ-がい[詐害](名) ㊀いつはりたくらみて、他人の害をなすこと。㊁【法】いつはりを以て、他人の財産に損害を及ぼすこと。——**かう-ゐ**[詐害行爲](名) 【法】詐害の行爲、特に民事にて、債權者に損害を及ぼさんとの目的を以て、自分の財産を隱蔽し又は自分の債務を增すこと。

〔さか-いき[月代](名) 「さかやき」の訛。

(さ-かう[鎖港](名) 港内に他邦の船舶の入るを禁じ、通商を許さゞること。——**じやう-い**[鎖港攘夷](名) 德川幕府の末年に、朝野の志士が、幕府の開港を許可せしに反對して唱へし議論。

卄**ざ-かう**[麝香](名) 「じやかう」に同じ。

さかえ[榮](名) さかゆること。繁榮。榮華。〔——**る**[榮](自) 「さかゆ」の訛。

さか-おとし[逆落](名) ㊀逆に落すこと。懸崖などを下ること。「鵯越の—」。㊁懸崖などの切りそぎたるが如きさまなること。

さか-おひ[逆追](名) 追ひかけ來しものを、反對におひちらすこと。

さか-かす[酒粕](名) 酒の醪(モロミ)を搾(シボ)りて、あとに殘りたる粕、食物などの料とし又は肥料にも用ふ。さけのかす。(糟)。

さか-がめ[酒甕](名) 酒を入るゝ甕(カメ)。(酒瓶)。

卄**さか-がり**[酗](名) (酒怒(サカイカリ)の義) 酒に醉ひて狂ひ怒ること。(酒狂、醉狂)。

さかき[榊](名) ㊀ときはぎの總稱。㊁【植】山茶科に屬する常綠木、葉の全邊にして花の兩全なるものと、葉は鋸齒を有し花は果實を生じ若しくは脫落するものとの二種あり、枝葉は多く神に供せらる。(神樹、栄木、賢木、楊桐)。

さか-ぎ[倒木](名) 木理(モク)を逆に用ひたる材。

〔さか-きげん[酒機嫌](名) 酒を飲みて心持好きこと。醉ひて精神爽(サワヤカ)なること。(酒興)。

卄**さか-きさき**[酒蟻](名) 酒の上に浮く滓(カス)の如きかび。(浮蟻)。

(ざ-かく[座客](名) 座に居る客人。

さか-くさ-し（く、しき、しけれ）[酒臭](形、二) ㊀酒のにほひあり。㊁酒に醉ひたるにほひあり。

さか-くじ[逆公事](名) 訴へらるべき筈のものが、却て訴ふべき筈のものを相手取りて訴ふること。

さか-ぐら[酒藏](名) 酒を入れ置くくら。酒造家の藏。

さか-け[酒氣](名) 酒の氣。酒の香。

さか-ご[逆兒](名) 逆になりて出產する兒。脚部より先づ出產する兒。逆產の兒。(倒產)。

さか-ごと[酒事](名) さかもり。酒宴。

さか-ごと[逆事](名) ㊀道理に順ならぬこと。ひがごと。「—のまがごと」。㊁順序の逆なること。例へば、子が親に先だちて死ぬるが如き類をいふ。

さか-ども[酒薦](名) 酒樽を包むこも。

さか-さ[逆](名) 「さかさま」に同じ。(倒)。——**はりつけ**[逆磔](名) 「さかはりつけ」に同じ。——**まつげ**[逆睫](名) 眼球を刺戟するやう逆に生えたるまつげ。さかまつげ。

さか-さま[逆](名) (逆方の義) ぎやく。さかさ。うらはら。うらうへ。さかしま。反對。顚倒。「—になる」、(倒)。——**ごと**[逆事](名) 「さかごと」に同じ。——**ごと**[逆語](名) 主意の反對なる語。うらうへなる語。「はてはいはんことのなさにやあらん—ぞある」。卄——**のつみ**[逆罪](名) ひがごとのつみ，あしきつみ。

さか-し（しく、しき、しけれ）[賢](形、二) ㊀すぐれたり。かしこし。㊁つよし。いさまし。たけし。㊂智慧ありげに見ゆ。さかしらなり。卄——**が-る**（らりるるれれ）[賢](自、ら四) 賢きふりをす。りこうぶる。卄——**だ-つ**（たちつつてて）[賢立](自、た四) さかしがる。卄——**びと**[賢人](名) さかしき人。

さが-し（しく、しき、しけれ）[嶮](形、二) 嶮岨なり。けはし。(險)。

さか-しほ[酒鹽](名) 物を煮(ニ)るとき、味を付くるために酒を加ふること。(酒醬)。

さか-しま[逆](名) 「さかさま」の轉。(倒)。卄——**ごと**[逆語](名) 忌語などにて、ものをうらうへにいふこと。

さかし-もの[搜物](名) たづねさがすもの。

卄**さかし-ら**[賢](名) ものしりたるふりをなすこと、わきまへたるさまに振舞ふこと。卄——**が-る**（らりるるれれ）[賢](自、ら四) さかしがる。——**ぐち**[賢口](名) 利口ぶりたる口前。卄——**に**[賢](副) りこうぶりて。かしこだてに。

ざ-がしら[座頭](名) ㊀首座の人。上座のもの。㊁芝居其他興行物などの一座の頭。

さか-しろ[酒代](名) ㊀酒を買ふ代金。さかだい。(酒錢)。㊁雲助又は車夫などが、定めの賃金外に受くる餘分の金錢。さかて。

さがし-ゐ[搜盟](名) 壺又は字の中に、或壺をかくし入れて壺(ボヒ)きたるもの、これを搜(サガ)しあつるを一種の遊戲とす。

さが-す（さしすすせせ）[搜](他、さ四) さぐりもとむ。もとむ。たづぬ。

さか-だい[酒代](名) 「さかしろ」に同じ。

さか-だち[逆立](名) ㊀さかだつこと。「毛の—」。㊁しやちほこだち。

さか-だ-つ（たちつつてて）[逆立](自、た四) ㊀逆に立つ。(倒竪)。㊁おこり起つ。「—髮」。

さか-だな[酒店](名) 酒を賣る店。さかや。さかみせ。(酒舖)。

さか-だる[酒樽](名) 酒を入れ貯(ハク)ふる樽。

さか-づき[酒杯](名) (酒坏(サカツキ)の義) ㊀酒を盛(モ)りて飲む小さき器、古代は土器なりしが、後世は漆器・陶器又は金屬・玻璃などの製を用ふ。(盃、巵、盞)。㊁「さかづきごと」の略言。「夫婦の—」。——**あらひ**[盃洗](名) 「はいせん」の一名。——**ごと**[盃事](名) ㊀盃を取り交(カ)はす事。酒杯獻酬の儀式。㊁さかごと。さゝごと。酒宴。㊂祝宴を張るべき程のいはひ事。

さか-つぼ[酒壺](名) 酒を入るゝ壺。

さか-づら[逆頰](名) 鎧の頰當。——**えびら**[逆頰箙](名) 白藤にて箙(エビラ)の弦も箱も卷きたるもの。轉じて、熊の皮を逆に張りて作りたるを熊のさかづら箙といふ。

さか-て[酒手](名) さかしろ。

さか-て[逆手](名) 逆に持つこと、逆に取ること。「懷劍—に持ち」。——**なげ**[逆手投](名) 相撲(スマウ)の手、敵の手を逆に取り、其體を脊負ふが如くにして投(ナ)ぐること。

卄**さか-とじ**[酒刀自](名) 酒をかもすことをつかさどる人。酒を造る職。(酒杜氏、酒造匠)。

さか-とげ[逆刺](名) 逆に向きたるとげ。

さか-どの[酒殿](名) ㊀酒を釀(カモ)す所。㊁神樂の曲の名。

卄**さか-どり**[坂鳥](名) 朝早く塒(ネグラ)を出て、山を超(コ)ゆる鳥。「—の朝越えまして」。

さか-な[肴](名) (酒魚(サカナ)の義) ㊀すべて酒を飲むときに添へて食ふもの。下物。㊁食料とする魚。うを。——**いち**[肴市](名) 「うをいち」に同じ。——**うり**[肴賣](名) 魚を賣る人。さかなや。——**かけ**[肴懸](名) 乾したる魚などを吊(ツ)るにつらぬきてさす藁づと。べんけい。〔——**がし**[肴河岸](名) 「うをがし」に同じ。——**や**[肴屋](名) 肴をあきなふ人又は家。

卄**さが-な-し**（く、しき、しけれ）[不祥](形、二) 善くなし。わろし。(不良、無避)。

さか-なみ[逆浪](名) 流の上方に向ひて打寄する浪。物にさからひて打寄する浪。さかまくなみ。

卄**さがな-もの**[不祥者](名) よからぬ者。「いと鬼々しう侍る—」。

〔さか-ねだり(名) 逆さまに強請すること。

さか-ねぢ[逆捩](名) ㊀さかさに捩(ネ)づること。㊁人の攻擊を受け、却つて彼の缺點を探りて反對に詰(ナジ)ること。「—を食はせる」。

さか-のぼ-る（らりるるれれ）[溯](自、ら四) (逆上るの義) ㊀上流に向ひて上る。流に逆(サカ)ひて上る。㊁逆に進む。㊂既往又は根本にたどり及ぶ。

卄**さか-のぼ-る**（らりるるれれ）[榮昇](自、ら四) 朝日うらゝかに上る。「朝日豐—」。

さか-ば[逆羽](名) もぢれて逆になりたる羽。

さか-ば[阪刃](名) 薙刀などの刃のそりたる部分。

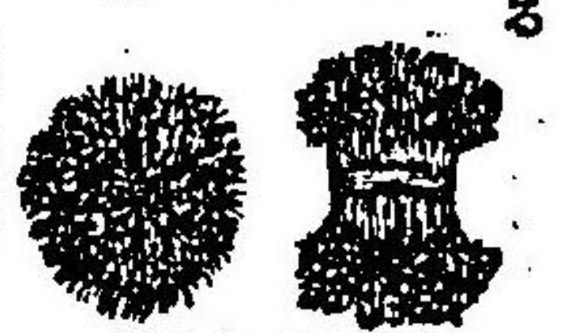
卄**さか-ばえ**[榮映](名) 時に遇(ア)ひて勢榮ゆること。「頸—に、去かれこそ」。

卄**さか-はぎ**[逆剝](名) 獸などを殺して後、皮を尻の方より剝(ハ)ぐこと。

さか-ばしら[倒柱](名) 倒木(サカギ)の柱。

さか-ばた[酒旗](名) ㊀酒屋の看板の旗。(帘、酒旆)。㊁「さかばやし」に同じ。

さか‐ばやし［酒林］（名）酒屋にて、杉の葉を束ねて球狀にし、檐先に懸けて看板とするもの、昔時は大いに行はれたり。


［しやばかさ］

さか‐ばりつけ［逆磔］（名）武家時代の極刑、罪囚の身體を逆さまにして行ふはりつけ。

さかひ（サカイ）［界、境］（名）㊀物と物と相接合する箇所。かぎり。「國の―」。㊁物と物と相分離する箇所。さは。「生死の―」。㊂區別又は制限。「礎を以て―となす」。㊃場所又は範圍。「悠々無爲の―」。

〔**さかひ**（サカイ）（接）故に、因って。（京阪地方の方言）。

さか‐びたし［酒浸］（名）酒の中に浸（ひた）すこと。

さか‐びたり［酒浸］（名）㊀酒の中に浸（ひた）ること。㊁常に酒を飲みてあること。

さかひ‐ぢゆう（サカイ―）［界重］（名）㊀春慶塗の重箱、多くは入籠（コイレ）のつくりなるもの、和泉國堺の名產。㊁野菜などをきり溜（タ）めておく箱。きりだめ。

さかひ‐め（サカイ―）［界目］（名）さかひ。かぎり。さは。わかれめ。

さか‐ふ（サカウ）［はひふふへ］［逆］（自、は四）㊀したがはず。たがふ。もとる。㊁そむく。はむかふ。㊂常態を失す。秩序に反す。

さか‐ふ（サカウ）［はひふふへ］［界］（他、は四）㊀區限す。かぎる。しきる。㊁分離す。へだつ。はなす。「みくにを―富士のしば山」。

さか‐ぶくろ［酒袋］（名）㊀酒のもろみを入れてしぼる袋。㊁飲酒の量。

さか‐ぶね［酒船］（名）酒をしぼるために、醪（モロミ）を入れたる多くの酒袋を入るゝ槽、底に近き側面に孔ありて、しぼられたる酒これより出づ。（酒槽）。

廿**さか‐べ**［酒部］（名）古昔、造酒司に附屬せし職名、節會のときの酒をあつかふもの。

廿**さか‐ほがひ**（―ホガイ）［酒祝］（名）酒を薦（スス）めて祝ふこと。

さか‐ま‐く［かきくくけけ］［逆卷］（自、か四）流に逆（サカ）ひて波卷き上ぐ。水底より波湧きあがる。「―浪」。（洶湧）。

廿**さか‐まくら**［坂枕］（名）古昔、踐祚・大嘗・新嘗・神今食（ジンコンジキ）などの大嘗のときに、神に奉りし枕、床薦にして枕の方高きより名づく。

さか‐また［逆叉］（名）【動】遊水類に屬する哺乳動物、形狀いるかに似る、齒鋭くして、肉及脂肪多し、體長二丈許、背鰭又になりて逆立てるより名づく、我國西南海に多く產す。

さか‐まつげ［倒睫］（名）さかさまつげ。

さか‐みせ［酒店］（名）さかだな。さかや。

さか‐みち［坂路］（名）坂になりたる路。（阪路、嶝路）。

廿**さか‐みづき**（名）酒に醉ひて正體なきこと。

廿**さか‐みづ‐く**［かきくくけけ］（自、か四）酒に醉ひて正體をうしなふ。

さか‐むかへ（―ムカエ）［坂迎］（名）㊀廿古昔、京都の人の、伊勢參宮より歸る人を逢坂山に出迎せしこと。せきむかへ。㊁轉して、旅路より歸る人を出迎すること。

さか‐むけ［逆剝］（名）指頭の皮のあれて逆に剝（ム）くること。さゝくれ。（逆臚）。

さか‐もぎ［逆茂木］（名）鹿の角の如くなりたる荊棘の枝を立て、繩を結び、敵を防ぐ用とせるもの。もがり。（鹿砦）。

さか‐もり［酒盛］（名）酒を杯に盛り相獻酬して興ずること。酒食を設け飲食して互に樂しむこと。うたげ。さかごと。さかづきごと。さゝごと。しゆえん。（酒宴、酒讌）。

さか‐や［酒屋］（名）酒をつくり又は賣ることを業とする人。又、其家。（酒舖）。

さが‐やう（―ヨウ）［嵯峨樣］（名）香法の一派、近衛流の末派にして角倉與市に始まる。

廿**さかやか‐す**［さしすすせせ］［榮］（他、さ四）さかゆるやうにす。さかえしむ。

さか‐やき［月代］（名）㊀男子の冠の下の髮を半月形に剃ること。つきしろ。㊁後世、男子が額より頭の中央へかけて、髮を剃（ソ）りしこと、應仁の頃より武士常に冑（カブト）を着けしより起りし風といふ。

廿**さか‐やまひ**（―ヤマイ）［酒病］（名）㊀酒の醉の日を超（コ）えて解けぬこと。㊁酒の中毒。

さか‐ゆ［えええゆるゆれえよ］［榮］（自、や下二）勢盛る。時めく。繁昌す。はゆ。「家―」。

さか‐ゆ‐く［かきくくけけ］［榮行］（自、か四）さかえゆく。

さか‐よせ［逆寄］（名）寄せ來る敵に向ひ、却りて此方より攻めかゝること。（逆擊）。

〔**さがら**（名）きんちやくきり。（上總地方の方言）。

さから‐ひ（サカライ）［逆］（名）さからふこと。

さから‐ふ（サカラウ）［はひふふへ］［逆］（自、は四）さかふ。もとる。たがふ。

さがら‐ぶ［相良麩］（名）麩の一種、すだれぶに似て厚し。

さかり［盛］（名）㊀さかること。さかる時。㊁強壯なる時。壯年。「―の子」。㊂人の多く寄り集まること。

〔**さかり**（名）畜類などの交尾の慾情。つるび。

さがり［下］（名）㊀さがること。くだること。㊁物にかゝりて垂るゝこと。㊂まかり出づること。退くこと。㊃値の降ること。やすくなること。㊄勢衰ふること。㊅術劣りゆくこと。㊆時間の過ぐること。「七つ―」。㊇親部のかもじの稱。㊈昔時、穢多又は芝居者などの稱。

廿**さがり**［鍑］（名）つり下げて用ふる口の大きな釜。

さが‐りう［嵯峨流］（名）築山の造方の一派、天龍寺の開祖夢窓國師より創（ハジ）まれるもの。

さがり‐くち［下口］（名）㊀物價などの下がりかけたること。下落の徵候あること。㊁勢衰へ又は術劣りゆく端緒。

さがり‐ぐも［下蜘蛛］（名）㊀【動】蜘蛛の一種、腹大く脚長く、暗灰色にして白斑あり、巢より蜘蛛網を垂下し、小蟲などの觸るゝを絡（カラ）り捕ふ。㊁天井などより蛛網をひきて下りたる蜘蛛。

さがり‐ごけ［下苔］（名）【植】菌類中地衣科に屬する植物、深山の樹梢などより下垂す、灰白色にして絲狀をなす。（松蘿、女蘿）。

〔**さかり‐どき**（名）畜類などの交尾期。

さかり‐に［盛］（副）さかんに。

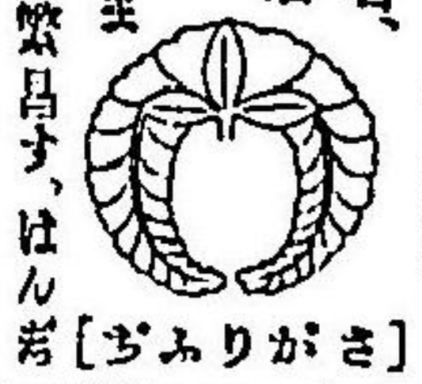
〔**さかり‐ば**［盛場］（名）人の多く寄りあつまる場所。「公園の―」。

廿**さがり‐ば**（名）さげがみのさがり。「―いと清らなり」。

廿**さかり‐びと**［盛人］（名）わかもの。壯年者。

廿**さがり‐ふすべ**［懸疣］（名）瘤の一名。（垂瘤）。

さがり‐ふぢ［下藤］（名）紋所の名、二房の藤の花を左右に垂れて輪を描（ヱガ）きたるもの。


［さがりふぢ］

さか‐る［らりるるれれ］［盛］（自、ら四）㊀勢まさにおこりふるふ。おこる。㊁業務繁昌す。はんじやうす。㊂時めきさかゆ。㊃流行す。はやる。㊄物事方にたけなはにてあり。

廿**さか‐る**［らりるるれれ］［離］（自、ら四）はなる。へだゝる。とほざかる。「天―」。（放）。

〔**さか‐る**［らりるるれれ］（自、ら四）交尾す。つるぶ。つるむ。

さが‐る［らりるるれれ］［下］（自、ら四）㊀上より下へ行く。高きより低きへ行く。くだる。おる。㊁物にかゝりて垂（タ）る。「藤の房が―」。㊂價低くなる。やすくなる。㊃衰頽す。おとろふ。㊄あしくなる。又、へたになる。㊅後へ去る。去りぞく。「後へ―」。㊆退出す。まかる。㊇時過ぐ。

さか‐ろ［逆艣］（名）船の前後進退を自由にするため、船の舳にも艫に向けて艣を立つること。

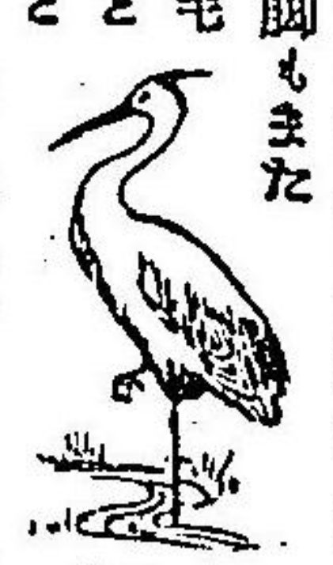
さかん［盛］（名）「さかり」の音便。――**に**（副）勢よく。おほいに。つよく。おほく。

さき［先、前］（名）㊀前なる部分。まへ。はな。「―になる」。㊁はし。すゑ。端末。「筆の―」。㊂進み行く方。將來。前途。「―のため」。㊃過ぎこし方。後方。過去。㊄あひて。せんぱう。「―の心」。㊅早きこと。さきんずること。㊆急務。「教育より―なるはなし」。㊇さきだち。さきて。さきがけ。――**をあらそふ**［爭先］我劣らじときそひ進む。――**をおふ**　さきばらひをなす。――**をはらふ**　前條に同じ。

さき［崎］（名）㊀海中に突き出でたる陸地。みさき。（岬）。㊁突き出でたる山角。（碕）。

廿**さき**［幸］（名）さいはひ。さち。（福）。

さぎ［鷺］（名）【動】涉禽類に屬する鳥、形鶴に似る、嘴は角質にして長く、頸・脚もまた共に長し、趾の周圍は羽毛なくして裸出するを常とす、水邊に棲息し魚類などを捕食す。（鷥、雪客）。――**をからす**　理を非にし又は非を理にいひまぎらするにいふ。


［さぎ］

（**さ‐ぎ**［詐僞］（名）眞實にあらざること。いつはり。

（**さ‐ぎ**［詐欺］（名）㊀いつはりたばかること。あざむきだますこと。㊁【法】事實をいつはり又は隱蔽して、他人を錯誤に陷らしめて損害を加ふること。㊂詐欺取財の略言。

さぎ‐あし［鷺足］（名）㊀鷺の歩むが如き歩調、即ち、ぬきあし。㊁たかあし。たけうま。㊂田樂舞の一、たかあしにのりて行ふもの。

さき‐おひ（―オイ）［前追］（名）貴人の通行などに、路行く人をはらふこと。さきばらひ。（喝道）。

さき‐お‐ふ［はひふふへへ］［前追］（自、は四）さきおひをなす。

さき‐がけ［先驅］（名）㊀最も早く敵中に攻め入ること。（先登）。㊁群に拔（ヌキ）づること。先んずること。「花の―」。（魁）。

さき‐がし［先貸］（名）まへがし。

さき‐かた［先方］（名）せんぱう。

さき‐かた［先肩］（名）二人して物を舁（カ）く時に、棒の前方を擔（タ）ふ者の稱。さきぼう。あとかたの對。

さき‐がね［先金］（名）まへがり。前金。

さき‐がひ（―ガイ）［先買］（名）他人の買はんとするものを先廻りして買ふこと。

さき‐がり［先借］（名）まへがり。前借。

廿**さき‐く**［幸］（副）さいはひに。

さき‐くぐり［先潜］（名）人より先廻りして、密（ヒソ）かに事をなすこと。

さき‐くさ［三枝］（名）（幸（サキ）草の義、三莖の草を瑞祥とせる故事に出づ）【植】（い）一種の草、山百合に似て、一莖三枝に分かる。（福草、萬年松）。（ろ）「ひのき」の一名。――**の**［三枝］（枕）「みつ」に冠らする詞。

さぎ‐ぐさ［鷺草］（名）【植】玄參科に屬する草、枝は平臥し、葉は倒卵形又は匙形をなし、花は白色又は帶紫色を呈す、頗は平滑なり、觀賞用として栽培せらる。さぎごけ。さぎさう。（溝腸菜）。

廿**さき‐くさな**［薺苨］（名）【植】「みのは」に同じ。

さぎ‐ごけ［鷺苔］（名）【植】「さぎぐさ」の一名。

さき‐ころ［先頃］（名）現在に近き過去の時。せん

だって。さきだって。このあひだ。さきつごろ。過日。

さぎ-さう[鷺草]（名）【植】「さぎぐさ」の一名。

さき-さがり[先下]（名）先頭の下方に傾きたるを。「編笠を―にかづき」。

さき-ざき[先先]（名）㊀過ぎ去りし方、後方。過去。「―の御世の例」。㊁進み行く方向。將來。前途。

さき-し（くしき　けれ）[幸]（形、一）さいはひなり。やすらかなり。へいあんなり。ぶなんなり。

⌒**さぎ-し**[詐欺師]（名）巧に人を詐欺して、財物をかたりとる人。

さき-しやう[前生]（名）ぜんせ、ぜんしやう。「きのふは―、けふは此世」。

⌒**さぎ-しゆざい**[詐欺取財]（名）【法】詐欺を以て、他人の財物又は證書類などをうばひとるを。

さき-すさ・ぶ[咲進]（自、は四）さきみだる。

さき-ぞなへ[先備]（名）先頭に立つ軍隊又は前衞。さきて。せんぽう。せんぢん。ぜんゑい。（先手、先陣、前陣）。

さき-だち[先立]（名）さきにたつを。又、其人。

さき-だ・つ（たちつつて　てて）[先立]（自、た四）㊀前に立つ。前に行く。㊁はじめとなる。第一となる。「―ものは金」。㊂首唱す。となふ。はじむ。「人に―」。（先行）。

さき-だ・つ（てて　つる　つれ　てよ）[先立]（他、た下二）さきだたしむ。

さき-だって[先立]（名）さきごろ。さきつころ。せんだって。（先達）。

〜**さき-だてる**[先立]（他）「さきだつ」の訛。

‡**さき-たま**[幸魂]（名）さきみたま。

‡**さぎ-ちやう**[左義長]（名）古昔、正月十五日に行はれし[illegible]の儀式、淸凉殿の庭に靑竹を立て、これを燒きて行はれたり。（爆竹）。

‡**さき-つ-ころ**[先頃]（名）（さきの頃の義）さきごろ。さいつごろ。（往日）。

‡**さき-つ-とし**[先年]（名）（さきの年の義）さいつとし。（往年、前年）。

‡**さき-つ-ひ**[先日]（名）（さきの日の義）このあひだ。せんじつ。くわじつ。

さき-て[先手]（名）さきぞなへ。前衞。先陣。先鋒。

さき-どり[先取]（名）他人より先に取るを。――**とくけん**[先取特權]（名）【法】債務者の財產又は權利に就きて、他の債權者を排して自分最初にこれを取得する特權。

さき-ども[先供]（名）さきにたつとも人。

‡**さき-な・む**（まみむむめ）[呵]（他、ま四）叱責す。さいなむ。しかる。いさふ。

さき-に[先]（副）まへかたに。以前に。（曩、嚮）。

さき-のこり[咲殘]（名）後（オク）れてさける花。

さき-のこ・る[咲殘]（自、ら四）㊀後（オク）れて咲く。㊁咲きて久しく散らずにあり。㊂殘りて咲かずにあり。

さぎ-の-しりさし[鷺尻刺]（名）【植】「いゐ」の一名。（名）「みつかど」の一名。

さき-の-よ[先世]（名）㊀吾人の此世に生まれ出づる前の世。ぜんせ。㊁吾人の此世を去りて行く世。ごしやう。

さき-のり[先乘]（名）行列のさきに立つ騎馬。（前驅）。

さき-ばおり[割羽織]（名）帶刀に便なるため背の中程の下を縱にさきたる羽織。ぶっさきばおり。

⌒**さぎ-はさん**[詐欺破產]（名）【法】破產の宣告を受けたる債務者が、支拂停止又は破產宣告の前後を問はず、履行する意なき義務又は履行すると能はざるを知りたる義務を負擔し、又、債權者に損害を被らしむる意志を以て、貸方財產の全部若しくは一部を藏匿し轉匿し又は脫漏し、又は借方現額を過度に揭げ又は商業帳簿を毀滅・藏匿し又は僞造變造したるを。

さき-ばしり[先走]（名）㊀さきばしるを。又、其人。㊁肴又は蔬菜などの普通の期節より前に出づるを。はしり。

さき-ばし・る（らりるるれれ）[先走]（自、ら四）㊀他よりさきに走り出づ。㊁さし出て、事をなす。

‡**さき-はひ**[幸]（名）「さいはひ」の原語。

‡**さき-は・ふ**[幸]（自、は四）（幸延（サキハフ）の略）幸運に逢ふ。よき仕合にてあり。さかゆ。「言靈の―國」。

さき-ばらひ[先拂]（名）㊀昔時、貴人外出の時に、前方の行人を追ひはらひしを。さきおひ。（喝道警蹕）。㊁荷物又は信書を發送するに、其貨錢又は郵稅を到着先にて支拂はするを。「―の郵便」。

‡**さき-は・ふ**（へへふふるふれへよ）[幸]（他、は下二）幸を與ふ。

さき-ぶと[先太]（名）端末のふときを。又、其物。

さき-ぶれ[先觸]（名）其事のある前より、豫（アラカジ）め觸れ知らするを。まへびろう。（豫報）。

さき-ぼう[先棒]（名）さきかた。あとぼうの對。

さき-ほど[先程]（名）いまがた。せんこく。

さき-ぼそ[先細]（名）端末の細きを。又、其物。

〜**さき-みず**[先不見]（名）前後の思慮なく行ふを。

‡**さき-みたま**[幸魂]（名）人に幸を與ふる神のみたま。さきたま。荒魂の對。

さき-みだ・る（れれるるるるれれよ）[咲亂]（自、ら下二）盛んに咲きほころぶ。今をさかりと咲く。（爛漫）。

〜**さき-みだれる**[咲亂]（自）前條の訛。

‡**さき-もり**[防人]（名）（崎守の義）上古、筑紫の

崎々を守りし防兵、初は遠江以東の兵を以てこれに充（ア）て、三年を一期として太宰府に駐屯せしむ、壹岐及對馬島のものは、島守（サキモリ）と記せり。

‡**さ-きやう**[左京]（名）昔時、京都の朱雀大路より東の方の稱。うきやうの對。――**しき**[左京職]（名）古昔、左京の戶籍・租稅・訴訟等を掌りし官名。ひだりのみさとのつかさ。右京職の對。

⌒**さぎやう-へんかく**[佐行變格]（名）【文法】不規則動詞の一、語尾の「せ・し・す・する・すれ・せよ」と活用するものにして、す（爲）・おはす（坐）の二語に限れども、す（爲）が諸種の名詞及漢語と複合して、一動詞となれるもの多し。

⌒**さ-きよう**[座興]（名）㊀一座の興に入るべき藝術又は遊戲。㊁一時のたはむれ。ちよっとのざれごと。

⌒**さ-きよく**[叉棘]（名）【動】うに等の外面にある一種の棘、端に二三の肢ありて專ら全面の掃除をなし、或は食物を口に送る用をなす。

‡**さき-ら**（名）（「ら」は助辭）㊀辨舌あると。才氣あると。「―をみがく人」。「くち―をとぎて咨へんとす」。㊁ものゝはし。「口―」。（端）。

‡**さ-ぎり**[狹霧]（名）（「さ」は接頭語）「きり」に同じ。

さき-わ・く（けけくくるくれけよ）[咲分]（自、か下二）さきわけに咲く。

さき-わけ[咲分]（名）一株の中に、種々の色の花雜（マジ）り咲くと、又、其花の咲く草木。（爛班）。――**もも**[咲分桃]（名）「げんぺいもも」に同じ。

さき-をとつひ[一昨昨日]（名）さきをとゝひ。

さき-をとゝし[一昨昨年]（名）一昨年の前年。

さき-をとゝひ[一昨昨日]（名）一昨日の前日。

⌒**さ-きん**[砂金]（名）「しやきん」に同じ。

さき-ん・ず（ぜじずずるずれぜよ）[先]（自、さ變）（「先にす」の音便）他人より先に行く。他人より先になす。さきだつ。「―れば人を制し、後るれば人に制せらる」。

⌒**さく**[柵]（名）㊀ませがき。ませ。㊁やらい。らち。㊂こおろ。とりで。㊃たな。棧架。

⌒**さく**[昨]（名）きのふ。さくじつ。ぜんじつ。

⌒**さく**[朔]（名）㊀月の第一日。ついたち。㊁支那の古代、天子季冬に來歲十二ヶ月の曆及政令を諸侯に頒布せしと。㊂北方。きた。「―風」。――**をうく**[奉朔]天子より頒布する曆と政令とを受くる義にして、諸侯又は屬國などが、天子の命令を遵奉してよく服從するにいふ。

⌒**さく**[策]（名）㊀ふだ。簡札。㊁かきもの。文書。㊂とひ。問題。㊃命令書。又、辭令書。㊄はかりごと。謀計。㊅めとぎ。[illegible]「―をかぞへ」。㊆くじ。又、かずとり。㊇むち。又、つゑ。「―を執る」。

⌒**さく**[作]（名）㊀製作するを。又、製作物。㊁耕作するを。又、耕作物。㊂できばえ。こしらへかた。

⌒**さく**[蒴]（名）【植】植物の種子を包（ツツ）める殼、あさがほの實の類。

さ・く（かきくくけけ）[咲]（自、か四）花の蕾（ツボミ）開く。ひらく。

さ・く（けけくくるくれけよ）[避]（他、か下二）㊀會はぬやうに路を轉ず、受けぬやうに身を轉ず。よく。㊁のがる。にぐ。まぬかる。㊂忌む。憚る。「さけて言はず」。㊃關係せず。あづからず。

さ・く（けけくくるくれけよ）[裂]（自、か下二）切れて分かる。破れ離る。

さ・く（かきくくけけ）[裂]（他、か四）やぶり離す。切り分く。ひきやぶる。（劈、剖）。

‡**さ・く**（けけくくるくれけよ）[離]（他、か下二）はなす。「天の原、ふりさけ見れば春日なる」。（放）。

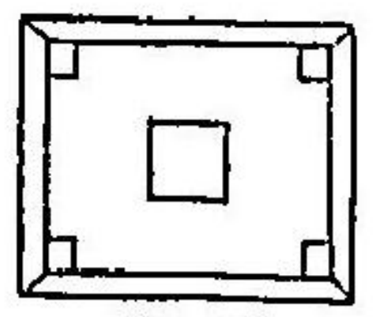
さ・ぐ（げげぐぐるぐれげよ）[下]（他、か下二）㊀おろす。くだす。㊁物にかけて垂らす。㊂低くす「價格を―」。㊃しざらす。ひかす。しりぞく。

さ・ぐ（げげぐぐるぐれげよ）[提]（他、か下二）手に持ち挈（サク）ふ。

⌒**ざ-ぐ**[座具]（名）㊀座する時に敷く物。㊁僧侶の六物の一、蹈（メット）をするときに座下に敷く物にして、織物にてつくる。

⌒**さく-い**[作意]（名）㊀故（コト）さらに作り設けたる考。㊁製作の意匠。

⌒**さく-いん**[索引]（名）㊀さがし出すを。ひき出すを。㊁字書辭書其他諸種の圖書にて、其中の字又は辭若しくは事項をさがし出だすための案內。みだし。



［ざぐ］

⌒**さく-か**[作歌]（名）和歌をつくるを。又、其和歌。

⌒**さく-か**[昨夏]（名）去年のなつ。

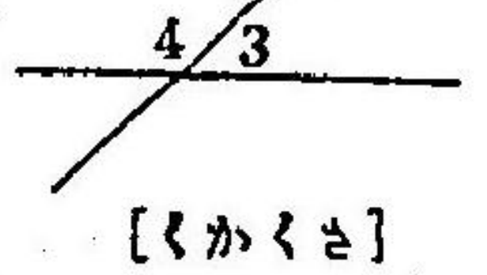
⌒**さく-か**[作家]（名）詩歌・小說・繪畫・彫刻其他すべて美術品の製作者。

⌒**さく-かい**[鑿開]（名）㊀きりひらくを。㊁道路を開くを。

⌒**さく-かう**[錯行]（名）㊀すぢかひに行くを。㊁かはる〲行（メグ）るを。又、たがひに交叉するを。

⌒**さく-かく**[錯覺]（名）【心】錯誤ある知覺。

⌒**さく-かく**[錯角]（名）【數】一つの直線が二つの直線と交はるときに生ずる內角の中、初めの直線の反對側に於て相對する角、例へば下圖にて1と3及2と4とこれなり。



［さくかく］

⌒**さく-がく**[錯愕]（名）あわてふためくを。おどろくを。

⌒**さく-かん**[策簡]（名）㊀ふだ。㊁かきもの。

⌒**さく-き**[數奇]（名）不運のつゞくを。

(さく-きう[索求](名) たづねもとむること。

(さく-きよ[索居](名) 親しきものと分離して居ること。「離群—」。

(さく-きよ[削去](名) けづりさること。

(さく-きよく[作曲](名) 詩歌を音樂にのぼせうたふやうに曲を作ること。又、其作りたる曲。

(さく-くう[鑿空](名) ㊀道をひらくこと。又、あなをあくること。㊁ありもせぬ理由をかんがへこしらふること。

++さく-くむ[裂](他、ま四) さくむ。

(さく-くわ[蒴果](名) 【植】ゆり又はあやめ等の果實の如く、數個の子房相合して成れる果實の稱。熟すれば裂開す。

(さく-くわ[錯過](名) あやまち。しくじり。

(さく-くわく[策畫](名) はかりごとをたつること。手段をめぐらすこと。

さく-げ[作毛](名) 稻の穗のみのり。

(さく-げう[昨曉](名) きのふのあさ。

(さく-げふ[作業](名) 「さげふ」に同じ。

(さく-げん[削減](名) けづりへすこと。「政費—」。

(さく-げん[策源](名) 戰地にある軍隊がすべての需用を仰ぐ背後の地點。——ち[策源地](名) 策源と定められたる場所。

(さく-ご[錯誤](名) あやまり。まちがひ。「擬律の—」。

(さく-こん[昨今](名) きのふけふ。このごろ。

(さく-さい[昨歲](名) きよねん。こぞ。

(さく-さく[嘖嘖](名、副) ㊀口々にいひたつるさまにいふ語。㊁爭ひいふさまにいふ語。

(さく-さく[鑿鑿](名、副) ㊀言のよく適中するさまにいふ語。㊁鮮明なるさまにいふ語。

(さく-さく(名、副) 最も愉快にたやすく嚙(カ)み又はきざみ得らるゝさまにいふ語。

(さく-ざく(名、副) ㊀前條に同じ。㊁固きものなどの多く集まるさまにいふ語。「金を—持つ」。

(さく-ざつ[錯雜](名) 入りまじること。みだれまじること。

++さく-ざめ(名) しうとめ。

(さく-さん[柞蠶](名) 【動】蠶の一種、黃褐色にして白色を帶ぶ、柞の葉を食し、褐色の繭を造る。

(さく-さん[醋酸](名) 【化】刺戟性の香氣ある無色の液體にして酸性の弱き一鹽基酸、醋の主成分をなすもの、酒類を空氣中に放置するとき醱酵によりて生ず、近來多くは木材を乾溜して生ずる液より製す。——えん[醋酸鉛](名) 【化】酸化鉛を稀醋酸に溶解し蒸發して得たるもの、鉛糖に同じ。

(さく-し[策士](名) はかりごとに富みたる人。よく手段を案出する人。謀士。

++さく-し(くしきけれ)(形、二) ㊀こはれやすし。さけやすし。もろし。(脆)。㊁きがるなり。さくくなり。

(さく-じ[作事](名) 家の建築。工事。普請。——かた[作事方](名) 德川時代に、公の普請を請負ひし人。——ぶぎやう[作事奉行](名) 作事を監督する奉行。

(さぐ-じ[三狐神](名) 農家にて祭る田の神。

(さく-しう[昨秋](名) 去年のあき。

(さく-じつ[昨日](名) けふの前日。きのふ。

(さく-じつ[朔日](名) ついたち。

(さく-しや[作者](名) ㊀詩歌・文章又は書物などをつくる人。(著作家、著述家)。㊁狂言作者の俗稱。

(さく-じゆつ[作述](名) 作り述(ノ)ぶること。述作。

(さく-しゆん[昨春](名) 去年のはる。

(さく-しよ[策書](名) ㊀辭令書又は命令書。㊁文書又は記錄。

++さ-くじり[抉](名) さくじること。こましやくれ。

++さ-くじる[抉](自、ら四) 差出てゝなす。こざかしく振舞ふ。「いとさくじりおよすげたる人」。

(さく-せい[作成](名) つくりなすこと。こしらふること。——ち[作成地](名) 或ものをつくりなしたる場所。「鹽田の—」。

(さく-せう[昨宵](名) さくや。ゆふべ。

(さく-せき[昨夕](名) きのふのゆふべ。ゆふべ。

(さく-せつ[錯節](名) いりまじりたる節。轉じて、混雜せる事件。

(さく-せん[策線](名) 軍隊が作戰目標に達する線路。

(さく-せん[作戰](名) 軍隊が敵に對して行ふ方法又は動作。——けいくわく[作戰計畫](名) 作戰に關する謀策。——ち[作戰地](名) 敵に對して作戰する地域。——もくへう[作戰目標](名) 作戰上軍隊が到達すべき目標(メジルシ)。

(さく-ぜん[索然](名、副) 興味なきさまにいふ語。(無味)。

(さく-そう[錯綜](名) くみあはすること。交ふること。又、入りまじること。交はること。

(さく-ぢよ[削除](名) ㊀けづりのぞくこと。㊁とりけすこと。

(さく-づ[作圖](名) 圖をつくること。圖をひくこと。——だい[作圖題](名) 【數】要する所の圖を作る幾何學的方法を求むる題。

(さく-つう[鑿通](名) ひらきとほすこと。又、うがちつらぬくこと。

(さく-てう[昨朝](名) きのふの朝。(昨晨)。

(さく-とう[昨冬](名) 去年の冬。

(さく-とく[作得](名) 田畝の收穫の中より納租したる後の得分。(收穫、所得)。

さく-なげ[石楠花](名) 【植】「しやくなげ」に同じ。

朔望

++さく-なだり(名) 谷川の水の激(ゲキ)しく落ち來るさまにいふ語。「—に落ちたぎつ」。

++さく-なんさ[石楠草](名) 【植】「しやくなげ」の古稱。

(さく-にん[作人](名) ㊀製作する人。㊁耕作する人。

(さく-ねん[昨年](名) 今年の前年。こぞ。かくねん。去年。

さく-ば[作場](名) 耕作する所。田畠。

(さく-ばう[朔望](名) 朔即ち陰曆の一日と望即ち十五日と。——げつ[朔望月](名) 【天】太陰月に同じ。

++さく-はうし[笏拍子](名) 神樂の節を擊つ具、笏(シヤク)を中央より切斷したるものにして、二枚相叩(タタ)きて音を發す。はうし。しやくびやうし。

[さくはうし]

(さく-ばく[索寞](名) さびしきこと。

++さく-はち[尺八](名) 「しやくはち」に同じ。「大ひちりき、—のふえなどの」。

(さく-はつ[炸發](名) 火藥の發火すること。

(さく-ばん[昨晚](名) きのふのくれ。さくゆふ。昨夜。(昨夕)。

(さく-ひ-こんぜ[昨非今是](名) (きのふは非にしてけふは是なる意) 境遇の一轉又は性行の一變して、心の安慰を得たること。

(さく-びやう[作病](名) いつはりの病氣。けびやう。

(さく-ひん[作品](名) 製作したるしな。

(さく-ふう[朔風](名) きたかぜ。北風。(寒風)。

(さく-ぶん[作文](名) 文章を作ること。又、作りたる文章。

(さく-へい[朔幣](名) ぬさの一種。

(さく-べい[索餅](名) 麥粉と米の粉とを捏(コ)ね、繩の如くねぢりたるもの、古昔、陰曆七月七日に、瘧よけのまじなひとて、内膳司より禁中に奉れり。むぎなは。

(さく-へいもん[朔平門](名) 古昔、内裏の外廓十二門の一、北方にあり。

(さく-ぼ[醋母](名) 【化】醋酸(サクサン)の醱酵する際に生ずる一種の黴菌。

(さく-ぼう[策謀](名) はかりごと。

(さく-ほく[朔北](名) きた。北方。

(さく-まう[作毛](名) 稻の穗(ホ)のみのり。さくげ。

++さく-む[裂](他、ま四) 踏み分く。ふみつく。

(さく-めい[策命](名) 命令書。辭令書。御沙汰書。——し[策命使](名) 策命を奉じて行く使者。

(さく-もつ[作物](名) 田畠に植ゑ作る物の總稱。

++さく-もづき(名) 陰曆五月の異稱。

さく-もの[作物](名) ㊀「さくもつ」に同じ。㊁こしらへ作りたる物品。

(さく-もん[柵門](名) 柵の入口の門。又、城壘の門。

(さく-や[昨夜](名) よべ。さくゆふ。(昨晚)。

(さく-やく[炸藥](名) 砲彈の內部に裝塡して、彈體を破壞せしむる發火藥。——しつ[炸藥室](名) 砲彈の炸藥を裝塡する所。

(さく-ゆふ[昨夕](名) きのふのゆふべ。さくせき。

さくら[櫻](名) ㊀【植】薔薇科に屬する木、花は五瓣淡紅色にして最も美麗なり、變種多けれど何れもやまざくらを原種とす、我國の名花にして觀賞用として珍重せられ、又、材木は版木其他彫刻等に供せらる。㊁紋所の名、櫻花を正面に觀たるさまを描(カ)きたるもの。

さくら-あめ[櫻雨](名) 櫻の咲く頃にふる雨。

さくら-いり[櫻煎](名) 一種の料理。蛸(タコ)を五分許に切り、たれみそにて煮たるもの。さくらに。

さくら-いろ[櫻色](名) ㊀櫻の花の如き色。うすくれなゐ。淡紅色。㊁++「さくらがさね」に同じ。

++さくら-がさね[櫻襲](名) かさねの色目、表は白にして、裏は濃き蘇芳(スハウ)色なるもの。

さくら-かのこ[櫻鹿子](名) 櫻色のしぼり、元祿頃流行せしもの。

さくら-がひ[櫻貝](名) 【動】辨鰓類中同柱類に屬する軟體動物、介殼は白色又は淡紅色にして美麗なり、造花等を製するに用ふ。

さくら-がゆ[櫻粥](名) 「あづきがゆ」の一名。

さくら-がり[櫻狩](名) 櫻花をたづね歩きて、遊び暮らすこと。「—雨は降り來ぬ」。

さくら-ぎ[櫻木](名) 【植】「さくら」(一)に同じ。「花は—人は武士」。

さくら-ぎん[櫻銀](名) 德川時代の銀貨の一、櫻の刻印を打ちたるもの。

(さく-らく[錯落](名) ㊀入りまじはること。㊁まばらに散らばること。㊂杯の一種。「金—」。

++さくら-ぐさ[櫻草](名) 【植】「さくらさう」に同じ。

さくら-さう[櫻草](名) 【植】櫻草科に屬する草、山野に生ず、葉は卵狀心形をなし、花莖は長くして頂端に繖狀の花序を生ず、花は紅紫色又は白色にして、其樣櫻花に似たるより此名あり、觀賞用として栽培せらる。(迎春花)。

さくら-ずみ[佐倉炭](名) 下總國佐倉地方より出だす炭、くぬぎを蒸燒にして製したるもの。いけだずみ。(櫟炭)。

さくら-だ[櫻田](名) 櫻の多く咲きたる所。

さくら-だひ[櫻鯛](名) ㊀櫻の花の咲く頃に捕ふる赤鯛。㊁安藝・周防の近海にて捕る鯛。

さくら-づき［櫻月］(名) 陰暦三月の異稱、櫻の花の咲く頃なる故に名づく。

さくら-どき［櫻時］(名) 櫻の花の咲く頃、春の最中。

さくら-に［櫻煮］(名) 「さくらいり」に同じ。

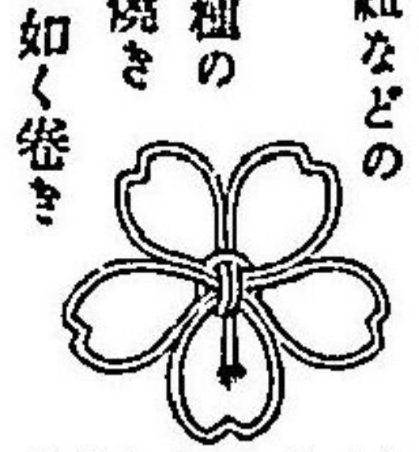
さくら-のり［櫻海苔］(名) 〔植〕淺草海苔と同種、壹岐國より出づ、其櫻色をなすより此名あり。

さくら-ばな［櫻花］(名) 開きたる櫻の花。

さくら-ばり［櫻張］(名) 煙管の張方の一種、京都より出すもの。

さくら-ミソ［櫻味噌］(名) 一種の味噌、牛蒡・生薑などを切り込みて混じたる味甘きもの。

さくら-むすび［櫻結］(名) 紐などの結方、櫻の花の形に結ぶもの。



［さくらむすび］

さくら-もち［櫻餅］(名) 一種の菓子、ねりたる饂飩粉を薄く燒きて餡を包み、櫻の葉にて柏餅の如く卷きて蒸したるもの。

さくら-ゆ［櫻湯］(名) 鹽漬にしたる櫻花を湯に立てたるもの。

さくら-らん［櫻蘭］(名) 〔植〕蘿藦科に屬する草、葉圓くして厚く、櫻の如き花を開く、香愛すべし、觀賞用として栽培せらる。

（**さく-らん**［錯亂］(名) 順序統一を失して混亂すること、いりみだるゝこと、たがひみだるゝこと、「精神—」。

〔**さくらん-ばう**(ボウ) (名) 一種櫻の果實、大さ三分許、熟すれば深紅色に變ず、鹽漬にして食ふ。

さくり［噦］(名) ❶呼吸器の筋肉攣(ヒ)きつりて、假に空氣を壓迫し、壓迫せられたる空氣の口をつきて出づるによりて聲を發すること。しやくり。しやっくり。(吃逆、噦)。❷泣くときに聲を引き入るゝさまなること。(歔欷)。

さくり［刳］(名) 掘ること。さくること。

〔**さく-り**(名、副) さくさく割るゝさまにいふ語。

さぐり［探］(名) ❶さぐること。さがすこと。❷ものび。たんてい。間諜。❸醫の用具、創(キズ)などの深淺を探(サグ)るために差し入るゝもの。

〔**ざくり**(名、副) たやすく切るゝさまにいふ語。

ざ-ぐり［坐繰］(名) ❶坐して絲をくり返(クワ)に卷きとる具。❷「ざぐりいと」の略言。——**いと**［坐繰絲］(名) 坐繰にかけてとりたる蠶絲。

さくり-あ-ぐ(げ、げ、ぐ、ぐる、ぐれ、げよ)［噦上］(自、か下二) 聲を引き入るゝさまにて泣く。すゝり泣す。

さぐり-あし［探足］(名) 足もて前方を探(サグ)りながら進むこと。

（**さく-りつ**［册立］(名) 天子が后・王などを封ずること。

さぐり-て［探手］(名) 物事をさぐりうかゞふ人。

さくり-なき［噦泣］(名) さくりあげて泣くこと、すゝりなき。

さくり-ばみ(名) ❶材を刳(サ)りて、其中に他の材を塡(ウ)むること。❷板をはぐときのあはせめ。

（**さく-りやく**［策略］(名) はかりごと。てだて。

さく-る(ら、り、る、る、れ、れ)［刳］(他、ら四) ❶掘り穿つ。ほる。うがつ。❷掘りて流通せしむ。とほす「水を—」。

さぐ-る(ら、り、る、る、れ、れ)［探］(他、ら四) ❶さがしたづぬ。もとむ。(搜)。❷手足の感覺によりて、物を尋ね又は試む。❸うかゞふ。❹推測す。はかる。

（**さく-れい**［作例］(名) 詩文などを作るてほん。

（**さく-れう**(リョウ)［作料］(名) てまだい。手間賃。

（**さく-れつ**［錯列］(名) ❶入りまじりてならぶこと、又、入れまぜてならばすること。❷【數】「くみあはせ」(組合)に同じ。

ざくろ［石榴］(名) 〔植〕安石榴科に屬する木、葉は平滑にして、長楕圓形若しくは倒卵形をなし對生若しくは簇生す、花は通常紅色を呈し、果實は大形にして中に數多の肉質の皮を具する種子を含む、觀賞用として栽培られ、又、種子の肉皮は食用に供せらる。じやくろ。せきりう。(若榴、丹若、安石榴)。——**いし**［石榴石］(名) 【鑛】石榴の核の如き狀をなす一種の石、色種々なれど通常濃綠色なり、其肉紅色にして美麗なるものは彫琢して裝飾用に供す。(石榴子)。——**ぐち**［石榴口］(名) ❶昔時、江戸にて錢湯の風呂の入口をいふ、たてあけの戸なく屈(カガ)みて入る構造のもの、石榴は鏡を磨く料なれば「かゞみいる」の掛詞なりといふ。❷はぜぐち。——**だま**［石榴彈］(名) 榴霰彈又は榴彈等の稱。——**ばな**［石榴鼻］(名) 赤くなりて石榴の種子の如きさまをなす鼻。

（**ざ-ぐわ**［坐臥］(名) すわることとふすこと、又、おきふし。

‡**さ-くわん**［主典］(名) 古昔の官制にて、第四等の官の稱、今の屬官に當る、官廳によりて字を異にし、太政官神祇官及司にては史、省にては錄、彈正臺にては疏、使にては主典、職及寮にては屬、近衞府にては將曹、兵衞府及衞門府にては志、太宰府にては典、鎭守府にては軍曹、國にては目と書くなど、其他尙ほ多し。

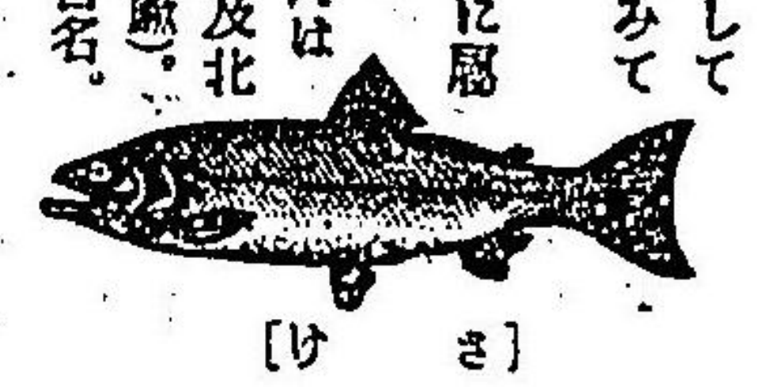
（**さ-くわん**［佐官］(名) 陸海軍の武官なる大佐・中佐・少佐の總稱。——**さうたう**(ソウトウ)［佐官相當］(名) 陸海軍にて、軍醫又は會計官などの位置の佐官と同等なること。

（**さ-くわん**［左官］(名) 壁を塗る職人、かべぬり。「泥工」。

（**さく-ゐ**［作爲］(名) ❶つくりなすこと、こしらふること、「—の方法」。❷或行爲をなすこと。

さけ［酒］(名) ❶米にて醸したる飲料、清酒・濁酒等の種類多し、濁酒は蒸したる白米に麴と水とを加へて酛(モト)を醸し、更に時を定めてこれに白米の蒸したるものと麴と水とを加ふること三度にして醸す。さゝ。き。❷酒精分を含み、飲みて醉ふべき飲料の總稱。

さけ［鮭］(名) 〔動〕硬鰭類中さけ科に屬する魚、河海の間に生ず、秋の頃、河に溯(サカノボ)りて子を生む、鱗細かく、肉は淡紅色にして脂多し、多く東北地方及北海道に產す。しやけ。あきあぢ。(鮭、鱖)。



［さ　け］

‡**さけ**［梟］(名) 〔動〕「ふくろふ」の古名。

‡**さけ**(名) 女の陰部。

さげ［下］(名) ❶さぐること。❷「くさずり」の一名。

‡**ざ-け**［邪氣］(名) ものゝけ。たゝり。

‡**さげ-おび**［下帶］(名) 古昔、四月朔日より九月八日まで婦女の禮服に用ひし帶、廣さ八歩ばかりなるを後(ウシロ)に結びて垂れしもの。

さけ-かす［酒糟］(名) 醪(モロミ)を搾(シボ)りて酒をとりたるあとのかす。さかかす。

さげ-がたな［提刀］(名) 刀を手に提(サ)ぐること。又、手に提げてゐる刀。

さげ-がみ［下紙］(名) 文書に貼(ハ)り下げて、意見又は理由などを示したゝめおく紙。つけがみ。(附箋)。

さげ-がみ［下髮］(名) ❶婦人の髻(モトドリ)を束ねて背後に垂れ下ぐる髮、すべらかし。(垂髮)。❷芝居の鬘(カツラ)の一、下髮の體に拵(コシラ)へたるもの。

さけ-くさ-し(く、し、き、けれ)［酒臭］(形、二) ❶酒のにほひあり。❷酒に醉ひて臭し。

さげ-ごし［下輿］(名) 手を腰の邊にさげてかきゆく輿(コシ)。

さげ-しまだ［下島田］(名) 婦人の髮のゆひ方、島田髷の根の下がりたるもの。なげしまだ。

さげしみ(名) さげしむこと、さげすみ、輕蔑。

さげし-む(ま、み、む、む、め、め)(他、ま四) 「さげすむ」に同じ。

さけ-ずき［酒好］(名) 酒を嗜(タシ)むこと。又、其人。

さげ-すみ(名) さげすむこと。けいべつ。あなどり。(蔑視、輕侮)。

さげ-ずみ［下墨］(名) ❶柱などのまがりを測るために、大工が墨繩(スミナハ)の一端を其上部にかけて垂直に下ぐること。❷指圖して計算すること。はからひ。

さげす-む(ま、み、む、む、め、め)(他、ま四) 輕蔑す。みくだす。みさぐ。あなどる。

さげ-ぢゆう［提重］(名) 提重箱の略言。——**ばこ**［提重箱］(名) 柄ありて、提げらるゝやうにつくりたる重箱。(提盒)。

さげ-づと［下髱］(名) 婦人の髮を結ぶに、髱を下ぐること、又、其ゆひ方の髮。

‡**さけ-の-かす**［酒糟］(名) 「さけかす」に同じ。

‡**さけ-の-つかさ**［酒司］(名) 「みきのつかさ」(造酒司)に同じ。

さけ-のみ［酒飲］(名) ❶さかもり。酒宴。❷酒を嗜好すること、酒を多量に飲むこと。又、其人。上戶。

さけ-ぶ(ば、び、ぶ、ぶ、べ、べ)［叫］(自、は四) ❶大聲立てゝなく。(號)。❷高く烈しく呼ぶ。よばふ。(嘷)。

（**さ-げふ**(ギョウ)［作業］(名) ❶わざをすること。しごとをなすこと。❷工作の事業。

さげ-ふだ［下札］(名) ❶さげがみ。つけがみ。(附箋)。❷下げたる札。

さげ-ふり［下振］(名) 絲などの端に錘(オモリ)を付け、これを垂下して、左右同距離に運動せしむるもの。振子。「時計の—」。

さけ-め［裂目］(名) さけたる所。われめ。(裂隙)。

さげ-もどし［下戾］(名) 民間より官に出したるものを、官より民間にもどし渡すこと。

さげ-もの［提物］(名) 腰に提(サ)ぐるもの、卽ち、巾着又は印籠の類。

〔**さける**［裂］(自) 「さく」の訛。

〔**さける**［避］(他) 「さく」の訛。

〔**さげる**［提］(他) 「さぐ」の訛。

〔**さげる**［下］(他) 「さぐ」の訛。

さげ-を［下緒］(名) 刀の鞘(サヤ)に結び付けて下ぐる緒。(刎條)。

（**さ-けん**［左券］(名) 約束の證據。

（**さ-けん**［查驗］(名) とりしらべ。あらため。

サゴ［沙穀＝Sago］(名) 東「インド」諸島に產する棕櫚科に屬する一種の喬木の髓より採りたる米粒狀の白き澱粉、病人の食用に供せられ、又、糊などにす。サゴべい。(西穀米、沙木麪、沙麪)。

ざこ［雜魚］(名) (雜喉の音なりといふ) ❶種々まじりたる小さき魚。❷小さき魚の稱にもいふ。

（**さ-こく**［鎖國］(名) 外國との通商交通を禁止すること。「—令」。

ざ-こく［雜穀］(名) 種々の穀物。ざっこく。

〔**ざ-こし**(名) 【動】小さき鰆(サハ)の稱。

‡**さご-じゆ**［珊瑚樹］(名) 「さんごじゆ」の略言。

（**さ-こつ**［鎖骨］(名) 【生】肩を構成するS狀の骨、前方は胸骨に接し後方は肩胛骨に接す。

（**ざ-こつ**［坐骨］(名) 骨盤を構成する左右一對の骨、尻の骨。

〔**ざこ-ね**［雜魚寢］(名) ざこの如くに、男女打雜(マ)ざりて寢(ネ)ること。ざやこね。(雜混寢)。

ざこ-ば［雜魚場］(名) さかないち。魚市場。

サゴ-べい［沙穀米］(名) 「サゴ」に同じ。

‡**さ-ごろも**［狹衣］(名) (「さ」は接頭語)「ころも」

に同じ。「—におりてもきせせん」。—の[狹衣]（枕）「袖」に冠らする詞。「—のをつくばねろの」。

さ-とん[左近]（名）「さこんゑ」の略言。—の-さくら[左近櫻]（名）古昔、紫宸殿の階下の左に植ゑてありし櫻。—ゑ[左近衞]（名）「このゑふ」（近衞府）の條を見よ。

ささ[笹]（名）（「さゝだけ」の略言）㊀小さき竹の總稱。㊁【植】竹の一種、丈低くゝして草の如く叢生するもの。（篠、小竹）。㊂（支那にて竹葉といふに出づ）酒の異稱。「—ごと」。

(さ-さ[瑣瑣]（名、副）こまかしきさまにいふ語。

さ-さ（名、副）水などの流れ注（ソ）ぐさまにいふ語。「—と流る」。

さ-さ（感）人を催（ウナ）したつるときにいふ語。いざ。「さあさあ。

ささ—[細]（接頭）或語に冠してわづか又はこまかの意を表はす語。「—栗」。「—波」。

(ざ-さ[坐作]（名）身體のこなし。擧動のさま。たちゐ。「—進退の法を教ふ」。

〔ざ-ざ（名、副）㊀水などの勢つよく流れ注（ソ）ぐさまにいふ語。㊁細長きものゝすれあふさまにいふ語。㊂さわぎ立つさまにいふ語。

ささ-あめ[笹飴]（名）越後國の名産、笹の葉に包みたる飴。

(さ-さい[些細]（名）わづか。さゝやか。いさゝか。「—ある事」（瑣末、瑣細）。

十ささい[障]（名）さはり。故障。「—なし」。

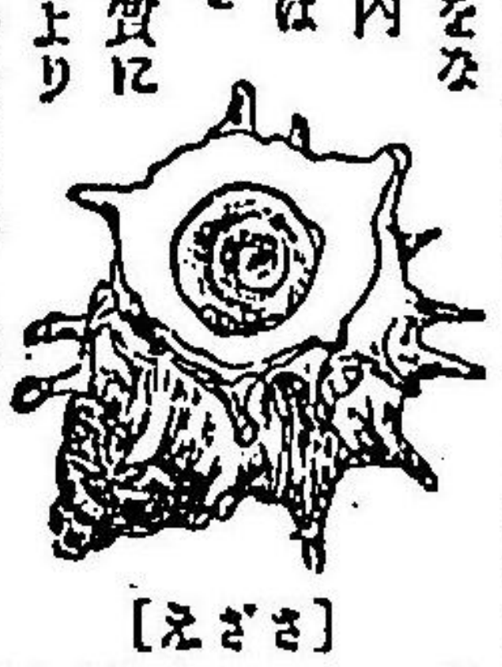
〔ささい[榮螺]（名）【動】「さざえ」の訛。

ささ-いろ[笹色]（名）笹の葉に似たる色、濃くして青びかりある紅色など。「紅を濃く、—なる程に」。

(ざ-ざう[坐像]（名）坐してゐる像。立像の對。

ささ-え[小筒]（名）酒などを入るゝ竹筒。

ささ-え[榮螺]（名）【動】（細（サ）柄り貝、殼の形狀をなすよりいふ）腹足類中前鰓類に屬する軟體動物、介殼は厚くして拳狀をなし、外面は暗褐色にして内面は眞珠色を呈す、殼孔は大いにして圓く螺旋狀をなし平滑なり、蓋は石灰質にして堅硬なり、我國東海より西南海にかけて多く產す、其肉は多く壺燒にして食ふ。（莿螺）。—の-しり[榮螺尻]（名）㊀心根のまがりたるにたとへいふ語。㊁世間に遠ざかりたる狹き社會にたとへいふ語。—の-つぼやき[榮螺壺燒]（名）一種の料理、榮螺の肉を采の目に切り醬油を加へて其介殼中に入れ、火にかけて煮ると。—わり[榮螺割]（名）【動】横口類中さめ科に屬する魚、頭は方形にして面猫に似たり、背部は淡茶色に微紅色を帶びて褐色の横線あり、腹部白色にして體側に紅色の斑點あり、體長三尺餘、東海より西海にかけて產す、齒強くして榮螺を嚙（カ）み割るといふより名づく。ねこざめ。


[さざえ]

〔ささがし（名）さゝがすと。又、其物。「—牛蒡」。

〔ささが-す（他、さ四）細かくけづる。はそくきざむ。「牛蒡を—」。

十ささ-がに[篠蟹]（名）【動】（「小さき蟹の義、其形の似たるよりいふ）蜘蛛の異稱。—の[篠蟹]（枕）「蜘蛛」に冠らする詞。—ひめ（名）織女の異稱。

ささぎ[鷦鷯]（名）【動】「みそさざい」に同じ。

〔ささ-きげん[酒機嫌]（名）さかきげん。

(ざ-さく[坐作]（名）囚人の坐して從事する作業。

ささ-ぐ[捧]（他、か下二）（「さしあぐ」の約）㊀兩手にて高く承（ウ）く。又、兩手にて高く上ぐ。「石を—」。㊁たてまつる。けんぢやうす。「いみじきおくりものどもをさゝげ奉る」。

ささ-ぐも[笹蜘蛛]（名）【動】（細（サ）蜘蛛の義）蜘蛛の一種、腹部長し、草木の枝葉又は芝の上などに平たき網を張り、片隅に穴をあけて、其中に隱れて蟲の來るを待つ。

ささ-ぐり[笹栗]（名）【植】「しばぐり」に同じ。

〔ささ-くれ（名）㊀さゝくれると。㊁指頭の爪際の皮のむくるゝと。さかむけ。

〔ささ-く-れる（自、ら下一）先端細かくさけわかる。

ささげ[大角豆]（名）㊀【植】荳科に屬する植物、纏繞莖にして、花冠は帶紫色又は白色にして花柱は絲狀をなす、莢（サヤ）は通常くびれを有す。㊁「いんげんまめ」の一名。（南部の方言）。

ささげ-もの[捧物]（名）獻上の品物。けんぢやうもの。

ささ-ごと[酒事]（名）さかごと。さかもり。

ささ-じん[糂粏]（名）ぢんだ。

ささ-たけ[笹茸]（名）【植】笹藪（ササヤブ）などに生ずる一種の茸。

〔ささっぱ[笹葉]（名）ささのは。

ささ-なみ[小波]（名）細かく立つ波文。さざれなみ。さゞらなみ。（漣漪、樂浪）。—の[細波]（枕）近江國の「志賀」「大津」に冠らする詞。

ささ-の-は[笹葉]（名）小竹の葉。—がれひ[笹葉鰈]（名）【動】「このはがれひ」に同じ。

ささ-の-み[笹實]（名）竹の果實。ぢねんこ。

ささ-は[笹葉]（名）さゝの葉。

ささ-はら[笹原]（名）笹の生（ハ）えたる地。

ささはり[障]（名）さしさはりになると。又、其物。さまたげ。ぢやま。こぢやう。（罣、障碍）。

ささ-はる[障]（自、ら四）㊀ぢやまとなる。さまたげとなる。さはる。さしあふ。㊁かゝりて通ぜず、つかへて動かず、塞がりて行はれず。

十ささ-ふ[篠生]（名）さゝはら。

ささ-ふ[支]（他、は下二）㊀持ち堪（タ）ふ。つっぱる。たもつ。㊁はゞむ。こばむ。㊂ふせぐ。とどむ。

ささ-ぶき[笹吹]（名）小粒の銅。

ささ-ぶき[笹葺]（名）笹の葉にて屋根などを葺（フ）くと。又、其ふきたる屋根。

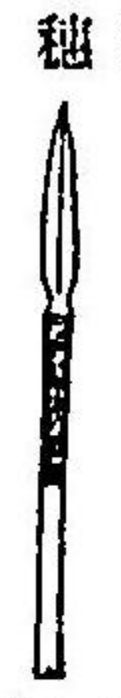
ささ-ぶね[笹船]（名）竹の葉にて造る船、子供が水に浮べて遊ぶもの。（竹葉船）。

ささへ[支]（名）さゝふると。さゝふるもの。つっぱり。ふせぎ。—ごと[支言]（名）さかしらごと。讒言。「梶原の—」。

ささ-べに[笹紅]（名）さゝ色のべに。

ささ-へり[笹緣]（名）衣服其他袋物の縫目などに、裏より伏せて縫ひくるめたる組紐。（邊綱、小緣）。

ささ-ほ[笹穗]（名）笹の葉の形したる鎗の穗先。


[ささほ]

ささ-みどり（名）竹の果實。ぢねんこ。

十ささ-むしろ[笹席]（名）笹の繁く生じて席をしきたる如きさまなると。

十ささ-め（名）（「ささなみ」の轉）浪の異稱。

十ささめ（名）【植】細小なる草、茅に似てしなやかなり、編みて簑又は席などゝす。

さざめ（名）【動】蜆（シジ）の一種、海中に產す、色白し。

ささ-め[私語]（名）「さゝめごと」の略言。「起きつ轉びつ—して」。

さざ-めか-す（他、さ四）さゞめかしむ。騷がしむ。

さざ-めき（名）さゞめくと。騷ぎたつと。

ささ-めき[私語]（名）聲をひそめて話すと。又、聲いと低くものいふと。—ごと[私語]（名）さゝめきのことば。

ささ-め-く[私語]（自、か四）聲をひそめて話す。又、聲いと低くものいふ。（密語、微語）。

ざざ-め-く（自、か四）㊀いひのゝしる。聲を立てゝ騷ぐ。「さゞめきあへり」。㊁ざゞと音ひゞく。

ささめ-ごと[私語]（名）さゝめきごと。

ささ-も[笹藻]（名）【植】流水の底に生ずる水草、葉細長くして對生す。

ささ-や[笹屋]（名）竹の葉もて葺きたる小屋。

ささ-やか[細]（名）小さきと。こまかきと。（瑣小）。

ささ-やき[私語]（名）「ささめき」に同じ。—ごと[私語]（名）「さゝめきごと」に同じ。

ささ-や-く[私語]（自、か四）「さゝめく」に同じ。

ささ-やぶ[笹藪]（名）小竹のやぶ。

ささ-ゆ[酒湯]（名）昔時、小兒の疱瘡癒（イ）えたる後、酒を混ぜてつかはせし湯。さかゆ。

ささ-ゆり[笹百合]（名）【植】「ゆり」の一名。

ささ-ら[簓]（名）（「さゝら〳〵」と音するより名とするものか）㊀竹のさきを割りたるもの、敔（ゴ）といふ樂器の背を摩擦して音を立つるに用ひ、又、田樂などに摺（ス）り合はせて調子を取るにも用ふ。（編竹）。㊁竹を細かく割りこれを束ねて、飯器などを洗（アラ）ふに用ふるもの。㊂すべて端末の細かに碎（クダ）け割れたるものゝ稱。—がひ[簓貝]（名）【動】「あまなぶね」の一名。

十ささら-え-をとこ[陰魄]（名）月の異稱。

十ささら-がは（名）さゝらぎ流るゝ小川。（溪川）。

十さざら-ぐ（自、か四）さら〳〵と音して水流る。（潺湲）。

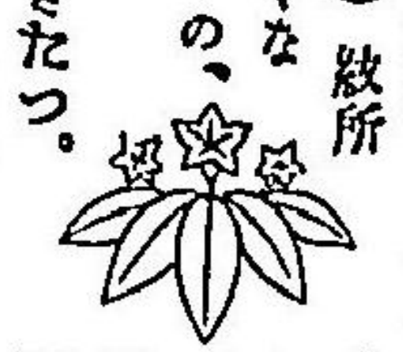
ササラ-サッポウ[覇王樹]（名）【植】「サボテン」の異稱。（仙人掌）。

十さざら-なみ[漣漪]（名）さゝなみ。

十ささり-ぐさ（名）【植】「あづき」の異稱。「秋ならば、風にや散らん、—」。

十ささり-を-どり[伯勞]（名）【動】「もず」の異稱。

ささ-リンダウ[笹龍膽]（名）紋所の名、龍膽（リンダウ）の葉を笹の葉の如くならべ、上に三つの花を添へかけるもの、源氏世々の紋所なり。


[ささりんだう]

ささ-る[刺]（自、ら四）つきたつ。

さざれ[小石]（名）「さざれいし」の略言。—いし[小石]（名）小さき石。こいし。（細石、礫）。「—のいはほとなりて苔のむすまで」。—がは[小石川]（名）小石の上を流るゝ小川。十—ぐさ[小石草]（名）【植】蓼の異稱。—みづ[小石水]（名）小石の上を流るゝ水。

さざれ-なみ[漣漪]（名）さゝなみ。さゞらなみ。

さ-ざん-くわ[山茶花]（名）【植】山茶科に屬する木、葉は小形にして厚く、花は丁子様にして果實は裂開し、花はつばきに似て通常大形なり、觀賞用として栽培し、又、種子より油を搾（シボ）る。（茶梅）。

〔ざ-ざん-ざ（名、副）ざんざめくさまにいふ語。

さし[刺]（名）竹筒のはしを斜にそぎたるもの、俵の中の米を驗するため、さし込みて中の穀を少しく取り出だすに用ふ。

さ-ゑ[蠛子]（名）【動】酒又は酢（ス）などの上に集まる小さき蟲。（醯雞）。

さし[緡]（名）藁を細く綯（ナ）ひて、錢の孔にさしとほして束ぬるもの。ぜにさし。（索子）。

さし[差]（名）㊀ものさし。「鯨—」。「曲—」。（尺）。㊁

〜さしあひ。さしつかへ。㊁「さしむかひ」又は「さしになひ」の略音。

⌒さ-し［砂嘴］（名）【地】砂洲が風又は潮流のために細長くのびたるもの。

さし—［差］（接頭）或動詞に冠して、其意を強むるに用ふる語。「—出す」。

—さし［差］（接尾）扇を差し數(カ)すより、亂舞の曲を數ふるにいふ語。「一—舞はん」。

サジ［匙］（名）（茶匙の唐音）流動體又は細末なるものを掬ひ取る具、皿の如き頭に柄あるもの。かひ。（匕）。〜—をなげる　醫師が其病氣の療治かひなしと診斷するにいふ。又、すべて其物事の救濟望みなしと斷念するにいふ。

⌒さ-じ［瑣事］（名）少しばかりのつまらぬこと。

⌒ざ-し［坐視］（名）視て居ながら其物事に關係せざること。

⌒ざ-じ［座次］（名）ざなみ。席順。

さし-あ・ぐ（げげぐぐるぐれげよ）［差上］（自、か下二）㊀上に出す。㊁たかくあぐ。さゝぐ。㊂獻上す。たてまつる。

さし-あげ［差上］（名）さしあぐること。

さし-あし［差足］（名）音のたゝぬやうに、足をつまだてゝ地を履(フ)むこと。「—も月に目あらば恥しや」。

さし-あたり［差當］（名、副）目前の場合。現前の事態。さしむき。まのあたり。さしづめ。（目今、現今）。

さし-あた・る（らりるるれれ）［差當］（自、ら四）其事にてあふ。其場に臨む。

さし-あ・つ（ててつつるつれてよ）［差當］（他、た下二）うちつけに事をなす。直接にあて行ふ。

さし-あひ（イーア）［差合］（名）㊀差し合ふこと。㊁さしつかへ。さゝはり。さはり。（障碍）。

さし-あ・ふ（ウーア）（はひふふへへ）［差合］（自、は四）㊀出あふ。あふ。でくはす。㊁雙方同時に到來して差支ふ。

さし-いだ・す（さしすすせせ）［差出］（他、さ四）㊀いだす、だす。㊁なげだす。㊂むくり出す。

さし-い・づ（ででづづるづれでよ）［差出］（自、た下二）㊀出づ。でる。㊁分を超(コ)えて進み出づ。てすぎる。

さし-いで［差出］（名）さしてがましきこと。てすぎ。

——ぐち［差出口］（名）さしいてゝいふ言。

さし-い・る（らりるるれれ）［差入］（自、ら四）中へはひる。

さし-い・る（れれるるるるれれよ）［差入］（他、ら下二）中へいれてやる。

さし-いれ［差入］（名）㊀さしいるゝこと。㊁「さしいれもの」の略言。——もの［差入物］（名）未決監に居る刑事被告人に、其親戚知己等より獄舍にて差入れやる物品。

⌒さし-う-ご［左支右梧］（名）あちこち齟齬すること。互に一致せざること。

さし-うつ-む・く（かきくくけけ）［差俯］（自、か四）うつむく。（歎俯）。

さし-うり［緡賈］（名）緡(サシ)を賣る賤しき人。

さし-おき［差置］（名）さしおくこと。

さし-お・く（かきくくけけ）［差置］（他、か四）㊀置く。㊁其儘にすておく。

さし-おくり［差送］（名）さしおくること。

さし-おく・る（らりるるれれ）［差送］（他、ら四）送りやる。

さし-おさ・ふ（ソーオ）（へへふふるふれへよ）［差押］（他、は下二）おさふ。とゞむ。抑制す。

さし-おさへ（サエーオ）［差押］（名）㊀さしおさふること。㊁【法】債權者が公力によりて、債務者の財産權の使用處分を禁止すること。又、國家が特定の人民の財産權の使用處分を禁止すること。——てうしよ（チョーウ）［差押調書］（名）【法】民事訴訟にありては執達吏、又、國税徴收にては收税吏などが、財産の差押をなしたるときに作る要式の文書。——めいれい［差押命令］（名）【法】債權及他の財産權に對して差押するために發する執行裁判所の命令。——もくろく［差押目錄］（名）【法】差押したる物件の目錄。

さし-おもだか［差澤瀉］（名）【植】澤瀉科に屬する草、水中に生ず、葉は楕圓形にして葉柄との分界明瞭なり、花は三瓣白色にして兩性なり、六個乃至九個の雄蕊を有し、花托は平坦にして、果實は瘦果なり。

さし-かかり［差掛］（名）さしあたり。さしむき。

さし-かか・る（らりるるれれ）［差掛］（自、ら四）㊀其場に臨む。其事に會す。㊁まぎはになる。まぎはに迫る。

さし-か・く（けけくくるくれけよ）［差掛］（他、か下二）上より翳(カザ)す。「傘を—」。㊁上方よりおほふ。

さし-かけ［差掛］（名）㊀差し掛くること。㊁母屋に續けて、庇(ヒサシ)の如く作りたる小さき家。

さじ-かげん［匙加減］（名）㊀（昔時、漢方醫は、多く藥を匙(サジ)にて盛りたるより出づ）藥劑調合の程度。㊁手段の工合。手加減。

さし-がさ［差傘］（名）雨又は日を蔽(オホ)ふために翳(カザ)す具、細き竹を骨として紙を貼(ハ)り、轆轤(ロクロ)を裝置して開閉に便にす、柄あり、手に持ちて翳(カザ)すもの。カラかさ。ひがさ。（傘）。

さし-かざ・す（さしすすせせ）［差翳］（他、さ四）手にもちて翳(カザ)す。又、かざす。

さし-がた［矩形］（名）【數】各角が皆な直角なる平行四邊形。くけい。

さし-かた・む（めめむむるむれめよ）［差固］（他、ま下二）とざしかたむ。

⌒さしかためる（他）「さしかたむ」の訛。

さし-がね［差金］（名）㊀まがりがね。（規、曲尺）。㊁芝居に用ふる具、見物人に見えぬやう、陰(カゲ)より蝶又は鼠などをあやつる針金。㊂指揮してなさしむること。いひふくめて言はすること。

さし-か・ふ（ウーカ）（へへふふるふれへよ）［差替］（他、は下二）㊀とりかふ。㊁取りかへて挿(サ)す。

さし-かへ（エーカ）［差替］（名）さしかふること。又、さしかふるもの。

さし-がみ［差紙］（名）官府より特定の人民を指して呼び出だす狀。めしじやう。よびだしじやう。（召狀、召喚狀）。

さし-き［刺木］（名）草木を分栽するために、地に刺し込む切枝。つぎきの對。（挿木）。

さ-じき［棧敷］（名）高く構へたる物見の床。

ざ-しき［坐敷］（名）㊀客を通す室。客に應對する間。（客間、客殿）。㊁居間。㊂來客などの談話又は酒宴の間。「—が長い」。㊃宴會の取持。「—がうまい」。——こじき［坐敷乞食］（名）俳諧師をあざけり呼ぶ語。——らう（ウーロ）［座敷牢］（名）座敷に設けて發狂人などを入れ置く所。（檻柵）。

さし-きん［差金］（名）㊀うちきん。（內金）。㊁不足のおぎなひに出す金。

さし-ぐし［指櫛］（名）頭髮の飾のみにさす櫛、玳瑁又は鼈甲などにて造る。（枷）。

さし-ぐすり［差藥］（名）目に注(ツ)ぐ藥品、又、皮下注射の藥品。（點藥）。

さし-くは・ふ（ワーク）（へへふふるふれへよ）［差加］（他、は下二）つけ加ふ。つけそふ。

さし-くはへ（エーク）［差加］（名）さしくはふること。

さし-ぐ・む（まみむむめめ）［差含］（自、ま四）なみだぐむ。

さし-くり［差繰］（名）さしくること。やりくり。

さし-く・る（らりるるれれ）［差繰］（他、ら四）くりあはす。やりくる。

さし-げ［差毛］（名）異なる毛の雜りたること。「—の馬」。（斑毛）。

さし-こ［刺子］（名）表裏より綿布を合はせて密に刺縫(ヌヒサシ)したるもの、消防夫の著るはっぴなどに用ふ。さしっこ。（刺著）。

十さし-こ［指子］（名）無文の指貫。（指袴）。

さし-こし［差越］（名）さしこすこと。——ねがひ［差越願］（名）一定の手續を履(フ)まずして、直訴すること。

さし-こ・す（さしすすせせ）［差越］（他、さ四）㊀さし出づ。㊁送り來る。「手紙を—」。㊂一定の順序又は手續を經由せずしてなす。

さし-こばた［指小旗］（名）鎧(ヨロヒ)の指物にする小さき旗。

さし-こみ［差込］（名）㊀さし入るゝこと。㊁さしこむ病。

さし-こ・む（まみむむめめ）［差込］（他、ま四）突き入る。さしいる。さしはさむ。（刺入）。

さし-こ・む（まみむむめめ）［差込］（自、ま四）癪(シャク)などの急に起りて、胸腹烈(ハゲ)しく痛(イタ)む。

さし-こ・む（めめむむるむれめよ）［鎖籠］（他、ま下二）とざし固(カタ)む。「馬道の戸をさしこめ」。

⌒さしこめる［鎖籠］（他）「さしこむ」の訛。

さし-こも・る（らりるるれれ）［鎖籠］（自、ら四）戸をとざして內に居る。

さし-こ・ゆ（ええゆゆるゆれえよ）［差越］（他、や下二）こゆ。

さし-ころ・す（さしすすせせ）［刺殺］（他、さ四）刀などをつき刺(サ)して殺す。

さし-さば［刺鯖］（名）せびらきにしたる鹽鯖、二尾を刺し連ねて一刺(ヒトサシ)といふより名づく。

さし-さはり（リーサ ワリ）［差障］（名）さしさはること。又、其物事。さはり。じやま。

さし-さは・る（ワーサ）（らりるるれれ）［差障］（自、ら四）さゝはりとなる。じやまとなる。

さし-しほ（オーシ）［差潮］（名）太陰太陽の引力によりて、海水の高まる現象。さし來る潮。あげしほ。（盈潮）。

十さし-すが・ふ（はひふふへへ）［差次］（自、は四）すがふ。

さし-すぎ［差過］（名）さしすぐること。さして。

さし-す・ぐ（ぎぎぐぐるぐれぎよ）［差過］（自、か上二）さしいづ。てすぎる。

さし-せま・る（らりるるれれ）［差迫］（自、ら四）時機切迫す。まぎはになる。せまる。

さし-ぞひ（イーソ）［差添］（名）補助のために附き添ふこと。又、其人。——にん［差添人］（名）さしぞひの人。

さし-ぞへ（エーソ）［差添］（名）㊀補助のために附けおくこと。又、其人。㊁刀に添へてさす短刀。（急拔、中刀）。——にん［差添人］（名）さしぞへの人。

さし-だし［差出］（名）さしだすこと。

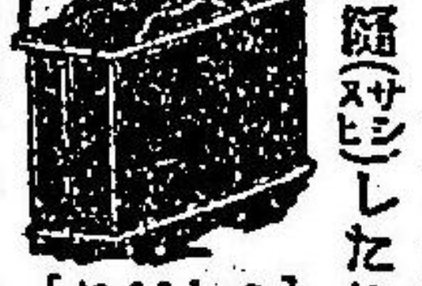
さし-だ・す（さしすすせせ）［差出］（他、さ四）さしいだす。

さし-た・つ（ててつつるつれてよ）［差立］（他、た下二）㊀立つ。「旗を—」。㊁目的地へ向けて送り出す。

さし-たて［差立］（名）送り出すこと。むくりだし。——いうびんきよく［差立郵便局］（名）郵便物を差立したる郵便局。——きよく［差立局］（名）前條に同じ。

さし-たび［刺足袋］（名）絲にて刺縫(ヌヒサシ)したる足袋。

さし-だる［指樽］（名）酒を入れ神に供へ又は人に送りなどする器、黑色に塗る。


［さしだる］

さし-ちが・ふ（ウーチ ガウ）（へへふふるふれへよ）［刺違］（自、は下二）兩人互に刀を身體に刺(サ)しあふ。

（交刃、相刺）。

さし-ちが・ふ（ゴウ―チ）〔へへふふるふれへよ〕［差違］（他、は下二）差し入るゝ方をあやまる。

さし-ちがへ（ガエ―チ）［差違］（名）さしちがふると。

さし-ぢゑ［差智慧］（名）いれぢゑ。（教智）。

さし-づ［指圖］（名）指し示してなさしむると。いひつけて行はすると、げぢ。まき。（指揮、命令）。㊁指定すると。名指すると。

さしつ-おさへ（エ―オサ）［差抑］（名、副）杯をさす、めつうけつして酒宴するさまにいふ語。

さし-つかは・す（ワス―ツカ）〔さしすすせせ〕［差遣］（他、さ四）つかはす。やる。

さし-つか・ふ（カウ―ツ）〔へへふふるふれへよ〕［差支］（自、は下二）さまたげとなる。おやマとなる。さゝはる。さしあふ。さしつどふ。

さし-つかへ（カエ―ツ）［差支］（名）さまたげ。さゝはり。おやマ。

さし-つぎ［差繼］（名）㊀次に續くと。㊁蒸引勘定。

さし-つ・く〔けけくくるくれけよ〕［差付］（他、か下二）㊀差し當て、若く。㊁直接に正面より突きあつ。㊂あてつく、あてこする。

さし-つ・ぐ〔がぎぐぐげげ〕［差繼］（自、か四）つゞく。つぐ。

さし-つけ［差付］（名）尺にて寸法を計ると。

〔**さし-っこ**〕［刺子］（名）「さしこ」の訛。

さしづ-さいけん［指圖債權］（名）【法】債務者が、債權者若しくは其指圖人に債務を辨濟すべき證書ある債權、約束手形・倉荷證書等による債權の類これなり。

さしづ-しき［指圖式］（名）【法】手形の書式、受取人を指定し且其指定したる者に若干の金員を支拂ふべき旨を記載すると。

さしづ-しようけん［指圖證券］（名）【法】受取人を指定したる證券。

さし-づと［差髱］（名）芝居の鬘（カツラ）の一。

さし-つどひ（ドイ―ツ）［差閊］（名）さしつどふと。

さし-つど・ふ（ドウ―ツ）〔はひふふへへ〕［差閊］（自、は四）㊀さしつかふ。㊁混雜す。ざったふす。

さし-づな［指綱］（名）馬を繋（ツナ）ぐ綱。さしなは。

さしづ-にん［指圖人］（名）㊀指揮をとる人。㊁名指したる人。――**ばらひ**（タイ―バ）［指圖人拂］（名）【法】債務者が債權者の指定したる人に、債務を辨濟すると。

さし-つま・る〔らりるるれれ〕［差詰］（自、ら四）㊀おし詰まる。つまる。せまる。（窮迫）。㊁其場に臨む。其時に到る。さしあたる。

さし-づめ［差詰］（名、副）さしあたり。さしむき。まのあたり。

さし-つらぬ・く〔かきくくけけ〕［刺貫］（他、か四）つきさしてつらぬく。さしとほす。（[illegible]）。

さし-て（副）㊀これぞと指してといふ程に。別段に。㊁さしあたりて。

さし-で［差出］（名）㊀さしいづると。㊁「さしでぐち」の略言。――**ぐち**［差出口］（名）分限を超（コ）えてくちだしすると。關係なきものが横合よりくちだしすると。（挿嘴）。――**もの**［差出者］（名）さしいでて、言ひ又は行ふもの。でずぎもの。――**る**［差出］（自）「さしいづ」の訛。

さし-とゞ・む〔めめむむるむれめよ〕［差止］（他、ま下二）さしとむ。

さし-とほ・す（オス―ト）〔さしすすせせ〕［刺徹］（他、さ四）つき刺（サ）しつらぬく。つきとほす。（刺透）。

さし-と・む〔めめむむるむれめよ〕［差止］（他、ま下二）抑（サ）へ止む。おしとゞむ。とゞむ。禁制す。

さし-とめ［差止］（名）さしとむると、はっと。禁制。

廿**さし-ながら**（副）「さながら」の訛。

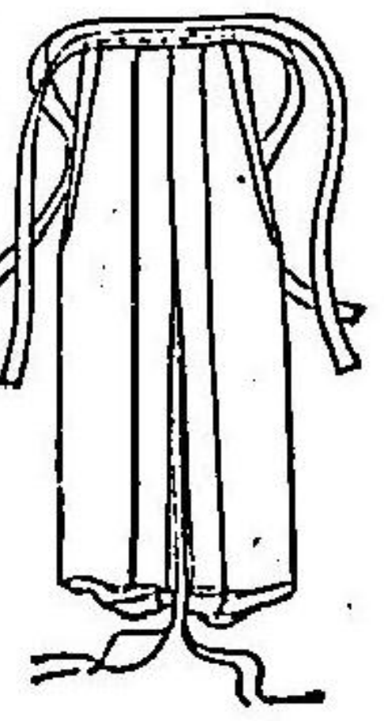
ざし-ながら［坐］（副）㊀すわりて居ながらに。㊁何事をも爲さずに。

さし-なは（ワナ）［指繩］（名）㊀さしづな。㊁とりなは。早繩。

廿**さし-なべ**（ワナ）［銚子］（名）注口（ツギグチ）ある鍋、上に鉉ありて、つるなべの狀をなす。さすなべ。（鍋銚）。

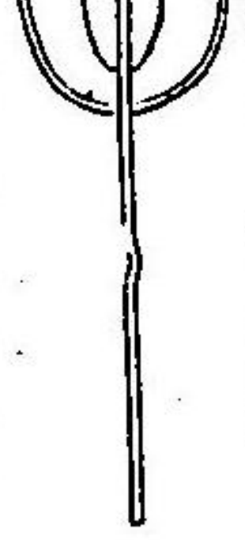
さし-に［差荷］（名）さしになひして行く荷物。

さし-になひ（ナイ―ニ）［差擔］（名）さき肩とあと肩と二人にて擔（カツ）ぎて行くと。



［さしぬき］

さし-ぬき［指貫］（名）古昔の袴の一、衣冠又は直衣（ナホシ）若しくは狩衣（カリギヌ）の時これを着用す、裾（スソ）を絲にて指し貫き膨（フク）らせて括（クク）るもの、平絹又は織物にて仕立て色は一定せず。さしぬきのはかま。ぬばかま。（奴袴、絹袴）。――**ごて**［指貫籠手］（名）鎖の籠手の一、手頸に括（クク）り付けて緊（シ）むるもの。――**のはかま**［指貫袴］（名）「さしぬき」に同じ。



［さしば（一）］

さし-ば［差羽］（名）㊀古昔、貴人などの後よりかざしたるもの、鳥の羽などにて大團扇の形に作り、長き柄をつく。えい。（翳）。㊁【動】たかの一種、形鶚（ハシタカ）に似て小さし。（稻鳩）。

さし-はさ・む〔まみむむめめ〕［挾］（他、ま四）㊀物の間に入る。はさみこむ。さしこむ。さす。（挿）。㊁含み持つ。いだく。をさむ。㊂たのみとす。たのむ。「貴戚を―」。㊃左右より扶く。たすく。

廿**さし-は・ふ**（ワイ―ハ）〔へへふふるふれへよ〕［差延］（自、は下二）㊀それと限りて目ざす。㊁わざ〳〵なす。

さし-ひか・ふ（カウ―ヒ）〔へへふふるふれへよ〕［差控］（自、は下二）さしひかへをなす。

さし-ひかへ（カエ―ヒ）［差控］（名）㊀進まずして待つと。退きて居ると。㊁うちばにすると。ほど〳〵にすると。㊂官職に過失を生じたるとき、暫時勤務を控（ヒカ）へてこもりゐると。（謹愼）。

さし-ひき［差引］（名）㊀引き去ると。減ずると。ひくと。㊁一方の殘餘にて他方の不足を償（ツグナ）ふと。㊂潮汐の進退。しほのあげさげ。㊃みはからひ。

さし-ひ・く〔かきくくけけ〕［差引］（他、か四）㊀引き去る。減ず。ひく。へらす。㊁一方の殘餘にて、他方の不足を償（ツグナ）ふ。

さし-ひびき［差響］（名）㊀響の他に及ぶと。㊁關係の他に及ぶと、變動の餘波の他に及ぶと、えいきやう。（影響）。

さし-ひび・く〔かきくくけけ〕［差響］（自、か四）さしひゞきを生ず。えいきやうす。

さし-ぶた［差蓋］（名）おとしぶた。

さし-まくら［差枕］（名）二つならべたる枕。又、同衾すると。「―二つなはして」。

さし-まね・く〔かきくくけけ〕［麾］（他、か四）㊀軍勢を引率して、其向ふ所を示す。㊁さしづをなす。げぢをなす。㊂まねく。よぶ。

さし-み［刺身］（名）一種の料理、魚肉を細く薄く切りて、醬油などをつけて食ふもの。つくりみ。（鱠）。――**ばうちやう**（ホウ―チヨウ）［刺身庖丁］（名）幅狹くして長き庖丁、刺身を造るに用ふるもの。（膾刀）。

さし-みづ［差水］（名）㊀井戸に他より水の入り來ると。又、其水。（客水）。㊁水をつぎこむと。又、其水。

さし-むかひ（カイ―ム）［差向］（名）相對してゐると、相向ひて居ると、かけむかひ。

さし-むか・ふ（カウ―ム）〔はひふふへへ〕［差向］（自、は四）㊀相對す。相向ふ。㊁たゞ二人向ひ合ふ。（對坐）。

さし-むき［差向］（名、副）さしあたり。さしづめ。

さし-む・く〔かきくくけけ〕［差向］（自、か四）其方へ向く。

さし-む・く〔けけくくるくれけよ〕［差向］（他、か下二）㊀其方へ向かす。㊁やる。つかはす。「打手を―」。

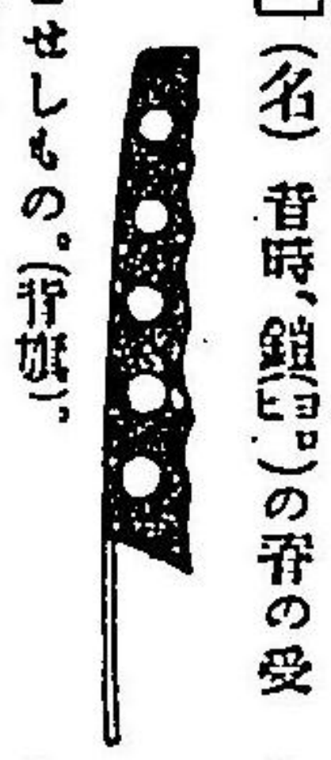
さし-むしろ［差莚］（名）絲にてさしたる莚。

さし-も（副）㊀これほどにも。さほどにも。㊁以前はさかありたるほどなるも。かねて聞えたるほどなるも。

廿**さし-もぐさ**［差艾］（名）【植】「よもぎ」の古名。

さし-もつ・る〔れれるるるれれよ〕［差縺］（自、ら下二）㊀いりみだる。いりくむ。もつる。㊁不和生ず。葛藤起る。あらそひとなる。

さし-もつれ［差縺］（名）さしもつるゝと。もつれ。



［さしもの］

さし-もの［指物］（名）昔時、鎧（ヨロヒ）の背の受筒（ウケヅツ）に差したる小旗の類、戰場にて目標（メジルシ）とせしもの。（背旗）。

さし-もの［指物］（名）さしあはせて組みたて造る器具、即ち、箱・椅子・机などの類。――**さいく**［指物細工］（名）指物を製作すると。又、其製作物。――**し**［指物師］（名）さしものを作る職人。――**や**［指物屋］（名）さしものを造り又は賣る人。又、其家。（小木匠）。

さし-や［指矢］（名）㊀矢の一種、炙篦（アブリノ）にして根の木なるもの、三十三間堂の通矢（トホシヤ）などに用ふ、㊁矢數を多くする矢。「或は遠矢に射、或は―に射」。

（**さ-しやう**）（ヨウ―レ）［嗟賞］（名）感心して褒むると。

（**さ-じやう**）（ヨウ―ジ）［鎖攘］（名）鎖國攘夷の略言。

（**ざ-しやう**）（ヨウ―シ）［挫傷］（名）くじけいたむと。

（**ざ-じやう**）（ヨウ―ジ）［座上］（名）座のうへ。席上。――**ろん**［座上論］（名）實地にあてはまらざる空論。やくにたゝぬ議論。

さし-や・る〔らりるるれれ〕［差遣］（他、ら四）おしやる。

（**さ-しゆ**）［叉手］（名）手をこまぬくと。兩腕を組みあはすると。

（**さ-じゆつ**）［詐術］（名）いつはりのてだて。あざむくかた。

（**さ-じゆつ**）［詐述］（名）事柄をいつはりのぶると。

さし-ゆる・す〔さしすすせせ〕［差許］（他、さ四）許可す。ゆるす。

（**さ-しよう**）［詐稱］（名）官位又は姓名などを詐りていふと。

（**さ-しよう**）［査證］（名）調査して證明を與ふると。

（**ざ-じよう**）［坐乘］（名）艦船に乘りて、其指揮をつかさどると。

（**ざ-しよく**）［坐職］（名）すわり居てする職業。

（**ざ-しよく**）［坐食］（名）あそびぐひ。ゐぐひ。

さし-よ・る〔らりるるれれ〕［差寄］（自、ら四）傍へ寄る。ちかよる。

さし-れう（ヨウ―リ）［差料］（名）自分に佩ぶる料の刀劍。

さし-わたし［差渡］（名）ちよくけい。わたり。（徑）。

さし-わた・る〔らりるるれれ〕［差渡］（自、ら四）舟に棹（サヲ）さして渡る。

さし-ゑ［差畫］（名）書物の中に差入るゝ繪畫、「雜誌の―」。（挿畫）。

（**さ-じん**）［左衽］（名）㊀右の衽（エリ）を左の衽の上に合はすると。ひだりまへ。㊁蠻夷（バンイ）の衣服の着方。轉じて、蠻夷の稱。

廿**さ-す**［杈首］（名）柱のさき叉（マタ）になりて、横木など架（カ）け得らるゝもの。

さ・す（さしすすせせ）［差］（他、さ四）㊀指にて其方を示す。「指—」。㊁それと定む。其ものと確(タシカ)めいふ。「名を—」。㊂かざす。さしかく。「傘を—」。(翳)。㊃さしにて、物の長さを測る。「鯨で—」。㊄こゝろざす。むかふ。「さして行く」。㊅そゝぐ。つぐ。「水を—」。(注)。㊆くはふ。まじふ。「紅を—」。㊇つかはす。やる。むくる。「わざと使さゝれたりけるを」。㊈高くさゝぐ。さしあぐ。㊉つっかふ。つっぱる。「舟を—」。(撐)。⑪かつぐ。かく。(舁)。⑫中にはさむ。さしはさむ。(挿)。⑬杯を獻ず。⑭火を點(トモ)す。ともす。⑮將棊の駒を行る。⑯帶の間にはさみて佩(オ)ぶ。「刀を—」。⑰指物を造る。⑱貫く。「緡て錢を—」。⑲とづ。とざす。⑳印を押す。㉑灸をすう。㉒矢を射る。

さ・す（さしすすせせ）［差］（自、さ四）㊀潮みつ。潮來る。「汐は—」。㊁生ず。あらはる。「赤みが—」。㊂光線うつり入る。「朝日—」。(映)。㊃沁み入る。(浸)。

さ・す（さしすすせせ）［刺］（他、さ四）㊀突き入る。つきこむ。「針を—」。㊁螫(ハリ)を入れて毒を送る。「蜂が人を—」。(螫)。㊂針を突き入れて縫ひつゞる。「足袋を—」。㊃刺木をする。「樹を—」。㊄鳥竿にて鳥を捕る。

さ・す（さしすすせせ）（他、さ四）半途にて止む。中途にてさしおく。仕殘す。「見—」。「聞—」。

さ・す（せさせすするすれせよ）［令］（助動）他をして或動作をなさしむる意の助動詞。しむ。「怒り—」。

ざ・す［座主］（名）比叡山延暦寺の貫主。「延暦寺—」。

ざ・す（せしすするすれせよ）［坐］（自、さ變）㊀すわる。ゐる。㊁かゝりあひとなる。まきぞへとなる。㊂關係す。

卄**さす-え**［捲］（名）（挿柄の義か）木を屈げて造りたるまげものにして、盃の類なりといふ。

さす-が［刺刀］（名）㊀小刀。㊁鎧のひぢよがね。

さすが-に［流石］（副）（「さかすがに」の約）㊀さうは思ふものゝ。さうてはあるものゝ。さはさりながら。「—耻ぢていはず」。(遉、有繫)。㊁すぐれたるもの程ありて。音に聞こえたる程ありて。本分を失はずして。いかにも。「—武士の妻」。

卄**さす-がね**［差金］（名）「かきがね」の古稱。

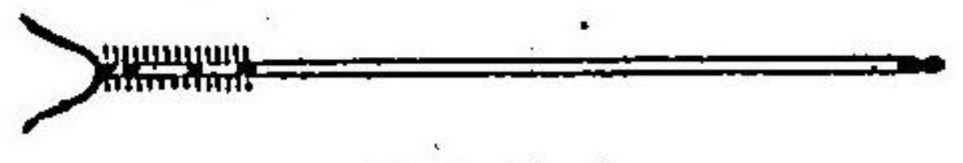
卄**さずき**［假床］（名）假に構(カマ)へたる床。轉じて、座敷。(閣)。

卄**さす-なべ**［銚子］（名）「さしなべ」に同じ。

さす-のみ［刺鑿］（名）鑿の一種、柄の長さ一尺許あるもの。つきのみ。

卄**さす-の-みこ**［指御子］（名）（天一神(サスガミ)より出でたる語か）未然を豫知する陰陽師などを指していふ稱。「吾人—と思へり」。

さす-また［刺股］（名）三道具の一、琴柱(コトヂ)を倒にしたる如き鐵製の頭に、木の柄の付きたるもの。ことぢぼう。(刺杈、長脚鐵)。


［さすまた］

卄**さすら-は・し**（しくしくしきしけれ）［流離］（形、二）さすらふべくあり。

卄**さすらひ**イーラ［流離］（名）さすらふと。流浪。

さすら・ふウーラ（はひふふへへ）［流離］（自、は四）身を寄する所なくして漂泊す。さまよひありく。さまよふ。「浮き世に—」。(流浪)。

さすら・ふ（へへふふるふれへよ）（自、は下二）前條に同じ。

さすら・ふ（はひふふへへ）［摩］（他、は四）「さする」の延音。

さす・る（らりるるれれ）［摩］（他、ら四）㊀輕く撫づ。なづ。㊁さかはぬやうに機嫌をとる。(撫、揣)。

卄**させ**（名）【動】蟋蟀の異稱。

（**さ-せう**ヨーシ）［些少］（名）いさゝか。わづか。(瑣少)。

（**ざ-せう**ヨーシ）［坐礁］（名）（船舶が暗礁などにのりあがると。）

卄**さ-せう-べん**ウーショ［左少辨］（名）古昔の官名。辨の條を見よ。

（**ざ-せき**）［座席］（名）すわる所。すわる所。

（**ざ-せつ**）［挫折］（名）挫(クジ)け折(ヲ)るゝと。

卄**させも**（名）【植】「さしもぐさ」の略言。

卄**させ-もぐさ**［指艾］（名）【植】「さしもぐさ」の轉。

（**さ-せん**）［左遷］（名）高き官職より卑(ヒク)き官職におとすと。

（**さ-ぜん**）［作善］（名）【佛】善根・功徳をつむと。よき行をなすと。

（**ざ-ぜん**）［座禪］（名）靜坐して、善惡を思はず是非に關せず有無に拘(カヽハ)らず、心を安樂自在の境に逍遙せしむると、もと禪家にてこれを行ふ、其法は坐して脊梁骨を起立し體軀を眞直にし、右手を左蹠の上に左手を右蹠の上に安置し、拇指と拇指とを相接せしめ、目を半眼に開きて行ふ。靜慮。「—をくむ」。(觀想)。——**まめ**［座禪豆］（名）黑大豆を甘く煮染めたるもの。

さぞ［嘸］（副）㊀其通りに。さやうに。㊁推量するに。さだめて。——**かし**（副）「さぞ」に同じ。「—愉快ならん」。

さ-そく［早速］（名）事に臨みて速かに處置すると。機に臨みて後(オク)れざると。「—の早技」。(卽坐、臨機)。

さそひイサツ［誘］（名）さそふと。又、さそふに用ふるもの。「—の手紙」。

さそ・ふウサツ（はひふふへへ）［誘］（他、は四）㊀勸(スヽ)めて行はす。すゝめ引く。いざなふ。(誘導)。㊁引きて我意に應ぜしむ。㊂よび出す。ひき出す。

さぞ-や［嘸］（副）（「さぞ」に感動辭「や」の加はりたる語）「さぞ」に同じ。——**さぞ**［嘸嘸］（副）前條に同じ。

サソラ［採蘇羅］（名）七種香の一。

卄**さそり**［[illegible]］（名）【動】「[illegible]」の古名。

さそり［蠍］（名）【動】蜘蛛類に屬する蟲、熱帶地方に産す、腹部長くして、體軀は許多の關節に分る、八足を有し尾端に劇毒の螯(ハリ)あり、口部の觸鬚は鋏(ハサミ)の如し、體長五六寸に達す。ぜんかつ。

（**さ-た**）［沙汰］（名）㊀朝廷の命令、又、官府の指令。「御—」。㊁たより。おとづれ。しらせ。(報道、通知)。㊂うはさ。ひやうばん。論議。

卄**さだ**［定］（名）（定むる義）㊀うはさ。おなさだめ。㊁男女の年頃。としごろ。壯齡。「—すぎふるくしき人」。

（**さ-だ**）［蹉跎］（名）㊀時機を失すると。㊁ころぶと。たふるゝと。

卄**さ-だいし**［左大史］（名）古昔の官名、太政官の主典の一にして、宮中一切の文書をつかさどり諸司諸國の庶務を記錄せしもの。

卄**さ-だいしやう**リーシヨウ［左大將］（名）左近衛府の長官。

さ-だいじん［左大臣］（名）太政官の長官、宮中一切のとを統ぶ。いちのかみ。

卄**さ-だい-べん**［左大辨］（名）古昔の官名。太政官の庶務を執りしもの。

（**さ-たう**トー）［砂糖］（名）甘味強く水に溶(ト)け易き結晶狀のもの、綿糖・氷糖・葡萄糖・果糖・乳糖・麥芽糖等の別あり、普通砂糖と稱するは、さたうきびの莖より取りたるもの卽ち蔗糖をいひ、食物に混じて味を付くるに用ふ、色により白砂糖・黑砂糖等の稱呼あり。(沙糖)。——**きび**［砂糖黍］（名）【植】禾本科に屬する草、大いなる線狀披針形の葉を有し、たうきびに似る、莖より砂糖を採る、製糖の原料中最も要用なる植物なり。さたうだけ。さたうのき。(甘蔗)。——**だけ**［砂糖竹］（名）【植】「さたうきび」の一名。——**づけ**［砂糖漬］（名）食品を砂糖に漬(ツ)くると、又、其漬けたる食品。——**のき**［砂糖木］（名）【植】「さたうきび」の一名。——**まめ**［砂糖豆］（名）炒(イ)りたる大豆に、砂糖をまぶしたるもの。(炒豉)。——**みつ**［砂糖蜜］（名）㊀砂糖より製造したる氷蜜。㊁黑砂糖を溶(ト)かしたるもの。——**みづ**［砂糖水］（名）水の中に砂糖をとかしたるもの。——**ゆ**［砂糖湯］（名）湯の中に砂糖をとかしたるもの。

（**さ-だう**ウード）［茶道］（名）㊀茶湯の技術。㊁昔時、武家などにて茶湯の事を掌りし役。ちやばうず。

（**さ-だう**ウード）［左道］（名）不正なる道。よこしまのみち。(邪道)。

さだ-か［定］（名）はっきりしてあると。たしかなると。(明確)。

卄**さだ-さだ-と**［定定］（副）最もたしかに。最も分明に。「—聞きなし賜ふ」。

卄**さだ-すぎ**［定過］（名）さだすぐると。さかりの年を過ぎたると。

卄**さだ-す・ぐ**（ぎぎぐぐるぐれぎよ）（自、か上二）さかりの年を過ぐ。稍や老ゆ。

（**さだ-てう**ヨーチ）［沙陀調］（名）十二律の一。

（**さた-な・し**）（くしきけれ）［沙汰無］（形、二）㊀官の指令なし。㊁音信なし。㊂うはさなし。

さた-の-かぎり［沙汰限］（名）㊀卄理非を沙汰すべき分限。㊁言語道斷。

さだまり［定］（名）㊀定まると。きまると。きまり。㊁しづまり。をさまり。おちつき。「—を付ける」。

さだま・る（らりるるれれ）［定］（自、ら四）㊀動かぬやうになる。變らぬやうになる。たしかになる。きまる。㊁おちつく。しづまる。㊂をさまる。鎭定す。「土匪—」。㊃散らぬやうになる。移らぬやうになる。とゞまる。

㊄判明す。はっきりす。㊅寢に就く。やすむ。「人さだまりて夜靜かなり」。

さだ・む（めめむむるむれめよ）［定］（他、ま下二）㊀動かぬやうにす。變はらぬやうにす。たしかにす。きむ。㊁しづまらす。おちつかす。㊂鎭定す。をさむ。㊃とゞまらす。㊄判明にす。はっきりせさす。㊅論ず。評す。「品を—」。

さだめ［定］（名）㊀定むると。㊁おきて。のり。法令。規則。㊂「さだめごと」に同じ。——**ごと**［定事］（名）運命。——**し**（副）「さだめて」に同じ。——**て**［定］（副）うたがひもなく。かならず。(必定)。——**なき-そら**［無定空］晴雨のさだかならざる天氣。——**なき-よ**［無定世］有爲轉變のはげしき此世。無常の此世。

（**さ-たん**）［左袒］（名）（漢の周勃が呂氏の亂を鎭定せんとせしとき、軍中に「爲呂氏者右袒、爲劉氏者左袒」と令したりしかば、全軍皆な左袒して劉氏の爲にせんとの意を表したりといふ故事に出づ）味方すると。加勢すると。

（**さ-たん**）［嗟嘆］（名）㊀なげくと。㊁感歎すると。

（**ざ-だん**）［座談］（名）㊀對座の談話。又、座上の談話。「—に長ず」。㊁其場限りの假の談。

卄**さち**［幸］（名）さいはひ。かうふく。——**はひ**イーハ［幸］（名）さちはふと。——**は・ふ**ウーハ（はひふふへへ）［幸］（自、は四）さきはふ。

（**さ-ちゆう**）［砂柱］（名）龍卷(タツマキ)が砂漠中に起るとき、砂の卷きあげらるゝさま。すなばしら。

（**ざ-ちゆう**）［座中］（名）㊀集會の座敷の中。㊁俳優其他演藝者の仲間。

卄**さ-ちゆうじやう**ロージヤウ［左中將］（名）左近衛府の中將。

卄**さ-ちゆう-べん**［左中辨］（名）古昔の官名、太政

官に屬し、宮中の庶務を掌りし職名。なかのむはともひ。

＋さち-ゆみ［幸弓］（名）狩獵に用ふる弓。さつゆみ。幸矢の對。

（さつ）［撮］（名）枡目の名、才の十分の一。

（さつ）［札］（名）㊀ふだ。㊁紙幣。

（—さつ）［札］（接尾）證券などを數ふる語。「仍而—如件」。

（—さつ）［冊］（接尾）書物などを數ふる語。「三—」。

（ざつ）［雜］（名）㊀純粹ならざること。又、精密ならざること。㊁こまごましきこと。又、くだくだしきこと。㊂種々の入りまじり。㊃分明に區別をつけ難き部分。㊄あらきこと。粗末。「—な品」。

（さつ-い）［殺意］（名）人を殺さんとする意思。

（さつ-えい）［撮影］（名）形像(カタチ)を寫眞にとること。又、其とりたる形像。

（ざつ-えい）［雜詠］（名）いろいろの事物を詠じたる詩歌。

（さっ-かう）［刷行］（名）印刷して發行すること。

（ざっ-かう）［雜考］（名）種々なる考案又は考證。

さづかり［授］（名）さづかること。賜はること。—もの［授物］（名）神佛などよりの賜はりもの。

サッカリン［Saccharine］（名）【化】白色半透明の結晶體、温水に溶け、砂糖より約三百倍の甘味を有す、無害なれども消化しがたし。

さづか・る［授］（自、ら四）さづけらる。たまはる。

さ-つき［五月］（名）㊀陰暦五月の稱。（早月、皐月）。㊁「さつきつゝじ」の略言。

（さっ-き）［殺氣］（名）殺伐の氣。あらあらしき氣。

ざ-つき［座附］（名）㊀藝妓などが宴席にて先づ奏する祝儀の一曲。㊁席の始まる前にいふ口上。㊂芝居にて、其座に附きゐること。—さくしや［座附作者］（名）芝居にて其座に附きゐて、其座の狂言をかく作者。

（ざっ-き）［雜器］（名）㊀種々雜多の器物。㊁神棚に供物を盛る木製の小盆及御酒德利の口などの稱。

（ざっ-き）［雜記］（名）種々の事を記すること。又、其もの。「貞丈—」「—帖」。—がう［雜記號］（名）音樂にて、樂曲の進行中、其或部分の聲音若しくは或一聲音に限り、種々の變化を要する場合に、これを表示するため、其最初若しくは其音符上に附記する記號。

さつき-つゝじ［五月躑躅］（名）【植】つゝじの一種、葉は深綠色、花は紅紫色若しくは白色にして、陰暦五月頃に開く、觀賞用として栽培せらる。（紅杜鵑）。

さつき-の-あめ［五月雨］（名）さみだれ。［詩］。

＋さつき-の-たま［五月玉］（名）「くすだま」の古稱。

さつき-ばな［五月花］（名）【植】「やまうつぎ」の一名。

さっ-きふ［早急］（名）極めて急なること。にはか。

さつき-やみ［五月闇］（名）五月雨(サミダレ)の降(フ)る頃の闇夜、空(ソラ)くもりがちにて、つねよりもくらし。（皐月闇）。

（ざっ-きよ）［雜居］（名）㊀種々の人の相雜(マジ)りて住居すること。㊁異人種又は內外國人の、相雜りて住居すること。「內地—」。—ち［雜居地］（名）內外國人の雜居を許されてある地。

（さっ-きん-ざい）［殺菌劑］（名）黴菌を殺すに用ふる藥劑。

サック［Sack］（名）（ふくろの義）器具などを入るゝ西洋風の袋物。

さづ・く［授］（他、か下二）㊀傳ふ。敎ふ。㊁交附す。わたす。㊂取らす。賜ふ。與ふ。

（さっ-くわ）［擦過］（名）かすること。—しやう［擦過傷］（名）かすりきず。

（ざっ-くわ）［雜貨］（名）㊀種々の貨物。いろいろの商品。㊁小間物。—しやう［雜貨商］（名）雜貨をあきなふ人。—てん［雜貨店］（名）雜貨をあきなふ店。小間物屋。（屋鋪）。

〔さづけ-もの［授物］（名）「さづかりもの」に同じ。

（ざっ-こく）［雜穀］（名）㊀種々の穀類。ざこく。㊁雜穀類の略言。—るい［雜穀類］（名）穀類中、荳菽・蕎麥(ソバ)及胡麻(ゴマ)等の特稱。

（ざつ-ごん）［雜言］（名）「ざつごんたい」の略言。—たい［雜言體］（名）漢詩にて、律又は絕句の如く終始五言若しくは七言たるべき定なき詩體、即ち三・五・七言又は一・三・五・七・九言等相雜(マ)じりて成りたる類のものをいふ。

（さっ-さう）［颯爽］（名）風姿(スガタ)の勇壯にして、氣味よきさまにいふ語。「英姿—」。

（ざっ-さう）［雜草］（名）㊀種々の草。㊁田畝に生ずる作物以外の草。

（さつ-さつ）［察察］（名、副）㊀いさぎよきさま又はあきらかなるさまにいふ語。㊁こまごましきさま又はわづらはしきさまにいふ語。

（さつ-さつ）［颯颯］（名、副）風の吹くさまにいふ語。

〔さっ-さ〕（副）㊀いそぎて。はやく。㊁とゞこほりなく。さしつかへずに。

（ざっ-さん）［雜纂］（名）いろいろの物事をあつめたる編纂物。

（さっ-し）［冊子］（名）とぢほん。書物。「風俗を害する—」。

（さっ-し）［刷紙］（名）印刷の紙。

（さっ-し）［殺死］（名）人を殺すこと。

（ざっ-し）［雜誌］（名）㊀種々の事を取り雜(マ)じへて書きたる書物。㊁期日を定め號を追ひて發行する冊子、論說其他の欄を設けて諸種の事を記載せるもの。—きしや［雜誌記者］（名）定期刊行の雜誌の記載又は編輯を擔當する記者。—や［雜

誌屋］（名）雜誌の取次又は販賣をなす書林。

（ざつ-じ）［雜事］（名）いろいろの細事。種々の俗事。

（ざっ-しうにふ）［雜收入］（名）雜多の收入。

（ざっ-しき）［雜色］（名）「ざふしき」に同じ。

（さっ-しけいば）［撒紙競馬］（名）一種の競馬、紙片を散布して幾條の道筋を示し、中に一條の幹線を設けて其終點を決勝點とす、騎手は其道筋をさがしたどりてなすもの。

（さっ-しやう）［殺傷］（名）人の生命を失はしめ又はその肉體に傷(キズ)つくること。

（ざっ-しやう）［雜掌］（名）㊀雜事を掌る宮中の官吏。㊁古昔、公卿家の家長。—にん［雜掌人］（名）雜掌の役にある人。

（ざっ-しゆ）［雜種］（名）㊀いろいろの種類。㊁種族の異なる男女又は雌雄・牝牡の間に生れたるもの。あひのこ。—ぜい［雜種稅］（名）【法】地方稅の一、商工業以外の營業に課する稅、即ち理髮人、劇場・舟・車・馬等に課するもの。—ち［雜種地］（名）田畝・宅地・山林・牧場・原野・鑛泉・池沼以外の有租地。

（ざっ-しよ）［雜書］（名）いろいろの書物。

（さっ-しん）［刷新］（名）弊害をのぞきて事態を新にすること。

（さつ-じん）［殺人］（名）故意を以て、不法に人を殺すこと。—はん［殺人犯］（名）【法】殺人の犯罪。

さっ・す［察］（他、さ變）㊀あきらかに分別す。つまびらかに了解す。あきらむ。しる。㊁くりかへして究めたゞす。くはしくとり調ぶ。かんがふ。みる。㊂推量す。おしはかる。㊃斟酌す。おもひやる。

（さっ-すゐ）［撒水］（名）水をまくこと。みづまき。

（ざつ-ぜい）［雜稅］（名）種々の稅。又、雜種稅。

（ざっ-せいくわ）［雜性花］（名）【植】雌雄兩つながら同一の株にある花。

（ざっ-せつ）［雜說］（名）さまざまの說。

（ざっ-せつ）［雜節］（名）暦にて、節分・八十八夜・入梅・半夏生・二百十日・土用・彼岸・社日等の總稱。

（さつ-ぜん）［颯然］（名、副）風の急に吹き起るさまにいふ語。一陣の風吹き至るさまにいふ語。

（ざつ-ぜん）［雜然］（名、副）いろいろ入りまじりたるさまにいふ語。

（さっ-そく）［早速］（名、副）すみやか。にはか。きふ。

（ざっ-そく）［雜則］（名）種々の細かき事柄の規則。

（ざっ-そつ）［雜卒］（名）㊀ざふひやう。はそつ。㊁陸軍にては憲兵・步兵・騎兵・砲兵・工兵・輜重兵等の稱にして、海軍にては水兵・火夫等の稱。

サッタ［薩埵］（名）【佛】（梵語 Bodhi-sattva の上略）（い）慈悲と智慧との所緣の境。（ろ）佛果を能求する人。勇猛精進なる人。

（ざっ-た）［雜多］（名）種々入り雜(マジ)りてあること。

（ざっ-たい）［雜體］（名）雜言體に同じ。

（ざつ-だい）［雜題］（名）㊀いろいろの仕方又は事柄のまじりたる問題。「四則—」。㊁分明に區別のつき難きものを入れまぜたるもの、題目。

（さっ-たう）［察當］（名）不法なりととがめを受くること。

（さっ-たう）［殺到］（名）勢こんでかけいたること。

（ざっ-たふ）［雜沓］（名）多數の人の入り込むこと。こみあひ。ひとごみ。（雜遝）。

（ざつ-だん）［雜談］（名）さまざまの談話。よもやまのはなし。

（ざつ-ぢう）［雜糅］（名）入りまじりて區別なきこと。

（さっちゆう-ざい）［殺蟲劑］（名）細蟲などころすに用ふる藥劑。

〔さって-も〕（接）「さても」の轉。

さっ-と［颯］（副）㊀俄(ニハ)かに吹く風聲などにいふ語。「—拂して」。㊁さっぱりと。

（さつ-ど）［撮土］（名）一つまみのつち。又、小量のつち。

〔ざっ-と〕（副）粗末に。粗漏に。あらく。「—見る」。

さっぱ（名）【動】「こはだ」の類、干物にして用ふ。

（ざっ-ぱう）［雜報］（名）種々の出來事の報告。

（ざっ-ぱく）［雜駁］（名）㊀入りまじりて統一なきこと。混合して純粹ならざること。㊁そまつなること。淺薄なること。

（さつ-ばつ）［殺伐］（名）㊀ころすこと。そこなふこと。㊁あらあらしきこと。極めてはげしきこと。

〔さっぱり〕（名）㊀さわやかなるさまにいふ語。㊁いやみなきさまにいふ語。

〔さっぱり〕（副）まるで。まったく。「—知らぬ」。

（さっ-ぱん）［刷版］（名）いんさつばん。

（ざっ-ぴ）［雜費］（名）いろいろのこまかき費用。

（さっ-ぴつ）［擦筆］（名）吸取紙又は鹿革(シカガハ)を卷きて筆の如くつくりたるもの、擦筆畫をゑがくに用ふ。—ぐわ［擦筆畫］（名）「コンテー」といふ墨の棒の粉を擦筆を以てこすりてゑがきたる畫、肖像畫などを寫眞の如く仕上ぐるもの。

＋さつ-ひと［獵人］（名）かりうど。さつを。

さつ-ま［薩摩］（名）「さつまがすり」又は「さつまじやうふ」若しくは「さつまやき」等の略言。—いも［薩摩薯］（名）【植】旋花科に屬する草、莖は心形の基脚を有し、花冠は紫色にして漏斗形をなす、多肉の塊根は廣く食用に供せらる、もと琉球より薩摩に渡り、それより漸次諸方に傳はりしより此名あり。（甘藷）。—いり［薩摩炒］（名）炒(イ)りたる米にさつまいもを刻み込み、醬油と砂糖とを加へていりつけたるもの。—がすり［薩摩絣］（名）紺地に白き絣(カスリ)を出だしたる

平織の木綿布、琉球より產出し薩摩國を經(へ)て各地へ賣り出すものもあれば、薩摩國より產出するものもあり。(薩摩絣)。——げた[薩摩下駄](名)豎の幅廣くしてこま下駄に似たる下駄。——とくぶ[薩摩國府](名)薩摩國國府より產出する烟草、極めて上品なり。——ぢやうふ[薩摩上布](名)薩摩を經(へ)て內地に賣ふる琉球產の上布。又、薩摩より產出する上布。——ぢる[薩摩汁](名)「かごしまぢる」に同じ。——すぎ[薩摩杉](名)【植】「やくすぎ」に同じ。——びは[薩摩琵琶](名)琵琶の一種、其音悲壯なるもの。——ぶし[薩摩節](名)薩摩より產出する鰹節。——ふぢ[薩摩藤](名)【植】瑞香科に屬する木、落葉す、早春四瓣紫色の花を開く、葉はいぼたに似て毛あり。ふぢもどき。——やき[薩摩燒](名)薩摩國苗代川地方にて多く製出する陶器、昔時島津家が朝鮮の俘虜をして燒かしめたるに始まるといふ、陶器中上流に位し粟田燒に似る。——らふそく[薩摩蠟燭](名)㊀鹿兒島產の蠟燭。㊁東京にて、魚油を以て造りたる下等の蠟燭。

(ざつ-む[雜務](名)いろいろの些細なる事務。かれこれとりまぜたる庶務。

ざつ-もの[雜物](名)㊀種類のいろいろいりまじりたる物。㊁粗末なるもの。

廿さつ-や[獵矢](名)狩獵に用ふる矢、即ちさちゆみに矧(は)ぐ矢。(幸矢、獵箭)。

廿さつ-ゆみ[獵弓](名)「さちゆみ」に同じ。

(さつ-りく[殺戮](名)てあらく殺すこと。

(さつ-りやく[殺掠](名)人を殺して財物を掠(かす)めとること。

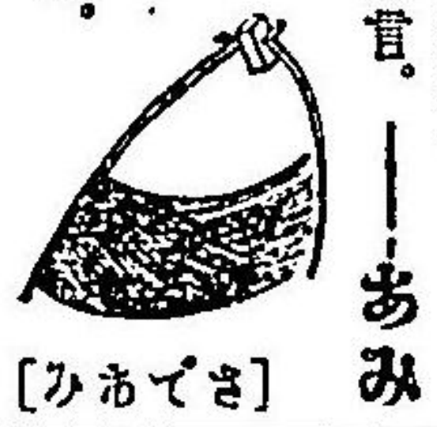
(ざつ-わ[雜話](名)さまざまの談話。よもやまのはなし。ざふだん。

廿さつ-を[獵男](名)さつびと、かりうど。

さて(副)(然而の義)それから。其通りて。そのまゝで。さうあって。去かして。「問はゞ問ひ、問はずは—もあるべきに」。

さて[扠、偖](接)上の語を受けて新に下に移るとき、又は更に局面をかへて說くときなどに用ふる語。「え會はで歸りけり、—諦めるる」(知說)。

さ-で[叉手](名)「さであみ」の略言。——あみ[叉手網](名)魚をすくひ捕る具、前方濶(ひろ)くして手許逼(せま)り、網を張りて柄をつけたるもの。すくひあみ、すくひだま。(小網、狹網)。


[さであみ]

(さ-てい[查定](名)或事項をよくとりしらべて決定すること。——あん[查定案](名)原案を查定して別案をつくり、これを討議に附したるもの。

(さてい-うけつ[左提右挈](名)㊀兩手に物をさげもつこと。㊁左右よりたすくること。又、互にたすけあふこと。

さて-お-く(かきくくけけ)[扠置](他、か四)其儘にさしおくこと。すておく。

さて-さて[扠扠](感)(「さて」を重ねたる語)深く感じたる時に發する語。「—をかしかりける女かな」。(呼嗟)。

(さ-てつ[蹉跌](名)㊀つまづき。㊁しくじり。

さて-は(ワー)[扠](接)もよび。そして。「山伏三人、—今一人」。

さて-は[扠](感)志からば、それならば。「—汝が讎よな」。

さて-も[扠](接)「さて」に同じ。「—二人の出立は」。

さて-も[扠](感)「さてさて」に同じ。「—美しき人かな」。

(さ-てん[茶店](名)ちやみせ。

(さ-てん[鎖店](名)みせをとづること。商賣をやむること。

さと[里](名)㊀人の住(す)む土地。㊁古昔、郡又は鄕の下に包括せられたる人家五十戶ある地の稱。㊂ゐなか。ざいまよ。「—人」。㊃妻又は養子の實家。㊄奉公人などの宿許。㊅扶持を出だして、子供を他家に預(あづ)けはぐゝまするこ と。㊆いろざと。遊里。

さ-と[颯](副)「さっと」に同じ。「—吹き來る」。

さと-いぬ[里犬](名)人里に棲(す)む普通の犬。山犬などの對。

さと-いも[里芋](名)【植】天南星科に屬する草、葉は大形にして長き葉柄を有し、肉穗花序は長き佛焰狀をなす、地下莖は塊狀をなし葉柄と共に食用に供せらる、變種多し。

(さ-とう[差等](名)志な。等差。「賞與—あり」。

(ざ-とう[座頭](名)㊀昔時、瞽者の官名、琵琶法師の首座たりしもの、稱。㊁轉じて、髮を剃(そ)りたる盲人にして、多くは琵琶・琴などを彈じ又は按摩・鍼治などを業とするもの。(瞽者)。——くぢら[座頭鯨](名)【動】くぢらの一種、體肥え、頭部は稍や扁平にして口端に至り漸く低く且つ細長となる、下脣は突出して脣を蔽ふ、髮は軟(やは)かにして薄し、體色黯黑にして體長三丈許に達す、我國にては紀伊・土佐・肥前等の沖に產す。

さと-かぐら[里神樂](名)里にて鎭守祭などに行ふ神樂。

さと-かた[里方](名)さとのやから。「—の諸親類」。

さと-がち[里勝](名)妻又は養子若しくは奉公人などの、よく里に行くこと。

さと-がへり(エリ/ガリ)[里歸](名)婦人の嫁して後、始めて父母の家に至る儀式、婚禮後三日目に行ふを例とす。さとびらき。(歸寧)。

さと-がらす[里鴉](名)人家近き所にゐる鴉、山鴉などの對。

さと-ご[里子](名)さとにやりたる子。又、さとに引きうけたる子。

さと-ごころ[里心](名)奉公人などの自己の里に歸りたくなる心。

さと-ことば[里言葉](名)㊀遊里にて、特別につかふ言葉。㊁ゐなかことば。くにことば。

さと-ざくら[里櫻](名)【植】櫻の一種、花は山櫻より大形にして、單瓣又は重瓣なり。

さと-し[諭](名)㊀さとすこと、說諭。㊁おつげ。神託(諺)。

さと-し(くしくしきけれ)[聰](形、一)㊀才智多し、怜悧なり。かしこし。さかし。㊁するどし、とし。

さと-す(さしすすせせ)[諭](他、さ四)㊀言ひ聞かせて會得せしむ。說ききかせてさとらしむ。㊁をしへみちびく。つげ志らす。(諭)。

廿さと-すがた[里姿](名)里にゐるときの身なり。

廿さと-だいり[里內裏](名)古昔、京都大內裏の他に、一時、主上の御住居ありし御所の稱。

さと-づき[里附](名)妻又は養子などに、さとよりつきそひ來りたる人。

(さとっ-こ[里子](名)「さとご」に同じ。

さと-どなり[里隣](名)となり。近所。

(さと-ながれ[里流](名)里に預けたる子供が、其まゝ其家の養子女になること。

さと-な-る(れれるるれれよ)[里馴](自、ら下二)里に馴(ナ)る。

さと-なれ[里馴](名)さとなるゝこと。——る[里馴](自)「さとなる」の訛。

さと-ぬし[里主](名)「さとの志」に同じ。

廿さと-の-かど[里門](名)古昔、さとの入り口にありし境界の木戶。(閭閻)。

さと-の-志[里之子](名)琉球王の近侍の小童の稱にして正從八品の官なり。「チクドン」の上にして親方の次に位せしもの。さとぬし。

さと-ばう(ウーボ)[里坊](名)人里に構(かま)ふる僧坊。

さと-ばなれ[里離](名)㊀人里を離れてあること。㊁己が里を離れ去ること。又、其所。

廿さとび-ことば[里言葉](名)㊀ゐなかことば。方言。㊁いやしきことば。俚語。

さと-びと[里人](名)㊀ゐなかもの。くにもの。㊁同鄕の人。

廿さと-ぶ(びびぶぶれびよ)[俚](自、は上二)ゐなかめく。ひなぶ。

さと-びらき[里開](名)さとがへり。(歸寧)。

さと-ぶち[里扶持](名)さとこの養育料。

さとり[悟、覺](名)㊀推量して知ること。察して感づくこと。かんがへつくこと。㊁迷妄解け去りて智惑啓發すること。まよひ去りて理に通ずること。「—を開く」。㊂かんがへを一定すること、かくごを決すること。——の-みち[悟道](名)【佛】迷妄を脫して眞如に入る道、即ち、佛敎の稱。——ゑ[悟繪](名)寓意のある繪。

さと-る(らりるるれれ)[悟、覺](自、ら四)㊀迷妄を排して智惑をひらく。まよひを去りて理に通ず。㊁かんがへを一定す。かくごをきむ。

さと-る(らりるるれれ)[悟、覺](他、ら四)推量して知る、察して感づく。かんがへつく。

廿さと-わ[里曲](名)里のある邊。

さと-わらは(ワラワ)[里童](名)里の童子。

さ-なか[最中](名)さいちゆう。もなか。

廿さな-かづら(名)【植】「さねかづら」の轉訛。

さながら[宛](副)㊀そのまゝ。「秋の夕露を—袖のものとなしつる」。㊁のこらず。すべて。「一年を—容になしはてゝ」。㊂ちやうど。あたかも。

廿さなぎ[鐸](名)鈴の類、ぬりて、ぬて。(鐃鐸)。

さなぎ[蛹](名)【動】昆蟲類の幼蟲が經過する一種の變態、全く食物を攝取せず、單に靜止するのみにて恰も俵の狀をなす、更に變態して成蟲となる。

さな-き-だに(副)志からずとも。さなくとも。

さ-なご[核子](名)㊀瓜のさね。㊁米の粉の滓。

さなだ[眞田](名)㊀さなだひもの如き樣に編みたるもの。「經木—」「麥藁—」。㊁「さなだひも」の略言。——おり[眞田織](名)綿絲又は麻絲にて眞田紐の如きさまに織りたる織物、多くは帶に用ふ。——ひも[眞田紐](名)扁(ヒラ)く組み又は織りたる木綿の紐、天正の比、眞田氏が刀の柄を卷きたるより此名ありといふ。——むし[眞田蟲](名)【動】扁蟲類に屬する蠕形動物、脊椎動物の腸內に寄生し、扁(ヒラ)くして細長く、許多の節に分かれ、其狀恰も眞田紐に似たるより名づく、其一節は一匹づゝの蟲に相當す。(絛蟲)。

さ-なへ(エナ)[早苗](名)苗代より田へ移し植うる頃の稻の苗。(秧)。——どり[早苗鳥](名)【動】「ほとゝぎす」の異稱。

廿さ-なみ[小波](名)「さざなみ」に同じ。「みくづせく、やなせの、—こほりゐて」。

ざ-なみ[座並](名)席順。座次。

ざ-なり[次座](名)㊀ざなみ。席順。㊁座のまゝ。席のさま。㊂まにあはせ。なほざり。「—の事をいふ」。

廿さ-に-づらふ(ロ-ツ/ロウ)(枕)「君」「妹」「少女」「紅葉」「紐」「色」などに冠らする詞。

廿**さ‐にぬり**［狹丹塗］(名) にぬり。

廿**さ‐には** ニハ［卜庭］(名) 卜(ウラナヒ)にて神おろしを行ふ場。

廿**さ‐ぬ**［ねねぬぬるるぬれねよ］［小寢］(自、な下二) いぬ。

さね［實、核］(名)「かく」(核)に同じ。㊁ ひなさき。

さね［札］(名) 鐵又は革などにて造り、多く集めて絲をもて鱗の如く縅(ヲド)して、鎧(ヨロヒ)を製するもの。こざね。(甲葉)。

廿**さ‐ね**［小寢］(名) いぬること。

廿**さね**［實］(副) 實に。まことに。「—あらじ」。

廿**—ざね**［實］［接尾］(まことのもの、義) 或語に添へて、其ものを主として貴む意を現はす語。「神—」、「使—」、「君—」。

さね‐かづら［實葛］(名)【植】木蘭科に屬する蔓草、葉質の蕊と小形淡黃色の花とを有し、果實は頭狀に排列せる肉質の子房より成る、粘液は製紙用又は髮附油用に供せらる、觀賞用としても栽培せらる。びなんかづら。(南五味子)。

さね‐ぶと［核太］(名) ㊀核の大きなること。㊁【植】「さねぶとなつめ」の略言。——**なつめ**［核太棗］(名)【植】棗の變種、葉は長卵形にして三大脈を有す、果實は核果にして圓く酸く熟せば食ふべし、其核は藥用とし、又、木材は種々の用に供せらる。(酸棗)。

廿**さ‐の‐かた**(名)【植】(い)藤の異稱。(ろ)萩の異稱。

廿**さ‐のぼ・る**［らりるるれれ］(自、ら四) 早苗を植ゑをはる。

さ‐のみ(副)(然耳の義) ㊀たゞ然りと。「—思ふも」。㊁それ程とも、さして。「—ほしからず」。

さは ワサ［澤］(名) ㊀低くして草など生え茂りたる濕地。水草相交はる地。㊁數多きこと。

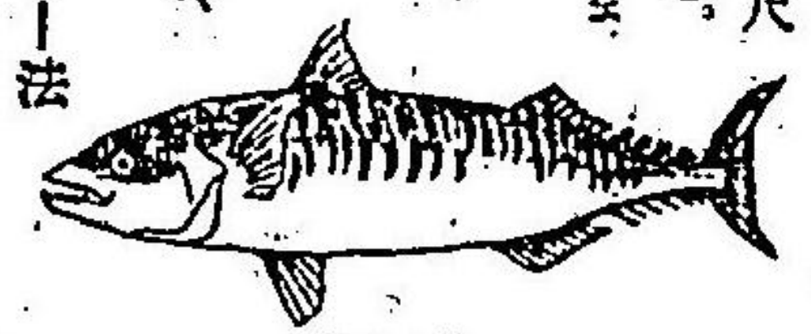
さば［鯖］(名)【動】硬鰭類中さば科に屬する魚、體は稍々紡錘形をなし、背部は青綠色の波紋あり、腹部は白色なり、體長一尺許、我國東海に多し。(青魚、靑花魚)。

〜**—を‐よむ** 物を數ふるに、ごまかして餘計にとる。

廿**サ‐バ**［娑婆］(名)「シヤバ」に同じ。

廿**さ‐ば**［散飯］(名) 日常の供膳の飯の上部をとりて傍におき、神佛又は祖先に供するもの。「—たぶやかにとりて佛前に備へし」。(生飯)。

廿**さ‐ば**(接)「さらば」の略言。「いざや—法にかへつる命と思はん」。


［さば］

さは‐あららぎ サワ—［澤蘭］(名)【植】蘭科に屬する草、澤などに生ず、高さ二三尺、秋の頃、薄荷に似たる淡紫色の花開く。あかまぐさ。(虎蘭)。

⌒**さ‐はい**［差配］(名) ㊀手分して、事務の取扱をなすこと。㊁所有主に代はりて、貸地又は貸家などの取締をなすこと。㊂「さはいにん」の略言。——**にん**［差配人］(名) 所有主に代はりて、貸地又は貸家などの取締をなす人。おほや。差配。

⌒**ざ‐はい**［坐拜］(名) 坐してする禮拜。

⌒**さ‐はう** ウ‐ホ［左方］(名) ㊀ひだりのかた。㊁雅樂にて、唐樂の稱。

⌒**ざ‐ばう** ウ‐ボ［坐忘］(名) 靜かに坐して心を思惟の境に遊ばせ、自家現前の世界を忘るゝこと。

さ‐ばかり［然許］(名) それほど。そのくらゐ。さほど。

さばかめ‐ぶし［鯖龜節］(名) 鯖を鰹節の如く製したるもの、豆南諸島の產物。

さばき［捌］(名) ㊀亂れたるを直すこと。㊁混じたるを解くこと。㊂理非の判斷。曲直の裁決。㊃商品のうりはらひ。㊄物事のこなし。——**がみ**［捌髮］(名) 解き散らしたる髮。「—の針卷まで」。

さは‐ぎきやう サワ‐キヤウ［澤桔梗］(名)【植】「なぎ」(水葱)に同じ。

⌒**さ‐ばく**［沙漠］(名)「アジア」「アフリカ」の內地にある沙のみにして水草なき原野。おほすなはら。

⌒**さ‐ばく**［佐幕］(名) 德川幕府の末年、勤王攘夷を唱(トナ)ふるものに對して、幕府の政策を是認しこれに味方せしものゝ稱。

さば・く［かきくくけけ］［捌］(他、か四) ㊀亂れたるを直す。㊁混じたるを解く。㊂理非を判斷す。曲直を裁決す。㊃商品をうりひさぐ。㊄自由にこなす。

さば・く［けけくくるくれけよ］［捌］(自、か下二) ㊀解け分かる。㊁費れて無くなる。㊂こなる。㊃打解く、頑固ならず。「さばけた人」。

さばく・る［らりるるれれ］［弄］(他、ら四) もてあそぶ。

さは‐ぐるみ サワ—［澤胡桃］(名)【植】胡桃(クルミ)の一種、雄花は長く雌花は小さく、花蕊は一子房より成りて群叢をなす。

さばけ［捌］(名) ㊀解け分かるゝこと。㊁品物の賣切となること。はけ。㊂しこなすこと。しこなし。

廿**さは‐さは** サワサワ(名、副) 心配又は障碍(サハリ)のとれて、心地よくなりたるさまにいふ語、「目も—と明けにけり」、「—と掃かせてぞありける」。

さはし サワシ(名) 漆を極めて淡くぬりたる烏帽子。

さはし‐がき サワシ‐ガキ［醂柹］(名) 醂(サハ)して澁を去りたる柹、多くは楮の葉に灰汁を混じ、これに柹を投じ置きて澁を去る。(淡柹)。

さ‐ばし・る［らりるるれれ］［狹走］(自、ら四) ㊀廿はしる。㊁板をもちて波のまにまに走る。(漁夫の語)。

さは‐しをん サワ—［澤紫苑］(名)【植】景天科に屬する草、水邊に生ず、葉は細長し、夏の頃、五瓣紫色の花開く。(札根菜)。

さは・す サワ［さしすせ］［淋］(他、さ四) ㊀澁柹の澁を去る。㊁水に浸(ヒタ)して晒(サラ)す。

さは‐だ サワ—［澤田］(名) 水の多き田。

さ‐ハチ［皿鉢］(名)「さらハチ」の略言。

廿**さはな‐さづき**［早花咲月］(名) 陰曆三月の異稱。

廿**さは‐に** サワ—［澤］(副) 多く。たくさんに。

廿**さは‐ひとめ** サワ—(名) 霜の異稱、「—むく山里の、ませの中の」。

⌒**さ‐はふ** ウ‐ホ［作法］(名) ㊀しかた。ふるまひ。たちゐ。㊁たちゐふるまひの法式。

廿**さ‐ばへ** エ‐バ［五月蠅］(名) ㊀五月頃の蠅。㊁さわぐこと。うるさきこと。——**なす**(枕) さばへの如くといふ意より、「さわぐ」又は「あらぶる」等に冠らする詞。「—あらぶる神」。

廿**さばめ・く**［かきくくけけ］(自、か四) さわぐ。

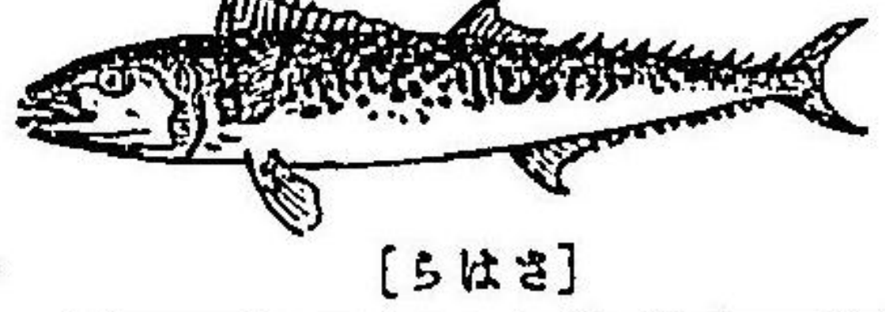
廿**さは‐やけ** サワ—［黃榮］(名) 大根のもやし。

〜**さば‐よみ**［鯖讀］(名) 數を詐(イツハ)りて、利益すること。

さはら サワラ［鰆］(名)【動】硬鰭類中さば科に屬する魚、體は細長く、細鱗を以て被(オホ)はる、頭部は光りて短く、背部は蒼青色にして蒼黑色の斑點散布し、腹部は蒼白色なり、體長大なるは三尺餘に達す、我國東海・西南海等に多し。(馬鮫魚)。

さはら サワラ［椹］(名)【植】松杉科に屬する木、葉は小形鱗片狀にして光り、下部は莖に密接して上部は開出し、腹面の葉は側部に白色の粉を有す、豌豆大の毬果を生ず、木材は種々の用に供せられ、又、觀賞用として栽培せらる。(花柏)。

廿**さ‐ばらか**(名) まばら。はらゝか。


［さはら］

サハリ［胡銅器］(名)(鈔羅(サフラ)の轉、或云新羅の古語沙羅より出づと、今日の朝鮮語にてこれをsabarといふ) 南蠻より渡出せしといふ一種の銅器。

サハリ［響銅］(名) 一種の合金、昔時は銅一斤に鉛五分の一と錫十分の一とを和したりしが、今時は銅十分に、鉛・錫各二分宛の割合に混ず。

さはり サワリ［障］(名) ㊀さしつかへ。さゝはり。㊁さまたげ。邪魔。㊂外氣に中(アタ)りて病氣を釀(カモ)すこと。「寒さの—」。(感冒)。㊃めぐり。つきやく。(月經)。

さはり サワリ［觸］(名) ㊀さはること。觸(フ)るゝこと。㊁觸るゝ感覺。又、觸るゝ狀態。「手—があらい」。㊂義太夫節にて、戲曲中述懷の場合などに於ける流麗なる文句の所。

さは・る サワル［らりるるれれ］［障］(自、ら四) ㊀さしつかふ。さゝはる。㊁さゝへとなる、邪魔となる。㊂外氣に感じて、病氣となる。「時候に—」。

さは・る サワル［らりるるれれ］［觸］(自、ら四) ㊀手にて觸る。(把)。㊁あたる。ふる。㊂宴席にて盃のとりやりす、「ちとさはり申さん」。

廿**さばれ**［遮莫］(副)「さもあらばあれ」の約言。

さは‐をぐるま サワ—［澤小車］(名)【植】菊科に屬する草、舌狀花冠は長楕圓形をなし、冠毛は帶白色なり、莖は數箇の頭狀花序を有し、總苞は裸狀なり、藥用に供せらる。(狗舌草)。

廿**さひ** イサ［鉏］(名) すき。さへ。

さび［銹、鏽］(名) ㊀金屬の面に生ずる酸化物、鐵には褐色を、銅には綠色を呈す。㊁土地に苔生じ又は器物に色澤生じて、其趣致又は價値のますこと。㊂生(ナマ)の狀態失せて老熟すること。㊃惡しき習慣。よからぬくせ。

さび［荒］(名) ㊀年を經(フ)ること。㊁さまのかはりゆくこと。——**あゆ**［荒鮎］(名) 鮎の秋に至りて老いたるもの。

さび‐いろ［錆色］(名) 鐵銹の如き褐色。(鏽色)。

さび‐かため‐ぬり［錆固塗］(名) 鎧(ヨロヒ)などを錆色に固(カタ)めて塗ること。又、其塗方の鎧。

廿**さび‐ごろも**［荒衣］(名) ふるきころも。

さび‐ごゑ［荒聲］(名) 謠ひ又は語する聲の、多年の慣行によりて、性來のとかはりたるもの、義太夫語などの聲につきていふ語。

さび・し［しくしきしけれ］［淋、寂］(形、二) ㊀徒然なり。つれづれなり。㊁にぎやかならず。陽氣ならず。㊂心細し。たのみすくなし。㊃悲しむべし。かなし。

さび‐つきげ［銹月毛］(名) 馬の毛色、赤をおびたる月毛。

廿**さひ‐づ・る** サイヅル［らりるるれれ］［囀］(自、ら四)「さへづる」に同じ。

廿**さひ‐づゑ** サイ—［鉏］(名) 鍬の類。(鍤)。

さび‐ぬり［錆塗］(名) 錆色の淡塗。

さ‐ひやうゑ —ヒヤウヱ［左兵衛］(名) 兵衛府の條を見よ。

廿**さ‐びらき**(名) 苗を植ゑ始むること。

さび・る［荒］(自、ら下二) すゐびす。おとろふ。すさぶ。「見世が—」。

〜**さびる**［錆］(自)「さぶ」の訛。(鏽)。

〜**さび・れる**［れれるるるれれよ］［淋］(自、ら下一) おとろふ。すゐびす。さびしくなる。

⌒**さ‐ふ**［左府］(名) 左大臣の異稱。

さ・ふ ウサ［へへふふるふれへよ］［障］(自、は下二) さゝはる。さはる。「物にさへて折れたる」。

さ・ふ ウサ［へへふふるふれへよ］［障］(他、は下二) ふせぐ。とゞむ。さゝふ。「日を—るならの下陰」。

さ・ぶ［びびぶぶるぶれびよ］［荒］(自、は上二) 移り進み行く。又、かはり行く。「宿さびて戸も人目はかれにけり」。

さ·ぶ［銹、鏽］（自、は上二）㊀金屬に銹生ず。㊁庭園又は器物などが、年を經（ヘ）て趣味又は價値生ず。㊂老熟す。「聲が—」。

††さ·ぶ［佗］（自、は上二）わぶ。かこつ。「朝夕にさびつゝをらん」。

（ざふ）［雜］（名）「ざつ」に同じ。

ざふ-き［雜木］（名）種々雜（マ）ざりたる粗末なる木、取り雜（マ）ぜて薪とするほどの木。——**やま**［雜木山］（名）雜木の生ひてある山。

（ざふ-ぎやう）［雜行］（名）【佛】彌陀の利益にのみ依賴せず、他にもいろ〳〵の神佛を祈ること。

（ざふ-きん）［雜巾］（名）板の間などを拭（フ）く布。（抹巾）。——**かけ**［雜巾掛］（名）㊀雜巾の拭き掃除。㊁雜巾をかけおくもの。——**をけ**［雜巾桶］（名）雜巾を洗ふ桶。

（ざふ-ぐ）［雜具］（名）種々の家具。

（ざふ-げん）［雜言］（名）次條に同じ。

（ざふ-ごん）［雜言］（名）種々の惡口。「—の人」。

（ざふ-ざふ）［雜雜］（名）いろ〳〵。さま〴〵。「—

（ざぶ-ざぶ）（名、副）水などを動かす音。（潑潑）。

††ざぶ·し（形、二）㊀さびし。㊁樂しからず。面白くなし。「無而不樂毛（サブシモ）」。㊂寒し。

（ざふ-じ）［雜仕］（名）雜務を勤（ツト）むるもの。

（ざふ-じ）［雜事］（名）種々些細の事柄。ざつじ。

††ざふ-しき［雜色］（名）㊀古昔、藏人所に屬して雜役に服せし者。㊁足輕又は中間の類。

（ざふ-しや）［雜舍］（名）母屋に附屬する雜多なる小屋。

（ざふ-しゆ）［雜修］（名）【佛】「ざふぎやう」（雜行）に同じ。

（ざふ-すゐ）［雜炊］（名）㊀野菜を刻み込みて炊きたる粥。㊁あづきがゆ。（但馬地方の方言）。

（ざふ-だい）［雜題］（名）「ざつだい」に同じ。

（ざふ-だん）［雜談］（名）「ざつだん」に同じ。

（ざふ-ぢ）［雜地］（名）一構の屋敷の附屬地。

（ざふ-ちや）［雜茶］（名）ばんちや。

ざ-ブトン［座蒲團］（名）敷（シ）きて坐（スワ）る布團。しとね。（座褥）。

ざふ-に［雜煮］（名）野菜又は肉類などと餅とを加へて煮たる汁、新年の祝賀などに食するもの。

（ざふ-にん）［雜人］（名）賤民の稱。

（ざふ-ひ）［雜肥］（名）中に種々の物を含みたる肥料、堆肥又は燒土などの類。

（ざふ-ひやう）［雜兵］（名）㊀卑（イヤ）しき步卒、ほそつ。そつ。㊁地位ひくき部下の稱。

（ざふ-ぼく）［雜木］（名）ざふき。

（ざふ-む）［雜務］（名）種々雜多の事務。ざつむ。

（ざふ-もつ）［雜物］（名）㊀種々の粗末なる物。いろ〳〵のつまらぬ物。㊁鳥の料理にて、皮又は胃などをいふ。

（ざふ-やく）［雜役］（名）㊀雜用の役。㊁種々の夫役。

（ざふ-よう）［雜用］（名）㊀種々入りまじりたる用事。いろ〳〵の些細なる用事。㊁種々の費用。いろ〳〵のつひえ。

サフラ［鈔羅］（名）（字の音の訛ともいひ、又胡語とも新羅語ともいふ）盆の如き一種の銅器。

††さぶらひ［侍］（名）「さむらひ」に同じ。——**わらは**［侍童］（名）貴人の側にはんべる小童。——**ゑぼし**［侍烏帽子］（名）「さむらひゑぼし」に同じ。

さふら·ふ［候］（自、は四）「さぶらふ」（三）に同じ、現時はおもに書翰文に用ふ、「一筆啓上仕—」。——**ぶん**［候文］（名）（候の字を用ふる文の義）てがみ。書翰文。

さぶら·ふ［候］（自、は四）㊀伺候す。まゐる。うかゞふ。㊁侍坐す。はんべり。はべり。㊂「有り」又は「居り」の敬語。

サフラン［泊夫藍＝Saffraan］（名）【植】鳶尾科に屬する草、花は五瓣紅色、もと外國より渡來したる藥用植物なり。

（ざぶ-り）（名、副）水などに落ち入る音。ざんぶり。ざんぶ。

さぶり-りう［佐分利流］（名）槍術の一派、佐分利重隆を祖とす。

ざ-ぶるまひ［座振舞］（名）其座席にての饗應。

††さへ［阹］（名）山などに構へて、禽獸を遮（サヘギ）るかこひ。

††さへ［鉏］（名）すき。さひ。

さへ（助）其上に加へ添ふる意を表はす語。あるうへにまた。

さへ-ぎ·る［遮］（他、ら四）（さゝへ切（キ）るの義）㊀さゝへとゞむ。へだてふさぐ。㊁しきる。おほふ。㊂まちぶせす。要擊す。

††さへ·ぐ（自、か四）言語さわがしくのみ聞こえて、意義通ぜず。「言—」。

（さ-べつ）［差別］（名）けぢめ。しな。わかち。しやべつ。——**かい**［差別界］（名）ものそれ〴〵に差別ある世界即ち現象界。平等界の對。

さへづり［囀］（名）㊀鳥のさへづること。㊁聲高けれど更に通ぜざるものいひ。㊂輕口によくいひたつること。

さへづ·る［囀］（他、ら四）㊀鳥聲を繁けて鳴く。（哢）。㊁節を付けて謠ふ。うたふ。㊂さへぐ。㊃よくしやべる。

さへ-の-かみ［道祖神］（名）伊弉諾尊の投（ナ）

げたまひし杖より成れる神、路に邪魅を遮（サヘギ）りて行人を守るといふ。みちのかみ。くなどのかみ。たむけのかみ。

ざ-ぼし［座星］（名）兜（カブト）の鉢などに打ちたる鋲の星。

††さほ·す（他、さ四）風にさらす。

サボテン［覇王樹］（名）【植】仙人掌科に屬する植物、普通のものは、幹扁平にして綠色を呈し、花は夏時に開き、瓣多くして紅黃色なり、原產地は「メキシコ」國なり、觀賞用として栽培せらる。「シャボテン」、「サンボテ」。（仙人掌）。

（さ-ほど）［左程］（名、副）それほど。さばかり。「—なさめ來る」。

††さほ-ひめ［佐保姬］（名）春の神の稱、佐保は大和國の地名にして、奈良の都より東に當たれるよりいふ。

（さ-ほふ）［作法］（名）「さはふ」に同じ。「例の—に」

サボン［石鹼］（名）「シャボン」に同じ。

ザボン［朱欒］（名）（「ポルトガル」語、Zamboa）【植】蜜柑の一種、果實は大形にしてくわりんに似る、普通は極めて酸味を帶ぶれど、四國又は九州に生ずるものは、圓くして扁（ヒラ）く、黃色にして香氣多く甚だ美味なり。（香欒、朱欒）。

さま［方］（名）其むき。かた。「橫—」。「上—」。

さま［樣］（名）ありさま。ていさい。かたち。

—さま［樣］（接尾）人の名の下に添へて敬意を表する語。「公方—」。「關東—」。「おまへ—」。「太郎—」。

さ-ま［狹間］（名）㊀すきま。ひま。㊁城の櫓（ヤグラ）などにある窓。「矢—」。（隙眼）。

ざま［樣］（名）㊀「さま」に同じ。「京—に登る」。「御書き—」。㊁のゝしる辭に用ふる語。「其罰で今この—」。「—を見ろ」。

さま-かたち［樣形］（名）やうす。すがた。かたち。

さま-がはり［樣變］（名）樣子のかはりたること。

さま-ざま［樣樣］（名、副）いろ〳〵。くさ〴〵。しゆ〴〵。かず〳〵。（種種）。

さまし-ぐひ［冷食］（名）冷（サ）まして食ふこと。

さま·す［冷］（他、さ四）㊀冷（サ）むるやうにす。「湯を—」。㊁衰へしむ。けす。「興を—」。

さま·す［覺、醒］（他、さ四）㊀眠の覺（サ）むるやうにす。夢より現（ウツ）にかへす。㊁まよひを解（ト）く、過をさとらしむ。㊂醉氣を解く。

さまた·ぐ［妨］（他、か下二）さゝはりをなす。邪魔をなす。妨害す。

さまたげ［妨］（名）さゝはり。さはり。じやま。ばうがい。障碍。

（さ-まつ）［瑣末］（名）さゝいなること。わづかなること。

さ-まつ［早松］（名）「さまつだけ」の略言。——**だけ**［早松茸］（名）五月頃に出づる松茸。

さま-づけ［樣付］（名）樣といふ敬語を添へて、人を呼ぶこと。

さ-まで［然迄］（名、副）それほど迄。かほどまで。

††さま-の-かみ［左馬頭］（名）古昔、左馬寮の長官。右馬頭の對。

サマヤ-ぎやう［三摩耶形］（名）（梵語、Samaya 時と譯す）【佛】佛の器杖、又は印、即ち平等・本誓・除障・驚覺の四意義を表示したる形相。

††さまよ·ふ［吟］（自、は四）なげき呼ぶ。うめき呼ぶ。「吟ひさまよひ」。

さまよ·ふ［彷徨］（自、は四）㊀處を定めずありく。行きまよふ。㊁さすらふ。流浪す。㊂思案定まらず。判斷に迷ふ。

††さまらばれ［遮莫］（副）「さもあらばあれ」の約言。

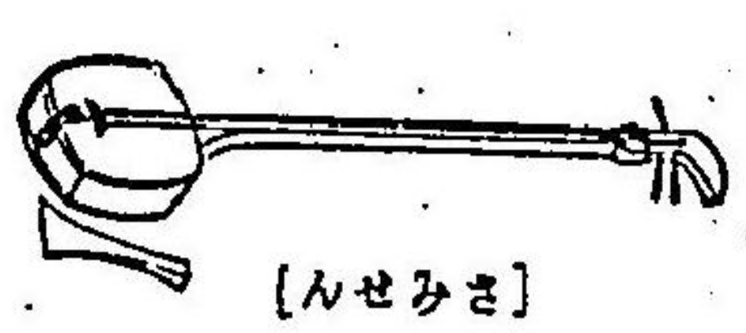
††さま-れう［左馬寮］（名）古昔、右馬寮と共に、馬に關する一切の事務を掌りし所。

（さ-み）［三味］（名）「さみせん」の略言。

さみ·し［淋、寂］（形、二）「さびし」に同じ。

さみ·す［貶］（他、さ變）いやしむ。あなどる。「總領を—」。

さみ-せん［三味線］（名）俗曲の樂器、胴は方形にして多くはくわりんの材にて造り、兩面に猫の皮を張る、これに棹（サヲ）をつけ、棹のさきに轉手（テンジユ）を設く、棹に一（最も太くして調子最も低し）、二（一と三との中間）、三（最も細くして調子最も高し）の三條の絃（イト）を張り、これにこまを挿み、撥（バチ）をもて彈（ヒ）く、もと琉球の蛇皮線より轉じたるものといふ。しやみ。三絃。（三綫）。——**いと**［三味線絃］（名）三味線に張る絃（イト）、生絲を縒（ヨ）りあつめて、黃色に染めたるもの。——**ぐさ**［三味線草］（名）【植】「ぺんぺんぐさ」の一名。——**こま**［三味線駒］（名）三味線の絃（イト）のつけ根近き所に挿（ハサ）みて、絃をさゝふるもの。——**し**［三味線師］（名）三味線をつくり又は直すことを業とするもの。——**どう**［三味線胴］（名）三味線の胴。又これにかたどりてつくりたるもの。——**ひき**［三味線彈］（名）三味線をひくことを業とする人。



［さみせん］

††さみだ·る（他、ら下二）さみだれ降（フ）る。

さみだれ［五月雨］（名）陰曆五月頃即ち陽曆六月頃降（フ）り續くながあめ。つゆ。梅雨。（麥雨、黴雨）。

††さ-みだれ-がみ［亂髮］（名）（「さ」は接頭語）みだれがみ。

††さみどり-づき［早綠月］（名）陰曆正月の異稱。

（さ-む「瑣務」（名）些細なるつとめ。

さ・む（めめむむるれよ）「覺、醒」（自、ま下二）㊀夢よりうつゝにかへる。ねむり止む。めさむ。㊁醉氣散ず。㊂まよひ解く。智見生ず。

さ・む（めめむむるれよ）「冷」（自、ま下二）㊀熱氣減じて冷ゆ。ひやゝかになる。㊁色褪くなり變はる。あす。㊂うすらぐ。おとろふ。「興―」。

さむ-が・る（らりるるれれ）「寒」（自、ら四）さむしと感ず。

さむ-け「寒氣」（名）身に寒さを感じて、心持惡しきと。をかん。

さむ-げ・し（くくしきけれ）「寒」（形、二）寒くあり。

さむ-け-だ・つ（たちつつてて）「寒氣立」（自、た四）さむけを感ず。

さむ-さ「寒」（名）さむき度合。「あつ・さ―も彼岸まで」。

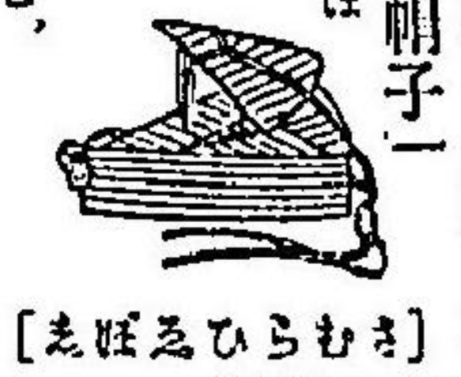
さむ・し（くくしきけれ）「寒」（形、二）㊀溫度低くしてひやゝかなり。㊁ぞっとす。をのゝく。「肝膽―」。㊂懷うすし。勢すくなし。㊃いやし。まづし。

〔さむ・し（しくしきしけれ）「淋、寂」（形、二）「さびし」に同じ。

さ-むしろ「狹筵」（名）せまきむしろ。又、單に、むしろ。（小筵、狹席）。

さむ-ぞら「寒空」（名）冬の寒き氣色の空。寒天。

さむらひ（サムライ）「侍」（名）㊀古昔、貴人の傍にはんべり事へしものゝ稱。おそば。㊁古昔、公家又は武家などに仕へて祿を受け、常に帶刀するとを許されて、軍事に與かりし人の總稱。ものゝふ。武士。㊂古昔、おそば又は武士の詰所。――だいしやう（ーシヨウ）「侍大將」（名）さむらひの頭。又、軍隊の長。――どころ「侍所」（名）㊀明白家にて、侍の伺候する所。㊁鎌倉時代に、平時には守護・地頭等を支配し、戰時には出兵・夫役等をつかさどりし所、其長官を別當といふ、當時職務なき武士は此所に伺候したり。㊂足利時代には其長官を所司といひ、山名・赤松・一色・京極の四氏交々これに補す、刑罰の事をも掌れり。――ゑぼし「侍烏帽子」（名）頂にて三角に折りたるゑぼし、古昔、平人の用ひしもの。


［さむらひゑぼし］

さむら・ふ（はひふふへへ）（サムラウ）「候」（自、は四）「さぶらふ」に同じ。

さ-め「白眼」（名）馬の兩眼の白きと、又、其馬。――うま「白眼馬」（名）兩眼白き馬。

さめ「鮫、鯊」（名）【動】板鰓類に屬する魚、體は圓錐形をなし尾部に至りて尖る、尾鰭は刃の如し、皮膚は棘鱗にして、鰓孔は體側にあり、溫帶及熱帶の海に產し、往々巨大なるものあり、性質強暴にして貪食し、運動迅速なり、鰭及肉は食用に供せられ、皮膚は乾かして物を磨るに用ふ、種類多し。――がひ（ーガイ）「鮫貝」（名）【動】一種の貝、細長にして左右に鮫の鱗の如き突出あり。――ざや「鮫鞘」（名）鮫の皮を卷きたる刀の鞘。――すが「鮫氷」（名）一種の食品、鮫の軟骨を薄くけづりて乾かしたるもの、大いさ美濃紙に近し、岩手地方の名產。――はだ「鮫肌」（名）鮫の皮膚の如くざら〳〵する人の肌。

さめ-ざめ「潸潸」（名、副）涙をこぼして泣くさまにいふ語。（潸然）。

〔さめる（自）「さむ」の訛。

さ-も（副）㊀其とほりに。其やうに。其ごとく。㊁實に。げに。「―惡しさう」。――にたり 實によく似てあり。（彷彿）。

さも-あらば-あれ「遮莫」（副）（然も有らば有れの義）せんかたなければ、よしや此上はどうでもあらうとまゝよ。「―家鄕遠征こ」。（任他）。

さも・し（しくしきしけれ）（形、二）㊀いやし。㊁あさまし。

さ-もじ「左文字」（名）南北朝の頃、刀鍛冶正宗の弟子なる左衛門三郎が鍛ひたる刀、銘に左の字あり。

〔さ-もじ（名）「さやもじ」に同じ。

ざ-もと「座元」（名）興行場の主。

さ-もも「早桃」（名）【植】（い）果實の五月頃に熟する李。（ろ）「なつもも」の一名。（棠棣）。

†さもら・ふ（はひふふへへ）（サモラウ）「候」（自、は四）さぶらふ。

さや「鞘」（名）㊀刀劍の刃をさし入るゝ筒。（刀室）。㊁筆の尖頭に冠らする竹筒。さやがさ。かさ。

さ-や「紗綾」（名）（「さあや」の略言）綾に似て、さやがた其他種々の模樣を現はしたる絖地の絹織物。――がた「紗綾形」（名）卍の模樣をくづして連ねたる模樣、紗綾に多く用ふ。

さや「莢」（名）荳科に屬する植物などの果實、內に數個の種子を藏す。（子殼）。――いんげん「莢隱元」（名）【植】「いんげんささげ」の一名。

さや-あて「鞘當」（名）㊀昔時、途中などにて武士が、互に刀の鐺をあてゝ咎立をなしゝと。㊁（芝居にて演ずる、不破と名古屋との鞘當に出づ）雙方共に、同一の婦人を手に入れんと相爭ふと。

さ-やう（ーヨウ）「然樣」（名、副）そのとほり。そのやう。さう。（左樣）。～―しからば「然樣然」（名）（さやうしからばとの義）かたくるしき言葉づかひ。～―なら「然樣」（感）（さやうならばお別れ申さんの義）別れに臨みていふ語。

さやか「明」（名）さだか。はっきり。分明。

（さ-やく「鎖鑰」（名）㊀錠と鍵と。又、とざし。㊁內部に入りこむ要所。「北門の―」。

†さや・ぐ（がぎぐぐげげ）（自、か四）㊀さわ〳〵と鳴る。そよぐ。㊁騷ぐ。

（さ-やく「坐藥」（名）肛門などにさし入れおく藥。

さや-ぐち「鞘口」（名）刀身をさし入るゝ鞘の口。

†さやけ・し（くくしきけれ）「明」（形、二）さやかなり。分明なり。

さや-さや（名、副）物の摩れ合ひて鳴る音。「さうめきたる人の―としてまゐるおとしけれ」。

さや-し「鞘師」（名）刀の鞘を造る職人。

さや-だう（ードウ）「鞘堂」（名）堂の上に、風雨などを防ぐために、更にさしかけてつくりたる堂。

†さや-つか-の-ま「鞘柄間」（名）つかのま。

†さや-に「明」（副）さやかに。分明に。

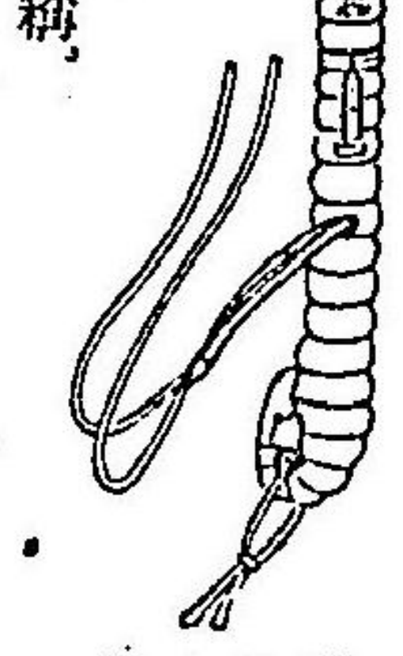
†さや-に「颯」（副）さや〳〵と。そよ〳〵と。

さや-ばしり「鞘走」（名）さやばしると。

さや-ばし・る（らりるるれれ）「鞘走」（自、ら四）刀の身が鞘より自ら抽け出づ。

さ-やま「狹山」（名）こやま。はやま。

さや-まき「鞘卷」（名）古昔、下緒を鞘に卷き、腰に結び付けて携へし鍔なき短刀の稱。後世、柄と鞘とを絲にて卷きたる刀の稱。


［さやまき］

†さやめ・く（かきくくけけ）「颯」（自、か四）さや〳〵と音す。

†さや・る（らりるるれれ）「障」（自、ら四）「さはる」の古言。

さや-ゑんどう「莢豌豆」（名）莢のまゝのゑんどう、其嫩き頃、煮て食ふ。

さ-ゆ「白湯」（名）まぜ物のなき湯。ゑうゆ。

さ・ゆ（ええゆゆるれよ）「冱」（自、や下二）㊀冷ゆ。㊁澄む。㊂あざやかなり。「さえたる手許」。「月影―」。

さ-ゆり「小百合」（名）【植】（「さ」は接頭語）ゆり。

さ-よ「小夜」（名）（「さ」は接頭語）夜。「―中」。（狹夜）。――あらし「小夜嵐」（名）よあらし。――ごろも「小夜衣」（名）夜着る衣。――しぐれ「小夜時雨」（名）夜ふるしぐれ。――すがら「小夜通」（副）よもすがら。――なか「小夜中」（名）まよなか。夜中。（眞夜中）。――ふけがた「小夜深方」（名）よふけがた。――まくら「小夜枕」（名）夜寢ぬるに用ふる枕。

（さ-よう「作用」（名）㊀はたらき。しわざ。「水の―」。㊁【理】一の物體が、他の物體を引きつけ若しくは押し返すと。――げん「作用言」（名）【文法】動詞の稱。

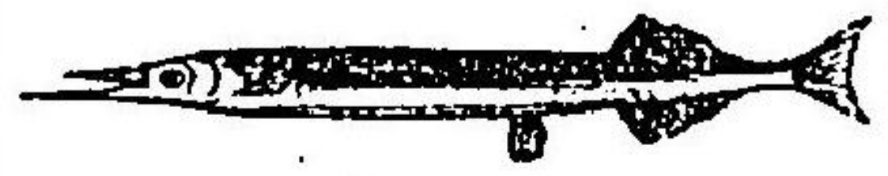
（さ-よく「左翼」（名）㊀中央軍の左方にある軍。㊁列の左方に當る部。

（さ-よく「砂浴」（名）【化】鐵皿に砂を盛りたるもの、玻璃瓶を溫かに熱せんがために用ふ。

（ざ-よく「坐浴」（名）こしゆ。

†さ-よみ「貲布」（名）（狹讀の義、「よみ」は通例升の字を宛つ、八十縷なるべしといふ）古昔の布の一種、後世さいみといふはこれなるべしといふ、さよみのぬの。（貲布）。――の-ぬの「貲布」（名）前條に同じ。

さより「針魚」（名）【動】喉鱗類中さより科に屬する魚、體は細長圓形にして多少側扁なり、眼大きく、下顎は突出して全長の七分の一あり、背部は淡黑色にして腹部は銀白色なり、體長一尺餘に達す、我國西南海に多し。（鱵）。


［さより］

さら「皿」（名）㊀碗の一種、開きて淺く、多くは陶製にして食物を盛るに用ふるもの。（碟）。㊁儀式などの食膳に、皿に盛りて出すさかな。㊂「ひざざら」の略言。㊃全體扁圓く內部稍々低くなりて、碟の狀をなすものゝ稱。

サラ「沙羅」（名）【植】「サラさう」に同じ。

〔さら「新」（名）あたらしきと。又、あたらしきもの。

〔ざら（名）「ざらがみ」の略言。

〔ざ-ら（名）おしなべて然ると。

†サラアサ「更紗」（名）「サラサ」の古稱。

さ-らいげつ「再來月」（名）（再來月の字音の約）來月の次ぎの月。

さ-らいねん「再來年」（名）（再來年の字音の約）來年の來年。即ち、明後年。（明々年）。

†さら-がへ・る（らりるるれれ）（ーガエル）「更返」（自、ら四）更に元に立戾る。もどる。「さらがへりてかくねんごろに聞え給ふ」。

〔ざら-がみ（名）洋紙の一種、ざら〳〵としたる品質のもの。

〔さら-け「淺甕」（名）底淺き甕。

†さらけ-だ・す（さしすすせせ）（他、さ四）悉皆ひろげ出す。

サラ-サ「更紗」（名）㊀（「ポルトガル」語 Saraca）種々の模樣を押して染めたる金巾。（印花布、班布）。㊁梅桃などの花の紅白雜ざりたるをいふ。㊂「サラサがた」の略言。――うちは（ーウチワ）「更紗團扇」（名）更紗形の模樣ある團扇。――がた「更紗形」（名）更紗にある模樣の如き形に染めたる種々の花紋。――がみ「更紗紙」（名）更紗形の模樣ある紙。――ぞめ「更紗染」（名）更紗形に染めたるもの。

〔さら-さら（名、副）㊀輕く觸れ行く音にいふ語。㊁さはりなくはかどり進むさまにいふ語。「―と書く」。㊂淺水のよどみなく流るゝさまにいふ語。㊃いやみなきさまにいふ語。㊄しめり氣なく又はあぶら氣なきさまにいふ語。

さら‐さら［更更］（副）（「さらに」を重ねたる語）すこしも。ゆめにも。つゆ。

〔**ざら‐ざら**〕（名、副）❶皮膚に觸れて粗々（アラアラ）しき感じのするさまにいふ語。「紙が―する」。❷稍や強く擦（ス）れ行く音にいふ語。

さらし［晒］（名）❶さらすこと。❷さらしたる麻布又は綿布。（曝布）。❸徳川時代の刑罰、罪人を市上に緊縛して衆人にあまねく見せ、其罪狀をも掲示して知らしめしこと。又、首を梟木にかけ其罪狀を掲示して、あまねく衆人に示したること、即ちごくもん。（磔）。**―アン**［晒餡］（名）餡を日に晒して乾かしたるもの。**―くび**［晒首］（名）ごくもん。**―こ**［晒粉］（名）❶水にさらして白くしたる米の粉。❷消石灰に鹽素を吸收せしめて製したる白色の粉末、一種の臭氣を有し、木綿其他植物纖維を漂白するに用ひらる。（漂白粉）。**―て**［晒手］（名）ものをさらすを業とするもの。**―もの**［晒者］（名）昔時、晒の刑に行はれたる罪人。**―もめん**［晒木綿］（名）晒したる綿布。**―や**［晒屋］（名）布を晒す家又は人。**―らふ**（ロウ）［晒蠟］（名）さらして精製したる白色の蠟。

さら‐しな［更科］（名）「さらしなそば」の略言。**―そば**［更科蕎麥］（名）信濃國更科郡より出だす蕎麥切、最も名品なりとす。

サラ‐じゆ［沙羅樹］（名）（「サラ」は梵語 Sala）【植】龍腦科に屬する木、もと舶來の種なり、幹は百日紅に似る、葉は互生し、薄く廣くして光澤あり、花は四瓣白色なり。シャラじゆ。（娑羅、杪欏）。

さらし‐ゐ［浚井］（名）六月頃に浚（サラ）ふ井戸。

さら‐す［晒］（他、さ四）❶日光にあてゝおく。❷雨風の當るまゝにして置く。「風に―」。❸布・木綿又は纖維などを水に洗ひ、日にあてゝ其色を白くす。❹世人に示す。あまねく知らす。「恥を―」。❺さらしの刑に行ふ。

‡**さら‐ず**［不去］（副）逃（ノガ）れ難く。止み難く。「かたとき―相思ひける」。

さら‐ずは［不然者］（接）（「しかあらずば」の略言）さうでなければ。しからずば。

サラ‐そうじゆ［沙羅雙樹］（名）【植】（「サラ」は梵語 sala 樹の名）「サラじゆ」に同じ、佛說に、釋迦牟尼此樹林に於て涅槃（ネハン）に入る、其樹林の四方に各二本の高樹あり、故に雙樹といふ、東方のものを常と無常とに、南方のものを樂と無樂とに、西方のものを我と無我とに、北方のものを淨と不淨とに譬ふ、皆な一は枯れ一は榮ゆ、釋迦牟尼の涅槃に入り已（ヲ）はるや、東西の二雙樹は相合して一樹となり、南北の二雙樹は相合して一樹となり、垂れて牀を覆（オホ）ひ、樹色白變して枯捲したりといふ、よりてはかなき物事に譬へいふ。「―の花の色、盛者必衰の理をあらはし」。

さら‐ち［新地］（名）何も無き空地。手を入れぬ土地。あきち。くうち。「―に家を建つ」。

〔**ざら‐つ・く**〕（自、か四）ざら〲す。

さら‐で［不然］（接）しからずして。さにあらずして。‡**―だに**［不然］（副）さらぬだに。

さら なり 勿論なり。いふまでもなし。

さら‐に［更］（副）❶一向に。すこしも。たえて。❷其上に。重ねて。❸あらためて。あたらしく。**―も いはず** 勿論なり。いふまでもなし。

‡**さらぬ‐がほ**（ガホ）［不然顔］（名）何事もなき顔つき。しらぬかほ。

‡**さらぬ‐だに**（副）さやうにあらぬにさへ。しかあらぬにさへ。「―草の枕は、露けきに」。

さらぬ‐てい［不然體］（名）何事もなきそぶり。さらぬがほ。

‡**さらぬ‐わかれ**［不去別］（名）逃（ノガ）れ得ぬ離別、しにわかれ。死別。

さら‐ば［然］（接）しかあらば。さあらんには。

さらば［然］（感）人に別るゝ時又はあらたに事を始むる時などにいふ語。

さら‐ばかり［皿秤］（名）稍や大いなる秤。（盤秤）。

さらひ（サラヒ）［浚］（名）❶さらふこと。❷掃除。‡**―の‐かぜ**［浚風］（名）降り積りたる雪などを吹き散らす風。「降るよりも―ぞすさまじき吉野の山の[illegible]野の里は」。

さらひ（サラヒ）［竹杷］（名）一種の農具、頭に齒ありて柄長く、土芥などを搔（カ）きさらふに用ふ。（搔）。

さらひ（サラヒ）［復習］（名）❶くりかへし習ふこと。❷遊藝の師匠が、弟子をあつめて、日頃敎へし遊藝を演ぜしむること。「常磐津の―」、「踊の―」。**―がき**［復習書］（名）習字の復習。てならひ。

さら・ふ（サラフ）（はひふふへへ）［攫］（他、は四）❶かきのく。はらひすつ。❷横合より奪ふ。うばひさる。

さら・ふ（サラフ）（はひふふへへ）［浚、渫］（他、は四）川・堀（ホリ）又は井戸などの底の土沙を掘（ホ）り上げて、更に深くす。「河を―」。

さら・ふ（サラフ）（はひふふへへ）［復習］（他、は四）敎へられたる物事を繰り返して習ふ。「書物を―」。（溫習）。

〔**さらへ**〕（サラヘ）［竹杷］（名）「さらひ」の訛。

〔**さらへ・る**〕（他）「さらふ」の訛。

‡**さらぼ・ふ**（サラボフ）（はひふふへへ）（自、は四）❶死體などが、雨露に曝（サラ）されて、骨ばかりになる。❷老い衰ふ。おいぼる。❸瘦（ヤ）せて骨見ゆ。

言海

さら‐まはし（ワシ）［皿廻］（名）皿を竿などにて扱ひ、種々の曲藝をなすこと、又、其曲藝をなす人。

ざら‐め［粗目］（名）結晶あらくして粒狀をなし、ざら〲する砂糖。

‡**さら‐めか・す**（他、さ四）さら〱音するやうにす。

‡**さら‐め・く**（自、か四）さら〱音す。

〔**ざら‐め・く**〕（自、か四）ざら〲す。

さらり［斷然］（副）❶さはりなく。どゝこほりなく。❷すっかり。のこらず。❸未練なく。なごりなく。

‡**サ‐リ**［舍利］（名）「シャリ」に同じ。

さ‐り［然］（自、ら變）（「しかあり」の義）しかり、「―とも」、「―ながら」。

ざ‐り［砂利］（名）ちひさき石。こいし。

ざり（助動）（「ず」と「あり」とを合はせたる語）然あらぬ意を表はす語。「然聞か―ければ」。

さり‐がた・し［難去］（形、二）❶離れ難し。❷避け難し。❸棄てゝおき難し。「さりがたき用事」。

ざり‐がに［蝲蛄］（名）【動】蟹の一種、東北地方の河流に產す、第一脚は螯（ハサミ）を具す、後方にしざる特性ある故に此名あり、肉味は蝦（エビ）に似る。**―いし**［蝲蛄石］（名）蝲蛄の胃の内面にある咀嚼用の炭酸石灰質の突起物、往時は醫藥に供したり。

さりげ‐な・し［然氣無］（形、二）然る氣色なし。其樣子無し。

さり‐じやう（ジヨウ）［去狀］（名）夫婦の離緣につき、其旨をしたゝめて、夫より妻に渡す書狀。離緣狀。

さり‐とて（接）然ありとては。さうとしては。「なつかしくらうたげに―うちとけず」。

さり‐とても（接）然ありとしても。さうとしても。「―又せめて心ごはく」。

さりとは（接）然りとは。さうとは。

さり‐とも（接）然ありとも。さありとも。「―人にはおとり給はじ」。

サリチル‐さん［―酸＝Salicylic acid］（名）【化】白色綾針狀の結晶物、冷水に溶解し難けれど、熱湯又は「アルコホル」等には能く溶解す、重要なる防腐劑なり、又解熱藥・利尿藥として用ひらる。

さり‐ながら［乍然］（接）しかありながら。さうではあるが。しかしながら。（雖然）。

〔**さり‐ば**〕（名）芝居にて、たての時に用ふる念佛・鉦・「太鼓の合奏」。

さり‐ぶみ［去文］（名）「さりじやう」（去狀）に同じ。

（**さ‐りん**）［紗綸］（名）紗綾（サヤ）の類の織物、綸子（リンズ）に似て薄きもの。

さる［猿］（名）❶【動】哺乳類中猿猴類に屬する獸、形貌人類に近く、體は直立し、能く坐（スワ）り能く立ち、四肢皆な手の如く、各五本の指を具へ、尾は短く、面と臀とは共に赤し、頰（ホホ）に食物を納むる袋あり、性怜悧狡猾にして、能く他の模倣をなす、我國各處に產すれど北海道には產せず。ましら。まさる。やゑん。（狙猴）。❷狡猾なる小才あるもの又は能く模倣する才あるものをのゝしりていふ語。「―野郎」。❸戶の上又は下の棧に裝置したる具、戶を閉（ト）づるときに、これを鴨居又は敷居に挿（サ）してしまりをなすもの。**―も きから おちる** 猿は木に上下するを巧なれど、時には誤りて落つるが如く、其道にたけたるものも、時にはあやまりてしくじることあるにいふ。

さる［申］（名）❶十二支の一、第九位にあたるもの。❷時の名、昔時の夕の七つ、今の午後四時。❸方角の名、即ち、西南西。

さ・る［去］（自、ら四）❶離れ行く。立ちのく。はなる。❷へだゝる。とほざかる。「相―と十步」。❸すぐ。ふ。「今ぞ―を十年」。❹消ゆ。失す。「雨降れば色さりやすき花櫻」。❺死ぬ。みまかる。「世を―」。❻まぬがる。避く。「さらぬ別」。❼‡至る。來る。「春されば」。**―もの ひびに うとし**［去者日疎］親しかりしものも、遠ざかれば次第に交情のおとろへ行くにいふ。

さ・る［去］（他、ら四）❶追ひ避（ヤ）る。追ひ出す。「妻を―」。❷除く。棄つ。❸とほざく。はなす。

‡**さ・る**［曝］（自、ら下二）雨風又は日光などに觸れて、色變じて朽（ク）つ。「されかうべ」。

さる［然］（接頭）或語に冠して、確かにそれと定めぬ意を表はす語。「―人」、「―旦那」。

さる［然］（接）（「さある」の略言）そのやうな。そのごとき。「―ことなし」。

ざる［笊］（名）❶竹を削（ケ）りて細かく編（ア）みたる一種の籠、いかき。かたみ。さうり。（笊籬）❷「ざるご」の略言。

ざ・る［戲］（自、ら下二）（「あざる」の略言）たはぶる。たはむる。

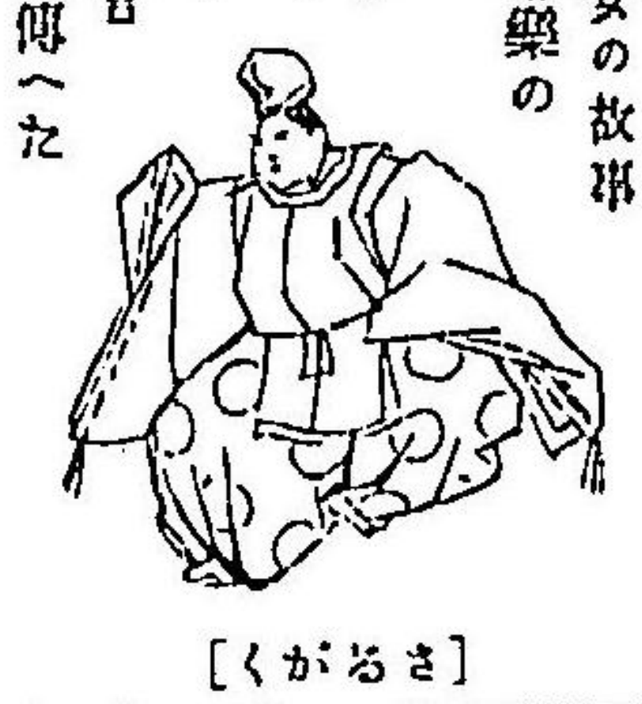
サルカ［秦吉了］（名）【動】「きうくわん」の一名。

‡**さる‐がう**（ゴウ）［散樂］（名）❶「さるがく」に同じ。❷たはむれ。**―がま・し**（形、二）動作さるがうに似たり。たはむれがまし。**―ごと**［散樂事］（名）さるがうのたはむれ。又、たはむれごと。「たゞ日ひと日―をし給ふ」。

さる‐がき［猿柿］（名）【植】❶柹の一種、葉は平滑にして五分內外の葉柄を具し、上面は暗綠色にして下面は灰白色なり、果實は小形にして食用とし、又、柹澁を採る料に供せらる。せんなりがき。❷「いぬびは」の一名。

‡**さる‐がく**［散樂］（名）（散樂（サンガク）の音の轉、或は

神代紀に見えたる猿女の故事に出づともいひ、戯(ザレ)樂の轉かともいふ。古昔、一時のたはむれに滑稽なる動作を演ぜしもの、歌舞音樂の備はりしものにあらず、後世の狂言師は古き猿樂の本體を傳へたるものなりといふ。


［くがるさ］

さる-がく［猿樂］(名)（散樂(サンガク)の音の轉、雅樂に對して起れる稱呼）歌舞音曲を備へて演ずる一種の戲藝、多く武家に賞翫せられたるものにして、觀世・今春・金剛・寶生を猿樂の四座とす、後世の能樂は此餘流なり、

さる-がしこ・し（くしきけれ）［猿賢］(形、一) さかしらなり、こざかし、

卄さるが・ふ（はひふふへ）(自、は四) さるがくをなす。たはむる。

さる-ぎ［猿木］(名) 厩(ウマヤ)にて馬を繫(ツナ)ぐ木、

さる-ぐつわ［猿轡］(名) 聲を立てさせぬために、口に入れて頸(クビ)にしめくゝるもの、「―を銜ます」、

さる-ぐま［猿隈］(名) 芝居の役者のくまどりの一種、猿の顏の如くに皺(シワ)をあらはすもの、

さる-ぐわん［猿環］(名) 金物の環の自由に廻轉するもの、

さる-こ［猿子］(名) 綿入の袖無羽織。

〔さる-ご［笊碁］(名) 圍碁の下手なるヿ。

さる-ざけ［猿酒］(名) 猿が木の穴などに貯へ置きし木實の熟爛して酒の如くなりたるもの、奥州南部邊にありて、味極めて甘しといふ。

さる-しばゐ［猿芝居］(名) 猿に衣裳を着せ、芝居の眞似をさするもの。

さる-すべり［猿滑］(名)【植】山茶科に屬する木、樹皮滑(ナメ)らかにして猿も滑(スベ)りて上り得ずといふより此名あり、葉は全邊を有し稍圓狀をなす、花は通常紅色なり、觀賞用として栽培せらる。ひやくじつこう。（百日紅、怕痒樹、紫薇）。「トロノン」の類。

サルゼ(名)（「ポルトガル」語 Sarja）舶來の毛布、

サルソー［撒曹］(名)【化】「サリチル」酸に同じ。

ざる-そば［笊蕎麥］(名) 笊(ザル)に盛(モ)りて出す蕎麥切、つゆをつけて食ふもの。

さる-ぢゑ［猿智慧］(名) こざかしき智慧。あさはかなる才能。さるりこう。

さる-つかひ（ーツカイ）［猿遣］(名)「さるまはし」に同じ。

さるとり［菝葜］(名)【植】「さるとりいばら」の略言。——**いばら**［菝葜］(名)【植】百合科に屬する上昇植物、卷鬚と曲刺とを有し、葉は柿に似て花は紅色なり、赤き豆大の漿果を結ぶ。

卄さる-なめり［猿滑］(名)【植】「さるすべり」の古名、

ざる-なり［笊形］(名) 笊の如き形。

さる-に［然］(接)「しかるに」に同じ。——**ては**(接) しかるにしては。それにしては。「―かしこき筋にもなるべき人の」。——**ても**(接) しかりとしても。それにしても。「―かゝることなんとしらせたまひて」。

さる-のこしかけ［猿腰掛］(名)【植】一種の菌類、樹木に生ず、大抵半圓形の棚(タナ)の狀をなし、腰掛の觀を呈す、其大いなるは採りて床の置物又は扁額などとす。（木耳）。

さる-のぼり［猿幟］(名) 括(クヽ)り猿をつけたる幟。

さる-のまくら［猿枕］(名)【動】海膽類に屬する棘皮動物、扁平にして略ぼ圓盤狀をなす、全面に短棘あり。（猨枕）。

さる-は（ワ）［然者］(接) しかるは。さあるは。

さる-はひ（ーハイ）［猿匐］(名) 圍碁にて、石を滑(スベ)らして飛ばすヿ。

さる-ひき［猿牽］(名) さるまはし。

さる-ほど-に［然程］(接) 前を受け更にあらためて說き起すに用ふる語。しかある程に。しかあるあひだに。（閑程）。

さる-ぼほ（ーボオ）［猿頰］(名) ㊀猿の頰(ホヽ)の內にある食物をふくみ貯(タクハ)ふる袋。㊁頤(アゴ)のみにあつるめんぽゝ。㊂小さき片手桶、柄杓のかはりに用ふるもの。㊃【動】蚶蜆類中同柱類に屬する貝、形あかゞひに似て、殼圓くして厚し。

さる-また［猿股］(名) さるもゝひき。

さる-まつ［猿松］(名) 多辯狡猾なる者をのゝしりていふ語。

さる-まなこ［猿眼］(名) 圓くして凹(クボ)みたる眼、

さる-まはし（ーマワシ）［猿廻］(名) 猿に種々の藝を敎へ、これを舞はせて錢を乞ふ者。（狙公、狙翁）。

さる-まひ-ごし（ーマイー）［猿舞腰］(名) 猿の踊(ヲド)るが如き腰付、腰の伸びぬ樣をいふ。

卄さる-まろ［猿丸］(名)【動】猿の異稱。

ざる-みみ［笊耳］(名) 忘れ易きヿ。かごみみ。

さる-もの［然者］(名) ㊀しかあるべきもの。しかるべき地位又は名聲若しくは技倆あるもの。「―ありと知られたる」。㊁あるひと。なにがし。——**にて**［然者而］(副) しかるべきものにして。いふまでもなきものにて。「春秋のみどきやうを―りんじにもさま〳〵のたふときことどもをせさせ給ふ」。

さる-ももひき［猿股引］(名) 股の上部のみを蔽(オホ)ふ短き股引、長きものにても漸く膝あたり迄に

及ぶ。さるまた。（猿股）。

さる-やなぎ［猿柳］(名)【植】「かはやなぎ」の一名。

さる-りこう［猿利口］(名) 猿智慧あるヿ。こざかしきヿ。こりこう。

さる-わか［猿若］(名) ㊀寛永年中、中村勘三郎が創(ハジ)めたる歌舞伎、猿樂より出でたるが故に此名あり。㊁歌舞伎の猿若の眞似(マネ)してあるく乞食、

さる-を［猿尾］(名) 三味線の棹(サヲ)の胴と接する所。

さる-をがせ［猿麻桛］(名)【植】「さがりごけ」の一名。

ざれ［戯］(名) ざるゝヿ。たはむれ。

（ざ-れい［茶禮］(名) 茶湯の儀式。

（ざ-れう（ーリョウ）［座料］(名) ざしきだい。

ざれ-うた［戯歌］(名) ㊀おどけ歌。㊁狂歌。

されかうべ（ーコウベ）［髑髏］(名) 雨風に曝(サラ)されて肉全く脫落したる頭骨。しやりかうべ。どくろ。（天靈蓋）。

（さ-れき［砂礫］(名) すなと小石と。

ざれ-く［戯句］(名) ㊀たはむれの語。㊁狂句。

卄ざれ-くつがへ・る（ークツガエル）（らりるるれれ）(自、ら四) 非常にざる。いたくたはむる。「―今樣のよしばみよりは、こよなう奥ゆかし」。

ざれ-ごころ［戯心］(名) ふざける心。たはむるゝ心。

ざれ-ごと［戯言］(名) ふざけたることば。じやうだん。（諧謔）。

され-ど［然］(接) しかれども。さりながら。けれども。

され-ば［然］(接) しかあれば。しかれば。それなれば。——**いの**(接) 專ら淨瑠璃などにて、婦人の用ふる語。されば。「―賴平殿の今[illegible]たれ給ふとは」。——**こそ**(副) さうあればこそ。案の如く。

卄ざれ-ば・む（まみむむめめ）［戯］(自、ま四) たはむれかゝる。ざれかゝる。

されまつ［躁松］(名) 低くして枝茂(シゲ)り、古木の如きさまをなす盆栽などの松（天目松、千年松）。

ざれ-もの［戯者］(名) おどけもの。とぼけもの。

〔され-る［躁］(自)「さる」の訛。

〔ざれ-る［戯］(自)「ざる」の訛。

（さ-ろう［沙漏］(名) すなどけい。

（ざ-ろく［坐彔］(名)（坐する時の曲彔の義）背後によりかゝりある椅子の類、木の框(カマチ)に籐を編み付けたるもの。よりかゝり。

（ざ-ろん［座論］(名) ㊀座上にての議論。又、實際にあたらぬ空論。㊁【植】梅の一種、一つの花に實の多く生(ナ)るを實座論(品字梅)といひ、一つの枝に數多の花のひらくを花座論(飛臺梅)といふ。

（さ-わ［茶話］(名) 茶を飲みながらはなすヿ。

（ざ-わう（ーヲウ）［藏王］(名)【佛】菩薩の一、忿怒の相を現はし、右の足を揚げて、右の手に三鈷を持つ。

（さわう-うわう（ーヲウーヲウ）［左往右往］(名) 一團の人が、左にゆき右に往き、ちり〴〵ばら〳〵になるヿ。

さわが・し（しくしきけれ）［騷］(形、二) ㊀いそがし。とりこみてあり。「いて此返事は、―くとも我せんとの給ひて」。㊁あわたゞし。㊂かまびすし。㊃穩かならず。安からず。靜かならず。

さわが・す（さしすせせ）［騷］(他、さ四) さわぐやうにす。さわぎを起す。

卄さわがは・し（サワガワシ）（しくしきけれ）［騷］(形、二) さわがし。

さわぎ［騷］(名) ㊀さわがしくするヿ。さわぐヿ。㊁もんちやく。とりこみ。みだれ。さうどう。「世の―となる」。（擾亂）。㊂芝居の鳴物の一。

さわぎ-た・つ（たちつつてて）［騷立］(自、た四) 一同にさわぎはじむ。一般にさわぎを起す。

さわ・ぐ（がぎぐぐげげ）［騷］(自、か四) ㊀かまびすしきを聲立つ、靜かならぬ響起る。㊁いら〳〵して奔走周旋す。あれこれといそがはしく立ちはたらく。㊂あわてふためく。うろたへる。㊃酒宴にて、秩序なき歌舞など行はる。㊄穩かならず。安からず。靜かならず。

（さわ-くわい（ーカイ）［茶話會］(名) 酒肴を設けず、茶菓のみを供してすます談話會。

〔さわ-さわ［爽爽］(名、副) 邪魔又はよごれのとれてさっぱりと心地よきさまにいふ語。「後は―とはりかへ應と思へども、けふばかりは」。

さわ-さわ［騷騷］(名、副) ㊀擧動のおちつかぬさまにいふ語。㊁卄物などの觸れて鳴る音にいふ語。「をはたすゝき―にひきよせあげて」。

〔ざわ-ざわ［騷騷］(名、副) 前條の意を稍や強めていふ語。

卄さわ-だ・つ（たちつつてて）［騷立］(自、た四) さわぎ立つ。さわぎ起る。

卄さわ-だ・つ（たちつつてて）［爽立］(自、た四) さわやぐ。

卄さ-わた・る（らりるるれれ）［狹渡］(自、ら四)（「さ」は接頭語）渡る。「ほとゝぎすなきて―、君はきゝつや」。

〔さわ-つ・く（かきくくけけ）(自、か四) さわさわす。

〔ざわ-つ・く（かきくくけけ）(自、か四) ざわざわす。

〔さわ-め・く（かきくくけけ）(自、か四) さわさわす。

〔ざわ-め・く（かきくくけけ）(自、か四) ざわざわす。

さわ-やか［爽］(名) ㊀さっぱりとして快(コヽロヨ)きヿ。氣分のはれ〴〵しきヿ。「御心地―になり給ひにたりや」。㊁判然としてあるヿ。はっきりしてあるヿ。

卄さわ-や・ぐ（がぎぐぐげげ）［爽］(自、か四) さわやかになる。「聲音―ならず」。（明亮）。「なやませ給ひし御目もさわやぎ給ひ」。

さ-わらび［早蕨］(名) 芽(メ)を出だしたるばかりの「わらび」。

卄さ-ゐ［佐韋］(名)【植】「おにゆり」の古名。

（さ-ゐ［差違］(名) たがひ。ちがひ。

（ざ-ゐ［座位］（名） 座の次第。座の位地。

＋さゐ-さゐ-し（しく、しき、しけれ）（形、二） さやさやと鳴る。さわさわと音す。「くろきかいねりの—く張りたる一重」。

（さゐ-もん-ふ［左衛門府］（名） 衛門府の一。衛門府の條を見よ。

（さゐ-ゑん［菜園］（名） はたけ。

さを［竿、棹］（名） ❶枝葉を去りたる竹の幹。「釣—」。❷船をさすに用ふる長き棒。みさを。❸さをばかりの目盛ある棒。はかりざを。（桿）。❹地積をはかるに用ふる定規の棒。けんざを。間竿。❺三味線の胴より上の絃を張る長き部分、端末に轉手（ジテン）を設く。❻簞笥又は長持などをさしてかたぐる棒。

＋さ-を［眞青］（名） 眞青。「色は—に白く」。

—さを［棹］（接尾） ❶簞笥又は長持などの數をかぞふるにいふ語。❷羊羹などを入れたる菓子折又はそれに適當せる量を數ふるにいふ語。

さを-いれ［竿入］（名） 間竿（ケンザヲ）を入れて、地積を測ること。

さを-がね［竿金］（名） 昔時、竹筒に溶（ト）し入れて竿の如くにせし金銀、必要に應じ、切りて貨幣としたり。（條金、棹金）。

さを-さ-す（さ、し、す、す、せ、せ）［棹］（自、四）（「さ」は接頭語） 棹をさして舟を行（ヤ）る。「扁舟に—」。

さ-をしか［小男鹿］（名）（「さ」は接頭語） をしか。（牡鹿）。

さを-だけ［竿竹］（名） 竿にする竹、又、竿になりたる竹。

さを-だち［竿立］（名） 馬などの前足をあげ後足のみにて立ちあがること。ぼうだち。

＋さ-をとし［一昨昨年］（名） 一昨年の昨年。

さ-をとめ［早乙女］（名） ❶田植をする女。（五月女、田植女）。❷こむすめ。處女。❸［動］「あとびさり」の一名。

＋さ-をど-る（ら、り、る、る、れ、れ）［踊］（他、ら四）（「さ」は接頭語） をどる。

さを-のぼり［竿登］（名） 立てたる竿に登る輕業。

さを-ばかり［桿秤］（名） はかりの一種、桿の一端に物體をのする皿又はかくる鉤（カギ）ありてこれに近く把手あるもの、分銅を桿上の左右に動かして、皿にのせ又は鉤にかけたるもの、皿さと鈞合を得しめ、桿上にある目盛によりて、其重さを測る。

（さん［讃］（名） 稱美したる辭。ほめことば。（贊）。

（さん［產］（名） ❶子を生むこと。分娩。「—が輕い」。❷其土地に生まれたる人。❸其土地より生出し又は製出する物品。「北海の—」。❹なりはひ。くらし。生業。❺もとで。資財。「中人十家之—」。

（さん［筭］（名） ❶算木。❷かずとり。❸けいさん。かんぢやう。❹さんじゆつ。すうがく。❺うらなひ。えき。❻かず。數量。❼そろばん。算盤。❽はかりごと。もくろみ。—なし［無筭］數かぎりなし。數へきれず。—をおく 卜筮をなす。

さ-みだす ちりぢりになる。

（さん［棧］（名） ❶板又は蓋（フタ）などの反（ソ）るを防ぐために附くる細き材。❷戸又は障子の骨。❸かけはし。❹たな。（棚）。❺床下にわたしたる桁木。

（さん［酸］（名） ❶す。（酢）。❷味すきこと。❸【化】金屬元素によりて容易（タヤス）く置換せらるべき水素を含む化合物、味酸く水に溶（ト）け易し、「リトマス」溶液を赤變せしめ、鹽基を中和すべきもの、鹽酸・硫酸・硝酸等の如きこれなり。

（さん［慘］（名） むごきこと。いたましきこと。

（さん［燦］（名） あざやか。きらやか。

（さん［散］（名） ❶職業なきこと。ひま。「—人」。❷官職なくして位のみあること。「—官」。「—位」。「—一位」。❸こな。こ。粉末。「—藥」。

（さん［三］（名） 三味線の絃の最も細くして最も下にあるもの。「—さがり」。

（さん［三］（數） みつ。み。（參）。

（—さん［樣］（接尾）（「さま」の轉） 人の稱呼に添へる敬語（さまよりは稍や輕き意を含む）。「兄—」。

（ざん［斬］（名） ざんざい。うちくび。「—に處す」。

（ざん［讒］（名） たくらみこしらへて人をあしざまにいふこと。しこづること。ざんげん。「—に迷ふ」。

（ざん［竄］（名） しまながし。つゐはう。

（ざん-あう［殘鶯］（名） 春過ぎて尚ほ鳴く鶯。

（さん-あく-しゆ［三惡趣］（名）【佛】次條に同じ。

（さん-あく-だう［三惡道］（名）【佛】餓鬼・畜生・地獄の三道の稱。「—に陷る」。

（さん-い［產衣］（名） うぶぎ。

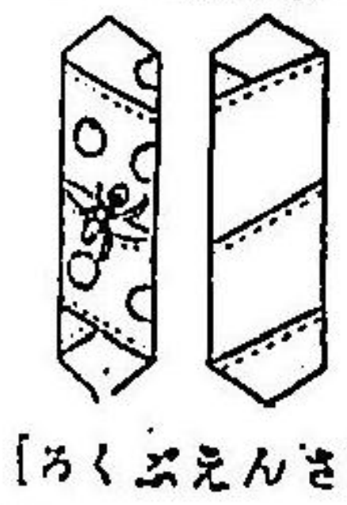
（さん-い［衫衣］（名） 短き單衣。

（さん-いつ［散逸］（名） ちり失（ウ）すること。ふんしつ。（散佚）。

（さん-いう［三友］（名） ❶三益友と三損友との稱。❷さいかんのさんいう（歲寒三友）に同じ。

（さん-いん［山陰］（名） ❶山のきた。又、山のかげ。❷「さんいんだう」の略言。—だう［山陰道］（名） 八道の一、丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見・隱岐の稱。

（さん-え［三衣］（名） 僧侶の着用する三種の衣服即ち袈裟の三種、僧伽梨（大衣）・鬱多羅僧（七條）・安陀會（五條）の稱。—ばこ［三衣匣］（名） 僧の三衣を入れおく匣。—ぶくろ［三衣袋］（名） 僧の三衣をいれて持ち行く袋。


［さんえぶくろ］

（さん-えき［三易］（名） 易にて連山（夏の時代の易）・歸藏（殷の時代の易）・周易の稱。

（さん-えき-いう［三益友］（名）（論語に出づ） 我に利益を與ふる三様の友人、即ち、正直なる人・誠實（諒）なる人・多聞なる人の稱。

さん-えき［算易］（名） うらなひすること。又、其人。「うらなひしや」。

（さん-か［山家］（名） やまが。「—の住ひ」。

（さん-か［參加］（名） ❶其列に加はること。其なかまに入ること。❷【法】或行爲につき、主なる關係者以外の者が、これに加はること。「—支拂人」。「—引受人」。

（さん-か［山河］（名） 山と河と。「—の險」。

（さん-か［山下］（名） 山のもと。ふもと。

（さん-が［參賀］（名） まゐりて賀を申上ぐること。

（さん-かい［散開］（名） ❶ちりひらくこと。又、ちらしひらくこと。❷密集せる隊形のものが、各個に適當の間隔をとりて隊形をひらくこと。

（さん-かい［山海］（名） 山と海と。かいりく。「—の珍味」。

（さん-かい［三繋］（名） 馬具の三種、即ち、羈（オモガイ）・鞅（ムナガイ）・鞦（シリガイ）の稱。

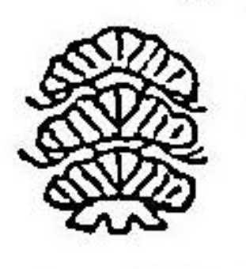
（さん-がい［慘害］（名） ❶いためそこなふこと。むごく害すること。❷いたましき損害。

（さん-がい［三階］（名） ❶二階の上に、更に一層の家あること、又、其建方の家。（三層樓）。❷芝居の奧の三階になりたる所。

（さん-がい［三界］（名）【佛】（い）一切衆生の生死輪廻する三つの界、即ち、慾界・色界・無色界の稱。「—無安猶如火宅」。（ろ）過去・現世・未來の三世の稱。（は）斯世にて到る所。「江戶—まで來て」。—しよてん［三界諸天］（名）【佛】三界にある種々の天、即ち欲界の中には四王天・忉利天・夜摩天・兜率天・快樂天・他化自在天の六天あり、色界の中には初禪天・二禪天・三禪天・四禪天の四天あり、無色界の中には、無邊處天・空無邊處天・無所有處天、非非想天の四天ありといふ。

（さん-かい-だん［三戒壇］（名） 大和國東大寺・下野國藥師寺・筑前國觀音寺の稱。

さんがい-まつ［三蓋松］（名） 紋所の名、松の枝葉の三層に重なりたるを横より見たる圖のもの。


［さんがいまつ］

（さん-かう［三綱］（名） ❶君と父と夫との稱、君は臣の綱（オホヅナ）、父は子の綱、夫は妻の綱といふ義より出づ。❷【佛】上座・寺主・都維那（ツヰナ）の稱。

（さん-かう［三行］（名） 子たるものゝ親に對する三つの行、即ち、親を養ふことと喪（モ）を擧ぐることと祭祀を修（ヲサ）むることとの稱。

（さん-かう［三更］（名） 夜の十二時。よなか。

（さん-かう［參考］（名） てらしあはせて考ふること。まじへあはせて考ふること。又、其材料。

（さん-かう［參向］（名） まゐりむかふこと。まゐること。

（ざん-かう［殘肴］（名） 殘りのさかな。のこりもの。（殘殽）。

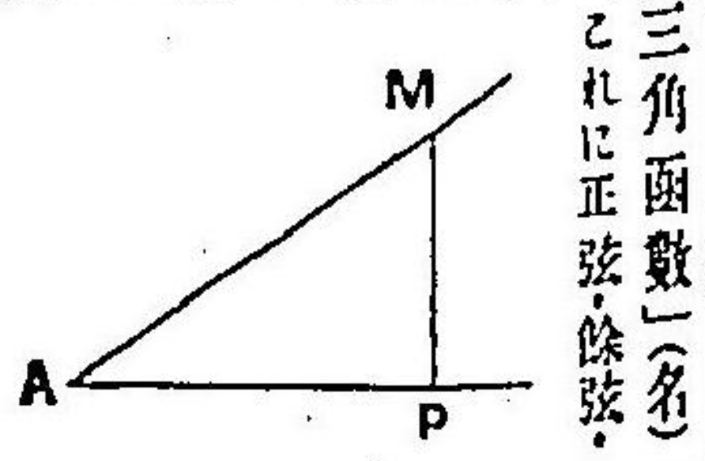
さんかう-しき［三項式］（名）【數】三つの項より成る整式。

（さん-かがみ［三鏡］（名） 水鏡・大鏡・增鏡の稱。

（さん-かく［三覺］（名）【佛】本覺・始覺・究竟覺の稱。

（さん-かく［三革］（名） 甲子の年即ち革令と、戊辰の年即ち革運と、辛酉の年、即ち革命との稱。

（さん-かく［三角］（名） ❶三つの稜（カド）ある形。三稜。❷【數】三角形又は三角術の略言。—かう［三角江］（名）【地】潮勢のために侵蝕せられて、河川の海に注（ソソ）ぐ所の漏斗狀の入江をつくりたるもの。—かんすう［三角函數］（名）【數】角度又は弧度に關する函數、これに正弦・餘弦・正切・餘切・正割・餘割あり、下圖の如く與へられたる角を夾（ハサ）める二直線の一つより、他の直線へ垂線を引くべし、但（シカ）し角の大いさに從ひて垂線は第二直線上或は其後方の延長上に落つべし、$\frac{MP}{AM}$をA角の正弦、$\frac{AP}{AM}$を其餘弦、$\frac{MP}{AP}$を其正切、$\frac{AP}{MP}$を其餘切、$\frac{AM}{AP}$を其正割、$\frac{AM}{MP}$を其餘割といふ、此六函數を六線といひ、それぞれに、sinA, cosA, tanA, cotA, secA, cosecAの記號を以て表はす、此の外に、昔時は1-cos AをA角の正矢といひ、1-sin AをA角の餘矢といひ、これを加へて八線と稱したり。



—けい［三角形］（名）【數】三つの直線にて圍める平面形。—しう［三角洲］（名）【地】「さんりようしう」（三稜洲）に同じ。—じゆつ［三角術］（名）【數】三角法に同じ。—そくりやう［三角測量］（名）【數】地面の測量にて、先づ基線を定め、これより順次他の地點と三角形を作り、以て距離・面積等を測ること。—ぢやうぎ［三角定規］（名） 一種の定規、三角形をなすもの、普通は二等邊直角形をなすものと正三角形を二等分したる三角形をなすものとを以て一組とす。—どうめい［三角同盟］（名） 三國又は三者が、相互に同盟すること。—はうていしき［三角方程式］（名）【數】未知角の三角函數を含有する方程式。—はふ［三角法］（名）【數】三角函數の性質・關係を論ずる學科、三角形の邊・角

の關係に及ぶを以て此名あり。——ひ[三角比](名)【數】「さんかくかんすう」(三角函數)に同じ。——へう[三角表](名)【數】三角函數の値又は其對數を擧げたる表。——りやうはふ[三角量法](名)【數】三角測量に同じ。——ゐ[三角藺](名)【植】藺の一種、莖の三角狀をなすもの。

(さん-がく[三學](名)【佛】戒・定・慧の稱。

(さん-がく[散樂](名)「さるがく」に同じ。

(さん-がく[山嶽](名)陸地の一部の殊に高くなりたる所。やま。たけ。(山岳)。

(さん-がく[產額](名)產物の出づる高。

(ざん-がく[殘額](名)殘餘の數量、のこりだか。

さんが-にち[三箇日](名)正月の元日・二日・三日の稱。(三賀日)。

‡さんが-のくじ[三箇公事](名)御即位・御禊・大嘗會の稱。

さんが-のつ[三箇津](名)昔時、筑前國博多津・伊勢國安濃津・薩摩國坊津の稱。

さんが-のつ[三箇都](名)昔時、京都・江戸・大阪の稱、即ち今の三府。

(さん-かん[三韓](名)朝鮮の舊稱、即ち、馬韓・辰韓・弁韓の稱。後には新羅・百濟・高麗をも稱せり。

(さん-かん[山間](名)やまのなか、やまのあひ。

(さん-かん[算勘](名)算法上の考、算盤の道。

(さん-かん[參看](名)㊀中に加はりて看ること。㊁照し合はせて見ること。

(ざん-がん[巉岸](名)きりとぎたるが如き岸。きりぎし。絕壁。

(ざんかん-じやう[斬奸狀](名)惡人を斬殺する趣旨をしるしたる文書。「——を懷にし」。

(さん-き[山氣](名)山中にこもる氣。

(さん-き[三歸](名)【佛】佛・法・僧の三寶に歸依すること。

(さん-き[三危](名)三つの危難を招くもと、即ち德少なくして寵多きと、才低くして位高きと、功無くして祿厚きとの稱。

さん-ぎ[算木](名)㊀【數】一種の計數器、和算にて、普通の算盤(バン)を使用し難き場合即ち開平以上に使用するものにして、正號のものと負號のものとあり、正號は赤色にして加を表はし、負號は黑色にして減を表はす、これを盤上に排列進退して求むる所の數値を算出す。㊁易に用ふる具、長さ三寸許の角なる木、これに中を凹(クボ)めて陰の象を表はしたるもの三本と、陽の象を表はしたる何の志るしもなきもの三本とあり、筮竹(ゼイチク)を法の如く數へて、其殘りたる數の陰か陽かによりて、これをならべ卦を施(シ)きて吉凶を占す。

(さん-ぎ[參議](名)㊀古昔、太政官中にありし散官の名、四位以上の人これに任ぜられ大政に參議せり。おほまつりごとびと。㊁明治維新以後に、太政官に設けられ、大政の機務に參與せし高官、左右大臣の次に位せり。㊂大政の議事に參與すること。——くわん[參議官](名)「ぐんじさんぎくわん」(軍事參議官)に同じ。

(ざん-き[慚愧](名)はづること。はぢらふこと。

(ざん-ぎく[殘菊](名)秋の末に咲き殘れる菊花。

(さんきふ-せんきよ[三級選擧](名)議員の選擧者を納稅額によりて、一二三の階級に分け、其各級によりて選擧せしむる制度。

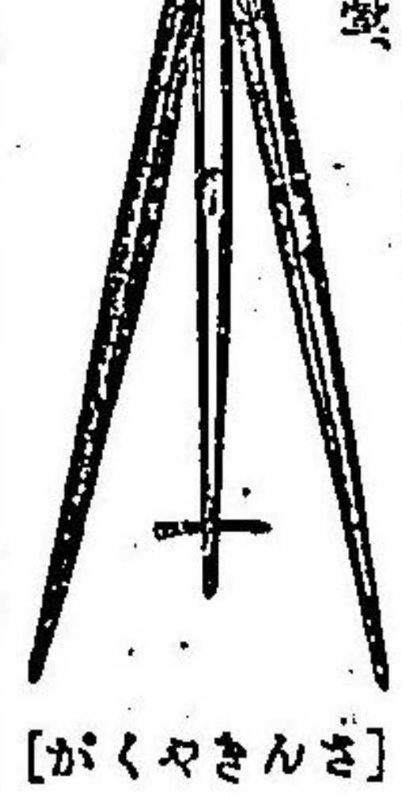
(さん-きやう[三卿](名)德川時代に、將軍家の親族なる田安・一橋・淸水の三家の稱。

(さん-きやく[山脚](名)ふもと。山麓。

(さん-ぎやく[簒虐](名)人君を弑(シイ)して其位をうばふこと。(簒逆)。

(ざん-ぎやく[殘虐](名)殘酷にしへたぐること。むごき處置をなすこと。

さんきやく-か[三脚架](名)適宜に開き得る三本の脚より成る臺、經緯儀・羅針盤・望遠鏡などをのするに用ふるもの。



[さんきやくか]

(さん-きゆう[三窮](名)人窮すれば詐(イツハ)り、獸窮すれば攫(ツカ)み、鳥窮すれば啄(ツイ)むといふこと。

(さん-きよ[山居](名)やまずまひ。

(さん-きよく[三極](名)宇宙に存在する三つの最もなるもの、即ち、天・地・人の稱。(三才)。

(さん-きよく[三曲](名)㊀筑紫琴・胡弓・三味線の稱。又、琴・三味線・尺八の稱。「——の合奏」。㊁琵琶の祕曲、流泉・啄木・揚眞操の三曲をいふ。

(さん-きらい[山歸來](名)【植】百合(ユリ)科に屬する蔓草、春の頃、宿根より蔓(ツル)を生ず、莖は竹に似て冬も凋(シボ)まず、葉間より花莖出づ、花は黃色にして叢生す、其根は藥用に供せらる。どぶくりやう。(土茯苓)。

(ざん-ぎり[散切](名)㊀髮を切り亂せること。㊁囚徒を取扱ふ非人。㊂ざんぱつ。——あたま[散切頭](名)ざんぎりにしたる頭。

(さん-きん[參覲](名)㊀まゐりつとむること。㊁德川時代に、大小名が一年おきに、領地より江戸に在勤したること。——かうたい[參覲交代](名)德川時代に、大小名がかはりがはりに江戸に參覲せしこと。

(ざん-きん[殘金](名)のこりの金子。

(さん-く[三苦](名)【佛】苦の緣より生じて受くる苦と、樂破れて受くる苦と、無常の遷流より受くる苦との稱。

(さん-ぐ[產具](名)婦人の產に要するいろ〱のもの。

(さん-ぐ[蠶具](名)蠶(カヒコ)を飼養するに要するいろ〱のもの。

(さん-ぐう[三宮](名)㊀三つの宮即ち太皇太后宮・皇太后宮・皇后宮の稱。㊁伊勢の內宮・外宮・伊雜(イザハ)宮の稱。

(さん-ぐう[參宮](名)伊勢神宮に詣(マウ)づること。

さん-くづし[算崩](名)(算木崩の畧)いしだゝみにしたる縱橫の筋ある縞又は模樣。

(さん-くわ[產科](名)婦人の出產に關する醫術。

(さん-くわ[三過](名)口の過(アヤマチ)と身の過と意の過との稱。

(さん-くわ[參和](名)まじへあはすること。又、まじはりあふこと。

(さん-くわ[山花](名)山中に咲く花。

(さん-くわ[酸化](名)【化】或物體が酸素と化合すること。廣義には、鹽化第一錫が鹽化第二錫に變ずるが如く、總て陰根の割合の增加すること。

(ざん-くわ[殘花](名)さき殘りたる花。

(ざん-くわ[殘菓](名)とり殘されたる菓子又は「菓物」。

さんくわ-あえん[酸化亞鉛](名)【化】白色の粉末、亞鉛・炭酸亞鉛又は硝酸亞鉛を灼熱すれば生ず、顏料又は醫藥に用ひらる、一に亞鉛華ともいふ。

さんくわ-アルミニウム[酸化——=Aluminium oxide]【化】「アルミニウム」を赤熱して水に投ずれば、水を分解し水素を游離せしめて生ずる酸化物、天然には鋼玉となりて產出す。

(さん-くわい[參會](名)㊀よりあひに列すること。まゐりあふこと。㊁よりあひ、集會。

(さん-くわい[散會](名)會合はてゝ、人々の散ずること。

(さん-くわい[三槐](名)(支那の上代に、朝廷に三本の槐樹を植ゑ、三公はおの〱其下に坐位を設けしよりいふ)宰相の位。

(さん-くわい[三魁](名)支那の殿試にて、第一席即ち狀元、第二席即ち榜眼、第三席即ち探花の三進士の稱。

(ざん-くわい[殘懷](名)くちをしきこと。ざんねん。

(さん-くわいき[三回忌](名)死後滿二年目の回忌。

(さん-くわう[三皇](名)支那の上代の有名なる三人の皇、即ち、伏羲・神農・黃帝の稱にいひ、又、天皇氏・地皇氏・人皇氏の稱にもいふ。

(さん-くわう[散光](名)【理】粗糙なる面より反射する光線、其方向の不規則なる故に名づく。

(さん-くわう[三光](名)㊀日・月・星の稱。㊁「カラすきぼし」の一名。——てう[三光鳥](名)【動】燕雀科に屬する鳥、禁止鳥の一なり、多く深山に棲息す、形は雀大にして黑く、頭部及腹部は白し、嘴の基部は扁側にして鬚を生ず、雄は雌に比して尾翼共に長大なり。——のびやう[三光鋲](名)兜(カブト)の鉢の三所に打ちたる鋲。

(さん-くわうごう[三皇后](名)太皇太后宮・皇太后宮・皇后宮の稱。

(さんくわ-えん[酸化鉛](名)【化】空氣中にて鉛を融解するとき生ずる黃色の粉末、普通に密陀僧(ミツソウ)と稱す。

(さんくわ-えん[酸化焰](名)【化】火焰の外部の稱、灼熱せる空氣の混じたるがため、物體に觸れて、よくこれを酸化せしむる故に名づく。

さんくわ-カルシウム[酸化——=Calcium oxide](名)【化】石灰石又は大理石等を熱するとき、分解して生ずるもの、普通これを石灰と稱す。

(さん-くわく[參劃](名)計畫にあづかること。

(さんくわ-ざい[酸化劑](名)【化】他の化合物に酸素を附與し、若しくはこれを酸化する能を有する物體、硝酸・硫酸・過酸化水素の如きこれなり。

(さんくわ-すいぎん[酸化水銀](名)【化】水銀を沸騰點に近き溫度に熱するとき生ずる結晶狀の赤色の粉末。

さんくわ-だいいちどう[酸化第一銅](名)【化】銅末に適量の黑色酸化銅を加へて熱するか、若しくは硫酸銅の溶液を「アルカリ」性となせるものに、葡萄糖の如き還元劑を加へて熱すれば生ずる赤色の粉末、銅を空氣中に徐熱するとき、先づ生ずる赤色の物體はこれなり、赤色酸化銅又は亞酸化銅とも稱す、天然には赤銅鑛となりて存在す。

(さんくわ-だいにてつ[酸化第二鐵](名)【化】水酸化第二鐵又は硫酸第一鐵を熱して分解すれば生ずる赤色の粉末、研磨用又は顏料に供せらる、俗に「べにがら」と稱す、天然には赤鐵鑛となりて產出す。

(さんくわ-だいにどう[酸化第二銅](名)【化】銅を空氣中にて赤熱するか若しくは硝酸銅を熱すれば生ずる黑色の粉末、一に黑色酸化銅ともいふ。

さんくわ-たんそ[酸化炭素](名)【化】赤熱せる木炭上に無水炭酸の通ずるとき生ずる無色無味無臭の有毒氣體、水に溶(ト)け難く、酸性反應なし、石灰水に通ずともこれを溷濁せしめず、靑色の焰(ホノホ)を放ち燃燒して無水炭酸となる。

(さんくわ-ちっそ[酸化窒素](名)【化】同容積の酸素と窒素との化合より成る無色の氣體、空氣に觸るれば、直に酸と化合して赤色の過酸化窒素となる、物體の燃燒を保持す。

(さん-ぐわつ[三月](名) 年の第三に當たる月。やよひ、はなみづき。——だいこん[三月大根](名)【植】大根の一種、秋の頃、種を蒔(マ)き、翌年の春の頃、其根を取りて食用に供す。(粉花蘿蔔)。——せっく[三月節句](名) 陰暦三月三日の節句、女子の祝日として雛祭をなす。(重三、上巳)。

(さんくわ-どう[參和銅](名) 金銀貨などを鑄造するときに、溶解して參和する銅。

さんくわ-バリウム[酸化——=Barium oxide](名)【化】硝酸「バリウム」を灼熱して生ずる白色の粉末、高溫度にありては、酸素と化合して過酸化「バリウム」となり、又、これを水に投ずれば、熱を發し烈(ハゲ)しく化合して水酸化「バリウム」となる、其質重きを以て、一に重土といふ。

(さんくわ-ぶつ[酸化物](名)【化】物體の酸素と化合して生じたるもの。

さんくわ-マグネシウム[酸化——=Magnesium oxide](名)【化】「マグネシウム」を燃(モ)やすか、若しくは其水酸化物又は炭酸鹽を熱すれば生ずる白色の粉末、僅かに熱すれば、水と化合して水酸化「マグネシウム」に變ず、醫藥に用ひられ、又、耐火の性あるが故に、坩堝(ルツボ)を製するに用ひらる、一に苦土といふ。

(さん-くわん[散官](名) 職務無き官位、又、職務少なき官位。

(さん-くわん[參觀](名) まゐりみると。

(さん-くわん[三管](名) 笛・笙・篳篥(ヒチリキ)の稱。

(さん-くわん[三澣](名) 上澣・中澣・下澣の稱。

(さん-くわん[三關](名) ㊀古昔、三つの重要なる關所、即ち越前國愛發(アラチ)關・美濃國不破關・伊勢國鈴鹿關の稱、又、愛發關を除き近江國逢阪關を加ふ。㊁耳と口と目との稱。

(さんくわん-りやう（ーリヨウ）[三管領](名) 足利時代の管領の三家、即ち、斯波・細川・畠山の稱。

(さんくわん-れい[三管領](名) 前條に同じ。

(さん-ぐん[三軍](名) ㊀支那の周代にて、大諸侯の出だす定めなりし三萬七千五百人の軍隊の稱。㊁軍隊の前鋒・中堅・後拒又は左翼・中軍・右翼の稱。又、全體の軍隊の稱。

(さん-け[三家](名) 德川時代に、將軍家の一門なる尾張の德川家(義直の系統、居城は名古屋)、紀伊の德川家(頼宣の系統、居城は和歌山)及常陸の德川家(頼房の系統、居城は水戸)の稱、大名の首座にして、將軍嗣子なければ、尾張若しくは紀伊より入りてこれを繼(ツ)ぐ定めにして、水戸は其特典なかりしかども、代々副將軍たり。

ザン-げ[懺悔](名) ㊀(懺は梵語 Ksamaya の略にして悔過の義なり、更に悔の字を添へたるは、漢梵を並擧したるなり)過去の罪惡を悟(サト)りて後悔すると。㊁轉じて、懺悔話をなすと。

(さん-けい[三形](名) 土地の三つの形、即ち高・下・平の稱。

(さん-けい[山系](名) 山脈の系統をなせるもの。

(さん-けい[三景](名) 我國にて最も勝(スグ)れて景色のよき三箇處の稱、即ち、陸前國松島・安藝國嚴島・丹後國天橋立をいひ、又、紀伊國和歌浦・陸前國鹽釜・丹後國切戸の文珠をもいふ。

(さん-けい[參詣](名) 神佛を拜(オガ)みに参(マヰ)ると。

(さんけい-ぼく[傘形木](名) 外貌の傘(カラカサ)の形をなす樹木、松・ひやくえん等の類。

(さん-けう（ーキヨウ）[三教](名) ㊀三つの教、即ち儒・佛・道又は神・儒・佛の稱。㊁【佛】三時の教、即ち阿含(アゴン)・般若(ハンニヤ)・深密(ジンミツ)の稱。

(さん-けう（ーキヨウ）[棧橋](名) さんばし。

(さん-げき[慘劇](名) 悲慘なる演劇、又、悲慘なる人事。

(さん-げだつ[三解脫](名)【佛】三つの解脫、即ち、空・無想・無願の稱。

(ざん-けつ[殘缺](名) やぶれそこねてかくると。(殘闕)。

(ざん-げつ[殘月](名) 夜明まで殘りたる月、ありあけ月。のこんの月。

ザン-げ-ばなし[懺悔話](名) 自分が既往に於ける罪惡のはなし。

(さん-げふ（ーギヨウ）[蠶業](名) 蠶(カヒコ)を飼(カ)ふ事業。

(さん-げふ（ーギヨウ）[産業](名) ㊀世渡の仕事。なりはひ。㊁生產の事業。——くみあひ（ーアイ）[産業組合](名) ㊀產業の發達又は便利を企圖するため組織したる團體の總稱。㊁【法】信用組合・販賣組合・購買組合・生產組合の總稱。其各條を見よ。

(さん-けん[散見](名) あちらこちらに見ゆると。

(さん-けん[三權](名)【法】國家の權力を、司法と立法と行政とに區分していふ語。——ぶんりつ[三權分立](名) 立法・司法・行政の三權は、各獨立して互に相犯(オカ)すべからずといふと、「フランス」國の碩儒「モンテスキユー」の唱道に創(ハジ)まる。

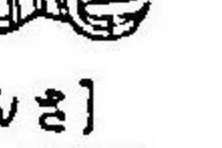
(さん-げん[三絃](名) ㊀三つの絃器、即ち、琵琶・琴・和琴の稱。㊁三味線。

(さん-げん[三元](名) 上元(正月十五日)・中元(七月十五日)・下元(十月十五日)の總稱。

(さん-げん[三軒](名) 芝居の鬘(カツ)の一區。

(ざん-げん[讒言](名) 事實を附會又は捏構して、他人を惡樣(アシザマ)にいふと、言こづると。

(さん-こ[三鈷](名) 獨鈷(トツコ)の類、さきの三叉(マタ)になりたるもの。


[こんさ]

(さん-こ[三孤](名) 支那の上代の第二位の高官なる少師・少傅・少保の稱。

(さん-こ[三顧](名) (蜀の劉備が、三たび諸葛亮の廬を訪(ト)ひし故事に出づ)君主又は長上に、特殊の信任優遇を受くると。

(さん-ご[珊瑚](名)【動】一種の腔腸動物、海中に棲息す、群體をなし塊狀若しくは樹枝狀を成す、骨格は脆硬なる外皮と堅硬なる中軸とより成る、吾人の裝飾用に供するものは、其外皮を剝(ハ)ぎたる中軸なり。

(さん-ご[產後](名) 子を生みたる後、分娩のあと。

(さん-ご[參伍](名) 彼此をまじへくむと。

(さん-ご[三五](名) (三と五との乘積十五なるよりいふ)十五夜の異稱、「—の明月」。

(さん-こう[三后](名) 太皇太后・皇太后・皇后を申す語。

(さん-こう[參候](名) ㊀參(マヰ)り伺(ウカガ)ふと、伺候。㊁御歌所の役名。

(さん-こう[三公](名) ㊀太政大臣及左右大臣の稱、又、左右大臣及内大臣の稱。㊁支那の周にては太師・太傅・太保の稱、漢にては大司徒・大司馬・大司空の稱、唐にては太尉・司徒・司空の稱。

(ざん-こう[讒口](名) さんげん。ざん。「—に陷る」。

(さんこう-きうけい[三公九卿](名) 支那の三公と九卿即ち少師・少傅・少保・冢宰・司徒・宗伯・司馬・司寇・司空とをいふ。轉じて、朝廷の高き官職。

(さん-ごく[三國](名) ㊀三つの國。㊁後漢の末、天下を三分して各一方に割據したる魏(曹丕の建設)と蜀(劉備の建設)と吳(孫權の建設)との稱、魏は我紀元八百八十年に興り九百二十五年に亡び、蜀は我紀元八百七十九年に興り九百二十三年に亡び、吳は我紀元八百八十二年に興り九百四十年に亡びたり。㊂我國と支那と天竺との稱。——いち[三國一](名) 我國及支那・天竺にも他に比するに足るものなきと、「—の富士山」。

(ざん-こく[慘酷](名) むごきと、殘忍、(慘刻)。

(さんごく-し[三國司](名) 古昔、阿波の國司一宮・伊勢の國司北畠・飛驒の國司姉小路の稱。

(さんご-じゆ[珊瑚珠](名) 珊瑚の骨骼の中軸にてつくりたる珠、種々の裝飾品に用ふ。

(さんご-じゆ[珊瑚樹](名) ㊀樹枝狀をなす珊瑚の骨骼、さんご。㊁【植】忍冬科に屬する植物、春夏の交、小形の白花を開く、果實は珊瑚の珠に似る。——な[珊瑚樹菜](名)【植】「たうぢさ」(唐萵苣)に同じ。

(さんご-せう（ーシヨウ）[珊瑚礁](名) 珊瑚の骨骼の堆積によりて、海中に形成する巨礁。

(さんご-たう（ートウ）[珊瑚島](名) 珊瑚礁の海面に現出して島嶼を形成せるもの、普通には圓周形をなし、一方に缺陷あり。島上には草木を生ず。

さんご-ちゆう[珊瑚蟲](名)【動】「さんご」(珊瑚)に同じ。

さんご-の-つき[三五の月](名) 陰暦十五夜の月。

さんこ-の-まつ[三鈷松](名) 松の一種、葉の三つづゝ叢出するもの。

さんご-の-ゆふべ（ーユウベ）[三五夕](名) 陰暦毎月十五日の夜。

さんご-の-よ[三五夜](名) 前條に同じ。

(さん-ごふ（ーゴウ）[三業](名)【佛】三つの業即ち身・口・意にいひ、又、貪・瞋・癡にもいふ。

(さん-ざ[參座](名) 衆會の席にまじはると。

(さん-ざ[散散](名、副) 「さんざん」に同じ。

(さん-さい[三才](名) ㊀天と地と人との稱。㊁天地間の萬物の稱。「—圖繪」。

(さん-さい[三災](名) 火と水と風との難。

(さん-さい[山妻](名) 自分の妻の謙稱。(荊妻)。

廿さん-さい[散齋](名) あらいみ。ちさいの對。

(さん-さい[山寨](名) 盜賊などのたちこもりる山家。

(さん-ざい[散在](名) ちらばりてあると。

(さん-ざい[散財](名) 財を散(チ)らすと、金錢を費すと。——ぶくろ[散財袋](名) 宴席などにて、祝儀を入れて與ふる紙袋。

(ざん-ざい[斬罪](名) 首を斬る刑罰。くびきり。「死罪」。

(さん-さう（ーソウ）[山莊](名) 山中にある別莊。

(さん-ざう（ーゾウ）[三藏](名)【佛】(い)釋迦牟尼の一代に於ける所說を錄したるものを三區分したる稱、經即ち定を具說したるものと、律即ち戒を具說したるものと、論即ち慧を具說したるものとをいふ、藏とは一切の文義又は數理をこゝにをさむる義なり。(ろ)天台宗にて、小乘の別稱。(は)佛・菩薩及聖賢の稱、その人を攝し法を攝するよりいふ。

(ざん-ざう（ーゾウ）[殘像](名) 或色を見詰めて後、瞑目するとき、尚ほ其色若しくは其補色の暫時見ゆるもの。

さん-さがり[三下](名) 三味線の調(ト)き方、三の絃の調の下さもの。

(さん-さく[散策](名) 此處彼處を散步すると。

(さんざ-さわぎ[散散騷](名) 酒宴などにて、歌ひつ舞ひつ騷(サワ)ぎ立つると。そこぬけさわぎ。

(**さんくわ-ちつそ**「酸化窒素」(名)【化】同容積の酸素と窒素との化合より成る無色の氣體、空氣に觸るれば、直に酸と化合して赤色の過酸化窒素となる、物體の燃燒を保持す。

(**さん-ぐわつ**「三月」(名) 年の第三に當たる月。やよひ。はなみづき。——**だいこん**「三月大根」(名)【植】大根の一種、秋の頃、種を蒔(マ)き、翌年の春の頃、其根を取りて食用に供す。〔鵝花蘿蔔〕。——**せつく**「三月節句」(名) 陰曆三月三日の節句、女子の祝日として雛祭をなす。〔重三、上巳〕。

(**さんくわ-どう**「參和銅」(名) 金銀貨などを鑄造するときに、溶解して參和する銅。

さんくわ-バリウム「酸化—」=Barium oxide (名)【化】硝酸「バリウム」を灼熱して生ずる白色の粉末、高溫度にありては、酸素と化合して過酸化「バリウム」となり、又、これを水に投ずれば、熱を發し烈(ハゲ)しく化合して水酸化「バリウム」となる、其質重きを以て、一に重土といふ。

(**さんくわ-ぶつ**「酸化物」(名)【化】物體の酸素と化合して生じたるもの。

さんくわ-マグネシウム「酸化—」=Magnesium oxide (名)【化】「マグネシウム」を燃(モ)やすか、若しくは其水酸化物又は炭酸鹽を熱すれば生ずる白色の粉末、僅かに熱すれば、水と化合して水酸化「マグネシウム」に變ず、醫藥に用ひられ、又、耐火の性あるが故に、坩堝(ルツボ)を製するに用ひらる、一に苦土といふ。

(**さん-くわん**「散官」(名) 職務無き官位。又、職務少なき官位。

(**さん-くわん**「參觀」(名) まゐりみること。

(**さん-くわん**「三管」(名) 笛・笙・篳篥(ヒチキ)の稱。

(**さん-くわん**「三澣」(名) 上澣・中澣・下澣の稱。

(**さん-くわん**「三關」(名) ㊀古昔、三つの重要なる關所、即ち越前國愛發(アラチ)關・美濃國不破關・伊勢國鈴鹿關の稱。又、愛發關を除き近江國逢阪關を加ふ。㊁耳と口と目との稱。

(**さんくわん-りやう**(ヨウ)「三管領」(名) 足利時代の管領の三家、即ち、斯波・細川・畠山の稱。

(**さん-くわんれい**「三管領」(名) 前條に同じ。

(**さん-ぐん**「三軍」(名) ㊀支那の周代にて、大諸侯の出だす定めなりし三萬七千五百人の軍隊の稱。㊁軍隊の前鋒・中堅・後拒又は左翼・中軍・右翼の稱。又、全體の軍隊の稱。

(**さん-け**「三家」(名) 德川時代に、將軍家の一門なる尾張の德川家(義直の系統、居城は名古屋)、紀伊の德川家(賴宣の系統、居城は和歌山)及常陸の德川家(賴房の系統、居城は水戸)の稱、大名の首座にして、將軍嗣子なければ、尾張若しくは紀伊より入りてこれを繼(ツ)ぐ定めにして、水戸は其特典なかりしかども、代々副將軍たり。

ザン-げ「懺悔」(名) ㊀(懺は梵語 Ksamaya の略にして悔過の義なり、更に悔の字を添へたるは、漢梵を並擧したるなり)過去の罪惡を悟(サト)りて後悔すること。㊁轉じて、懺悔話をなすこと。

(**さん-けい**「三形」(名) 土地の三つの形、即ち高・下・平の稱。

(**さん-けい**「山系」(名) 山脈の系統をなせるもの。

(**さん-けい**「三景」(名) 我國にて最も勝(スグ)れて景色のよき三箇處の稱、即ち、陸前國松島・安藝國嚴島・丹後國天橋立をいひ、又、紀伊國和歌浦・陸前國鹽釜・丹後國切戸の文珠をもいふ。

(**さん-けい**「參詣」(名) 神佛を拜(オガ)みに參(マヰ)ること。

(**さんけい-ぼく**「傘形木」(名) 外觀の傘(カラカサ)の形をなす樹木、松・びやくしん等の類。

(**さん-けう**(キヨウ)「三教」(名) ㊀三つの教、即ち儒・佛・道又は神・儒・佛の稱。㊁【佛】三時の教、即ち阿含(アゴン)・般若(ハンニヤ)・深密(ジンミツ)の稱。

(**さん-けう**(キヨウ)「棧橋」(名) さんばし。

(**さん-げき**「慘劇」(名) 悲慘なる演劇。又、悲慘なる人事。

(**さん-げだつ**「三解脫」(名)【佛】三つの解脫、即ち、定・無想・無願の稱。

(**ざん-けつ**「殘缺」(名) やぶれそこねてかくること。〔殘闕〕。

(**ざん-げつ**「殘月」(名) 夜明まで殘りたる月。ありあけ月。のこんの月。

ザンげ-ばなし「懺悔話」(名) 自分が既往に於ける罪惡のはなし。

(**さん-げふ**(ギヨウ)「蠶業」(名) 蠶(カヒコ)を飼(カ)ふ事業。

(**さん-げふ**(ギヨウ)「產業」(名) ㊀世渡の仕事。なりはひ。㊁生產の事業。——**くみあひ**「產業組合」(名) ㊀產業の發達又は便利を企圖するため組織したる團體の總稱。㊁【法】信用組合・販賣組合・購買組合・生產組合の總稱。其各條を見よ。

(**さん-けん**「散見」(名) あちらこちらに見ゆること。

(**さん-けん**「三權」(名)【法】國家の權力を、司法と立法と行政とに區分していふ語。——**ぶんりつ**「三權分立」(名) 立法・司法・行政の三權は、各獨立して互に相犯(ヲカ)すべからずといふこと、「フランス」國の碩儒「モンテスキュー」の唱道に創(ハジ)まる。

(**さん-げん**「三絃」(名) ㊀三つの絃器、即ち、琵琶・琴・和琴の稱。㊁三味線。

(**さん-げん**「三元」(名) 上元(正月十五日)・中元(七月十五日)・下元(十月十五日)の總稱。

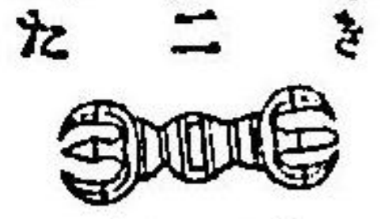
(**さん-げん**「三軒」(名) 芝居の數(カズ)の一種。

(**ざん-げん**「讒言」(名) 事實を附會又は虛構して、他人を惡樣(アシザマ)にいふこと、[illegible]こと。

(**さん-こ**「三鈷」(名) 獨鈷(トツコ)の類、さきの三叉(マタ)になりたるもの。

(**さん-こ**「三孤」(名) 支那の上代の第二位の高官なる少師・少傅・少保の稱。

(**さん-こ**「三顧」(名) (蜀の劉備が、三たび諸葛亮の廬を訪(ト)ひし故事に出づ)君主又は長上に、特殊の信任優遇を受くること。


〔さんこ〕

(**さん-ご**「珊瑚」(名)【動】一種の腔腸動物、海中に棲息す、群體をなし塊狀若しくは樹枝狀を成す、骨格は脆硬なる外皮と堅硬なる中軸とより成る、吾人の裝飾用に供するものは、其外皮を剝(ハ)ぎたる中軸なり。

(**さん-ご**「產後」(名) 子を生みたる後、分娩のあと。

(**さん-ご**「參伍」(名) 彼此をまじへくむこと。

(**さん-ご**「三五」(名) (三と五との乘積十五なるよりいふ)十五夜の異稱、「—の明月」。

(**さん-こう**「三后」(名) 太皇太后・皇太后・皇后を申す語。

(**さん-こう**「參候」(名) ㊀參(マヰ)り伺(ウカガ)ふこと、伺候。㊁御歌所の役名。

(**さん-こう**「三公」(名) ㊀太政大臣及左右大臣の稱、又、左右大臣及內大臣の稱。㊁支那の周にては大師・大傅・大保の稱、漢にては大司徒・大司馬・大司空の稱、唐にては大尉・司徒・司空の稱。

(**ざん-こう**「讒口」(名) ざんげん。ざん。「—に陷る」。

(**さんこう-きうけい**「三公九卿」(名) 支那の三公と九卿即ち少師・少傅・少保・冢宰・司徒・宗伯・司馬・司寇・司空とをいふ。轉じて、朝廷の高き官職。

(**さん-ごく**「三國」(名) ㊀三つの國。㊁後漢の末、天下を三分して各一方に割據したる魏(曹丕の建設)と蜀(劉備の建設)と吳(孫權の建設)との稱、魏は我紀元八百八十年に興り九百二十五年に亡び、蜀は我紀元八百七十九年に興り九百二十三年に亡び、吳は我紀元八百八十二年に興り九百四十年に亡びたり。㊂我國と支那と天竺との稱。——**いち**「三國一」(名) 我國及支那・天竺にも他に比するに足るもののなきこと、「—の富士山」。

(**さん-こく**「慘酷」(名) むごきこと、殘忍。〔慘刻〕。

(**さん-ごくし**「三國司」(名) 古昔、阿波の國司一宮・伊勢の國司北畠・飛驒の國司姉小路の稱。

(**さんご-じゆ**「珊瑚珠」(名) 珊瑚の骨骼の中軸にてつくりたる珠、種々の裝飾品に用ふ。

(**さんご-じゆ**「珊瑚樹」(名) ㊀樹枝狀をなす珊瑚の骨骼、きさんご。㊁【植】忍冬科に屬する植物、春夏の交、小形の白花を開く、果實は珊瑚の珠に似る。——**な**「珊瑚樹菜」(名)【植】「たうぢさ」(唐萵苣)に同じ。

(**さんご-せう**(シヨウ)「珊瑚礁」(名) 珊瑚の骨骼の堆積によりて、海中に形成する巨礁。

(**さんご-たう**(トウ)「珊瑚島」(名) 珊瑚礁の海面に現出して島嶼を形成せるもの、普通には圓周形をなし、一方に缺陷あり。島上には草木を生ず。

さんご-ちゆう「珊瑚蟲」(名)【動】「さんご」(珊瑚)に同じ。

さんご-の-つき「三五月」(名) 陰曆十五夜の月。

さんこ-の-まつ「三鈷松」(名) 松の一種、葉の三つづつ叢出するもの。

さんご-の-ゆふべ(ユウベ)「三五夕」(名) 陰曆每月十五日の夜。

さんご-の-よ「三五夜」(名) 前條に同じ。

(**さん-ごふ**(ゴウ)「三業」(名)【佛】三つの業即ち身・口・意にいひ、又、貪・瞋・痴にもいふ。

(**さん-ざ**「參座」(名) 集會の席にまじはること。

(**さん-ざん**「散散」(名、副)「さんざん」に同じ。

(**さん-さい**「三才」(名) ㊀天と地と人との稱。㊁天地間の萬物の稱、「—圖繪」。

(**さん-さい**「三災」(名) 火と水と風との難。

(**さん-さい**「山妻」(名) 自分の妻の謙稱。〔荊妻〕。

廿**さん-さい**「散齋」(名) あらいみ。ちさいの對。

(**さん-さい**「山寨」(名) 盜賊などのたちこもりゐる山家。

(**さん-ざい**「散在」(名) ちらばりてあること。

(**さん-ざい**「散財」(名) 財を散(チ)らすこと。金錢を費すこと。——**ぶくろ**「散財袋」(名) 宴席などにて、祝儀を入れて與ふる紙袋。

(**ざん-ざい**「斬罪」(名) 首を斬る刑罰。くびきり。〔死罪〕。

(**さん-さう**(ソウ)「山莊」(名) 山中にある別莊。

(**さん-ざう**(ゾウ)「三藏」(名)【佛】(い)釋迦牟尼の一代に於ける所說を錄したるものを三に區分したる稱、經即ち定を具說したるものと、律即ち戒を具說したるものと、論即ち慧を具說したるものとをいふ、藏とは一切の文義又は教理をこゝにをさむる義なり。(ろ)天台宗にて、小乘の別稱。(は)佛・菩薩及聲聞の稱、その人を攝し法を攝するよりいふ。

(**ざん-ざう**(ゾウ)「殘像」(名) 或色を見詰めて後、瞑目するとき、尚は其色若しくは其色の補色の暫時見ゆるもの。

さん-さがり「三下」(名) 三味線の彈(ヒ)き方、三の絲の調の下きもの。

(**さん-さく**「散策」(名) 此處彼處を散步すること。

(**さんざ-さわぎ**「散散騷」(名) 酒宴などにて、歌ひつ舞ひつ騷(サワ)ぎ立つること。そこぬけさわぎ。

（さんざ-し［山査子］（名）【植】薔薇科に屬する木、高さ四五尺、葉は卵形にして楔形をなす、雄蕊は通常二十個あり、果實は堅き骨質の心皮を有し、食用に供せらる。（山樝子）。

（さんさ-しぐれ［散散時雨］（名）小唄の名、仙臺地方に流行す。

（ざん-さつ［殘殺］（名）むごきころしかたをすると、理不盡にころすと。

（さんざっ-ぱら（名、副）さんざん。「―飲む」。

（さんさ-ぶし［散散節］（名）「さんさしぐれ」に同じ。

卄さん さふらふ［然候］「されば候ふ」の義にして、今の「さうでございます」に同じ。

（ざんざ-め-く（かきくけけ）（自、か四）さざめく。

（さん-ざん［散散］（名、副）㊀殘る隈なきさま又は極度に及ぶさまにいふ語。㊁いと見苦しき敗北のさまにいふ語。㊂あまた、たくさん、したゝか。

（さんさん-くど［三三九度］（名）婚禮の獻盃の禮、夫婦のたがひに、三度づゝ三度やりとりすると。

（さんさんくわ-ゆわう［三酸化硫黃］（名）【化】二酸化硫黃の酸化したるもの、二酸化硫黃と酸素との混合物をよく乾かして、微熱したる白金粉上を通過せしむればこれを得、冷却すれば透明なる針狀の結晶となる、空氣中にて濕氣を吸收して發烟し、水中に投ずれば音を發し溶解して硫酸を生ず。

（さんさん-ごご［三三五五］（名、副）あちらこちらに散在するさまにいふ語。

（さん-し［三思］（名）㊀審慮・決定・發動の稱。㊁幾度となく考ふると、つまびらかに思ふと。

（さん-し［三尸］（名）人の腹中に住み、庚申の夜、睡眠中天に昇りてその罪惡を告ぐるといふ蟲。

（さん-し［蠶絲］（名）蠶の繭（まゆ）より取りたる絲。

（さん-し［三子］（名）老子・莊子・列子の稱。

（さん-し［散史］（名）野にありて文筆に從事する人。

（さん-し［散士］（名）官に仕へずして野にある人。又、世に離れて山などに隱れたる人。

（さん-じ［三時］（名）㊀一時より三番目の時。やつさがり。㊁農事に必要なる三つの時、即ち、春耕すると、夏耘（クサギ）ると、秋收むるとの稱。㊂【佛】法相宗にて、分別を三時期に區別し、第一時の阿含（アゴン）・第二時の般若（ハンニヤ）・第三時の深密（ジンミツ）の稱。又、正法時・像法時・末法時の稱。

（さん-じ［山寺］（名）やまデラ。

（さん-じ［參事］（名）㊀或事務に參與する職名。㊁維新後、一時設置せられし地方官、即ち今の事務官。㊂必要ある場合に、臺灣の縣又は廳におかるゝ職員。

（さん-じ［蠶兒］（名）「かひこ」の稱。

（ざん-じ［暫時］（名、副）すこしのあひだ。しばらくのあひだ。しばし。

（さん-しう［三秋］（名）秋季の三個月。又、三個年。

――の-おもひ［三秋思］（名）（詩經に出づ）待ちわびて、暫時の間も長き月日の心地すると。

（さんじ-かい［三事戒］（名）【佛】身を謹み、言語を謹み、意を清淨にする戒。

（さん-しき［三識］（名）【佛】本性即ち眞識と、煩惱（ボンナウ）に覆（オホ）はれたる心識、即ち現識と、眼耳鼻舌身意の六識、即ち分別事識との稱。

（さん-しき［三色］（名）三種のいろ。又、三種のもの。

――すみれ［三色菫］（名）【植】堇菜科の草、地上莖を有し、葉は楕圓形にして鋸齒を具へ、大なる托葉あり、花は圓く大にして白・紫・黃等を呈す。

（さん-じき［棧敷］（名）「さじき」の訛。

（さんじ-くわい［參事會］（名）【法】府・縣・郡參事會。其各條を見よ。――ゐん［參事會員］（名）【法】府・縣・郡參事會を組織する會員。其各條を見よ。

（さんじ-くわん［參事官］（名）【法】各省（宮内省を除く）又は臺灣總督府にて、長官の命をうけて事務・立案等の事を掌る職名。――ちやう［參事官長］（名）臺灣總督府におかれたる職名、參事官を監督するもの。

（さんじ-ごふ［三時業］（名）【佛】順現業・順次業・順後業の稱。

（さんじ-すゐめい［山紫水明］（名）日に映じて、山の翠（ミドリ）は紫色に見え、澄（ス）み渡りたる水影もさやかに見ゆると。又、山水の風光清くして麗（ウルハ）しきと。

さんしち-にち［三七日］（名）二十一日間。又、二十一日目。

（さん-しつ［蠶室］（名）蠶（カヒコ）を養ふへや。かひこべや。

（さん-しつ［産室］（名）産をするへや。うぶや。（産所）。

（さん-しつ［散失］（名）ばらばらになりて、所在のわからぬと。散（チ）りうすると。（紛失）。

（さん-じつ［三日］（名）㊀正月の一日・二日・三日の稱。さんがにち。㊁徳川時代の三式日、即ち朔日・十五日・廿八日の稱。

さんし-の-れい［三枝禮］（名）鳩（ハト）は、親鳥のとまれる枝より三枝下の枝にとまるといふと。

（さんじ-はうていしき［三次方程式］（名）【數】一つの未知數を含み、其最高羃が三次なる項を有する方程式。

（さん-しふ［參集］（名）來り集まると。

（さん-しふ［纂輯］（名）文書をつゞりあつむると。

（さんじふいち-もじ［三十一文字］（名）和歌の稱。みそひともじ。

（さんじふ-かい［三十階］（名）古昔、位階の三十等、即ち、正從一位・正從二位・正從三位・正從四位上下・正從五位上下（以上勅授）・正從六位上下・正從七位上下（以上奏授）・正從八位上下・大少初位上下（以上判授）の稱。

（さんじふさん-しよ［三十三所］（名）京都の近傍なる三十三個の觀音の靈所、即ち、那智青岸渡寺・紀三井寺・粉河寺（以上紀伊）・施福寺（和泉）・藤井寺（河内）・壺坂寺・岡寺・長谷寺・南圓堂（以上大和）・新那智山・清水寺・六波羅密寺・六角堂・行願寺・善峯寺・三室戸寺・上醍醐寺（以上山城）・竹生島・長命寺・觀音寺・岩間寺・石山寺・三井寺（以上近江）・菩提寺（丹波）・總持寺・勝尾寺・中山寺（以上攝津）・清水寺・一乘寺・書寫山（以上播磨）・成相寺（丹後）・松尾寺（若狹）・華嚴寺（美濃）の稱、其數は觀音の三十三身にちなめるものといふ。

（さんじふさん-じん［三十三身］（名）【佛】觀音が衆生濟度のために、身を變ずといふ三十三體、即ち、佛・辟支佛・聲聞・梵王・帝釋・自在天・大自在天・大將軍・毘沙門・小王・長者・居士・宰官・婆羅門・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・婦女・童男・童女・諸天・龍・夜叉・乾達婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅迦・人・非人・執金剛・觀世音の稱。

（さんじふしち-そん［三十七尊］（名）【佛】密敎にて、大日如來・四佛・四波羅密・十六菩薩及八供・四攝の菩薩の總稱。

（さんじふに-さう［三十二相］（名）㊀【佛】應身佛の具したりきといふ三十二の相、即ち、足安平（足の底の肉滿ちて平かなると）・千輻輪（足の底の網紋が千の輻輪の如きと）・手指纖長・手足柔軟・手足縵網（指の中間に縵網の文あると）・足跟滿足・足趺高好・腨如鹿王（ふくらはぎの纖好なると）・手過膝・馬陰藏（陰部かくれて見えざると）・身縱廣（身體のたてよこ相副（カナ）ふと）・毛孔生青色（毛孔毎に一毛生じて其色青きと）・身毛上靡・身金色・身光面各一丈（身に光明を發すると各方面とも一丈）・皮膚細滑・七處平滿（兩足下・兩手・兩肩及項中の七處平かなると）・兩腋滿（左右の兩腋窩（ボク）からざると）・身如獅子（威儀嚴肅なると）・身端直・肩圓滿・四十齒・齒白齊密・四牙白淨・頰車如獅子（兩頰の肉滿ちて隆きと）・咽中津液得上味（津液の美味なると）・廣長舌・梵音深遠（音聲の和雅にして遠近に聞こゆると）・眼色如金精・眼睫如牛王・眉間白毫（眉間に白色の毫ありて光明を發つと）・頂肉髻成（頂肉高く起りて髻の如きと）の稱。㊁婦人の容貌・體姿に關するすべての相。

（さんじふばん-じん［三十番神］（名）天台宗及日蓮宗にて祀（マツ）る法華守護の三十個の神、其順を追ひて月の三十日に割り當てたるもの、即ち、熱田・諏訪・廣田・氣比・氣多・鹿島・北野・江文・貴船・伊勢・八幡・加茂・松尾・大原野・春日・平野・大比叡・小比叡・聖眞子・客人・八王子・稻荷・住吉・祇園・赤山・建部・多賀・兵主・苗鹿・吉備津の各神をいふ。

（さんじふろく-かせん［三十六歌仙］（名）一條天皇の時、藤原公任の撰びたる三十六の歌仙、即ち柿本人丸・紀貫之・凡河内躬恒・伊勢・大伴家持・山部赤人・在原業平・僧正遍昭・素性法師・紀友則・猿丸太夫・小野小町・藤原兼輔・藤原朝忠・藤原敦忠・藤原高光・源公忠・壬生忠岑・齋宮女御・大中臣頼基・藤原敏行・源重之・源宗于・源信明・藤原仲文・大中臣能宣・壬生忠見・平兼盛・藤原清正・源順・藤原興風・清原元輔・坂上是則・藤原元眞・左近・中務の稱。

（さんじふろく-ぶつ［三十六物］（名）【佛】外相（ゲサウ）の十二即ち髮・毛・爪・齒・眵・涙・涎・唾・屎・溺・垢・汗と、身器の十二即ち皮・膚・血・肉・筋・脉・骨・髓・肪・膏・腦・膜と、内含（ナイガン）の十二即ち肝・膽・腸・胃・脾・腎・心・肺・生藏・熟藏・赤痰・白痰との稱。

（さん-しや［三社］（名）伊勢神宮・石清水八幡・春日明神の稱。

（さん-しや［三赦］（名）三つの赦罪すべきもの、即ち幼弱（七歲以下）・老耄（八十歲以上）・惷愚の稱。

（さん-しや［三舍］（名）軍隊の三日路。――をさく［避三舍］（名）（左傳に出づ）へりくだる。おそれさく。辟易す。

（ざん-しや［讒者］（名）ざんげんする人。

（さん-しやう［三生］（名）【佛】前世・現世・後生の稱。

（さん-しやう［三障］（名）【佛】正道善心の三つのさはり、貪・瞋・痴等の如く六塵に對して起る皮煩惱（ボンナウ）と、斷常有無等の如く内心の分別より起る肉煩惱と、無明より起る心煩惱との稱にいひ、又、煩惱と業と報との稱にもいふ。

（さん-しやう［三殤］（名）未成年にて死したるものゝ三區別、即ち、長殤（十六歲より十九歲に至る）・中殤（十二歲より十五歲に至る）・下殤（八歲より十一歲に至る）の稱。

（さん-しやう［三省］（名）いくたびとなく我身をかへりみると。

（さん-じやう［慘狀］（名）いたましき樣子。むごたらしきさま。

（さん-じやう［參上］（名）まゐると。

（さん-じやう［三上］（名）（宋の歐陽修の言に出づ）文章の思想は、多く馬上・枕上・廁上に於て浮び出づるものといふと。「―の作文」。

（さん-じやう［山上］（名）山の上。――やまあり［山上有山］（名）出の字の謎（ナゾ）。

(さん-しやく[山鵲](名)【動】燕雀類中からす科に屬する鳥、鵲に似て頭上に白き冠毛あり、嘴は赤く、尾は白くして長し。

(さん-しやく[三尺](名) ㊀支那にて、法律の稱、上代には、法律を長さ三尺の竹簡に書く定めなりしよりいふ。㊁ながさ短きと。たけ低きと。「―の劍」。㊂「さんしやくおび」の略言。 ――おび[三尺帶](名) 帶の一種、おもに木綿を長さ三尺許に切りたるもの。しごき。 ――だな[三尺店](名) 小さき店。小さき家。 ――てぬぐひ[三尺手拭](名) 木綿を長さ三尺許に切りたる手拭。 ――のどうじ[三尺童子](名) たけひくきこども。年いまだ長ぜざる幼者。 ――ばうし[三尺帽子](名) 長さ三尺許に切りたる木綿にてする頬冠(ホホカムリ)。 ――はふ[三尺法](名) 武家時代に、法度の個條書の稱。

さん-シャミ[三沙彌](名)【佛】沙彌を年齢によりて區分したる三種、即ち、驅烏沙彌(七歳より十三歳まで)・應法沙彌(十四歳より十九歳まで)・名字沙彌(二十歳以上)をいふ。

(さん-しゆ[蠶種](名) 蠶(カヒコ)の種子、孵化して蠶となるもの。

(さん-しゆ[三壽](名) 上壽(百歳)・中壽(八十歳)・下壽(六十歳)の稱。

(ざん-しゆ[斬首](名) 首を斬ると、又、斬(キ)りたる首。

(さん-じゆう[三從](名) 昔時、凡て他に從ふを女子の道と定め、これを三様の地位によりて敎へたるもの、即ち、女の守るべき三つの道、家に在りては父に從ひ、嫁しては夫に從ひ、夫死しては子に從ふべしといふと。

(さん-じゆう-けい[三從兄](名) またいとこの年長じたるもの。

(さん-じゆう-けいてい[三從兄弟](名) またいとこ。

(さん-じゆう-てい[三從弟](名) またいとこの年少なきもの。

(さん-しゆつ[產出](名) 財物を出だすと。又、財物の出づると。「米の―額」。

(さん-じゆつ[算術](名)【數】記數又は計算等を講究する科學。(算法)。

さんしゆ-の-じんぎ[三種神器](名) 皇位の標識として、代々の至尊相承傳したまふ三つの御寶物、八咫(ヤタ)鏡・草薙(クサナギ)劒・八坂瓊(ヤサカニ)曲玉の稱。

(さん-しゆゆ[山茱萸](名)【植】山茱萸科に屬する木、花は黄色にして、暗色の總苞を有す、果實は藥用に供せられ、又、觀賞用として栽培せらる。

(さん-しゆん[三春](名) 春季三箇月。

(さん-じゆん[三旬](名) ㊀上旬・中旬・下旬の總稱。㊁三十日間の稱。㊂三十歳の稱。

(さん-しよ[山椒](名)【植】「さんせう」の訛。

(さん-しよ[產所](名) 子を產(ウ)む所。產室。

(さん-じよ[贊助](名) かたはらより助けて成立せしむると。たすくると。「―員」。(贊成)。

(ざん-しよ[殘暑](名) 秋なほ殘る暑氣。殘熱。

(さん-しよう[贊稱](名) 賞(ホ)めたゝふると。

(さん-じよう[三乘](名) ㊀【佛】聲聞乘・緣覺乘及菩薩乘の稱。㊁【數】同一の數を三べんかけ合はすると。 ――こん[三乘根](名)【數】或數を三乘して得たる數に對して、其或數の稱、即ち、8に對する2の如きこれなり。 ――ひ[三乘比](名)【數】相等しき三つの比の相乘比。

(さん-じよう[驂乘](名) 貴者に陪して車にのると、

(ざん-じよう[殘剩](名) のこり。あまり。

(さん-しよく[蠶食](名) 蠶(カヒコ)が桑の葉を食ふ如く、漸次に其端より敵地などを奪(ウバ)ひとると。

(さん-しよく[山色](名) 山のいろ。山のけしき。

(さん-しよく[產殖](名) 生まれ殖(フ)ゆると。又、產出して殖やすと。

(さん-じよく[產褥](名) 出產のとき產婦の居るねどこ。 ――ねつ[產褥熱](名) 出產後、其產婦の膣道に變化を生ずると。

(ざん-しよく[殘蝕](名) 漸次に端よりそこなひくひこむと。

(さんじよ-ゐん[贊助員](名) 會などに助勢をなす人。

(さん-しん[三神](名) ㊀三はしらの神。㊁萬物造化の天御中主神・高皇產靈神・神皇產靈神の稱。又、五穀守護の稚產靈・倉稻魂・保食神の稱。㊂和歌にて、住吉・玉津島・人丸の稱。

(さん-しん[三親](名) 三つの親しきもの、即ち、父子・夫婦・朋友の稱。

(さん-しん[三辰](名) 日・月・星の稱。

(さん-しん[三身](名)【佛】法身・報身及應身(現身)の稱。 ――ブツ[三身佛](名)【佛】法身佛・報身佛及應身佛(現身佛)の稱。

(さん-じん[山人](名) ㊀山などに隱れたる人の自稱。㊁雅號などに用ふる稱。

(さん-じん[散人](名) ㊀世事を離れたる人。官に仕へざる人。㊁雅號などに用ふる稱。

(ざん-しん[讒臣](名) 人を讒言する臣下。

(ざん-しん[斬新](名) 趣向の新奇なると。あたらしきと。

(さんしん-ざん[三神山](名) 支那にて、絕海の中央にありて仙人の住むといふ三つの山、即ち、蓬萊・方丈・瀛洲の稱。

(さん-しん-とう[三親等](名)【法】親等の一、其人と其人又は其人の配遇者より、三世を隔つるものとの關係、例へば或人と其曾祖父若しくは曾孫との關係、又は其配遇者の曾祖若しくは曾孫との關係の如きこれなり。

さん・す[產](自、さ變) 生出す。うまる。いづ。

さん・す[產](他、さ變) ㊀分娩す。うむ。㊁化育す。そだつ。むふす。「天萬物を―」。㊂產出す。生出す。いだす。

さん・す[算](他、さ變) かぞふ。はかる。つもる。

さん・す[贊](他、さ變) ㊀傍より力を添へて事を成さしむ。たすく。㊁傍より導きて事をなさしむ。みちびく。㊂意見に同意す。㊃稱述す。ほむ。たゝふ。(讃)。

さん・ず[散](自、さ變) ㊀ちらばる。ちる。㊁なくなる。うす。㊂はしる。

さん・ず[散](他、さ變) ㊀ちらす。㊁なくなす。うしなふ。㊂はしらす。

さん・ず[參](自、さ變) さんじやうす。まゐる。

ざん・ず[讒](他、さ變) ざんげんをなす。

(さん-すう[算數](名) ㊀數。㊁さんよう。計算。「―の理に委し」。㊂算術。數學。

(さん-すくみ[三竦](名) ㊀蛇はなめくぢをおそれ、なめくぢは蛙をおそれ、蛙は蛇をおそるといふと。㊁三方より互に相制して、各自由の行動をなし得ざると。

サンスクリット[Sanskrit](名) 「ボンご」(梵語)に同じ。

さん-すけ[三介](名) 三國守の代理をなしゝ介の稱、即ち、常陸介・上野介・上總介をいふ。

(さん-すけ[三助](名) 風呂屋の下男。

(さん-すゐ[爨炊](名) めしをかしぐと。めしたき。

(さん-すゐ[山水](名) 山と水との景色。又、其畫。

(さん-ずゐ[三水](名) 漢字の偏の名、即ち、波・汀等の字の左方にある「氵」の字の稱、字書にては水の部に屬す。

(さん-ずん[三寸](名) ながさの短きと。「口耳―」。 ――のした[三寸舌](名) 辯舌にいふ語。「―を揮ひ」。

(さん-せ[三施](名)【佛】財施・法施・無畏施の稱。

(さん-ぜ[三世](名) 過去・現在・未來の稱。又、前世・現世・來世の稱。「―の諸佛」。

(さん-せい[三牲](名) 三つのいけにへ、即ち、牛・羊・豕の稱。

(さん-せい[三聖](名) ㊀和歌の三人の歌聖、即ち柿本人丸・山部赤人・衣通姬の稱。㊁世界の三人の聖人、即ち、釋迦牟尼・孔子・耶蘇基督の稱。

(さん-せい[慘悽](名) いたましくかなしきさまにいふ語。

(さん-せい[贊成](名) ㊀たすけ成すと。㊁同意すると。

(さん-せい[三省](名) 「さんしやう」に同じ。

(さん-せい[參政](名) ㊀古昔、攝政の次に位し、政事に參與せし職名。㊁政事に參與すると。 ――けん[參政權](名)【法】人民が其國の政治に參與する權利、即ち、人民が國會議員を選擧し國會議員が政治を討議する等の權利これなり。

(さん-せい[酸性](名) 酸の性質。 ――えん[酸性鹽](名)【化】多鹽基酸の水素の一分が、金屬元素に置換したるもの。 ――さんくわぶつ[酸性酸化物](名)【化】水に溶解して酸となり、又は鹽基を中和して鹽を生ずる酸化物の稱にして、一に無水酸といふ、無水炭酸・無水亞硫酸の如きこれなり。 ――はんおう[酸性反應](名)【化】植物性青色素を赤色に變ぜしめ、且酸味あると。 ――せん[酸性泉](名)【地】遊離酸性を含む泉。

(ざん-せい[殘生](名) 永くもあらぬ命。殘りのいのち。「―を貪る」。(殘年、餘命)。

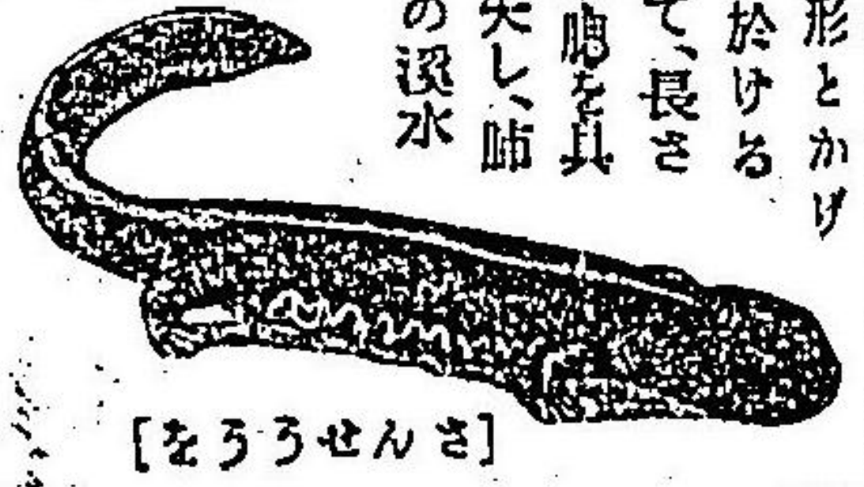
(ざん-せい[殘星](名) 夜明の空に殘りてある星。

(さん-せう[參照](名) 他のものにひきくらべてみると。てらしあはせ。(參考)。

(さん-せう[三焦](名) 漢方にて六腑の一、上中下に分れ、上なるは心臟の下にあり、中なるは胃の中にあり、下なるは膀胱の上にありて、水分の排泄をつかさどるといへり。

(さん-せう[三笑](名) 支那の慧遠法師廬山に隱居し、虎溪を渡らじと誓(チカ)ひしに、一日來訪せし陶淵明・陸修靜の二人を送り行き、話に興じて覺えず虎溪を渡り、虎の嘯(ウソ)く聲にて心づき、三人共に大笑したりといふ故事。

(さん-せう[山椒](名)【植】芸香科に屬する木、葉は複葉にして數箇の小葉より成り、莖は刺を有し、果實は裂果なり、果皮・樹皮及嫩葉は香料に供せられ、木材は種々の用に供せらる。(蜀椒、秦椒)。 ――うを[山椒魚](名)【動】兩棲類中有尾類に屬する動物、水中に棲息す、體形とかげに似て二對の肢を有す、現世に於ける兩棲類中の最大なるものにして、長さ四五尺に及ぶ、幼時は頸側に小鰓を具すれど、老成するに從ひ全く消失し、肺にて呼吸す、伊勢・伊賀其他中國の溪水に產す、一に大山椒魚ともいふ、箱根山椒魚と稱する一種は、指趾間に黑色の小爪生ず。はんざき。(鯢魚)。 ――みそ[山椒味噌](名) 山椒の果皮又は嫩葉(ワカバ)を擂(ス)り込みたる味噌。 ――も



[さんせううを]

［山椒藻］（名）【植】槐葉蘋科に屬する草、水上に浮生す、葉は三個づゝ輪生し、其中の一は廣楕圓形にて空氣中に出で、一は細長絲の如く水中に垂る。（槐葉蘋）。

（ざん-せう［殘照］（名）入日のかげ。いりひ。

（さん-せき［三跡］（名）三人の能書即ち小野道風・藤原佐理及藤原行成をいひ、又は、其中の小野道風を除き敦明親王を加へてもいふ。

（さん-せき［三夕］（名）秋の夕暮をよめる三つの有名なる歌の稱、即ち定家の「見渡せば、花も紅葉もなかりけり、浦の苫屋の秋の夕暮」と西行の「心なき身にも哀は知られけり、鴫立澤の秋の夕暮」と寂蓮の「さびしさは其色としもなかりけり、槇立山の秋の夕暮」との三歌。

（さん-せき［山脊］（名）【地】山嶺の最高點を連ねたる不規則の線。やまのせ。

（さんぜ-さう［三世相］（名）佛の因緣說にト筮の法を加へ、更に五行生剋の理を交（マジ）へて、人の生年・生月・人相などにより、過去・現世・未來に於ける因果・善惡などを說くこと。

‡さん-せちゑ［三節會］（名）古昔、正月の元日・七日及十六日の稱。

（ざん-せつ［殘雪］（名）消えのこりたるゆき。

（さん-せん［山川］（名）山と河と。

（さん-せん［山戰］（名）山中に於けるたゝかひ。

（さん-ぜん［潸然］（名、副）さめざめと涙を流し泣くさまにいふ語。

（さん-ぜん［燦然］（名、副）きらびやかなるさまにいふ語。

（さん-ぜん［產前］（名）出產の前、即ち臨月の頃。

（さん-ぜん［參禪］（名）禪道を學ぶこと。

（ざん-せん［殘蟬］（名）秋の深くなりたる頃の蟬。

（ざん-ぜん［嶄然］（名、副）他より拔（ヌ）けいでゝ、一段高きさまにいふ語。「—頭角を露はす」。

（ざん-ぜん［殘喘］（名）長くもあらぬ餘命。

（さんぜん-せかい［三千世界］（名）【佛】次條に同じ。「—に子を持った親の心はみな一つ」。

（さんぜん-だいせん-せかい［三千大千世界］（名）㊀【佛】大千世界を三千倍したるもの、一の須彌山・一の日月・一の四天下及上は六欲梵世天に至るを一世界とし、これを千個あつめたるものを小千世界といひ、小千世界の千倍を中千世界といひ、中千世界の千倍を大千世界といふ。㊁あらゆる世界。

さんせん-の-をしへ［三遷教］（名）（支那の孟子の母が、其子のために三たび居を遷したる故事より出づ、始め墓場の傍に住みたるとき、孟子の葬式の眞似して遊ぶを見、ために商家の近所に移りしに、孟子また商賈の眞似して遊ぶを見、更に學校の近所に移りければ、孟子は禮樂の眞似して遊びたりといふ）母が其子供に對して、善良にして周到なる教育を施すにいふ語。

（さん-そ［酸素＝Oxygen］（名）【化】無色無味無臭の氣體元素、地球上最多量に存在し、固形地殼の百分中四四乃至四八分を占め、水の重量九分の八を占め、空氣の容積五分の一を成す、弗素を除く外總ての元素と化合し、其際に熱及光を生ず、高壓を加へ溫度を甚しく下せば液體となる。

（ざん-そ［讒訴］（名）㊀長上に讒言すること。㊁かげぐち。そしり。

（さん-ソウ［山僧］（名）㊀山寺の僧。㊁延暦寺の僧。

（さん-そう［攢簇］（名）あつまりむらがること。又、あつめよすること。

（ざん-そう［讒奏］（名）天子に讒言すること。

（さん-そく［山足］（名）山のすそ。ふもと。

（さん-そく［慘惻］（名）むごたらしきこと。いたましきこと。

（さん-ぞく［三族］（名）㊀父と子と孫との稱。又、父母と兄弟と子孫との稱。㊁父の族と母の族と妻の族との稱。（三屬）。

（さん-ぞく［山賊］（名）山中などに住みて、賊をはたらく者。やまだち。（綠林）。

（ざん-ぞく［殘族］（名）殘りたるやから。（餘類）。

（ざん-ぞく［殘賊］（名）㊀そこなひやぶること。害毒をなすこと。㊁害毒をなす賊徒。㊂のこりの盜賊。

さんぞく-の-からす［三足烏］（名）太陽の中に住むといふ三本足の烏。

（さん-そん［三尊］（名）君・父・師の稱。

（さん-ぞん［三尊］（名）【佛】彌陀・觀音・勢至にいひ、又、釋迦・文殊・普賢にもいひ、又、藥師・日光・月光にもいふ。

（ざん-そん［殘樽］（名）酒の殘りてある樽。

（さんそん-いう［三損友］（名）（論語に出づ）利益にならぬ三種の友人、即ち、便辟なる人・善柔なる人・便佞なる人の稱。

（さん-たい［三台］（名）㊀太政大臣と左右大臣との稱。又、三公。㊁三台星の略言。

（さん-たい［三諦］（名）【佛】三つの眞理、即ち、空・假・中にもいひ、空・色・心にもいふ。

（さん-たい［三體］（名）㊀三個の形體。㊁書法にて、眞・行・草の稱。

（さん-だい［三代］（名）㊀三人の世を相續する間。㊁支那の上代にて夏・殷・周の三王朝の稱、後世これを聖王の治世といふ。

（さん-だい［三大］（名）【佛】眞如の體と相と用との稱、眞如は萬有を包むものなるが故に大といふ。

（さん-だい［參內］（名）內裏へ參上すること。（參朝）。

（さんだい-がさ［參內傘］（名）昔時、公卿などが、參內の節に、從者にさしかけさせし柄長き傘。

（さんだい-かくしき［三代格式］（名）次條に同じ。

（さんだい-きやくしき［三代格式］（名）弘仁格式・貞觀格式・延喜格式の稱。

（さん-だいけう［三大橋］（名）昔時、山崎・宇治・勢多の橋の稱。

（さんだい-しふ［三代集］（名）三種の歌集、古今集・後撰集・拾遺集の稱。

（さん-たいしゆ［三大守］（名）古昔、常陸守・上野守・上總守の稱。

（さん-たいせい［三台星］（名）支那にて、紫微星を守る三個の星の稱、これを三公の象とせり。

（さん-だいせつ［三大節］（名）三つの大祭日、即ち、四方拜・紀元節・天長節の稱。

〔さん-だいふ［三太夫］（名）華族又は富貴の家に傭はれて、家事又は會計などを取扱ふ人の稱。

（さん-だいブツ［三大佛］（名）大和國東大寺・河內國太平寺及近江國關寺の大佛の稱。

（さん-だいもん［三大門］（名）古昔、平安城外郭の三つの大門、即ち、羅生門・朱雀門・應天門の稱。

（さん-たう［山刀］（名）やまがたな。なた。

（さん-たう［算當］（名）算（カ）へて見當を付くること。つもり。

（さん-たう［三到］（名）讀書に必要とする、眼到ると口到ると心到るとの三事。

（さん-だう［三道］（名）㊀「さんかう」（三行）に同じ。㊁兵家にて、正兵・奇兵・伏兵の稱。

（さん-だう［算道］（名）數を計算する法。さんじゆつ。

（さん-だう［棧道］（名）懸崖（ガケ）などに設けたるかけはし。

（さん-だう［山道］（名）山中に通ずる道路。やまみち。海だうの對。

（さん-だう［參堂］（名）人の家を訪（ト）ふとの敬語。

（ざん-だう［殘黨］（名）うちもらされて殘れるやから。のこりとなりたるなかま。（餘黨）。

（ざん-だう［殘盜］（名）のこりの盜人。

さん-だか［產高］（名）產出の額。

ざん-だか［殘高］（名）出入又は貸借を差引して殘れる金高。

（さん-だつ［篡奪］（名）政權又は帝位などを奪（ウバ）ふこと。

（さん-たつそん［三達尊］（名）（孟子に出づ）朝廷にては爵を尊（タフト）び、鄉黨にては齒（ヨハヒ）を尊び、世を輔け民を長ずる事にては德を尊ぶこと。

〔さん-だはら［棧俵］（名）米俵の兩端にある藁（ワラ）の蓋（フタ）。さんだらぼふし。

さんだ-やき［三田燒］（名）攝津國有馬郡三田地方より產出する磁器の稱。

〔さんだら-ぼふし［棧俵法師］（名）「さんだはら」に同じ。

（さん-たん［山丹］（名）【植】「ひめゆり」の一名。

（さん-たん［三嘆］（名）あまたゝび歎（ナゲ）くこと。あまたゝび感心してほむること。

（さん-たん［讃嘆］（名）感じたゝふること。賞（ホ）めそやすこと。

（さん-たん［慘憺］（名）㊀なげかはしくいたましきさまにいふ語。㊁心をちゞに碎（クダ）きいたむること。おもひをなやますこと。「意匠—」。

（さん-だん［算段］（名）手段を講ずること。くめん。

（さん-だん［霰彈］（名）距離近き敵に發射する一種の彈丸、多數の細かき彈丸を填實したるものにして、霰（アラレ）の如く飛散す。

（さんだん-けうじゆ［三段教授］（名）【教】敎授上の三區別、普通これを直觀・總括・應用となす、敎ふる所のまゝを收受せしむることを直觀といひ、敎ふる所の要點又は概念を約結せしむることを總括といひ、此等の要點又は概念を他に通用せしむることを應用といふ。

（さんだん-すゐり［三段推理］（名）【論】次條に同じ。

（さんだん-ろんぱふ［三段論法］（名）【論】三つの命題を大前提・小前提・斷案の三段に排列する論理の方式、例へば「動物は生物なり、虎は動物なり、故に虎は生物なり」の如し。

（さん-ち［產地］（名）㊀其物品の產出する土地。㊁其人の出生地。

（さん-ち［參知］（名）あづかり知ること。たづさはること。

（さん-ち［三知］（名）（中庸に出づ）道を知るに、天分の高下に從ひて三區別あること、即ち、生れながらにして知ると學びて知ると困（クル）しみて知るとの稱。

（さん-ち［三智］（名）【佛】佛の智を三區分しての稱、眞如實體の皆空を解する智即ち眞智と、自家の無明を脫破して煩惱を斷する智即ち內智と、古今に通じ俗事に明かなる智即ち外智とをいふ。

（さん-ち［山地］（名）山多くして高き土地。

サンチーム［Centième］（名）「フランス」國の貨幣の名目、一「フラン」の百分の一。

サンチグラム［瓱＝Centigramme］（名）一瓦の百分の一。

サンチメートル［糎＝Centimetre］（名）一米突の百分の一、我國の三分三厘に等し。

（さん-ちや［山茶］（名）【植】「つばき」の一名。

（さん-ちやう［山頂］（名）山の最も高き所。山のいたゞき。（山巓）。

（さん-ちやく［參着］（名）㊀まゐり着くこと。到着すること。「官衙へ—」。㊁「さんちやくばらひ」の略言。

——ばらひ[參着拂](名)　外國爲替の一覽拂、卽ち、爲替手形到着したる時、手形所持人これを手形支拂人に呈示すれば、直ちに支拂はるゝもの。

(さん-ちゆう[山中](名)　山の中、山間。

(さん-ぢゆう[三重](名)　❶三つのかさなり。❷淨瑠璃の節、句を三段に切りて、結末を付くること。❸「床の—」。「疊—」。「送—」。

(さん-ぢよ[三女](名)　❶三人の女子。❷第三番目の女子。

(さん-ぢよ[删除](名)　けづりのぞくこと。

(さん-づ[三途](名)　【佛】(い)地獄道と畜生道と餓鬼道との總稱にして、三惡道又は三惡趣の別稱。(ろ)三途川の渡場、又、冥土の途。——がは[三途川](名)　【佛】人死にて冥途の國に赴(オモム)く途次にありといふ川、其川に緩急の三瀨あり、生前に於ける造業の如何によりて、渡るに別あり、川のほとりに翁(オキナ)と姥(ウバ)との二鬼ありて亡者の衣を奪(ウバ)ふといふ。みつせがは。——のかは[三途川](名)　前條に同じ。——のやみ[三途暗](名)　冥土に赴くこと。死ぬること。

さん-ついたち[三朔日](名)　德川時代に、正月元日・六月朔日及八朔の稱。

(さん-つう[酸痛](名)　うづき痛(イタ)むこと。

(さん-てい[算定](名)　計算して定むること。みつもること。——ふうたい[算定風袋](名)　その重量を豫(アラカジ)め算定しおく風袋、中に物品を入れてかけたる總重量の中より、其重量を差引したるものを物品の重量とす。

(さん-てい[删定](名)　惡しき箇所をけづりたゞすこと。

(さん-てう[參朝](名)　朝廷へまゐること。參內。

(さん-てう[三朝](名)　元旦の稱、其歲の朝又其月の朝にしてかねて其日の朝なるよりいふ。

(ざん-てき[殘敵](名)　うちもらされたる敵。

(ざん-てき[殘滴](名)　のこりのしづく。

(さん-てん[山巓](名)　山のいたゞき。(山頂)。

(さん-てん[三天](名)　【佛】摩利支天・辨財天及大黑天の稱。

(さん-でん[三傳](名)　春秋の左氏傳・公羊傳・穀梁傳の稱。

(さん-でん[參殿](名)　御殿に參上すること。

(ざん-てん[讒諂](名)　こびへつらふこと。

(さん-と[三都](名)　我國の三大都府、卽ち、京都・江戶(東京)・大阪の稱。

(ざん-と[殘徒](名)　のこりの徒黨。(餘黨)。

(さん-とう[三冬](名)　冬季三箇月の間。

(さん-とう[山統](名)　【地】多くの山系が、更に集まりて一帶をなすもの。やまのつゞき。

(さん-どう[贊同](名)　同意すること。

(ざん-とう[殘燈](名)　消え殘りたる燈火。又、夜明けまである燈火。

サンドウイッチ[Sandwich](名)　麵包(パン)の兩片中に、冷肉を挾みたるもの。

(さん-とう-しん[三等親](名)　五等親の條を見よ。

(さん-とく[三德](名)　❶智・仁・勇の稱。❷【佛】法身・般若・解脫の稱。❸一種の鼻紙袋、德川時代に流行せしもの。

(さん-どく[三毒](名)　【佛】人の性命を害する三つのもの、卽ち、貪・瞋・痴の稱。

(さん-どく[慘毒](名)　むごたらしき害。

(ざん-とく[竄匿](名)　のがれかくるゝこと。

(さん-どくくわい[三讀會](名)　【法】一議案に就き、一讀會二讀會を經(ヘ)て第三回目になす討議、たゞ議案の字句を修正するに止まるものとす。

さんど-ぐり[三度栗](名)　【植】しばぐりの類、一年に三度實を結ぶより名づく。

さんど-まめ[三度豆](名)　【植】「さやゑんどう」の一名。

サントメ[棧留](名)　❶もと「インド」國「サントメ」(São Thomé)より渡來せし織文あるなめしがは、今は我國にても製す。❷「サントメじま」の略言。——じま[棧留縞](名)　❶もと「インド」の「サントメ」より渡來せし縞織の絹物。❷縞物の縞柄、竪縞にして、赤又は淺黃のまじれるもの。——ばり[棧留針](名)　ぬひばりの一種、普通の木綿針より少し長し。

(さん-なん[三男](名)　❶三人の男子。❷第三番目の男子。「—某」。

(さん-にち[散日](名)　【佛】法會の結願の日。

(さん-にふ[算入](名)　計算中に加へ入るゝこと。入れて算用すること。

(ざん-にふ[竄入](名)　のがれてはひること。にげこむこと。

(さん-によう[算用](名)　「さんよう」の音便。

(さん-にょらい[三如來](名)　【佛】善光寺の阿彌陀如來と嵯峨清涼寺の釋迦如來と京都因幡堂の藥師如來との稱。

(ざん-にん[殘忍](名)　人情のなすに忍びざる無慈悲の所行をなすこと。むごきこと。

(ざん-にんき[殘任期](名)　任期中職を去りたる場合に、其任期の終(ヲ)はる迄の期間。

(さん-ぬる[去](形)　「さりぬる」の音便。

(さん-ねつ[散熱](名)　熱を放散すること。——はんおう[散熱反應](名)　【化】化合物の生成する際の散熱。——ぶんかい[散熱分解](名)　【化】化合物の分解する際の散熱。

(ざん-ねつ[殘熱](名)　のこりのあつさ。

(ざん-ねん[殘念](名)　❶心の殘ること。未練あること、❷無念に思ふこと、くやしく思ふこと。(殘恨)、

(ざん-ねん[殘年](名)　のこりのよはひ。(餘命)。

さんねん-ふさがり[三年塞](名)　陰陽家にて、大將軍といふ星の方向にあたるときは、三年の間何事をも爲すべからずといふこと。

さんねん-もの[三年物](名)　魚類などの生れてより三年經(ヘ)たるもの。

(さん-のう[山王](名)　「さんわう」の音便。

(さん-のけ[產氣](名)　お產のけはひ。(陣痛)。

さん-の-とあけ[產戶開](名)　分娩前に、子宮より出づる液。

さん-の-まる[三丸](名)　城郭の二丸を圍む外郭。

(さん-ば[產婆](名)　お產の介抱を營業とする婦人。

(さん-ば[散飯](名)　「さば」に同じ。

(さん-ば[三番](名)　「さんばそう」の略言。

(さん-ばい[山背](名)　山のうしろ。山後。

(さん-ばい[三盃](名)　「さんばいず」の略言。

(さん-ぱい[參拜](名)　參(マヰ)りて拜(ヲガ)むこと。さんけい。

(さん-ぱい[三拜](名)　三度拜跪すること、もと佛家の禮にして、身・口・心三業の歸敬を表するものなりといふ。(三禮)。

(さんばい-えき[酸敗液](名)　胃中に停滯して消化せざる飲食物の腐敗して生ずる酸味の液。

(さんばい-きうはい[三拜九拜](名)　❶三拜の禮と九拜の禮と。❷幾度となく拜禮すること。❸書簡文などに、極めて厚き敬意を表するに用ふる語。

さんばい-ず[三盃酢](名)　味醂又は酒と醬油と酢とを等分に盛(モ)りあはせたるもの、食物の調理に用ふ。

(ざんばい-れいかう[殘杯冷羹](名)　(殘りたる杯の酒とつめたくなりたるあつものとの義)　酒宴又は食事ののこりもの、轉じて、冷遇せらるゝときなどの粗末の飲食物。

(さん-ばう[三寶](名)　❶【佛】三つのたから、卽ち、佛・法・僧の稱にもいひ、又、耳・口・目の稱にもいふ。❷支那にて、土地・人民・政事の稱。

(さん-ばう[三忘](名)　勇士の戰場に赴(オモム)くにつきて忘るべき三つの個條、卽ち、命を受けて其家を忘れ、軍に臨みて其親を忘れ、枹を援(ト)りてこれを鼓すれば其身を忘るといふこと。

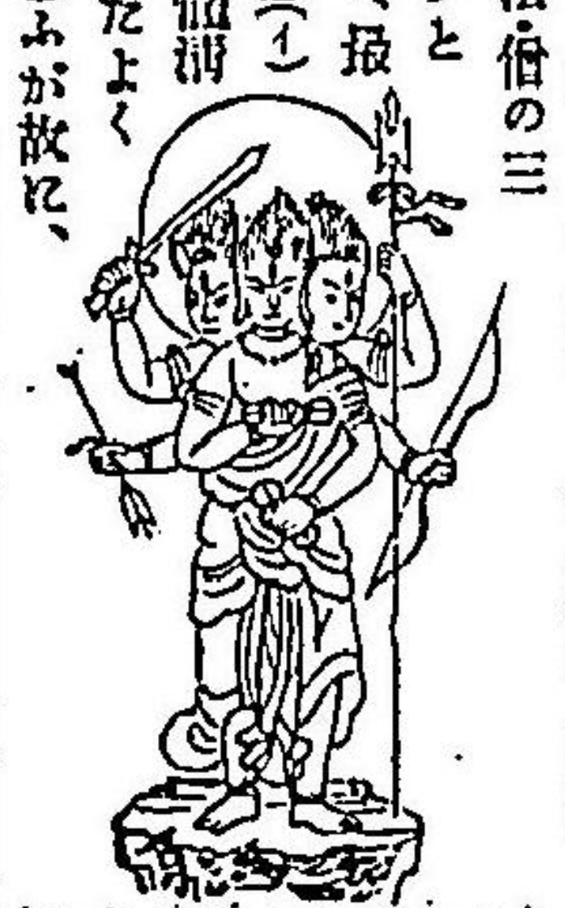
(さん-ばう[三方](名)　貴人に食物を奉(タテマツ)るとき又は儀式に物を供ふるときなどに用ふる臺、方形のをしきを檜の白木にて造り、三方に孔(アナ)ある臺を付けたるもの、古代にては食事する臺に用ひたりといふ。

(さん-ばう[訕謗](名)　そしること。(誹謗)。

(さん-ばう[山砲](名)　火砲の一種、山地にて使用するもの、砲身・砲架及車輪等を各別に馬背に載積して運搬するを得。

(ざん-ばう[殘亡](名)　❶ほろぶること。くつがへること。❷やぶれてにげ失(ウ)すること。

(ざん-ばう[讒謗](名)　惡しざまにいふこと。そしること。——りつ[讒謗律](名)　讒謗の罪をたゞす刑律。


［さんばうくわうじん］

(さんばう-くわうじん[三寶荒神](名)　❶【佛】佛・法・僧の三寶を守護すといふ神の名、最も不淨を忌(イ)み、火は其清淨にしてまたよく不淨を拂(ハラ)ふが故に、人家にありては竈を居處となすといふより、竈の神として祭る。❷左右に梶又は箱をつけ、三人乘らるゝやうにつくりたる鞍。

十さん-はかせ[算博士](名)　古昔、大學寮の職名、算術の敎授を掌りしもの。

(さん-ばく[三白](名)　正月の元三日に降る雪。

さん-ばし[棧橋](名)　岸より水上に突出したる木造の橋、人又は貨物を船に上下せしむる徑路とす。

さんば-そう[三番叟](名)　❶猿樂にて、翁の山に出づる老人、黑き面を着けて舞ふもの。❷芝居の幕明に行ふ舞、祝儀として、「おうさいやおうさいや」の歌を謠(ウタ)ひ鈴を振りて踊(ヲド)るもの。❸轉じて、物事のてはじめ。

(さん-ばつ[傘伐](名)　舊林を漸次伐採し、十年乃至十五年を經て森林を更新する法、初めは樹木の下部に十分に日光を受けしむるやう、鬱蒼たる上部を伐り、次に五六割の樹を殘し置きて採伐し、飛散したる種子より生じたる稚樹の生長して、十分日光を受け得るに至りて、舊林を皆伐す。

(さん-ぱつ[散髮](名)　❶ちらしがみ。❷ざんぎり。

(ざん-ばつ[斬伐](名)　❶伐(キ)ること。❷殺すこと。

(ざん-ぱつ[斬髮](名)　髮を刈(カ)ること。——や[斬髮屋](名)　髮を刈ることを業とする店。

(さん-ぱふ[算法](名)　計算の法。算術。

(さん-ぱん[三犯](名)　再度有罪の確定判決を受けたるものが、更に罪を犯(ヲカ)すこと。三度罪を犯すこと。

(ざん-ぱん[殘飯](名)　のこりのめし。

(さん-ぴ[三碑](名)　陸前國多賀城碑と上野國多胡碑と下野國那須國造碑との稱。

(さん-び[酸鼻](名)　すゝり泣きすること。又、かなしみ傷(イタ)むこと。

(さん-び[讚美](名)　褒(ホ)むること。たゝふること。

——**か**[讃美歌](名) 「キリスト」教にて、神又は救世主の德を讃美する歌。

(**さん-ぴつ**[三筆](名) 三人の能書家、即ち嵯峨天皇・僧空海・橘逸勢の稱。

(**さん-ぴつ**[算筆](名) 計算することと文字を書くこと。

さん-びやうし[三拍子](名) ㊀三つの樂器にて拍子をとること。㊁三とほりの條件。

(**さん-びやく**[三百](名) ㊀數多きをいふ語、「禮儀—威儀三千」。㊁「さんびやくだいげん」の略官。——**しよこう**[三百諸侯](名) 徳川時代に於ける諸大名の全體をいふ語。——**だいげん**[三百代官](名) 辯護士の資格なくして、他人の訴訟又は談判事の取扱をなすを業とするもの。こそかに辯護士の業を營むもの。

(**さん-ぴん**[三品](名) ㊀繪畫の三つの品位、即ち神品・妙品・能品の稱。㊁士の三つの品位、即ち道德に志すと功名に志すと富貴に志すとの稱。

さん-ピン[三一](名) ㊀雙六(スゴロク)などにて、二箇の釆(サイ)の目に、三と一との出づること。㊁(一年に、三兩一人扶持の給與を受くるもの、義) 昔時、祿の低き若黨などをいやしめていひし語。——**やっこ**[三一奴](名) 前條(二)に同じ。

(**さん-ぷ**[三部](名) 醫方にて、寸・關・尺の稱。

(**さん-ぷ**[三賦](名) 租・庸・調の稱。

(**さん-ぷ**[三府](名) 東京・京都・大阪の稱。

(**さん-ぷ**[參府](名) 徳川時代に、江戸に參觀せしこと。

(**さん-ぷ**[散布](名) 散りしくこと。散らししくこと。

(**さん-ぷ**[產婦](名) 子を孕(ハラ)みて、已に臨月となりたる婦人。子を產みて、なほ產蓐にある婦人。うぶめ。

(**さん-ぷ**[爨婦](名) めしたきをんな。

(**さん-ぷ**[蠶婦](名) 蠶(カヒコ)を飼(カ)ふ婦人。

(**ざん-ぶ**[讒誣](名) しこづること。讒謗。

(**ざん-ぶ**(名) ものを水中に投ずる時などの音。

(**さんぶいち-ぎん**[三分一銀](名) 「アルミニウム」と其亞鉛のおよそ三分一ほどの銀との合金。

(**さん-ぷう**[山風](名) ㊀山より吹き來る風。㊁【地】夜分山脈の空氣の溫度降るによりて、谿谷に向つて吹きおろす風。谷風。

さんぶ-きやう[三部經](名) 【佛】無量壽經・觀無量壽經・阿彌陀經、又は大日經・金剛經・蘇悉地經、又は仁王經・金光明經・法華經の稱。

(**さん-ぶぎやう**[三奉行](名) 徳川時代の三つの奉行、即ち、寺社奉行・勘定奉行・町奉行の稱。

(**さん-ふきよ**[三不去](名) 妻を去るべからざる三つの箇條、歸る所なきと、父母の喪をつとめしと、初め貧賤にして後富貴なるとをいふ。

(**さん-ぷく**[山腹](名) 山の頂(イタダキ)と麓(フモト)との間にある傾斜せる部分。やまのはら。

(**さん-ぷく**[三伏](名) ㊀夏至後の第三の庚(カノエ)の日即ち初伏と、其第四の庚の日即ち中伏と、立秋後の第一の庚の日即ち末伏との總稱。㊁小暑後の第一・第二及第三の庚の總稱。㊂夏の暑氣。「—の熱」。

(**さん-ぷく**[三復](名) 度々くりかへすこと。

(**さんぷく-つゐ**[三幅對](名) ㊀三つ相對したる掛物。㊁三つ相對したる物事。「馬乘—」。

(**さん-ふしやう**[三不祥](名) 三つのよからぬ事、即ち、幼にして長者に事(ツカ)へざると、貧にして貴に事へざると、不肖にして賢に事へざるとにいひ、又、賢者あるを知らざると、知りて用ひざると、用ひて任せざるとにもいひ、又、物事の十分なると即ち盈と、はこりたかぶると即ち矜と、人にさからふと即ち爭とにもいふ。

(**さんぶ-しんたう**[三部神道](名) 神道にて、唯一宗源・兩部神道・本迹緣起の稱。

(**さん-ぶつ**[產物](名) 其土地に產する物。

(**さん-ぶつ**[三物](名) 六德・六行・六藝の稱。

(**ざん-ぶつ**[殘物](名) のこりもの。あまりもの。

++**さん-ふったう**[三沸湯](名) 昔時の風藥。

(**さん-ブツど**[三佛土](名) 【佛】法身如來所依の土即ち法性土と、報身如來受用の土即ち受用土と、應身如來變化の土即ち變化土との稱。

さんぷ-の-やしなひ[三釜養](名) 釜は支那の上代にて、六斗四升の稱、曾子の語に出づ)家まづしきため、官に事へ祿を受けて親を養ふこと。

(**さんぶ-ほんしよ**[三部本書](名) 舊事紀(クジキ)・古事記・日本紀の稱。

(**さん-ぶん**[散文](名) 詩歌の如く平仄・韻脚若しくは句法等の制限ある詞章に對して、それ等の制限なき通常の文章の稱。

(**さん-ぺい**[傘柄](名) 【植】菌の柄、即ち傘狀をなしたるまつたけなどの下部の太き柄をいふ。

(**さん-ぺい**[散兵](名) ㊀軍隊を解きて兵士を散ずること。又、方々へちらばりたる兵士。㊁軍隊を密集せしめず、各個をして互に相當の距離を保たしむること。又、其兵士。——**がう**[散兵壕](名) 我兵器の使用を便にし、且敵彈に對して兵士を掩護するために構築する壕、兵士は壕內に潛(ヒソ)みて、敵を射擊し又は敵彈を避(サ)く。

(**ざん-ぺい**[殘兵](名) 戰鬪後に殘れる兵卒。

(**さんぺい-にまん**[三平二滿](名) (額・鼻・頤の平かにして兩頰の肥えて高き義) おたふく。おかめ。

(**さん-ぽ**[散步](名) そゞろに此處彼處を歩むこと。あそびあるくこと。(遊步)。

(**さん-ぼう**[參謀](名) 作戰計畫其他一切の軍務に與(アヅカ)る陸海軍の武官。——**くわん**[參謀官](名) 參謀の職にある武官。——**しやうかう**[參謀將校](名) 參謀の職にある將校。——**そうちやう**[參謀總長](名) 天皇に直隸して帷幄の軍務に參畫し、國防及用兵に關する一切の計畫を掌り、參謀本部を統轄し、參謀將校・陸軍大學校其他大使館又は公使館附武官等を統督する職名、陸軍大將又は中將を以てこれに充(ア)つ、國防及用兵に關する命令を立案し、親裁を經(ヘ)てこれを陸軍大臣に移す。——**ちやう**[參謀長](名) 將校又は參謀將校を統督し、參謀に關する事務を整理する職名、陸軍にては軍・東京防禦總督部・都督部及師團司令部・混成旅團司令部等に置き、海軍にては鎮守府及艦隊等に置く。——**ほんぶ**[參謀本部](名) 參謀總長が國防及用兵の事務を掌る所。

(**さん-ぼうらい**[三蓬萊](名) 三つのめでたき土地、即ち富士・熱田・熊野の稱。

(**さん-ぼく**[散木](名) 役に立たぬ材。

(**サンボテ**(名) 【植】「サボテン」の訛。

(**さん-ぼふし**[山法師](名) やまほふし。

(**さん-ぼん**[三盆](名) 上等の砂糖、雪糖の條を見よ。——**じろ**[三盆白](名) 前條に同じ。

さん-ま[小隼](名) 【動】喉鰾類中さんま科に屬する魚、體細長くして口尖(トガ)り、顎粗大にして圓滑なり、背部蒼黑色にして腹部銀白色なり、體長大いなるは一尺許、安房・上總の海に多く產す。(青串魚)。

(**さん-まい**[三枚](名) 魚を料理するに、頭を切り、更に脊骨を界に兩側の肉を割くこと。「—におろす」。

(**さん-まい**[散米](名) 惡魔を拂(ハラ)ふために散らす米。うちまき。

サンマイ[三昧](名) ㊀【佛】梵語Samadhiの略、平等又は正受若しくは正定と譯す、心思を一事に集注して動かず、心氣を靜寂にして亂さゞること。三摩提。「念佛—」。㊁ともすれば、其事に傾きやすきこと。「刃物—」。㊂はかば。葬所。——**だう**[三昧堂](名) 念佛三昧にて居る堂。又、坐禪する堂。

さんまい-がさね[三枚襲](名) 三枚の小袖を襲(カサ)ねて着ること。又、襲ねて着る三枚のそろひの小袖。

さんまい-かぶと[三枚兜](名) 鉢を鏝板三枚重ねてつくりたる兜。

さんまい-ぼ[三枚帆](名) 小舟の帆。

さん-また[三股](名) みつまた。またふり。(杈)。

サンマダイ[三摩提](名) 【佛】三昧(一)に同じ。

(**さん-まん**[散漫](名) とりとめのつかぬこと。ばっとしてしまりなきこと。

(**さん-み**[酸味](名) 酸き味。すみ。

(**さん-み**[三位](名) 「さんゐ」の音便。

(**さん-みつ**[三密](名) 【佛】身・口・意の秘密、手に印を結び行住坐臥の威儀を務むる身の秘密と、密(ヒソ)かに眞言を誦して文句を分了にして誤謬なからしむる口の秘密と、本尊を觀ずる意の秘密とにいひ、又、佛身に不思議の現象ある身の秘密と、佛の說法の遠近に聞え、持戒とも布施とも聞く人の心次第にてさまざまに聞ゆる不思議の口の秘密と、佛の思惟觀察する所の不思議の意の秘密とにもいふ。

(**さん-みやう**[三明](名) 【佛】未來の苦を明かにし、過去の苦を明かにし、よく正觀を作(ナ)して煩惱を斷ずること。

~**さんみやり-さわがせ**(名) 騷(サワ)がさずともよきに、近所を騷がすこと。

(**さん-みやく**[山脈](名) 山岳のつゞきたるもの。

サンミヤク-サンボダイ[三藐三菩提](名) 【佛】梵語、正偏覺又は正偏知と譯す、生死の夢を覺(サト)り一切の法を知ること。

(**さん-む**[山務](名) 寺の事務。

(**ざん-む**[殘務](名) 未だ處置のつかざる事務。殘りの事務。

(**ざん-む**[殘夢](名) 見のこしたる夢の跡。

(**さん-めん**[三面](名) ㊀三つの顏。「—六臂」。㊁三個の平面。又、第三の平面。㊂新聞紙の第三の紙面、通常社會の雜話又世俗の出來事を記載するところ。——**かく**[三面角](名) 【數】三つの平面の相會して成る立體角。——**きしや**[三面記者](名) 新聞社にて、社會の雜話又は世俗の出來事等の記載を擔當する記者。——**だね**[三面種](名) 新聞紙の三面の記事の種。つやだね。

(**さん-もん**[三門](名) ㊀中央と左右と三つの門の相連なりたるもの。㊁寺院の門の稱、寺院を法空・涅槃にたとへ、其所入の處たる三解脫門即ち空門・無相門・無作門を寺院の門にたとへいふ。㊂【佛】教・律・禪の稱。

(**さん-もん**[山門](名) ㊀寺院の樓門。㊁比叡山延曆寺の異稱。

(**さん-もん**[三文](名) 文錢三つの稱。轉じて、極めて價低きこと。「—の價もなし」。「—文士」。

(**さん-や**[山野](名) 山と野原と。「—を跋涉す」。

(**さん-やう**[山陽](名) ㊀山のみなみ。㊁山陽道の略言。——**だう**[山陽道](名) 八道の一、播磨・美作・備前・備中・備後・安藝・周防・長門の稱。

(**ざん-やう**[殘陽](名) いりひ。ゆふひ。

(**さん-やく**[山藥](名) やまのいもを藥用にする時の稱。(野山藥)。

(**さん-やく**[散藥](名) こぐすり。

(**さん-やく**[三役](名) 相撲(スマフ)にて、大關・關脇・小結の稱。

さんや-ざうり（ウーッ）[山谷草履](名) 昔時、流行せし草履、藺(ヰ)のからにてあみたるもの。

(さんや-ぶね[山谷船](名) 昔時、吉原がよひの遊客が、淺草山谷より乘りてかよひし小舟の稱。

(さん-よ[參與](名) ㊀其事に加はり與(アヅカ)ると。㊁明治の初年、太政官に置かれし高官。

(さん-よ[三餘](名) 讀書に最も適當なりといふ冬と夜と陰雨との稱、冬は歲の餘、夜は日の餘、陰雨は時の餘といふ。「—の讀書」。

(ざん-よ[殘餘](名) のこり。あまり。

(さん-よう[算用](名) 數を計算すると。けいさん。——すう志[算用數字](名) 洋算の數字即ち「アラビア」數字の稱、洋算に使用するよりいふ。

(さん-らい[三籟](名) 天籟・地籟・人籟の稱。

(さん-らく[參洛](名) みやこへのぼると。(上洛)。

(さん-らく[三樂](名) (孟子に出づ)父母共に存して兄弟故なきと、仰ぎて天に愧ぢず俯して人に慚ぢざると、天下の英才を得てこれを敎育するとの稱。

(さん-らん[蠶卵](名) 蠶(カヒコ)の卵。孵化して蠶となるもの。——志[蠶卵紙](名) 蠶の蛾をして卵を產みつけさせたる紙。たねがみ。

(さん-らん[散亂](名) ちりぢりになると。ちりみだるゝと。

(さん-らん[燦爛](名) きらびやかなると。うつくしくかゞやくと。

(さん-り[三里](名) 灸穴の名、膝頭の下の外側の凹(ボツ)き處。

さん-り[三利](名) (管子に出づ)一年の利は穀を種(ウ)ゑ、十年の利は樹を種ゑ、百年の利は德を種うるにありといふと。

(ざん-り[殘吏](名) むごきことを行ふ役人。(暴吏)。

(さん-りう[山流](名) 【地】傾斜急峻なる地表を流るゝ河。

(ざん-りう[殘留](名) のこりとゞまると。

(ざん-りう[殘溜](名) のこりのしづく。「酒の—」。

(ざん-りう[竄流](名) しまながし。

(さん-りく[三陸](名) 陸前・陸中・陸奧の三箇國。

(さん-りつ[慘慄](名) ぞつとして慄(フル)ふばかりにいたましきと。

(さん-りつ[簒立](名) 天子の位を奪ひてその好むものを立て、或は自ら即位すると。

(さん-りやく[三略](名) (七書の一、太公望の作なりといふ三略の書名に出づ)常に謀略設計若しくは方法などの據所となす書物。

(さん-りやく[刪略](名) 文句などを刪(ケヅ)りはぶくと。

(さん-りよう[山陵](名) みさゝぎ。

(さん-りよう[三稜](名) 稜(カド)の三つあると、又、其もの。——きん[三稜筋](名) 肩の角にある三稜の筋、收縮すれば手を上げしむ。——こう[三稜口](名) 「さんかくかう」(三角江)に同じ。——志う[三稜洲](名) 【地】川流の海に注ぐ所に、流水の運搬したる土砂が形成したる三角形の洲。「デルタ」。——志ん[三稜鍼](名) 三つの稜ある鍼(ハリ)、鍼術などに用ふるもの。——たい[三稜體](名) ひしがた。——はり[三稜玻璃](名) 【理】「プリズム」に同じ。

(さん-りん[山林](名) 山と林と。——きよく[山林局](名) 農商務大臣の統轄の下に屬し、森林原野に關する事務を取扱ふ農商務省の一局。

(さん-りん[三輪](名) ㊀淘宮術にて、生れたる年月日の干支の稱。又、其干支の相會すると。㊁【佛】身・口・意又は神通・記心・敎誡にいひ、又、地下にありて世界を維持すといふ金輪・水輪・風輪にもいふ。——くわい[三輪會](名) 淘宮術にて、其人の生れたる年月日の干支相會するときに行ふ祝宴。

(さん-るゐ[酸類](名) 酸性あるもの、總稱、硝酸・鹽酸・酒石酸の如きこれなり。

(さん-れい[山靈](名) 山の神。

(さん-れい[山嶺](名) 山のみね。

(さん-れう（ヨウーリ）[產料](名) 產婦の見舞に遣(ツカ)はす料理。

(ざん-れき[殘曆](名) ㊀歲暮れんとして僅に殘りたる日子。㊁年老いて殘り少なきよはひ。

(さん-れつ[參列](名) 他の人々に加はりて列席すると。

(さん-ろ[三漏](名) 【佛】慾と有と無明とに溺ずる煩惱。

(さん-ろ[山路](名) やまぢ。やまみち。

(さん-ろう[參籠](名) 祈念のため、神社又は佛閣に參(マヰ)りて數日夜籠(コモ)ると。

(さん-ろう[山樓](名) 山上にあるたかどの。

(さん-ろく[纂錄](名) あつめ志るすと。

(さん-ろく[山麓](名) 山の裾(スソ)。ふもと。——たい[山麓帶](名) 【植】高山植物の一帶、山麓に桔梗・萩などの生ずる所。

(さん-ろん[三論](名) 「さんろんしゆう」の略言。——志ゆう[三論宗](名) 【佛】八宗の一、中論・百論・十二門論を所依とするもの、我國にては推古天皇の卅三年に、高麗の僧侶慧灌渡來して弘めしに起る、されど未だ宗名はなかりしかど、其後東大寺の僧道慈といふもの入唐して其旨を極め、養老元年に歸朝して始めて宗名を立てたり。

(さん-わう（ウーヲ）[山王](名) 近江國日吉の神の稱。——志ち志や[山王七社](名) 山王の神社に附屬する二十一社を上中下の三つに區分しての稱、上なるを大宮・聖眞子・二宮・八王子・客人宮・十禪師・三宮といひ、中なるを牛尊・大行事・早尾・氣比・下八王子・王子宮・聖女といひ、下なるを惡王子・新行事・岩淵・朝宮・大宮殿・聖眞子殿・二宮殿といふ。

(さん-ゐ[簒位](名) 君王の位を簒(ウバ)ふと。

(さん-ゐ[散位](名) 職なくして位のみあると。

(さん-ゐ[山彙](名) 山岳の多く集まりたるもの。

(さん-ゐ[三畏](名) (論語に出づ)君子の畏(オソ)るべき三つの事、即ち、天命・大人及聖人の言の稱。

(さん-ゐ[三位](名) ㊀「くらゐ」の條を見よ。㊁三種の人格又は神體。——いつたい[三位一體](名) 「キリスト」敎にて、父即ち天帝と子即ち基督と聖靈との三位を一體の神なりといふと。——へんたい[三位變體](名) 「キリスト」敎にて、父即ち天帝と子即ち基督と聖靈とは、三位あるにあらず、惟一なる神の顯現の三樣の變態なりといふと。

(さん-ゑ[產穢](名) 子の生まれたる時、父母の身に掛かるといふけがれ、父のは七日間にして母のは三十五日間なりといふ。

(さん-ゑ[三會](名) 【佛】(い)彌勒出世して、龍華樹下に三會の說法をなすといふと。(ろ)最勝會・法華會・大乘會の稱。又、維摩會・最勝會・御齋會の稱。

(さん-ゑ[三慧](名) 【佛】文によりて義を知るを即ち聞慧と、義によりて思惟するを即ち思慧と、緣を亡じ寂を照すを即ち修慧との稱。

志　志゛

志 齒的摩擦音S即ち舌端を硬口蓋の前部に接して摩擦せしむる音と、母音「イ」との綴音。

志゛ 「志」の濁音、凡て「ち」と同じく、たゞ摩擦音に聲帶の振動の伴ふを異なりとす。

廿志[羊蹄菜](名) 【植】「ぎしぎし」の古名。

(志[師](名) ㊀いくさ。軍隊。「六軍之—」。㊁敎授をなす人。模範となる人。志ゝやう。せんせい。㊂傳道する人、說法する人。㊃技術を業とする人。「繪—」。「經—」。「醫—」。

(志[詩](名) ㊀支那の韻文、句は五字又は七字若しくは長句・短句にして、古詩・律・排律・絕句等の種類あり、古詩を除く外は、一定の平仄による、又、種類によりて規定を異にすれど、押韻の句多し。㊁人が自然の風景趣味又は人生の曲折波瀾、其他一切の事物に就きての感興・想像・經驗等を美妙なる形式によりて敘述したる詞章。平仄・韻脚乃至句法等の律格ありて吟詠に適したる詞章。詩歌。韻文。「新體—」。

(志[史](名) ㊀人生の變遷發達し行く過程の記錄されたるもの。㊁事を記するを掌る官。(史官)。

(志[志](名) ㊀事件の記錄。きろく。㊁紀傳體の歷史の一部分、天文・地理・禮樂・政刑等の事を記述す。「刑法—」。

(志[使](名) ㊀つかひ。志志や。㊁使命を奉じて、巡行し又は派遣せらるゝ官職。「按察—」。「觀察—」。

(志[司](名) ㊀つかさ。㊁古昔、省の被官にして寮の次に位せし官署。

(志[士](名) ㊀官位を有するもの。俸祿を受くるもの。㊁直接に兵卒の指揮を掌るもの。「—卒」。㊂さむらひ。武士。「—族」。㊃男子の通稱。「憂國之—」。㊄學術を研(ミガ)き又は道德を修(ヲサ)め若しくは鄙俗ならざる行爲職分あるもの。「—不レ可レ不二以弘毅一」。

(志[子](名) ㊀こ。こども。㊁たね。(種)。㊂たまご。(卵)。㊃五等爵の一、伯の下にして男の上なるもの。㊄道を傳ふる人の尊稱。「—曰」。

(志[死](名) ㊀みまかると。よみぬると。「—を賜る」。㊁死罪の略言。

(志[絲](名) ㊀いと。㊁一毛の十分の一。

(志[氏](名) 同一の血族が子孫相傳へて稱(トナ)ふる家の名。うぢ。「藤原—」。「源—」。

(志[觜](名) 二十八宿の一。

(志[市](名) ㊀いち。まち。㊁【法】郡の區域に屬せざる市街地にして、町村と共に地方團體の最下級たるもの、法律上權利を有し義務を負擔し、其公共事務は官の監督を受けて自らこれを處理す、機關は市會及市參事會なり。

(志[資](名) ㊀たから。財貨。㊁もと。もとで。㊂たすけ。たより。㊃たち。性質。「英邁の—」。

(志[雌](名) めす。めん。

(志[肢](名) 身體の分支、即ち、手足。

(志[詞](名) ㊀「ことば」(辭)に同じ。㊁宋時にて、塡詞の特稱。

(志[支](名) ㊀えだ。㊁わかれ。㊂さゝへ。つっかひ。

(志[祠](名) やしろ。ほこら。

(志[私](名) ㊀かたむち。偏頗。㊁よこしま。邪曲。㊂むさぼること。貪慾。㊃ないしようごと。秘密。「嫌レ探二人之—一」。㊄かくしだて。隱蔽。㊅自分一己若しくは自分の家族眷與。㊆自分一己若しくは自分の家族眷與の利益又は關係。

(志[試](名) こゝろみ。志けん。

(志[肆](名) ㊀はしいまゝ。きまゝ。㊁貨物をつらねて賣(ヒサ)ぐ處。みせ。

(志[子](代) 同輩に對する對稱の代名詞。きみ。

(志[四](數) 二を二つ合はせたる數。よ。よつ。

(志[秭](數) 數の名、兆の萬倍。

(—志[子](接尾) ㊀或語に添へて、男子の意を表はす語。「才—」。「蕩—」。「遊—」。㊁姓氏に添へて用ふる

敬意の語。「孟—」「若—」。㊂或語に添へて、年若きもの又は未だ獨立せざるものゝ意を表はす語。「貫公—」。㊃小さき器具などの稱呼に添へて用ふる語。「帽—」。

(—し)[氏](接尾) ㊀その父母の姓の下に添へて、嫁したる婦人の稱にいふ語。「細川忠興の妻明智—」。㊁同輩などの姓の下に添へて呼ぶ敬意の語。

し(助) 語氣を強むる助辭。「必—も」「時—も」「いつ—か」。

(じ[字](名) ㊀人類の思想を標記するに用ふる符號、これを綴(ツヅ)りて文章を成す、假名・漢字・洋字・梵字・諺文等種類多し。もじ。もんじ。㊁假名に對して、漢字の特稱。

(じ[時](名) ㊀とき。㊁[哲]時間の略言。「—空を超越す」。㊂時間の單位、一晝夜の二十四分の一。

(じ[辭](名) ㊀人類の思想を言語又は文字によりて標示せるもの。ことば。㊁詩歌。文章。㊂陳述。論說。

(じ[寺](名) テラ。佛堂。「增上—」「建長—」。

(じ[慈](名) あはれみ。いつくしみ。「父—子孝」。

じ[不](助動) 未來を推量して打消の意をあらはす助動詞。「あら—」。

(じ-あい[慈愛](名) いつくしみかはゆがること。

(じ-あい[自愛](名) ㊀自ら自身を大切にすること。㊁利己。主我。——しゆぎ[自愛主義=Egoism](名)【倫】「りこしゆぎ」(利己主義)に同じ。

じあえんそさん-カルシウム[次亞鹽素酸—=Calcium hypochloride](名)【化】一種の臭氣を有し、酸に逢へば容易に分解して鹽素を遊離するもの、漂白・防腐の効ありて、漂白粉の主成分たり。

し-あがり[仕上](名) できあがり。結果。

し-あが・る(らりるれ)[仕上](自、ら四) 仕事終(ヲ)はる。事成る。できあがる。

(し-あく[至惡](名) 極の不善。最大の罪惡。

(し-あく[四惡](名) (論語に出づ)敎へずして殺すを、戒めずして成るを視るを、令を慢(オロソカ)にして期を致すを、人に與ふるに出納の吝なるとの稱。

し-あ・ぐ(げぐぐれ)[仕上](他、か下二) 仕事を終(ヲ)ふ。事業を成す。なしとぐ。てかす。なしをふ。

(し-あく-しゆ[四惡趣](名)【佛】地獄・餓鬼・畜生・修羅の稱。

(し-あく-だう(ドー)[四惡道](名)【佛】前條に同じ。

し-あげ[仕上](名) ㊀しあぐること。なしとぐること。㊁しあげたる結果。又、しあげんとする最後。——かんな[仕上鉋](名) 材木をけづるとき、表面を奇麗にするため、最後に用ふる鉋、刃は普通のものより薄し。

し-あさって[明明後日](名) あさっての翌日。

し-あはせ(ワセ)[仕合](名) ㊀運命の吉凶。境遇の榮枯。「—が惡い」。㊁運命吉なること。境遇の榮ゆること。——もの[仕合者](名) 幸福なる人。

し-あひ(イア)[仕合](名) 互に爲し合ふこと。互に技(ワザ)を比(クラ)ぶること。特に、相闘(カク)ひて武術の技藝を比べあふこと。(試合。) ——にん[仕合人](名) 仕合をなす人。

し-あ・ふ(はひふへ)[爲合](他、は四) 互に行ふ。ともになす。

し-あ・ふ(へふふへよ)[爲敢](他、は下二) なしをふ。なしとぐ。しとぐ。

じ-あまり[字餘](名) 歌の句の一定の字數より多きこと。

し-あやま・つ(たちつてて)[爲過](他、た四) しそこなふ。やりそこなふ。

じ-あ-りん[次亞燐](名)【化】次條に同じ。

(じ-あ-りんさん[次亞燐酸](名)【化】十七度半にて熔融する結晶體、水に溶け易く、その水溶液を空氣中に置くときは、酸素を吸收して燐酸となる。

じありんさん-ソーダ[次亞硫酸曹達](名)【化】亞硫酸「ナトリウム」の溶液に硫黃華を加へ、これを熱して得る透明の結晶體、安定にしてよく水に溶解す、又、水に不溶解なる銀の化合物を溶解する性あり、寫眞術に使用せらる。

(し-あん[思案](名) ㊀おもひ。かんがへ。㊁あんばい。えんりよ。——がほ(ガオ)[思案顏](名) 思案に屈託する顏つき。——なげくび[思案投首](名) かんがへこみて首を傾(カタム)けて居ること。——ぶ[思案麩](名) 一種の料理、なまぶと豆腐とに山の芋をすりまぜて茹(ユ)でたるもの。——にあまる かんがへつかず。分別出來ず。——にくる 如何せんかと心の亂れまよふにいふ。——にしづむ 思案ばかりして居る。

(し-い[紫衣](名) 「しえ」に同じ。

(し-い[緇衣](名) 僧侶の着るすみぞめのころも。

(し-い[私意](名) ㊀自分の意見又は心中。㊁ひそかにたくらみ謀ること。㊂偏頗なる執心。又、自己の慾情。

(し-い[恣意](名) きまゝのこゝろ。

(じ-い[侍醫](名) ㊀古昔、典藥寮に屬し、宮中に伺候せし醫師。㊁侍醫局の職員、診候・醫藥・衛生に從事するもの。

(じ-い[字彙](名) じびき。字書。

(じ-い[時衣](名) 其節に着る衣。

(し-いう[師友](名) 師匠と友人と。

(し-いう[死友](名) 死を共にせんと誓(チカ)ふほどの友人。死すとも交をかふまじき友人。

(し-いう[詩友](名) 互に詩作の唱和をなし又は同じく詩會に連なる友人。

(し-いう[四友](名) ㊀文房の具にて、筆・墨・紙・硯

をいひ、㊁雪中の花にて、玉梅・臘梅・水仙・山茶をいふ。

(し-いう[市有](名) 市といふ自治體の所有。

(し-いう[私有](名) 一私人の所有。官有又は公有の對。

(じ-いう[事由](名) 事柄の理由。よし。

(じ-いう[自由](名) ㊀おもひのまゝ。心のまゝ。「—に使ふ」。㊁障碍又は强制なき活動の狀態。㊂束縛又は制限なき隨意の行爲。「民權の—」。㊃【法】法律の範圍內に於ける隨意の行爲。「移轉の—」「言論の—」「集會結社の—」「信書の—」。㊄きまゝ。わがまゝ。——いし[自由意志=Free will](名) ㊀隨意に思慮し決定する意志。又、衝動又は慾望等を抑壓し訓練する意志。㊁神學上にて、神は自然法若しくは道德法の範圍に於て、意志の相對的自由を有すといふに對して、神は世界の主にして、世界は神の意志によりて創設せられ、自然法といひ道德法といふも、神の意志に規定せらるゝものに外ならず、神の意志はこれ等に對して、絕對的自由を有し、奇蹟もまた可能なりといふこと、又、人類は罪惡に繫縛せられ、毫も自由の意志を有せずといふ說に對して、人類は聖靈のたすけなくとも、よく自己の力によりて自己の救濟をなし得べしといふこと。又、倫理學上にて、意志の活動は、一定の原因に規定せらるゝ必然的のものといふに對して、意志の活動は任意的にして必然的にあらず、自然界に於ける因果律の規定を受けざるものといふこと。——えいげふ(ギヨー)[自由營業](名) 特別に官許を得ずとも、自由に開始し得る營業。普通の營業は、多くこれに屬す。——かう(コー)[自由港=Free port](名) ㊀各國の船舶が自由に出入し得る港。開放してある港。㊁港の一部を限り、普通の市街と離隔して一區劃をなし、中に數多の倉庫又は貨物の運搬に便利なる諸般の設備ある處、關稅上治外法權の區域と看做され、貨物の出入自由にして稅關の檢束を受けず、無稅にて再輸出をなすを得、貨物の手入・加工・改裝・混和等隨意なるのみならず、輸入せし原料を以て貨物を製作することをも得、且貨物積留の時日に制限なきを普通とす。——かうどう(コー)[自由行動](名) 他の都合如何に關係なく、隨意になす行動。——きやうさう(キヨーソー)[自由競爭](名) 束縛又は制限を受けずして、各自隨意に他と物事の競爭をなすこと。——けい[自由刑](名)【法】犯罪者の身體の自由を剝奪する刑罰、分つて徒刑・流刑・懲役・禁獄・禁錮・拘留とす。——けっこん[自由結婚](名) ㊀男女が父母兄弟等の承諾を求めず、相互間の合意のみによりてなす結婚。㊁〰くっつき。できあひ。——けんきう[自由研究](名) 從來の說明又は立言に拘泥せずして、自由になす研究。——さう(ソー)[自由思想](名) 自由の範圍を擴張せんとする思想。自由の活動を主張する思想。——しゆぎ[自由主義](名) ㊀國民の自由を擴張せんとする政治上の主義。又、經濟上に於ける自由貿易又は自由放任の主義。㊁すべて物事を自由にせんとする主義。——たう(トー)[自由黨](名) ㊀明治十四年に板垣退助等の首唱して建設せし政黨、其始めは國民の政治上に於ける自由を擴張し、立憲政治を樹立するを以て政綱となしたり。㊁〰忌憚なく亂暴するものなどにいふ語。——とかう(コー)[自由渡航](名) 外國への渡航が、何等の束縛又は制限なく出來得ること。——はいげふ(ギヨー)[自由廢業](名) 藝妓又は娼妓が、抱主(カヽヘヌシ)と約束したるつとめの期限を終(ヲ)へず、所轄警察署に屆出をなして、隨意に廢業すること。——はうにん(ホー)[自由放任](名) ㊀各自の自由にまかせて、なるべく干涉せざること。㊁政府が產業に就て、國民各個の行動に放任して干涉せざること。個人放任主義。——ぼうえき[自由貿易=Free trade](名) 國家が國際の貿易に關して、個人の自由に放任し干涉政策を執らざること、其主義を分って二種とし、一を絕對的自由貿易といひ、他を制限的自由貿易といふ、前者は全然干涉を非とし、保護は却て不利益の產業を起し、人民に不利を蒙らしむるものとし、後者は多くの場合に於いて干涉を非とすれど、或は國防上必要なる場合、或は復讐的關稅を設けて外國の重稅を減殺する必要ある場合、或は輸入品の負擔を內國課稅と均一ならしめ、若しくは現時幼稚なれど將來發達の見込ある內國產業のため、外國品に輸入稅を課する必要ある場合等には保護を必要となす。保護貿易の對。——みん[自由民](名) 正當なる行爲によりて、自己の權利を自由に行使し得る人民。

(し-いか[詩歌](名) 「しか」の音便。「—管絃」。

(し-いかう(コー)[至孝](名) 「しかう」の音便。

(し-いぎやく[弑逆](名) 「しぎやく」の音便。

(じ-いきよく[侍醫局](名) 宮內省の一局、宮中の診候・醫藥・衛生等を掌る所。

(じ-いく[慈育](名) いつくしみそだつること。(字育)。

しいし[諡](名) 「しんし」に同じ。

(し-い-じ[四時](名) 「しじ」の音便。

(じ-い-しき[自意識=Self-consciousness](名)【心】內に省みて、自己は何を意識するかを知り又は自己自身を知る意識、卽ち、意識に判別力加はりて、自我の念これに伴ふときに起る狀態にして、此意識あるが故に、人は精神狀態に幾多の變化あるにも關らず、常に自己を同一なりと意識することを得。

しい・す（せしすするすれせよ）[弑](他、さ變) 臣として君を殺す、子として親を殺す、下として上を殺す。

しい・だ・す（さしすすせせ）[爲出](他、さ四) おこなひおこす。なしはじむ、しでかす。

しい・づ（でてづづるづれでよ）[爲出](他、た下二) しいだす。

しい・とく[至德](名) 「しとく」の音便。

しいら[鱰](名)【動】硬鰭類中しいら科に屬する魚、體は側扁にして長く、頭蓋骨に隆起あり、背部は淡蒼色にして腹部は銀白色なり、體長大なるは二尺許に達す、我國西南海に多く產す。「なす。

しい・る（らりるるれれ）[爲入](他、ら四) 深く心を寄せて

しい・れ[仕入](名) 商品を買ひいれおくこと。――もの[仕入物](名) ㊀仕入の品物。(客貨)。㊁特別のあつらへにあらぬ粗惡なる品物。

しい・れる（れれれるれるれれよ）[仕入](他、ら下二) 商品を買ひいれおく。

（しいん[子音＝Consonant](名)【文法】肺臟より出づる氣息口腔に於て其通路を妨げらるゝ時に生ずる音、其障碍の場處に應じて、喉音・顎音・齒音等に別かれ、聲帶振動の伴ふと否とによりて淸・濁の別を生じ、又、口腔內の障碍を破らずして鼻腔に出づれば鼻音となる、我國の假字にはこれを表すべき文字なし。

（しいん[市隱](名) 官に仕へ又は世に顯(アラ)はるゝことなく、市井の中に隱居すること。又、其人。

（しいん[私印](名) 一私人の行使する印形。――ぎぞう（ギーゾウ）[私印僞造](名)【法】他人の印形を僞造行使すること。――たうよう（タウーヨウ）[私印盜用](名)【法】他人の印形をぬすみ、これを使用すること。

（しう[州](名) ㊀くに。邦。「遠―」。「殿―」。㊁支那の歷代にて、二千五百戸の稱。轉じて、邑里。㊂支那の行政區劃の一、時代により異同あれど、多くは縣の上にあり。

（しう[洲](名) ㊀泥沙の水中に堆積して形成したる土地。す。㊁【地】地球上の大陸の稱。「亞細亞―」、「歐羅巴―」。

（しう[醜](名) ㊀きらふべきこと。はづべきこと。㊁みにくきこと。みめあしきこと。㊂嫌惡又は苦痛の情を催さしむる形象。㊃はぢ。恥辱。㊄けがれ。汚穢。㊅容貌のみにくき人。「―を娶る」。㊆行爲のにくむべき「人。

（しう[酬](名) むくゆること。むくい。

（しう[周](名) ㊀あまねきこと。ゆきとゞくこと。㊁めぐり。まはり。㊂【數】直線形の境界線の長さ、又、多角形にては、其各邊の總和の稱。㊃支那古代の有名なる王朝の名、我紀元前四百五十九年武王發の殷を亡ぼして卽位せしに始まり、紀元四百十二年赧王の秦に遷されしに終る。(周)。

（しう[秀](名) ㊀植物の莖頭に華實あつまりたる所。ほ。㊁うつくしきもの。又、すぐれたるもの。「南士の―」。㊂さつすゐ。精粹。「五行の―」。

（しう[臭](名) ㊀物體の分子揮發して、空中に浮游し、吾人の嗅神經を刺戟するによりて生ずる感覺。かをり。にほひ。「其―如蘭」。㊁あしきにほひ。くさみ。㊂あしき名聲。「―を千歲に遺す」。

（し-う[四有](名)【佛】生・死・色身・中陰の稱。

（し-う[絲雨](名) きりあめ。(細雨)。

（じ-う[時雨](名) ㊀其をり〳〵に降る雨。㊁初冬のあめ。しぐれ。

（じう[柔](名) しとやか。おだやか。やはらか。

（じ-う[滋雨](名) 程よく物をうるほす雨。

（しう-あく[醜惡](名) みにくきこと。はづべきこと。あしきこと。

（しう-い[秋意](名) 秋の風情。「又は醫術、

（しう-い[獸醫](名) 獸類の疾病を治療する醫者

（しう-いう[舟遊](名) ふなあそび。

（しう-いう[周遊](名) 方々をめぐりあそぶこと。

（しう-いつ[秀逸](名) すぐれ秀でゝあること。又、其もの。(秀拔、傑出)。

（しう-う[驟雨](名) にはかあめ。ゆふだち。

（しう-う[秋雨](名) 秋ふる雨。あきさめ。

（しう-うつ[愁鬱](名) うれひて氣のふさぐこと。

（しう-えき[周易](名) 伏羲の創せし卦に就きて、周の文王其綱說をなし、周公これを細說し、其後孔子これに說卦・文言を加へたるもの、今日に傳はる易は、これを祖述するもの。

（しう-えき[囚役](名) 囚人の苦役。

（しう-えき[就役](名) えだちにつくこと。又、苦役につくこと。

（しう-えき[收益](名) 利益ををさめとること、生產物をとりいるゝこと。――ざいさん[收益財產](名) 其ものより生ずる利益ををさめとることを目的とする財產。――ていげん[收益遞減＝Diminishing return](名)【經】土地の生產力卽ち其收益は、或程度までは、これに投ずる資本及勞力を增加するに從ひて增加すれど、其程度を過ぐれば、資本及勞力を增加する每に割合上次第に減ずるものなりといふこと。

（しう-えき[獸疫](名) 獸類の流行病。

（しう-か[秀歌](名) 秀逸なる和歌。

（しう-かいだう（ウーイドー）[秋海棠](名)【植】秋海棠科に屬する草、濕地に生ず、葉は斜狀心形をなし花は倒卵形をなす、花は淡紅色にして雄花は兩箇雌蕊を有し、雌花は三箇の翼ある三室の平滑なる子房を有す、觀賞用として栽培せらる、「斷腸花、燦眼花」。

（しう-かう（ウーコ）[舟行](名) ㊀ふねのはしること。㊁ふなあそび。

（しう-かう（ウーコ）[讎校](名) 他とてらしあはせて誤謬をたゞすこと。かうせい。「際すること。(修好)。

（しう-かう（ウーコ）[修交](名) よしみを修(サ)むること。交

（しう-かう（ウーコ）[醜行](名) みにくき所業。はづべき行爲。「じはり。

（しう-かう（ウーコ）[醜交](名) 男女間のみだらなるま

（しう-かう（ウーコ）[周航](名) ぐるりをめぐる航海。

（しう-かう（ウーコ）[秋郊](名) 秋の野邊。

（しう-がう（ウーゴ）[秋毫](名) (秋の頃にぬけかはりし獸類の毛のさきの義)極めて小さきもの又は少なき物事にたとへいふ語。

（しう-かう（ウーコ）[獸行](名) 人間にあるまじき所行。又、獸慾をほしいまゝにするみだりがはしき擧「動。

（しう-がく[收額](名) 收入の金額。

（しう-がく[就學](名) 師に就(ツ)きて學問を始むること、又、學校に入りて生徒となること。――じどう[就學兒童](名) 小學校の生徒となりてある兒童、「―の數」。

（しう-がく[修學](名) 學問ををさめならふこと。――しようしよ[修學證書](名) 或學術を修めたる證として、學校より其生徒に與ふる證明書。――りよかう（ウーコ）[修學旅行](名) 實地研究のために、學校敎員が生徒を引率してなす旅行。

（しう-かく[獸革](名) なめしがは。

（しう-かん[週間](名) 一週の間卽ち七日。(週)。

（しう-かん[週刊](名) 一週ごとの發刊。

（しう-かん[醜漢](名) 恥づべき行爲をなす男子。みにくき品行のをのこ。

（しう-かん[收監](名) 牢に入れて監禁すること、「ひ。――じやう[收監狀](名)【法】檢事より收監を命令せる文書。

（しう-き[臭氣](名) くさきにほひ。よからぬには

（しう-き[秋氣](名) ㊀秋の氣候。㊁秋の景色。

（しう-き[秋季](名) ㊀秋のすゑ。㊁秋のせつ。(秋期)。――くわうれいさい（ウークヮウ）[秋季皇靈祭](名) 秋の彼岸の中日に行はるゝ皇靈祭。

（しう-き[周忌](名) 「くわいき」(回忌)に同じ。

（しう-き[週期](名) ㊀ひとまはりの時期。㊁【理】振動體の一回の振動の時間、又、公轉體の一回の公轉の時間。

（しう-ぎ[修技](名) 技藝ををさめならふこと。

（しう-ぎ[祝儀](名) ㊀いはひの儀式。㊁はな。ひきでもの。

（しう-きく[蹴鞠](名) 鞠(マリ)を蹴(ケ)る遊技、古昔、貴紳の間に盛んに行はれたり。「み。

（しう-きよう[秋興](名) 秋のながめのおもしろ

（しう-きよく-せい[周極星](名)【天】地平線下に沒することなき星、卽ち恆見圈內にある星。

（しうき-りつ[週期律 Periodic law](名)【化】すべての元素を原子量の順に排列すれば、其間の化學的性質もまた一定の規律を示すといふ法則、「ニウトランド」が初めて注意したるものにして、「メンデレエフ」の研究によりて漸く確(タシカ)めらるゝに至り、元素の表を作成し規律に準ずる順に來るべき元素にして、當時未發見の「ガリウム」「スカンヂウム」「ゲルマニウム」等の發見の基となれり。「と。

（しう-きん[囚擒](名) とりこにすること、とらふる

（しう-きん[就擒](名) とりことなること。

（しう-きん[收金](名) 金錢をとりいるゝこと。

（しう-ぎん[秀吟](名) 秀逸なる詩歌。

（しう-く[愁苦](名) しんつう。うれひ。くるしみ。

（しう-く[秀句](名) ㊀秀逸なる句。㊁巧にいひかけたる言句、地口(ヂグチ)・口合(アヒクチ)の類をいふ。

（しう-くつ[醜窟](名) ㊀あしき所行又は耻づべき擧動をなす者どもの巢窟。㊁いろざと。いうり。「里」。

（しう-くわ[繡花](名) 花卉などの模樣をぬひとりにせるもの。(繡花)。

（しう-くわい[秋懷](名) 秋のおもひ。

（しう-くわい[周回](名) めぐり。まはり。「―十里」。

（しうくわ-カリウム[臭化―＝Potassium bromide](名)【化】水酸化「カリウム」の溶液に臭素を加へ、これを蒸發して、其殘留物を木炭の粉末と共に熱して得たる塊を水の溶液となし、更にこれを結晶せしめたるもの。

（しうくわ-ぎん[臭化銀＝Silver bromide](名)【化】通常溫度にて鹽化銀に臭化水素液を加へて得たるもの、低溫度にては白色なれど、徐々に熱すれば黃色となり、日光に觸るれば稍々暗色となるが故に、寫眞術に用ひらる。

（しう-くわく[收穫](名) 田畑の作物のとりいれ。とりいれ。しうなふ。――き[收穫器](名) 收穫に使用する農具、からさを・いなこぎ等これなり。――ていげん[收穫遞減](名) 「しうえきていげん」(收益遞減)に同じ。

（しうくわ-すゐそ[臭化水素＝Hydrogen bromide](名)【化】無色の氣體、大氣に觸るゝときは濕氣を引きて發煙す、水に溶解し易く、其水溶液は鹽酸に類す、金屬の水酸化物と作用して臭化物を作る。

（じう-くわつ[柔滑](名) 柔(ヤハ)らかく滑(ナメ)らかな「ること。

(しうくわ-へいげつ[羞花閉月](名)（其美貌にうたれて、花ためにはぢらひ月ためにかくるゝ義）婦人の容貌の極めて艶麗なるにいふ語。

(しう-ぐん[州郡](名) 州と郡と。又、地方。

(しう-けい[周經](名) まはり。周圍。

(しう-けい[秋景](名) 秋のけしき。

(しう-げう[秋曉](名) 秋のよあけ。

(しう-けつ[秀傑](名) 衆人にすぐれ出でたること。又、其人。

(しう-げつ[秋月](名) 秋の夜の月。

(しう-げふ[就業](名) 業務につくこと。わざにとりかゝること。

(しう-げふ[修業](名) 或學術又は技藝等ををさめならふこと。——しようしよ[修業證書](名) 學校より其生徒に與ふる修業の證明書。

(しう-げふ[醜業](名) みにくき生業。おもに賣淫などの稱。——ふ[醜業婦](名) ぢごく。賣淫婦。

(しう-げん[州縣](名) 州と縣と。轉じて、地方。

(しう-げん[祝言](名) ㊀祝賀の言。しうし。㊁よめいり。婚禮。

(しう-けん[獸圈](名) けものをいれおくをり。

(しう-ご[醜語](名) 耻づべきことば。聞きにくきことば。

(しう-ごく[收獄](名) 捕へて獄につなぐこと。

(しう-ごく[囚獄](名) ひとや。(牢獄、囹圄)。——し[囚獄司](名) 昔時、刑部省に屬せしつかさ、囚獄一切の事を取りしもの。

(しう-さい[周歲](名) まる一年。(周年)。

(しう-さい[秀才](名) ㊀才學の秀でたる人。㊁支那にて、科擧の試驗に及第せしものゝ稱。㊂文章得業生。

(しう-さう[秋霜](名) ㊀秋季にふる霜。㊁刑罰の明かなること又は權威のおごそかなることにいふ語。「―の威」。——れつじつ[秋霜烈日](名) 前條(二)に同じ。

(しう-ざう[修造](名) しうふく。つくろひ。

(しう-ざう[收藏](名) ㊀秋に耕作物をとりこみて、冬にこれをたくはへをさむること。㊁をさむること、とりこむこと。

(しう-さく[繡錯](名) 色絲をまぜいろどりて縫ふこと。ぬひ。

(しう-さふ[周匝](名) ㊀めぐり。まはり。㊁行きわたりてあること。あまねきこと。(浹洽)。

(しう-さん[蓚酸](名) [化]無色柱狀の結晶をなせる有毒の二鹽基酸、廣く植物の液汁に存す。鋸屑を苛性「アルカリ」に混じ、熱して蓚酸「アルカリ」を製し、これより更に蓚酸を製す、強硫酸と共に熱すれば、無水炭酸と酸化炭素とに分解す。

(しう-さん[聚散](名) あつまることちること。あつむることちらすこと。「友朋―」。

(しう-し[祝詞](名) 祝賀をのぶることば。賀詞。

(しう-し[秋思](名) 秋の頃のものおもひ。

(しう-し[修史](名) 歷史を編修すること。「―局」。

(しう-し[舟子](名) せんどう。ふなこ。

(しう-し[舟師](名) ふないくさ。

(しう-し[秀士](名) すぐれたる人。

(しう-し[收支](名) 收入と支出と。とりをさめとしはらひと。——つくのはず[收支不償] 收入より支出多くして、費用足らず。

(しう-じ[修辭](名) ㊀ことばを修(ヲサ)めとゝのへて、意義を明かならしむること。㊁ことばを潤色して、麗(ウル)はしく巧にすること。——がく[修辭學＝Rhetoric](名) 修辭に關する法則を研究する科學、美辭學。——はふ[修辭法](名) 前條に同じ。

(しう-しう[秋收](名) 秋の農事のとりいれ。

(しう-しう[啾啾](名、副) しくしく小聲にて泣くさまにいふ語。「鬼哭―」。「蟲語―」。

(しう-じつ[週日](名) 一週間の日即ち七日。

(しう-じつ[秋日](名) あきのひ。秋陽。

(しう-しつ[柔質](名) やはらかなるたち。

(しう-しふ[蒐輯](名) よせあつむること。あつめよすること。(蒐集)。

(しう-しふ[修習](名) をさめならふこと。

(しう-しふ[收拾](名) ㊀ひろひあつむること。㊁とゝのへ用意すること。

(しう-しや[秋社](名) ㊀秋の社日。㊁秋の鎭守の祭。

(しう-しや[舟車](名) ふねとくるまと。「―の利」。

(しう-しやう[愁傷](名) ㊀うれひかなしむこと。かなしみいたむこと。㊁いたはしきこと。きのどくなること。

(しう-しやう[周章](名) うろたへさわぐこと。あわつること。「―狼狽」。

(しう-しやう[繡匠](名) ぬひはくの職人。

(しう-しやう[醜狀](名) みにくきありさま。けがらはしきやうす。

(しう-じやく[柔弱](名) 精神の威力弱くして事に堪(タ)へざること。身體の精力弱くして勞に堪へざること。よわきこと。

(しう-しゆ[袖手](名) ㊀手を袖にさし入れてあること。ぬきそで。㊁自ら手を下して事を爲さざること。「―して傍觀す」。

(しう-しゆ[收取](名) をさめとること。

(しう-しゆ[收受](名) をさめうくること。うけをさめ。

(しう-じゆう[騶從](名) 車馬に隨行する馬丁。

(しう-しゆく[收縮](名) ㊀ちゞまること。ちゞむこと。㊁ちゞますること。

(しう-じゆつ[柔術](名) 空拳にて格鬪し、相手を投(ナ)げ倒し又は捕へ若しくは殺す等の技術。

(しう-じゆん[周諄](名) ㊀ねんごろ。㊁幾度もくりかへすこと。

(しう-じゆん[柔順](名) まとやか。おだやか。すなほ。

(しう-しよく[秋色](名) 秋の風景、秋のけしき。

(しう-しよく[修飾](名) つくろひ飾(カザ)ること。とゝのへつくろふこと。——ご[修飾語](名) [文法]語句の修飾に用ふる語、例へば「深き學問」「清き姿」等の語句にて、「深き」「清き」の如きこれなり。

(しう-しよく[就職](名) 職務に就くこと。つとめの地位に立つこと。——しき[就職式](名) 職務に就く儀式。「大統領の―」。

(しう-しん[脩身](名) 品行・威儀其他自分又は社會に對する擧動に就きて、惡を改め善に進むこと。身ををさめとゝのふること。(修身)。——がく[脩身學](名) 修身に關する事項を研究する學問。

(しう-じん[舟人](名) ふなびと。ふなこ。

(しう-じん[囚人](名) 牢獄に繫留せられたる犯罪人。めしうど。(囚徒)。

(しう-じん[狩人](名) かりうど。獵師。

(しう-しん[獸心](名) 獸類の如き心、即ち、殘酷又は遊惆若しくは不道理の心。

(しう-すゐ[酋帥](名) えびすのをさ。

(しう-すゐ[秋水](名) ㊀秋の頃の洪水。「―一至」。㊁秋の頃のよく澄(ス)み渡りたる水流。㊂くもりなき利刀にたとへいふ語。「腰間の―」。

(しう-せい[銹錆](名) さび。

(しう-せい[醜聲](名) 不名譽の風評、恥づべきうはさ。

(しう-せい[秋晴](名) 秋の快晴。

(しう-せい[秋聲](名) 秋の風おと。

(しう-せい[修整](名) とゝのへなほすこと。「寫眞の―」。

(しう-せい[修正](名) 宜しからざる箇處をなほして正しくすること。なほし。「地價―」。——あん[修正案](名) 原案を修正したる議案。——ちか[修正地價](名) 地價を修正したる場合に、其修正したる額の地價。

(しう-ぜい[收稅](名) 租稅を徵收すること。——り[收稅吏](名) 收稅の事を取扱ふ官吏。

(しう-せい[獸性](名) ㊀けもの、性質。㊁一の動物として人類の有する性質、即ち肉體上の性質。

(しう-せき[囚籍](名) 囚人の人別。

(しう-せつ[醜褻](名) みにくゝけがらはしきこと。

(しう-ぜつ[秀絕](名) 最もすぐれひいでたること。

(しう-ぜつ[愁絕](名) うれひに堪(タ)へざること。

(しう-せん[周旋](名) ㊀指揮に從ひて行動すること。㊁進退又は擧動。たちゐ。ふるまひ。「應對―」。㊂四方に奔走して、物事をとりはからふこと。㊃兩者の間に立ちて、とりもちをなすこと。

(しう-せん[鞦韆](名) 横木を架(カ)けたる綱を吊(ル)し下げ、これに縋(ス)りて體軀を宙にして運動する遊戲。ゆさはり。ぶらんこ。

(しう-ぜん[修繕](名) しうふく。つくろひ。

(しう-ぜん[愁然](名、副) 愁ふるさまにいふ語。

(しう-そ[臭素＝Bromine](名) [化]「ハロゲン」の一、揮發し易く、劇(ハゲ)しき臭氣を有する赤褐色の液體にして、元素の一なり。

(しう-そ[愁訴](名) 憫情をおかしてあはれみを乞(コ)ふこと。なげきうったふること。

(しう-ぞく[州俗](名) 一國の風俗。

(しう-ぞく[醜俗](名) みにくき風俗。

(しう-たい[醜體](名) みにくき體裁。(醜態)。

(しう-たう[周到](名) あまねく行きわたること。ぬけめなく行きとゞくこと。(綿密、緻密)。

(しう-だう[修道](名) をしへの道ををさむること。——ゐん[修道院](名) 天主教などの寺院の稱。

(しう-だう[柔道](名) 「じうじゆつ」(柔術)に同じ。

(しう-たん[愁歎](名) なげきかなしむこと。——ば[愁歎場](名) 芝居にて、愁歎の仕打ある場合の稱。

(しう-たん[獸炭](名) [化]「こったん」(骨炭)に同じ。

しう-ち[仕打](名) 仕方、擧動。

(しう-ち[周知](名) あまねく知ること。

(しう-ち[瘦地](名) 耕作に適せざる土地。やせち。

(しう-ち[羞恥](名) はぢらふこと。はづること。

(しう-ぢ[修治](名) とゝのへをさむること。つくろひをさむること。

(しう-ちく[脩竹](名) 丈(タケ)長く生長したる竹。「千年―」。

(しう-ちく[修築](名) をさめ築(ツキ)くこと。

(しう-ちやう[酋長](名) 蠻族の長。えびすのをさ。をさ。かしら。

(しう-ちやう[繡腸](名) 詩文の思想に富みてあること。

(しう-ちやう[愁腸](名) うれひのおもひ。

(しう-ちやう[繡帳](名) ぬひあるとばり。

(しう-ちやく[祝着](名) よろこび思ふこと。いはふこと。

(しう-ちゆう[袖中](名) そでのなか。

(しう-ぢよ[醜女](名) みにくき婦人。醜婦。

(しう-ちん[袖珍](名) 書物の小形にして、袖又は袂(タモト)の中に入れて携(タツサ)へらるゝほどなること。

——ぼん[袖珍本](名) 袖又は袂の中に入れて携へらるゝ程の小形の本。

(しう-てき)[讎敵](名) あだ。かたき。

(しう-てん)[周天](名) 星などの軌道を一周すること。

しう-と[舅](名) ㊀夫の父。㊁妻の父。(外舅)。

(しう-と)[囚徒](名) めしうど。(囚人)。

‡しう-とく[宿德](名) ㊀德を積むこと。德高きこと。又、其人。「—の世」。㊁德の外にあらはるゝこと。

(しう-とく)[修得](名) をさめて會得(ヱトク)すること。

しう-とめ[姑](名) ㊀夫の母。㊁妻の母。(外姑)。

しう-とを[舅](名) 「しうと」に同じ。

(しう-どん)[柔嫩](名) やはらかきこと。

(しう-なふ)（ウ-ノ）[收納](名) をさめいるゝこと、とりこむこと、をさむること。「金錢を—す」。

(しう-なん)[柔軟](名) しなやかなること、やはらかきこと。 ——そしき[柔軟組織](名) 動植物の或部分が、柔軟なる物質にて組織せられてあること。 ——たいさう（ウ-ソ）[柔軟體操](名) 兵式體操の一、徒手にて行ふもの。

(しう-にく)[獸肉](名) けだもの、にく。

(しう-にふ)（ウ-ニ）[收入](名) ㊀金錢又は物品ををさめいるゝこと。「—金」。㊁とりいるゝ額。みいり。 ——いんし[收入印紙](名) 訴狀・證券・登記願書其他賣藥等に、定規に從ひて貼用すべき印紙。 ——くわんり[收入官吏](名) 國庫の收入に關する金錢を取扱ふ官吏。 ——はうこく（ウ-ホ）[收入報告](名) 收入に關する報告。特に、收入官吏が月々收入の結果に就きてなす報告。 ——やく[收入役](名) 市町村及區にて、其收入を受領し其費用を支拂ふ事を取扱ひ、一切の會計事務をつかさどる吏員。

(しう-にん)[就任](名) 任務につくこと。

しう-ね・し（く、し、き、けれ）[執念](形、一) 「しふねし」に同じ。

(しう-ねん)[周年](名) 本年の或日より、來年の其日までの間。まる一年。

しう-の-くわ[時雨化](名) 君王の德澤のあまねきを、時雨にたとへいふ語。

(しう-は)[秋波](名) ㊀秋の頃の水又は波。㊁美人のすゞしき眼光。㊂よこめ。いろめ。 ——をよす[寄秋波] 婦人のいろめをつかひて、したふ心あることをしめすにいふ。

(しう-はい)[臭敗](名) くさみ生じてくさること。くされ。

(しう-はう)（ウ-ホ）[週報](名) 一週ごとになす其週間中の報告。

(しう-ばく)[就縛](名) 縛につくこと。とらはるゝこと。

(しう-ばつ)[秀拔](名) ひいでゝあること。ぬきんでゝあること。拔群。

(しう-ばん)[週番](名) 一週間ごとに交代して服する勤務、又、其勤務にあたりたるもの。 ——しくわん[週番士官](名) 一週間ごとに交代して、營内及隊中の特別の勤務に服する士官。

(しう-び)[愁眉](名) しかめたる眉。うれふる面持(オモモチ)。 ——をひらく[開愁眉] 心配とけて安心するにいふ。

(しう-び)[醜美](名) ㊀みにくきとうつくしきと。醜と美と。㊁醜女と美人と。

(しう-び)[秀美](名) すぐれてうつくしきこと。とりわけてよきこと。又、其もの。

(しう-ひ)[柔皮](名) なめしがは。

(しう-ひ)[獸皮](名) けだものゝかは。

(しう-ふ)[醜夫](名) かほかたちのみにくき男子。

(しう-ふ)[醜婦](名) かほかたちのみにくき女子。

(しう-ふう)[秋風](名) あきかぜ。

(しう-ふう)[醜風](名) ㊀よからぬうはさ。㊁みにくきならはせ。

(しう-ふく)[修復](名) 破損したる箇所などをつくろひて、もとの如くすること。つくろひなほすこと。

(しう-ぶん)[醜聞](名) よからぬ風聞。あしきうはさ。(臭聞)。

(しう-ぶん)[秋分](名) 二十四氣の一、即ち、秋の彼岸の中日にして、秋分點の當日、晝夜平分なり。 ——てん[秋分點](名) 【天】太陽が赤道の北より南に向て通過して赤道を直射する點、毎年九月廿二日頃なり。

(しう-へん)[周邊](名) めぐり。まはり。

(しう-ほ)[修補](名) つくろひおぎなふこと。(修理)。

(しう-ほ)[收捕](名) をさめとらふること。とらへこなぐこと。(囚捕)。

(しう-ぼく)[州牧](名) 地方の長官。又、大名。

(しう-ぼつ)[收沒](名) 罪人の財產又は犯罪の用に供したる物件を官にとりあぐること。

(しう-み)[臭味](名) ㊀くさき氣。くさみ。にほひ。㊁なかま。黨類。

(しう-みつ)[周密](名) 行きわたりてぬけめなきこと。てぬかりなく行きとゞきてあること

(しう-みん)[愁眠](名) うれひねむること。

(しう-みん)[就眠](名) ねむりにつくこと。 ——うんどう[就眠運動](名) 【植】萩の葉などが、晝間は開きてあれど、夜間に閉(ト)づること。

(しう-む)[愁夢](名) うれひのあまりに見る夢。又、氣にかゝる夢見。

(しう-む)[秋務](名) あきざり。

(しう-めい)[醜名](名) 恥辱となるべき名聞。(臭名)。

(しう-もん)[愁悶](名) うれひもだゆること。

(しう-や)[秋夜](名) 秋の夜。秋宵。

(しう-や)[秋野](名) 秋ののはら。秋郊。

(しう-やう)（ウ-ヨ）[秋陽](名) 秋の日光。

(しう-やう)（ウ-ヨ）[收養](名) とりあげて養ふこと。

(しう-やう)（ウ-ヨ）[修養](名) ㊀秩序をとゝのへ勢力をそだつること。をさめやしなふこと。㊁品性の鍛錬又は知識の啓發。

(しう-やく)[修譯](名) 一國の語を他國の語になほし譯すること。

(しう-よう)[醜容](名) みにくきみめかたち。

(しう-よう)[愁容](名) うれひの外にあらはれたるかほかたち。

(しう-よう)[收用](名) とりあげて使用すること。「土地—」。

(しう-よう)[收容](名) ㊀一定の場所にをさめいるゝこと。㊁後方部隊が敵の攻擊を防ぎ、前方部隊の退却を容易ならしむること。 ——ぢんち[收容陣地](名) 收容の目的を以て、一時占領する陣地。

(しう-よく)[獸慾](名) 色情の慾。

(しう-らん)[秋蘭](名) 【植】蘭の一名。

(しう-らん)[收攬](名) あつめ取ること。をさめ持つこと。「英雄の心を—す」。

(しう-らん)[周覽](名) あまねく見まはること。

(しう-り)[修理](名) つくろひなほすこと。をさめとゝのふること。

(しう-りう)[周流](名) ㊀めぐりて流るゝこと。㊁方々をめぐりありくこと。

シウリハンドク[周梨槃特](名) 【佛】梵語、おろかもの。

(しう-りやう)（リ-ヨウ）[秋涼](名) ㊀秋のすゞしさ。㊁陰曆八月の異稱。

(しう-りよ)[醜虜](名) えびす又はとりこをいやしめていふ語。

(しう-りよ)[囚虜](名) とらはれ。とりこ。

(しう-りん)[蹂躙](名) ㊀ふみあらすこと。ふみにじること。㊁雄威を振ひて通過すること。

(しう-るゐ)[醜類](名) ㊀たぐひ。ともがら。㊁しこの黨類。又、醜行あるものゝ仲間。

(しう-るゐ)[愁淚](名) うれひかなしみて泣く淚。

(しう-るゐ)[獸類](名) けものゝたぐひ。

(しう-れい)[秋冷](名) 秋の冷(ヒヤ)かなる氣候。

(しう-れい)[秀麗](名) すぐれて美麗なること。

(しう-れい)[秀靈](名) すぐれて靈妙なること。「山水—の氣」。

(しう-れん)[收斂](名) ㊀過重の租稅を徵收すること。㊁よせあつめ引きしむること。 ——ざい[收斂劑](名) 胃腸を收斂して下痢を止むる藥劑。又、皮膚を收斂して腫脹(ハレ)を止むる藥劑。

(しう-ろ)[修路](名) ほどながき路。遠路。

(しう-ろ)[袖爐](名) そでかうろ。又、てあぶり。

(しう-わい)[收賄](名) まひなひをとりこむこと。わいろを受くること。 ——ざい[收賄罪](名) 【法】公吏又は官吏が、其職務上に關して、他人の請託を受け其まひなひをとりいるゝこと。

(しう-ゐ)[周圍](名) ㊀めぐり。ぐるり。まはり。周邊。㊁外界。環境。

(しう-を)[羞惡](名) はぢていやがること。「—の心」。

(し-うん)[時運](名) 時節のまはりあはせ。

(し-うんてん)[試運轉](名) 汽車又は電車などの軌道落成して、試驗のために車輛を運轉すること、又、機械の据付(スヱツケ)などの落成して、試驗のためにこれを運轉すること。

(し-うんどう)[視運動](名) 【天】地球上より視(ミ)たる天體の運動、太陽は恆星に對しては運動せざれど、地球より觀れば、日々東より出で、西に入るが如く視ゆる類これなり。

(し-え)[紫衣](名) 紫色の僧衣、公許を得るにあらざれば、着用することを得ざるもの。

(し-えい)[自營](名) 自立して事業をいとなむこと。獨立して生計をいとなむこと。「—の道」。

(し-えう)（ウ-ヨ）[至要](名) きはめて大切なること。最も肝要なること。

(し-えき)[私益](名) 自分一己の利益。わたくしの利益。

(し-えき)[使役](名) もちふること。つかふこと。

(し-えき)[厮役](名) つかひをとこ。下男。

(し-えき)[時疫](名) はやりやまひ。流行病。

(し-えき)[滋液](名) ㊀しる。津液。㊁うまきしる。

(し-えつ)[私謁](名) ひそかに謁見すること。又、私事のために謁見すること。

(し-えふ)（ウ-ヨ）[子葉](名) 【植】植物がその種子より發生する際に生ずる葉。

(し-えふ)（ウ-ヨ）[枝葉](名) 本體より分出したるもの。主要ならざる部分。えだは。「—の論」。

(し-えん)[紙鳶](名) いかのぼり。たこ。

(し-えん)[肆筵](名) さかもり。

(し-えん)[詞筵](名) 詩歌又は俳諧などの會席。

し-おき[仕置](名) ㊀なしおくこと。しておくこと。㊁以前にありし事例。先例。㊂法に照らして處分すること。刑罰を科すること。 ——ば[仕置場](名) 刑罰を施行する場所。刑場。

し-お・く（か、き、く、け、け）[仕置](他、か四) 爲し置く。しておく。

し-おち[爲落](名) 爲すべき筈(ハズ)の事をなさゞりしこと。てぬけ。おちど。

し-おほ・す（ウ-オ）（せ、せ、す、する、すれ、せよ）[爲遂](他、さ下二) 爲し遂(ト)ぐ。爲しはたす。しとぐ。

⌒しおほせる[爲遂](他) 前條の訛。

（しれん）［子音］（名）「しいん」に同じ。

（しれん）［師恩］（名）師匠の恩。

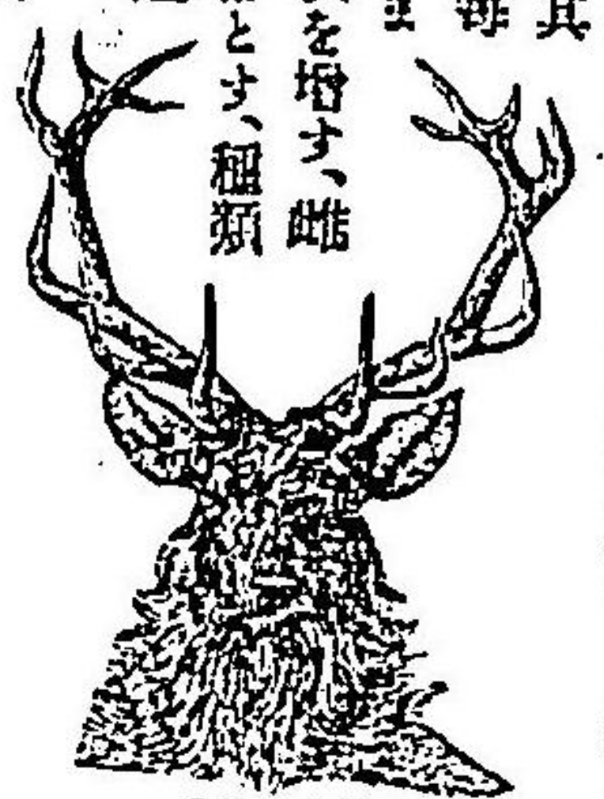
（しれん）［四恩］（名）【佛】天地・國王・父母・衆生の恩の稱。

（しれん）［私恩］（名）特別に其人にのみ施（ホド）コす恩、又、公正ならぬ心より施す恩。——をうる［賣私恩］自分を有難がるやうに、自分の地位を利用して恩をかくるにいふ。

（しれん）［慈恩］（名）いつくしみのめぐみ。なさけ。

（しれん）［字音］（名）漢字の音。

しか［鹿］（名）【動】偶蹄類中麋鹿科に屬する獸、森林に棲息す、四肢細長にして性質溫順なり、雄には有枝の角生ず、其角固形にして毎年交脱し、或歐まては年毎に一枝を増す、雌には角なきを常とす、種類多し、我國普通に見る所のものは、大形の種類にして、毛色は夏季は淡褐色にして斑點あれど、冬季は一般に灰褐色となる。かのしゝ。か。かせぎ。——をあらそふ［爭鹿］政權又は位地などを獲（エ）んと競爭す。——をおふ［逐鹿］前條に同じ。又、鹿をおひかく。——をおふものはやまをみず［逐鹿者不見山］或一事物を獲んとするものが、これに熱中して、他方面の事柄に氣附かざるにいふ。



［しか］

（しか）［私家］（名）㊀自分の家。㊁一私人の家。

（しか）［賜暇］（名）休暇を許さるゝこと。

（しか）［紙價］（名）紙のあたひ。「洛陽の—を貴く」。

（しか）［市價］（名）財貨と貨幣との交換比例、市場にて賣買する相場。

（しか）［詩歌］（名）㊀詩とうたと。㊁詩(二)に同じ。

しか［爾然］（副）其やうに。其ごとく。「みわ山を、—もかくすか、春霞」。——いふ［云爾］文章の末尾に用ひて、上述の如くいふの意を表はす。

（しが）［齒牙］（名）㊀齒と牙と。は。㊁口の端。——にかくるにたらず［不足懸齒牙］とりあげていふ程のあたひなし。

（しか）［時下］（名）このごろ。このせつ。

（しか）［時價］（名）其時の相場。(市價)。

（しか）［自家］（名）㊀おのれ。じしん。じぶん。㊁自我。

（しが）［自我］（名）㊀【心】一切の心的狀態中、最も主觀的に感ぜらるゝもの。㊁【哲】天地萬物に對して存在する一個の人格。

シガー［Cigar］（名）葉卷煙草。

（しかい）［支解］（名）㊀人體の手足などをきりはなすこと。㊁人死にて、形體はなれ〲となり、もとの物質に歸すること。

（しかい）［尸解］（名）道家にて、人死にて其身體顏色の生時に異ならざること。轉じて、神仙の死にいふ語。

（しかい）［使价］（名）つかひ。使者。

（しかい）［四海］（名）㊀四方の海。㊁世界。天下。——けいてい［四海兄弟］天下の人はすべて我と同樣の人類にして、親疎恩怨のわけへだてなきものといふこと。又、自分の心の直かりせば、渡る世間に隔人なしといふこと。

（しがい）［死骸］（名）なきがら。かばね。しかばね。(死體)。

（しがい）［市街］（名）㊀人家軒を比(ナラ)べて繁盛なる土地の通行路。ちまた。㊁人家軒を比べたる土地。まち。——せん［市街戰］（名）市街の中に於ける戰爭、多くは白兵戰にして慘狀を呈するもの。——たくち［市街宅地］（名）有租地の一、市若しくは繁盛なる町村の宅地。

（しかい）［字解］（名）㊀字の意義の說明。㊁字引。

（しがい）［自害］（名）自ら死ぬること。自殺。

しかいなみ［四海波］（名）四海靜謐の祝意を述べたる歌、祝賀の席にて謠(ウタ)ふもの。

（しかう）［思考］（名）㊀思ひ考ふること。かんがへ。しあん。㊁【心】知覺によりて意識せられたる材料の上に活動して、これが反覆又は分離若しくは結合等をなす意識の作用。

（しかう）［私考］（名）自分一己のかんがへ又は考慮。

（しかう）［私交］（名）うち〲の交際。わたくしのまじはり。

（しかう）［嗜好］（名）このみたしなむこと。すくこと。このみ。

（しかう）［施行］（名）實地にほどこし行ふこと。

（しかう）［私行］（名）㊀しのびあるき。潛行。㊁ない〲の行爲。私人としての行爲。わたくしのおこなひ。「人の—をあばく」。

（しかう）［志向］（名）こゝろのおもむき向ふ所。こゝろざし。

（しかう）［死交］（名）死すとも盟(チカ)ひをかへざるほどの極めて親しきまじはり。

（しかう）［志行］（名）こゝろざしとおこなひと。

（しかう）［恣行］（名）ほしいまゝなるおこなひ。

（しかう）［詩稿］（名）詩のしたがき。

（しかう）［至幸］（名）此上もなきさいはひ。

（しかう）［至巧］（名）極めてたくみなること。

（しかう）［至孝］（名）至極の孝行。

（しかう）［四更］（名）夜の二時頃。うしみつどき。

（しかう）［四行］（名）孝・悌・忠・信の稱。

（しかう）［試毫］（名）かきぞめ。試筆。

（しがう）［諡號］（名）おくりな。

（しがう）［至剛］（名）極めてすこやかにして、屈せず撓(タ)まざること、「至大—」。

（しかう）［侍講］（名）㊀君側にありて書を講ずること。又、其人。(侍讀)。㊁東宮職の職員、侍讀進講して、東宮の御學德を涵養するを掌るもの。

（しかう）［事項］（名）ことがら。箇條。

（しかう）［時效］（名）【法】時の經過によりて、權利を取得し又は權利の消滅すること、其進行中に一定の原因發生せるによりて、已に經過せる時間の效力を消滅せしむることを中斷といひ、又、其進行中に一定の原因發生せるによりて、進行の妨(サマタ)げらるゝことを停止といふ。

（しかう）［時好］（名）其時の流行。ときのこのみ。はやり。

（しがう）［寺號］（名）寺の名號。

（しがう）［字號］（名）活字の大小の號。

（しがう）［次號］（名）當號のつぎの號。

（しかうきげん）［施行期限］（名）或物事の施行を始むる時若しくは終(ヲ)はる時のかぎり。

（しかうきそく）［施行規則］（名）法令の施行に關係したる事柄の規則。

（しかうきん）［紙腔琴］（名）一種の樂器、樂譜を刻みたる紙を機械に嵌入し、手にて其機械を廻轉すれば、自動的奏樂をなすもの。

（しかうさいそく）［施行細則］（名）法令の施行上、其法令に關係したる細かき事項の規則。

しかうして［而］（接）「しかして」の延言。

十しかうら［鹿占］（名）古昔、鹿の肩の骨をやきてなしゝうらなひ。

（しかかくげん）［四個格言］（名）【佛】法華宗の開祖日蓮上人が、折伏のために唱道せし、眞言亡國・律國賊・念佛無間・禪天魔の四言の稱。

しかかり［仕懸］（名）㊀なしはじめ。しはじめ。㊁なす事のいまだ終(ヲ)はらざること。仕事の中途。

しかかる［仕掛］（他、ら四）㊀なしはじむ。㊁仕事の中途になる。

十しかき［鹿木］（名）古昔、狩人が、高木の枝に横木を結び付け柴などにて蔽(オホ)ひ、其中に隱れて、鹿の來るを待ちしもの。

（しかきてい）［自家規定］（名）【哲】自分の自由なる意志によりてなす規定。

（しかく）［四角］（名）㊀四隅に角のある形。矩形。方形。「—な重箱」。(四方)。㊁性行のかど〲しきこと。又、威儀のおごそかなること。

（しかく）［詩客］（名）詩を作る人。詩人。

（しかく）［刺客］（名）暗殺を行ふ人。

（しかく）［詩格］（名）詩のきそく。

（しかく）［死角］（名）銃砲の射界以內にて、彈丸の達し得ざる範圍の稱、例へば、堡壘に接近せる場所の如きこれなり。

（しかく）［資格］（名）身分又は地位、又、其要件。「受驗—」。

（しかく）［視角］（名）【理】物體の兩端より眼に至る二直線のなす角、物體の視(ミ)ゆる大小は、視角の大小に關す。

（しかく）［視覺］（名）【生】物體の像が眼底の網膜に映ずるとき、視神經を刺激して、腦に傳遞するによりて生ずる感覺。

しかく［仕掛］（他、か下二）㊀しかゝる。㊁我より他人に動作をなしかく。しむく。

しかく［爾］（副）そのやうに。かくのごとく。

（しがく）［志學］（名）㊀學に志すこと。㊁(論語に出づ)十五歲の稱。

（しがく）［史學］（名）歷史の學問。

（しがく）［死學］（名）役にたゝぬ學問。

（しがく）［試樂］（名）㊀舞樂の前に、樂器の調子を合はせ試みること、箏の爪調・琵琶の撥合・笛の音とり等これなり。㊁祭の前夜に車頭を引出すこと。

（しがく）［視學］（名）㊀學事の視察。㊁府縣又は郡に屬する判任官、管內の學事の視察を掌るもの。

（しかく）［自覺］（名）㊀【心】「じいしき」(自意識)に同じ。㊁自家の位地又價値を意識すること。㊂證明を須(モチ)ひず、直接に其然る所以を知ること。

（しかく）［時角］（名）【天】天體の時圈即ち星の赤緯圈と觀測地の經線とがなす角。

（しがく）［寺格］（名）寺院の階級。

（しがく）［耳學］（名）實地に學習せるにはあらで、たゞ聞きおぼえにて知りたること。みゝがくもん。

（しがくかう）［私學校］（名）私立の學校。

（しがくくわん）［視學官］（名）文部省の高等官、學事の視察を掌り、かねて省內の各局に分屬して事務を掌るもの。

（しかくけい）［四角形］（名）【數】四邊の直線形。

（しかくしめん）［四角四面］（名）極めておごそかなること。げんぢゆうなること。

（しかくはちめん）［四角八面］（名）向ひあたるすべての方面。「—に切りちらす」。

（しかくばる）［四角張］（自、ら四）㊀四角形をなす。㊁ことさらにおごそかなるさまを裝ふ。

しかけ［仕掛］（名）㊀なしはじめて中途なること。㊁仕事をなすための手段又は設備。「—物」。(裝置)。㊂かいどり。うちかけ。(袿)。——はなび［仕掛花火］（名）しかけをなして、さま〲の形の現はるゝやうつくれる花火。

しかし［併］（接）「しかしながら」の略言。(然)。

しか-しか[云云](名) 長き文句を省略して、これに代用する語。かやう〳〵。「—の事」。

(しが-しつげん)[自我實現=Self realization](名)【倫】「しこしつげん」(自己實現)に同じ。

十しかし-ながら[併](副) さながら。のこらず。(一切)。

十しかし-ながら[併](接) されども。さりながら。(雖然)。

十しか-すが-に(副) (「しかするからに」の略言) さうはいふものゝ。さすがに。「雪はふりつゝ—此川やぎはもえにけるかも」。

しか-た[仕方](名) ㊀ふるまひ。おこなひ。㊁方法。手段。㊂手まね。身振。——**な・し**（く・しき・けれ）[仕方無](形、二) せんかたなし。しやうなし。——**ばなし**[仕方話](名) 手まね又は身振をしてする談話。(科語)。

しか-たけ[鹿茸](名)【植】菌の一種、色白くして毛生ず。

〜しかつべ-ら・し（しく・しき・しけれ）(形、二) ㊀ものものし。㊁もっともらし。

〜しかつめ-ら・し（しく・しき・しけれ）(形、二) 前條に同じ。

しか-と[聢](副) たしかに。かたく。はっきりと。「—相談する」。(確)。

(しか-どうちやく)[自家撞着](名) 文章・言論などの意義が、前後互に相反對したること。

〜しが-な・し（く・しき・けれ）(形、二) 財物乏(トボ)し。まづし。「しがないくらし」。

しか-の-たま[鹿玉](名)【植】深山の朽木に生ずる一種の菌。

しか-の-み-ならず[加之](接) かてゝ加へて。其上に。なほさら。(加旃)。

しが-ばち[似我蜂](名)【動】蜂の一種、腰部細長にして全身黑色なり。こしぼそ。すがる。(細腰蜂)。

し-かばね[屍](名) (「しにかばね」の義) 死にたる人の體。なきがら。かばね。(尸)。

(し-かふ)[紫甲](名) 紫衣の異稱。

(し-かふ)[指甲](名) ゆびのつめ。

し-か・ふ（へ・へ・ふ・ふる・ふれ・へよ）[仕替](他、は下二) あらためてなす。あらためつくる。しなほす。

十し-が・ふ（は・ひ・ふ・ふ・へ・へ）(他、は四) 草などを刈(カ)り束ねて、末を結びあはす。

しか-ぶえ[鹿笛](名) 「しゝぶえ」に同じ。

し-かへし[仕返](名) ㊀再びなすこと。くりかへしてなすこと。㊁しなほし。やりかへ。㊂へんぱう。むくい。㊃仇を報ずること。復讎。

し-かへ・す（さ・し・す・す・せ・せ）[仕返](他、さ四) しかへしをなす。

〜し-かへる[仕替](他) 「しかふ」の訛。

(しか-ほぞん)[自家保存](名) 生物が自分の生命を保護存續せんとする狀態。

十しかま-かち[飾磨褐](名) 播磨國飾磨より染めいだす濃(コ)き紺色。

しかま-こん[飾磨紺](名) 前條に同じ。

〜しがみ-つ・く（か・き・く・く・け・け）(自、か四) 力をこめて務急にとりつく。むしやぶりつく。

〜しかみ-づら[顰面](名) 顔を顰(シカ)むること、又、其顔。

しかみ-ひバチ[獅嚙火鉢](名) つばの廣き金屬製の火鉢、脚に獅子の面をつけたるもの。

しか・む（ま・み・む・む・め・め）[顰](自、ま四) 眉根に皺よる。しわむ。(嚬、蹙)。

しか・む（め・め・む・むる・むれ・めよ）[顰](他、ま下二) 眉根に皺をよす。(嚬、蹙)。

〜しかめ-つら[顰面](名) 「しかみづら」に同じ。

十しか-も[而](接) 其上にも。

しか-も[然](副) そのやうにも。しか。「三輪山を—隱すか」。

(しか-よう)[自家用](名) 他人に販賣するにあらず、たゞ自分にて使用すること。——**れう**[自家用料](名) 自家用のもの。「—酒」。

しがらき-がさ[信樂笠](名) 近江國信樂地方より出だすかぶり笠。

しがらき-ちや[信樂茶](名) 近江國信樂地方より出だす茶。

しがらき-やき[信樂燒](名) 近江國信樂地方より出だす陶器、色は薄柿又は鼠にして質粗なり。

しから-ば[然](接) しかあらば。さらば。

しがらみ[柵](名) 水流を塞(セ)くために、杭(クヒ)を打ちならべて、これに竹木をよこたへたるもの。(柵)。

十しがら・む（ま・み・む・む・め・め）[柵](他、ま四) ㊀しがらみを設けて水流を塞(セ)く。㊁からみつく。

しかり[叱、呵](名) ㊀しかること。㊁德川時代に、庶人に科したる刑の最も輕きもの、たゞその罪をしかりおくに止まりしもの。

しか・り（ら・り・り・る・れ・れ）[然](自、ら變) 「しかあり」の略言。

しか・る（ら・り・る・る・れ・れ）[叱、呵](他、ら四) ㊀聲を立てゝとがむ。聲をあらゝげいましむ。㊁とがむ。いましむ。

しかる-あひだ[然間](接) さるほどに。

しかる-うへ-は[然上](接) しかるからには。さるからには。

(し-ガルタ)[詩骨牌](名) 「しはい」(詩牌)(一)に同じ。

しかる-に[然](接) さうであるのに。さるに。

シガレット[Cigarette](名) 紙卷煙草。

しかれ-ども[然](接) さうではあるが。されども。

しかれ-ば[然](接) ㊀しかあれば。されば。㊁そこで。さて。(書簡文などに用ふ)。

(し-かん)[視感](名) 「しかく」(視覺)に同じ。

(し-かん)[枝幹](名) ㊀えだとみきと。㊁えと。

(し-かん)[時間](名) ㊀時と時との間。とき。ときのま。㊁【哲】過去・現世・未來の流轉して無限なるもの、古今・年月等は其區分の稱なり、此觀念は、吾人の心中に具有する形式なりともいひ、又、但在又は顯在等の經得により、抽象を重ねて得たるものなりともいふ。——**び**[時間美](名) 音樂又は歌謠等の稱。

(し-がん)[字眼](名) 句の中にて最も主要とする字。

(し-がん)[慈眼](名) 「しげん」に同じ。

しき[敷](名) ㊀器物の底に敷(シ)くもの。「鐙の—」。㊁敷地又は敷金の略言。

しき[閾](名) 「しきみ」の略言。

(しき)[式](名) ㊀一定の標準又は規定。のり。きそく。㊁一定の仕方又は設備。しかた。ぎしき。㊂一定の體裁又は形狀。かた。かたち。㊃古昔、政府部内の事務章程。「延喜—」。㊄【數】計算の順序を、文字及符號を用ひて書き下せるもの。㊅「しきがみ」(式神)の略言。㊆古昔、支那の車の前に設けてありし横木、車中にて敬禮するときは、これに凭(ヨ)りて伏(フ)すを法とせり。(軾)。

(しき)[識](名) ㊀こゝろえ。さとり。「—博し」。㊁かんがへ。みわけ。「—高し」。㊂まじはり。ちかづき。「一面の—」。㊃思慮分別の能力。㊄【佛】前生の煩惱の所業を種とし、現在の母胎に入りたる一分の氣息。

(しき)[職](名) 官職の名。「中宮—」。

(しき)[色](名) ㊀物體の彩華。㊁男女の情慾、いろ。㊂【佛】五蘊の一、宇宙の森羅萬象の形體、かたち。——**そく-ぜくう**[色即是空] 宇宙の森羅萬象は、形體を現はせど、其實體本性は空なりといふこと。

(しき)[指揮](名) さしづ。下知。

(しき)[子規](名)【動】「ほとゝぎす」の一名。

(しき)[四季](名) 春・夏・秋・冬の稱、其變化あるは、赤道が黄道に對して、約二十三度半の傾斜をなすにより、地球の公轉中、地球上の各地が、太陽に對して位置を變ずるによる。

(しき)[四器](名) 規(ブンマハシ)・矩(サシガネ)・準(ミヅモリ)・繩(スミナハ)の稱。

(しき)[四氣](名) 四時の氣即ち溫(春)・熱(夏)・涼(秋)・寒(冬)の稱。

(しき)[視器](名) 「しくわん」(視官)に同じ。

(しき)[士氣](名) 一般人士の意氣。

(しき)[志氣](名) 或物事を成さんとする意氣。

(しき)[誌記](名) きろく。

(しき)[死期](名) 命終(ヲ)はるとき。又、命を捨(ス)つべきとき。

(しき)[始期](名) 期節又は期間のはじまり。

(しき)[私記](名) わたくしの記錄。

—しき[敷](接尾) 敷きたる座數を數ふるにいふ語。「十疊—」。

〜—しき[式](接尾) ばかり。ほど。「これ—」。

しぎ[鴫](名)【動】涉禽類に屬する鳥、嘴は長くして根部に軟皮を被り、前額と多少判然たる角度をなす、足もまた長し、中形大の鳥なり、常に水邊に棲息し、小魚蟲類等を捕り食ふ。

(し-ぎ)[私議](名) ㊀自分一己の意見。㊁かげにてそしること。

(し-ぎ)[刺議](名) あしざまにいふこと。そしること。

(し-ぎ)[思議](名) おもひはかること。かんがふること。

(し-ぎ)[諮議](名) とひはかること。さうだんすること。

(し-ぎ)[至義](名) 極めてすぢみちのたゞしきこと。

(し-ぎ)[仕儀](名) 事の次第。事のありさま。

(しき)[食](名) くひもの。食物。「阿修羅の—にせよとて」。

(し-き)[時機](名) 適當なる時節。しほ。をり。とき。「—早し」。(時期)。

(し-き)[次期](名) つぎのをり。のちのとき。

(し-き)[侍姬](名) おそば女中。こしもと。

(し-き)[自欺](名) 自己の良心に反したる言行をなすこと。自己の良心を昧(クラ)ますこと。

(し-き)[自記](名) 自らしるすこと。

(し-き)[磁器](名) ㊀いしやきのやきもの。せともの。㊁しやく。

(し-き)[磁氣](名)【理】磁石の如く鐵を引く作用。

(し-き)[辭氣](名) ものいひぶり。ことばづかひ。ことばぶり。「—勵し」。

(し-き)[自棄](名) 自ら自分の身を大切にせざること。自ら自分の身をわけもなく打捨てゝ顧ぬこと。

(し-ぎ)[貳疑](名) ㊀うたがひ。まよひ。㊁ふたごゝろ。あだごゝろ。

(し-ぎ)[兒戲](名) 小兒のたはむれ。「—に過ぎず」。

(し-ぎ)[時宜](名) ㊀ほど好きころあひ。㊁其時のもやう。

(し-ぎ)[辭宜](名) ㊀辭退すること。㊁頭を垂れて禮をすること。

(し-ぎ)[時儀](名) 時候の挨拶。

しき-あみ[敷網](名) 下にしきて用ふるあみ。

しき-あらし[磁氣嵐](名)【地】地磁氣の急激に變動を生ずる狀態。

しき-いし[敷石](名) 敷き並(ナラ)べたる石。(砌、甃石)。

しき-いた[敷板](名) ㊀下に敷く板。㊁厩(ウマヤ)のふみいた。

(し-きう)[梓柩](名) 屍(シカバネ)を入るゝひつぎ。

(し-きう)[時球](名) 開港場の埠頭(ハトバ)に高く吊(ツル)してある球、これより時刻を通知する局に電線を通じ、正午に至り、該局より送電するときは、球落つる裝置にして、碇泊の船舶これを見て正午を知る。

しき-うつし[敷寫](名) 書畫などを紙の下に敷きて、上よりこれを模寫すること。

(しき-かい)[色界](名)【佛】欲天の上にありて、食慾薄けれど、尚は色に染着する境界。

(しき-かく[色覺](名) 【生】光線の刺戟を受けて、視神經の末端興奮するによりて生ずる感覺。

しき-がね[敷金](名) しききん。

しき-がは ワーガ [敷皮](名) 敷物とする毛皮。(皮褥)。

しき-ガハラ ワーガ [敷瓦](名) 地にいしだゝみの如く敷きならべたる瓦。(甎)。

しき-がみ[敷紙](名) ㊀物の下に敷く紙。㊁紙にてつくりたる敷物、紙を糊(ノリ)にて張り合はせ、表面に澁(シブ)を引きたるもの。

卄しき-がみ[式神](名) 陰陽道にて、呪詛(ノロヒ)などにつかはれ、奇(アヤ)しきわざをなすといふ神。(識神)。

(じき-かんおう[磁氣感應](名) 【物】磁場に置かれたる物體が、磁氣を帶ぶること。

(じき-かんだんけい[自記寒暖計](名) 【理】溫度の變化を自記する裝置の寒暖計、普通用ひらるるものは、發出せる金屬の一端に、「インキ」を含ませたる指針出て、時計仕掛によりて回轉する圓筒に觸る、此圓筒に、度數を示す横線を引きたる紙を卷き付け置き、溫度の變化により指針上下して紙面に記する波形を見て、その變化を知る。

しき-きん[敷金](名) 家屋などの賃貸借に、借主が貸主に預け置く一定の保證金。「職。

(しき-くわん[指揮官](名) 全隊の指揮を掌る官

卄しき-げ[式外](名) 式社の條を見よ。

(しき-けん[識見](名) 物事の識別觀察。みわけ。かんがへ。けんしき。「言。

(しき-げん[式言](名) 式場にて陳(ノ)ぶる挨拶の

(しき-さい[色彩](名) ㊀いろつや。光澤。㊁いろどり。いろあひ。「かたち。さま。

(しき-さう ウーソ [色相](名) 肉眼にて見得る形相。

しき-ざき[四季咲](名) 或植物の花が、春夏秋冬の四季に咲(サ)くこと。又、其植物。――ばら[四季咲薔薇](名) 【植】薔薇の一種、四季咲のもの、普通のものに比すれば、花稍や小さし。(月季花)。

しき-さんば[式三番](名) 三人て舞ふ三番叟。

(しき-し[色紙](名) ㊀和歌又は俳諧などを記する料紙、方形に裁(タ)ち、模様を彩(イロ)りて箔などを施したるもの。(彩箋)。㊁弱りたる衣服にうら打す「る布。

(しき-じ[式事](名) 儀式の行事。

卄しき-じ[職事](名) ㊀古昔、諸官の當官をいふ。散官の對。㊁藏人の別稱。「日、祭日。

(しき-じつ[式日](名) ㊀儀式のある當日。㊁祝

しき-しま[敷島](名) (崇神天皇及欽明天皇の都したまひし大和國磯城島の地名より出づ)大和國の別名、轉じて、日本國の總稱。(磯城島)。――の[敷島](枕) 「やまと」に冠らする詞。「―やまと心を人問はゞ」。(磯城島之)。――のみち[敷島道](名) 和歌の道。「る窓。

しきし-まど[色紙窓](名) 色紙の形につくりた

卄しき-しや[式社](名) 延喜式の神名帳に掲載せられたる神社。其掲載せられたる神社を式内(シキナイ)といひ、掲載せられざるを式外(シキゲ)といへり。

(しき-しや[識者](名) 物事をよくわきまへたる人。又、識見のあきらかなる人。

(しき-じやう ヨーシ [色情](名) 男女間の情慾。色ごのみの心。――きやう ヨーキ [色情狂](名) 色情熾(サカ)んにして、其激發する際には、精神に異狀を生じ、常態を失したる擧動をなすこと。又、其人。

しき-じやばら[敷蛇腹](名) こてすねあてなどを蛇腹編にしたるもの。

(じき-しりよくせん[磁氣指力線](名) 【理】磁氣の作用する方向を示す曲線、磁石を盤上にのせ、これに鐵粉をふりかくるときは、其鐵粉は相並なる數多の曲線狀に整列して、磁石の兩極を連結す、この曲線を磁氣指力線といふ。

(しき-しん[色身](名) 【佛】色相ある身體。肉眼にて見得べき形象ある身體。肉體。

卄しき-しん[式神](名) 「しきがみ」に同じ。

しき-す[敷簀](名) 敷物となす簀。

しき-す せしこすする すれせよ [式](他、さ變) 支那の古昔、車中にありて、車前の横木に憑(ヨ)り伏して敬禮をなすにいふ。轉じて、車中にありて敬禮するにいふ。

しき-ずな[敷砂](名) 砂を一面に敷きたるもの。

しき-せ[爲着](名) ㊀時候に應じて、衣服を主人より奴婢などに與ふること。又、其衣服。(四季施)。㊁他人に若物を給與すること。又、其衣服。

(じき-せいうけい[自記晴雨計](名) 【理】氣壓の變化を自記する裝置の晴雨計、「アネロイド」晴雨計の金屬罐數個を重ねたるものより指針出て、時計仕掛にて回轉する圓筒に觸る、この圓筒に度數を示す横線を引きたる紙を卷き付け、指針の端に含ませたる「インキ」の記する波形によりて、氣壓の變化を知ることを得るもの。

(しき-そ[色素](名) 生物の皮下にありて、表面の色を表はす本源となる小球體。

(しき-たい[式退](名) ㊀會釋。挨拶。「おもしろう候ひつるものかなと、―したりけるを」。(色體、式體、色代)。㊁追從。世辭。「―にも、御年よりもはるか若く見え給ふといふはうれし」。

(しき-だい[式臺](名) 玄關の前にある板敷。

(じき-だい[色代](名) 現物の代(カハリ)となるもの。

(じき-だう ウード [食堂](名) 寺院のしよくだう。

しき-だたみ[敷疊](名) 座敷の疊。

卄しき-た・つ てつつるつれてよ [敷立](他、た下二) 堅固に竪立す。かたくたつ。

卄しき-たへ エーク [敷妙](名) 夜寢(ネ)る床に敷く布。しきブトン。――の[敷妙](枕) 「枕」「衣」「袖」「床」「家」などに冠らする詞。

しき-たり[仕來](名) 在來の慣例又は習慣。ならはし。せんれい。(常例)。

しき-た・る らりるるれれ [仕來](自、ら四) 以前より引續きてなす。以前より引續きて行ふ。「「路の―」。

しき-ち[敷地](名) 使用に供する一區域の土地。

卄しき-でん[職田](名) 古昔、官職にあるものに給はりし田。職分田。「に意義を解釋すること。

(しき-どく[色讀](名) 文書に記したる文字通り

卄しき-ない[式内](名) 式社の條を見よ。

卄しき-なみ[頻浪](名) 頻に打ちよする波。――ぐさ[頻浪草](名) 【植】「すすき」の異稱。「に。

卄しき-なみ-に[頻並](副) ひきつゞきて。しきり

卄しき-の-かみ[式神](名) 「しきがみ」に同じ。

卄しき-の-はねがき[鴫羽搔](名) (鴫の嘴を以て羽をかく義)鴫は數多く搔(カ)くものなるより、轉じて、回數多きことにたとへいふ語。「泪かずそふ―」。

(しき-ばう ウーボ [式帽](名) 儀式に用ふるさだめの帽子。「末に支拂ふこと。

しき-ばらひ [四季拂](名) 掛金などを四季の

(しき-び[式微](名) (詩經に出づ)甚しく衰(オト)「ふること。

(しき-び[樒](名) 【植】「しきみ」の訛。

(しき-ひやうぢやう-しゆう [式評定衆](名) 武家にて、儀式の評定にのみ參せし職名。

(し-きふ ウーキ [支給](名) あてがひわたすこと。はらひわたすこと。「こと。

(し-きふ ウーキ [資給](名) たすけ與ふること。めぐむ

(し-きふ ウーキ [至急](名) ㊀極めて急なること。おほいそぎ。㊁通常電報より先に傳送を要する手續の電報。其符號は「ウナ」。「―電報」。「きこと。

(し-きふ ウーキ [駛急](名) 飛び又は走るにいとはや

(じ-きふ ウーキ [自給](名) 自力にて生活すること。

卄しき-ぶ[式部](名) 女學生の異稱。

(しき-ぶ-くわん[式部官](名) 式部職の職員にして、儀式の事を掌る高等官。

(しき-ぶ-しき[式部職](名) 宮内大臣の統轄の下に屬し、帝室の祭典・儀式及雅樂の事を管理する宮内省の一局。

(しき-ぶ-しやう ヨーシ [式部省](名) 古昔の八省の一、國家の儀式・典禮又は貢擧・考課等の事をつかさどりし所。「じ。

(しき-ぶ-しよく[式部職](名) 「しきぶしき」に同

(しき-ぶ-ちやう ヨーチ [式部長](名) 式部職の長官、職務を總理し職員を監督するもの。「蒲團。

しき-ブトン[敷蒲團](名) 臥(フ)すとき下に敷く

(しき-べつ[識別](名) みわけ。みきはめ。

(しき-まう ウーモ [色盲](名) 【生】色覺不完全にして、物體の色を識別し得ざること、例へば黃色を指して赤色又は綠色などとなすが如し。

卄しき-まき[重播](名) 太古の罪の一、穀物の種子をまきたる上にまたまきしこと。

卄しき-ま・す すさしすすせせ [敷座](他、さ四) しろしめす。

しき-まつば[敷松葉](名) 庭の霜除(シモヨケ)に、枯松葉を敷くこと。又、其枯松葉。

しきみ[閾、閫](名) ㊀門の内外を限り又は室を區劃するため、下に敷きたる横木、戸障子の設けあるものには、多く溝(ミゾ)をきざみて其開閉に便にす。しきゐ。㊁内外のしきり。

しきみ[樒](名) 【植】木蘭科に屬する木、葉は常綠にして、五個乃至八個の雌蘂を具する黃色の花開く、有毒植物なれど、其枝葉を佛前に供し又は香を製する料に供す。かうじば。かうのき。(多香木、梻香、莽草)。

しきめ-をどし[敷目縅](名) 鎧の縅(ヲドシ)方、二色「の絲にて綴すもの。

卄しき-も[莚](名) (しきもをしきあはせてねる義) まくふすま。蒲團。――あふ ウーア [莚合](枕) 「家」に冠らする詞。「―いへと思ひて」。

しき-もく[式目](名) 制度の箇條書。「貞永―」。

しき-もの[敷物](名) 下に敷きて坐するためのもの。特に、筵又は蒲團の類の稱。(地布、地氈)。

(し-きやう ヨーキ [四境](名) 四方のさかひ。まはり。

(し-きやう ヨーキ [死境](名) 活路なき場所。

(し-きやう ヨーキ [市況](名) まちの商賈のけいき。

(しき-やう ウーヨ [色養](名) 顏色を和(ヤハ)げて父母に孝從を盡くすこと。

しき-やき[鴫燒](名) 一種の料理、茄子(ナス)に油を塗(ヌ)り、これを火に炙(アブ)りて味噌をつけたるもの。(茄田)。

(し-ぎやく[弑逆](名) 君父などを殺す大惡。

卄しき-やみ[敷闇](名) 夜の殊にくらきこと。

(し-きゆう[梓宮](名) 君王の屍をおさめたる棺。

(し-きゆう[子宮](名) 女性の下腹部にありて子のやどる所。こぶくろ。――びやう ヨーピ [子宮病](名) 子宮に發する病氣の總稱。

(し-きよ[死去](名) みまかること。死ぬること。

(し-きよう[詩興](名) 詩思の催(モヨ)さるゝ興味。

(し-きよく[私曲](名) よこしま。わたくし。不正。

(し-きよく[至極](名) つめ。はて。

(し-きよく[支局](名) 本局の管理に屬し、本局と

分離して事務を取扱ふ局。

⌒しき-よく［色慾］（名）㊀男女交接の慾情。いろごのみの心。色情。㊁色情と利慾と。いろとよくと。「―の兩道」。

⌒じき-よく［事局］（名）事柄のありさま。事件のなりゆき。

⌒じき-よく［時局］（名）時事のありさま。時勢のなりゆき。

⌒じき-よく［磁極］（名）【理】磁石の陰陽の兩極。

卄しき-り［尻切］（名）「しきれ」に同じ。

しき-り［仕切］（名）㊀へだて。かぎり。「物の―」。㊁帳面又は取引の決算。「―をつける」。㊂物事の決着。「―が遲い」。――きん［仕切金］（名）取引の決算にて授受する金。――ちやう（ーヂヤウ）［仕切帳］（名）取引の決算をなす帳面。――ば［仕切羽］（名）黒羽と白羽とをつぎ合はせてはぎたる矢。――ば［仕切場］（名）芝居にて、見物人の入場を檢する場所。――はぎ［仕切矧］（名）黒羽と白羽とをつぎ合せて矢をはぐと。――ばん［仕切判］（名）仕切のしるしに捺(オ)す印。――をとこ［仕切男］（名）芝居の仕切場に居る男。

しきり-に［頻］（副）ひきつゞきて。頻れ〳〵。しげく〳〵つゞけて。しば〳〵。

⌒しき-りやう（ーリヤウ）［識量］（名）知識と度量と。きりやう。

⌒しき-りよく［識力］（名）物事を識別する能力。

しき・る（らりるるれれ）［頻］（自、ら四）しきりに至る。たび重なる、しげくなる。「降り―」。

しき・る（らりるるれれ）［仕切］（他、ら四）㊀間を隔(ヘダ)つ。區域を設く。さへぎる。㊁帳面の決算をなす。㊂物事の決着をつく。

卄しき-れ［尻切］（名）（「しりきれ」の略言）昔時、底を革にて包みたる草履、路のしめりたる時に履(ハ)く、後世の雪駄はこれより出でたるものなりといふ。

⌒しき-れい［式禮］（名）れいぎ。ぎしき。

⌒じき-ろう［食籠］（名）食物を盛(モ)る器、多くは蓋(フタ)ありて形圓し。（合子）。

しき-ゐ［敷居］（名）㊀卄地上にしきて坐する筵の類。㊁しきみ。（閾）。――ごし［敷居越］（名）敷居の此方より彼方に向きて事をなすと。

⌒しき-ゐき［識域］（名）【心】認識の及ぶ範圍。又、意識の起る境域。

⌒しき-ん［資金］（名）もとで。資本金。

⌒しき-ん［齒齗］（名）はぐき。

⌒しき-ん［紫金］（名）「しやくどう」の一名。

⌒しき-ん［賜金］（名）下賜せらるゝ金。「一時―」。

⌒しき-ん［至近］（名）最も近きと。

⌒しきん-ぎう［紫金牛］（名）【植】「やぶかうじ」の一名。

⌒しきん-こ［支金庫］（名）地方に分置せられてある金庫。金庫の條を見よ。

⌒しきん-せき［試金石］（名）㊀金銀を磨(ス)り附けて、其質を判定するための石。かねつけいし。㊁其もの、價値を判定する試驗となる物事。

⌒しきん-ちやう（ーヂヤウ）［紫金錠］（名）麝香と薄荷とにて製したる一種の藥劑。

〰しく［宿］（名）「しゆく」の訛。

⌒しく［市區］（名）㊀市と區と。㊁市街の區劃。「―改正」。

⌒しく［死苦］（名）㊀死ぬるばかりの苦痛。㊁死の苦患。

⌒しく［四苦］（名）【佛】人生の四つの大なる苦患、即ち、生・老・病・死の稱。

⌒しく［詩句］（名）詩の句。

しく（かきくくけけ）［敷］（自、か四）㊀ちらばる。ちる。「地に―落花」。（布）。㊁のぶ。ひろがる。（延）。

しく（かきくくけけ）［敷］（他、か四）㊀下に平かに延ぶ。「筵を―」。㊁のべひろぐ。ひろげのばす。㊂しきものとす。「草をしきて坐す」。（藉）。㊃下におさへつく。「ふみ―」。「組み―」。㊄ひろく及ぼす。「法例を―」。（布）。

しく（かきくくけけ）［頻］（自、か四）かさなる。しきる。「風の吹き―秋の野」。「ほとゝぎすいやしきなきぬ」。

しく（かきくくけけ）［及］（自、か四）㊀到り及ぶ。「追ひしきて」。㊁相比す。くらぶ。「君にまた―ものなしと思ひけるかな」。（如）。

卄しく（かきくくけけ）［領］（他、か四）領す。しろす。「神ながらふとしきまして」。

⌒し-ぐ［至愚］（名）きはめて愚なると。

⌒じ-く［字句］（名）文字と語句と。

〰じく［熟］（名）「じゆく」の訛。

⌒し-ぐう［四隅］（名）㊀よすみ。㊁四方。（四維）。

⌒しく-き［宿忌］（名）【佛】たいや。

〰し-ぐさ［爲種］（名）しかた。えうち。

〰しく-し［宿紙］（名）「すくし」に同じ。

〰しく-しく［頻頻］（名、副）打つゞきて絶えざるさまにいふ語。「あがもふ君は―おもほゆ」。

〰しく-しく（名、副）勢なく泣くさまにいふ語。「―泣く」。

〰じく-じく（名、副）水などの少しづゝ絶えず洩(モ)れ出づるさまにいふ語。

〰しく-じり（名）しそこなひ。やりそこなひ。（失敗）。

〰しくじ・る（らりるるれれ）［失敗］（他、ら四）㊀しそこなふ。やりそこなふ。㊁解傭せられて出づ。放逐せられて退く。

し-くち［紫口］（名）【動】「あかめ」に同じ。――ぼら［紫口鰡］（名）【動】前條に同じ。

⌒し-くつ［試掘］（名）ためしに鑛物などを掘(ホ)ると。

〰しく-つ・く（かきくくけけ）（自、か四）しく〳〵泣く。

〰じく-つ・く（かきくくけけ）（自、か四）じく〳〵出づ。

しくは・す（ーワス）（さしすすせせ）［爲合］（自、さ四）互に同時になす。又、所業相一致す。

⌒しく-はつく［四苦八苦］（名）非常なるくるしみ。

卄しぐ・ふ（はひふふへへ）（自、は四）くひあふ。くみあふ。

卄し-ぐま［羆］（名）【動】「ひぐま」に同じ。

し-くみ［仕組］（名）㊀くはだて。くみたて。計畫、規模。㊁演劇又は小說などの事柄の組立。（脚色）。

しく・む（まみむむめめ）［仕組］（自、ま四）㊀工夫を廻(メグ)らして、事を計畫す。たくらむ。くはだつ。㊁趣向を凝(コ)らして、演劇又は小說を組み立つ。

しぐ・る（れれるるるれれよ）［時雨］（自、ら下二）㊀しぐれ降(フ)る。㊁泣きてなみだを落す。

しぐれ［時雨］（名）㊀秋冬の頃、度々降(フ)る雨。（液雨）。㊁なみだを流して泣くと。㊂「しぐれマンヂユウ」又は「しぐれカン」の略言。――カン［時雨羹］（名）一種の菓子、赤小豆の餡(アン)をそぼろにして蒸して製したるもの。――ごこち［時雨心地］（名）㊀時雨ふらんとする空模樣。㊁泣きたき心地。――づき［時雨月］（名）時雨の多く降(フ)る月、即ち陰曆十月の異稱。――はまぐり［時雨蛤］（名）一種の食品、蛤のむきみを味噌のたまり汁にて煮たるもの。――マンヂユウ［時雨饅頭］（名）一種の菓子、しぐれカンにて餡(アン)を包(ツ)みたるもの。

⌒しくわ［死火］（名）消えはてたる火。

⌒しくわ［資貨］（名）もとがね。もときん。

⌒しくわ［死貨］（名）活用せぬ財貨。

⌒しくわ［齒科］（名）齒一切の病を療治する醫術。

⌒しくわ［雌花］（名）【植】雌蕊のみを着くる花、松又は栗の球狀をなす花の如きこれなり。

⌒じくわ［自火］（名）自分の家より出したる火事。

⌒じくわ［耳科］（名）耳一切の病を療治する醫術。

⌒しくわい［詩會］（名）詩を作る會。

⌒しくわい［私會］（名）ない〳〵の集會。又、緣故あるものゝみの集會。

⌒しくわい［駛快］（名）走るにいとはやきと。

⌒しくわい［死灰］（名）㊀火の氣なくなりたる灰。㊁生氣うせはてたるもの。――こぼく［死灰枯木］（名）生氣なきもの活動なきものにたとへいふ語。――ふたたびもゆ［死灰再燃］一旦をさまり又は亡びたる物事が、更におこるにいふ。

⌒しくわい［市會］（名）市の議決機關、市會議員を以て組織す、法律命令の定むる所に從ひ、市の自治の權限內に屬する一切の事を議決し、かねて其執行を監督す、其議決事項の主なるものは、市條例等の設定改正、市費支辨の事業、豫算決算、財產營造物の處分管理、義務の負擔權利の棄却、法律勅令外の使用料・手數料・市稅及夫役、現金の賦課徵收、市吏員の身許保證金、市に係(カ)かる訴訟及和解等なり。――ぎゐん［市會議員］（名）市會を組織する議員、其數三十人以上六十人以下にして、市の公民より三級選擧によりて選擧せらる。

⌒しぐわい［市外］（名）市のそと。

⌒じくわい［次回］（名）其つぎのたび。

⌒じくわい［次會］（名）其つぎの會。

⌒しぐわい-せん［紫外線］（名）【理】「スペクトル」の紫部より外の暗黑部に至る輻射線、即ち、化學線。

⌒じくわく［字畫］（名）漢字の點畫。

⌒しくわざん［死火山］（名）【地】その構造上よりいへば火山なれど、その活動の全く有史以前に屬するものゝ稱。

⌒じぐわさん［自畫讚］（名）㊀自分の描(エガ)きたる畫に、自分にて讚をすると。㊁自分の事を自分てほむるにいふ。

⌒じぐわ-じさん［自畫自讚］（名）自畫讚に同じ。

⌒しくわつ［死活］（名）㊀死ぬると生くると。休止すると活動すると。㊁死ぬるか生くるか又は休止するか活動するかの決する場合。「―問題」。

⌒しぐわつ［四月］（名）年の第四の月。

⌒じくわつ［自活］（名）自力にて生活すると、獨立して衣食すると。

⌒しくわん［士官］（名）兵を指揮する武官、主に陸海軍の大中少尉の稱。

⌒しくわん［史官］（名）物事の記錄を掌る官職。

⌒しくわん［仕官］（名）官に仕(ツカ)ふると。

⌒しくわん［祠官］（名）鄉社などの神官。

⌒しくわん［視官］（名）【動】動物の視覺をつかさどる器能即ち眼球、昆蟲には單眼・複眼の別あり。

⌒しくわん［止觀］（名）【佛】禪定を修めて、內心に起る散亂動搖の妄想を止め、事理を照見し諸法を識別すると。

⌒しくわん［指環］（名）ゆびわ。

⌒しぐわん［志願］（名）願ひ望むと。こゝろざすと。ねがひ。のぞみ。こゝろざし。

⌒じくわん［耳環］（名）耳朶に貫(ヌツ)きを垂れて飾とする環、みゝわ。

⌒じくわん［寺觀］（名）僧侶の佛に事(ツカ)ふる所と道士の道を修(ヲサ)むる所と、轉じて、寺院。

⌒じくわん［次官］（名）長官の次の官。大臣の次の官。

⌒しくわん-がくかう（ーガツコウ）［士官學校］（名）教育總監の管轄の下に屬し、陸軍の諸隊に付屬して、規定の修業を終(ヲ)へたる士官候補生に、必要なる學問技術を教授する學校。

(しくわん-こうほせい [士官候補生](名) 規定の資格を有し陸軍各兵科の士官の補充に任ぜられたるもの、任命後普通は一ヶ年間(中央幼年學校出身者は六ヶ月間)配付せられたる各隊につきて、兵卒下士の勤務及軍事を習得し終（ヲ）はりて、士官學校に入校し、卒業後歸隊して見習士官となる。

(しぐわん-しや [志願者](名) 志願する人。のぞみて、ねがひて、「入學—」。

(しぐわん-へい [志願兵](名) 自ら志願して兵役に服する兵士。

(し-くん [此君](名) 竹の異稱、「このきみ」に同じ。

(し-くんし [四君子](名) 蘭・竹・梅・菊の稱。

しけ [濕氣](名) ㊀しめりけ。 ㊁海上にて風雨の續（ツヅ）くと、「—を食ふ」。(逆陰、時化)。 ㊂轉じて、魚類のとれぬと。

しけ [紲](名) ㊀しけいと。 ㊁「しけぎぬ」の略言。

(し-げ [寺家](名) 寺の家人。

(し-けい [嗣繼](名) よつぎ。あとつぎ。

(し-けい [紙型](名) 紙にとりたるいがた。

(し-けい [四計](名) 一日の計は晨（アシタ）にあり、一年の計は春にあり、一生の計は勤（ツトメ）にあり、一家の計は身にありといふと。又、後の二條にかへて、一家の計は和にあり、一身の計は勤にありともいふ。

(し-けい [支系](名) ㊀わかれ。えだ。 ㊁「ばうけい」(傍系)に同じ。

(し-けい [詩形](名) 詩歌の形式即ち律格。

(し-けい [詞兄](代) 同輩の文人・學士又は詩人などの尊稱。(詞契、詩契)。

(し-けい [死刑](名) 生命を絕（タ）つ刑罰、死罪。

(し-げい [詞藝](名) 文辭の藝。

(し-けい [刵刑](名) 耳をきる刑罰。

(じ-けい [自剄](名) 自らくびをきると。

(じ-けい [慈惠](名) なさけ。めぐみ。ほどこし。 —いゐん [慈惠醫院](名) 貧民施療のために設立せられたる醫院。

(し-けいざい [私經濟](名) 一身一家の經濟。

しけ-いと [紲絲](名) 繭の外面より繰（ク）りたる絲。わるき絲。くづ絲。 —おり [紲絲織](名) しけいとを用ひて織りたる織物。くづいとおり。

(し-けう（キヨウ） [司教](名) 天主教などの高級の教師。

(し-けう（キヨウ） [示教](名) しめしをしふると。(指教)。

(し-けう（キヨウ） [鴟梟](名) ㊀【動】「ふくろふ」に同じ。 ㊁暴惡なる者にいふ語。

(じ-けう（キヨウ） [耳竅](名) みゝのあな。

しげ-うち [繁打](名) 紐（ヒモ）などの打方の細かく繁（シゲ）きと、又、其もの。

しげ-き [繁木](名) 繁（シゲ）りたる木。(茂樹)。

(し-げき [史劇](名) 歷史上の事實を仕組みたる演劇。

(し-げき [伺擊](名) ねらひうち。まちぶせ。(狙擊)。

(し-げき [刺擊](名) 刺（サ）し擊（ウ）つと。

(し-げき [刺戟、刺激](名) ㊀感覺機關に作用して、感覺を生ぜしむると、「光線の—」。 ㊁はげましすゝむると、興奮せしむると。 —うんどう [刺戟運動](名) 【植】卷鬚の他物に纏（マト）ふが如く、植物の或機官が或外物に感じてなす運動。 —せい [刺戟性](名) きはだちて神經を刺戟する性質。 —ゐき [刺戟域](名) 【心】吾人が外界の刺戟を感受する範圍、其以外に刺戟なきにあらざれど、これを感受すると能はず。

しけ-ぎぬ [紲絹](名) しけいとにて織りたる絹布、衾具などに供するもの。

〔しけ-こ・む(まみむ、めめ) (自、ま四) いりこむ。「惡場所へ—」。

しげ・し(くしき、けれ) [繁、稠](形、一) ㊀繁（シゲ）りてあり。「草木—」。(茂)。 ㊁數多し。おほし。 ㊂度重なる。しきりなり。 ㊃いそがはし。いそがし。 ㊄わづらはし。くだ〳〵し。 ㊅こま〳〵し。こまかし。

しけし [字消](名) 誤りたる文字を塗（ヌ）り消すと、又、これに用ふる白墨又は「ゴム」などの稱。

〔しげ-しげ(名、副) 心をこめてなすさまにいふ語。「—視る」。

〔しげ-しげ [繁繁](名、副) 度の重なるさまにいふ語。「—來る」。

卄しげ-ぢ [繁路](名) 草木などのしげり生ふる路。

(し-けつ [死結](名) こまむすび。

(じ-けつ [辭訣](名) いとまごひ。わかれ。

しげ-どう [重籐](名) 五分づゝ隔（ヘダ）てゝ一寸許づゝ細き籐を卷きたる弓、昔時、大將などの持ちしもの、五ヶ所又は七ヶ所卷きたるをむらしげどうといふ。とうまきのゆみ、

(し-げふ（ギヨウ） [始業](名) 業をはじむると。

(し-げふ（ギヨウ） [試業](名) 課業の試驗、業務の試驗、こゝろみ。しけん。

(じ-げふ（ギヨウ） [事業](名) 一定の計畫及目的にもとづきて經營する人生の活動、しごと。わざ。「—を興す」。 —か [事業家](名) 事業をくはだて起す人。又、巧に事業を經營する人。 —ねんど [事業年度](名) 事業を經營する便宜上より設けたる年度、例へば一年を二分して前半期後半期となすが如し。

しげ-み [繁](名) 草木の繁（シゲ）りたる所、(蘙薈)。

しげ-め [繁目](名) 目のしげきと。 —ゆひ（イユ） [繁目結](名) 鹿子（カノコ）しぼりの一種、普通のものより目の一層しげきもの。

しげ-やま [繁山](名) 草木の繁（シゲ）りたる山。(蕃山)。

しげり [繁](名) しげると。しげみ。

しけ・る(らりるるれれ) [濕氣](自、ら四) ㊀濕氣を生ず。 ㊁海上風雨盛んにしてやまず。

しげ・る(らりるるれれ) [繁、稠](自、ら四) 生ひ重なる。多く生ず。(茂)。

(し-けん [私權](名) 【法】私人相互の關係を規定する權利。國家が私人に認（ミト）めたる權利。

(し-けん [私見](名) 自分一己の意見。

(し-けん [支券](名) わりふを半折したる一方。

(し-けん [試驗](名) ㊀或事物の如何を實際に就きてためすと、實地に驗すると。こゝろみると。 ㊁問題を示して答案をつくらしめ、又は條件を定めて實地に演ぜしめ、其結果の如何によりて、及落又は採否を判ずると。

(し-げん [至言](名) 至極もっともなる言。

(し-げん [始原](名) はじめ。もと。原始。

(じ-けん [事件](名) ことがら。こと。「大—」。

(じ-けん [時圈](名) 【天】天球儀の兩極を通過する圈、天體の時又は角を測るに用ふるもの。又、赤道儀に附けたる目盛の圈、天體の赤經を測るに用ふるもの。

(じ-げん [示現](名) 神佛など不可思議の靈現をしめしあらはすと。(天啓、默示)。

(じ-げん [時限](名) 時間のかぎり。

(じ-げん [慈眼](名) 【佛】慈悲のまなこ。又、なさけのこゝろ。 —をたる あはれみをかく。

(し-げんきん [四絃琴](名) 一種の樂器、絃四筋を張り、形は三味線に似る。

(し-けんくわん [試驗官](名) 試驗委員の官職。

(し-けんくわん [試驗管](名) 理化學の實驗に用ふる硝子管。

(し-げん-けう（キヨウ） [四言教](名) 王陽明の述べたる四個の格言、古來其學派にて談論を重ぬるもの、即ち、「無善無惡心之體、有善有惡意之動、知善知惡是良知、爲善去惡是格物」をいふ。

(し-けん-し [試驗紙](名) 【化】化學にて溶液又は瓦斯の酸性と鹽基性とを試驗するに用ふる紙、普通「リトマス」液を塗（ヌ）りたるものを用ふ、其赤色なるを青變するものは鹽基性にして、青色なるを赤變するものは酸性なり。

(し-けん-しん [試驗針](名) 【鑛】一の金屬に他の金屬の混合する分量を定むるに用ふる針。

(し-けん-もんだい [試驗問題](名) 試驗に出して、受驗者に答をなさしむる問題。

(し-けん-れう（リヨウ） [試驗料](名) 受驗の手數料。

(し-けん-ろんぶん [試驗論文](名) 試驗の問題に應じて述作する論文。

(し-けん-ゐゐん [試驗委員](名) 試驗問題の撰定又は其答案の採點若しくは及落採否の判定其他試驗に關する事柄を取扱ふ委員。 —ちやう（チヨウ） [試驗委員長](名) 試驗委員を統督し試驗に關する一切の事を指揮するもの。

卄しこ [醜](名) 醜惡なるものをのゝしりていふ語。「—の爽」。

(し-こ [矢壺](名) 古昔、矢を盛（モ）る器の總稱。後世、粗末なるやなぐひの稱。(尻籠、矢籠)。

しこ(名) 【動】「ひしこ」の略言。

(し-こ [四股](名) 相撲（スマフ）にて、足の稱。「—踏みならす」。 —をふむ 片足を高く揚げて廣く張り、力をこめて勢強く地を踏（フ）む。

(し-こ [市虎](名) ㊀いさみはだ。をとこだて。 ㊁(市中に虎の棲む說)根據なきいつはりのとりさた。

(し-こ [四顧](名) あたりをみまはすと。又、あたりきんじよ。「—茫々」。

(し-こ [指顧](名) 前面にあるものを指さしながらふりむくと、「—して語る」。

(し-こ [指呼](名) ㊀多くの人中より、指さして呼ぶと。 ㊁さして呼べば應（コタ）ふる程の間近なると。

(し-ご [死期](名) 臨終の時。死ぬるとき。いまは。

(し-ご [死後](名) 死しての後。

(し-ご [死語](名) 今日全く使用せられざる古語。現代に通用せざる古昔の國語。

(し-ご [私語](名) さゝやき。ひそ〳〵ばなし。

(し-ご [枝梧](名) さゝふると。又、いひぬけすると。(支吾)。

(じ-こ [事故](名) ㊀事の仔細。わけがら。 ㊁ことがら。じけん。

(じ-こ [自己](名) ㊀自身。自分。 ㊁自我。

(じ-ご [耳語](名) みゝこすり。みゝうち。

(じ-ご [爾後](名) このゝち。そのゝち。(自後)。

(じ-ご [事後](名) 事のをはりし後。

(じこ-あんじ [自己暗示=Autosuggestion](名) 【心】自ら自己を催眠又は無意識の狀態に陷ぜしむる作用。

(し-こう [祗候](名) 敬（ツツシ）みておそばに居ると。又、敬みてうかゞひをすると。

(し-こう [至公](名) 極めて公平なると。毫も偏頗なきと。

(し-こう [伺候](名) ㊀さぶらひ居ると。 ㊁參（マヰ）りて機嫌を伺（ウカガ）ふと。

(じ-こう [耳孔](名) みゝのあな。

(じ-こう [時候](名) 時のやうき。氣候。

(じこ-かんおう [自己感應](名) 【理】電路に電流を通じ又は電流を絕（タ）つとき、これ等の作用に抗する電流の電路に生ずると。

(じこ-かんじやう（ジヨウ） [自己感情](名) 【心】自己の權力又は價値に關して、苦樂を生ずる感情、功

名心又は傲慢心等はこれに屬す。

しごき［扱］（名）㊀しごくこと。㊁「しごきおび」の略言。――おび［扱帶］（名）一幅（ハバ）の布を然るべき長さに切り、しごきて帶とするもの。――ぶき［扱拭］（名）しごきて拭（ヌグ）ふこと。

（しごぎ［子午儀］（名）【天】天體の子午線經過を觀測する器械、東西の水平軸に回轉して子午線上に運動する望遠鏡を備ふるもの。

（しこく［四國］（名）㊀四つの國。㊁南海道の中阿波・讃岐・伊豫・土佐の稱。

（しごく［至極］（副）このうへなく。もっとも。きはめて。最上。

（じこく［自國］（名）自分の國。

しご・く［扱］（他、か四）しめてこく。又、しきりにこく。

（じこく［時刻］（名）とき。をり。ころ。時間。

（しごくくわん［司獄官］（名）監獄の事務をつかさどる官吏。典獄。

廾しこぐさ［醜草］（名）㊀わろき草。雜草。㊁反賊又は凶徒等の稱。

しこくざる［四國猿］（名）㊀【動】猿の一種、形小さくしてよく人に馴（ナ）る、多く四國に産するより此名あり。㊁四國の人をあざけりていふ語。

（しこくはちしふはっかしよ［四國八十八個所］（名）八十八個所に同じ。

（じこくわんさつ［自己觀察］（名）【心】自省して自己の心的現象を觀察し、心理上の知識を得ること。

（じこけういく［自己教育］（名）自ら自分を教育すること。自ら自分の知識を開き品性を養ふこと。

（じこげんいん［自己原因］（名）【哲】自己の存在が、他のものに制約せられざること。存在の依據が、自己以外になきこと。

〔しこしこ（名、副）嚙（カ）めば齒ごたへするさまにいふ語。

（じこじつげん［自己實現＝Self realization］（名）【倫】自己に具有する諸性能を、完全に發達せしむること。

（じごしようだく［事後承諾］（名）㊀獨斷の處置を關係者があとにて是認すること。㊁【法】緊急勅令及び豫算より超過したる支出に關し、次期の帝國議會に於てこれを是認すること。

〔しこじらか・す（他、さ四）「しこじらす」に同じ。

〔しこじら・す（他、さ四）しこじる、やうにす。病を癒（イ）やし損（ソコ）ふ。

〔しこじ・る（自、ら下二）病氣癒（イ）え損（ソコ）ふ。病治（ナホ）り損ふ。

（しごせん［子午線］（名）【天】觀測地の天頂と兩極とを通過する想像上の大圓、即ち、經線。――けいくわ［子午線經過］（名）【天】天體が子午線を經過すること。

〔しこたま（副）たくさん。どっさり。たんと。

（しこつ［肢骨］（名）手足のほね。

（しこつ［指骨］（名）手のゆびのほね。

（しこつ［趾骨］（名）足のゆびのほね。

廾しこ・づ［讒］（他、た上二）ざんげんす。ざんす。そしる。（讒、毀）。

しごと［仕事］（名）㊀爲すこと。爲す業。㊁【理】物體が抵抗力を排して運動をなすこと、其量は力と物體の運動の距離との相乘積を以て測る。㊂はりしごと。裁縫。〔――し［仕事師］（名）㊀土木の雜役を業とする勞働者。㊁よく事業を計畫する人。――ば［仕事場］（名）仕事をなす所。工場。工作場。――ばこ［仕事箱］（名）大工道具などを入れ置く箱。

廾しこな［醜名］（名）あだな。（醜名、渾名）。

しこなし（名）しこなすこと。

しこな・す（他、さ四）㊀程よく爲す。巧に扱ふ。㊁爲しをふ。行ひはつ。

廾しこのみたて［醜楯］（名）國家の干城。くにのまもり。

（しこふ［四劫］（名）【佛】世界の變遷經過の區分、世界成立して人類生殖するを成劫といひ、人類の世界に安住するを住劫といひ、世界の壞滅するを壞劫といひ、世界の空虛となるを空劫といふ。

（じごふじとく［自業自得］（名）自分の爲したる惡業のために、自分が其むくいを得ること。

しこみ［仕込］（名）しこむこと。――づゑ［仕込杖］（名）杖の中に刀を仕込みたるもの。（裝刀杖）。

しこ・む［仕込］（他、ま四）㊀敎へならす。敎へこむ。（窯陶）。㊁商品を買ひ入れて備ふ。㊂たくはへ置く。準備す。㊃中に入れこむ、中に裝置す、㊄くはだつ。たくらむ。

廾しこめ［醜女］（名）㊀みにくき女。醜婦。㊁黄泉にゐるといふ妖怪。

廾しこめゆみ［仕込弓］（名）かざりゆみ。（寫籠弓）。

しこり［凝］（名）筋肉のむすぼれかたまりて塊狀をなすこと。又、其塊狀をなすもの。「肩の―」。（痓、痼）。

（じこりう［自己流］（名）自分一己の流儀。我流。

しこ・る［凝］（自、ら四）しこりになる。

廾しこ・る［頻］（自、ら四）度重なる。しきる、「しこり來めやも」。

しころ［錏］（名）㊀兜（カブト）の後に垂れて首筋を敝（オホ）ふもの。（錏）。㊁土藏に庇（ヒサシ）の如く並しかけたるもの。

（しこん［齒根］（名）はぐき。

（しこん［支根］（名）【植】主根より分岐せる根。

（じこん［自今］（名）このゝち。以後。而今。

（しさ［視差］（名）【天】觀測者の位置變ずるに從ひて、天體の位置の變じて視ゆること。天體を地上より視たる方向と地心よりの方向とのなす角。

（しさ［咨嗟］（名）ためいきつきてなげくこと。

（しさ［使差］（名）使者にやること、又、使者。

（しざ［尸坐］（名）（かたしろの如く坐する義）端坐して動かざること。

（じさ［時差］（名）㊀【天】眞の太陽時と平均時との差。㊁【地】兩地の地方時の差。

（じざ［侍坐］（名）はんべりてゐること。おそばにさぶらふこと。

（しさい［紫菜］（名）【植】「あまのり」に同じ。

（しさい［四祭］（名）支那の上代にて、四季の祭事の稱、春には祠といひ、夏には礿といひ、秋には嘗といひ、冬には烝といへり。

（しさい［四塞］（名）四方を要害の地にて圍みてあること。

（しさい［詩才］（名）詩を作る才能。

（しさい［史才］（名）歷史を述作する才能。

（しさい［子細］（名）㊀ことわけ。いはれ。ゆゑ。よし。㊁いちぶしじゆう。ゐさい。こまか。（仔細）

（しざい［資財］（名）生活又は職業の資本となる財產、用度又は經費を支出する資金。

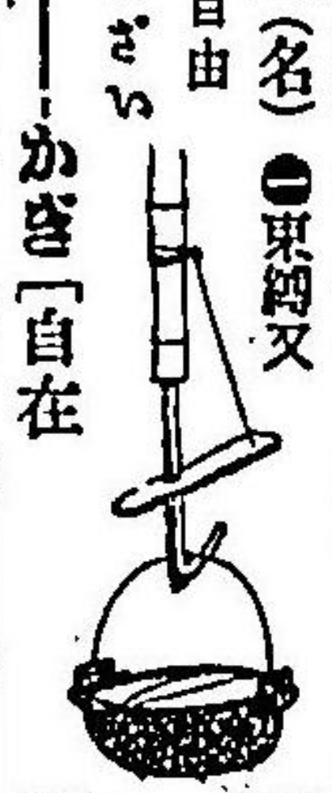
（しざい［死罪］（名）㊀【法】生命を絕（タ）つ刑罰、即ち、絞罪又は斬罪の類。㊁死すべき程の大罪といふ義、多く書簡文などに用ふ。「頓首―」。

（しざい［私財］（名）自分一己の財產。

（しざい［史材］（名）歷史の材料。

（しざい［詩材］（名）詩歌の材料。

（じさい［自裁］（名）自ら生命を絕（タ）つこと。自殺。



［じざいかぎ］

（じざい［自在］（名）㊀束縛又は障碍なきこと、自由なること。㊁「じざいかぎ」の略言。――かぎ［自在鉤］（名）上より吊（ツ）るし、自在に上下し得る裝置の鉤。〔――もち［自在餅］（名）「ぜんざいもち」の訛。

しさいに［仔細］（副）細かに。くはしく。精密に。

〔しさいもの［仔細者］（名）㊀わけあるらしき者。掛念なる者、怪しき者。㊁策略を運（メグ）らすに巧なる者、さくしゃ。

〔しさいらし［仔細］（形、二）㊀いはれあるらし。㊁もったいらし。

しさう［四三］（名）雙六（スゴロク）にて、二個の采の目に、四と三との出づること。

（しさう［詞藻］（名）㊀文句の修飾。ことばのあや。㊁詩歌又は文章。

（しさう［四葬］（名）水葬・火葬・土葬・林葬の稱。

（しさう［四相］（名）【佛】自己を有なりとするを即ち我相と、自己の展轉して餘趣におもむくとするを即ち人相と、自己の苦樂盛衰の相續すとなすを即ち衆生相と、自己の命根不斷なりとするを即ち命相との稱、四相に迷へば衆生にして、四相を覺（サト）れば佛なり。

（しさう［志操］（名）持（ト）りて變はらぬ主義。守りて動かぬ志向。こゝろざし。みさを。

（しさう［死相］（名）死に近き人相。死ぬべき相。

（しさう［詩草］（名）詩の草稿。

（しさう［死草］（名）かれくさ。

（しさう［思想］（名）㊀かんがへ。おもひ。㊁【心】經驗と思考とによりて生ずる意識の現象。――か［思想家］（名）思想にふける人。又、思想の豐富なる人。――かい［思想界］（名）思想の活動する範圍。又、思想を弄する社會。――くわ［思想化］（名）「しゆんくわ」（醇化）に同じ。

（しざう［四藏］（名）【佛】經・律・論・咒の稱。

（じさう［時裝］（名）其時のはやりの身なり。

（じさう［自創］（名）自己のもくろみ、自分のくふう。自分の發見。

（じさう［辭藻］（名）「しさう」（詞藻）に同じ。

（じさう［侍曹］（名）㊀そばに侍（ハン）べるもの。おそば。㊁「じし」（侍史）（二）に同じ。

（しさく［試作］（名）ためしに作ること。

（しさく［思索］（名）理由又は方法などを發見せんと、思想をめぐらすこと。かんがへもとむること。

（しさく［詩作］（名）詩を作ること。又、作りたる詩。

（しさく［史策］（名）れきし。きろく。

（じさく［自作］（名）てづくり。手製。

しさし［爲止］（名）しかけたること。しかけ。

じさし［字指］（名）書を讀むとき、書中の字を指すに用ふる箸（ハシ）の如きもの。おつき。（丁尾）。

しさ・す［爲止］（自、さ四）爲しかけて半途に止む。しのこす。

（しさつ［視察］（名）實地に就きて、事情をみとゞくること。「敎育―」。

（しさつ［伺察］（名）ひそかに事情をさぐりみること。

（しさつ［刺殺］（名）刺（サ）しころすこと。

（じさつ［自殺］（名）㊀自ら自己の生命を絕（タ）つこと。自害。㊁自ら自己の計畫又は議論をうちこはすこと。

しざま［爲樣］（名）なすさま。しやう。

しざ・る［退］（自、ら四）あとへひく。すざる。

（しさん［資產］（名）㊀一家の生計費を產出する有價の財物。㊁【經】所得を直接に消費せずして蓄積したるもの。

（しさん［齒算］（名）年の數。よはひ。年齡。

（しさん［四散］（名）ちりぢりになること。四方に散

風するを。

(じ-さん[自讃](名) ㊀自分の描(ヱガ)きたる畫に自分が題せし詞。㊁自分にて自分の事を褒(ホ)むること。

(し-さんじくわい[市參事會](名) 市の合議制度の執行機關、市參事會員を以てこれを組織し、市を代表し市の行政を執行す。——ゐん[市參事會員](名) 市參事會を組織する吏員、市長・助役及名譽職參事會員とす、市長は特別の規定あれど、助役及名譽職參事會員は、市會の選擧にのみよる。

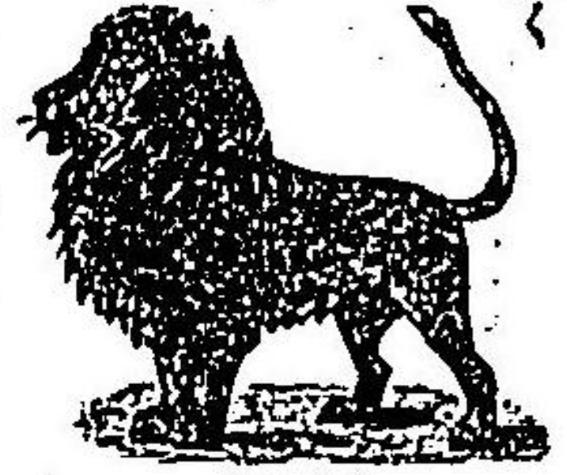
廿しし(名) 父の訛。(古昔のあづま言)。

しし[肉](名) にく。(宍)。

しし(名) ㊀けだもの。けもの。㊁[動]ゐのしし。(猪)。㊂[動]しか。(鹿)。

(し-し[尿](名) しい。しっこ。小便。(小兒の語)。

(し-し[獅子](名) ㊀[動]食肉類中猫科に屬する猛獸、多く「アフリカ」洲又は「ブラジル」國等に產す、頭圓くして大く、眼圓く、腰細くして尾長し、鬣毛は黃色にして、平素其爪を隱匿す、牡には鬣(タテガミ)ありて牝にはなし、古來稱して獸中の王といへり。カラしし。㊁「ししがしら」又は、「ししまひ」の略言。——うさぎをうつにぜんりよくをもちふ[獅子搏兎須全力](獅子は兎を搏殺するにも全身の力をこめてなすとの義)如何なる瑣細の事にても、等閑(ナホザリ)にせず精神を集注してこれをなすにたとへいふ。


[しし]

(し-し[四至](名) ㊀四方のさかひめ。「天地——」。㊁四方より至るを。

(し-し[嗣子](名) 家を嗣ぐ子。あとゝり。あとつぎ。

(し-し[支子](名) ㊀めかけばらの子。㊁わかれ出でたるもの。

(し-し[士子](名) さむらひ。

(し-し[四子](名) ㊀四人の子。㊁四番目の子。

(し-し[私子](名) 「しせいし」(私生子)に同じ。

(し-し[志士](名) 社會又は國家のために、身を抛(ナゲウ)ちて力を盡くす人。(愛國家、有志者)。

(し-し[死士](名) 決死の士。

(し-し[刺史](名) ㊀支那の一州の長官。㊁轉じて、國守又は知事の異稱。

(し-し[指示](名) ㊀さしをしふると。さししめすと。㊁さしづ。げぢ。(指揮)。

(し-し[市肆](名) みせや。

(し-し[詩史](名) 詩を以て事件の經過又は個人の傳記等を錄したるもの。「回天——」。

(し-し[私資](名) 自分の資產。

(し-し[四肢](名) 兩手と兩足との稱。

(し-し[死屍](名) しかばね。しにがら。かばね。

——をむちうつ[鞭死屍](名) (伍子胥が父兄の無念を晴(ハ)らすため、楚の莊王の屍を掘り出して、これをむちうちし故事に出づ)死にし人に對して、其行爲又は言說を復讐的に攻擊するにいふ。

(し-し[孜孜](名副) つとめて已(ヤ)まざるさまにいふ語。(孳孳)。

しし(感) ㊀警蹕(サキバラヒ)の聲。㊁禁じ止(ト)むる聲。

しじ[四時](名) 春・夏・秋・冬の稱、即ち、四季。「——の序」。(四序、四節)。

(し-じ[子事](名) 其人の子のやうに事(ツカ)へかしづくと。

(し-じ[師事](名) 師とあがめて事(ツカ)ふると。

(し-じ[私事](名) ㊀自分一己又は一家に關係したる事柄。㊁ないしようごと。かくしごと。

(し-じ[指事](名) 漢字の六書の一、其字形直に其意義を表するもの、例へば二の字の如し。

(し-じ[次子](名) ㊀次の子。次男。㊁二番目の子。

(し-じ[兒子](名) こども。

(し-し[侍史](名) ㊀傍に侍(ハン)べる書記。祐筆。㊁人に書を贈るに、侍史を經(ヘ)て差上ぐとの敬意を表して、宛名の下に書く語。

(じ-じ[時事](名) 當時の世上の事。

(じ-じ[時時](副) ㊀をり〳〵。とき〴〵。㊁しばしば、よく。

廿しし-いでん[紫宸殿](名) 「ししんでん」の略稱。

(し-しう[刺繍](名) ぬひとり。ぬひ。

(し-しう[四洲](名) [佛]須彌山の四方にある南瞻部洲・東勝神洲・西牛貨洲・北俱盧洲の稱。

(し-しう[四獸](名) 靑龍・朱雀・玄武・白虎の稱。

しし-うど[獨活](名) [植]繖形科に屬する草、形は土當歸(ドウ)に似て、毛多く莖滑(ナメラ)かならず、秋の頃、長じて六七尺となり、小形の白花開く、藥用に供せらる。いぬうど。

しし-おき[肉置](名) にくつき。

しし-がき[鹿垣](名) 枝付の儘の木を用ひたるさかもぎ。ろくさい。

しし-がしら[獅子頭](名) 木にて獅子の頭を刻みたるもの、獅子舞に用ふ。

廿しじかまる（らりるるれれ）(自、ら四) しじまる。ちゞまる。「くちなはえよらでしじかまりたりけり」。

廿しじか・む（まみむむめめ）[蹙](自、ま四) ちゞかむ。ちゞむ。「しゞかみたる髭」。

しし-がり[猪狩](名) 猪などをとる狩。

しし-きたくぼく[四色啄木](名) 啄木組の一種、紺・白・紫及萌黃の四色を以て打ちたる紐。

(しし-きゆう[獅子宮](名) [天]十二宮の一。

(しし-く[獅子吼](名) ㊀[佛](もとは如來の說法にのみいひたり)邪道異學を畏(オソ)れず、これを排擊して眞理正道を喝破すると、獅子吼(ホ)ゆれば百獸竦りかくるゝにたとへいふ。㊁(蘇東坡の詩に出づ)強悍なる妻の其良人に怒鳴りつくと。

しし-くはず[猪不食](名) [植](い)「おにあは」の一名。(ろ)「やぶかうじ」の一名。

(しし-こう[獅子吼](名) 「ししく」に同じ。

(じ-じこく〳〵[時時刻刻](副) 時刻を追いて。しだい〳〵に。

廿しし-こらか・す（さしすすせせ）(他、さ四) こじらす。

(しし-ざ[獅子座](名) [佛]佛の座席。轉じて、高僧の座席。

廿しし-じもの[鹿自物](枕) (鹿といふものゝ義)「はひふす」「膝折る」「弓矢」などに冠らする詞。「——ひざをりふせ」。

しし-しんちゆう-の-むし[獅子身中蟲](名) (獅子の身中に生じてゐながら、獅子の身に害を爲す蟲の義)㊀[佛]佛弟子にして佛法を毀害するもの。㊁轉じて、恩を仇でかへす者。主人又は味方の害をなすもの。

(し-そんぞん[子子孫孫](名) まごのすゑ、だい〳〵。

しし-だ[猪田](名) 猪などのふみあらす田。

(し-しだいめいし[指示代名詞](名) [文法]人以外の事物・場所・方角等をさし示すに用ふる代名詞、これ・それ・こゝ・そこ・こち・そち等の如し。

しし-たけ[猪茸](名) [植]一種の菌、濕地に生ず、傘柄は空虛にして長く、菌傘は恰も鹿の毛色に似る。

(し-しつ[資質](名) うまれつき。せいしつ。

(し-しつ[紙質](名) 紙のたち。

(し-しつ[至日](名) 冬至の日。

(じ-しつ[自失](名) ぼんやりすると。きぬけすると。

(じ-じつ[時日](名) ときとひと。とき、ひま。「——を費す」。

(じ-じつ[次日](名) 其つぎの日。

(じ-じつ[事實](名) ㊀實際の事がら。又、眞實の事わけ。㊁自然界にあらはれたる客觀的現象、ことがら。——さんかうにん[事實參考人](名) [法]裁判所が、審理する事件の參考として、宣誓を用ひずして訊問する人。

しし-づき[肉付](名) にくづき。(宍)。

しし-づく[肉荳蔲](名) 「にくづく」に同じ。

しし-づ・く（かきくくけけ）[肉付](自、か四) にくづく。

(しし-っぱな[獅子鼻](名) 「ししばな」に同じ。

廿しじ-に(副) しげく。しば〳〵。

しし-の-こおとし[獅子子落](名) 獅子が子を生めば、其強弱を試るために、これを千丈の谷になげこみ、落ちて死ぬる程の弱き子はすておき、中途にてはねかへり岩角によりつく程の強き子を、とりて乳養すといふと。轉じて、自分の子を艱難の地に置きて、其器量の程をためすにいふ語。

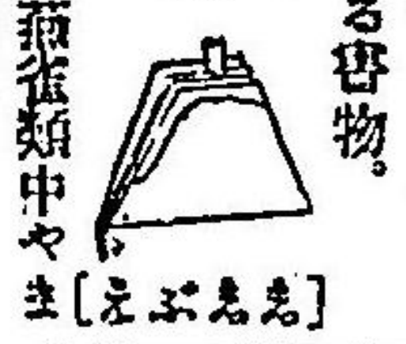
しし-ばな[獅子鼻](名) (しゝがしらの鼻の如き鼻の義)低くして小鼻の開きたる鼻。あまうけばな。

廿しし-びしほ[肉醬](名) 肉にて製したるひしほ、即ち今のしほからの類、支那にては、肉を乾かしてきざみ、これを麴(カウヂ)又は鹽に浸(ヒタ)してならし製すといふ。しほから。(醢)。

廿しし-ひと[宍人](名) 魚肉を料理する人。れうりにん。

(し-しふ[詩集](名) 詩を集めたる書物。

(しし-ぶえ[鹿笛](名) 鹿を誘(イザナ)ふために、獵師の吹く笛、鹿の耳の皮又は腹籠(ハラゴモリ)の皮にてつくる。


[ししぶえ]

しじふ-から[四十雀](名) [動]燕雀類中やまがら科に屬する鳥、禁止鳥の一なり、體軀矮小、嘴は小さくして尖(トガ)る、頭と翅(ツバサ)とは黑く頰(ホホ)白し、鳴く聲すゞやかなり。(白頰鳥)。

(しじふく-にち[四十九日](名) [佛]人の死にて後、四十九日目に行ふ法事。

(しじふしち-し[四十七士](名) 元祿十五年、淺野長矩の遺臣にして、主君の遺志を承(ウ)け其怨敵吉良義英を打取りし四十七人の稱、即ち大石良雄(內藏助)・吉田兼亮(忠左衛門)・原元辰(總右衛門)・間瀨正明(久太夫)・小野寺秀和(十內)・間光延(喜兵衛)・礒貝正久(十郎左衛門)・堀部金丸(彌兵衛)・近松行重(勘六)・富森正因(助右衛門)・潮田高敎(又之丞)・早水滿堯(藤左衛門)・赤埴重賢(源藏)・奥田重盛(孫太夫)・矢田助武(五郎右衛門)・大石信淸(瀨左衛門)・片岡高房(源五右衛門)・大石良金(主稅)・堀部武庸(安兵衛)・中村正辰(勘介)・菅谷政和(半之丞)・不破正種(數右衛門)・千葉光忠(三郎兵衛)・木村貞行(岡右衛門)・岡野包秀(金右衛門)・貝賀友信(彌左衛門)・大高忠雄(源吾)・岡島常樹(八十右衛門)・吉田兼貞(澤右衛門)・武林隆重(唯七)・倉橋武幸(傳助)・村松秀直(喜兵衛)・杉野次房(十平次)・勝田武堯(新左衛門)・前原宗房(伊助)・間光風(新六)・小野寺秀富(幸右衛門)・間光興(十次郎)・奥田行高(定右衛門)・矢頭敎兼(七右衛門)・村松高直(三太夫)・間瀨正辰(孫九郎)・茅野常成(和介)・橫川宗利(勘平)・神崎則休(與五郎)・三村包常(次郎左衛門)・寺坂信行(吉右衛門)の稱。

しじふはっ-たか[四十八鷹](名) 鷹には四十八の種類ありといふと。

しじふはっ-て[四十八手](名) ㊀相撲(スマフ)の手の總稱、頭にて行ふを反(ソリ)といひ、手にて行ふを捻(ヒネリ)といひ、腰にて行ふを投(ナゲ)といひ、足にて行ふを掛(カケ)といひて、おの〳〵十二の變化あるより

いふ。㊂人をあやなす手段。――の-うらおもて[四十八手裏表](名) ㊀相撲(スマフ)の四十八手のもの〳〵に裏と表との變化あること。㊁いろ〳〵變化の手段。「――をつくし」。

(しし-ふんじん[獅子奮迅](名) 獅子の怒り奮(フル)ふが如く、滿身に力をこめ勢烈(ハゲ)しく突進すること。「――の勢」、「――の亂」。

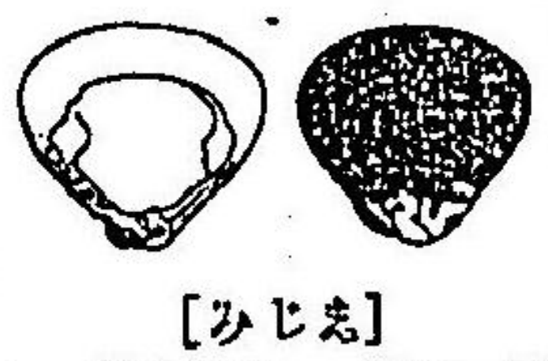
廿しじま[無言](名) 口をつぐむこと。無言なること。「うきみには、――をだにも、えこそせね」。

しし-まひ[獅子舞](名) 獅子頭を被(カブ)りて舞ふ舞樂、惡魔を破(ハラ)ふ意のものといふ。

廿しじま・ふ[蹙](自、は四) 進退きはまる。(趑趄、進退)。

しじま・る[蹙](自、ら四) ちゞまる。かゞまる。(退縮、萎縮)。

しじみ[蜆](名)【動】瓣鰓類中同柱類に屬する貝、介殼は心臟形をなして膨(フク)る、表皮は稍や厚くして稜層をなす、外面は暗褐色にして內面紫色なり、淡水の軟泥地に棲息す。(扁螺)。――がひ[蜆貝](名) ㊀【動】前條に同じ。㊁しゞみの介殼。――かひ[蜆貝](名) 前條に同じ。――ばな[蜆花](名)【植】「こゞめざくら」の一名。


[しじみ]

廿しじ・む[縮](自、ま四) ちゞむ。

廿しじ・むる[縮](他、ま下二) ちゞます。

しし-むら[肉](名) 聚(アツマ)りたる肉塊。(胾)。

しじめ[蜆](名)【動】「しじみ」の訛。

廿しし-め・く(自、か四) 額をしかむ、「笑はんとぞししめきける」。

(し-しや[使者](名) 上命を受けてつかひする人。つかひのもの。つかひ。

(し-しや[死者](名) 死にしもの。

(し-しや[支社](名) ㊀神社の分派。まっしや。㊁會社又は團體の分派。

(し-しや[詩社](名) 詩人の團體。詩人の仲間。

(し-しや[侈奢](名) ㊀おごりたかぶること。てらひほこること。㊁分外の費用。過度の生活。

(し-しや[肆赦](名) 罪をゆるすこと。

(じ-しや[侍者](名) 貴人の側近くはんべるもの。おそば。

(じ-しや[寺社](名) 寺とやしろと。神社と佛閣と。

(じ-しや[辭謝](名) いなみことわること。(辭退)。

(し-しやう[祠掌](名) 下級の神官。

(し-しやう[司掌](名) つかさどること。うけもつこと。又、其人。つかさ。

(し-しやう[私償](名) わたくしのつくのひ。ない〳〵のつくのひ。

(し-しやう[師匠](名) ㊀學問又は技術等を教授する人。㊁遊藝を教ふる者の特稱。(東京の方言)。

(し-しやう[死傷](名) 死したるときずつきたること。死者と負傷者と。

(し-しやう[支障](名) さしさはり。

(し-しやう[四聖](名)【佛】佛・菩薩・聲聞・緣覺の稱。

(し-しやう[四生](名)【佛】胎生・卵生(鳥など)・濕生(蛙など)・化生(蝶など)の稱。

(し-しやう[四障](名)【佛】衆生の正道に於ける四つのさはり卽ち、貪・瞋・癡より起る惑障と、身・口・意の惡業より起る業障と、諸惡趣の報を感ずる報障と、邪見を起し菩提心を失する見障とをいふ。

廿し-しやう[史生](名) 古昔の官名、主典の次にして醫師(クスシ)・醫師(オホユシ)などこれに屬し、公文を書くことを掌りしもの。

(し-じやう[私情](名) ㊀わたくしの利益を計る心。㊁自分一己の情愛。一私人としての情誼。

(し-じやう[至情](名) ㊀情のきはみに達したること。まごゝろ。㊁至極もっともの情、當然の情。

(し-じやう[詩情](名) 詩の興味。

(し-じやう[市上](名) まちなか。

(じ-しやう[自省](名) 自ら反省すること。自らかへりみて注意すること。

(じ-しやう[自性](名) 其ものゝ本性。

(じ-じやう[事情](名) ㊀ことがら。ことわけ。㊁ことがらのありさま。ことがらの實際。(事狀)。

(じ-じやう[辭讓](名) 辭して人に讓(ユヅ)ること。ことわりゆづること。(辭退)。

じしや-かた[寺社方](名) 寺社奉行又は其部下。

(し-しやく[子爵](名) 五等爵の第四位。

(じ-しやく[磁石](名) ㊀【鑛】磁鐵鑛の一名。㊁鐵又は「ニッケル」等を吸引する性質あるもの。㊂「じしやくばん」の略言。――ばん[磁石盤](名) 方位を測るに用ふる器械、盤の中央に磁針の水平に廻轉するやう裝置し、其周圍に方位を指す盛(モ)りたるもの。磁針は地球の兩極の方位を指すが故に、これによりて方角を測ることを得。(羅針盤)。

(じ-じやく[自若](名) 物事に臨み、精神態度の少しも常と變ぜぬさまにいふ語。

(ししや-ごにふ[四捨五入](名)【數】省略算にて、端數の初桁(ケタ)が、四なるときは其まゝ切捨て、五なるときはこれを十として本數の最後の桁に一を加ふること。

じしや-だまり[寺社溜](名) 昔時、勸進相撲(スマフ)の興行場にて、寺社方の場內取締のために出張して居りし所。

じしや-ぶぎやう[寺社奉行](名) 德川時代の三奉行の一、寺社の事を掌りしもの。

(し-しゆ[詩酒](名) 酒と詩と。又、詩をつくり酒を飮むこと。又、詩會をなし酒宴を張ること。――つゐちく[詩酒追逐] 互に相會して詩をたゝかはし酒を酌みて遊ぶこと。

(し-しゆ[旨酒](名) あぢよきさけ。うまきさけ。

(し-しゆ[旨趣](名) むね。おもむき。わけ。

(し-しゆ[詩趣](名) 詩にいひあらはすべきおもむき、又、詩にのべあらはしたる如きおもむきありさま。

(し-しゆ[死守](名) 死を決して守ること。いのちがけにて守ること。

(し-しゆ[錙銖](名) (支那の古代、十粒の黍を銖とし、八銖を錙とせり)極めて少量の物事にいふ語。

(じ-しゆ[自首](名) 犯罪人が未だ發覺せざる自己の犯罪を、自ら官に告知して其處置に就くこと。又、逮捕をのがれたる犯罪人が、自ら官に訴(ウッタ)へ出でゝ縛につくこと。

(じ-しゆ[自主](名) ㊀獨立して、他の保護干涉を受けざること。自分の事は自分で處置すること。㊁自己が主動者たること。㊂【法】自己が權力の本體なること。

(し-しゆう[四衆](名)【佛】比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の稱。

(し-じゆう[始終](名) ㊀はじめとをはりと。㊁相伴(トモナ)ふこと。「相――す」。

(し-じゆう[始終](副) 初めよりをはりまで。たえず。つねに。(始中終)。

(じ-しゆう[時宗](名)【佛】淨土宗の分派、阿彌陀經を所依とし、相摸國藤澤の淸淨光寺を本山とす、建治二年、一遍上人創めて開きしもの、其諸國を遊行してこれを弘めしより、一に遊行派といふ。

(じ-じゆう[侍從](名) ㊀古昔、中務省の所屬にして、御前の雜事に給仕せし職名。㊁侍從職の職員、常侍奉仕して御服御物を分掌するもの。――しき[侍從職](名) 宮內大臣の統轄の下に屬し、常侍奉仕して主管に屬する御服御物を管守する宮內省の一局。――しよく[侍從職](名) 前條に同じ。――ちやう[侍從長](名) 侍從職の職務を總理し、職員を監督する親任官。

じじゆう-ぶくわん[侍從武官](名) 天皇に常侍奉仕し、軍事に關する奏上・奉答及命令の傳達に任じ、觀兵・演習其他すべて公然の儀式に屬從する陸海軍の參謀官。――ちやう[侍從武官長](名) 侍從武官の高級故參のものを以て補せられ、侍從武官の勤務を規定し監督するもの。

(し-じゆうみん[市住民](名) 市內に住居する人民。しみん。

じしゆ-かう[十種香](名) 栴檀・沈水・蘇合・薰陸・鬱金・白膠・靑木・零陵・甘松・雞舌の十種の香料の稱、古昔、人々此等の香を持ち寄りて香合したるなりといふ。

(し-しゆく[私淑](名) 其人に親炙せずして、私(ヒソカ)にこれを模範として學ぶこと。

(し-しゆく[止宿](名) やどること。とまること。(寄宿)。

(し-じゆく[私塾](名) 私立の塾。

(じ-しゆけん[自主權](名) ㊀【法】國家が國家の發達自存の目的を遂行するために、意思を主張し行使し得る權力。㊁自主自由の權。又、自主權能。

じしゆ-げんけい[自首減輕](名)【法】犯罪人の自首によりて、其刑罰の等を減輕すること、法律上の減輕なり。

じしゆ-けんのう[自主權能](名)【法】個人が個人の身體及財產の維持發達のために、法律の範圍內に於て、自己の意思を主張し決行し得る權能。

じしゆ-じいう[自主自由](名) 自分の事は自分の自由に屬し、敢て他人の干涉をゆるさずといふこと。「――の權」。

(し-しゆつ[支出](名) ㊀金錢又は物品を支拂ふこと。㊁わかち出だすこと。又わかれ出づること。

(し-しゆつ[四出](名) 四方へ出づること。又、四方へ出だすこと。

(し-じゆつ[施術](名) 手術を施すこと。

じしゆ-てきぐわいかう[自主的外交](名) 國家が自主權の行使により、他の國家の意思を羈束する外交。又、一の國家が國際事件の主動者となりて行動する外交。

ししゆ-るゐ[四手類](名)【動】猴(サル)などの如く、二足にても二手の如く自由に物を握(ニギ)り得る動物の稱。

(し-じゆん[諮詢](名) とひはかること。相談。

(し-じゆん[視準](名)【理】望遠鏡の軸を、望むべき物體の方向に平行せしむること。――きやう[視準鏡](名)【天】天體觀測用の望遠鏡に附屬し、且これにとりつけたる小さき望遠鏡、天體を望まんとするとき、先づ此望遠鏡にて天體の方位を知り、然る後大いなる望遠鏡にて觀測す。――ごさ[視準誤差](名)【理】視準正しからざるとき起る誤差、卽ち、望遠鏡の軸と物體を望む方向とのなす角。――せん[視準線](名)【理】望遠鏡の對物「レンズ」の中心と、接眼「レンズ」の內方にある十字線の交叉點とを結ぶ線。

(じ-じゆん[耳順](名)(論語に出づ)㊀品性の修養ますます進み、心一切の外物と融合して、耳にする所何等の障礙をも生ぜざること。㊁六十歲の異稱。

(し-しよ[四書](名) 大學・中庸・論語・孟子の稱。

(し-じよ[士庶](名) さむらひとへいみんと。又、しも〴〵。人民。

(し-しよ[私書](名) ㊀ないしようのてがみ。㊁一私人の書狀又は書類。

(し-しよ[死處](名) 死ぬる場所、又、死ぬべき場所。

(し-じよ[齒序](名) 年齡の順序。

(じ-しよ[璽書](名) 御璽のすわりてある御書。

(じ-しよ[自書](名) 自身で書くこと。

(じ-しよ[辭書](名) ㊀言辭をあつめて解釋したる書物。「英和―」。㊁辭彙。

(じ-しよ[字書](名) 文字をあつめて解釋したる書物。おびき。(字引)。

(じ-しよ[自署](名) 自分で自分の姓名をかくこと。

(じ-じよ[自序](名) 自分の著述又は編纂の書に、自ら記する序文。(自敍)。

(し-じよ[次序](名) しだい。ついで。

(じ-じよ[自助](名) 自分で自分を助くること、即ち、他人のおかげに賴(ヨ)らず、自分の力を盡くして事を行ひ世をわたること。「―の精神」。

(し-しよう[恣縱](名) ほしいまゝ。きまゝ。(肆縱)。

(し-しよう[支證](名) 罪なきことの證據。

(し-しよう[刺衝](名) ㊀さし衝(ツ)くこと。㊁刺戟。

(し-じよう[史乘](名) れきし。

(じ-しよう[自稱](名) ㊀自ら稱(ナト)ふること。㊁他人の認(ミト)めぬを、自分獨りにてしか稱ふること。「―紳士」、「―文士」。

(じ-しよう[自證](名) 自ら己の證明となること。

(じ-じよう[自乘](名) 【數】同じ數二つを掛け合はすること、3に3を乘ずる類。――すう[自乘數](名) 【數】或數の自乘によりて成りたる數、9は3の自乘數なり。

(じじよう-じばく[自繩自縛](名) (自分の繩にて自分をしばる義) 自分の行爲のために、自分を苦しむること。自分の煩惱のために、自分を苦しむること。

(じしよう-だいめいし[自稱代名詞](名) 【文法】自分の名にかへて用ふる代名詞、即ち、われ・おのれ等の如し。人代名詞の第一人稱。

(しじよ-かいだん[四所戒壇](名) 東大寺・藥師寺・觀音寺・延暦寺の稱。

(ししよ-ぎざう[私書僞造](名) 【法】手形・證書其他權利義務に關係する私書を僞造又は增減變換すること。――かうし[私書僞造行使](名) 【法】私書を僞造若しくは增減變換して、これを行使すること。

(し-しよく[四職](名) ㊀左京職・右京職・大膳職・修理職の稱。㊁足利時代の山名・一色・細川・畠山の四家の稱。

(し-しよく[姿色](名) ㊀みめかたち。㊁みめかたちのうつくしきこと。

(し-しよく[死色](名) 死に近きやうす。

(じ-しよく[侍食](名) はんべりて食事すること。しやうばん。

(じ-しよく[耳食](名) ㊀眞正の味を知ること能はざること。㊁なまものしり。きゝかじり。

(じ-しよく[辭色](名) ことばつかひとかほいろと。「―共に厲し」。

(じ-しよく[辭職](名) 職を免ぜられんことを願ひ出づること。又、許可を得て其職を去ること。

(しじよ-しようしよ[私署證書](名) 公正證書に對して、私人の作成したる證書の稱。

しじら[縬](名) 縮緬の如く地の縐(チヾ)みたる絹。熨斗目の對。(縐)。「―の綾貫」。――ぎ[縬](名) ㊀前條に同じ。㊁縐の縮みたる文(アヤ)。

(しし-わう[獅子王](名) 獅子を貴していふ語。

卄しし-わき[腠](名) (肉分の義)肌膚の肉理。きめ。肌理。

(し-しん[始審](名) 【法】訴訟の第一次の審判。控訴又は上告の對。

(し-しん[指針](名) ㊀磁石盤の磁針。㊁すべて物を指示するために裝置したる針。㊂嚮導となるもの。「學術の―」。

(し-しん[仕進](名) 官途に出仕すること。「―の路」。

(し-しん[私信](名) ㊀ない〳〵の通知。わたくしのおとづれ。㊁一私人の音信。

(し-しん[私心](名) ㊀自分一己のかんがへ。㊁私慾をはかるこゝろ。

(し-しん[死心](名) 死を厭(イト)はざる心。一心不亂。

(し-しん[使臣](名) 大使又は公使などの稱。

(し-しん[史臣](名) 記錄の事をつかさどる職名。

(し-しん[四箴](名) 「しふつ」(四勿)に同じ。

(し-じん[四神](名) 天の四方の星の象、即ち青龍(東)・朱雀(南)・玄武(北)・白虎(西)の稱。

(し-じん[至人](名) 道德の極致に造詣したる人。

(し-じん[私人](名) 國家又は社會に對して、一個人の稱。

(し-じん[市人](名) ㊀市に住(ス)む人。㊁商賈する人。

(し-じん[詩人](名) 詩を作る人。又、詩に巧なる人。(詩客)。

(じ-しん[侍臣](名) 側に仕ふる臣下。おそば。

(じ-しん[慈心](名) 慈愛の心。いつくしみ。

(じ-しん[磁針](名) 針狀の磁石を其中央にて支(サヽ)へたるもの、普通は鉛直軸にて支へ水平に運動

することを得るものなれど、又、水平軸にて支へたるものもあり。

(じ-しん[自身](名) おのれみづから。じぶん。自己。

(じ-しん[自信](名) 自ら自分の價値又は能力を信ずること。自ら自分の意見又は主義を疑はざること。自ら信ずること。

(じ-じん[自刃](名) 自ら刃(ヤイバ)によりて死ぬること、じがい。じさつ。

(じ-じん[自盡](名) 自ら自分の命をたつこと。じがい。

(じ-じん[慈仁](名) いつくしみめぐむこと。なさけぶかきこと。

(じ-じん[寺人](名) 後宮に仕(ツカ)ふる者。

(じ-じん[侍人](名) おそば。きんじ。

(じ-じん[時人](名) 其時の人々。

(じしん-ぎ[時辰儀](名) 「とけい」(時計)に同じ。

(ししん-くわいぎ[使臣會議](名) 二國以上の使臣が、會合してなす國際事件の會議。

(ししん-けい[視神經](名) 【生】物を視ることを掌る神經、即ち眼球より腦髓に達する神經。

(ししん-けいざい[私人經濟](名) 一私人の經濟。かせいけいざい。

(ししん-さうおう[四神相應](名) 天上の四神に相應したりといふ最も貴き地相、左に流水あるを青龍とし、右に長道あるを白虎とし、前に汙地あるを朱雀とし、後に丘陵あるを玄武とす。

(ししん-でん[紫宸殿](名) 京都禁中の正殿、大禮を行はるゝ所にして、南面して設けられ、殿階の左に櫻を右に橘を植ゑたり。ししいでん。なんでん。(南殿)。

(ししん-とう[四親等](名) 【法】親等の一、或人と其人又は其人の配偶者より、四世を隔つる者との

關係、例へば或人と其曾孫の子若しくは曾祖父母の父母との關係、又は配偶者の曾孫の子若しくは曾祖父母の父母との關係の如きこれなり。

じしん-どり[自身捕](名) 德川時代に、自身番の人が、罪人を捕(トラ)へしこと。又、其罪人。

ししん-の-はた[四神旗](名) 天上の四神即ち青龍・朱雀・白虎・玄武を描(ヱガ)きたる四本の旗。

(じしん-ばん[自身番](名) 德川時代に、江戸の市中にありて、町々の事を守りたる番屋、此所に町役人詰(ツ)めゐたり。――や[自身番屋](名) 自身番の家。

(じしん-りよく[自信力](名) 自ら信ずる所を確(カタ)く守る意志の力。

(ししんわう-け[四親王家](名) 伏見宮・有栖川宮・桂宮・閑院宮の稱。

(じじん-えんるゐ[似人猿類](名) 【動】東半球の特產なる猿類、兩鼻孔は相接近し、尾なく、一見人と誤認せらるゝもの、猩猩などこれなり。類人猿類。

し・す(せ、し、す、する、すれ、せよ)[死](自、さ變) 死ぬ。みまかる。

卄し・す(せ、し、す、する、すれ、せよ)[死](他、下二) 死なす。ころす。

し・す(せ、し、す、する、すれ、せよ)[弑](他、さ變) 「しいす」に同じ。

じ・す(せ、し、す、する、すれ、せよ)[辭](他、さ變) ㊀辭退す。いなむ。㊁返却す。かへす。㊂まかり出づ。暇申す。㊃去る。「世を―」。

じ・す(せ、し、す、する、すれ、せよ)[侍](自、さ變) はんべる。さぶらふ。

じ・す(せ、し、す、する、すれ、せよ)[次](自、さ變) ㊀つぐ。つゞく。㊁とゞまる。とまる。㊂至る。「―骨」。㊃やどる。宿す。㊄星其座に移る。

(し-すう[指數](名) 【數】或數の羃又は乘根を示す數字又は文字の稱、其數の肩に附記す、例へば、a^3, a^x, a^z, にて 3 x z の如きこれなり、而して

同文字より成る數多の羃の積は、各因數の指數の和を指數とする同文字の羃なり、例へば $a^2\times a^3\times a^5=a^{10}$ の如し、又、步合算にて步合高の稱。――はうていしき[指數方程式](名) 【數】或項の指數に、未知數を有する方程式の稱、例へば $a^x=a$ の如し。

卄し-す・う(ゑ、ゑ、う、うる、うれ、ゑよ)[爲居](他、わ下二) すう。「家にすゑて」。

(し-すう[次數](名) 【數】指數の和より成る數、一の項の次數とは、其項の各因數の羃を示す指數の和にして、一數の羃の次數は其指數なり、又、方程式の次數は、其中にある未知數の最高羃の指數をいふ。

し-す・ま・す(さ、し、す、す、せ、せ)[爲濟](他、さ四) 爲し遂(ト)ぐ。爲し終(ヲ)はる。

(し-すゐ[止水](名) ㊀流れぬ水。動かぬ水。㊁たまり水。㊂武術のかたの名。

(し-すゐ[四陲](名) 四方の邊境。

(し-ずゐ[雌蘂](名) 【植】花の緊要機關、その中央にありて柱頭・花柱・子房の三部よりなる。

(じ-すゐ[自炊](名) 自ら飯を炊(タ)くこと、自ら自分の食事をとゝのふること。

(じ-すゐ[自水](名) みなげ。入水。

卄し-すゑ[尻居](名) 古昔、土器の下に敷きたるもの。けいしし。

(し-せい[資性](名) もちまへ。うまれつき。(資生)。

(し-せい[詩聖](名) 古今に傑出せる詩人。

(し-せい[熾盛](名) 勢のおこりさかること。

(し-せい[死生](名) 生と死と。いきしに。しやう名。「―有命」。

(し-せい[四姓](名) 源・平・藤・橘の稱。

(し-せい[市井](名) (支那の上代に、井(ヰ)ある所

に人の集居せしよりいふいち。まち。「—の無賴」。

(しせい［市政］(名) 市といふ自治體の行ふ政務。「—を布く」。

(しせい［市制］(名) 市の構成又は機關若しくは權限等に關する規定。

(しせい［施政］(名) 政務の施行。「—の方針」。

(しせい［姿勢］(名) からだのさま。からだつき。

(しせい［四聲］(名) 漢字の韻を四別したるもの、即ち、平聲・上聲・去聲・入聲の稱。

(しせい［私生］(名) 公然たらざる夫婦間の出產。

(しせい［私製］(名) 一私人の製作。「—端書」。

(しせい［試製］(名) ためしの製作。

(しせい［紙製］(名) 紙を原料としての製作。

(しせい［至誠］(名) 極めて純粹にして剛健なるまごゝろ。「—天に通ず」。

(しせい［至正］(名) すこしも偏頗なきこと。最もたゞしきこと。

(しせい［市稅］(名) 市が其財產より生ずる收入及使用料其他諸種の收入を以て支出に充(ア)て、尚ほ不足ある場合に、市住民に賦課する國稅・府縣稅の附加稅及直接間接の特別稅の稱。

(じせい［時勢］(名) 世のありさま。ときのいきほひ。よのなりゆき。「—にうちあひて」。

(じせい［時世］(名) 「じだい」(時代)に同じ。

(じせい［辭世］(名) (世を辭する義) ㊀死ぬること。㊁死ぬる時に殘(ノコ)す詩歌。(絕命詞)。

(じせい［自制］(名) 自ら慾望を制して、理性又は良心の命令に從ふこと。

(じせい［自製］(名) 自ら作ること。又、自ら作りたるもの。

(じせい［自生］(名) 人の種植によらず、自然に生ずること。おのればえ。(自然生)。

(じせい［磁性］(名) 磁石に吸引せらるゝ性質。

(じせい-おん［次淸音］(名) 【文法】「はんだくおん」(半濁音)に同じ。

(しせい-くわん［司稅官］(名) 稅務管理局の高等官。

(しせい-げんそ［雌性元素］(名) 卵子の稱。

(じせい-さんくわてつ［磁性酸化鐵］(名) 【化】鐵を酸素中にて熱するか、又は熱したる鐵屑の上に水蒸氣を通ずるときに生ずる黑色の酸化物、磁性を有するが故に此名あり、天然にも磁鐵鑛となりて存在す。

(しせい-し［私生子］(名) ㊀【法】私生の子、母方の戶籍に編入せらるゝもの、父の認知によりて庶子となる。㊁てゝなしご。ないしよご。

(しせい-じ［私生兒］(名) 前條に同じ。

(じせい-しよくぶつ［自生植物］(名) 【植】山野に自然に生ずる植物、しばくさなどの類。

(しせい-せきばん［紙製石盤］(名) 紙を厚く貼(ハ)り面を黑くして、石盤の如く製したるもの。

(しせう［私消］(名) わたくしに消費すること。

(しせう［嗤笑］(名) ものわらひ。そしり。

(しせう［至小］(名) 極めてこまかきこと。

(しせき［咫尺］(名) (八寸と一尺との義) 近きこと。又、短きこと。「天顏に—す」。

(しせき［士籍］(名) さむらひの人別。さむらひの分限。

(しせき［史籍］(名) れきし。又、しよもつ。

(じせき［事績］(名) しごと。いさを。

(じせき［事蹟］(名) 事のあとかた。

(じせき［次席］(名) 其つぎの席。

(じせき［磁石］(名) 「じしやく」に同じ。

(しせき-えい［紫石英］(名) 【鑛】むらさき色の水晶。

(しせつ［使節］(名) (支那の上代に、使者に旄(ハタ)の節(シルシ)を授けしよりいふ) 國家又は君王の命を奉じて、他國に使する者。ししや。ししん。

(しせつ［私設］(名) ㊀私人の設立。「—鐵道」。㊁個人又は或一部のもの、使用に供するための設立。

(しせつ［施設］(名) こしらへ設くること。ほどこしつくること。

(しせつ［死絕］(名) 氣息絕(タ)えて死ぬること。

(じせつ［自說］(名) 自分の主張する意見。

(じせつ［時節］(名) ㊀ころ。時候。「陽和の—」。㊁とき。時世。㊂をり。時機。

(じせふ［侍妾］(名) こしもと。又、そばめ。

(しせん［詩箋］(名) 詩を記する料紙、罫又は人物花鳥等の模樣あるもの。(吟箋)。

(しせん［指尖］(名) ゆびさき。

(しせん［私擅］(名) 自分勝手。きまゝ。ほしいまゝ。

(しせん［死戰］(名) 死にものぐるひになりて戰ふこと。決死のたゝかひ。(殊死、血戰)。

(しせん［紙線］(名) かうより。

(しせん［支川］(名) えだがは。

(しせん［支線］(名) 本線より分かれたるえだの線。「鐵道の—」。

(しせん［詩仙］(名) 普通人の及ぶべからざる天才ある詩人。

(しせん［子錢］(名) 利息。利子。——**か**［子錢家］(名) かねかし。

(しせん［資錢］(名) もときん。ぐわんきん。

(しせん［至善］(名) ㊀最上の善。㊁善惡の差別を超越したる一段高き狀態。「心の本體は—」。㊂【倫】人生の至高の目的又は理想。

(しぜん［自然］(名) ㊀人爲の加はらざる狀態。本來のまゝ。㊁爭ふべからざる趨勢、人力の左右し得ざる狀態。㊂造化の力又は道。「—に則る」。㊃本性。天性。㊄【哲】狹義にては、山川草木其他有形的現象の稱。廣義にては、世界全體を包括し、認識の對象となりて外界に實在する現象のすべてをいふ、故に廣義にては、精神現象もまた一の自然現象なり。㊅【經】人類以外に存する外界の稱、即ち、吾人に生產物の原料と勢力に代はる一種の力とを供するもの、分つて自然物と自然力との二とす。——**かい**［自然界］(名) 認識の對象となるすべての外界。吾人以外に存する外界。天地萬物の存在する範圍。——**くわがく**［自然科學＝Natural science］(名) 自然の物質的現象を研究する科學、即ち動植物學・理化學等の類。——**けうきやう**［自然教＝Natural religion］(名) 自然崇拜の宗教即ち原始の宗教、其神々はたゞ強力なる活物と思惟せられ、其慈恩を得て幸福を享けんがため、所有物中最も貴重なるものを神前に捧げ、又は宏壯なる殿堂を築きなどして、神意に承順せんとする風あり。——**しゆぎ**［自然主義＝Naturalism］(名) ㊀自然の順序・法則若しくは狀態・作用等に根據して、說を立て又は事を行ふ主義。㊁【哲】宇宙の說明は物質の說明と同樣に、形而上的原理によらずしてなし得といふ主義、又、唯物論。——**じん**［自然人］(名)【法】一個の人類にして權利の主體たるもの。法人の對。——**せつ**［自然說］(名) 自然主義に同じ。——**すうはい**［自然崇拜］(名) 自然物又は自然力を神と思惟して崇拜すること。——**たうた**［自然淘汰＝Natural selection］(名) 外界の狀態に適したる者は、競爭に勝ちて生存し、外界の狀態に適せざるものは、競爭に敗れて死滅する狀態。人爲淘汰の對。——**てつ**［自然鐵］(名)【鑛】鐵の遊離して天然に存するもの、往々隕石などの中に存在す。——**てつがく**［自然哲學＝Natural philosophy］(名) 自然の本體・過程及理想を研究する哲學。——**どう**［自然銅］(名) 遊離して自然に存する銅、古來我國に產出すること多し。——**はふ**［自然法＝Natural law］(名) ㊀【哲】自然を支配する原因結果の法則。㊁【法】一切の法律以外に存する自然の法、或は人類が自然の狀態に生息するに當りて行はるゝ法則といひ、或は人類の理性中に自然に存する法則といふ。——**び**［自然美］(名) 自然界にあらはるゝ美、山・水・風・月などの類。——**ぶつ**［自然物］(名) ㊀自然界に現出する有形物。㊁【經】生產物の材料を供給するもの、即ち、禽獸・魚介・草木・果實・鑛物等の如し。——**ぶんるゐ**［自然分類＝Natural system］(名) 動植物の性質の異同を比較し類別して系統を立てたるもの。——**りよく**［自然力］(名) ㊀自然界の作用。㊁【經】人類の勞力を補助する自然の力、分つて原始的自然力と誘導的自然力とす、前者は風力・水力等をいひ、後者は電氣力・蒸氣力等をいふ。——**りつ**［自然律］(名) 自然法に同じ。

(しぜん［自然］(副) おのづから。おのづと。

(じせん［自擅］(名) 自分で勝手にすること。わがまゝにふるまふこと。

(じぜん［慈善］(名) ㊀あはれみ助くること。なさけをかくること。㊁窮民・孤兒其他窮苦に陷(オチイ)りて自活する能はざるものなどを救助すること。——**か**［慈善家］(名) よく慈善を行ふ人。——**くわい**［慈善會］(名) 慈善に投ずる資金を得んため、特別の入場料をとりて催(モヨホ)す興行又は特別の價格にて物品を販賣する會等の稱。又、すべて慈善事業を擧行するために催す會合の稱。——**じげふ**［慈善事業］(名) 慈善の事を計畫し經營すること。——**だんたい**［慈善團體］(名) 慈善事業を目的とする團體。

(じせん-とうへう［自選投票］(名) 選擧者が自分を投票すること。

(しそ［紫蘇］(名) 【植】唇形科に屬する草、葉は通常紫色の下面を有し、花は通常淡紅色若しくは紫色を呈す、葉及果實を食用とす。

(しそ［嗜素］(名) 【生】食物に香味を附し食官を刺戟して其分泌を增し腸の運動を助くるもの。

(しそ［私訴］(名) 【法】犯罪によりて生じたる損害の賠償若しくは贓物の返還等を、公訴に附帶してなす訴訟。

(しそ［始祖］(名) ㊀先祖。元祖。㊁【佛】禪宗にて、達磨の稱。

(しそ［尸素］(名) (尸位素餐の略言) 無能にして徒(イタヅラ)に祿を受くること。

廿**(じそ**［辭書］(名) 辭表。「—を奉る」。

(じそ［自訴］(名) 自首すること。

(しそう［詩宗］(名) 多くの詩人に、仰(アフ)がれたふとばるゝ詩人。

(しそう［駛走］(名) はやくはしること。すみやかにかけること。

(しそう［詞宗］(名) 「しけい」(詞兄)に同じ。

(しそう［指嗾］(名) 人をそゝのかすこと。

(じゾウ［寺僧］(名) 其寺にゐる僧。

廿**(しそく**［紙燭］(名) 古昔、禁中の座敷に用ひたるともしび、燒松(タイマツ)の材の端を焦し、油を塗りて點火するもの、其本を靑紙にて卷きたり。(脂燭、手燭)。

(しそく［四則］(名) 【數】算術の加法・減法・乘法・除法の稱。

(しそく［四足］(名) ㊀よつあし。㊁獸類。

(しそく［子息］(名) むすこ。せがれ。「むこと。」

(しそく［止息］(名) とゞまりやすむこと。とまりや

(し-そく［視息］（名）生きながらふること。生活。

(し-そく［四塞］（名）要害の天嶮を以つて四方を圍みたること。「これ所謂―の國なり」。

廿し-ぞく［親族］（名）「しんぞく」に同じ。

(し-ぞく［支族］（名）わかれ出でたる血族。分家。

(し-ぞく［氏族］（名）うから。やから。

(し-ぞく［士族］（名）明治以後、維新前の士分を世襲する階級の稱、華族の次にして平民の上に位す、されど權利・義務其他すべて平民に異ならず。

(し-ぞく［指嗾］（名）「しそう」（指嗾）の訛。

(し-ぞく［鷙族］（名）猛鳥の種類。

廿し-ぞ-く（かきくくけ）［退］（自、か四）しりぞく。

(じ-そく［自足］（名）自ら滿足してあること。

(じ-ぞく［時俗］（名）其時代の一般の人情風俗。

し-そこ-な-ひ（ナイ―ツコ）［爲損］（名）しそんじ。やりそこなひ。しくじり。失錯。

し-そこ-ね-ふ（ナウ―ツコ）（はひふふへ）［爲損］（他、は四）しそんず。やりそこなふ。しくじる。

廿し-そ-ず（せじずずれぜよ）［爲損］（他、さ變）「しそんず」に同じ。

(し-そつ［士卒］（名）㊀兵士と雜卒と。㊁つはもの。軍兵。

し-そ-び-し-ほ（シ―ヒ）［紫蘇醬］（名）紫蘇の葉をひしほにしたるもの。

し-そ-まき［紫蘇卷］（名）紫蘇の葉に包みたる食物。「―唐辛」「―梅干」。

し-そ-む（めめむむるむれめよ）［爲初］（他、ま下二）なしはじむ。はじめてなす。

(し-ぞめ［爲初］（名）しはじめ。てはじめ。

(し-そん［至尊］（名）㊀至りてたふときこと。㊁天子を申し奉る語。

(し-そん［子孫］（名）㊀子と孫と。㊁先祖より代々系統をひきて生ひたつ人々。まごこ。（末裔、後胤）。

(じ-そん［兒孫］（名）こどもとまごと。

(じ-そん［耳孫］（名）ひまごのまご。又、やしやごのまご。

(じ-そん［慈尊］（名）【佛】如來の異稱。

(じ-そん［自尊］（名）㊀妄（みだり）に自ら尊大にかまふること。たかぶること。㊁自ら自分を優秀なりと感ずること。㊂自ら自家の品位を損ぜざるやうにすること。

(じ-そん［自存］（名）自家の生存。「―の目的」。

し-そん-じ［爲損］（名）なしあやまつこと。やりそこなひ。しくじり。失錯。

し-そん-ず（ぜじずずれぜよ）［爲損］（他、さ變）やりそこなふ。しくじる。なしあやまつ。

廿し-た［心］（名）心底。心中。「―戀」。

し-た［簧］（名）（舌の義）笙・篳篥などの管の中に裝置する薄片、吹けばその鼓動によりて聲を生ず。

し-た［舌］（名）㊀動物の口器の一、口腔の下床にあるもの、人類のは筋肉質にして運動自在なり、其粘膜面にある數多の小突起を乳頭といふ、味覺の主要機關にして又音語の機關なり。（味官）。㊁ことば。言語。　―を ふるふ［掉舌］しやべる。又、承知せず。又、おそるゝさまにいふ。　―を まく［卷舌］いたく驚くにいふ。

し-た［下］（名）㊀しも。上の對。㊁うら。表の對。「―に着る」。㊂低き場所。㊃劣る地位。「―役」。㊄めした。てした。又、こまへ。こもの。「―をあはれむ」。㊅先づためすこと。豫めなすこと。「―見」。「―調」。㊆用ひふるし。㊇さき。前。「―夫」。㊈心の底。心の中。㊉買物の代價の幾分として、金のかはりに取らする物品。「―に取る」。　―に ゐる　うづくまる。

(し-だ［齒朶］（名）【植】羊齒類に屬する植物の總稱、莖は地下莖にして毛茸あり、葉は羽狀複葉にして、子囊體は葉裏に生じ胞子を藏す、胞子より芽生じて生殖す。（羊齒、鳳尾草）。

(じ-た［自他］（名）㊀おのれと他人と。（彼我）。㊁【文法】自動と他動と。

(じ-だ［耳朶］（名）㊀みゝたぶ。㊁みゝ。　―に ふる　聞く。聞きおよぶ。

した-あご［下腭］（名）下部のあご。

(し-たい［姿態］（名）すがた。なりふり。かたち。

(し-たい［肢體］（名）㊀身體の四肢即ち手足。㊁手足と身體と。

(し-たい［死體］（名）しかばね。なきがら。

(し-たい［枝隊］（名）本隊より分派して、獨立の運動をなす部隊。

(し-たい［四諦］（名）【佛】苦・集・滅・道の稱。

(し-だい［四大］（名）【佛】萬物生成の種となる地・水・火・風の稱、堅・濕・軟・動の四性質を表したるもの、萬物これによりて生成する故に大といふ。

(し-だい［至大］（名）至つて大いなること。極めて大いなること。

(し-だい［次第］（名）㊀ついで。順序。「―不同御用捨」。㊁てつゞき。由來。㊂やうす。事情。

〜―し-だい［次第］（接尾）其事の終（をは）るや否やの意を表はす語。「出來―やる」。

(じ-たい［辭退］（名）辭して身をひくこと。ことわりてさくること。「―する」。

(じ-たい［字體］（名）㊀字畫のありさま。「―明晰」。㊁文字のかきかた、即ち眞・行・草等。

(じ-たい［事體］（名）ことがらのありさま。事件の體裁。「―容易ならず」。（事態）。

(じ-たい［自體］（名）自分のからだ。（自身）。

(じ-たい［自體］（副）もとより。ぜんたい。元來。「―[illegible]」。

(じ-だい［自大］（名）ほこりたかぶること。

(じ-だい［時代］（名）㊀ときよ。年代。「鎌倉―」。㊁其頃。當時。㊂時代を經（へ）てふるびたること。「―がつく」。　―おくれ［時代後］（名）以前は用ひられたれど、當今は不適當にして用なきこと。

し-だい-がき［次第書］（名）順序又は由來を書きたるもの。

(じ-だい-きやう-げん（ゲン―キヨ ウ）［時代狂言］（名）芝居の時代物の狂言。

(じ-だい-ぎやう-れつ（ウ―ギヨ）［時代行列］（名）古昔行はれたる行列、即ち、大名行列の如きこれなり。

廿し-だい-し［次第司］（名）古昔、儀式などに順序を正すことをつかさどりし役名。

(し-だい-し［四大師］（名）【佛】傳教大師（最澄）・慈覺大師（圓仁）・智證大師（圓珍）・弘法大師（空海）の稱。

(し-だい-じ［四大寺］（名）大安寺・藥師寺・元興寺・弘福寺の稱。又、東大寺・興福寺・延曆寺・園城寺の稱。

(し-だい-しう［四大洲］（名）【佛】「ししう」（四洲）に同じ。

(し-だい-しだい［次第次第］（名、副）ぜん〴〵。じゆん〴〵。

(じ-だい-してう（ウ―チヨ）［時代思潮］（名）其時代に於ける一般の思想。

(し-だい-しゆ［四大種］（名）【佛】四大に同じ。

(じ-だい-しゆぎ［事大主義］（名）確乎たる主義主見なく、たゞ勢力の強大なるものにつき從ふこと。

(じ-だい-せいしん［時代精神］（名）其時代に於て、最も發揚せられ最も勢力ある人生觀又は社會觀の傾向。

(じ-だい-たう（ウ―ト）［事大黨］（名）事大主義の黨派。

じ-だい-ちがひ（イガ―チ）［時代違］（名）㊀時代の相違してあること。㊁其時代の風潮と異なること。「―な人」。

し-だい-な［次第名］（名）兄弟の順を追ひてつけたる名、例へば、一郎・二郎・三郎などの如し。

し-だい-に［次第］（副）順序を追ひて、じゆん〴〵に。だん〴〵に。

じ-だい-の-ちようじ［時代寵兒］（名）其時代に適合せる才能又は主義を抱（いだ）きて、實力以上の成功をなしたるもの。

じ-だい-もの［時代物］（名）㊀多く時代を經（へ）たるもの。ふるもの。㊁古昔の事柄を脚色（しく）したる院本又は演劇、世話物の對。㊂歷史小說。

した-いろ［下色］（名）㊀下地の色。㊁末となりて衰（オト）ふるさま。

じ-だい-をとこ［時代男］（名）老人の稱。

(し-たう（ウ―ト）［四倒］（名）【佛】正理を顛倒したる四つの事、即ち身を淨とし、苦を樂とし、无常を常とし、无我を我とすること。

(し-たう（ウ―ト）［至當］（名）至極適當なること、最も當然なること。「理の―」。

(し-だう（ウ―ド）［四道］（名）㊀古昔、大學寮の四學科、即ち紀傳・明經・明法・算道の稱。㊁四つの道路。又四つの方面。

(し-だう（ウ―ド）［至道］（名）完全至極の道、まことの道。（達道）。

(し-だう（ウ―ド）［指導］（名）をしへみちびくこと。

(し-だう（ウ―ド）［士道］（名）士たるもの、履行すべき道義。さむらひのみち。

(し-だう（ウ―ド）［市道］（名）利益より割り出してなすしかた。商賈人の道。

(し-だう（ウ―ド）［斯道］（名）このみち。この學問。

(し-だう（ウ―ド）［祠堂］（名）㊀たまや。㊁ほこら。みや。　―きん［祠堂金］（名）㊀村の鎭守社の維持又は修繕などの寄附金。㊁寺に寄附して、先祖代々の供養に充（あ）つる金。（常住金、長生錢）。

(じ-たう（ウ―ト）［珥璫］（名）みゝふさぎ。

(じ-たう（ウ―ト）［自黨］（名）自分の黨與。みかた。

した-うけ［下請］（名）「したうけおひ」の略言。　―おひ（オイ）［下請負］（名）或請負をなしたるものより、更に其全部又は幾部の請負をなすこと。

(し-だう-しやう-ぐん（ロウ―ドウシ）［四道將軍］（名）崇神天皇の朝、北陸につかはされし大彥（オホヒコ）命と、東海につかはされし武渟河別（タケヌナカハワケ）命と、西海につかはされし吉備津彥（キビツヒコ）命と、丹波につかはされし道主（ヌシミチ）命との稱。

した-うち［舌打］（名）舌にて上腭を彈（はじ）きて音を立つること。くちつゞみ。したつゞみ。（舌鼓、叱咤）。

した-うつ（たちつつてて）［舌打］（自、た四）舌打をなす。

廿した-うづ［襪］（名）「したぐつ」の音便。

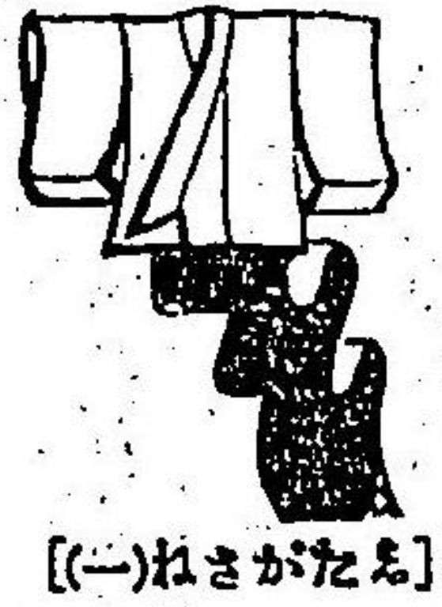
した-おび［下帶］（名）ふどし。こしまき。（褌）。　―いはひ（ワイ―イ）［下帶祝］（名）古昔、男子の成長して、始めて下帶を着けしときのいはひ。

した-おもひ（モイ―オ）［下思］（名）㊀廿心中に貯ふるおもひ。㊁配下のものをあはれむこと。

〜した-が（接）であるが。けれども。

した-がき［下書］（名）㊀淨書の前に試みに書くこと。又、其かきもの。㊁修正又は討議を經て、完成となる文書又は詞章、さうかう、さうあん。

した-がさね［下襲］（名）㊀束帶の時、袍の下に着る衣。㊁したぎ。


［したがさね(一)］

した-かぜ［下風］（名）下を吹く風。

した-かた［下方］（名）㊀なりもの、囃子方。㊁しもざま。

した-がつ-て［從］（接）「したがひて」の音便。

したがね[下金](名) 用ひ古るしたる金。ふるかね。――**や**[下金屋](名) したがねの買入を商賣にする人。

廿**したがひ**[下交](名) 衣のしたまへ。「我が――に、なすよしもがな」「――のつま」(内襟)。

したがひ・て[従人](名) ともびと。とも。

したがひ・て[従](接) それによつて。それ故に。つけて。よりて。

したが・ふ[従](自、は四) ㊀うしろより附きて行く。「跡に――」。㊁服屬す。つく。㊂ならふ。まなぶ。㊃きゝいる。きく。㊄任ず。まかす。㊅逆(サカ)はず。反(ソム)かず。「嫁――夫」。㊆たどる。よる。「岸にしたがひて行く」。

したが・ふ[従](他、は下二) ㊀つれて行く。ひきゐ行く。㊁服屬せしむ。㊂逆(サカラ)はざらしむ。反(ソム)かざらしむ。

したがまへ[下構](名) かねてよりの用意。ようい。おゆんび。

したぎ[下着](名) 上着の下に着る衣。

したぎえ[下消](名) 下の方の消ゆること。

したぎき[下聞](名) あらかじめ聞きおくこと。

したぎやはん[下脚絆](名) すねあての下に着くるきやはん。

したく[支度](名) ㊀おゆんび。用意。㊁他出の服装。㊂途中の食事。

(**したく**)[私宅](名) 自分の家。(自宅)。

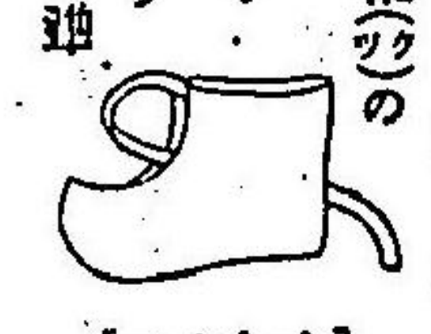
しだ・く[拉](他、か四) ふみ荒らす。蹂躙す。

(**じたく**)[自宅](名) 自分の家。(私宅)。――**どくしふ**[自宅獨習](名) 出で行きて教授を願はず、自宅にてひとりまなび習ふこと。

したくさ[下草](名) 木陰に生ずる草。

したくちびる[下唇](名) 下方の唇。

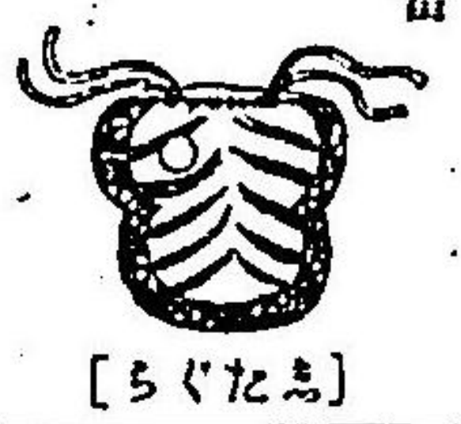
一**したぐつ**[襪](名) 束帶の時、靴(クツ)の下に用ふる足袋(タビ)。くつした。


[したぐつ]

廿**したくび**[胡](名) 頤(オトガヒ)の下。

したぐみ[下組](名) ㊀以前よりの用意。したごしらへ。㊁本くみの準備にくみつくること。

したぐら[下鞍](名) 馬の背に當てゝ鞍の下にしくもの。薦(コモ)にて作る。


[したぐら]

したけ[下罫](名) 書く字の行列の整(トト)ふやう、紙の下におきて字のくばりを見る罫。

したげいこ[下稽古](名) はれにする物事を試(コヽロ)みに稽古しおくこと。

したけんさ[下検査](名) 本検査の準備に行ふ検査。

廿**したこがれ**[下焦](名) 心の中にて思ひこがるゝこと。

したごき[舌扱](名) 舌の、汚(ヨゴ)れをこきて取る具。

したごころ[下心](名) ㊀前からの目的。かねてのたくらみ。㊁本心。心底。㊂思・志などの文字の下部にある心の字。

したごしらへ[下拵](名) ㊀かねてよりの用意。したぐみ。㊁本ごしらへの準備にこしらふること。

廿**したごひ**[下戀](名) 心の中にて戀(コ)ふること。

したごろも[下衣](名) したぎ。

したさき[舌端](名) したのさき。

したし[親](形、二) ㊀血すぢ近し。ちかし。㊁交情厚し。むつまじ。㊂懇意なり。こゝろやすし。

しだし[仕出](名) ㊀しだすこと。作り出すこと。㊁あつらへに應じ、調(トヽノ)へて持出すこと。(おもに料理にいふ)。㊂いでたち。こしらへ。――**や**[仕出屋](名) しだしする家。(おもに料理にいふ)。

したじき[下敷](名) 下にしくもの。

したしく[親](副) ㊀自身にて。みづから。㊁目前に。まのあたりに。「――これを見る」。

したしごと[下仕事](名) ㊀或仕事の準備にする仕事。㊁したうけおひ。

したじころ[下錏](名) 兜(カブト)のしころの下に、更に打ちたるしころ。

廿**したした**(名、副) なえしなだるゝさまにいふ語。

したした(名、副) 濕(シメ)りて、粘(ネバ)り又はしなだるゝさまにいふ語。

したじた[下下](名) 配下一同。下民一般。しもじも。

したしば[下柴](名) 木陰に生ふる柴。

したしみ[親](名) ㊀したしむこと。㊁なさけ。愛情。

したし・む[親](自、ま四) ㊀したひ寄る。ちかづく。「賢者に――」。㊁交際す。まじはる。㊂むつむ。むつまじくす。

したし・む[親](他、ま四) ㊀よせ近づく。「君子を遠ざけて小人を――」。㊁愛す。いつくしむ。

したじめ[下締](名) 着物の下に締(シ)むる紐。

したしよく[下職](名) 或仕事の下請(シタウケ)をする職業。又、其職業の者。

したしん・ずる[親](自、さ變) 「したしむ」に同じ。

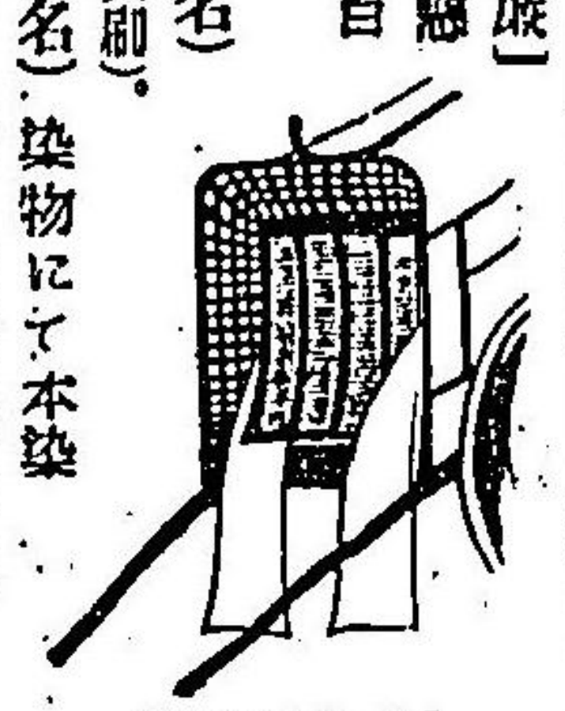
したしん・ずる[親](他、さ變) 「したしむ」に同じ。

しだ・す[仕出](他、さ四) ㊀作り出す。㊁調進して持出す。とゝのふ。

(**しだ・す**)[仕出](自、さ四) 身代を富有にす。

したずき[下梳](名) 髪を結(ユ)ふ支度に髪をよくすきおくこと。又、おもに其事をなす人。

廿**したすだれ**[下簾](名) 車の簾の中に懸くるとばり。多くは白絹を用ふ。(車帷)。


[したすだれ]

したずり[下摺](名) 版のためしずり。(試刷)。

したぞめ[下染](名) 染物にて本染の前に或色に染めおくこと。「――は藍に任せて」。

したぞり[下剃](名) 本ぞりにかゝる前に、ざっと剃(ソ)ること。

したたか[健](名) ㊀度の常に過ぎたること。㊁欲の常に過ぎたること。――**に**[健](副) ㊀甚だ。強く。㊁たくさんに。おほく。いかめしく。(夥、巨多)。――**もの**[健者](名) かうのもの。つよきもの。

したたま・る[認](自、ら四) とゝのふ。

廿**したたみ**[小蠃子](名) きさごの貝。(小螺子)。

したた・む[認](他、ま下二) ㊀廿支度す。とゝのふ。「いでたちのことしたゝめてこそ」。㊁食事す。「飯を――」。㊂書き記す。しるす。「手紙を――」。㊃見とむ。みとゞく。

廿**しただ・む**[舌訛](自、ま四) ㊀言葉訛る。なまる。㊁言葉鈍る。にぶる。

したため[認](名) したゝむること。〜――**る**(他) 「したたむ」の訛。

廿**したたらず**[舌不足](名) 舌の工合尋常ならずして、自由に言葉のまはらぬこと。(謇澀、啞舌)。

したたり[滴](名) しづく。(點滴)。

したた・る[滴](自、ら四) ㊀下垂の義。雫(シヅク)となりて落つ。

したたる・し(形、二) ものいふさまあまゆるやうなり。

したぢ[助枝](名) 壁のこまひ。――**まど**[助枝窓](名) 壁のしたぢを其儘格子としたる窓。

したぢ[下地](名) ㊀前以て備へ設けたるもの。㊁一の物事を基本として、これに加工し又は作用し若しくはこれを變化して或物事の成立する場合に、其基本となる物事の稱。例へば、紺の下地に藍を用ひ、漆の下地に砥粉(トノコ)を用ふるが如し。㊂したごゝろ。ないしん。㊃本來の性質。㊄醤油の一名。〜――**はすきなりきよいはよし** 好む所を他よりすゝめらるゝにいふ。

(**したたつ**)[四達](名) 道路の四方に通ずること。

したた・つ[仕立](他、た下二) ㊀布帛を裁(タ)ちて衣服に縫(ヌ)ふ。裁縫す。「装束を――」。㊁教へこむ。そだてあぐ。しこむ。㊂作りなす。こしらふ。㊃支度をなして差立つ。「車を――」。

廿**したた・つ**[滴](他、た下二) したゝらす。「紅涙をしたて盡くして」。

したづかさ[下司](名) ㊀位地低き官吏。げし。㊁部下の官吏。したやく。

廿**したつき**[譁誕](名) したゝらず。(啞舌)。

したづくり[下作](名) したごしらへ。

したつづみ[舌鼓](名) 舌うち。

したづみ[下積](名) 他の荷物の下に積むこと。又、其荷物。

廿**したつみち**[地道](名) 地下の道。

したつゆ[下露](名) 木の下などの露。「森の――」。

したて[仕立](名) ㊀作りなすこと。㊁裁縫。㊂しこみ。㊃支度して差立つること。――**あがり**[仕立上](名) ㊀したてのできあがり。㊁したて、間もなきこと。――**かた**[仕立方](名) 仕立てたるさま。又、仕立つる方法。廿――**がほ**[仕立顔](名) ことさらにつくろふ顔つき。――**もの**[仕立物](名) ㊀したつる物。㊁裁縫。――**や**[仕立屋](名) 裁縫を業とする人又は家。〜――**る**(他) 「したつ」の訛。

したで[下手](名) ㊀相手の下に立つこと。へりくだること。「――に出づればつけあがる」。㊁其人より劣(オト)ること。下流。㊂組みて下になること。又、組みて下に差したる手。――**なげ**[下手投](名) 相撲(スマフ)の手、四つに組み、下手にて敵の褌(フンドシ)をとりて投(ナ)げかくること。

廿**したて・る**[下照](自、ら四) 下葉照るばかり赤くあり。

廿**したど**[舌疾](名) 辯舌はやきこと。早くしやべること。はやくち。――**し**[舌疾](形、二) はやくちなり。

廿**したさき**[鵞口瘡](名) 「がこうさう」の古名。

廿**したどひ**[下聽](名) しのびて女の許に通ふこと。つまどひすること。

廿**したなき**[心泣](名) しのびなき。

(**したながし**)[下流](名) 地面に直に設けたるながし。

(**したなめずり**)[舌舐](名) 舌にて唇(クチビル)を甞(ナ)むること。

したならし[下馴](名) 用意に慣(ナ)らして置くこと。

したぬひ[下縫](名) 本ぬひにかゝる準備に縫(ヌ)ふこと。

したぬり[下塗](名) 上塗にかゝる前に、下地を塗(ヌ)ること。

したね[下直](名) 下にとる物品のねだん。

したのおび[下帶](名) ㊀裝束の下に附くる帶。㊁したおび。

したのさき[舌先](名) ㊀舌のはし。㊁くちさき。ことば。

廿**したのつるぎ**[舌劔](名) 害意を含みたることばにいふ語。

したば[下葉](名) 枝の下葉。

したば[下齒](名) 下部の齒。

したば[下端](名) 下の部分。下の方。

したばかま[下袴](名) 「あかもはくち」に同じ。

したばき[下履](名) 地を歩むに履(ハ)く履物。又、水仕事などに履(ハ)く履物。

したは・し シク（しくしくしき しけれ）[慕](形、二) したふ心切なり。なつかし。

したばたらき[下働](名) ㊀他の手下となりてはたらくこと。又、其人。㊁特に、煮たき其外したたまはりの事をすること。又、其下婢。

廿したば・ふ ウ-ハ[下延](自、は下二) ㊀下に延(ハ)ふ。㊁心竊(ヒソ)かに其方へ傾く。

廿したばへ エ-ハ[下延](名) したばふること。

したばら[下腹](名) 腹の下部。

したばり[下張](名) 上張の下地として張ること。

廿したひ[下樋](名) 箏琴の腹の空なる部分。

したび[下火](名) 火災の火勢の衰(ヲトロ)へたること。

したひげ[下鬚](名) 脣(クチビル)の下に生ふるひげ。下頤のひげ。

したひば イ-シク[甚葉](名) 草木の普通の葉の下に附きたる小さき葉。

したひも[下紐](名) ㊀廿下裳又は下袴の紐(モヒ)。㊁ふんどし。

したびらめ[舌平目](名) 【動】軟鰭類中ひらめ科に屬する魚、體軀は扁平にして舌狀をなす、左側は濃褐色にして黑斑あり、右側は白色なり、眼は體の左側にあり小形にして相接す、我國にては東海より西海に多し、うしのした。(鞋底魚、下板魚)。

したふ ウ シク（はひふふへへ）[慕](他、は四) ㊀なつかしく思ふ。こふ。「人を―」。㊁其人の德を仰(アフ)ぎて、これに從はんと思ふ。㊂其人を模範として、これにならはんと思ふ。「岳飛を―」。㊃後より追ひ付かんとして行く。あとをおふ。「後を―」。

したふところ[下懷](名) ㊀うちぶところ。㊁計畫の缺點。又、人物の弱點。

廿したぶり[舌振](名) ものいひやう。ものいひぶり。

廿したま・つ たちつつてて[下待](他、た四) 心待に待つ。「其夜したまちけれど」。

したまはり[下廻](名) こまごましたる雜事をつかさどる役。又、其役のもの。

したまへ エ-マ[下前](名) 衣服の兩前(リヤウマヘ)を合はせて着るとき、その下になる方の稱。

廿したみ[籭](名) 底(ソコ)方形にして上圓き大形の笊(ザル)。

したみ[滑](名) ㊀したむこと。㊁「したみざけ」の略。――ざけ[滑酒](名) 漏斗(ジヤウゴ)又は枡(マス)などより、したゝりて溜(タ)まれる酒。(醨酒)。

したみ[下見](名) ㊀家の四面に打つ板壁。㊁用意に目を通しおくこと。したよみ。

したみづ[下水](名) 下に流るゝ水。下行く水。

したむ（まみむむめめ）[滑](他、ま四) 液をしたゝらす。しづくをたらし漉(コ)らす。(瀝)。

したむき[下向](名) ㊀下方に向くこと。㊁部下に對するありさま。

しため[下目](名) ㊀眼を下に向くること。㊁あなどりて見ること、みさぐること。(蔑視)。

廿したも[下裳](名) 衣の下に着る女の裳(モ)。

したもつれ[舌縺](名) 舌自由に動かずして、言語のもつるゝこと。

廿したも・ゆ（ゆゆゆるゆれえよ）[下萠](自、や下二) 地より萠(モ)え出づ。

廿したやかた[下館](名) したやしき。

したやく[下役](名) 支配下の役人。部下の役人。

したやしき[下屋敷](名) しもやしき。

したゆひ イ-ユ[下結](名) 化粧元結の下に結ぶもとゆひ。

廿したよば・ふ ハ-ヨ[下婚](自、は下二) しのびて婦人をよばふ。

したよみ[下讀](名) あらかじめ書物などを調(シラ)べ置くこと。したみ。(預習)。

したら(名) ㊀音樂の手拍子。㊁調子に合ふこと、秩序のあること。

〜しだらく[自墮落](名) 身持のしだらなきこと。行儀の取締なきこと。

しだらな・し（くしき けれ）(形、一) 秩序なし。取締なし。だらしなし。

しだり[垂](名) 下に垂(タ)るゝこと。しだれ。――ざくら[垂櫻](名) 【植】さくらの一種、葉は長橢圓形若しくは披針形にして漸尖頭なり、花柱の脚部に毛ありて、花柄は花と同長或はこれよりも長し、枝下垂する特性あり、觀賞用として栽培せられ、又、木材は種々の用に供せらる。――やなぎ[垂柳](名) 【植】やなぎの一種、雌雄異株、葉は線狀披針形なり、雄花は通常二雄蘂を有し、雌花は短柄の子房を有す、枝の下垂する特性あり。――を[垂尾](名) 長く垂(タ)れさがる尾。

したりがほ ガ-オ[得意顏](名) ほこれる顏、おま「んがほ」。

しだ・る（らりるるれれ）[垂](自、ら四) 下に垂(タ)る。垂れ下がる。

したる・し（くしき けれ）(形、二) しなだれてあり。

しだれ[垂](名) 「しだり」に同じ。

したゑ[下繪](名) ㊀下書の繪。㊁刺繡などの下地に畫く繪。

廿したを[前夫](名) 以前つれそひし夫。

したを・る（るるるれれれ）[下折](自、ら下二) 折れて下に垂(タ)る。折れ俯(フ)す。

したをれ[下折](名) したをるゝこと。

（したん[紫檀](名) 【植】豆科に屬する木、熱帶地方に產す、材は紫色を帶び、質固くして麗(ウルハ)し、種々の器具に作りて珍重す。(檀香)。

（したん[指彈](名) つまはじき。そしり。

（したん[四端](名) (孟子に出づ)惻隱・羞惡・辭讓・是非の稱、惻隱は仁の端(ハシ)、羞惡は義の端、辭讓は禮の端、是非は智の端といふ。

（しだん[詩壇](名) 詩人の社會。

（しだん[師團](名) 陸軍の編制上の名目、步兵二旅團と砲兵・騎兵各一聯隊と工兵・輜重兵・彈藥縱列各一大隊及軍樂隊とより成り、戰時には、大小架橋縱列各一個大隊及野戰衛生部これに屬す、これを各要地に設置して、其地方の軍備とす。――しれいぶ[師團司令部](名) 師團長の職務を行ふ所。――ちやう ヨ-チウ[師團長](名) 師團の長官、天皇に直隸し、部下軍隊を統率し、師管內の聯隊司令部を管轄し、軍事に係る諸件を總轄す、陸軍中將を以てこれに親補せらる。

（したん[事端](名) 事件のこぐち。

（しダン[寺檀](名) 寺僧と檀那と。

（しだん[示談](名) 雙方熟議をもて、相互間のあらそひを落着させること。(和談)。

（しち[質](名) ㊀約束の保證に預(アヅ)け置くもの、約束を違變するときは、其物の處置は先方の隨意たるべき定めなり。「人―」。㊁【法】質權の目的物の稱、不動產質と動產質とに分ち、前者は質權ある者は質物を使用收益し得るを原則とし、後者は其効力なきを原則とす、別に權利質なるものあり。(質權の條參照)。㊂特に、質屋に借金の擔保としておく物品。しちもつ。――におく 質入す。質物とす。

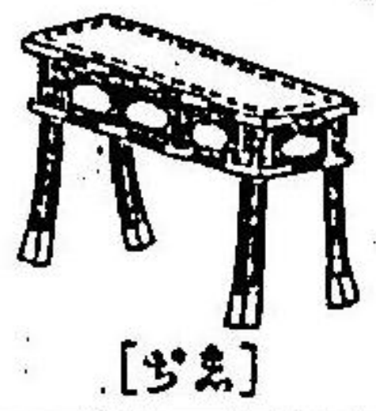
（しち[死地](名) ㊀生死の程あらかじめ測りがたき大事の場所。「兵は―なり」。㊁殆んど助からぬ危險の場所。

（しち[四智](名) 【佛】一切諸佛の具成すといふ四種の智の稱、即ち、大圓鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智をいふ。

（しち[四知](名) (後漢の楊震の故事に出づ)兩人のみにて事を行へば、他に知るものなしと思ふは曲事にて、「天これを知り、地これを知り、人(相手方)これを知り、我これを知る」といふこと。

（しち[七](數) 三と四との和。なゝつ。

廿しぢ[榻車](名) 車の轅(ナガエ)の臺、腰掛の狀をなすもの。


[しぢ]

（しぢ[支持](名) さゝへたもつこと。もちこたへ。さゝへ。

廿しぢ[質](名) 「ぶつ」に同じ。

（しぢ[自治](名) ㊀自己の事を自己にて處理すること。㊁地方團體若しくは公共組合が、國家の委任を受けて、其團體若しくは其組合に屬する或特定の事務を自ら處理すること。

しちいれ[質入](名) 物件又は權利を質權の目的物として、質權者に提供すること。借金の質物として貸主に預(アヅ)くること。(典當)。

（しちいん[七音](名) 七つの樂調、即ち宮・商・角・徵・羽の五音と半徵・半商との稱。

（しちえう ウ-ヨ[七曜](名) ㊀日・月と水・火・木・金・土の五星との稱。㊁一週七日の日每に配する名稱、即ち日・月・火・水・木・金・土。――のほし[七曜星](名) 北斗星の異稱。

（しちかく[七覺](名) 【佛】擇法・精進・喜(法喜樂を得ること)・除(虛僞煩惱を斷ずること)・捨(執着を遠離すること)・定・念の稱。

（しちきくわん[自治機關](名) 【法】自治團體が自治行政をなすために設置せる機關、府縣會・郡會・市町村會は其議決機關にして、府縣郡市參事會・町村長等は其執行機關なり。

（しちぎやうせい ウ-ギヨウ-[自治行政](名) 【法】地方自治團體が、國家の委任を受けて處理する其團體に屬する特定の政務。

（しちきよ[七去](名) 妻を去るべき七條件、即ち父母に順ならざること、子なきこと、多言なること、竊盜すること、淫亂なること、嫉妬なること、惡疾あることの稱。

（しちく[紫竹](名) 【植】まだけの一種、幹は紫色を呈す。かんちく。(斑竹)。

（しちく[絲竹](名) いとたけ。管絃。

しちぐさ[質種](名) 質物とすべき物品。(典貸)。

（しちぐわつ[七月](名) 年の第七の月。ふづき。

（しちけい[七經](名) 五經に公羊傳・穀梁傳を合しての稱。

（しちけう ヨウ-キ[七教](名) 七つの敎、即ち、君臣・父子・兄弟・夫婦・長幼・朋友・賓客に關する敎の稱。

（しちげふ ヨウ-ギ[質業](名) 質屋營業。

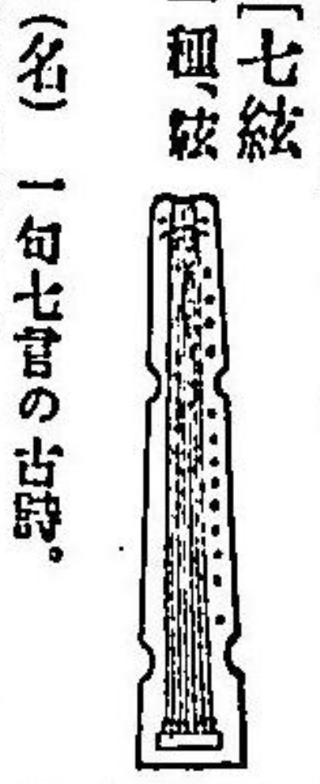
（しちけん[七見](名) 【佛】正理を失する七種の見、即ち、邪見・我見・常見・斷見・戒盜見・果盜見・疑見の稱。

（しちけん[七賢](名) ㊀「ちくりんのしちけん」(竹林七賢)に同じ。㊁古代「ギリシヤ」の七人の賢人の稱、其人名は記錄によりて一致せざれど、「ソロン」「ターレス」「ピツタコス」「ビアス」の四人は、其中にて確實なりとす。――じん[七賢人](名)

前條に同じ。

しちけん［質權］（名）【法】債權の執行を確實ならしむるため、債權者が債務者又は第三者より受取りたる物を占有し、且其物につき他の債權者に先だちて自己の債權の辨濟を受くる權利。これを以て第三者に對抗するために、不動產質にありては占有を必要とせざれど、動產質にありては占有を必要とす。權利もまた質權の目的物となすことを得、物を目的とする質權の規定を準用しこれを權利質といひ、其質權の辨濟額に當る債務者の有する權利を代はりて行使するものとす。――**しや**［質權者］（名）【法】物又は權利に對して質權を有する者。――**せっていしや**［質權設定者］（名）【法】自己又は他人の債務の擔保に、自己所有の或物を質として質權者に提供したる者。

⌒**しち-げん-きん**［七絃琴］（名）琴の一種、絃七條あるもの。


［しちげんきん］

⌒**しち-こ**［七古］（名）一句七言の古詩。

⌒**しち-ご-さん**［七五三］（名）㊀祝儀に用ふる數、一・三・五・七・九の奇數を瑞と定め、其中の三つを取りたるもの。㊁しめなは。しめ。㊂「しちごさんのいはひ」の略言。――**の-いはひ**［七五三祝］（名）男子は三歲と五歲とに、女子は三歲と七歲とに、其年の十一月十五日に行ふ祝儀、新衣を着せ氏神に參詣せさするを普通とす。

⌒**しち-ごん**［七言］（名）一句七文字より成立つもの。又、其漢詩。――**こし**［七言古詩］（名）漢詩の古詩の七言なるもの。――**ぜっく**［七言絕句］（名）漢詩の絕句の七言なるもの。――**はいりつ**［七言排律］（名）漢詩の排律の七言なるもの。――**りつ**［七言律］（名）漢詩の律の七言なるもの。

しちこん-の-ひきでもの［七獻引出物］（名）昔時、武家の酒宴の引出物に、初度に馬、二度目に太刀、三度目に鎧又は腹卷、四度目に弓と征矢(ソヤ)と、五度目に沓(クツ)と行縢(ムカバキ)と、六度目に刀、七度目に小袖を進上せしこと。

⌒**しち-ざ**［七座］（名）足利時代の七個の專賣店の稱、即ち絹座・炭座・米座・檜物座・千朶積座・相物座・馬商座をいふ。

⌒**しちじふに-こう**［七十二候］（名）氣候上に五日を一候と定めて一年間をいふ稱。

⌒**しち-しやう**［七傷］（名）身體及精神をそこなひやぶる七個條、即ち、大飽は脾を傷ひ、大怒は肝を傷ひ、久しく濕地に坐すれば腎を傷ひ、形寒寒飲は肺を傷ひ、憂愁思慮は心を傷ひ、風雨寒暑は形を傷ひ、大恐懼節ならざれば志を傷ふといふこと。

⌒**しち-しやう**［七星］（名）支那傳來の星學にて、貪狼星・巨文星・祿存星・文曲星・廉直星・武曲星・破軍星の稱。

⌒**しち-しやう**［七生］（名）七たび生まれかはること。又、個人の斯世に生れかはり得る永遠のかぎり。

⌒**しち-じやう**［七情］（名）㊀七種の情、即ち、喜・怒・哀・樂・愛・惡・欲又は喜・怒・憂・思・悲・恐・驚をいふ。㊁漢法にて、藥劑の七種の作用、單行するもの、相須(マ)つもの、相使(カツ)ふもの、相惡むもの(他の能を奪ふもの)、相畏るゝもの(他の制を受くるもの)、相反するもの、相殺すものゝ稱。

⌒**しち-しゆ**［七衆］（名）【佛】比丘・比丘尼・式叉摩那・沙彌・沙彌尼・優婆塞・優婆夷の稱。

⌒**しち-しよ**［七書］（名）支那の七種の兵書、即ち、孫子・吳子・司馬法・尉繚子・三略・六韜・太宗問對の稱にして、昔時の兵家の尊崇せしもの。

⌒**しち-しよく**［七色］（名）七種の色、おもに紫・緋・綠・青・黃・柑・紅をいふ。

⌒**しち-せい**［七星］（名）「しちしやう」に同じ。

⌒**しち-せい**［七生］（名）「しちしやう」に同じ。

⌒**しち-せい**［自治制］（名）【法】地方自治團體又は地方公共組合を設置し、國家政務の中其團體に屬する或特種の行政を委任して、自ら處理せしむる制度。

⌒**しち-せいぐわ**［七淸華］（名）淸華の七家、即ち花山院・西園寺・大炊御門・久我(コガ)・三條・轉法輪・德大寺・菊亭の稱。

⌒**しち-せき**［七夕］（名）五節句の一、陰曆の七月七日の夜の稱、昔時は乞巧奠を行ひたり。たなばた。

⌒**しち-ぜつ**［七絕］（名）漢詩の一句七言なる絕句。

⌒**しち-ソウ**［七僧］（名）七種の役僧、即ち、講師・讀師・呪願・三禮・唄師・散花・堂達の稱。

⌒**しち-だい**［七大］（名）【佛】四大に空大・見大・識大の三大を加へての稱。

⌒**しち-たい**［自治體］（名）【法】自治團體に同じ。

⌒**しち-だいじ**［七大寺］（名）南都に於ける七つの巨大なる寺院、即ち東大寺・興福寺・西大寺・元興寺・大安寺・藥師寺・法隆寺の稱。

⌒**しち-たう**［七島］（名）㊀「しちたうゐ」の略言。㊁「しちたうおもて」の略言。――**おもて**［七島表］（名）七島藺をもりてつくりたる疊表。――**ゐ**［七島藺］（名）多く寶七島に產するより名づく）【植】莎草科に屬する草、小形の葉と短き莖と長き莖とを有す、莖にて疊表即ち琉球表をもる。

⌒**しち-だう**［七道］（名）東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道、今は北海道を合はせて八道となれり。

⌒**しち-だう**［七堂］（名）寺院の建物、即ち三門・佛殿・法堂・庫・僧堂・浴室・東司の稱。――**ガラン**［七堂伽藍］（名）七堂の皆なそろひたる伽藍。

⌒**しち-だんたい**［自治團體］（名）【法】國家の行政機關たる一定の土地と住民とを有する公共團體、自治制によりて國家より委任せられたる權能を以て、團體の公共事務を自ら處理するもの、府・縣・郡・市・町・村の如きこれなり、其官府と異なる要點は、自治團體自身が目的を有するにあり。

⌒**しち-でう**［七條］（名）七幅(ノナ)の袈裟。

⌒**しちてん-はっき**［七顚八起］（名）人生の浮沈の定めなきこと。又、幾度失敗を重ぬとも尙は屈せずに世と奮鬪すること。なゝころびやおき。

⌒**しちてん-ばったう**［七顚八倒］（名）おきては倒れおきては倒れて、起ち直り得ざること。又、のたうちまはりて苦みもだゆること。

⌒**しち-とう**［七頭］（名）足利時代に、三職に次ぐ重役の家柄、即ち、山名・一色・土岐・赤松・京極・上杉・伊勢の稱。

⌒**しち-とう**［七等］（名）㊀すぐれたる人の七階級、即ち五人にすぐるゝを茂、十人にすぐるゝを選、百人にすぐるゝを俊、千人にすぐるゝを英、二千人にすぐるゝを賢、萬人にすぐるゝを傑、一億人にすぐるゝを聖といふ。㊁孫・曾孫・玄孫・來孫・昆孫・仍孫・雲孫をいふ。

⌒**しち-とく**［七德］（名）武の七つの德、一は暴を禁じ、二は兵を戢(ヲサ)め、三は大を保ち、四は功を定め、五は民を安んじ、六は衆を和し、七は財を豐(ユタ)かにすといふこと。

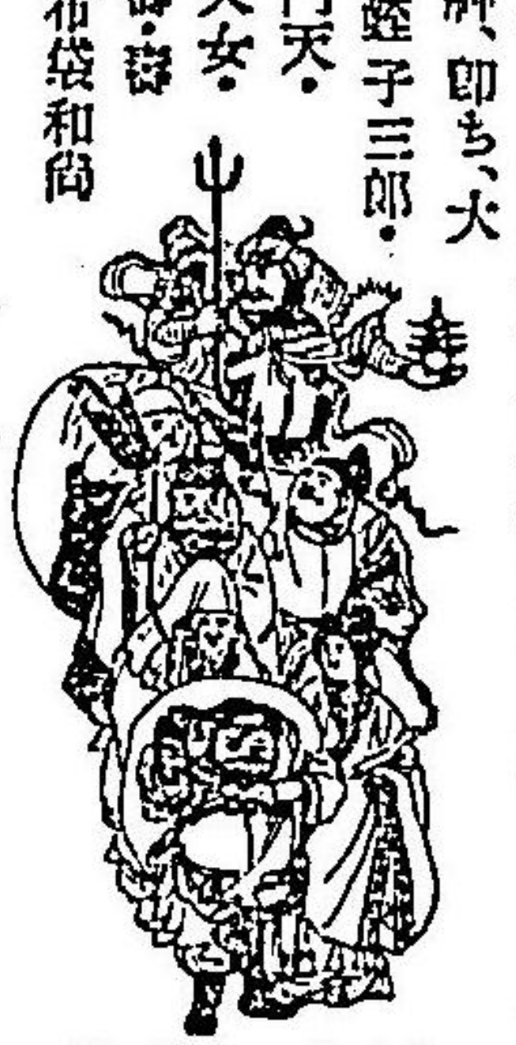
しちど-やき［七度燒］（名）燒付の最上なる鍍金。

⌒**しち-なん**［七難］（名）㊀【佛】七種のわざはひ、即ち人衆疾疫・他國侵逼・自界叛逆・星宿變怪・日月薄蝕・非時風雨・過時不雨をいひ、又、火難・水難・羅刹難・刀杖難・鬼難・枷鎖難・怨賊難をもいふ。㊁いろ〳〵の非難。「色が白けりや――かくす」。

++**しぢ-の-はしがき**［榻端書］（名）（古昔、男ありて女に思ひをかけたるに、百夜つゞけて通ひなばといひけるにより、夜毎に通ひ來て、榻の端に其數をしるしおきけるが、殘の一夜に、俄の障りありて通はざりしかば、其思を果し得ざりきといふ故事に出づ）戀の成り難きにいふ語。

⌒**しち-はう**［七寶］（名）㊀【佛】七種の寶物、阿彌陀經には金・銀・瑠璃・玻璃・硨磲・赤珠・碼碯をいひ、法華經には金・銀・瑠璃・硨磲・瑪瑙・眞珠・玫瑰をいへり。㊁模樣の名。――**つなぎ**［七寶繫］（名）七寶の模樣をつなぎならべたる模樣。――**やき**［七寶燒］（名）銅器又は陶器の面に琺瑯を用ひて、花鳥人物其他各種の模樣を燒き出したるもの、金銀又は銅の細き針金を用ひて模樣の輪廓としたるものと、少しも針金を用ひざるものとの二種あり。

⌒**しち-ふくじん**［七福神］（名）俗說にいふ七人の福神、即ち、大黑天・蛭子三郞・毘沙門天・辨財天女・福祿壽・壽老人・布袋和尙の稱。


［しちふくじん］

⌒**しち-ブツ**［七佛］（名）【佛】毘婆尸・尸棄・毘舍浮・拘留孫・倶那含牟尼・迦葉・釋迦の稱。

しち-ブツやくし［七佛藥師］（名）【佛】普稱名吉祥王如來・寶月智嚴音自在王如來・金色寶光妙行成就如來・無憂最勝吉祥如來・法海雷音如來・法海勝慧遊戲神通如來・藥師瑠璃光如來の稱。

⌒**し-ちへい**［視地平］（名）【地】觀望し得る地上の限界、陸上にては山岳谿谷等ありて迂餘屈折すれど、海上にては觀測者の位置を極とする小圓なり。

しちほん-やり［七本鎗］（名）古昔、槍先の功名最も拔群なる七人の稱、就中顯著なるものは、賤ケ嶽の戰爭に於ける福島正則・加藤淸正・加藤嘉明・平野長泰・脇坂安治・糟屋則直・片桐且元の七人なり。

〜**しち-めんだう**［七面倒］（名）極めて面倒なること。

⌒**しち-めん-てう**［七面鳥］（名）㊀【動】鶉雞類に屬する鳥、北「アメリカ」の原產なり、頭部は裸出し、上嘴根に垂肉ありて嘴下に垂(タ)れ時々變色す、尾を開けば團扇の如し。㊁心のよくぐらつく人をあざけりていふ語。

⌒**しち-もつ**［質物］（名）しちぐさ。典物。(典質)。

⌒**しち-や**［七夜］（名）子の生まれて七日目の夜。

しち-や［質屋］（名）質屋營業をなす人又は家。

⌒**し-ちやう**［紙帳］（名）紙にて製したるかや。

++**し-ちやう**［使廳］（名）古昔、檢非違使の略。

⌒**し-ちやう**［支廳］（名）派出の役所。

⌒**し-ちやう**［市長］（名）助役及市參事會員と共に市參事會を組織する有給吏員、市參事會の長となりて、其議事を準備し其議決を執行し、市參事會を代表して市政の執行を指揮監督するもの、市會より推選したる候補者三名に就き、內務大臣が上奏裁可を得て任命す、任期は六個年なり。

⌒**し-ちやう**［市廳］（名）市役所。

⌒**し-ちやう**［視聽］（名）みるときくと。「――の慾」。

(し-ちやう[仕丁](名) ㊀古昔、役によりて使はれたるよぼろ。つかへのよぼろ。㊁古昔、主殿寮に附屬して、禁中の掃除などの雜役に服せし者。

(し-ぢやう[市場](名) 貨物金錢の賣買取引の行はる丶場所。貨物を提供して需要者を求むる供給者の會合場。いちば。

(し-ぢやう[視場](名) 眼の見得る範圍。

(じ-ちやう[次長](名) 長官の次位なる官職。

(じ-ぢやう[磁場](名) 【理】磁氣作用の及ぶ範圍。

(しちやうそん-せい[市町村制](名) 市と町村との制度。

(しちやう-ねつ[弛張熱](名) 「かんけつねつ」(間歇熱)に同じ。

しちや-えいげふ[質屋營業](名) 物品(多くは動產)を擔保に取りて金錢の貸附をなす營業。

(し-ちゆう[市中](名) 町なか。

(し-ちゆう[仔蟲](名) 昆蟲の孵化して未だ成蟲に變態せざる間の稱。

(し-ちゆう[四仲](名) 仲春・仲夏・仲秋・仲冬の稱。

(し-ちゆう[支柱](名) さゝへばしら。つっかひばしら。はしら。

(しち-ゆう[七雄](名) 支那の戰國時代にて、秦・楚・燕・齊・趙・魏・韓の稱。我國の戰國時代にて、織田信長・毛利元就・今川義元・武田信玄・上杉謙信・北條氏康・豐臣秀吉の稱。

(じ-ちゆう[寺中](名) 寺院の中。寺內。

(じ-ちゆう[侍中](名) 君主のおそばに居て、其諮詢にあづかる役。

(し-ちゆう-しゆう[始中終](名) はじめとなかとをはりと。又、事の全體。

(し-ぢよ[四女](名) ㊀四人の女。㊁第四番目の女子。

(し-ぢよ[士女](名) をとことをみなと。

(じ-ぢよ[兒女](名) ㊀をんなこども。「―の泣きをなす」。㊁男の子と女の子と。

(じ-ぢよ[侍女](名) そばづかへの女。こしもと。

(じ-ぢよ[次女](名) 第二番目の女子。

(し-ちよう[至重](名) 至て大切なること。

(し-ちよう[輜重](名) ㊀軍隊の荷物を運搬する車。こにだ。㊁彈藥・糧食・被服其他の諸材料等一切の軍需品の總稱。――しゆそつ[輜重輸卒](名) 輜重兵に從屬して、輜重の運搬に從事する兵卒。――へい[輜重兵](名) 輜重の運搬及監視に任ずる兵士。――ゆそつ[輜重輸卒](名) 「しちようしゆそつ」に同じ。

廿しち-よう[實用](名) まめやか。りちぎ。

(じ-ちよう[自重](名) ㊀自ら自己の品位を保ちて敢て卑下せざること。㊁自ら自己の擧動を愼(ツツ)みて輕率ならざること。㊂自ら自分の身體を大事にすること。じあい。――しん[自重心](名) 自家の品位を保たんとする心。又、自己の擧動を愼む心。

(し-ちよく[司直](名) ㊀法の曲直をつかさどること、法によりて曲直を裁判すること。㊁裁判官。

(し-ちよくけい[視直徑](名) 【天】天體の直徑の視角。

廿しち-らい[失禮](名) 「しつれい」に同じ。

〔しちり-けっかい[七里結界](名) ㊀七里四方の結界。㊁忌(イ)みて寄せ付けぬこと。斷じて近づけぬこと。

〔しちり-けっぱい[七里結界](名) 前條の訛。

(しち-りつ[七律](名) 漢詩にて一句七言の律。

(じち-りゐん[自治吏員](名) 地方自治團體の吏員、即ち、市長・町長・村長・助役の如きこれなり。

〔しち-りん[七厘](名) こんろの類、土製のもの。

〔シ-チン[繻珍](名) 「シユチン」の訛。

(じつ[實](名) ㊀實體。內容。㊁もと。ねもと。「中正無邪實之也」。㊂きぢ。したぢ。㊃もちまへ。なりたち。㊄うまれつき。しやうとく。㊅どだい。いしずゑ。㊆まこと。實情。「以―告」。㊇まごゝろ。誠信。㊈すなほ。淳樸。㊉やくそく。ちかひ。

(しつ[瑟](名) 大いなる一種の琴、長さは八尺一寸のものと七尺二寸のものとありて、幅は皆な一尺八寸なり、絃の數は或は二十七絃或は二十五絃或は二十三絃或は十九絃なり。

(しつ[室](名) ㊀いへ。家屋。「―を築く」。㊁むろ。又、あな。「氷―」。㊂ざしき。へや。㊃おくざしき。居間。㊄一族。一門。㊅ないはう。おくがた。㊆刀劍の鞘。さや。㊇すべて中にものををさめ入る丶器具の稱。――に いり ほこ を とる[入室操戈] 其道を學びて其道を攻擊するにいふ。又、相手方の議論を其まゝ使用して、相手方を攻擊するにいふ。

(しつ[失](名) ㊀あやまち。あやまり。㊁きず。缺點。

(しつ[濕](名) ㊀うるほふこと。「―氣」。㊁「しつさう」(濕瘡)の略言。

廿しづ[倭文](名) 古代の織物、横絲を靑若しくは赤などに染め、亂れたる模樣に織りたるもの。しづり。しづおり。

しづ[賤](名) いやしきこと。いやしき者。「―が伏屋」。

廿しづ-づ[垂](他、た下二) したゝらしむ。

廿しづ―[靜](接頭) 或語に冠して しづかなる意を表はす語。「―歌」。「―心」。

(じつ[實](名) ㊀形に對して、內容の稱。㊁名に對して、本體の稱。㊂くわじつ。み。㊃まこと。しんじつ。「―の親」、「―がある」。㊄事業、功績。「評徑の跡を擧げて、これを功―の上に加ふ」。㊅存在すること。現存すること。㊆防禦あること。そなへあること。「―を避け虛を打つ」。㊇器具。器械。又、貨物。荷物。「軍―を閉す」。㊈芝居にて、善人に扮すること。㊉【數】割算にて、割らるべき數の稱。

(しつ-あう[執拗](名) かたくなに自家の意見を執(ト)りて人に從はざること。心ねぢけて意地強きこと。かたいぢ。(頑固)。

(じつ-あく[實惡](名) 芝居にて、殘忍なる惡人の役。

(しつ-い[失意](名) ㊀あてのはづれたること。失望。㊁志を遂(ト)げ得ずして不平なること。得意の對。

(しつ-い[執意](名) ㊀かたく意見をとりまもること。㊁【心】或目的の寫象を強勢にして思慮を起さしむる心的狀態、若し身體の運動が遂行を始めんとする場合には、これに適應したる四肢の運動神經を刺戟す。

(じつ-い[實意](名) ㊀深切なる心。しんせつ。「―を盡す」。㊁底のこゝろ。ほんしん(本心)。

(しつ-いう[執友](名) 氣のあひたるとも。ともだち。

(じつ-いん[實印](名) 個人が一般の事柄に主として使用する自身の印形、多くは官に屆出をなしおくもの。

(し-つう[齒痛](名) 齒のいたみ。

(し-つう[私通](名) 男女ひそかに情を通ずること。

(し-つう[四通](名) 道路などの四方何れへも通じてあること。――はったつ[四通八達](名) 道路などの如何なる方向へも通じてあること。

廿しづ-うた[靜歌](名) しづかにうたふこと。

廿しづ-え[下枝](名) 下の枝。下えだ。

(しつ-えき[疾疫](名) はやりやみ。流行病。

(じつ-えき[實益](名) 實際の效能又は利益。

(じつ-えき[實役](名) 陸海軍の武官が現役にあること。

(しつ-か[室家](名) ㊀いへ。すまひ。㊁うちわ。一家。

(しつ-か[膝下](名)(膝のもとの義)㊀父母のそば。「―を辭す」。㊁貴人に手近き所。

しづ-か[靜](名) ㊀動かざること。移らざること。㊁おちつきて亂れざること。あわてざること。㊂やすらか。おだやか。㊃多言せざること。又、發言せざること。㊄音聲の聞えざること。ひっそりしたること。世と隔(ヘダ)りてあること。(閑)。

(じつ-か[實家](名) ㊀我生まれたる家。我父母の家。㊁【法】婚姻又は緣組によりて、他家に入りたる場合に、其生家の稱。

(じつ-か[實價](名) まことの直段。かけねなきあたひ。(正價)。

(しつ-かい[悉皆](名、副) のこらず。みな。いっさい。

(じつ-かい[十界](名) 【佛】佛界・菩薩界・緣覺界・聲聞界・天上界・人間界・修羅界・畜生界・餓鬼界・地獄界の稱。

(じつ-かい[十戒](名) 【佛】五戒の外に、食肉・邪見・毀・謗・欺誑又は說過罪・自讚毀他・慳・瞋・謗三寶の五つの戒をそへての稱。

(しつ-がい-こつ[膝蓋骨](名) 【生】大腿骨と下腿骨との關節面を蓋(オホ)ふ皿狀の骨。ひざさら。

(しつ-かう[失效](名) 效力を失ふこと。

(しつ-かう[膝行](名) ひざまづきて進むこと。膝を立てゝ進み行くこと。「―頓首」。

(しつ-かう[失行](名) 道德にかけたるおこなひ。

(しつ-かう[疾行](名) はやく行くこと。

(しつ-かう[執行](名) ㊀實際に施行すること。實地に履行すること。とりおこなふこと。㊁【法】強制執行の略言。――きくわん[執行機關](名) ㊀或事務を執行するために設置せられたる機關。㊁【法】強制執行の機關、即ち、執達吏・執行裁判所の如きこれなり。――くわんり[執行官吏](名) 或命令又は處分の執行を職とする官吏。――さいばんしよ[執行裁判所](名) 【法】執行機關の一たる裁判所、通常其執行の手續をなす地の區裁判所これに當る。――しよぶん[執行處分](名) 【法】法令の規定通りに執行する行政處分、又、強制執行の處分。――はんけつ[執行判決](名) 【法】外國の裁判所の判決を我國の裁判所が適法なりと認めて、其執行を許したるもの。――ぶん[執行文](名) 【法】判決の正本の末尾に、「前記の正本は被告某(又は原告某)に對し、強制執行のため原告某(又は被告某)に附與す」と附記し、これを取扱者たる裁判所書記署名捺印し、且當該裁判所の印を捺(オ)したるもの、これによりて執行力ある正本となる。――めいれい[執行命令](名) ㊀法令を執行するための命令。㊁【法】裁判所が支拂命令に付する假執行の命令。――りよく[執行力](名) 【法】強制執行をなし得る效力。

(じつ-かう[實效](名) 實際の效力。まことのしるし。

(じつ-かう[實行](名) ㊀實際に行ふこと。實地に爲すこと。㊁【法】犯罪の成立する要素の所爲、例へば殺人犯にて刀を加へたるをいふが如し、刀を振上げたる迄は、未だ實行に至らざるなり。――ちゆうしはん[實行中止犯](名) 【法】犯罪の實行あるも、他よりの障礙錯誤に基かず、犯人自ら犯罪の結果を生ずることを妨げたるもの、例へば人を毒殺せんとして、毒藥を服用せしめし後、自ら毒殺の意思を中止して、其人に解毒劑を服用せしめしが如

し。——みすゐはん［實行未遂犯］（名）【法】犯罪の實行ありとも、他の障礙外錯のために遂（ト）ぐると能はざると。

（じつ-がく［實學］（名）㊀實際の役に立つ學問。㊁實際にこれを自分の身に行ふ學問。

しっ-かり（名、副）㊀たしかなるさまにいふ語。㊁十分なるさまにいふ語。

（じっ-かん［十干］（名）えとの名、木火土金水の五行を陰陽に分けたるものにして、木兄（キノエ）・木弟（キノト）・火兄（ヒノエ）・火弟（ヒノト）・土兄（ツチノエ）・土弟（ツチノト）・金兄（カノエ）・金弟（カノト）・水兄（ミヅノエ）・水弟（ミヅノト）、即ち、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の稱。

（じっ-かん［實感］（名）㊀實際の感動、實際の感情。㊁【哲】實在體又は實在體の觀念より生ずる實際的感情、美感よりも意志を動かすと強度にして、心中の把住力大なり。假感又は美感の對。

（しっ-き［漆器］（名）うるしぬりの器物。ぬりもの。

（しっ-き［濕氣］（名）しめりけ。

（しつ-ぎ［質疑］（名）疑義のうたがひある箇所をとひたゞすと。

じつ-き［字突］（名）じさし。

（じっ-き［實記］（名）實際の事情をかきしるしたる記録。「戰爭——」。

じつ-ぎ［實氣］（名）まごゝろ。しんせつ。

（じっ-きやう［實況］（名）實際のありさま。

（しっ-きやく［失脚］（名）㊀足のすべると。たふるゝと。㊁やりそこなひ。しくじり。

（しっ-く［疾苦］（名）なやみくるしむと。なんぎ。「民の——を問ふ」。

（しっ-く［疾驅］（名）はやく車馬を驅（カ）ると。

しつ・く（けけくくるくれけよ）［仕付］（他、か下二）㊀したつ。㊁田植をなす。㊂禮儀作法を敎へならはす。

†しづく［雫］（名）水のしたゝり。（點滴）。

†しづ・く（かきくくけけ）（自、か四）水中の物よく透（ス）きとほりて見ゆ。水にうつりて見ゆ。

しつ・くす（さしすすせせ）［爲盡］（他、さ四）出來得る限り行ふ。ことごとくなす。

†しづ-くら［下鞍］（名）したぐら。

（しっ-くわ［失火］（名）誤（アヤマ）りて起したる火災、

（しつ-ぐわ［漆畫］（名）うるしにて描（ガ）きたる畫、

（しつ-ぐわい［室外］（自）家又は部屋の外。

（じつ-ぐわい［日外］（名）いつぞや。「ぞ」

（しっ-くわん［疾患］（名）なやみ、くるしみ、なんぎ。

シックヰ［漆喰］（名）（石灰の唐音）石灰に赤色の粘土を加へ、これを鹿角菜（フノリ）の液汁にて煉（ネ）りて製したるもの、凝固して堅牢のものとなる、壁などを塗る料とす。

しつ-け［仕付］（名）㊀したつると、したて。㊁田植。㊂禮儀作法を敎へ習はすると。「——が善い」。（躾）。㊃「しつけいと」又は「しつけそ」の略言。㊄「しつけばり」の略言。——いと［仕付絲］（名）新にしたてたる衣服に、したてのくるはぬため、縁（フチ）をあらく縫ひおく絲。——かた［仕付方］（名）㊀したてかた。㊁禮儀作法のしこみ方。（躾方）。——そ［仕付苧］（名）しつけいとの如く用ふる苧。——ばり［仕付針］（名）衣服のしつけに用ふる針。

（しっ-けい［失計］（名）施すべきはかりごとを誤（アヤマ）つと。しくじり。やりそこなひ。（失策）。

（しっ-けい［失敬］（名）㊀人に對して無禮なると。㊁人をふみつけたる仕方。㊂相別るゝに臨みていふ挨拶の語。㊃轉じて、別れ去ると。「僕はこれから——する」。

（じっ-けい［實景］（名）實際の景色、（實景）。

（じっ-けい［實形］（名）實際のかたち。

（じっ-けい［實兄］（名）まことの兄。同父母の兄。

しづけ・し（くしきけれ）［靜］（形、二）しづかなり。

（じつ-げつ［日月］（名）㊀太陽と太陰と。㊁つきひ、としつき。

（じつ-げふ［實業］（名）㊀實地に行ふ業務。實際になすわざ。㊁農業・工業・商業等の如き經濟的事業の特稱。——か［實業家］（名）經濟的事業にたづさはる人。——かい［實業界］（名）實業家の社會、實業の範圍。——がくかう［實業學校］（名）實業に從事せんとする者に、須要なる敎育を施すを以て目的とする學校、工業學校・農業學校・商業學校・商船學校の如きこれなり。——がくむきよく［實業學務局］（名）文部大臣の統轄の下に屬し、實業學校及實業敎育に關する事務を取扱ふ文部省の一局。——けういく［實業敎育］（名）實業に從事せんとする者のために必要なる敎育。——だんたい［實業團體］（名）實業家の結びたる團體。——ほしふがくかう［實業補習學校］（名）實業に從事し又は從事せんとする兒童に、小學敎育の補習と同時に、簡易なる方法を以て、實業に須要なる敎育を施す學校。

しつけ-め［濕氣目］（名）ひぜんによりて起りたる眼病。

（じっ-けん［實權］（名）【法】「しちけん」に同じ。

（しっ-けん［失權］（名）㊀權力をうしなふと。㊁權利をうしなふと。「——者」。

（しっ-けん［執權］（名）古官、將軍を輔佐して政治を行ひし職名。「——職」。

（しつ-げん［失言］（名）失當の言。いひそこなひ。

（しつ-げん［疾言］（名）㊀はやくち。㊁あわたゞしきものいひ、

（じっ-けん［實權］（名）實際の權力。

（じっ-けん［實見］（名）實際を見ると。

（じっ-けん［實檢］（名）實否を檢査すると。——し［實檢使］（名）昔時、爭論の起りたるとき、實檢のために出張を命ぜられし武家の職名。

（じっ-けん［實驗］（名）㊀實地に就きての試驗、まことのためし。㊁自然の現象に人爲を加へ、變化を生ぜしめてためすと。觀察の對。㊂實際の遭遇、又、自家の經驗、「——がないからわからぬ」。——かい［實驗界］（名）實驗の世界。實驗の範圍。——しき［實驗式＝Empirical formula］（名）【化】化合物の組成を最も簡單に示す式、例へば炭酸瓦斯の實驗式は CO_2 にして水の實驗式は H_2O なるが如し。——しんりがく［實驗心理學］（名）【心】人々の意識的現象と生理的狀態との關係に就きて、實驗的考察をなす心理學。——ろん［實驗論＝Positivism］（名）【哲】「フランス」國人「コント」の創唱せる哲學論、吾人は現象の本體を認識すると能はず、たゞ觀察と實驗とによりて、其間の關係を知り得るのみ、哲學は此等の知識を統一組織するものなりといへり。

（じつ-げん［實現］（名）實際にあらはれ出づると。又、實際にあらはし出だすと。

（しっ-こ［疾呼］（名）くちばやに呼（ヨ）ぶと。又、あわたゞしく呼ぶと、

しっ-こ（名）しし。小便。（小兒の語）。

（しつ-ご［失誤］（名）しくじり。あやまり。

（じっ-こう［實功］（名）「じっかう（實効）」に同じ。

†しづ-ごころ［靜心］（名）靜かなる心。落ちつきて亂れざる心。

しつと・し（くしきけれ）（形、二）㊀うるさし。くどし。㊁味濃厚なり。㊂執念（シフネン）深し。

じつ-ごと［實事］（名）芝居にて、善人にいでたちてなすしぐさ。——し［實事師］（名）芝居にて、實事にいでたつ役者、又、事實に巧なる役者。

（じっ-こん［入魂］（名）親しく交はると。なかよきと。

（じっ-さ［實査］（名）實地に就きて檢査すると。

（じっ-さい［實際］（名）㊀まことの場所。げんば。㊁まことの狀態。ありてい。㊂現に存在すると。

（じつ-ざい［實在＝Reality］（名）【哲】（い）事物は吾人の觀念たるに止まらず、實際に主觀以外に存在して有なるを。客觀的存在。（ろ）常住不變にして生滅變化なき實體、又、認識を離れ現象の外に存在する本體。——ろん［實在論＝Realism］（名）【哲】（い）事物の客觀的存在を確信し、吾人の認識は、其眞相を精確に模寫するものなりと說く認識論、觀念論の對。（ろ）「じつねんろん」（實念論）に同じ。

（しっ-さう［漆瘡］（名）うるしかぶれ。

（しっ-さう［濕瘡］（名）疥癬蟲の寄生によりて起る一種の皮膚病、皮膚に細疹を生じ、終に全身に蔓延し、殊に指の股（マタ）に多く生ず。ひぜん。

（じっ-さう［實相］（名）㊀實際のありさま。㊁【佛】萬有の生滅無常の相を離れたる眞實の相。

（しっ-さく［失策］（名）しくじり。しそこなひ。あやまち。（失錯）。

（しっ-し［嫉視］（名）㊀にくむと。㊁にらむと。

（しつ-じ［執事］（名）㊀家政を掌る家來。㊁鎌倉時代の政所（マンドコロ）又は問注所の職名。㊂足利時代の執政、後に管領（クワンリヤウ）と改む。

（しつ-じ［執事］（代）官吏に對して用ふる敬稱。

（じっ-し［實子］（名）自分のうみの子。まことの子。

（じっ-し［實施］（名）實地に施行すると。

（じっ-し［十死］（名）陰陽家にて大凶日の稱、病人を問はず、遠く行かず、萬事に惡（ワ）ろしといふ。

（じっ-し［十指］（名）十本の指。又、衆人の指、「——の指さすところ」。

（じつ-じ［實事］（名）まことの事。

（じつ-じ［實字］（名）形象あるもの等を示したる漢字、人・犬・馬・山・川・草・木等の如し。虛字の對。

（しっ-しつ［蟋蟀］（名）【動】「こほろぎ」に同じ。

しづ-しづ［靜靜］（名、副）たちゐ擧動（フルマヒ）のおちつきてしづかなるさまにいふ語。

（じっ-しつ［實質］（名）形式に對して、內容又は性質の稱。

（じつ-じつ［實實］（名、副）實際にしていつはりなきさまにいふ語。

（じっ-しふ［實習］（名）實地に就きて學びならふと。

（しっ-しやう［漆匠］（名）漆塗の職人。ぬしや。

（じっ-しやう［實性］（名）實際の性質。又、實際の素性。

（じっ-しやう［實正］（名）たしかなると。いつはりなきと。まこと。「借用申候處——なり」。

（じつ-じやう［實情］（名）㊀まごころ。まこと。㊁まことの事情。「——を打明ける」。（實狀）。

（しっ-しゆ［執守］（名）とりまもると。守りてかへぬと。

（じっ-しう［十宗］（名）【佛】八宗に、禪宗と淨土宗とを加へたるもの、稱。

（じっしゆ-かう［十種香］（名）「じしゆかう」に同じ。

（じっしゆ-くやう［十種供養］（名）【佛】十いろの供養、即ち、華・香・瓔珞・抹香・塗香・燒香・幡蓋・衣服・伎樂・合掌の稱。

（じっ-しよう［實證］（名）㊀たしかなる證據。まこ

とのあかし。㊁「じっけん」(實驗)(二)に同じ。——ろん[實證論=Positivism](名)【哲】「じっけんろん」(實驗論)に同じ。

(しっ-しよく[失職](名) ㊀職業に離れて生活の道をうしなふこと。㊁當然其職にあるべからざること。

(しつ-じよく[叱辱](名) しかりつけてはづかしむること。

(じっ-しん-はふ(ウ-ホ)[十進法](名)【數】十倍毎に、位取(クラヰドリ)の進むこと、普通一般に行はるゝもの。

しっ・す(せしすする、すれせよ)[失](自、さ變) うす。

しっ・す(せしすする、すれせよ)[失](他、さ變) うしなふ。

しっ・す(せしすする、すれせよ)[叱](自、さ變) した、ちす。

しっ・す(せしすする、すれせよ)[叱](他、さ變) しかる。

しっ・す(せしすする、すれせよ)[執](他、さ變) ㊀とる、もつ。㊁深く心にとゞめて守る。「虛數の對。

(じっ-すう[實數](名)【數】有理數及無理數の稱。

(しっ-せい[執政](名) 政事を執(ト)ること。又、其職。

(しっ-せい[失政](名) 政治の仕方のよからぬこと。

(しっ-せい[叱正](名) 詩文などの添削を受くることの謙稱。

(じっ-せい[實誠](名) まこと、まごころ。

(しっ-せう(ヨウ)[失笑](名) たまりかねて覺(オボ)えず笑ひ出すこと。ふきだすこと。「がむること。

(しっ-せき[叱責](名) しかりなじること。しかりと

(しっ-せき[失跡](名) あとかたのなくなること。

(じっ-せき[實跡](名) たしかなる形跡。

(じっ-せき[實蹟](名) まことの功蹟又は事蹟。

(じっ-せき[實積](名) 實際の坪數。

(じっ-せつ[實說](名) 虛僞ならぬ說。まことのはなし。「—に臨む」。

(じっ-せん[實戰](名) まことの戰爭、演習の對。

(じっ-せん[實踐](名) 實際に履行し踐用すること。行爲動作にあらはし出すこと。——きゆうかう(ウ-コ)[實踐躬行](名) 實際自身に履行すること。——てきりせい[實踐的理性=Practical reason](名)【倫】理性が善と認むる所を行爲動作に表現せんとする道德的意志の力。——てつがく[實踐哲學](名) 倫理學又は審美學などの稱、其實踐を主とするよりいふ。

(しっ-そ[質素](名) ㊀かざりなきこと。いつはりなきこと。すなほ。㊁生活の儉約なること。衣食を奢(オゴ)らぬこと。「ること。

(しっ-そう[執奏](名) とりつぎて主上に奏上す

(しっ-そう[疾走](名) 急ぎはしること。かけゆくこと。

(しっ-そう[失踪](名) ㊀住所又は居所を去りて、行方の知れざること。しゆっぽん。㊁【法】人が從來の住所又は居所を去りて七年間生死不分明なる場合、若しくは死亡の原因たるべき危難(戰地に出征、乘船の沈沒等)に遭遇し、其危難の去りたる後三年間生死不分明なる場合に、利害關係人の請求により、裁判所が宣告して、死亡者と看做すこと。——しや[失踪者](名) 失踪したる者。又、失踪の宣告を受けたる者。

(しっ-そく[失足](名) 「しっきやく」(失脚)に同じ。

(しっ-そく[疾足](名) あしばや。

(しっ-そく[疾速](名) はやきこと。すみやか。

(じっ-そく[實測](名) 實地の測量。

(しっ-た[叱咤](名) ㊀しかること。㊁したうち。

(しっ-たい[失體](名) ㊀事體をわきまへぬこと。㊁不體裁なる事をなすこと。面目を失ふこと。(失態)。

(じっ-たい[十體](名) 書體の十種、古文・大篆・籀文・小篆・八分・隸書・章草・行書・飛白・草書の稱。

(じっ-たい[實體](名) ㊀形式に對して、內容又は本質の稱。㊁【哲】事物中の常住變化なき性質若しくは作用、即ち其性質若しくは作用なければ、其事物の成立せざるもの。又、事物の性質若しくは作用の基本、又、他のものに依らずして、其もの自身にて存在することを得るもの。又、他のものを待たずして考へ得らるゝもの。——はふ(ウ-ホ)[實體法](名)【法】手續法に對して、權利義務を規定したる法律の稱、即ち民法・商法等の如きをいふ。——ろん[實體論](名)【哲】(い)[Ontology] 吾人に認識し又は思考せらるゝ、實在の終極の本性を研究する哲學。(ろ)[Substantialism] 現象若しくは作用を離れて、其實體ありとなす說。

(しっ-たう(ウ-ト)[失當](名) 當然ならぬこと、適當ならぬこと。(不都合)。

(しっ-たつ[執達](名) 上意を承(ウ)けて下に通達すること。——り[執達吏](名) 區裁判所に附屬する公吏、訴訟に關する書類の送達及裁判の執行をなすもの、又、他の委任を受けて、任意競賣をなし又は拒絕證書を作成し、規定の手數料を受く、若し總收入年額百八十圓に滿たざるときは、官より相當の補助金を受くることを得。

シッタン[悉曇](名)(梵語Siddham、成就の義) ㊀梵語の母韻。㊁梵字。㊂梵語。

(じつ-だん[實彈](名) 彈丸を裝塡したること。——えんしふ(ウ-シ)[實彈演習](名) 實彈を發射する演習。

(しっ-ち[濕地](名) 濕氣多き土地。——しよくぶつ[濕地植物](名)【植】海洋・湖沼・河澤・田沼等に生ずる浮草・藻類・水草等の總稱。

(じっ-ち[實地](名) げんば、じっさい。「—を見る」。

——えんしふ(ウ-シ)[實地演習](名) 實地に就きて業務をならふこと。

(しっ-ぢ[執持](名) ㊀とりもつこと。㊁まもること。

(じっ-ちく[實竹](名)【植】竹の一種、幹の中の空虛ならぬもの。「—の印」。「一。

(しつ-ぢよ-きゆう[室女宮](名)【天】十二宮の

(じっ-ちよく[實直](名) まめやかにして虛僞なきこと、かげひなたなきこと。りちぎ、しやうぢき。

〔シッ-チン[繻紾](名) 「シュチン」の轉訛。

(しっ-つゐ[失墜](名) ㊀おとすこと。うしなふこと。

じっ-て[十手](名) 昔時、捕吏の携帶せし具、鐵の
㊁空しくつひやす入費、空費。
短き棒の中程に鉤(カギ)あるもの、犯罪者を捕縛するときこれを以て打擲したり。(鐵尺、鐵挺)。

(じっ-てい[實體](名) 「じっちよく」(實直)に同じ。

(じっ-てい[實弟](名) 同父母の弟、まことの弟。

(じっ-てつ[十哲](名) ㊀孔子の十人の高弟、即ち顏回・閔子騫・冉伯牛・仲弓・宰我・子貢・冉有・季路・子游・子夏の稱。㊁芭蕉の十人の高弟、即ち榎本其角・服部嵐雪・森川許六・向井去來・各務支考・內藤丈艸・立花北枝・河合曾良・志田野坡・越智越人の稱。

(しつ-てん[質點](名)【理】極めて小さく考へて、空間に於ける一點と見做す物體、恆星の如きも、天文學上にて、天に於ける位置を考ふるときは、質點

(しっ-てん[失點](名) おちど、缺點。「と見做す。

(しっ-てん-ばっ-たう(ウ-ト)[七顚八倒](名) 「しちてんばったう」に同じ。

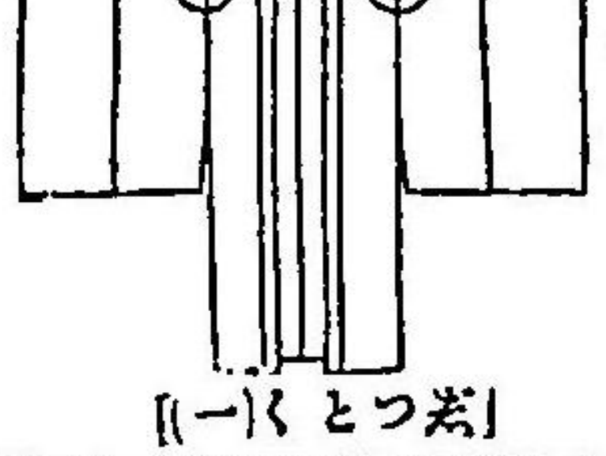
(しっ-と[嫉妬](名) ねたみ。そねみ。りんき。

(しっ-ど[濕土](名) 濕氣多きつち。

(しっ-ど[濕度](名)【理】大氣中に存在する水蒸氣の割合の稱にして、空氣中一定の體積に存在する水蒸氣の量と、これと同溫度に於て飽和し得る水蒸氣の量との比、即ち現時の水蒸氣の壓力と、同溫度に於ける飽和水蒸氣の壓力との比。——けい[濕度計](名)【理】大氣中の濕度を測る器械、普通用ふるものは、二個の寒暖計を並列したる裝置にして、其一個の球部を布にて包み、布の端を常に水に浸(ヒタ)しおけば水の蒸發によりて球部冷(ヒ)ゆ、而して大氣中の濕氣少き程蒸發盛なるが故に、此寒暖計の示す溫度はいよ〱低下す、よりて二個の寒暖計の示す溫度の差を、これに附屬したる表に比較して、濕度を算出す。又、最も簡便なるは毛髮濕度計なり、毛髮は濕(ス)るときは伸(ノ)び乾くときは縮(チヂ)むにより、其伸縮によりて指す目盛を讀みて濕度を知るなり。「のよからぬこと。

(しっ-とく[失德](名) 道德の修(ヲサ)まらぬこと、品行

(じっ-とく[十德](名) ㊀中古の衣服、形は素袍(スハウ)に似て、腋(ワキ)を縫ひつけたるもの。㊁後世は醫者の禮服。



[じっとく(一)]

(しっ-とり(名、副) ㊀しづやかなるさま又はおも〱しきさまにいふ語。「—した人」。㊁ぬれしとるさまにいふ語。

(しつ-ない[室內](名) いへのうち、へやのなか。——しやてき[室內射的](名) 室內にてなす遊戲の射的。

(しつ-ね・し(くしくきけれ)(形、二) ㊀仕方なし、是非なし。せんかたなし。㊁くるしみ堪(タ)へがたし、はなはだつらし。「はりなく、まことに。げに。

じつ-に[實](副) うたがひなく、まがひなく、いつ

‡しづ-ぬの[倭文布](名) 「しづ」に同じ。

(しつ-ねん[失念](名) ものわすれ。(失忘)。

(じつ-ねん-ろん[實念論=Realism](名)【哲】概念は實在にして個物は其模寫に過ぎず、猶月といひ馬といふも、畢竟は馬といふものゝ模寫に過ぎずして、一時の假現なりといふ說。唯名論の對。

しづ-の-め[賤女](名) 身分賤(イヤ)しき女。(匹婦)。

しづ-の-を[賤男](名) 身分賤(イヤ)しき男。(匹夫)。

‡しづ-の-をだまき[倭文苧環](名) しづを織るに用ふる苧環。

(しっ-ぱ[叱罵](名) しかりのゝしること。

(しっ-ぱい[失敗](名) しそこなひ。やりそこなひ。しくじり。(失策)。

(しつ-ばう(ウ-ボ)[失望](名) あての外(ハヅ)れて、希望の斷(タ)ゆること。のぞみかなはずして、心づくしのかひなきこと。「すこと。

(しつ-ばう(ウ-ボ)[失亡](名) なくなること。又、なくな

(しつ-ぱう(ウ-ボ)[七寶](名) 「しちはう」に同じ。——つなぎ[七寶繫](名) 「しちはうつなぎ」に同じ。——やき[七寶燒](名) 「しちはうやき」に同じ。

(じっ-ぱう(ウ-ボ)[十方](名) ㊀四方と四隅と上下との稱。㊁殘るくまなき方處。——ぐれ[十方暮](名) ㊀大空暗く曇(モク)り勝にて雨の降(フ)らぬ天候。㊁陰陽家にて、甲申より癸巳までの十日間の稱、此間は何事も相談と、のはずといふ。——せかい[十方世界](名)【佛】全世界。

‡しづ-はた[倭文機](名) 「しづ」(倭文)に同じ。——おび[倭文機帶](名) 倭文にて仕立てたる帶。——ごろも[倭文機衣](名) 倭文にて仕立たる衣服。——に[倭文機](枕) 「みだる」に冠らする詞。

〔しっ-ぱらひ[後拂](名) しんがり。あとおさへ。

(しっ-ぴ[失費](名) 仕拂の費用。つひえ。ものいり。いりよう。

(しっ-ぴ[櫛比](名) 櫛(クシ)の齒のごとく、密にならびたること。「人家—」。

(じっ-ぴ[實否](名) まことなるとしからざること。

(じっ-ぴ[實費](名) 實際支拂の入費。

(しっ-ぴつ[執筆](名) 筆を執(ト)りて物を書くこと。

(じっ-ぷ[實父](名) まことの父。うみのちゝ。

(じっ-ぷ[實否](名) 「じっぴ」に同じ。

(しっ-ぷう[疾風](名) ㊀はやく吹く風。㊁【地】樹木の小枝を動かす程の風。

(しっ-ぷう-もく-う[櫛風沐雨](名) （風に髮を梳(クシケヅ)り雨に體を洗ふ義）外にありて、風雨を冒(カオ)し勤勞奔走すること。

(じつ-ぶつ[實物](名) 實際の物體。ほんもの。—-かうくわん[實物交換](名) ㊀貨物と貨物とをかへあふこと。㊁【經】貨幣といふ交易の媒介物によらず、直接に物と物とをかへあひて交易を營むこと。—-けいざいじだい[實物經濟時代](名) 【經】人智未だ發達せず貨幣未だ發明せられず、たゞ貨物交換によりて交易の行はれし時代の稱。—-けうじゆ[實物教授](名) 生徒に實物を示してなす教授。

(しっ-ぺい[疾病](名) やまひ。びやうき。

しっ-ぺい[竹篦](名) ㊀禪家にて、人を打つに用ふる竹の杖に似たるもの。㊁片手の指を片手の指にて交(サ)へ反(ソ)らしはじきて打つこと。—-がけ[竹篦賭](名) 勝負事にて、負けたるものは、勝ちたるもの、竹篦を受くること。—-がへし[竹篦返](名) ㊀竹篦にて打たれて、竹篦にて打ち返へすこと。㊁或よからぬ仕向を受けて、直にそれかへしをなすこと。

(しっ-ぺい[執柄](名) ㊀權柄をにぎること。㊁關白の異稱。—-け[執柄家](名) 攝家の異稱。

(しつ-べん[執鞭](名) ㊀鞭(ムチ)を手にすること。㊁鞭を手にして馬を御すること。又、其人即ち御者。

〔しっ-ぽ[尻尾](名) ㊀獸類などの尾。㊁垂(タ)れ下がりたる細長きもの、端末。㊂誤魔化したる事柄又は本性。

(じつ-ぼ[實母](名) うみのはゝ。まことの母。

(じつ-ぼく[質朴](名) ㊀性來のまゝなること、人爲の加はらざること。㊁かざりなく律義なること。いつはりなく正直なること。

シッ-ポク[卓袱](名) ㊀支那風の食事用の机、高さ三尺許、脚四本あり、四方朱漆にて塗り周圍に紅白の紗綾を垂る。㊁一種の料理、そばきり又は索麪などのつゆに、松茸・椎茸・蒲鉾・野菜などを加へて煮たるもの。—-だい[卓袱臺](名) 前條(一)に同じ。

〔しっ-ぽり[濕然](名、副) ㊀しめやかなるさまにいふ語。㊁ぬれしとるさまにいふ語。「春雨に—濡る」。㊂男女のなからひのいとこまやかなるさまにいふ語。

しづ-ま・る[鎭](自、ら四) ㊀靜かになる。をさまる。㊁おだやかになる。おちつく。㊂ねむる。ねいる。

(じつ-まん[實滿](名) 一ぱいにみつること。

(じつ-みやう[實名](名) 假名・雅號又は藝名などに對して、實際の名前の稱。

(しつ-む[執務](名) 業務を取扱ふこと。—-じかん[執務時間](名) 執務する規定の時間。

しづ・む[沈](自、ま四) ㊀水底へ行く。水中に入る。㊁水に投身して死ぬ。「海に—」。㊂くだる。さがる。「脈—」。㊃しづまる。おちつく。㊄思ひ屈す。氣ふさぐ。㊅わづらひなやむ。㊆すさむ。おぼる。㊇窮境に陷る。おちぶる。おちいる。㊈泣き伏す。「しづみ入る」、「涙に—」。

しづ・む[沈](他、ま下二) 沈むやうにす。しづます。

しづ・む[鎭](他、ま下二) ㊀鎭定す。をさむ。さだむ。「亂を—」。㊁おちつかす。やすんず。㊂抑壓す。おさふ。おす。㊃神を鎭座せしむ。㊄床につかす。ねさす。

(じつ-む[實務](名) 實地に取扱ふ業務。「—練習」。—-か[實務家](名) 實務にあたる人、又、實務に熟練したる人。

しづめ[沈](名) しづむること。

しづめ[鎭](名) ㊀しづむること。㊁しづむる役。

(しつ-めい[失命](名) 生命をうしなふこと。

(しつ-めい[失明](名) 視力をうしなふこと。めくらになること。

(しつ-めい[失名](名) 當人の名のわからぬこと。—-し[失名氏](名) 名のわからぬ人、なにがし。

(じつ-めい[實銘](名) ㊀まごゝろ。㊁しやうぢき。

(じつ-めい[實名](名) 「じつみやう」に同じ。

〔しづ-める(他) 「しづむ」の訛。

(しつ-もん[質問](名) 疑問又は理由をたづねとふこと。

しづ-やか[靜](名) しづけきこと。しづか。

(じつ-よう[實用](名) 實際に入用なること。又、實際に利用あること。—-しんあん[實用新案](名) ㊀實用に就きての新工夫。㊁【法】從來既存の物品に就き、其形狀構造等の上に新工夫を施して、其利用を増進すること、出願により登録を受けたるものは、三年間若しくは希望により六年間は、其利益を獨占するを得。「—法」。

(しつ-らい[疾雷](名) 急激なるかみなり。はげしきかみなり。

(じつ-らい[日來](名) ㊀ひごろ。㊁さきごろ。

しつらひ(名) しつらふこと。てかすこと。

しつら・ふ[はひふふへへ](他、は四) とゝのへよそほふ。かざりつくる。

艹しづ-り[倭文](名) 「しづおり」の略言。

艹しづ-り[雪墜](名) 木の枝などより雪の落つること。

(じつ-り[實利](名) ㊀現實の利益。實際の效用。㊁【經】特定の物件の特定の場合に於ける使用上の價値。—-しゆぎ[實利主義](名) 現實の利益を標準とし立場として、說を立て又は事を行ふ主義。現實主義。

(じつ-りやう[質量](名) 【理】物體の有する實質の量、重量によりこれを比較す。

(じつ-りよく[實力](名) ㊀實際の力量。㊁內容の力量。

艹しづ-れ[雪墜](名) 「しづり」に同じ。

(しつ-れい[失禮](名) 禮節をかくこと。不作法なること。(失敬)。

(じつ-れい[實例](名) 實際ありしためし。

(じつ-れう[實料](名) 物事の內容なる實質。

(じつ-れき[實歷](名) ㊀實際に見聞したること。實地に遭遇したること。「—談」。㊁まことの履歷。

(しつ-れん[失戀](名) こひのかなはぬこと。

(じつ-ろく[實錄](名) ありし事實を其儘に書きたるもの。まことの記錄。(實說)。

しづ-わ[後輪](名) 鞍(クラ)の後方の高くなりたる處。

(じつ-わ[實話](名) 實際のはなし。

(じつ-ゐき[日域](名) 日本國の異稱。

艹しづ-を[賤男](名) 「しづのを」に同じ。

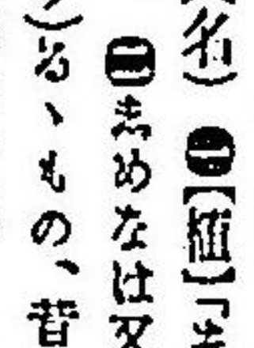
しつ-て[仕手](名) ㊀爲(ス)る人。行ふ人。㊁能樂又は狂言にて、曲中の重なる技を行ふ役。

して(助) ㊀ありて。又、て。「美く—啓り遊し」。㊁を以って。又、にて。「隨身—ことの心をいひ入れぬ」。

〔して(接) さうして。しかして。そして。「—返辭は」。

して[四手](名) ㊀【植】「してやなぎ」の略言。㊁しめなは又は玉串などに垂(タ)るゝもの、昔は木綿を用ひ今は紙を用ふ。

して[死出](名) 「してのやま」の略言。「かなはぬときは—三途」。


[(二)して]

(してい[師弟](名) 師匠と弟子と。「—の契約」。

(してい[子弟](名) 子と弟と。轉じて、わかもの。壯者。「江東—八千人」。

(してい[仕丁](名) 「しちやう」に同じ。

(してい[四諦](名) 【佛】「したい」に同じ。

(してい[私邸](名) 自己のやしき。

(してい[指定](名) それとさし定むること。—-がくかう[指定學校](名) 主務省より其卒業生が或特別の資格を有するものと認(ミト)むる學校。—-かとくさうぞくにん[指定家督相續人](名) 【法】被相續者の指定したる家督相續人。—-こうけんにん[指定後見人](名) 【法】後見人の條を見よ。

(してう[翅鳥](名) ㊀飛ぶ鳥。㊁圍碁にて、殆ど包圍して、遁(ニ)げんと打つ石の頭を押(オサ)へ、斜に追ひ行きて、結局は盡くこれを死石となすこと。

(してう[鷙鳥](名) 他の鳥類を補食する鷲・鷹等の猛禽の稱。(肉食鳥)。

(してう[思潮](名) 其時代の一般の思想。

(しでう[施條](名) ㊀すぢを施しつくること。㊁彈丸飛行の勢力を強大ならしむるため、銃身又は砲身の內壁に、螺旋狀の溝(ミゾ)を作りたるもの。—-じゆう[施條銃](名) 銃身の內壁に施條ある小銃。—-はう[施條砲](名) 砲身の內壁に施條ある大砲。

(してう[慈鳥](名) 【動】「からす」の異稱。

艹しで-う・つ[繁撃](他、た四) 繁(シゲ)く砧(キヌタ)を打つ。

してう-の-わかれ[四鳥別](名) （晉、支那の桓山にて、親鳥が其雛(ヒナ)の四羽が成長して四海に別れ去らんとするとき、いたく悲み歎きたりといふ故事に出づ）親子の悲しき離別にいふ語。

(しでう-は[四條派](名) 次條に同じ。

(しでう-りう[四條流](名) 日本畫の一派、松村吳春を祖とす、後世は圓山應擧より出でたる圓山流をも合稱す。

(してき[指摘](名) ㊀さししめすこと。㊁あばき出すこと。

(してき[詩的](名) 詩のおもむきありて美感を動かすにいふ語。又、現實を離れて感想に入るにいふ語。—-くうさう[詩的空想](名) たゞ感想上より生じて實際ならぬ思想。

(じてき[自適](名) 境遇のために亂されずして、心のいとうちくつろぎてあること。

してざくら[四手櫻](名) 【植】「してやなぎ」の一名。

(じてつくわう[磁鐵鑛](名) 【鑛】鐵鑛の一、鐵黑色にして堅けれども脆(モロ)し、磁氣を有して鐵類を吸引する特性あるが故に、天然に產出するものも、他の類似の鑛物より容易に區別するを得、製鐵上重要なる鑛物なり。

しでのき[四手木](名) 【植】「してやなぎ」の一名。

しで-の-たび[死出旅]（名）死出山に赴くこと、即ち、死ぬること。

しで-の-たをさ[死出田長]（名）【動】「ほとゝぎす」の異稱。

しで-の-やま[死出山]（名）【佛】死にて行く冥途にありといふ山、「―ふもとを見てぞかへりにし」。

して-ばしら[仕手柱]（名）㊀能樂の舞臺と橋掛（ハシガカリ）との間にある柱、仕手の所作の起點とも終點ともなる所とす。㊁昔時、芝居の舞臺の上手（カミテ）にありし柱、「正面の―の方に身を寄せ」。

して-やなぎ[四手柳]（名）【植】薔薇科に屬する木、葉は櫻に似て單葉なり、花瓣は長くして多くは白色を呈す、果實は圓し、觀賞用として栽培せらる。しでざくら。（扶移）。

〔**して-や・る**〕[爲遣]（他、ら四）㊀食す、「飯を―」。㊁片付けてしまふ。㊂たくらみを成就せさす。

（**し-てん**）[支店]（名）てみせ。分店、本店の對。

（**し-てん**）[指點]（名）ゆびさししめすこと。

（**し-てん**）[支點]（名）【理】槓杆にて固定したる點をいふ、その周圍に槓杆の回轉するもの。

（**し-てん**）[四天]（名）㊀蒼天（春）・昊天（夏）・旻天（秋）・上天（冬）の稱。㊁四天王の略言。

（**し-てん**）[肆廛]（名）みせ。たな。（肆店）。

（**し-でん**）[史傳]（名）歷史と傳記と。又、歷史中の「傳記」。

（**し-でん**）[賜田]（名）「こうでん」（功田）に同じ。

（**じ-てん**）[字典]（名）「じしよ」（字書）に同じ。

（**じ-てん**）[辭典]（名）「じしよ」（辭書）に同じ。

（**じ-てん**）[次點]（名）其次の點數。――**しや**[次點者]（名）其次の得點ある者。

（**じ-てん**）[自轉]（名）㊀【天】地球或は他の遊星が、其軸の周圍に回轉すること。㊁自から回轉すること。――**しや**[自轉車]（名）乘りたる人が自己の足の力をもて、車輪を回轉して走らする裝置の車、二輪・三輪等の種類あり。

（**じ-でん**）[自傳]（名）自ら述作せる自己の傳記。

（**し-でんしゆう**）[四殿衆]（名）四職の人達の稱。

（**し-てんわう**）[四天王]（名）㊀【佛】帝釋天の外臣なる持國天・增長天・廣目天・多聞天の稱、各部下に八將軍を具し、これを派出して四天下を巡（メグ）りもろもろの出家を護るといふ。㊁配下又は門下の中にて、武勇又は技藝の拔もすぐれたる四人の稱、「賴光の―」「和歌の―」。

卄**しと**[濕]（名）小便の古稱、「うちとけて―しける」。

（**し-と**）[使徒]（名）耶蘇基督の十二人の弟子の稱。

（**し-と**）[仕途]（名）官につかふるみちすぢ。

（**し-と**）[緇徒]（名）すみぞめの衣を着るともがら、即ち僧侶。

（**じ-ど**）[磁土]（名）水に溶解せざる硅酸「アルミニウム」の殘留して粘土となりたるもの。

（**し-とう**）[指頭]（名）ゆびさき。「―畫」。

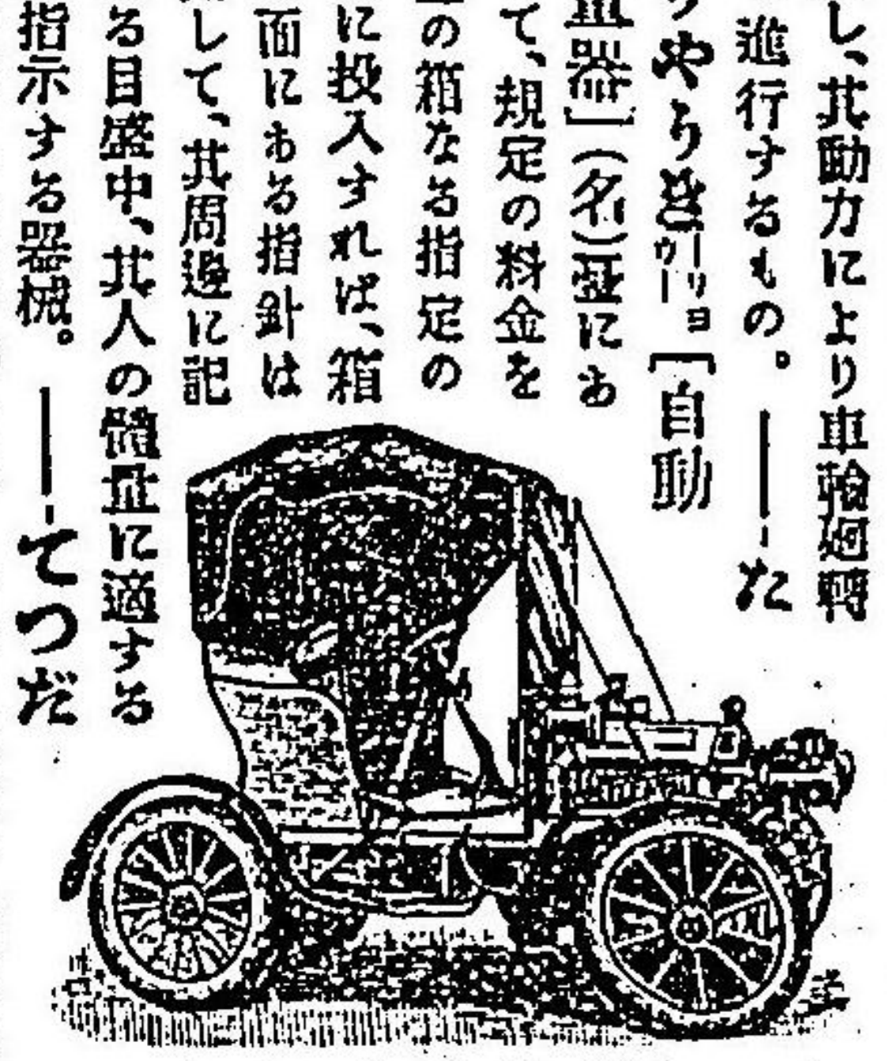
（**し-とう**）[絲桐]（名）琴の異稱。

（**し-どう**）[紫銅]（名）「からかね」の一名。

（**じ-どう**）[侍童]（名）小姓（コシヤウ）のわらべ。

（**じ-どう**）[兒童]（名）わらべ。こども。童子。――**しんりがく**[兒童心理學]（名）【心】兒童の意識の發達の過程を比較研究する心理學。

（**じ-どう**）[自動、自働]（名）㊀其もの自身にて活動すること、自らはたらくこと。㊁【文法】他の事物に關係なく、或事物の現はす動作の稱、例へば「人眠る」「月冱ゆ」「風吹く」の「眠る」「冱ゆ」「吹く」等の類。他動の對。――**し**[自動詞]（名）【文法】自動の意を現はす動詞。――**しや**[自動車]（名）一種の乘車、形は殆ど馬車の如く、瓦斯發動機又は電氣發動機を裝置し、其動力により車輪廻轉して進行するもの。――**たいりやうき**[自動體量器]（名）臺にあがりて、規定の料金を臺上の箱なる指定の小孔に投入すれば、箱の表面にある指針は自動して、其周邊に記したる目盛中、其人の體量に適する點を指示する器械。――**てつだう**[自動鐵道]（名）軌條を波狀の凸凹に造り、車の惰性によりて奔（ハシ）らするもの。――**でんわ**[自動電話]（名）市中適當の街頭に設けて、各人の隨意使用に供する電話機、使用者が規定の料金を電話機の指定の小孔に投入すれば、其音の電話交換所に通ずるにより、電話交換所にて、該電話線と先方の電話線とを連續するもの。――**にんぎやう**[自動人形]（名）體內に一種の裝置ありて自動する人形。――**はんばいき**[自動販賣器]（名）或特種の貿品につき、代價相當の金錢を指定の小孔に投入すれば、所要の物品のこれに應じて出であらはるゝ器械。――**ろ**[自動路]（名）地下に通ずる道路などに設け、通行人を乘せ行く一種の器械、車輪を其下部につけ、恰も調革の滑車を回轉するが如き狀態にて運行する裝置のもの。



〔じどうしや〕

（**し-とうしん**）[四等親]（名）五等親の條を見よ。

卄**しとぎ**[粢]（名）（白漸（シロキ）の義）米の粉をもて作りたる長卵形の餅、神前に供ふ。（粢）。――**つば**[粢鍔]（名）しとぎの如き楕圓の鍔。

（**し-とく**）[四德]（名）㊀婦人の四つの德、即ち、貞・德・功・容の稱。㊁天地自然の德、即ち、元（春にして仁）・亨（夏にして禮）・利（秋にして義）・貞（冬にして智）の稱。

（**し-とく**）[私德]（名）自己に屬する道德、公德の對。

（**し-とく**）[至德]（名）最上の德。

（**し-とく**）[齒德]（名）年齡と德行と。

（**し-とく**）[私慝]（名）かくれたる惡行。

しと・ぐ[爲遂]（他、か下二）爲しとぐ。なしはつ。

（**じ-とく**）[自得]（名）㊀自らさとること、自身にて覺（オボ）ゆること。㊁自ら滿足してあくせくせざること。

（**じ-どく**）[侍讀]（名）君側にありて書を講ずること。又其職即ち侍講の類。

しどけ-な・し（形、二）取亂れてあり。取締なし。檢束なし。

〔**しと-しと**〕（名、副）㊀靜かに步むさまにいふ語。㊁靜かにうるほすさまにいふ語、「雨が―降る」。

〔**しと-しと**〕（名、副）いたく濕氣のこもるさまにいふ語。

卄**しと-だち**[章斷]（名）しめなは。

しと-だる[四斗樽]（名）酒量凡そ四斗ばかり入るべき樽。

卄**しと-づつ**[小便筒]（名）古昔、裝束を着けて外出するときなどに携帶せし便器の筒。

卄**しと-ど**（副）甚しく。したゝかに。

しとど[鵐]（名）【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、山野に棲息す、形雀に似て稍や赤し、翅に黑斑ありて、眼邊に稍狀の羽毛あり。（巫雀）。――**め**[鵐目]（名）腰刀・和琴・箏等の紐通（ヒモトホシ）の孔に嵌（ハ）むる金具、其形のしとどの眼に似たるよりいふ。（鉼）。

しど-な・し（形、二）しどけなし。とりしまりなし。

しとね[茵]（名）坐し又は臥（フ）す下に敷く物。ざぶトン。ふきブトン。（褥）。

しとみ[蔀]（名）古昔、高貴の家又は神社佛閣などに、日を除（ヨ）け又は風雨を防（フセ）ぐに用ひし戶。――**ばり**[蔀梁]（名）店の柱の上部に取付けたる大梁。――**や**[蔀屋]（名）蔀にて圍ひたる假屋。

しどみ[樝子]（名）【植】薔薇科に屬する木、多くは山野に生ず、長さ三四尺許、枝に刺多し、春の頃、五瓣黃色の花開く、果實は頭尾共に凹（ボク）み、夏の頃熟す。（木瓜、矢獨窗）。

しと・む[爲留]（他、ま下二）うちとむ。うちはたす。

〔**しとめ**〕[蔀]（名）「しとみ」の訛。

しどめ[樝子]（名）【植】「しどみ」の一名。

しと-やか[閑雅]（名）㊀起居動作のみやびやかなること、言語擧動のおちつきてあること。㊁性情の穩（オダ）かにして卑（イヤ）しからぬこと、氣性のものしづかにしてたしなみ深きこと。

しとり[濕]（名）しめり。うるほひ。

しとり（名）機（ハタ）の經絲（タテイト）を卷くとき間に入るゝもの。

卄**しどり**[倭文]（名）「しづおり」の約言。

卄**しどり-べ**[儐從]（名）ずさ。ともびと。

しと・る[濕]（自、ら四）しめる。うるほふ。

しどろ（名）秩序なく崩（クヅ）れ亂るゝさまにいふ語。――**もどろ**（名）甚しくしどろになりたるさまにいふ語。

しな[品、科]（名）㊀たぐひ。いろ。種類。㊁くらゐ。わかち。等差。㊂きだ。だん。階。段。㊃ひとがら。ぶんぴん。風度。㊄とりなし。ふるまひ。擧動。㊅ことがら。やうす。事情、「―によれば」。㊆しろもの。しなもの。

しな[科]（名）【植】「しなのき」の略言。

―**しな**（接尾）動詞にそへて其をりの意にいふ語、「起き―」「立ち―」。

（**し-ない**）[市內]（名）市の區域內。

（**じ-ない**）[寺內]（名）寺の一構の內。

（**し-なう**）[詩囊]（名）詩稿を入るゝ囊。

（**し-なう**）[子囊]（名）【植】隱花植物の胞子を包む囊、成熟すれば破裂して胞子を散出す。――**ぐん**[子囊群]（名）【植】隱花植物の子囊の叢（ムラガ）りて着生するもの、例へば「しのぶ」の葉の裏に發生する茶褐色の叢卵の如きものこれなり。――**すゐ**[子囊穗]（名）【植】杉菜（スギナ）の上部に子囊を着する穗狀の莖、即ちつくつくし等の稱。

しな-がき[品書]（名）しなを列擧せしもの、しなの目錄。

しな-かたち[品形]（名）ひとがら。やうす。

卄**しなが-どり**[息長鳥]（名）（「しな」は息の古語）【動】「かいつぶり」の異稱。

しながは-をどし[品革緘]（名）白く齒朶（シダ）の葉の形を置きたる革にて藍色に染め鎧（ヨロヒ）を緘（ヲド）すこと。又、其緘したる鎧。

しながは-のり[品川海苔]（名）武藏國品川の海邊にて採（ト）る淺草海苔。

シナ-カバン[支那鞄]（名）外側は多く白色の革又は紙等にて貼（ハ）りたる櫃形の「カバン」、もと支那より渡來したるものなるよりいふ。

しな-ぎれ[品切]（名）しなものゝたね切れとなること。

しな-ごころ[品心]（名）やうすとこゝろざまと。

卄**しな-さかる**[級離]（枕）（京より越國へ行くに阪（サカ）多くして又遠く離れたりといふ義）「こしのくに」に冠らする詞。

しな-さだめ[品定]（名）ものゝよしあし優劣等を評し定むること、「雨夜の―」。（品評）。

〔**しな-しな**〕[嫋嫋]（名）しなふさまにいふ語。

しな・じな「品品」(名) ㊀いろ〳〵の種類。又、いろ〳〵の物質。㊁それ〴〵の特色を有して、同一ならざるを。

┼**しな・じな・し**（しく、しく、し、しき、しけれ）「品品」(形、二) しなまされり。けだかし。

〔**しな・す**（さ、し、す、す、せ、せ）「爲做」(他、さ四) 爲す。行ふ。

〔**しなせ・ことば** (名) 丁寧なることばづかひ。

〔**しなせ・ぶり** (名) さも丁寧にもてなすさまを見するを。「—の物」。

しな・だま「品玉」(名) ㊀玉を空中に投(ナ)げ上げ、これを手に受けて、巧に弄ぶ技術、即ち今の大神樂の類。(弄丸、弄玉)。㊁てじな。てづま。

┼**しな・だ・ゆふ** (枕)「ささなみ」に冠らする詞。「—ささなみぢをすく〳〵とわが行けばや」。

┼**しな・だり・くぼ** (名) 女子の陰門。

しな・だ・る（れ、れ、る、るる、るれ、れよ）「萎垂」(自、ら下二) ㊀しなびて垂る。㊁力なげに他の體によりかゝる。(隨靡)。

┼**しな・て・る**「級照」(枕)「片」に冠らする詞。「—片しは河の、さにぬりの大橋の上ゆ」。

┼**しな・ど・の・かぜ**「科戸風」(名) (しなつひこ及しなつひめの二柱の神の名より出づ)風の異稱。

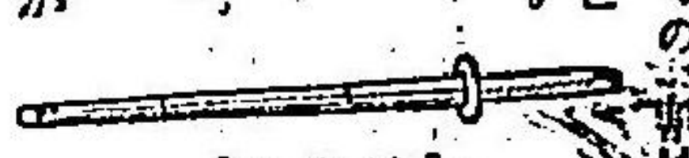
しな・の・うめ「信濃梅」(名) 【植】にはうめの變種、葉狹くして花柄長く、花蕊は白色異瓣なり。

しな・の・がき「信濃柹」(名) 【植】柹の一種、葉は暗綠色なる上面と灰白色なる下面と共に平滑にして、五分內外の長さを有する葉柄あり、果實は小形にして其未熟なるときに柹澁を搾(シボ)るべし、木材もまた種々の用に供せらる。(牛乳柹、君遷子)。

しな・の・き「科木」(名) 【植】田麻科に屬する木、葉は心臟形をなして殆ど平滑なり、花は小形にして五瓣白色なり、樹皮は火繩又は麁綫などに用ひらる。

しなひ（イシナ）「竹刀」(名) 擊劍の時に用ふるもの、割竹四本をよせて刀形となし、欛(ツカ)と鋒(キツサキ)とにあたる處を皮にて包み、皮の鍔(ツバ)をはむ。

——**だけ**「竹刀竹」(名) 前條に同じ。



[しなひ]

しなび「萎」(名) しなぶると。

しなひ・どり（イシナ）(名) 【動】「つぐみ」の一名。

〔**しなびる**「萎」(自)「しなぶ」の訛。

しな・ふ（ウシナ）（は、ひ、ふ、ふ、へ、へ）「嫋」(自、は四) しなやかに撓(リク)む。たわみまがる。

しな・ぶ（び、び、ぶ、ぶる、ぶれ、びよ）「萎」(自、は上二) ㊀草木など生氣盡きて、衰(ヤツ)へしぼむ。(萎微、萎靡)。㊁生氣衰へてしわ寄る。

┼**しな・ぶ**（べ、べ、ぶ、ぶる、ぶれ、べよ）「匿」(他、は下二) かくす。かくまふ。

しな・ぶれ「品觸」(名) 紛失品其他特種の事情ある品などを、世に觸(フ)れ示すを。

しな・はし（オシ）「爲直」(名) やりなほし。やりかへ。

しな・ほ・す（オス）（さ、し、す、す、せ、せ）「爲直」(他、さ四) 改めてやりなほす。やりかふ。やりなほす。(再做)。

┼**しな・む**（め、め、む、むる、むれ、めよ）「匿」(他、ま下二) しなぶ。

┼**しな・め・く**（か、き、く、く、け、け）「品」(自、か四) しなよく見ゆ。

シナ・もじ「支那文字」(名) 漢字。

しな・もの「品物」(名) ぶっぴん。しな。

しな・やか「嫋」(名) ㊀こはからざるを。ごつ〳〵せざるを。㊁細長くしてよく撓(リク)むを。㊂かど〳〵しからざるを。すがたひがよきを。

しな・ゆ（え、え、ゆ、ゆる、ゆれ、えよ）「嫋」(自、や下二) しなふ。

しな・よし「品好」(名) しなよきを。又、しなよきもの。

しな・よ・し（く、し、き、けれ）「品好」(形、二) ㊀うつりよし。配合好し。㊁容貌よし。見えよし。㊂ふるまひ好し、氣きゝたり。

しな・ら・ふ（は、ひ、ふ、ふ、へ、へ）「爲習」(他、は四) 事に熟練す。巧になす。

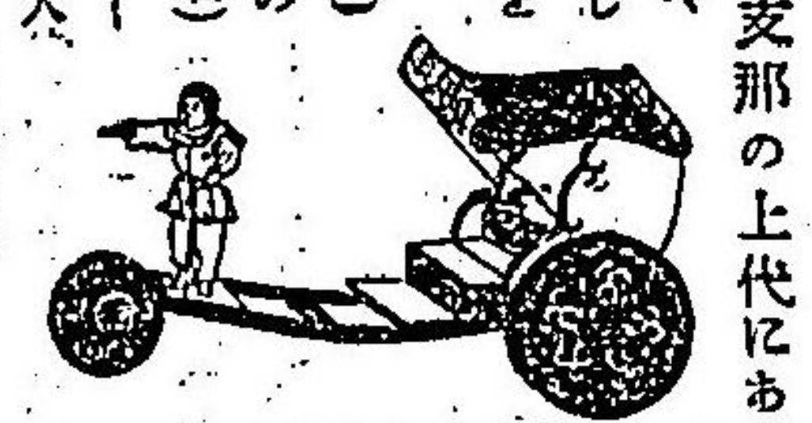
しな・る（れ、れ、る、るる、るれ、れよ）「爲慣」(自、ら下二) なれて巧になる。

〔**しなれる**「爲慣」(自)「しなる」の訛。

しな・わけ「品別」(名) 品の區別。

(**しなん**「指南」(名) ㊀指南車の略言。㊁指し示すを、敎へ示すを。㊂敎へ授くるを、敎へ導くを。

——**しや**「指南車」(名) ㊀支那の上代にありし一種の車、路の方向に迷はぬやう、車上に直立軸の周圍に回轉し得る木偶ありて、掌上に磁針を載(ノ)せ、車の回轉に關せず常に南を指す裝置のものといふ。㊁進み行くてびきとなる物事の稱。



[しなんしや(一)]

——**じよ**「指南所」(名) 指南をする所。をしふる所。

——**ばん**「指南番」(名) 昔時、大名などに事へて武藝の指南をなしゝ役名。

——**やく**「指南役」(名) 物事の指南をする役。

(**しなん**「四男」(名) ㊀四人の男子。㊁第四の男子。

(**じなん**「次男」(名) 次子。(次息)。

しに「死」(名) 死ぬるを。

しに・いき「死生」(名) 死ぬるといくると。死ぬるかいくるか。

しに・いし「死石」(名) 圍碁にて、打ちたるかひなき石又は敵にとられて尙は盤上にある石。

しに・い・る（ら、り、る、る、れ、れ）「死入」(自、ら四) 死ぬ。

しに・おく・る（れ、れ、る、るる、るれ、れよ）「死後」(自、ら下二) ㊀死ぬべき時に死なずして生存す。㊁他は死にて己のみ生き殘る。

しに・おくれ「死後」(名) しにおくるゝを。又、其人。

しに・がね「死金」(名) ㊀自分の死にたる時の用意に蓄(ハク)ふる金。㊁徒に貯蓄して利用せぬ金。㊂徒に使用して効驗なき金。

┼**しに・かばね**「死屍」(名) しかばね。

しに・かは・る（ワルカ）（ら、り、る、る、れ、れ）「死變」(自、ら四) 死にてすがたを變(カ)ふ。

┼**しに・かへ・る**（エルカ）（ら、り、る、る、れ、れ）「死返」(自、ら四) 死ぬる程に苦しむ、死ぬるばかり堪(タ)へかぬ。「しにかへりわらふ」。

しに・がほ（オガ）「死顏」(名) 死にたる顏色。死人の顏色。(死面)。

しに・がみ「死神」(名) 人をして死なんと思ふ念を起さしむる惡神、人を死に導くといふ神。

しに・ぎは（ワギ）「死際」(名) 死に臨む時。まつご。さいご。いまは。(臨終、終焉)。

┼**しに・す**（せ、し、す、する、すれ、せよ）「死」(自、さ變) 死ぬ。

しに・せ (名) ㊀先祖傳來の業を守りつぐを、㊁數代繼(ツ)ぎたる商業又は店。(老舖)。

しに・そこなひ（イナソコ）「死損」(名) しにそこなふを、又、其人。

しに・そこな・ふ（ウナソコ）（は、ひ、ふ、ふ、へ、へ）「死損」(自、は四) ㊀死なんとして死ぬるを得ず。㊁死ぬべき時に死ぬるを得ず。

しに・た・ゆ（え、え、ゆ、ゆる、ゆれ、えよ）「死絕」(自、や下二) 一家悉く死にて血統絕(タ)ゆ。

しに・のこり「死殘」(名) しにのこりたるを。又、其人。

しに・のこ・る（ら、り、る、る、れ、れ）「死殘」(自、ら四) 其もののみ死なずして存命す。

しに・はだ「死膚」(名) 死人のはだへ。┼——**だち**「死膚斷」(名) 上代、死人の膚をきりさきし罪。

しに・は・つ（て、て、つ、つる、つれ、てよ）「死果」(自、た下二) ㊀全く命をはる。㊁しにたゆ。

しに・びと「死人」(名) 死にたる人。しびと。

しに・み「死身」(名) ㊀殆ど死にたる氣になるを。㊁必死となるを。㊂死ぬべき身。

しに・みづ「死水」(名) 末期に口中に注(ソソ)ぐ水。末期の水。——**をとる** 末期の水を死者の口に入る、轉じて、死者の介抱をなすにいふ。

しに・め「死目」(名) しにぎは。まつご。

しに・もの・ぐるひ（イルグ）「死物狂」(名) 死身になり、力のあらん限りを盡くして奮鬪するを。

しに・やみ「死病」(名) 命の助からぬ病。

しに・よく「死慾」(名) 死に臨みて、猶慾深きを。

しに・わか・る（れ、れ、る、るる、るれ、れよ）「死別」(自、ら下二) 彼は死に此は生存して、此世の長き別離となる。(永訣)。

しに・わかれ「死別」(名) しにわかるゝを。

(**しにん**「死人」(名) 死にたる人。「—に口なし」。

(**じにん**「自認」(名) ㊀自分一己にて、其物事を是認するを。㊁自ら自分のものとみとむるを。

(**じにん**「自任」(名) ㊀自ら其物事を以て自分の任務となすを。㊁自ら自分の才能又は容貌などを然るべきものと思ひこむを。

(**じにん**「辭任」(名) 任務をことわるを。役をひくを。

┼**しぬ**「篠」(名) 【植】「しの」に同じ。

し・ぬ（な、に、ぬ、ぬる、ぬれ、ね）「死」(自、な變) ㊀息(イキ)絕(タ)えて命をはる。みまかる。㊁自ら自分の命を絕つ。㊂利用せず。効用あらず。㊃活動せず。生氣あらず。「筆が—」。㊄圍碁にて、石の圍まれて一目あるか又は更に一目もなくしてとらる。

し・ぬ・く（か、き、く、く、け、け）「爲拔」(他、か四) 爲し盡くす。十分に爲す。(爲貫)。

┼**しぬぐ**「凌」(他)「しのぐ」に同じ。

┼**しぬ・の・め**「篠目」(名) 篠の群(ム)れ生ひたる所。

——**の**「篠目」(枕)「忍ぶ」に冠らする詞。

┼**しぬび・ごと**「忍言」(名)「しのびごと」(一)に同じ。

┼**しぬ・ぶ**（ば、び、ぶ、ぶ、べ、べ）「忍」(他、は四)「しのぶ」に同じ。

┼**しね**「稻」(名)「いね」に同じ。「あら—」。

〔**しね・いど**「綛」(名) 布の端の織りあまりの絲。

〔**しね・しね** (名、副) ㊀「しなしな」に同じ。㊁嚙(カ)めば軟(ヤハ)かなれど、嚙み切れぬ如きさまにいふ詞。

(**しねん**「思念」(名) 心に持つを。おもふを。

(**じねん**「次年」(名) つぎのとし。

(**じねん**「自然」(名) ㊀おのづから斯くあるを。本來然るを。㊁人工を加へず天然のまゝなるを。——**こ**「自然粇」(名) 竹の果實。さゝみどり。——**じやう**（ヨウ）「自然生」(名) 【植】薯蕷科に屬する草、山野に自生す、莖は上昇し、單性花と網脈葉と三箇の翼を具したる頴とを有す、根及肉芽は食用に供せらる。(自然薯、山藥)。〔——**じよ** (名)「じねんじやう」の訛。——**せい**「自然生」(名) 自然に生出したるを。又、其もの。——**せき**「自然石」(名) 天然の儘にして、人工を加へざる石。——**に**「自然」(副) おのづから。天然に。——**ばえ**「自然生」(名) 草木などの種蒔(タネマキ)せざるに生ひ出づるを。又、其草木。

しの「篠」(名) ㊀【植】細くして數多生ずる竹の稱。即ち、やだけ・めだけの類これなり。㊁「しのぶえ」(篠笛)の略言。(笛)。——**いり**「篠入」(名) 芝居にて、鳴物に篠笛を加へ入るゝを。

(**しのうこうしやう**「士農工商」(名) 士と農と工と商と。轉じて、すべての階級の人民。

┼**しの・うつはもの**（ワモノ）「瓷器」(名) 土燒の陶器、やきもの。(瓦器)。

しのぎ「鎬」(名) 刀のむねに高く聳(ソビ)えたる筋。——**をけづる** はげしく斬りあふ。轉じて、はげしく爭ふ。

しのぎ[凌](名) しのぐと。「一時の—」。

しの・ぐ（がぎぐぐげげ）[凌](他、か四) ㊀經過す。すぐ。わたる。㊁超過す。こゆ。すぐ。「雲を—」。㊂さからひおかす。又、あなどりおかす。「風雨を—」。「上を—」。㊃たへ忍ぶ。さゝへ得。「飢を—」。

しの-ごて[篠籠手](名) 鎧を篠竹(シノダケ)を集めたる如くとぢてつくりたる籠手。

[しの-ごの[四五](副) 彼此と。ぐづぐづと。「—いはずに承知せい」。

しの-すがき[篠簀](名) 篠竹(シノダケ)をとぢてつくりたる簀子(スノコ)。

しの-すねあて[篠脛當](名) 鎧を篠竹(シノダケ)をあつめたるが如くとぢてつくりたる脛當。

しの-だけ[篠竹](名) [植]「しの」(一)に同じ。

†しの-ちやう（ヨウ）[使廳](名) 檢非違使の役所。

†しの-に(副) （「しぬに」の轉）。㊀なびきて。しをれて。「—吹きしく秋の夕風」。㊁繁く。「—降る」。

シノニム[Synonym](名) 語形異なりて意義の同一なる語、「さくら」と「あだなぐさ」との如し。

しのね[羊蹄菜](名) [植]「しぶくさ」に同じ。

しの-の-め[東雲](名) （篠目の轉）あけがた。あけぼの。曙天。（東白、凌晨）。——ぐさ[東雲草](名) [植]「あさがほ」の一名。

しの-の-め-の[篠目](枕) 「あく」に冠らする語。「—ほがらほがらと明け行けば」。

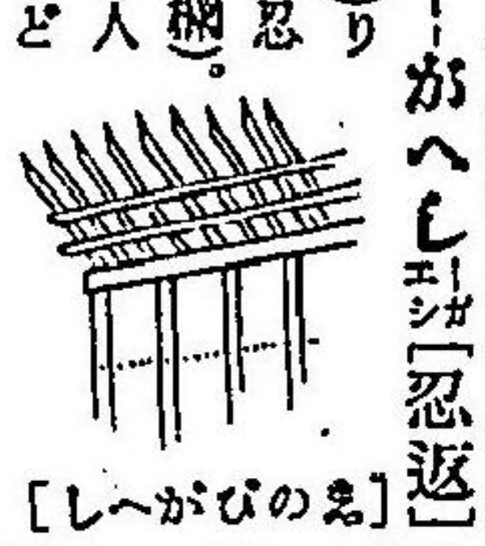
†しのの-を-ふぶき[篠吹雪](名) 草木をわけて強く吹くふゞき。「—寒き夜に」。

しの-はこ[清器](名) 便器。

しの-ば・し（しく しく しき しけれ）[忍](形、二) 忘れがたし。こひし。

しの-はら（ハラ）[篠原](名) 篠竹(シノダケ)の多く生えたる地。

しのび[忍](名) ㊀竊(ヒソ)かにすると。內證にすると。しのぶと。㊁身を隱して敵陣又は人家などに竊(ヒソ)かにいり込むといふ術。（忍術、遁形）。㊂「しのびありき」の略言。㊃「しのびのもの」の略言。——ありき[忍步](名) 人目を避(サ)けてかくれ行くと。——あるき[忍步](名) 前條に同じ。——い・る（らりるるれれ）[忍入](自、ら四) ㊀深くたへ忍ぶ。㊁竊(ヒソ)かにはひりこむ。——がへし（エシ）[忍返](名) 塀などの上に設くる尖(トガ)りたる竹又は釘などの柵、人の忍び入るを防ぐためのもの。（遮柵）。


［しのびがへし］

——ごと[忍言](名) ㊀人の死を悼(イタ)み、其平生の事どもを追懷して述(ノ)ぶる詞。（誄）。㊁ひそひそばなし。さゝめごと。（密語）。——ごと[忍事](名) 隱しごと。ないしよごと。（密事）。——ごま[忍駒](名) 三味線の駒に物をはさみ、音のあまりたゝぬやうにして彈(ヒ)くと。——ごゑ[忍聲](名) しのびね。——さんぢゆう[忍三重](名) 淨瑠璃の手の一、忍音に彈(ヒ)く三重。——づま[忍夫](名) かくしをとこ。みそかをとこ。——づま[忍妻](名) かくしをみな。かこひもの。——どころ[忍所](名) かくれひそむ場所。かくれが。——なき[忍泣](名) 聲を立てずに泣くと。人に知らせずに泣くと。——ね[忍音](名) ㊀ひそひそごゑ。こごゑ。㊁忍泣の聲。㊂四月頃の時鳥(ホトトギス)の初音。（忍聲）。——のもの[忍者](名) 敵陣又は人家などに忍び入りて、事情をさぐりなどするもの。間者。探偵。——のを[忍緒](名) （もと兜(カブト)の內に忍ばせ、髮に結び付けたるが故に此名あり）兜につけ頤(アゴ)にて結ぶ紐(ヒモ)。——び[忍火](名) ひそかにするきりび。——びと[忍人](名) ㊀かくしをとこ。又、かくしをんな。㊁しのびのもの。——まはり（ワリ）[忍廻](名) 竊(ヒソ)かに巡回して事情を視察すると。又、其人。——めつけ[忍目附](名) 竊(ヒソ)かに事情を巡察する見附。かくしめつけ。——もとゆひ（イ）[忍元結](名) 外部より見えぬやうに結ぶ元結。——やか[忍](名) しのびてなすさまにいふ語。

しのぶ[忍](名) [植]「しのぶぐさ」の略言。

しの・ぶ（ばびぶぶべべ）[忍](他、は四) ㊀慕ふ。したふ。おもふ(思)。㊁堪(タ)へこらふ。にんたいす。がまんす。（耐忍、耐堪）。㊂知られざるやうにす。くらます。のがる。「世を—かりの名」。

しの・ぶ（びびぶぶるぶれびよ）[忍](他、は上二) 前條に同じ。

しの・ぶ（ばびぶぶべべ）[忍](自、は四) ㊀かくる。ひそむ。㊁かくれてかよふ。ひそかに通ず。

しの・ぶ（びびぶぶるぶれびよ）[忍](自、は上二) 前條に同じ。

しの-ぶえ[篠笛](名) 細き竹の横笛、里神樂(サトカグラ)などに用ふるもの。

しのぶ-ぐさ[忍草](名) [植](い)羊齒類に屬する草、地下莖を有し、葉は檜(ヒノキ)に似て色青し、深山に自生す、觀賞用として栽培せらる。(ろ)「のきしのぶ」の略言。

しのぶ-ずり[忍摺](名) 忍草の莖と葉とを種々の色に合はせて、布に摺(ス)りつけたるもの、岩代國信夫郡の名產。しのぶもぢずり。

しのぶ-の-そで[忍袖](名) 堪(タ)へかねて淚にぬるゝ袖。

しのぶ-もぢずり[忍綟摺](名) 「しのぶずり」(忍摺)に同じ。

しのべ-だけ[長門竹](名) 「しのめだけ」に同じ。

しの-まき[篠卷](名) 綿を管にて捲(マ)きたるもの、これより絲を紡(ツム)ぎ取る。

しの-め[篠芽](名) ㊀晚く出て色皆く味苦(ニガ)きたけのこ。㊁[植] 一種の竹、節長くして葉細し。——だけ[篠芽竹](名) [植] 前條(二)に同じ。

しの-や[篠屋](名) 篠などを以て葺きたる小屋。

しば[柴](名) 山野に生ずる小さき雜木。ふし。そだ。

†しば[萊草](名) 荒地に生ずる雜草。しばくさ。

しば[芝](名) [植] 禾本科に屬する小さき草、地下莖を有し地上に蔓延す、葉はすゝきの嫩葉に似る、觀賞用として栽培せらる。（細草、結縷草）。

†しば[暫](名) 「しばし」の略言。「今—」。

†しば[屢](名、副) 「しばしば」の古言。「—たつ波」。「ちどり—鳴く」。——あめ[屢雨](名) むらさめ。

(しば[駟馬](名) 馬車を挽(ヒ)く四頭の馬、又、四頭の馬にて挽く馬車。「—を驅る」。

(しはい[紙牌](名) 紙のはりふだ。

(しはい[詩牌](名) ㊀歌骨牌の歌の如く漢詩をしるしたる骨牌。詩ガルタ。㊁詩會にて用ふる小さきふだ、數多くつくり、各個に一字づゝ漢字(多くは普通詩作に使用する字)をしるしたるもの、これを各人に配分し、其配分したるふだの字のみを使用して詩作せしむ。

(しはい[紙背](名) 文書などの背面。轉じて、記されてある文字以上の意義。「眼光—に徹る」。

(しはい[支配](名) ㊀部下を監督し事務を整理すると。すべをさむると。とりしまると。（管轄、統御）。㊁支配人の略言。——した[支配下](名) 其人の支配を受くると、又、其人の支配を受くるものども。部下。——にん[支配人](名) ㊀[法] 商業使用人の第一、會社又は商店等を支配するものにして、主人に代はりて其營業に關する一切の行爲をなし、番頭・手代等を選任又は解任する等の權限あるもの。㊁すべて本人の委任を受けて、其物事を支配するものゝ稱。

(しはい[兒輩](名) こどもだち

†しばいき[屢息](名) あへぐと。いきせくと。

(しはう（ホウ）[四方](名) ㊀東西南北。㊁諸國。海內。㊂ぐるり。めぐり。㊃かく。四角。

(しはう（ホウ）[恣放](名) きまゝ。ほしいまゝ。（肆放）。

(しはう（ホウ）[四寶](名) 筆と墨と紙と硯との稱。

(しはう（ホウ）[私報](名) ㊀ないないのしらせ。㊁一私人の報知。

(しばう（ボウ）[資望](名) 位地と名望と。くらゐとひやうばんと。

(しばう（ボウ）[四望](名) 四方をみまはすと。又、四方のながめ。

(しばう（ボウ）[死亡](名) 死にて此世に存せざると。死ぬると。

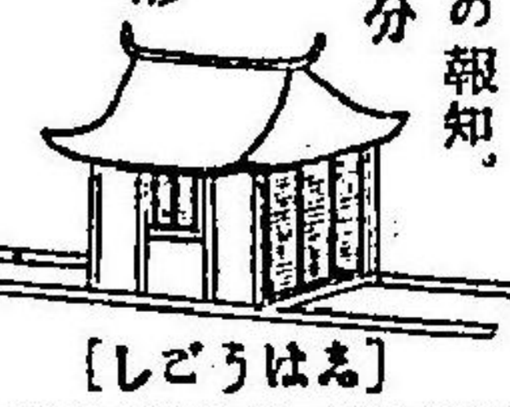
(しばう（ボウ）[脂肪](名) ㊀[化] 脂肪酸の「グリセロル、エステル」を主成分とし、其他の酸の「エステル」をも含み、且通常溫度に於て固體なるもの。あぶら。㊁皮膚及筋肉等にあぶらの沈着せる部分の稱。

(しばう（ボウ）[子房](名) [植] 雌蕊の花柱の下部膨れて球形をなすもの、熟すれば果實となる。

(しはう（ホウ）[時報](名) をりをりの報知。

(しばう（ボウ）[自暴](名) 自から自分の身を大切にせざると、自から自分の身を墮落の境におくと。

しはう-ごし（ホウ）[四方輿](名) 形は板輿(イタゴシ)に似て、四方の屋根先の反(ソ)り上がりたる輿。


［しはうごし］

(しばう-さん（ボウ）[脂肪酸](名) [化] $C_nH_{2n}O_2$の分子式を有する一類の酸、蟻酸・醋酸・酪酸等これに屬す。

(しばう-じき（ボウ）[自暴自棄](名) ふてゝされになると。やけになると。

(しばう-しつ（ボウ）[脂肪質](名) その成分が脂肪よりなれる物質。又、多量の脂肪を含有する性質。

(しばう-せん（ボウ）[脂肪腺](名) [生] 生物の體中にて、常に脂肪を分泌し、これによりて、毛に光澤を添へ皮膚を滑澤ならしむる腺。

(しばう-そう（ボウ）[脂肪層](名) [動] 或種の動物の眞皮の下にありて脂肪より成れる層、鯨の「しほひ」の如きこれなり。

(しばう-ち（ボウ）[芝打](名) ㊀しりがいの房(フサ)。㊁韉の稱。

(しはう-ちく（ホウ）[四方竹](名) [植] 一種の竹、幹の四角なるもの。

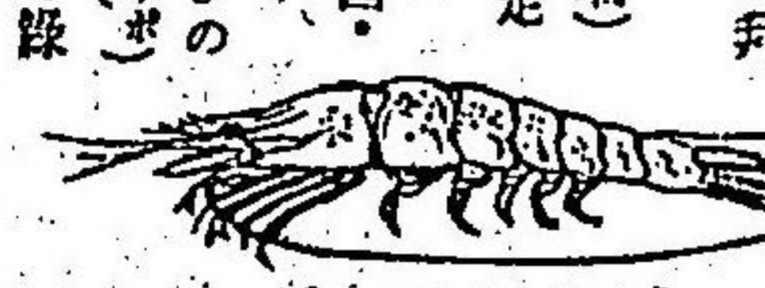
(しはう-ぬき（ホウ）[四方貫](名) 柱の一點より四方にさしたる貫。

(しはう-はい（ホウ）[四方拜](名) 三大節の一、一月一日に行はるゝ公事、主上には當日午前五時三十分（もとは寅の刻）御束帶を著せられ神嘉殿の前庭（もとは淸凉殿の東庭）に出御ありて、神宮を始め四方の神々をはるかに拜したまふ。

(しばう-ほけん（ボウ）[死亡保險](名) 保險者が被保險者の死亡に就きて特定の金額を支拂ふ保險。

しはう-ゐ（ホウ）[四方位](名) 東・西・南・北の稱。

しば-えび[芝蝦](名) [動](い)えびの一種、殼薄く軟(ヤハ)らかく處々に凹窪(クボ)ありて細毛生ず、體色は淡黃にして綠


［しばえび(い)］

色の微細なる斑點あり、體長四寸許に達す、雌殊に大なり、我國東海・南海及西海等に多く產す。㊁東京市芝浦に產する細小なる蝦の總稱。

しば-がき［柴垣］(名) ㊀柴にて編(ア)みたる垣。㊁明曆頃に行はれし卑俗なる俗謠。

しば-かり［柴刈］(名) 柴を刈(カ)ること。又、柴を刈る人。

しば-が・る（シワガル）（れ・れ・る・る・れ・れよ）［嗄］(自、ら下二) 聲やぶれかはる。しやがれる。

しは-ぎ（シワ）(名)［植］「あかめがしは」の一名。

(**しはく**［詩伯］(名) 詩界の大立物。

(**しはく**［詞伯］(名) 詩文界の大立物。

(**しはく**［自白］(名) ㊀自分のなしたる事實又は犯罪を自から白狀すること。㊁［法］刑事にては、刑事被告人が檢事の事實上の陳述を是認すること。民事にては、原告又は被告が相手方の事實上の陳述を自認すること。

しば-くさ［柴草］(名)「しば」に同じ。

しば-くさ［芝草］(名)［植］「しば」(芝)に同じ。

しば-ぐり［柴栗］(名)［植］栗の一種、果實の極めて小さきもの。

しば-ぐるま［柴車］(名) 柴をつかねて山より落すこと。

しば-ざかな［柴肴］(名) 種々取雜ぜたる肴。

しは-し（シワシ）（くしき・けれ）［吝］(形、二) やぶさかなり。ものゝ惜みなり。りんしよくなり。

しばし［暫］(名、副) 暫時。少しのま。ちよっとのま。

しば-しば［屢］(名、副) たびたび。あまたゝび。數度。(數)。

し-はす（シハス）［師走］(名) 陰曆、十二月の異稱。極月。—**ばうず**（ハウズ）［師走坊主］(名) おちぶれやつれてたよる所なき坊主。—**らうにん**（ラウニン）［師走浪人］(名) おちぶれてたよる所なき浪人。

卄**しばすり-ごろも**［柴摺衣］(名) 柴刈などに着て行く衣。

卄**しば-たた・く**（か・き・く・く・け・け）［屢叩］(自、か四) 瞼(マブタ)を屢々あけたてす。またたく。(瞬)。「目ばかり—」。

卄**しば-だ・つ**（た・ち・つ・つ・て・て）［屢立］(自、た四) しばしば立つ。「—波」。

し-はつ（て・て・つ・つる・つれ・てよ）［爲果］(他、た下二) なしをふ。なしはつ。なしをはる。

(**しはつ**［自發］(名) 他の刺戟を受けずして自ら發動すること。

しばつみ-ぐるま［柴積車］(名) しばを積みたるくるま。

しばつみ-ぶね［柴積船］(名) 柴を積みたる船。

卄**しば-どり**(名)［動］雉の古稱。

卄**しば-な・く**（か・き・く・く・け・け）［屢鳴］(自、か四) しばしば鳴く、しげく鳴く。(數鳴)。

し-はな・つ（た・ち・つ・つ・て・て）［爲放］(他、た四) しかけのまゝにてすておく。

卄**しは-に**［底土］(名) 地の下の深き底の土。

しば-の-いほ（イホ）［柴庵］(名) 柴葺(シバフキ)のいほり。轉じて、いぶせきいほり。

しば-の-いほり（イホリ）［柴庵］(名) 前條に同じ。

しば-の-と［柴門］(名) 柴にてつくりたる門。轉じて、いやしくいぶせき住家。

しば-の-とぼそ［柴扉］(名) 前條に同じ。

しば-はし［柴橋］(名) 雜木の板などを集めて作りたる橋、庭園の池などに架す。

しば-はら（ハラ）［芝原］(名)「しばふ」に同じ。

しば-はら（ハラ）［芝原］(名) しばふ。

しば-ひめ［芝姬］(名) 賣淫婦。

(**し-はふ**（ハフ）［仕法］(名) しかた。しやう。方法。

(**し-はふ**（ハフ）［四法］(名) 讀時の作法にて、起と承と轉と合とをいふ。

(**し-はふ**（ハフ）［死法］(名) 實際に利用のできぬ法。又、すたれて實施せられざる法。

(**し-はふ**（ハフ）［師法］(名) 人の師たるみち。

(**し-はふ**（ハフ）［諡法］(名) おくりなをつくるさだめ。

(**し-はふ**（ハフ）［私法］(名)［法］私人相互間の權利義務の關係を規定したる法律、民法・商法等の大部これに屬す。公法の對。

(**し-はふ**（ハフ）［子法］(名) 一國が他國の法律をうけつぎて制定したる法律の稱、母法の對。

(**し-はふ**（ハフ）［司法］(名) ㊀人民の曲直又は罪科を裁判すること。㊁［法］國家が既定の法律を特定の事實に適用して審判する行爲、即ち司法權の行動の汎稱、又、民事及刑事に關する審判の特稱。—**きやうけい**（キヤウ）［司法卿］(名) 明治十八年官制改革以前に於ける司法大臣の舊稱。—**ぎやうせい**（ギヤウ）［司法行政］(名)［法］訴訟手續以外の裁判所の事務及恩赦・復權等に關する政務、司法大臣これを統轄す。—**きよく**［司法局］(名) 海軍大臣の統轄の下に屬し、其意思を受けて海軍に關する司法事務をつかさどる海軍省の一局。—**くわん**［司法官］(名) 判事及檢事等の總稱。—**くわんしほ**［司法官試補］(名) 判事又は檢事に任ぜらるゝ準備として、規定の資格を有するもの若しくは規定の試驗に及第したるものが、裁判所に配置せられて事務の練習をなす地位。—**けいさつ**［司法警察］(名)［法］犯罪の搜査及犯人の逮捕等に關する警察。—**けいさつくわん**［司法警察官］(名) 司法警察の職務を行ふ權限ある官吏及公吏の稱、即ち地方長官・警視總監・警視・警務長・警部・憲兵等の稱。—**けん**［司法權］(名)［法］司法と稱する國家統治權の作用、天皇の名に於て法律に依り裁判所これを行ふ。

—**さいばん**［司法裁判］(名)［法］㊀刑事及民事に關する裁判。㊁司法裁判所の俗稱。—**さいばんくわん**［司法裁判官］(名) 司法裁判を行ふ職權ある裁判官。—**さいばんしよ**［司法裁判所］(名) 司法裁判を行ふ權限ある裁判所、これを分つて通常司法裁判所・特別司法裁判所の二とす、區裁判所・地方裁判所・控訴院・大審院等は前者に屬し、軍法會議等は後者に屬す。—**じむ**［司法事務］(名) 司法及司法行政に關する事務の總稱。—**しやう**（シヤウ）［司法省］(名) 司法大臣の統轄の下に屬し、其意思を受けて司法行政の事務を取扱ふ中央官廳。又、司法大臣が處理する事務の全體の稱。—**だいじん**［司法大臣］(名) 各省大臣の一にして司法行政の最高官府、裁判所及檢事局を監督し、檢察事務を指揮し、戶籍・監獄等に關する事項其他諸般の司法行政の事務を管理す。—**ぶ**［司法部］(名) 司法事務を取扱ふ部局。「鎭守府—」。

しば-ふ［芝生］(名) 芝の生えたる地、しばはら。

卄**しは-ぶか・ふ**（シハブカフ）（は・ひ・ふ・ふ・へ・へ）［咳］(自、は四)「しはぶく」に同じ。

しは-ぶき（シハ）［咳］(名) ㊀氣息のせくこと、せき。㊁せきばらひ。こわづくり。卄—**やみ**(名) 咳の病氣。(風邪)。

しば-ぶき［柴葺］(名) 屋根を柴にて葺(フ)くこと。又、其屋根。

卄**しは-ぶ・く**（シハ）（か・き・く・く・け・け）［咳］(自、か四)（息(シ)吹くの轉）しはぶきをす。

(**しはふ-ほうじん**（ハフ）［私法人］(名)［法］私權の主體たる法人、公法人の對。

卄**しは-ぶ・る**（シハ）（ら・り・る・る・れ・れ）［咳］(自、ら四) せきをなす。しはぶく。

卄**しはぶるひ-びと**（シハブルヒ）(名) しはぶる人。咳をする老人。

しば-み［柴見］(名) 忍びて敵狀を偵察するもの。「しのび。

〔**しは-むし**（シハ）［吝蟲］(名) りんしよくなる人をいやしめていふ語。

しば-や［柴屋］(名) ㊀柴葺(シバブキ)の家。㊁柴をつみおく小屋。

〔**しば-や**［芝居］(名)「しばゐ」の訛。

しば-やま［柴山］(名) 小さき雜木のある山。

しば-やま［芝山］(名) 芝を植ゑたる築山。

卄**しは-ゆばり**［淋病］(名) りんびやう。

〔**じ-ばら**［自腹］(名) ㊀自分のはら。㊁自分の財產。—**をきる** 自分の金にて支拂をなす。

〔**しばらく**［暫］(名) 顏見世狂言などに出づる荒ごとの發詞(ハセリ)。

しばらく［暫］(名、副) ㊀しばし。暫時。㊁久しく相會せざるさまにいふ語。㊂假に又はかりそめにものするさまにいふ語。

し-はらひ（ハライ）［仕拂］(名) 官府が金錢をはらひわたすこと。國庫又は金庫よりする金錢の支拂。—**せいきうしよ**［仕拂請求書］(名) ㊀官廳に對して、其官廳の購買せし物品の代價又は使用せし人夫の賃銀等の下渡を請求するために差出す書面。㊁仕拂の取扱を命ぜられたる仕拂命令官にあらざる官吏が、金庫に對して支拂を請求するために發する文書。—**めいれい**［仕拂命令］(名) 仕拂命令官が、國庫又は金庫に對して或ものに仕拂することを命令するために發する文書。—**めいれいくわん**［仕拂命令官］(名) 仕拂命令を發する權限を委任せられたる官吏。

し-はらひ（ハライ）［支拂］(名) ㊀代金をはらひわたすこと、金錢をはらひ出すこと。㊁金錢上の債務を履行すること。—**いうよ**［支拂猶豫］(名) ㊀支拂を延(ノ)ばすこと。㊁［法］商人が商業上の債務に就き、自己の過失にあらずして、已むを得ず支拂をなすこと能はざる場合に、債權者過半數以上の承諾を得たるときは、營業所所在地又は住所地の裁判所に申請して、一年を超えざる範圍內にて、支拂の延期を受くること。—**こばみしようしよ**［支拂拒證書］(名)［法］拒證書の條を見よ。—**たんたうしや**（タウ）［支拂擔當者］(名) ㊀他人の支拂を引受くるもの。㊁手形の支拂地が支拂人の住所地と異なるとき、其地に於て支拂人に代はりて手形面の金額の支拂をなす人。—**ち**［支拂地］(名) 支拂をなす場所とさだめたる土地。—**ていし**［支拂停止］(名) ㊀支拂をやむること。㊁［法］商人又は會社が、債務辨濟の餘裕なくして支拂を中止すること、これをなすときは、本人又は業務擔當者其他取締役・淸算人等より、五日以內に書面又は口述を以て、其營業所所在地又は住所地の裁判所にこれが屆出をなすべきものとす。—**にん**［支拂人］(名) 支拂をなす人。又、支拂の義務ある人。—**めいれい**［支拂命令］(名)［法］一定の金額の支拂其他代替物若しくは一定の有價證券の給付を目的とする場合に、債權者の督促手續による申請にもとづき、區裁判所が其債務者に對して發する命令、該債務者が此命令の送達より、一定の期間內(普通は十四日間、爲替より生ずる請求は二十四時間、其他は申立によりて三日まで短縮することを得)に、義務を履行するか又は區裁判所に異議の申立をなすにあらざれば、此命令によりて強制執行をなすことを得るもの。

し-ハラミツ［四波羅密］(名)［佛］常・樂・我・淨の稱。又、密教にて、東方に配する金剛波羅密と南方

に配する毀波羅密と西方に配する法波羅密と北方に配する羯磨波羅密との稱。

しばり[縛](名) しばること。「金—」、「三月—」。——**くび**[縛首](名) 肢體を縛りおきて首を斬ること。「—の刑」。——**つ・く**(けけくくるくれけよ)[縛付](他、か下二) しばりて離れぬやうにす。——**つけ**[縛付](名) しばりつくること。

しば・る(らりるるれれ)[縛](他、ら四) ㊀繩(ナハ)又は紐(ヒモ)などにてものを束ねてしめくゝる。㊁ものに堅く結び付けて離れぬやうにす。㊂肢體に繩又は紐などをかけて、自由に動けぬやうにす。㊃自由に行動をなし得ぬやうにとゞめおく。「金で體を—」。㊄期限を定めおきて延引することを許さず。

しば-ゐ[芝居](名) ㊀廿芝生に居ること。㊁(出雲の阿國が、京都四條河原にて、芝居して演じたりといふ故事に出づ)脚本中の人物に扮裝して脚本中の事を演ずること。かぶき。えんげき。㊂芝居を興行する建物。(劇場)。——**もの**[芝居者](名) ㊀劇場に勤めて諸事を行ふ人の總稱。㊁役者の特稱。

(**し-はん**[幟半](名) 鎧(ヨロヒ)の指物の小旗。

(**し-はん**[私版](名) 人民の出版。官版の對。

(**し-はん**[私犯](名) 【法】債權の原因となる不法行爲。

(**し-はん**[師範](名) ㊀學問又は技藝を授けなしふる人。㊁人のてほんとなる人。㊂のり。てはん。——**がくかう**(ガッコウ)[師範學校](名) 小學校敎員を養成する目的の學校。北海道及各府縣に一校以上ありて、地方官の管理に屬す。——**けういく**[師範教育](名) 中等教育及初等教育の敎員養成を目的とする敎育。——**だい**[師範代](名) 師範に代はりて門弟に敎授する人。

(**しはん-ぎん**[四半斤](名) 一斤の四半分。

〔**しはん-ばう**(シワンボウ)[吝嗇坊](名) 吝嗇なる人を罵(シ)りていふ語。けちんばう。しはむし。

(**しはん-ぶん**[四半分](名) 四分の一。よついち。

(**し-ひ**[私費](名) ㊀一私人の負擔支出する費用。官費の對。㊁「じひ」(自費)に同じ。

(**し-ひ**[市費](名) 市の負擔支出する費用。

しひ(シイ)[椎](名) 【植】殼斗科に屬する常綠木。葉は卵形にして尖(トガ)り、粗(アラ)き鋸齒ありて下面は灰白色なり。果實は長楕圓形にして尖り、毬狀の總苞に包被せらる。木材は諸種の用に供せられ、樹皮は染料とし果實は食用とすべし。

しび[鮪](名) 【動】まぐろの巨大なるもの、稱。「(鯛、芻瓜)。

(**し-び**[鴟尾](名) 宮殿の棟(ムネ)の飾、即ちむにがはら又はしやちはこの類。(鵄尾)。

(**じ-ひ**[自費](名) 自分の負擔支出する入費。自分の入用。

(**じ-ひ**[侍婢](名) そばづかへの女。こしもと。(侍「女」。

(**じ-ひ**[慈悲](名) ㊀【佛】衆生に樂を與へ其苦を拔くこと。柔和にして瞋恨を生ぜず萬物情に順にして饒益を與ふること。㊁なさけ。あはれみ。いつくしみ。——**がひ**(イガ)[慈悲買](名) 必要は無けれども、たゞ其ものを哀(アハ)む心より買ふこと。

じ-びき[字引](名) ㊀漢字を集めて、其音又は義等を說明したる書物。字書。㊁轉じて、辭書の稱。

(**し-び-くわ**[紫薇花](名) 【植】「さるすべり」の稱。

しひ-ごと(シイ)[誣言](名) しひてつくりていふことば。つくりごと。誣言。

廿**しひ-しば**(シイ)[椎柴](名) 椎の柴。椎の木の叢(ムラ)がり生ずる所。——**の-そで**[椎柴袖](名) 古昔、喪服に用ひしつるばみ染のころも。

廿**しひ-しば**(シイ)[椎柴](枕) 「葉がへ」に冠らする詞。

(**じひ-しん**[慈悲心](名) じひのこゝろ。なさけごころ。——**てう**(ヂヤウ)[慈悲心鳥](名) 【動】「ブッぽふソウ」(佛法僧)に同じ、其鳴聲の慈悲心といふが如く聞ゆるよりいふ。

(**し-び-せい**[紫微星](名) 支那の星學にていふ紫微宮にあたる星。天帝に配するものにして、傍(カタハラ)に三台星あり。

しひ-せま・る(シイ)(らりるるれれ)[強迫](自、ら四) むりにせまる。

しひ-たけ(シイ)[椎茸](名) 【植】菌類の一種。椎(シヒ)・櫧(カシ)・枹(コナラ)・櫟(クヌギ)等に生ず。生殖體は肉質強靭にして傘と柄とは明瞭なる區界を有す。胞芽即ち胞子は殆ど白色なり。香氣高く、食用菌類中著名なるものなり。——**たぼ**[椎茸髱](名) 古昔、御殿女中の髮の結方、髱(タボ)を張り出して、恰も椎茸の傘の如き狀にするもの。又、其髮に結(ユ)ひたる御殿女中の稱。

(**し-ひつ**[試筆](名) かきぞめ。

(**じ-ひつ**[自筆](名) 自身に書きたる筆蹟。

しひ-つ・く(シイ)(けけくくるくれけよ)[強付](他、か下二) 無理にすゝめつく。

しひ-て(シイ)[強](副) 無理に。むりやりに。おして。

廿**しひと**(シイ)[舅](名) 「しうと」に同じ。

し-びと[死人](名) 死にたる人。命絶(タ)えたる人。——**いろ**[死人色](名) あをざめて碊(ゴス)味ある色。——**ばな**[死人花](名) 【植】石蒜科に屬する草。多く山野又は墓場などに生ず、鱗形の莖を有す、花は紅色六瓣にして繖形に排列す、有毒植物なり。マンジュシャゲ。(石蒜)。

廿**しひと-め**(シイ)[姑](名) 「しうとめ」に同じ。

しひ-な(シイ)[粃](名) (「しひなせ」の略言) ㊀皮ばかりにして實のなき籾。實のらぬもみがら。㊁轉じて、豆などのよく實のらぬもの、稱。廿——**せ**[粃](名) 前條の古稱。

廿**しひ-ね**(シイ)[瘤](名) (强根の義)こぶ。

しひ-の-き[椎木](名) 【植】「しひ」(椎)に同じ。

しひ-の-み(シイ)[椎實](名) ㊀椎の果實。㊁「しひのみふで」の略言。——**だま**[椎實彈](名) 椎實の如く楕圓狀にして先端尖(トガ)りたる彈丸。——**ふで**[椎實筆](名) 手習に用ふる筆、穗の椎實に似たるより名づく。

しび-ぶし[鮪節](名) 鮪(シビ)を鰹節の如く製したるもの。

(**じ-ひやう**(ヒヨウ)[時評](名) 當時の批評又は評判。

(**しひやく-しびやう**(ヒヨウ)[四百四病](名) 古來病氣の總稱にいふ語。

廿**しびら**[褶](名) うはも。うはみ。(上裳)。

しびり[痺](名) 「しびれ」に同じ。

廿**しひ・る**(シイ)(れれるるれよ)(自、ら下二) 膨(フク)れたるもの縮(チヂ)みはそる。ちゞむ。

廿**しひ・る**(シイ)(ひひひるひろひれひよ)[强](他、は上一) 「しふ」に同じ。

しび・る(れれるるれよ)[痺](自、ら下二) 體肢の感覺を失ふ。(痿)。

しびれ[痺](名) しびるゝこと。痲痺。——**ぐすり**[痺藥](名) しびれを發せしむるために使用する藥劑。(痲藥)。——**を-きらす** 久しく坐して足などにしびれを生ず。轉じて、待ちわぶるにいふ。

〔**シービン**[尿瓶](名) 「シュビン」の略言。

(**じ-びん**[自鬢](名) 自ら自分の髮を結(ユ)ふこと。

(**し-ふ**[紙布](名) 一種の織物。天具帖(テングデフ)を細くよりて緯(ヨコ)とし、絹絲を經(タテ)として織りたるもの、多く夏帶に用ふ。岩城國白石の名產。

(**し-ふ**[詩賦](名) 詩と賦と、即ち、支那の韻文。

(**し-ふ**[師傅](名) かしづきまもりてをしへそだつる役又は人。もりやく。つきそひ。

(**し-ふ**[四府](名) 左近衛府・右近衛府・左兵衛府・右兵衛府の稱。

(**し-ふ**[私夫](名) かくしをとこ。まをとこ。

(**し-ふ**[師父](名) ししやうとちゝと。又、父として親む程の師。

(**しふ**(シウ)[集](名) 詩歌又は文章などをあつめたる書物。「歌—」。

(**しふ**(シウ)[執](名) しふねん。しふちやく。

し・ふ(ウシ)(ひひふふへへ)[强](他、は上二) ㊀おして行ふ。無理になす。おす。㊁屈(ク)めおさふ。たむ。㊂こじつく。附會す。

し・ふ(ウシ)(ひひふふへへ)[誣](他、は上二) なきことをありとし又あることをなしと構へいふ。つくりいふ。(罔)。

廿**し・ふ**(ウシ)(ひひふふへへ)[癈](自、は上二) 官能すたる。はたらきやむ。「耳—」。

しぶ[澁](名) ㊀澁き味。「柿の—」。㊁しみ出づる黑き液。㊂あか。さび。㊃「かきしぶ」の略言。(柿澁)。

(**し-ぶ**[四分](名) ㊀十分の四。㊁一分の十分の四。一寸の十分の四。一割の十分の四。㊂廿古昔、長官(カミ)・次官(スケ)・判官(ジヨウ)・主典(サクワン)の稱。

(**し-ぶ**[四部](名) 【佛】「ししゆう」(四衆)に同じ。

(**し-ぶ**[使部](名) 官名の小使。

(**し-ぶ**[支部](名) 本部に屬して、其所在方面の事務を扱ふ所。

(**じ-ふ**[慈父](名) いつくしみ深き父。又、父親。

(**じ-ふ**[自負](名) 自ら自分の才智又は地位等をたのみとしてゐること。自分を誇(ホコ)ること。(自慢)。

(**じふ**(ジウ)[十](名) 全數。全體。「—の一」。

(**じふ**(ジウ)[十](數) 五に五を加へたる數。とを。と。そ。「(拾、什)。

(**じふ-あく**(ジウ)[十惡](名) 【佛】殺生・偸盜・貪欲・愚痴・邪淫・妄語・綺語・惡口・兩舌・瞋恚の稱。

(**しふ-い**(シウ)[襲衣](名) かさねぎ。

(**じふ-いう**(ジウ)[十友](名) 名花十友に同じ。

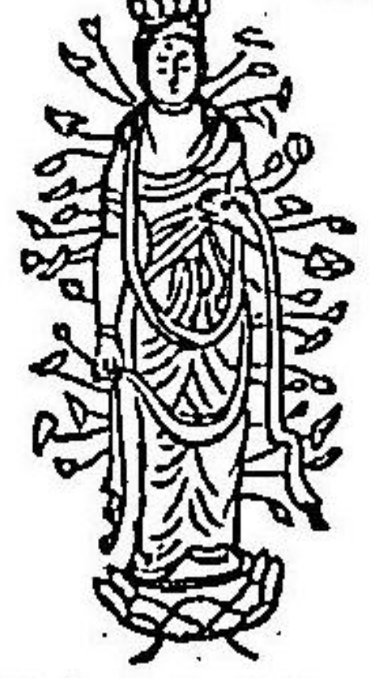
しぶ-いた[四分板](名) 厚さ四分許の板、家のはめなどにうつもの。

(**しぶ-いち**[四分一](名) ㊀一つのものを四つに割りたるもの、一つ。四分の一。㊁【化】銅に其重量の四分の一以下の銀を和したる合金。表面の酸化するときは美麗なる特殊の光澤を發す、我國古來裝飾用に供せらる。

(**じふいち-ぐわつ**(ジウ)[十一月](名) 年の第十一番目の月。しもつき。(仲冬)。

(**じふいち-じ**(ジウ)[十一時](名) 一時より數へて第十一番目に當たる時。

(**じふいちめん-くわんぜおん**(ジウ)[十一面觀世音](名) 【佛】頭上に小さき九つの面あり更に其頂に一體の觀音ありて、本體と併せて都合十一面ある觀世音、其各面は或は慈悲或は忿怒或は嘲笑等種々異なる相をなす。



[じふいちめんくわんぜおん]

(**し-ふう**[刺諷](名) ㊀ものにことよせて諷むること。㊁とほまはしにそしること。あてこすり。

(**し-ふう**[士風](名) 人士の風俗又は風紀。「—大いに興る」。

しぶ-うちは(チワ)[澁團扇](名) 表面に柿澁をひきたる團扇。

(**しふ-えい**(シウ)[集英](名) すぐれたるものをあつむること。人才をあつむること。又、あつまりたるすぐれたるもの又は人才。

(**しふ-えう**(シウヨウ)[熠燿](名) ひかること。かゞやくこと。

(**じふ-かい**(ジウ)[十戒](名) 「じつかい」に同じ。

(**じふ-かい**(ジウ)[十界](名) 「じつかい」に同じ。

しぶ-がき［澁柿］（名）㊀【植】澁（シブ）味を有する果實を結ぶ柿の總稱。㊁澁味多くして食するに堪（タ）へざる柿の果實。

⌒しふ-がく［習學］（名）まなび習（ナラ）ふこと。

しぶ-かは［澁皮］（名）㊀樹木又は果實のあまかは。㊁垢（アカ）じみたる皮膚。垢ぬけせざる顏色。「―がむける」。

しぶかは-りう［澁川流］（名）柔術の一派、澁川伴五郎を祖とす。

⌒しふ-がふ［習合］（名）哲學上又は宗教上、彼此の教理又は主義等を結合し若しくは折衷すること。――けう［習合教］（名）㊀種々の教理又は主義等を結合し若しくは折衷して一派を立てたる宗教。㊁神道の一派。

⌒しふ-がふ［集合］（名）㊀寄り合ふこと、あつまり合ふこと。つどふこと、㊁よせ合すること。あつめ合すること。よすること。㊂むれ。くみ。あつまり。――たい［集合體］（名）個々の集合によりて成り立ちたる一體。――ぶつ［集合物］（名）㊀個々のものあつまりて成り立ちたる一物。㊁數多の個物を一名稱の下に一括したるもの。――レンズ［集合―＝Converging lens］（名）【理】通過したる光線をして軸の方へ近寄らしむる「レンズ」、中央厚く周圍に至るに從ひて薄くなれるもの。

しぶ-かみ［澁紙］（名）紙をはり合はせて上に柿澁をひきたるもの、座敷の敷物とし又は荷物の包紙などゝす。

廿しふき［蕺］（名）【植】「どくだめ」の古稱。

⌒しふ-き［習氣］（名）ならはせ。くせ。

⌒しふ-ぎ［集議］（名）二人以上のものが集まりて評議すること。――ゐん［集議院］（名）明治の初年に設けられたる官廳、公議所の職務權限を繼續せしもの。

しぶき［重吹］（名）㊀しぶくこと。㊁しぶかれて飛び散る細かき水玉。――あめ［重吹雨］（名）しぶきになりて降る雨。（斜雨）。

⌒しふ-き［什器］（名）日常使用する家具。だうぐ。うつは。しふもつ。（什物）。

⌒しふ-ぎ［十義］（名）父は慈、子は孝、兄は良、弟は弟（よく兄に事ふること）、夫は義（たゞしきこと）、婦は聽（專斷せざること）、長は惠、幼は順（逆はぬこと）、君は仁、臣は忠なるべき十箇條の道。

⌒しふ-きよく［褶曲］（名）㊀しわよりてまがること。㊁【地】地層が地殼の收縮又は火山の噴出等によりて、波狀をなすこと。――こく［褶曲谷］（名）【地】地層の褶曲によりて成りたる谷。――さんがく［褶曲山岳］（名）【地】地層の褶曲によりて生じたる山嶽、地球上の山嶽は大部分これに屬す。

⌒しふ-きん［集金］（名）金をよせ集むること。又、よせあつめたる金。

⌒し-ふく［至福］（名）こよなきしあはせ。無上の幸福。

⌒し-ふく［紙幅］（名）紙のはゞ。

⌒し-ふく［雌伏］（名）下層の位地にかゞみてゐること、他のものに屈服してあること。

⌒しふ-く［澁苦］（名）㊀しぶくしてにがきこと。㊁滑かに通ぜざること。通ずるになやむこと。

しぶ・く［重吹］（自、か四）頻（シキ）りに強く吹く。

廿しぶ・く［澁］（自、か四）しぶりてすゝみえず。とゞこほる。「櫓に―おがの浦船」。

⌐しぶ・く（他、か四）伴ふ。

⌐しぶ・く（他、か四）行李などの外部を包（ツツ）み繩をかけてからむ。

⌒じ-ふく［時服］（名）其時候に相應する衣服。

⌒じ-ふく［字腹］（名）活字の字母を作る型（カタ）。

⌒じふ-ぐ［什具］（名）じふき。だうぐ。

しぶ-くさ［羊蹄菜］（名）【植】梧桐科に屬する草、水邊に生ず、葉は大形にして蕪（カブラ）に似る、花は三瓣黃色にして穗狀花序に排列す、藥用に供せらる。しのね。

⌐じふく-にち［十九日］（名）（天明頃までの隱語）ばかもの、異稱。

じふく-ぬの［十九布］（名）極めて細かく織りたる布。

⌐しぶく・る（自、ら四）腹を立つ。いかる。

⌒しふ-くわい［集會］（名）より合ひ集まること。よりあひ。あつまり。會合。

⌒しふ-くわい［集塊］（名）多くのものゝ集まりて一つと成りたるかたまり。――がん［集塊岩］（名）【地】火山灰と其他の大小の燒石と相あつまりて成りたる岩。

⌒じふ-ぐわつ［十月］（名）年の第十番目の月。かんなづき。こはる。（初冬、早冬）。

⌒しふ-くわん［習慣］（名）㊀社會の一部若しくは全部に於て、同一の場合に同一の行爲をなす在來の狀態、ならはし。しきたり。（風習）。㊁個人が常に同一の傾向を有する性情及行爲の狀態、くせ。ならひ。㊂すべてもの、常に同一なる傾向を有する狀態。――せい［習慣性］（名）【理】物體が外物の作用を受けざるときは、常に靜止するか若しくは一直線上に等速の運動をなすといふ性、即ち運動の第一律の性質の稱。――はふ［習慣法］（名）法律上効力を有する社會の習慣。不文法。

⌒しぶ-くわん［四分官］（名）四分㊂に同じ。

⌒しふ-ぐん［集群］（名）㊀むれあつまること。㊁むれ。あつまり。

⌒しふ-けい［襲繼］（名）うけつぐこと。又、よりしたがふこと。

⌒しふ-げき［襲擊］（名）不意に敵を攻擊すること。おそひうつこと。

⌒しふ-けん［集權］（名）㊀權力を一所にあつめよすること。㊁地方に於ける政治機關が、全く中央に於ける政治機關の意思を受けて政務を施行し、絕えて獨立の行動をなし得ざること。

⌒しふ-こ［集古］（名）古物をあつむること。

⌒しふ-ご［澁語］（名）どもることば。しぶることば。

⌒じふご-や［十五夜］（名）㊀陰曆十五日の夜。㊁專ら陰曆八月十五日の夜の稱、即ち、三五の夕。秋分に最も近き滿月の夜にして、古來觀月の好を備せり、此前後に於ては地平の黃道となす角度小なるを以て、每夜月の出づる時刻の變化最も少なし。（仲秋）。

しぶ-さ［澁］（名）しぶきこと。しぶき度合。

⌒しふ-ざう［四不像］（名）【動】鹿の族、滿洲の深山などに棲（ス）む、頭は駱駝又は鹿の如く、脚は牡牛の如く、尾は驢馬の如し。

⌒しふ-さん［集攢］（名）あつむること。又、あつまること。

⌒しふ-さん［集散］（名）あつまることとちらすこと。

⌒じふさん-ぎやう［十三經］（名）次條に同じ。

⌒じふさん-けい［十三經］（名）易經・書經・詩經・禮記・孝經・論語・孟子・周禮・左傳・公羊傳・穀梁傳・儀禮・爾雅の稱。

⌒じふさんだい-しふ［十三代集］（名）新勅撰集・續後撰集・續古今集・續拾遺集・新後撰集・玉葉集・續千載集・續後拾遺集・風雅集・新千載集・新拾遺集・新後拾遺集・新續古今集の稱。

⌒じふさん-ブツ［十三佛］（名）【佛】不動・釋迦・文殊・普賢・地藏・彌勒・藥師・觀音・勢至・彌陀・阿閦・大日・虛空藏の稱。

⌒じふさん-もんぜき［十三門跡］（名）輪王寺・妙法院・聖護院・照高院・靑蓮院・梶井宮・曼珠院・毘沙門堂・圓滿院（以上天台）・仁和寺・大覺寺・勸修寺（以上眞言宗）・知恩院（淨土宗）の稱。

⌒じふさん-もんぱ［十三門派］（名）【佛】天台・眞言・律・淨土・臨濟・曹洞・黃檗・眞・日蓮・融通念佛・時・法相・華嚴の稱。

⌒じふさん-や［十三夜］（名）㊀陰曆十三日の夜。㊁專ら陰曆九月十三日の夜の稱。延喜帝の時より十五夜に次ぎたる觀月の節と定められたり。

⌒しふ-じ［習字］（名）文字を書くことをならふこと。てならひ。

しぶ・し［澁］（形、二）㊀舌を刺戟して澁柿の實の如き味あり。「柿―」。㊁しぶりて圓滑ならず。なめらかならず。「器の壁―」。㊂はでやかならずして雅氣なり。

⌒じふ-じ［十時］（名）一時より十番目の時。

⌒じふ-じ［十字］（名）㊀十の字。又、十の字の形。㊁十文字。㊂四つ辻。――か［十字架］（名）㊀罪人を磔（ハリツケ）にする柱、罪人の手を左右に開きてくゝりつくるために、上部に橫木を添へて、其形十字形をなすが故に此の名あり。はりつけばしら。㊁「キリスト」敎徒（おもに舊敎に屬するもの）が敎祖耶穌基督が磔（ハリツケ）にせられたる紀念として尊敬するはりつけばしらの形をなすもの。――がい［十字街］（名）よつ、じ。つじ。――くわ［十字火］（名）左右兩側より發射する銃砲火が交叉するもの。――くわ［十字科］（名）【植】十字花冠と四強雄蕊とを有する草本若しくは小灌木の稱、葉は互生して托葉なく、果實は莢をなす、だいこん・あぶらな等これに屬す。――けい［十字形］（名）十の字の形。――せき［十字石］（名）【鑛】硝石の一種、硝子に似たる光を放つ、色多くは白し、吹管をもて燒けば硝子となる。

⌒じふし-じ［十四事］（名）武藝にて、射・騎・棒・刀・拔刀（ヰアヒ）・擊劍・薙刀・鎌・槍・鳥銃・石火箭（イシビヤ）・火箭（ヒヤ）・捕縛（トリテ）・拳（ヤハラ）の稱。

⌒じふしち-し［十七史］（名）支那の十七部の歷史、即ち史記・前漢書・後漢書・三國志・晉書・宋書・南齊書・梁書・陳書・後魏書・北齊書・周書・隋書・南史・北史・唐書・五代史の稱。

⌒じふしち-でん［十七殿］（名）古昔の禁中にありし十七個の御殿、即ち、紫宸殿・仁壽殿・承香殿・常寧殿・貞觀殿・春興殿・宜陽殿・綾綺殿・溫明殿・麗景殿・宣耀殿・安福殿・校書殿・淸涼殿・後涼殿・弘徽殿・登花殿の稱。

⌒じふしち-もじ［十七文字］（名）俳句の稱。

⌒しふじ-でふ［習字帖］（名）㊀習字の草紙。てならひざうし。㊁習字の手本。

⌒しふ-しふ［習習］（名、副）風のそよ〳〵吹くさまにいふ語。

⌒しふ-しふ［集輯］（名）よせあつむること。（蒐集）。

⌒しふ-しふ［拾集］（名）ひろひあつむること。

⌐しぶ-しぶ［澁澁］（名、副）いやながらなすさまにいふ語。

⌒じふ-しまい［十姉妹］（名）【植】薔薇の一種、もと外國より渡來せり。ボサツいばら。

⌒じふ-しまい［十姉妹］（名）【動】燕雀類中雀科に屬する鳥、形は四十雀（シジフカラ）に似て小形なり、鳴聲愛らし、多く飼養せらる。

(しふ-しゆ シウ [集聚](名) あつむること、又、あつまること。

(しふ-しゆ シウ [拾取](名) ひろひとること。

(しふ-じゆ シウ [襲受](名) あとをうけつぐこと。

(しぶ-しゆう [四部衆](名) 【佛】比丘・比丘尼・優婆夷・優婆塞の稱。

(しふ-じゆく シウ [習熟](名) ㊀なれて上手になること。㊁なれて左程に思はぬこと。

(しふ-じよう シウ [襲承](名) うけつぐこと。よりうくること。

(しふ-しよく シウ [襲職](名) 職務をうけつぐこと、後任となること。

(しふ-しん シウ [執心](名) 堅く心をこむること。あつく心をかくること。

(じふ-しん ジウ [十身](名) 【佛】菩薩が諸の衆生心を知り、其所樂に隨ひて權化すといふ十樣の身、即ち衆生身・國土身・業報身・聲聞身・緣覺身・菩薩身・如來身・智身・法身・虛空身の稱。

(しふ-せい シウ [集成](名) あつめて大成すること、あつめつくること。

(しふ-せい シウ [習性](名) ㊀習慣と性質と。㊁くせ。ならひ。

しぶ-せん [澁煎](名) 柿澁を入れてねりたる糊(リ)。

しぶ-せん [澁扇](名) 柿澁を表面に引きたる扇。

(じふ-ぜん ジウ [十全](名) ㊀完全なること。㊁安全なること。

(じふ-ぜん ジウ [十善](名) ㊀【佛】十惡を行はざること、十戒を保つこと。㊁前生に十善を行ひたる果報によりて受けたまふ義より、天子の御位にいふ語。「—帝位」。 **—かい** [十善戒](名) 「じつかい」(十戒)に同じ。 **—のきみ** [十善君](名) 天子を申し奉る語。 **—ばんじよう** [十善萬乘](名) 天子の御位。「—の大君」。

(しふ-ぞく シウ [習俗](名) ならはし。ならひ。(習慣)。

(しふ-たい シウ [澁滯](名) しぶりとゞこほること。すら〱通じ難きこと。はかどらずしてとゞまること。

(しふ-たい シウタイ [澁體](名) 文章などの字句通じ難きかきかた。

(じふ-だいでし ジウ [十大弟子](名) 【佛】釋迦の高弟十人の稱、即ち頭陀は摩訶迦葉(マカカエフ)・多聞は阿難陀(アナンダ)・智慧は舍利弗(シャリホツ)・神通は目犍連(モクケンレン)・天眼は阿那律(アナリツ)・解空は須菩提(スボダイ)・說法は富樓那(フルナ)・論義は迦旃延(カセンエン)・持戒は優婆離(ウパリ)・密行は羅睺羅(ラゴラ)をいふ。

(じふだい-しふ ジウダイシウ [十代集](名) 後撰集・拾遺集・後拾遺集・金葉集・詞花集・千載集・新古今集・新勅撰集・續後撰集・續古今集の十種の歌集の稱。

(しふ-だん シウ [集團](名) あつまり。むれ。 **—ていさつ** [集團偵察](名) 多人數が一團となりてなす偵察。

(しふち-かん シウ [集治監](名) もと徒刑・流刑及終身懲役の囚人を拘禁せし監獄、東京府・宮城縣・福島縣及北海道に置かれたり。

しぶ-ちや [澁茶](名) 味澁(シブ)き茶。下等なる茶。(苦茶)。

(しふ-ちやく シウ [執着](名) ㊀深く心を其物事にかけとゞむること。思ひこみて忘れ得ざること。㊁其物事に精神をそゝぐこと。必ず成さんと志すこと。 **—りよく** [執着力](名) 執着してこれを遂(ト)げんとする意思の力。

(しふ-ちゆう シウ [集注](名) 其物事にあつまりそゝぐこと。又、其物事にあつめそゝぐこと。(集中)。

(じふちゆう-はつく ジウ [十中八九](名、副) おほかた。おほよそ。

(し-ふつ [四勿](名) (論語に出づ)非禮視ること勿れ、非禮聽くこと勿れ、非禮言ふこと勿れ、非禮動くこと勿れといふ四つの戒の稱。

(し-ぶつ [死物](名) 生命なきもの。又、活動せぬもの。 **—きせい** [死物寄生](名) 【植】菌類が、植物の枯葉・腐木又は動物の死體及排泄物等に寄生し、それより營養をとりて生活すること。

(じ-ぶつ [事物](名) 無形と有形と。事と物と。もののごと。

(し-ブツく [四佛工](名) 古昔、有名なる四人の佛工、定朝(ヂヤウテウ)(後一條天皇の御宇の人)・運慶(後鳥羽天皇の御宇の人)・安阿陀佛(運慶の弟子)・湛慶(運慶の子)の稱。

しぶ-つら [澁面](名) ㊀不滿足なるさまの顏。やかましげなる顏。しぶめん。㊁色黑き顏。みにくきかほ。

(し-ぶと [死體](名) 「しびと」の訛。

(し-ふとう [四不鬪](名) 智者は、命と鬪(タタカ)はず法と鬪はず勢と鬪はず理と鬪はずといふこと。

(しふ-とく シウ [習得](名) ならひておぼゆること。ならひて會得すること。

(しふ-とく シウ [拾得](名) ひろひとること。ひろふこと。「—者」「—物」。

しぶと・し くしきけれ (形、二) ㊀こはし。おそろし。㊁強情なり。頑固なり。

(しふ-なん シウ [澁難](名) しぶりて通じがたきこと。

(じふに-いんえん ジウ [十二因緣](名) 【佛】過去の業は現在の苦を受け、現在の業は更に未來の苦を招き、衆生輪回の相をなす十二個條の因緣、即ち、无明・行・識・名色・六入・觸・受・愛・取・有・生・老死の稱。

(じふに-うん ジウ [十二運](名) 九星にて、人の運命をトするに配當する十二箇條、即ち長・沐・官・臨・帝・衰・病・死・墓・絕・胎・養の稱。

(じふに-かい ジウ [十二階](名) 推古天皇の御宇の位階、德・仁・禮・信・義・智に區別し、更に各階を大と小とに區別せり。

(じふに-かく ジウ [十二客](名) 名花十二客に同じ。

卄**じふに-きやく** ジウ [十二格](名) 神祇・中務・式部・治部・民部・兵部・刑部・大藏・宮內・彈正・京職及雜の稱。

(じふに-きゆう ジウ [十二宮](名) 【天】黃道の周圍に配分したる十二の星座、即ち白羊宮・金牛宮・雙女宮・巨蟹宮・獅子宮・室女宮・天秤宮・天蠍宮・人馬宮・磨羯宮・寶瓶宮・雙魚宮の稱。

(じふに-ぐわつ ジウ [十二月](名) 年の第十二番目の月。(極月、季冬、晚冬、臘月)。

(じふに-けい ジウ [十二經](名) 漢方にて、手足における十二の經脈の稱、おの〱內臟に關すといふ、手の太陰は肺・陽明は大腸・少陰は心・太陽は小腸・厥陰は心胞絡・少陽は三焦、足の太陽は膀胱・少陰は腎・少陽は膽・厥陰は肝・陽明は胃・太陰は脾なりとす。

(じふにげつ-けん ジウ [十二月建](名) 十二支を年の十二箇月に配當したる稱、正月は寅(トラ)、二月は卯(ウ)、三月は辰(タツ)、四月は巳(ミ)、五月は午(ウマ)、六月は未(ヒツジ)、七月は申(サル)、八月は酉(トリ)、九月は戌(イヌ)、十月は亥(ヰ)、十一月は子(ネ)、十二月は丑(ウシ)なり。

(じふに-けんれん ジウ [十二牽連](名) 【佛】十二因緣に同じ。

(じふに-し ジウ [十二支](名) 「えと」の條を見よ。

(じふに-じ ジウ [十二時](名) 第一時より第十二番目の時。

(じふに-しちやう ジウチヤウ [十二指腸](名) 【生】小腸の上部にして、胃の幽門より始まる、指十二本を竝べたるほどの長さあり、膽汁及膵液これに注入す。 **—ちゆう** [十二指腸蟲](名) 【動】回蟲類に屬する蠕形動物、人類の十二指腸に寄生し、貧血症を起す。

(じふに-てうし ジウテウシ [十二調子](名) 「じふにりつ」(十二律)に同じ。

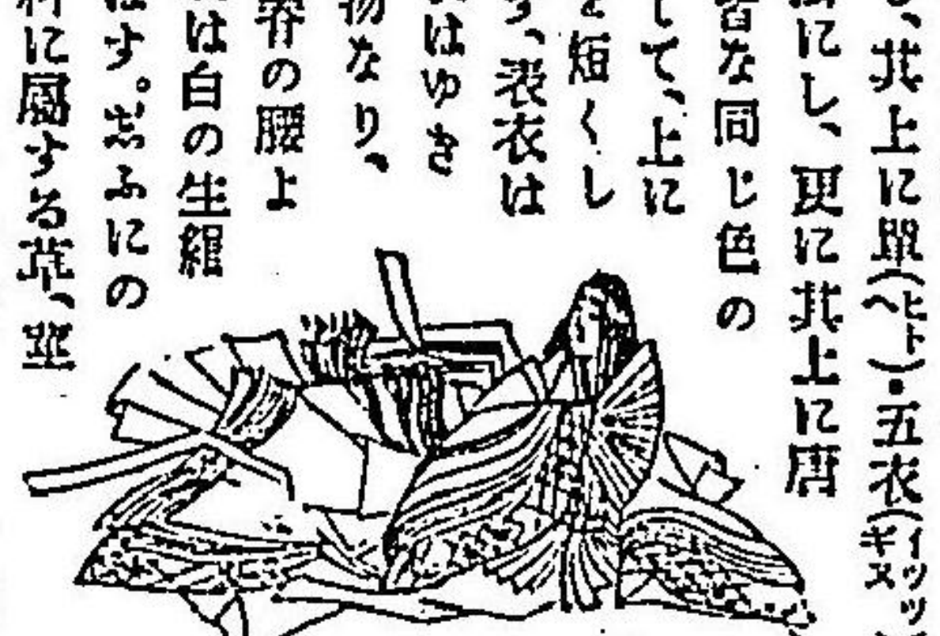
(じふに-てん ジウ [十二天](名) 【佛】八天に日天・月天・梵天・地天を加へての稱。

じふに-とき ジウ [十二時](名) 晝の卯(ウ)・辰(タツ)・巳(ミ)・午(ウマ)・未(ヒツジ)・申(サル)と夜の酉(トリ)・戌(イヌ)・亥(ヰ)・子(ネ)・丑(ウシ)・寅(トラ)との稱。

卄**じふに-の-れんぞ** ジウ [十二御衣](名) 「じふにひとへ(一)」の故稱。

じふに-はつく ジウ [十八九](副) おほかた。おほよそ。

じふに-ひとへ ジウヒトヘ [十二單](名) ㊀女官の裝束、白小袖を最も下に着し、其上に單(ヒトヘ)・五衣(イツツギヌ)及表衣(ウハギ)を重ねて打掛にし、更に其上に唐衣(カラギヌ)を着す、五衣は皆な同じ色の練貫(ネリヌキ)の袷(アハセ)にして、上になるほど次第にゆきを短くし袖(ソデ)の見ゆるやうにす、表衣は別に織物にして、唐衣はゆきを短くし腰までの織物なり、袴は緋の精好にして脊の腰より更に裳(モ)を付く、裳は白の生絹(スズシ)にて繪模樣を現はす。じふにのれんぞ。㊁【植】唇形科に屬する草、莖は方形なり、葉は細長く緣邊に鋸齒ありて對生す、莖葉共に白毛あり、花は小形五瓣にして莖頂に着し穗狀に排列す。(筋骨草)。



[じふにひとへ(一)]

(じふに-ぶん ジウ [十二分](名、副) 程度の普通を過ぐるさまにいふ語。「—に醉ふ」。

(じふに-もん ジウ [十二門](名) 古昔、禁中の十二の御門、即ち陽明門・待賢門・郁芳門(以上東面)・美福門・朱雀門・皇嘉門(以上南面)・談天門・藻壁門・殷富門(以上西面)・安嘉門・偉鑒門・達智門(以上北面)の稱。

(じふ-によぜ ジウ [十如是](名) 【佛】地獄界より佛界に至るまでひとしく具する所の法、即ち、相・性・體・力・作・因・緣・果・報・本末究竟等の稱。

(じふに-らう ジウラウ [十二郞](名) 猿樂を演ずるもの。

(じふに-りつ ジウ [十二律](名) 支那にて定めたる音樂上の十二樣の調子、一に十二調子ともいふ、自然の聲音を宮・商・角・徵・羽の五音に區別し、其高低によりて順序を立てたるもの、即ち、壹越(イチコツ)・斷金・平調(ヒヤウデウ)・勝絕・下無(シモム)・雙調・鳧鐘(フシヨウ)・黃鐘(ワウシキ)・鸞鏡(ランケイ)・盤渉(バンシキ)・神仙・上無(カミム)をいふ、これを十二ケ月及十二支に配當して黃鐘(ワウシヨウ)(十一月、子)・大呂(十二月、丑)・大簇(タイソウ)(正月、寅)・夾鐘(ケフシヨウ)(二月、卯)・姑洗(三月、辰)・仲呂(四月、巳)・蕤賓(スヰヒン)(五月、午)・林鐘(六月、未)・夷則(七月、申)・南呂(八月、酉)・無射(ブエキ)(九月、戌)・應鐘(十月、亥)といひ、即ち、子・寅・辰・午・申・戌に屬するものを六律とし、十一月・正月・三月・五月・七月・九月に屬するもの、即ち丑・卯・巳・未・酉・亥に屬するものを六呂とす、而して五音の中、宮と徵とを和合音とし、其相和を黃・黃平・平盤・盤下・下上・上鳧・鳧斷・斷鸞・鸞勝・勝神・神雙・雙壹といふ。

(じふに-れつこく ジウ [十二列國](名) 支那の春秋時代に於ける十二の強國、即ち魯・衞・晉・鄭・曹・蔡・燕・齊・陳・宋・楚・秦の稱。

じふにん-といろ [十人十色] 人の好む所又は思ふ所はそれ〲に異なりといふこと。

じふにん-なみ ジウ [十人並](名) 人の容色などの

尋常よりすぐれもせず又劣(オト)りもせざると。普通一般なると。

しぶ-ぬり [澁塗](名) 澁色に塗(ヌ)ると。又柿澁を塗ると。又、其塗りたる物。

しふねが・る [執念](自、ら四) 深く思ふ。

しふね・し [執念](形、二) 執念深し。

(しふ-ねん) [執念](名) 【佛】固(カタ)く思ひ込みて動かぬ一心。執着して離れぬ念力。 ——**ぶか・し** [執念深](形、二) おもひこみの度ふかし。執念はなはだし。

(じふ-ねん) [十念](名) 【佛】(い)十たび南無阿彌陀佛の六字の名號を念ずると。(ろ)淨土宗にて、南無阿彌陀佛の六字の名號を信者に授け、緣を佛に結ばすると。

(じふ-の) [十能](名) 「じふのう」の訛。

(じふ-のう) [十能](名) 炭火を運(ハコ)ぶ器、火を入るゝ所を金屬にて製し、柄をつけたるもの。むきかき。じふの。(火斗、火鏟)。

じふ-はっく [十八九](名、副) 十中八九に同じ。

(じふ-は) [十派](名) 【佛】(い)臨濟宗にて、相國寺派・建仁寺派・南禪寺派・天龍寺派・建長寺派・東福寺派・大德寺派・圓覺寺派・永源寺派・妙心寺派の稱。(ろ)眞宗にて、本願寺派(西)・大谷派(東)・高田派・佛光寺派・興正寺派・專照寺派・證誠寺派・誠照寺派・毫攝寺派・錦織派の稱。

(しふ-はい) [集配](名) ㊀あつむるとくばると。㊁「しふはいにん」の略言。 ——**にん** [集配人](名) 「いうびんしふはいにん」(郵便集配人)に同じ。

(じふ-はう) [什寶](名) 家に藏する寶物。たからもの。

(しふはう-しや) [襲芳舍](名) 古昔、禁中の凝華舍の後にありし御殿の名。かみなりのつぼ。

(じふはち-きやうがい) [十八境界](名) 【佛】六根と六識と六塵とによりて現出する境界。

じふはち-ささげ [十八大角豆](名) 【植】さゝげの一種、莢(サヤ)長し。じふろくさゝげ。

(じふはち-だいし) [十八大師](名) 古來、大師號を勅謚せられたる十八人の高僧、即ち天台の傳教(最澄)・慈覺(圓仁)・智證(圓珍)・慈惠(良源)・慈攝(眞盛)・慈眼(天海)と、眞言の弘法(空海)・道興(實慧)・法光(眞雅)・本覺(益信)・理源(聖寶)・興教(覺鑁)・月輪(俊芿)と、眞宗の見眞(親鸞)・慧燈(蓮如)と禪宗の承陽(道元)と淨土の圓光(源空)と融通念佛の聖應(良忍)との稱。

(じふはち-だんりん) [十八談林](名) 淨土宗の主なる十八の寺院、各分掌して全國の淨土宗の寺院を統轄す、即ち武藏國の傳通院・增上寺・幡隨院・靈巖寺・靈山寺(以上東京)・淨國寺(岩槻)・大善寺(瀧山)・勝願寺(鴻巣)・蓮馨寺(川越)、相模國の光明寺(鎌倉)、常陸國の常福寺(瓜連)・大念寺(江戸崎)、下總國の弘經寺(飯沼)・弘經寺(結城)・東漸寺(小金)、上總國の大巖寺(生實)、上野國の大光寺(新田)・善導寺(館林)の稱。(十八檀林)。

(じふはち-ばん) [十八番](名) ㊀俳優市川團十郎の家に傳來せる十八種の得意の狂言、不破・鳴神・不動・助六・暫・外郎賣・矢の根五郎・景淸・關羽・七つ面・解脫・象引・鑷・押戾・鎌髭・蛇柳・嫐・勸進帳をいふ、近來これ等を舊と稱し、更に、琴吹物語・蓮生物語・蒲生問答・桃山物語・支那物語・眞田の張拔筒・鉢の木・琵琶法師・陣太鼓・直盛諫言・釣狐等の狂言を新と稱す。㊁得意の物事。おはこ。

(じふはっ-こう) [十八公](名) (松の字の一體なる「枀」を別けていふ語)松の異稱。

(じふはっ-しゆう) [十八宗](名) 【佛】我國に於ける佛敎の十八派、即ち三論・法相・華嚴・律・倶舍・成實・天台・眞言・融通念佛・修驗・淨土・臨濟・曹洞・眞・日蓮・時・普化・黃檗の稱。

(じふはっ-てん) [十八天](名) 【佛】三十三天の中にて、色界にありといふ十八天の稱。三十三天の條を見よ。

(じふはっ-ぱん) [十八般](名) 支那にて、十八種の武藝、即ち、矛・鎚・弓・弩・銃・鞭・簡・劍・鏈・杈・斧・鉞・戈・戟・牌・棒・鎗・欛をいひ、又、弓・弩・鎗・刀・劍・矛・盾・斧・鉞・戟・鞭・簡・撾・殳・把頭・叉・綿繩・白打をもいふ。

(じふ-ばん) [十番](名) 「じふばんしたて」の略言。 ——**したて** [十番仕立](名) (江戸麻布十番に住みし馬乘某が、用ひ始めし故に此名ありといふ)まち甚だ高くして裾(スソ)の潤(ヒロ)き馬乘袴。

(しふ-ふく) [慴伏](名) おそれちゞみてひれふすと。又、おそれてしたがふと。(慴服)。

(じふ-ぶん) [十分](名、副) 物事の不足又は缺陷なきさまにいふ語。(充分)。

(じふ-ぼ) [十母](名) ㊀實母・出母(父の離別したる實母)・嫁母(父沒して他に嫁したる實母)・庶母(父の側室にして我を生みたるもの)・嫡母・繼母・慈母(父の側室にして命ぜられて母となりたるもの)・養母・乳母・諸母の稱。㊁「じっかん」(十干)に同じ。

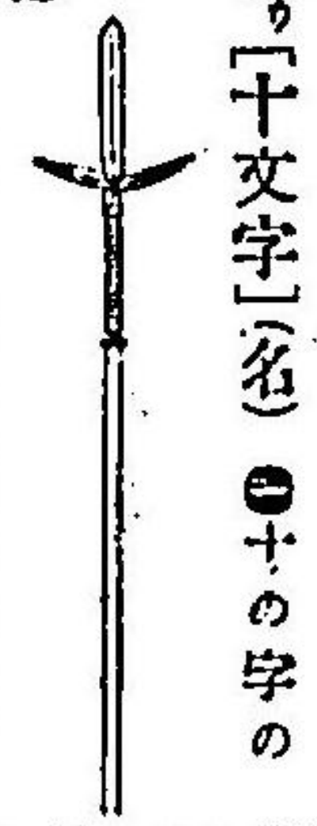
(じふまん-おくど) [十萬億土](名) 【佛】極樂淨土の異稱。

しぶ-み [澁味](名) ㊀しぶき味。㊁くすみたる趣。

(じふ-めん) [澁面](名) にが〳〵しきかほ。しぶつら。

(じふ-もつ) [什物](名) ㊀だうぐ。うつは。㊁寶物。

(じふもん-じ) [十文字](名) ㊀十の字の形。㊁縱橫に交叉したる形。㊂「じふもんじやり」の略言。 ——**やり** [十文字鎗](名) はさき枝ありて十字形をなす鎗。



[じふもんじやり]

(じふもん-せん) [十文錢](名) ㊀寶永四年に鑄造したる錢の稱、面に寶永通寶、背の緣に永世久用の四字ありて、一枚は小錢十枚に當たれり。㊁明治以後、寶永通寶の一文錢の稱。

(じふ-や) [十夜](名) 【佛】「じふやねんブツ」の略言。 ——**ねんブツ** [十夜念佛](名) 【佛】淨土宗の佛事、陰曆十月六日より同十五日まで、十夜の間別時念佛すると。

(しふ-やく) [集約](名) あつめつゞむると。よせてしげくすると。 ——**のうげふ** [集約農業](名) 狹き土地に、多くの資本と勞力とを加へ、丁寧に耕作する農業。

廿**じふ-やく** [蕺藥](名) 【植】「どくだめ」の一名、(十藥)。

(しふ-らい) [習禮](名) 禮儀作法をならふと。

(しぶ-りつ) [四部律](名) 【佛】(い)律を四分したる十誦律・四分律・僧祇律・五分律の稱。(ろ)比丘法・比丘尼法・受戒法・滅諍法の稱。

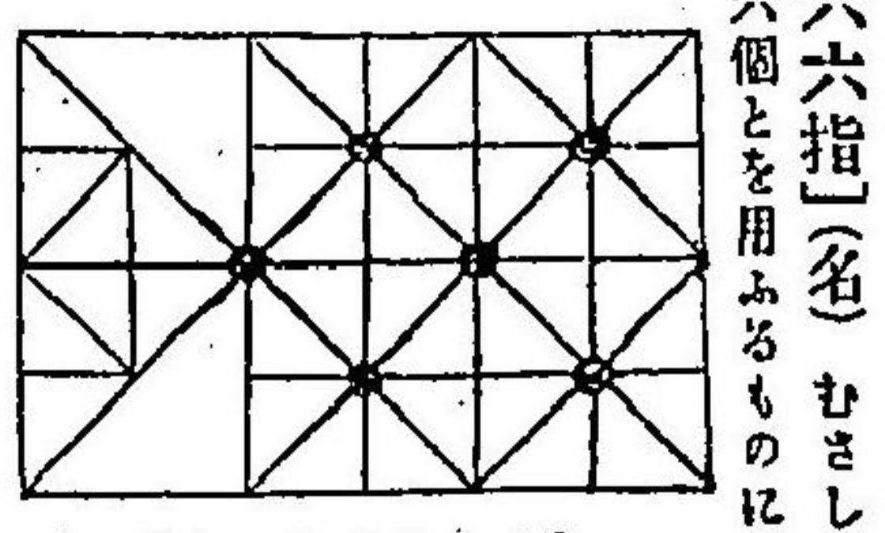
しぶり-はら [澁腹](名) 下痢の一種、大便の度はげしけれど、澁りて容く通ぜざるもの。(痢病、結痢)。

しぶ・る [澁](自、ら四) ㊀圓滑に通ぜず。なめらかならず。きしむ。㊁流暢ならず。すら〳〵とせず。「筆━」。㊂とゞこほる。とゞまる。㊃心進まず。「━氣色ながらもてかへりけり」。

(しふ-れん) [習練](名) ならふと。なるゝと。

じふろく-ささげ [十六大角豆](名) 【植】「じふはちさゝげ」の一名。

じふろく-むさし [十六六指](名) むさしの一種、親石一個と子石十六個とを用ふるものにして、盤上に下圖の如き線を劃し、親石子石共に線に從ひて一路づゝ進む定めなり、先づ十六個の子石を外郭の交叉點に配置し、親石を中央に置く、親石は子石二個相對する間に入れば之を取る、斯くして子石が親石を圍むと能はざる迄に取り去らるれば親石の勝なれど、子石に圍まれて進退するとを得ざれば親石の負とす。



[じふろくむさし]

(じふろく-や) [十六夜](名) 陰曆十六日の夜。いざよひ。

(じふろく-ラカン) [十六羅漢](名) 【佛】佛の命を承け、今なほ入滅せずして正法を護り、世間若し大施無遮會を設くるときは、他の諸眷屬と同じく、聖儀を蔽(オホ)ひて凡俗に隱れ、密(ヒソ)かに供養を受けて施者に勝果報を得しめ有情を饒益すといふ十六の尊者、即ち、賓度羅跋囉惰闍・迦諾迦伐蹉・迦諾迦跋釐惰闍・蘇頻陀・諾矩羅・跋陀羅・迦理迦・伐闍羅弗多羅・戍博迦・半託迦・羅怙羅・那伽犀那・因掲陀・伐那婆斯・阿氏多・注荼半託迦の稱。

(じふ-わう) [十王](名) 【佛】(い)十三佛の中より阿閦佛・大日如來・虚空藏菩薩の三佛を去りたるもの。(ろ)冥府(ヨミヂ)にありといふ秦廣王・初江王・宋帝王・伍官王・閻羅王・變成王・泰山府君・平等王・都市王・轉輪王の稱。 ——**のちやう** [十王廳](名) よみぢ。めいど。

(しふ-ゐ) [拾遺](名) 漏(モ)れおちたるを拾(ヒロ)ひ補(オギナ)ふと。

(し-ふん) [脂粉](名) ㊀べにおしろい。㊁けしやう。

(し-ふん) [私憤](名) 私事のいきどほり。又、わたくしのうらみ。「━を洩らす」。(私怨、私忿)。

(し-ぶん) [詩文](名) 詩と文と。又、修辭的製作物の總稱。

(し-ぶん) [士分](名) さむらひたる身分。

(し-ぶん) [死文](名) いたづらに條文のみありて、實際に活用せられぬもの。

(し-ぶん) [斯文](名) この學問。又、この道義。

(じ-ぶん) [自刎](名) 自ら首を刎(ハ)ぬると。

(じ-ぶん) [時分](名) ころほひ。ころあひ。をり。とき。

(じ-ぶん) [時文](名) 其時代の一般に用ひらるゝ文體の文。 ——**たい** [時文體](名) 時文の體裁。

(じ-ぶん) [自分](名) おのれ。われ。自身。 ——**がって** [自分勝手](名) 他人の都合如何に關係なく、たゞおのれ一己のためのみを計ると。てまへがって。 ——**めんきよ** [自分免許](名) 他人はしかゆるさゞるに、おのれ一己にて自分はすぐれてありと思ふと。 ——**もち** [自分持](名) 自分の負擔。

(じ-ぶん) [自分](代) おのれ。われ。わたくし。

(しぶん-ぎ) [四分儀](名) 【天】九十度の分度器に、指針の裝置あるもの、天體の高度を測るに用ふ。

(しぶん-ごれつ) [四分五裂](名) ちり〴〵にさけわかるゝと。秩序なくさけわかるゝと。

しふん-のき [脂粉氣](名) 婦人らしき氣風。柔

明なる氣風。

(しぶん-ゑん「四分圓」(名)【數】互に垂直なる二つの直徑にて分たれたる圓の一部分。

しべ「蘂」(名)【植】花の生殖の機關、卽ち雄蕊又は雌蕊の稱。

しべ「稭」(名)「わらしべ」の略言。

(しーへい「紙幣」(名) 法律の強制により、一般に通貨の代用をなし交易の媒介物として通用せらるゝ一種の信用證券、法律が其通用を強制する限りには、何人といへどもこれが領收を拒むと能はず、且又これに利子を附することなきを、普通の信用證券と異なる點とす、兌換紙幣と不換紙幣との二種あり、紙を以て製するが故に此名あり、さつ。――れう（ヨーリ ヨウ）「紙幣寮」(名) 明治の初年、紙幣製造に關する事を掌りし所。

(しーへい「時弊」(名) 時代の惡しき風習。時事の惡しき箇所。

(しーへい「辭柄」(名) ものいひのたね。いふべきたね、いひぐさ。

(しーへう（ヨーヒ ヨウ）「師表」(名) 人のてほんとなるべきもの。

(しーへう（ヨーヒ ヨウ）「指標」(名)【數】對數の整數の部分の稱、例へば log4000＝3.6020 に於ける 3 の如きこれなり。

(しーへう（ヨーヒ ヨウ）「四表」(名) 四方。又、天下。

(しーへう（ローヒ ロウ）「辭表」(名) 官職を辭するにつき、其旨を認めて差出す文書。いとまをとるふみ。

(しーへき「四壁」(名) となり。きんじよ。

しへた-ぐ（シヘ タグ）（げ げ ぐ ぐる ぐれ げよ）「虐」(他、か下二) ㊀殘酷なる取扱をなす。非道なる待遇をなす。㊁暴威を振ひて苦めなやます。㊂道理を曲げて罪におとす。

(しへ-たげる(他) 前條の訛。

(しーべつ「死別」(名) しにわかれ。――り「死別離」(名) 前條に同じ。

(しーべつ「辭別」(名) いとまごひ。わかれ。

(しーへん「詩篇」(名) 詩を集めたる書物。又、詩を記したる文書。

(しーへん「四邊」(名) ㊀あたり。きんじよ。㊁四方の境。㊂四つの邊を以て界せられたると。――けい「四邊形」(名)【數】四邊の直線形。

(しーべん「支辨」(名) ㊀さばき。とりはからひ。㊁金錢の支出。しはらひ。

(しーべん「四辯」(名)【佛】佛陀の法と義と詞と樂說との辯の無礙なると。

(しーべん「思辨」(名) かんがへわきまふると。おもひわくると。

(しーへん「事變」(名) 常ならぬ出來事。さうどう。へんらん。

(しーべん「自辨」(名) 自ら費用を負擔すると。

しほ「試補」(名) みならひ。「交際官―」。

しほ（オシ）「潮」(名) ㊀「うしほ」に同じ。㊁とき。をり。ころあひ。時機、機會。(潮)。

しほ（オシ）「鹽」(名) ㊀「しよくゑん」(食鹽)に同じ。㊁しほけ。しほあんばい。「―があまい」。

―しほ（オシ）「入」(接尾) 浸(ヒタ)して染むる度數を數ふる語。「二―」。

しほ「皺」(名) 革又は織物などにある皺。しわ。

(しーぼ「思慕」(名) おもひしたふと。

(しーぼ「字母」(名) ㊀音を綴(ツヅ)りなすもとゝなるべき字、㊁活字のもとゝなる模型の文字。(字型)。

(しーぼ「慈母」(名) ㊀いつくしみ深き母。又、單に母の稱。㊁生母死にてのち父より命じて母となしたる婦人。

しほ-あひ（シオ アイ）「汐合」(名) ㊀しほどき。㊁うしほの湍つる所。㊂物事のよき程あひ。

しほ-あんばい（シオ）「鹽按排」(名) 食物を調理したる鹽の量又は味。

しほ-いり（シオ）「潮入」(名) 池などに、海水の通ふと。――いけ「潮入池」(名) 海魚などをかふために、海水の通ふやうつくりたる池。

しほいり-ぜめ（シオ）「鹽炒責」(名) 昔時の拷問(ガウモン)の一、炒(イ)りたる鹽を罪人の體にあてしと。

しほ-いわし（シオ）「鹽鰯」(名) 鹽漬にしたる鰯。

しほ-うみ（シオ）「潮海」(名) 鹽水のたゝへたる海。みづうみの對。

しほ-おし（シオ）「鹽壓」(名) 野菜又は肉などを鹽に漬(ツ)け、上より石などをもて壓(オ)さへおくと。又、其漬物。「―の若菜」。

しほ-かげん（シオ）「鹽加減」(名) しほあんばい。

しほ-かぜ（シオ）「潮風」(名) 海の風。

しほ-がひ（シオ ガイ）「鹽貝」(名) 鹽漬にしたる貝肉。

艹しほ-がひ（シオ ガイ）「潮間」(名) しほのひきたる間。

しほ-がま（シオ）「鹽竈」(名) ㊀海水を煮(ニ)て食鹽をつくる竈。㊁一種の菓子、みぢんこに砂糖を和し、これを固(カタ)めて方形に切りたるもの。

しほ-から（シオ）「鹽辛」(名) 魚貝の肉又は子若しくは腸などにてつくりたるひしほ。(魚醬)。――ごゑ「鹽辛聲」(名) しやがれごゑ。――とんぼ「鹽辛蜻蛉」(名)【動】蜻蛉の一種、背白色にして帶黑色の斑點あるもの。

しほ-から-し（シオ）（く し き けれ）「鹽辛」(形、二) 鹽氣強くして辛(カラ)し。しほはゆし。

艹しほ-がれ（シオ）「汐涸」(名) しほひ。

しほ-き（シオ）「鹽木」(名) 鹽竈にたく薪。

(しーぼく「司牧」(名) 地方長官の稱。

しほ-くみ（シオ）「潮汲」(名) ㊀食鹽に製すべき海水を汲むと。又、其人。㊁花を吸ひて飛びめぐる蝶などの類。㊂小唄の名、しほくむ人の姿をなして踊(ヲド)

るもの。

しほ-ぐもり（シオ）「潮曇」(名) 海上の水氣によりて空の曇(モク)りて見ゆると。

しほ-け（シオ）「潮氣」(名) 海水の氣。「―が掛かる」。

しほ-け（シオ）「鹽氣」(名) 食鹽の味又は量の程。鹽分。「―が淡い」。(鹹氣)。

しほ-けぶり（シオ）「鹽煙」(名) 鹽竈にて海水を煮(ニ)るときに立ちのぼる煙。

しほ-けぶり（シオ）「潮煙」(名) 碎(クダ)けて飛び散る海水のしぶき。

しほ-けむり（シオ）「潮煙」(名)「しほけぶり」に同じ。

しほさい-ふぐ（シオサイ）(名)【動】固顎類中ふぐ科に屬する魚、體は長くして皮膚は平滑なり、背部は蒼淡色にして濃黑色の斑紋あり、體長二尺許に達す、我國西北海及內海等に多く產す。

しほ-ざかな（シオ）「鹽肴」(名) 鹽漬にしたる魚類。しほもの。

しほ-さき（シオ）「潮先」(名) ㊀潮のさし來る時。㊁物事の始まる時。

艹しほ-さゐ（シオ）(名) 潮のさす時に、浪の騷(サワ)ぐと。

艹しほ-じ・む（シオ）（ま み む む め め）(自、ま四) よなる。なじむ。「しほじみぬるよはひの人」。「この道にしほじみて」。

しほ-じ・む（シオ）（ま み む む め め）「潮染」(自、ま四) 潮水又は潮氣に染む。

しほ-じり（シオ）「鹽尻」(名) 鹽田にて砂を塚(ツカ)の如く圓く高く積み上げたるもの、これに海水をそゝぎ掛け日に曝(サ)して、濃厚なる鹽分を砂に殘留せしむ。

しほ-せ（シオ）「潮瀨」(名) 潮水のながれ。

しほ-せんべい（シオ）「鹽煎餅」(名) 米の粉に鹽を加へ、これを捏(コ)ねて、普通の煎餅の如く燒きたるもの、又、鹽を加へず醬油をつけて燒きたるものもあり。

しほ-た（シオ）「鹽田」(名) しほはま。

しほ-だし（シオ）「鹽出」(名) 鹽漬のものを水などに

浸(ヒタ)して、其鹽氣を拔くと。

しほ-だち（シオ）「鹽斷」(名) 神佛などに所願をかけて、鹽氣ある食物を食はぬと。

艹しほ-た・る（シオ）（れ れ る るる るれ れよ）「潮垂」(自、ら下二) ㊀潮に濡(ヌ)れて水垂る、「すまのあまのしほたれ衣浪かけて」。㊁涙にて袖濡(ヌ)る、「―る袖のひるまはありや」。㊂なげきに沈む、「うちしほたれけり」。㊃泣く。(齋宮の忌詞)。

しほ-ぢ（シオ）「潮路」(名) ㊀潮の差引する路筋。しほみち。㊁ふなぢ。海路。

艹しーぼち「新發意」(名) 發心して新に佛道に入りたる人。しんぼち。

(しーぼつ「死歿」(名) 死ぬると。みまかると。

しほ-づけ（シオ）「鹽漬」(名) 野菜又は肉などを鹽に漬(ツ)くると、又、其漬けたる物。(醃藏)。

しほ-づる（シオ）「鹽鶴」(名) 鹽漬にしたる鶴の肉。

しほで（シオ デ）「鞖」(名) 和鞍(ワグラ)の前輪と後輪(シツワ)とに、二箇處づゝ設けて、むながい及しりがいを止(ト)むる紐(ヒモ)。(四方手)。

しほで（シオ デ）「牛尾草」(名)【植】百合(ユリ)科に屬する草、雄蕊は一室の葯を有し、花は單性にして繖形に排列す、果實は漿果にして托葉は通常卷鬚なり、葉の下面は淡黃色をなす、嫩葉(ワカバ)は食用に供せらる。(天薺)。

しほ-どき（シオ）「潮時」(名) ㊀潮水の差引する時。㊁をり。とき。時機。機會。

艹しほ-ど・く（シオ）（け け く くる くれ けよ）(自、か下二) しほたる。

艹しほ-ど・け・し（シオ）（く し き けれ）(形、二) しほとけてあり。

艹しほ-な・ゆ（え え ゆ ゆる ゆれ えよ）「萎」(自、や下二) しをる。しほなぶ。

艹しほならぬ-うみ（シオ）「不潮海」(名)「みづうみ」の古稱。

艹しほ-な・る（シオ）（れ れ る るる るれ れよ）「潮馴」(自、ら下二) しほじむ。

艹しほ-なわ（シオ）「潮沫」(名) 潮のあわ。「―の留まる限」。

しほ-に（シオ）「鹽煮」(名) 食物を煮(ニ)て味をつくるに、醬油を用ひずしてたゞ食鹽のみを用ふると、又其料理物。

艹しほ-の-やほあひ（シオノヤオアイ）「潮八百合」(名) 潮水の四方より相會する所。

艹しほ-の-やほぢ（シオノヤオヂ）「潮八百路」(名) ㊀幾多の潮水の通路。㊁はるけき船路。

しほ-ば（シオ）「鹽場」(名) ㊀鹽竈。㊁食鹽を產出する地。

しほ-はま（シオ）「鹽濱」(名) 干潟(ヒガタ)を田圃の如く區劃し、砂を撒布し又は鹽尻をつくり、海水を引き又は海水を注(ソ)ぎ、これを日光に曝(サ)らして濃厚なる鹽分を砂に殘留せしめて、製鹽の原料をつくる所。しほた。(鹽田)。

しほ-はゆ・し（シオ）（く し き けれ）「鹹」(形、二) 鹽氣多し。しほからし。からし。

しほ-ひ（シオ）「潮干」(名) ㊀海水の引くと。㊁「しほひがり」の略言。――がた「潮干潟」(名) 潮の引きて干潟(ヒガタ)となる所。(鹹潟、斥鹵)。――がり「潮干狩」(名) 干潟又は潮引きて水淺き所などにて、魚介などを捕るあそび、古來陰曆三月三日を以て其好時期とす。

しほ-びき（シオ）「鹽引」(名) 魚類を鹽漬にすると、又、其魚類。しほもの。(腊魚)。

艹しほひ-の-やま（シオ）「潮干山」(名) 冥途の異稱。「生死は二つの海を厭はしみ、―を忍びつるかも」。

艹しほひる-たま（シオ）「潮干瓊」(名) 神代にありきといふ一種の寶珠、潮を引かする功力ありとぞ。

廿しほひる-に（シオ）［潮干瓊］(名) 前條に同じ。

廿しほふ（ホーウ）［實法］(名) すなほ。まじめ。

しほふき-がひ（シオ-ガイ）［汐吹貝］(名) 【動】瓣鰓類中同柱類に屬する貝、小形にして介殼は黃色を帶ぶ、軟體の出水孔及入水孔は管狀をなして、長く介殼外に伸出す。

しほ-ぶた（シオ）［鹽豚］(名) 鹽漬にしたる豚の肉。(醃豚)。

しほ-ぶろ（シオ）［鹽風呂］(名) 鹽水をわかしたる浴湯。しほゆ。

しほ-ぶね（シオ）［潮舟］(名) 海上をこぎゆく舟。

しほ-ま（シオ）［潮間］(名) 潮の引きてある間。

しほ-み（シオ）［潮見］(名) ㊀潮時を見ること。㊁海上のながめ。 廿——ぐさ［潮見草］(名) 【植】「うのはな」の一名。

しほ-みち（シオ）［潮道］(名) うしほのみち。しほぢ。

しほ-みづ（シオ）［鹽水］(名) ㊀うしほ。㊁鹽分を含有せる水。㊂食鹽を混じたる水。

廿しほみつ-たま（シオ）［潮滿瓊］(名) 神代にありきといふ一種の瓊、潮を滿たさしむる功力ありとぞ。

廿しほみつ-に（シオ）［潮滿瓊］(名) 前條に同じ。

しぼ・む（ま、み、む、む、め、め）［萎］(自、ま四) しをれちゞまる。しをる。(凋)。

しほ-むき（シオ）［鹽剝］(名) あさりなどを生きたる儘にて、介殼を剝(ム)きたるもの。

しほ-もみ（シオ）［鹽揉］(名) 野菜・魚介などをなまのまゝにて、鹽を用ひて揉(モ)むこと。「—の胡瓜」。

しほ-や（シオ）［鹽屋］(名) ㊀鹽竈(シホガマ)のある小屋。㊁鹽を賣る家又は人。(鹽商)。

しほ-やき（シオ）［鹽燒］(名) ㊀海水を煮(ニ)て鹽を製すること。又、其業の人。㊁肉などに鹽をふりかけて燒くこと、又、其燒きたる肉。 ——ごろも［鹽燒衣］(名) 鹽燒する人の着る衣。

しほ-ゆ（シオ）［鹽湯］(名) ㊀潮水を沸(ワ)かしたる浴湯。しほぶろ。㊁鹽氣のある鑛泉。「磯部の—」。㊂食鹽を混じたる湯。

しぼり［絞］(名) ㊀しぼること。㊁「しぼりぞめ」の略言。「—の羽衣」。 ——かす［絞滓］(名) 物を絞りとりたるあとに殘る滓(カス)。しめかす。 ——がみ［絞紙］(名) しぼりてしぼをよせたる紙。 ——ぞめ［絞染］(名) 一種の染方、布帛を絲にて處々綴(ト)ぢ括(ク)り、染めて後これを解き、其くゝりたるあとを白く殘すもの。くゝりぞめ。(絞纈)。 ——ばなし［絞放］(名) 絞染めのくゝりを解きて、其儘縮ませて置くもの。「—のてがら」。

しぼ・る（ら、り、る、る、れ、れ）［絞］(自、ら四) ㊀しめよす。つよくしむ。㊁強くしめて水氣を去らしむ。「手拭を—」。㊂無理に押出す。「壁を—」。(搾)。

廿しほ-わた（シオ）［潮曲］(名) 海水の灣入したる所。

(し-ほん)［四品］(名) 古昔、親王の位の名。

(し-ほん)［資本］(名) ㊀【經】吾人の過去の餘裕と貯蓄との結果にして、未來の生產の用に供する財貨、無形と有形とに分つ、專賣權・版權等の如きは前者に屬し、土地・家屋・器具・器械等は後者に屬す、又、固定と流動とに分つ。㊁もときん。しきん。もと。もとで。 ——か［資本家］(名) 資本を提供する人、資本を出す人。 ——きん［資本金］(名) もときん。もとがね。 ——しゆ［資本主］(名) ㊀資本家に同じ。㊁簿記にて、金銀・商品・土地・家屋其他所有一切の財物を借方に記入するに對して、これ等の總計高を貸方に記入するときの名稱。 ——ぬし［資本主］(名) 前條に同じ。

しほん-ばしら［四本柱］(名) 相撲(スマフ)の土俵の四隅にたてたる四本の柱。

しま［島］(名) ㊀四面水にて圍まれたる土地。「隱岐の—」。(洲嶼)。㊁庭の泉水の中などに築きたる假山。㊂周圍に際限あるせまき場處の稱。「—ながし」。

しま［縞］(名) (島物の略言、もと南蠻諸島より渡來したるが故にいふ) 布帛の模樣に、染絲をもて種々の筋を織り出だせるもの。(柳條、綅)。

(し-マ)［死魔］(名) 【佛】四魔の一、壽命を奪ふもの。

智慧をくらますもの。

(し-マ)［四魔］(名) 【佛】蘊魔・天魔・死魔及煩惱魔の稱。

(し-ま)［揣摩］(名) 事情をおしはかること。形勢をかんがへあはすること。

しま-あひ（イア）［縞合］(名) 縞の色合。

(し-まい)［姉妹］(名) ㊀あねといもうとと、又、同胞の女子。㊁「しまいかん」の略言。 ——かん［姉妹艦］(名) 同一の場所にて建造せられ且同型なる二つの軍艦、艦は「イギリス」語などにて、女性の名詞なるよりいふ。

しま-う［縞鵜］(名) 【動】鵜の一種、羽に斑文のあるもの。

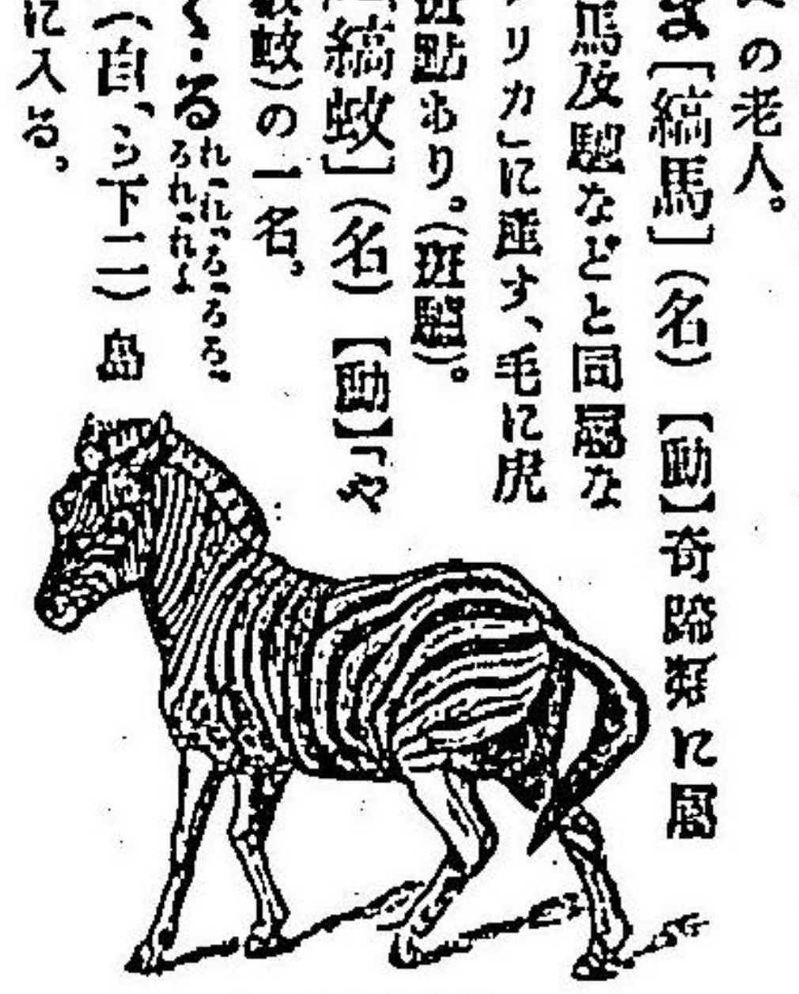
(し-まう)（ウ-モ）［四孟］(名) 孟春・孟夏・孟秋・孟冬の稱。

(じ-まう)（ジ-モ）［二毛］(名) しらがまじりの頭髮、又、其年ばへの老人。

しま-うま［縞馬］(名) 【動】奇蹄類に屬する獸、馬及驢などと同屬なり、「アフリカ」に產す、毛に虎の如き斑點あり。(斑馬)。

しま-か［縞蚊］(名) 【動】「やぶか」(藪蚊)の一名。

しまがく・る（れ、れ、る、る、れ、れよ）［島隱］(自、ら下二) 島の陰(カゲ)に入る。



〔しまうま〕

しまがくれ［島隱］(名) しまがくるゝこと。

しま-がに［島蟹］(名) 【動】蟹の一種、最も大形なり、甲殼高くして圓く、腹部白く脊部靑し。うみがに。(蟙、擁劍蟹)。

しま-がら［縞柄］(名) 縞の狀態又は品格。

廿しま-き［風卷］(名) ふきまく風。

廿しま-ぎ［盞木］(名) 鳥居の上にある橫木。かさぎ。

しま-ぎり［縞桐］(名) まさの桐材。(柾桐)。

廿しま・く（か、き、く、く、け、け）［風卷］(自、か四) 風烈(ハゲ)しく吹く。

しま-ぐに［島國］(名) 四面海に圍まれたる國土。(海國)。

しま-げら［縞啄木］(名) 【動】きつゝきの一種、羽に縞の如き模樣あるもの。

しま-ざらし［島晒］(名) 島にて晒(サラ)したる布。

廿しまし［少時］(名、副)「しばし」に同じ。 ——く［少時］(名、副)「しばらく」に同じ。

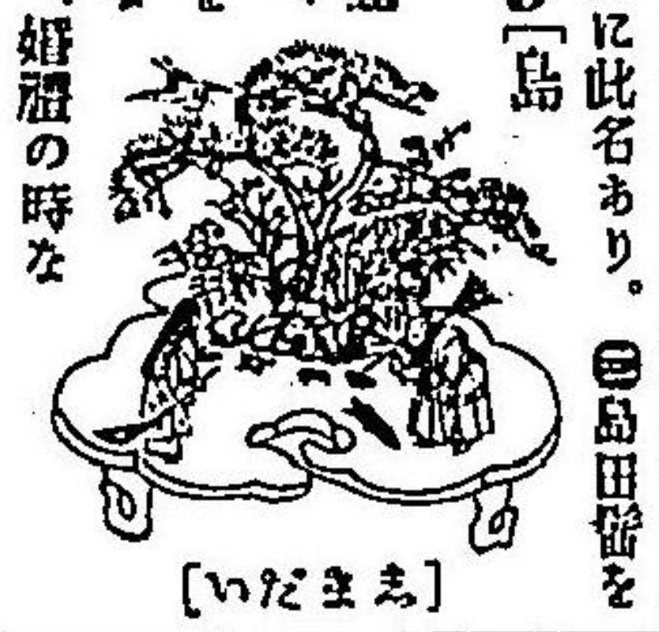
しま-しゆす［縞繻子］(名) 縞模樣のある繻子。

廿しま・す（さ、し、す、す、せ、せ）［澄］(他、さ四)「すます」に同じ。

廿しま-ずり［島摺］(名) 島などの模樣ある靑苔摺。

しま-だ［島田］(名)「しまだまげ」の略言。 ——くづし［島田崩］(名) しまだまげの一種、島田髷を稍や疎略にしたる風のもの、多く忌中に用ふ。 ——まげ［島田髷］(名) ㊀婦人の髮の結方、おもに年頃の未婚者の結ぶもの、もと駿河國島田驛の遊女の結びしに起る、故に此名あり。㊁島田髷を結びたる婦人。 ——わげ［島田髷］(名) 前條に同じ。

しま-だい［島臺］(名) 蓬萊山の形を模したる飾物、洲濱の臺の上に松・竹・梅を作り、これに尉・姥・鶴・龜などをとりあはせたるもの、婚禮の時などに用ふ。



〔しまだい〕

しま-だな［島棚］(名) 四十八棚の一。

しま-だひ（イ-タ）［縞鯛］(名) 【動】硬鰭類に屬する魚、形黑鯛に似て、鰭尖(サキ)り、體に靑白の模樣あり。

(し-まつ)［始末］(名) ㊀はじめとをはりと。もとどすゑと。㊁物事の始終を調ぶること。つゞめをつくること。かたづけ。㊂わけがら。事情。顚末。㊃つゞまやかにして浪費せぬこと。けんやく。 ——がき［始末書］(名) 事情の顚末を具申する文書。 ——ごころ［始末心］(名) 始末する心、儉約する意。 〜——や［始末屋］(名) ㊀けんやくする人。㊁遊郭などにて、遊女屋に賴まれ、遊興費の支拂をなし得ざる遊客の仕末をつくるを業とする人又は家。(東京の方言)。

しま-づつみ［縞包］(名) 紙の一種、紙質厚くして多くは布帛を包(ツツ)むに用ひらる。

廿しまつ-どり［島津鳥］(名) 【動】(島の鳥の義) 鵜の異稱。

廿しまつ-どり［島津鳥］(枕)「鵜」に冠らする詞。

しま-でほん［縞手本］(名) 縞物のきれ端を多く貼(ハ)りならべて、縞柄の參考となすもの。

しま-ながし［島流］(名) 罪人を島嶼に送りて還るを得しめざること、又、罪人を邊鄙の地に送り其區劃外に出づるを許さゞること。(流刑、流罪)。

しま-ぬけ［島脫］(名) 島流の罪人が、ひそかに其島よりぬけ出づること、又、其罪人。

しま-ね［島根］(名) ㊀島の稱。㊁土地。㊂島國。「大和—」。

しま-ねずみ［縞鼠］(名) 【動】鼠の一種、「ヨーロッパ」若しくは「アフリカ」等に產す、背部に縞の模樣あり、走ること早し。(花鼠)。

し-まひ（イ-マ）［仕舞］(名) ㊀すること。はて。をはり。(畢、終)。㊁をさまり。かたづけ。㊂やめ。休止。「店—」。㊃けしやう。おつくり。みじまひ。「御—」。㊄買ひきり、又、品ぎれ。㊅能樂の略式の舞。 ——ばしら［仕舞柱］(名) 昔時、芝居にて、客より役者に送りたる纏頭(ハナ)を挿みおきたる柱。 ——ぶろ［仕舞風呂］(名) 入り終りて、湯を拔かむとするに近き頃の風呂。 ——ゆ［仕舞湯］(名) 前條に同じ。 ——もの［仕舞物］(名) すたれ時に近きもの、又、店じまひのしろもの。

しま-ひよどり［縞鵯］(名) 【動】ひよどりの一種、形は普通のひよどりに似、頭部は白色にして腹部は灰色、其他は黑色なり。

し-ま・ふ（ウ-マ）（は、ひ、ふ、ふ、へ、へ）［仕舞］(他、は四) ㊀なしをはる。すます。遂ぐ。㊁入れ藏む。かたづく。「着物を—」。㊂休止す。やむ。㊃買ひきる。

し-ま・ふ（ウ-マ）（は、ひ、ふ、ふ、へ、へ）［仕舞］(自、は四) をさまる。又、をはる。「踊って—」。

(じ-まへ)（エ-マ）［自前］(名) 藝妓などが抱主の世話にならず、自分一個にて營業すること。

しま-へび［縞蛇］(名) 【動】蛇の一種、しまの斑文あるもの。

しま-めぐり［島廻］(名) ㊀島の周邊をめぐりあるくこと。又、島々を遊覽すること。㊁【動】涉禽類中鷸類に屬する鳥、嘴は長くして角質なり、脚もまた長くして靑色を帶び、眼の周圍は羽毛生ぜずして裸出す、水邊に棲息し、小魚類を捕食す。

しま-もの［縞物］(名) 縞のおりもの。

しま-もり［島守］(名) 島の番人。

しま-やぶり［島破］(名) 島流に處せられたる罪人が、ひそかに其地を脫(ヌ)け出づること。又、其罪人。

しまり［締］(名) ㊀とりしまり。かんとく。㊁くゝり。つゞめ。㊂固(カタ)く結ぼること。㊃とざされて

あると。又、とざすための裝置。「戸の―が堅い」。㊄ゆるみなきと。㊅〔けんやく〕、しまつ。――や〔締屋〕（名） 儉約なる人。

しま・る（らりるるれれ）〔締〕（自、ら四） ㊀ゆるみなくなる。㊁固（カタ）く結ばる。「繩が―」。㊂かんとく行屆く。㊃つゞまる。㊄とざゝる。「門が―」。㊅〔身持よくなる、浪費止む。

しまわ〔島曲〕（名） 島のまはりの海邊。

（しまん〔嵩慢〕（名） 見さげてないがしろにすると。

（しまん〔滋蔓〕（名） しげりはびこると。

（しまん〔自慢〕（名） 自ら自分を誇（ホコ）ると。自ら高ぶると。（自負）。――くさ・し（くしく・しけれ）〔自慢臭〕（形、二） 自慢するさまに見ゆ。――ばなし〔自慢話〕（名） 自慢してなす話。

（しまんろくせんにち〔四萬六千日〕（名）〔佛〕 佛又は菩薩の緣日、當日に參詣する者は、四萬六千日參詣したるほどの功德ありといふ。

しみ〔衣魚〕（名） ㊀〔動〕總尾類中衣魚科に屬する昆蟲、小形にして銀白色の鱗を有し、路ぼ同長なる三個の尾毛あり、廣く地球上に傳播し、衣服・書籍等を蝕害す。きらゝむし、しみむし。（蠹魚、蟫、蟬）。㊁すべて物事を次第にそこなひやぶるものゝ稱。

しみ〔染〕（名） ㊀ものの染（シ）み汚（ヨゴ）れたる痕跡。「酒の―」。（汚點）。㊁皮膚に生ずる垢の如き斑點。

しみ〔凍〕（名） こほると。又、こほり。「道のぬかりの―溶けぬまに」。

（じみ〔滋味〕（名） ㊀うまきあぢはひ。うまみ。㊁滋養となる食物、美味ある食物。㊂精神上の糧となるべき意味。

（じみ（名） はでやかならぬと、くすみだると。質素なると。

しみこ・む（まみむむめめ）〔染込〕（自、ま四） 深くしみ入る。しみとほる。（浸徹）。

しみじみ〔染染〕（副） 深く心にしみて。よくよく。つくづく。

しみち〔爲道〕（名） しかた、しやう。

しみづ〔清水〕（名） 澄（ス）みたる泉。淸き泉。

しみつ・く（かきくくけけ）〔凍付〕（自、か四） こほりつく。

しみつ・く（かきくくけけ）〔染着〕（自、か四） そまりつく。深くそまる。

〔しみったれ（名） ㊀吝嗇なると。又、其人。㊁意氣地なきと。又、其人。

しみとほ・る（らりるるれれ）〔染透〕（自、ら四） ㊀しみこむ。㊁深く感ず。

しみぬき〔染拔〕（名） 布帛などのしみを拔き去ると。

十しみみに（副） 數多く。ひまなく。繁く。

しみむし〔衣魚蟲〕（名） 「しみ」〔衣魚〕に同じ。

しみもち〔凍餅〕（名） こほりもち。

（しみやく〔支脈〕（名） 支出したるすぢ。わかれたる脈。

（しみやく〔死脈〕（名） ㊀脈搏の狀態が死に近きと。㊁〔鑛〕不用物のみより成りたる鑛脈。

十しみらに（副） 「しみゝに」に同じ。「あかねさす、ひるは―」。

〔しみ・る（みみみるみれみよ）〔染〕（自、ま上一） 皮膚に浸入していたみを感ず。

〔じみ・る（みみみるみれみよ）〔染〕（自、ま上一） 質素に見ゆ。じみになる。

〔じみ・る（みみみるみれみよ）〔染〕（自、ま上一） 其さまに見ゆ。又、其ものに似る。「狂氣―」。

しみわた・る（らりるるれれ）〔染亙〕（自、ら四） くまなく染みとほる。（浸透、沁漫、浸潤）。

（しみん〔市民〕（名） 市中の住民。

（しみん〔私民〕（名） 古昔、貴族などに專屬して其統御を仰ぎ、國家の公事にあづからざりし人民。自由民の對。

（しみん〔四民〕（名） 士・農・工・商。又、すべての階級の人民。

しむ（まみむむめめ）〔染〕（自、ま四） ㊀そまる。そむ。㊁うるほふ。ひたる。「油―」。㊂深く感ず。心に徹す。㊃感染す。うつる。㊄しみたしむ。なる。㊅〔皮膚に浸入して痛を感ず。

しむ（まみむむめめ）〔凍〕（自、ま四） こほる。「さえやるべくもあらずしみわたる」。

しむ（めめむむるむれめよ）〔占〕（他、ま下二） ㊀據りて自家の位地となす。「座を―」。㊁領有す。㊂專有す。「かひ―」。

しむ（めめむむるむれめよ）〔締〕（他、ま下二） ㊀緩（ユル）まぬやうに強くせまりちゞむ。㊁むすぶ。くゝる。つかぬ。「帶を―」。㊂とざす。とづ。「戸を―」。㊃壓搾す。しぼる。㊄きびしく監督す。嚴重にとりしまる。㊅浪費を制す。㊆合計す。あはす。㊇くびる。「首を―」。

しむ（めめむむるむれめよ）〔染〕（他、ま下二） しむやうにす。しみさす。

しむ（めめむむるむれめよ）〔令、使〕（助動） 他を使役してはたらかす意を表はす語。「取ら―」。

（じむ〔時務〕（名） 當時の政務。其時の政策。ときのつとめ。「―を知るものはそれたゞ俊傑か」。

（じむ〔寺務〕（名） 寺院の事務。――しよ〔寺務所〕（名） 寺務を取扱ふ所。

（じむ〔事務〕（名） 取扱ふ業務。擔當する用事、しわざ。つとめ。こと。――きてい〔事務規程〕（名） 事務章程に同じ。――くわん〔事務官〕（名） ㊀事務を取扱ふ官職の汎稱。㊁特種の職務ある高等官の特稱。「通信―」。「印刷局―」。㊂一定の法規又は訓令の範圍内に於て、行政事務を扱ふ官職、即ち內閣と進退を共にせざるもの。政務官の對。――くわんり〔事務管理〕（名）〔法〕法律上の義務なくして、他人のために其事務を管理すると、例へば甲が好意上自家に隣接せる乙の田地を耕作するが如きをいふ。本人の意に反せずしてこれをなしたる場合に、本人のために有益なる費用を出したるときは、本人に對して其償還を請求し、本人のために有益なる負債をなしたるときは、本人をして辨償せしむる權利あり、されど本人の意に反してなしたる場合には、本人の現に受くる利益の限度に於て、前述の權利あり。――しつ〔事務室〕（名） 事務を取扱ふへや。――しやうてい〔事務章程〕（名） 事務取扱の手續を定めたる規定。――しよ〔事務所〕（名） 事務を取扱ふ所。――ひきつぎ〔事務引繼〕（名） 後任者が前任者より、其擔當に屬する事務をうけつぐと。――ゐん〔事務員〕（名） 事務を取扱ふ人。

しむ・く（けけくくるくれけよ）〔仕向〕（他、か下二） ㊀人に對して行ふ。㊁あてゝつかはす。あてゝおくる。

しむけ〔仕向〕（名） ㊀しむくると。しむくるさま。㊁あつかひ。待遇。㊂あてがひ。あてつけ。――る〔仕向〕（他） 「しむく」の訛。

シムソンせん〔――線＝Simson line〕（名）〔數〕三角形の外接圓の周上の一點より、三つの邊又は其延長線に引ける垂線の足を連ぬるときは一直線をなす、この直線の稱。

しめ〔標〕（名） 「しめなは」の略言。（七五三）。

しめ〔坪〕（名） 砂利の類の土、濕地を築（ツ）き立つるなどに用ふるもの。

しめ〔締〕（名） ㊀合はせて數ふると。合はせて數へたる高、合計。㊁半紙十束即ち百帖の稱。㊂封目（フウジメ）などに記す「〆」の字。

しめ〔鴲〕（名）〔動〕燕雀類中雀科に屬する鳥、小形にして嘴太し、腹は黄色にして、脚は淡黄色なり。

（しめ〔駟馬〕（名） 「しば」に同じ。

〔しめ（名） 物事の思ふつぼにはまりたると。

（しめい〔使命〕（名） 使者としてうけたまはりたるいひつけ、つかひとして擔當するつとめ。

（しめい〔指命〕（名） 指定して命ずると。さしていひつくると。さしづ。

（しめい〔詩名〕（名） 詩に長じたるほまれ。

（しめい〔詩盟〕（名） 詩人仲間のまじはり。

（しめい〔死命〕（名） 死ぬるいのち。又、活動絶（タ）えたる狀態。――をせいす〔制死命〕 他を自由に制御し得るにいふ。

（しめい〔指名〕（名） 人名を指定すると。なざし。――さいけん〔指名債權〕（名）〔法〕證書によらざる債權又は證書ありともたゞ債權者を指名せるに止まる債權の稱、これを讓り渡すには、債務者に其旨を通知するか又は其承諾を得るにあらざれば、債務者に對抗すると得ず。

（しめい〔氏名〕（名） うぢとなと。姓と名と。――てんこ〔氏名點呼〕（名） 多人數の者に對して、其姓名を順次に一々呼び上ぐると。

（じめい〔自明〕（名） ㊀自家の直觀によりて、これを明かにすると。㊁何等の證明を須（マ）たず、其もの自身にて已に明かなると。

（じめいしよう〔自鳴鐘〕（名） 時計の異稱。

しめうり〔締賣〕（名） ㊀買ひ締（シ）め置きて、利のある時に賣ると。㊁巨利を貪（ムサボ）りて賣ると。

しめかざり〔標飾〕（名） しめなはを用ひて飾ると。又、其かざり。（七五三飾、注連飾）。

しめかす〔搾滓〕（名） 或原料より油を搾（シ）めてとりたるあとの滓（カス）、肥料などに用ふ。

しめがね〔締金〕（名） 紐（ヒモ）などの端に、締（シ）むるために付くる金具。（扣金）。

しめがひ〔締買〕（名） かひしめ。

しめぎ〔搾木〕（名） 或原料より油を搾（シボ）りとる機械、木と木とを螺旋狀に食ひ合ふやうにつくりたるもの。

しめきり〔締切〕（名） しめきると。

しめき・る（らりるるれれ）〔締切〕（他、ら四） ㊀全くしめおく。又、長くしめおく。㊁結局をつく、段落をつく。

しめくゝり〔締括〕（名） しめくゝると。

しめくゝ・る（らりるるれれ）〔締括〕（他、ら四） ㊀固く締（シ）めて束ぬ。嚴重にくゝる。（緊縛）。㊁監督す。とりしまる。㊂つゞめをつく。くゝりをつく。

〔しめこのうさぎ（名） かねて待ち設けたる通りに物事のなるとにいふ語。

〔しめこのりつさうさ（名） 前條に同じ。

しめころし〔締殺〕（名） しめてころすと。

しめころ・す（さしすすせせ）〔締殺〕（他、さ四） 喉（ノド）などを締（シ）めて殺す、くびりころす。（絞殺、勒死）。

しめし〔示〕（名） しめすと。「―が利く」。

〔しめし〔濕〕（名） ㊀ぬらすと。㊁むつき。おしめ。

〔しめじめ（名、副） ㊀うるほひしめるさまにいふ語。㊁雨などの絶間なくふるさまにいふ語。

〔じめじめ（名、副） 前條に同じ。

十しめや〔四馬車〕（名） 古昔、用ひられたる小さき車。

しめ・す（さしすすせせ）〔濕〕（他、さ四） ㊀水氣に染（シ）ましむ。ぬらす。ひたす。㊁火を消す。

しめ・す（さしすすせせ）〔示〕（他、さ四） ㊀あらはし出だして知らしむ。かゝげ出だして見しむ。㊁教ふ。告ぐ。㊂てほんとなさしむ。みせしめにす。――へん〔示偏〕（名） 漢字の偏の名、社・祖などの左方にある示の字の稱。

〔しめた(感) (古め得たりの略) 物事の我が思ふがまゝになりし時にいふ語。

しめ‐だいこ[締太鼓](名) 一種の太鼓、鼓(ツヅミ)の如く、緒にて革を胴に絡(カラ)げて締(シ)めたるもの。

しめ‐だか[締高](名) 總計したる高。合計の高。

しめ‐だし[締出](名) 門戸などを締(シ)めとざして、出でたる人を入れぬこと。

しめ‐だ・す[締出](他、さ四) しめだしにす。

しめ‐ぢ[濕地](名) 【植】「しめぢだけ」の略言。

――だけ[濕地茸](名) 【植】菌類の一、秋の頃、山中に生ず、形松茸に似て小さく、傘は灰色にして柄は白色なり。(鮮蕈、卜活茸)。

(じ‐めつ[自滅](名) ㊀自然に滅亡すること。㊁自分の所作によりて、自分の滅亡すること。

しめ‐つ・く[締付](他、か下二) かたく締(シ)む。

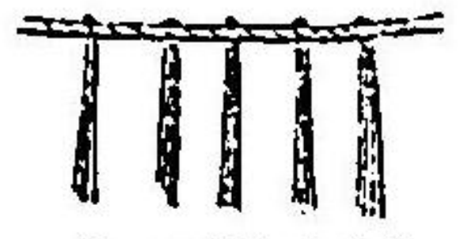
〔しめ‐つ・く(自、か四) じめ〳〵す。

〔しめつける[締付](他) 「しめつく」の訛。

〔しめっぽい(形) 濕氣あり。じめ〳〵す。

しめ‐て[締](副) 數を合はせて。合計して。

しめ‐なは[標繩](名) ㊀(「しりくめなは」の略)内外の境界又は出入の禁止等のしるしに引き亙(ワタ)してある繩。㊁特に、神前に引くものゝ稱、神前の淸淨地を區劃するもの。(注連、七五三繩)。



[(二)はなめし]

卄しめ‐の[占野](名) 古昔、自家の所有として、他人の入ることを禁ぜし野の稱。

しめ‐の‐うち[標內](名) ㊀まつのうち。㊁しめなはの張りてある內部。

しめ‐やか(名) 人のけはひもなく、いと物しづかなること。又、うちしめりて淋しげなること、〔蕭然、寂條〕。

卄しめ‐やぐ(自、か四) しめやかに思ひしづむ。

しめ‐ゆ・ふ[標結](自、は四) 標繩(シメナハ)を張る。

しめ‐よ・す[締寄](他、さ下二) ㊀締(シ)めて一つに寄す。㊁締めてよせ近づく。

〔しめよせる(他) 「しめよす」の訛。

卄しめら‐に(副) 「しみゝに」に同じ。

しめら・ふ[濕](自、は四) 「しめる」(濕)の延言。

しめり[濕](名) ㊀しめること、しとり、うるほひ。㊁火の消ゆること。㊂雨の降ること。㊃水分、濕氣。㊄鎭火を報ずる警鐘。――け[濕氣](名) しっけ。

しめ・る[沈](自、ら四) ㊀ものしづかになる、しづまる。㊁うれひに沈む、しをる。

しめ・る[濕](自、ら四) 水氣を持つ、濕氣を帶ぶ、ぬる。

〔しめる[締](他) 「しむ」の訛。

〔しめる[占](自) 「しむ」の訛。

しめ‐を[締緒](名) 物を締(シ)むるための緒。

(し‐めん[紙面](名) ㊀かみのおもて。紙上。㊁手紙、文書、「御―拜見」。

(し‐めん[四面](名) ㊀四個の平面。㊁四方の面、又、第四の面。㊂まはり。ぐるり。――たい[四面體](名) 【數】四つの平面にて界したる立體、即ち、三角錐の稱。――そか[四面楚歌](名) (楚の項羽が漢の高祖のために垓下に包圍せられしとき、夜深けて漢軍の四面に楚國の歌の起るを聞きて、楚の民の已に漢に降りしを知りたりとの故事に出づ) 味方はこと〴〵く敵に降り、孤立してたすけなきさまにいふ語。

しも[下](名) ㊀「した」に同じ。㊁和歌の下の句。㊂身體の腰部以下。㊃君主に對して臣民の稱、又、雇主に對して雇人の稱。㊄ゐなか。地方。

しも[霜](名) ㊀氣溫低降して氷點以下に及ぶとき、露又は水蒸氣の凝結して地表などに白く敷(シ)くもの。㊁白髮にいふ語。しらが。「頭の―」。――あさ[霜朝](名) 霜のふりたる朝。

しも(助) 感動詞の「も」に、語勢を強むるため「し」を添へたる助辭。「頗―」、「必―」。

しも‐いちだん‐くわつよう[下一段活用](名) 【文法】加行の「け・け・ける・ける・けれ・けよ」と活用する動詞の變化。

しも‐おほひ[霜覆](名) しもよけ。

しも‐かぜ[下風](名) 腰部以下より引く風、又、產後いまだ日立たぬ時にひく風。

しも‐が・る[霜枯](自、ら下二) 霜に逢(ア)ひて枯(カ)れ萎(シボ)む。

しも‐がれ[霜枯](名) ㊀霜に逢(ア)ひて、草木などの枯(カ)れ萎(シボ)むこと。㊁冬などの寒き空合(ソラアヒ)の景。㊂年の暮に、商賈の景氣惡しきこと。㊃「しもがれどき」の略言。――どき[霜枯時](名) 草木の霜枯する時節。

(じ‐もく[耳目](名) ㊀耳と目と。㊁視(ミ)ると聽(キ)くと。㊂諸方の事情を告ぐる部下又は臣下。

卄しも‐くち[霜朽](名) 「しもやけ」の古稱。

しも‐くづれ[霜崩](名) 霜どけして霜柱のくづるゝこと。

卄しも‐ぐもり[霜曇](名) 霜などの降(フ)らんとして、空の寒げく曇(モ)ること。

卄しも‐けいし[下家司](名) 下位のけいし。

〔しも‐げ・る(自、か下二) 寒氣のために

腐敗す。「芋が―」。(凍萎)。

しも‐ごえ[下肥](名) 人糞の肥料。(下糞)。

しも‐ざ[下座](名) 下位の坐席。

卄しも‐さき[霜先](名) 霜の降(フ)らんとするはじめ、又、寒くならんとするはじめ。

しも‐ざま[下樣](名) ㊀たみ。人民。㊁下賤なるもの、下等社會。「のら。したじた」。

しも‐じも[下下](名) しもざまの者共。したのもの。

しも‐せ‐くわやく[下瀨火藥](名) 工學博士下瀨雅允の發明にかゝる特種の火藥、効力強大なるものにして、多く海軍にて使用す。

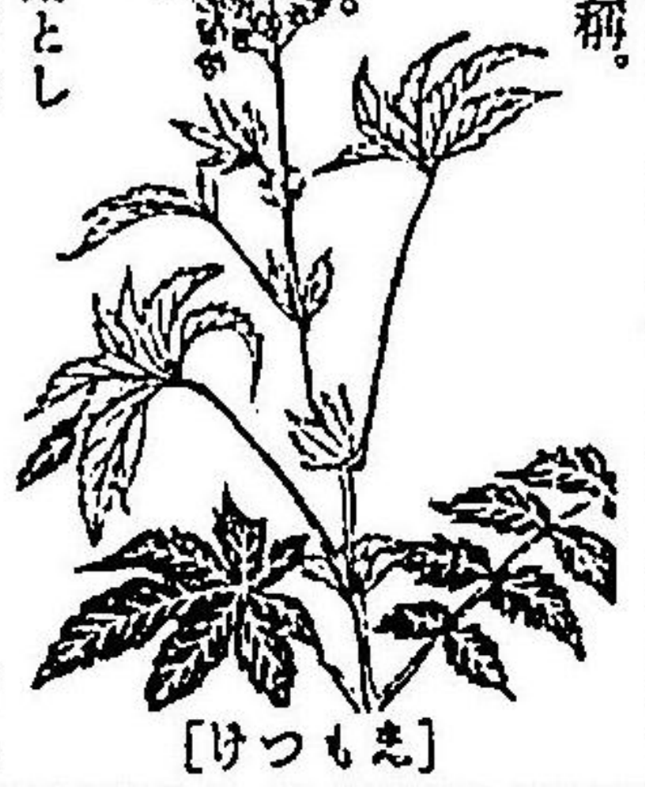
しも‐だいくわん[下代官](名) 昔時、一代官の下役にして、代官の次席なりしもの。

〔しも‐たや(名) ㊀商賣を止めたる家。㊁商賣せずに活計を立てゆく家。

卄しも‐つ‐かた[下方](名) しもざま。

しも‐つき[霜月](名) (霜の降るが故に此の名あり)陰曆十一月の異稱。

しも‐つけ[下野](名) 【植】薔薇科に屬する植物、葉は薄荷に似、花は紅紫色にして繖形に排列す、觀賞用として栽培せらる。(繡線菊)。



[けつもし]

卄しも‐つ‐ひげ[鬚](名) したあごのひげ。したひげ。

卄しも‐つ‐やみ[下闇](名) 月の下旬の頃の闇。くだりやみ。

しも‐て[下手](名) 下の方。上手の對。

しも‐と[笞](名) 刑罰の具、細き木の枝にてつくりたる杖にして、罪人を打つに用ふ。(榜箠)。

しも‐と[莝](名) 枝のしげき若き木立。(楉)。

しも‐にだん‐くわつよう[下二段活用](名) 【文法】五十音圖中「ウ・エ」の列のみに活用する動詞の變化、即ち「け・け・く・くる・くれ・けよ」「せ・せ・す・する・すれ・せよ」等と活用する類。

しも‐の‐く[下句](名) 和歌にて第四句と第五句との稱。

しも‐の‐ころも[霜衣](名) 霜のふりかゝりたる衣。

しも‐の‐つる[霜鶴](名) 毛色のいと白き鶴。

卄しも‐の‐や[下屋](名) しも〴〵の人の住家。

卄しも‐の‐よもぎ[霜蓬](名) (霜に枯れたるよもぎの意)老人の頭髮の色にいふ語。

しも‐ばしら[霜柱](名) 嚴寒の頃、土中の水氣凝結して柱狀の氷となり表土をおしおこすもの。(氷筍)。

しも‐ばれ[霜腫](名) しもやけ。しもくち。

しも‐びと[下人](名) ㊀しもざまのもの。㊁めしつかひ、げぢよ、げなん。

しも‐ぶくら[下脹](名) ㊀下の方の脹(ハ)れてあること。㊁頰肉豐(ユタ)かにして、面部の下方ふくれてあること。

しも‐ぶくれ[下脹](名) 「しもぶくら」に同じ。

しも‐ふり[霜降](名) ㊀霜のふること。㊁霜の降りかゝりたるが如き模樣、鼠地などに白の點のあるもの。㊂一種の料理、赤貝などをたゆでゝ、これに醬油をつけたるもの。――づき[霜降月](名) 陰曆十一月の異稱。――まつ[霜降松](名) 【植】五葉松の變種、葉に白粉を含みて、霜などを受けたるが如く見ゆるもの。――ラシヤ[霜降羅紗](名) 霜降の模樣の羅紗。

しも‐べ[下部](名) めしつかひ、げなん。(奴僕、蒼頭)。

卄しも‐みぐさ[霜見草](名) 【植】菊の異稱。

しも‐む[下無](名) 十二律の一。

しも‐や[下屋](名) しものや。

しも‐やかた[下館](名) しもやしき。

しも‐やけ[霜燒](名) 寒氣に中(アタ)りて、手足などの皮膚が腫(ハ)れ爛(タダ)るゝこと、しもくち、ゆきやけ。(凍瘡、寒瘡)。

しも‐やしき[下屋敷](名) 昔時、諸大名が江戸の郊外などに設けて別莊の用とせし屋敷、ひかへやしき、別莊、別邸。かみやしきの對。

しも‐よ[霜夜](名) 霜の降(フ)る寒夜。

しも‐よけ[霜除](名) 霜の傷害を防ぐために、草木をかこふ藁のおほひ。

卄しも‐わらは[下童](名) 雜事に使役するわらは。

(し‐もん[私門](名) 自分の一家。「―を張る」。

(し‐もん[諮問](名) 問ひはかること、相談すること。――くわい[諮問會](名) 諮問のための會合、相談のための集會。

(じ‐もん[耳門](名) 耳のあなのくち。

(し‐もん‐しんけ[四門親家](名) 親類の親類。またの親類。

(じ‐もん‐じたふ[自問自答](名) 自分で疑問を起し自分で解決すること。自ら問ひ自ら答ふること。

(し‐もん‐せん[四文錢](名) 寬永錢の一、もと四文に當り、今二厘に通用するもの。なみせん。

(し‐や[紗](名) 生絹の織物、織目疎(アラ)くして輕く薄きもの。うすぎぬ。

(し‐や[赦](名) ㊀罪過を不問に附すること。ゆるして、つみせざること。㊁特典を以て、囚人の罪科を赦(ユル)すこと、昔時これを常・大・非常の三種とし、常赦は故殺犯及八虐の外はこれを赦し、大赦は強竊盜及私鑄錢の外はこれを赦し、非常赦は殘らず赦したり。

(しや[社](名) ㊀やしろ。はこら。㊁あつまり。くみあひ。合衆。團體。「—を結ぶ」。㊂立春後及立秋後の第五の戊(ツチノエ)の日の稱。しやにち。㊃支那にて、土地を守護する神。又、其神の祭事。㊄支那の上代にて、二十五家を一組としての稱。㊅支那の現時に於て、最下級の行政區劃の稱。

(しや[謝](名) ㊀わび。㊁ことわり。㊂れい。

(しや[射](名) 弓を射(イ)る術。きゆうじゆつ。

(しや[斜](名) なゝめ。「—に構ふ」。

(しや[舍](名) ㊀假寓する所。やど。やかた。やどり。㊁星辰の躔度。ほしのやどり。㊂軍隊の一日程、古昔、支那にては三十里の定めなり。㊃やくば。やくしよ。㊄いへ。こや。「茅—」。㊅ゐどころ。すまひ。

(し-や[視野](名) 視力のとゞく範圍。

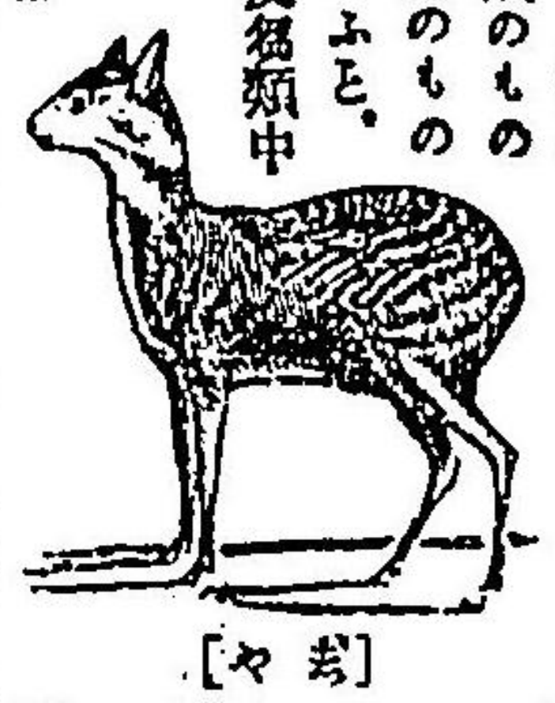
(し-や[子夜](名) まよなか。よなか。

(し-や[四野](名) 四邊の野外。

十しや(感) いかり罵る時に發する聲。「—曲者」。

(しや[邪](名) ㊀不正なること。姦佞なること。よこしま。ねぢけ。わだかまり。いつはり。「—道」。㊁小人。兇漢。不正の徒。「—を除し」。㊂時氣の人身に害をなすこと。「—氣」。

(しや[蛇](名) ㊀へび。をろち。うはゞみ。㊁想像上の一種の動物。龍とへびとの間に位し、人に祟(リク)をなすといふもの。「清姫—となつて」。——のみちはへび 同類のものゝのなす事柄は、同類のものよくこれを推知すといふこと。


[しや]

(しや[麝](名) 【動】反芻類中麝科に屬する獸。形は鹿に似て角なく、大きさ小狗の如し、體色は黑くして、腹部に鷄卵大の塊狀をなす皮腺あり、これを麝香といふ。しやかうじか。

(し-や[時夜](名) 鷄の夜間に時をつぐること。

(しや-あく[邪惡](名) あしきこと。よからぬこと。

(しやあ-しやあ(名、副) 鐵面皮にして、羞恥の感少なきさまにいふ語。

(しや-い[寫意](名) 畫(ゑが)きたるおもむき。うつしたるおもむき。

(しや-い[謝意](名) 謝禮のこゝろざし。

(しや-い[邪意](名) よこしまなるこゝろばせ。

(しや-いう[社友](名) ㊀社員以外の人にして、其社に關係を有する人。㊁同一の社にある友人。

(しや-いう[赦宥](名) ゆるすこと。なだむること。

(しや-いん[邪婬](名) 【佛】五戒の一、妻又は夫にあらざるものと婬事をなすこと。(邪淫)。

(し-やう[仕樣](名) 仕方。方法。手段。

(し-やう[飼養](名) 飼(カ)ひ養ふこと。「蠶の—」。

(しやう[省](名) ㊀きんり。禁中。「禁—中」。㊁古昔、太政官の統轄に屬せし中央官廳の稱、即ち中務・式部・治部・民部・兵部・刑部・大藏・宮内の八つにして、其職員は卿・大輔・少輔・丞・錄等なりき。㊂各省大臣が分擔處理する行政事務の全範圍、我國現時の制にては、宮内・外務・内務・大藏・陸軍・海軍・司法・文部・農商務・遞信の十省にして、次官・局長(宮内省には職長又は祭頭等あり)・參事官(宮内省には置かれず)・秘書官・書記官・技師・屬・技手等を置く。㊃支那にて、古昔は中央官廳の名、現今は最上級の地方行政區劃の名。「尚書—」。「山東—」。

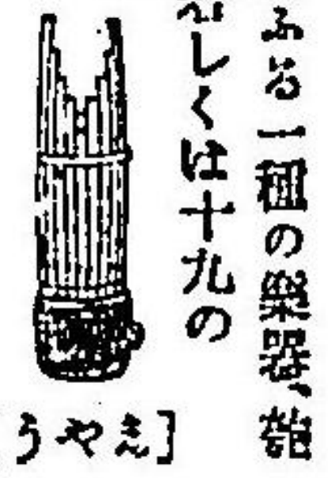
(しやう[性](名) ㊀【佛】萬有の原因、品類の萬差に關せずすべて同一にして且不變なるもの。㊁うまれつき。性質。㊂なりたち。たち。「金の—」。㊃たましひ。性根。㊄陰陽家などにて、五行を人の生年月日等に配當したるもの、其相生相剋の理によりて運命を說く。

(しやう[莊](名) ㊀「さうゑん」(莊園)に同じ。㊁後世、莊園の名を因襲したる土地の稱。「上野の—」。㊂安南に於ける行政區劃の一、街より小さく社より大いなるもの。㊃城市外の一區劃の地。「匿也田—」。㊄えもやしき。別業。㊅ゐなかや。田舍。

(しやう[漿](名) はやず。又、甘き飲料。

(しやう[將](名) ㊀軍隊の引率指揮をつかさどる人。軍隊の長。㊁古昔、近衛府の官名。現時、陸海軍の官名。「大—」。「中—」。「少—」。

(しやう[笙](名) 雅樂に用ふる一種の樂器、匏を切りて、其中に十三又は十七若しくは十九の管を立てならべ、管の端に簧(クシ)あり、吹きて鳴らす、現時は匏を桐材にてつくる。しやうのふえ。(笙)。


[しやう]

(しやう[上](名) しやう。うへ。かみ。

(しやう[症](名) (病證の合字)病氣の性質。

(しやう[生](名) ㊀生きてゐること。いのちあること。㊁いのち。生命。

(しやう[商](名) ㊀營利の目的を以て物貨の運轉を媒介すること。有無をはかり財物を通ずることを業となすこと。あきなひ。商賈。㊁あきなひを業とする人。あきうど。あきんど。㊂五音の一、強くして冱(サ)ゆるもの、悲哀又は殺伐の氣ありとし、これを四季に配して秋にあて方位に配して西にあつ、金屬の樂器の聲これに屬すといふ。㊃【數】一數を他の數にて割りて得たる値。

(しやう[賞](名) たまもの。褒美。

(しやう[章](名) ㊀文の中にて大きなる段落の

稱。㊁詩歌又は文章又は書狀。㊃くだり。個條。「法三—」。㊄わかち。區別。㊅のり。おきて。㊆しるし。いんぎやう。㊇しるし。表識。㊈かたち。形狀。「合而爲—」。㊉いろ。あや。もやう。

(しやう[正](名) ㊀たゞしきこと。まことなること。「—物」。㊁古昔、諸司の長官。㊂位階の小區別を示す語、從の對にしてその一段上なるもの。「—一位」、「—六位」。

(しやう[祥](名) ㊀めでたきこと。又、めでたきしるし。「天地—を發す」。㊁一周忌と二周忌との稱。

(しやう[娼](名) あそびめ。うかれめ。

(しやう[匠](名) ㊀職人。職工。㊁官吏。

(しやう[償](名) つぐのひ。あがなひ。

(しやう[相](名) ㊀君王を補弼して大政を行ふもの。さいしやう。大臣。㊁主者をたすけて事を行ふもの。かいぞへ。はさ。㊂てびきする人。案内者。「猶瞽之無—」。㊃かたち。さま。

(しやう[象](名) かたち。ありさま。

(しやう[狀](名) ㊀ありさま。やうす。㊁陳述書。又、上申書。㊂てがみ。書簡。㊃ふだ。牒札。

(しやう[常](名) ㊀つね。又、なみ。㊁支那にて、日月の象をつけたる天子の御物。㊂支那にて、一丈六尺の稱。

(しやう[錠](名) 物の開閉する個所に差し固めてしまりとする金具、これに附屬したる鍵(カギ)を用ひて開閉す。——をおろす しやうをさしかたむ。しめとざして開かず。

(しやう[情](名) ㊀感じて起る心のうごき、儒家にてこれを性の動といふ。㊁【佛】明靜なる眞心に對して、昏動せる妄念の稱。㊂【心】感情に同じ。㊃かんがへ。おもひ。㊄よく。慾望。「行—」。㊅まごころ。誠意。㊆まこと。事實。㊇ことわり。條理。㊈おもむき。狀況。㊉あぢはひ。趣致。⑪なさけ。情愛。「—のある人」。——をうる 遊女又は藝妓などが、金錢のために客の意に從ひて體をまかす。

(しやう[上](名) ㊀かみ。うへ。㊁天子を稱し奉る語。しやう。「主—」。

(じ-やう[滋養](名) 身體のやしなひとなること。「—物」。

(じ-やう[時樣](名) はやりのかた。

(しやう-あい[情愛](名) なさけ。いつくしみ。「親子の—」。

(しやう-あく[掌握](名) 手に握(ニギ)ること。所領すること。「天下を—す」。

(しやう-あひ[性合](名) ㊀せいしつ。たち。㊁互の性の相合ふこと。㊂貨幣にて、純金又は純銀と混合物との割合。

(しやう-アン[上餡](名) 上等の餡。精製の餡。

(しやう-い[傷痍](名) きず。てきず。

(しやう-い[上意](名) かみのこゝろ。きみのおぼしめし。

(しやう-い[攘夷](名) 外夷を追ひはらひて國内に入れざること、外國との交通を謝絶すること。

(しやう-い[情意](名) 情と意と。又、こゝろ。

(しやう-い[淨衣](名) 「しやうえ」に同じ。

(しやう-いう[獎誘](名) すゝめさそふこと。

(しやう-いう[醬油](名) 「しやうゆ」に同じ。

(しやう-いう[倡優](名) やくしや。げいにん。

(しやう-いう[情由](名) ことわけ。

(しやう-いう-せい[上遊星](名) 【天】火星・木星・土星・天王星・海王星の稱。

(しやう-いふ[城邑](名) 人家多く集まり人民多く住む地。まち。

(しやう-いふ[讓揖](名) 人に先をゆづりて禮儀を致すこと。又、人に對して敬意を表する禮儀。

(しやう-うん[商運](名) 商賈上の運命。

(しやう-うん[昌運](名) さかえて運よきこと。

(しやう-え[淨衣](名) 白き狩衣(カリギヌ)、古昔、神事又は祭事の禮服に着用したるもの。(明衣、祭服)。

(しやう-えい[唱詠](名) 詩歌を吟ずること。

(しやう-えい[觴詠](名) 酒を飲みながら詩歌をつくること。

(しやう-えい[障翳](名) ㊀さゝへかざすもの。㊁かげ。くもり。

(しやう-えき-まく[晶液膜](名) 眼球の膜。

しやう-え-の-はかま[淨衣袴](名) 白布にて仕立たる袴。

(しやう-えん[情緣](名) 男女のなからひ。男女のちぎり。

(しやう-えんし[生臙脂](名) 支那より舶來する染料、花沒藥(ハナツヤクモ)の汁を綿(ワタ)に染めて乾かしたるもの、色赤し、これを湯にひたし其汁をしぼりて使用す。(胡臙、脂綿)。

(しやう-か[商家](名) あきんどの家、あきんどの店。あきうどや。(商賈)。

(しやう-か[唱歌](名) 音樂に合はせて歌をうたふこと。又、其歌。

(しやう-か[娼家](名) ぢよらうや。遊女屋(靑樓、妓樓)。

(しやう-か[莊家](名) ゐなかや。

(しやう-か[上下](名) かみとしも。しやうげ。

(しやう-か[床下](名) ゆかした。

(しやう-か[床架](名) ゆかだな。

(しやう-が[生薑](名) 【植】蘘荷科に屬する栽培草本、莖は劍狀をなし、花は密集して多少毬果狀の花穗をなす、根莖は黄色にして辛味を具し、藥

用又は使用に供せらる。（生妻）。

‡**しやう-か**［唱歌］（名）「しやうか」に同じ。

（**しやう-か**［城下］（名）㊀城壁の下。城壁の外。㊁君主の居城ある町。

（**しやう-か**［情歌］（名）戀情のほどを述(ノ)べたる歌。

（**しやう-が**［嫦娥］（名）（嫦娥といふ婦人が、西王母の不死の藥を竊(ヌス)み、奔りて月中に入れりといふ故事に出づ）月の異稱。

（**しやう-かい**［詳解］（名）つまびらかなるときあかし。

（**しやう-かい**［商界］（名）商業の社會。商人の仲間。

（**しやう-かい**［性戒］（名）【佛】在家たると出家たるとを問はず、何人にてもこれを犯(オカ)さば罪となるべきもの、即ち、殺生・偸盜・邪淫・妄語をいふ。

（**しやう-がい**［生害］（名）自殺。自害。

（**しやう-がい**［生涯］（名）㊀此世に生存してある間。一生の間。終身。（畢生）。㊁一生の間の或くぎり。「公—」。

（**しやう-がい**［戕害］（名）きりころすこと。きりて人をそこなふこと。

（**しやう-がい**［傷害］（名）きずつけて人をそこなふこと。

（**しやう-がい**［障碍］（名）さはり。さまたげ。（邪礙）。——**ぶつ**［障碍物］（名）㊀障害となるもの。じやまもの。「—飛越」。㊁「ふくばうぎよ」（副防禦）に同じ。

（**しやう-かい**［上界］（名）天上界。げかいの對。

（**しやう-かい**［淨戒］（名）佛法のいましめ即ち五戒・十戒の類。

（**しやう-かい**［淨界］（名）淸淨なる地域、即ち寺院又は靈地などの稱。

（**しやう-かう**［詳講］（名）つまびらかなる講義。

（**しやう-かう**［商較］（名）はかりくらぶること。

（**しやう-かう**［將校］（名）㊀（校はしきりの義、もと支那にて將たるものはしきりの中に居りて號令せしよりいふ）士卒の引率指揮をつかさどるもの。㊁陸海軍にて、少尉以上の武官の總稱。

（**しやう-がう**［商號］（名）商人が營業上に於て使用する名稱、即ち屋號の類。

（**しやう-かう**［情交］（名）㊀したしみ。まじはり。㊁男女の戀愛。男女のなからひ。㊂男女が肉體上の交りはなさゞれど、互に精神上に於て相許して夫婦のちぎりをなすこと。

（**しやう-かう**［常香］（名）佛前に絶(タ)えず供ふる香。

（**しやう-がう**［城壕］（名）城壁の下にあるほり。しろのほり。

（**しやう-かう-せいと**［將校生徒］（名）將校となるべき教育を受くる生徒、即ち士官學校及兵學校の生徒の類。

（**しやう-かう-ていさつ**［將校偵察］（名）將校が部下を引率してなす偵察。

（**しやう-かう-ばん**［常香盤］（名）常香を焚(タ)く香爐。

（**しやう-かう-ゐ**［商行爲］（名）【法】營利の目的を以て物品の運轉を媒介するを、分つて絶對的營業的附屬的の三となす、絶對的とは、商人たると非商人たるとを問はざる行爲をいふ、例へば取引所に於てする取引又は手形に關する行爲の如きもの、營業的とは、營業として多少繼續して同一の事をなす行爲をいふ、例へば運送に關する行爲又は請負に關する行爲の如きもの、附屬的とは、商人が其營業のためにする行爲、例へば營業の資本を借入るゝが如きもの。

（**しやう-がく**［正覺］（名）【佛】妄惑を斷絶して佛果を成就すること。たゞしきさとり。

（**しやう-かく**［上格］（名）たかき格式。

（**しやう-かく**［常格］（名）つねの格式。

（**しやう-がく**［常額］（名）定まりたる高。

（**しやう-がく-ばう**［正覺坊］（名）㊀【動】「うみがめ」の異稱。㊁多く酒を飲む者にいふ語。

しやう-が-づけ［生薑漬］（名）一種の菓子、生薑を薄く切りて砂糖につけたるもの。

（**しやう-か-どう**［上下動］（名）【地】地盤の上下に震動する地震。

しやう-か-の-ちかひ［城下盟］（名）敵國の首府に攻め入りて、降服の盟をなさしむること。

（**しやう-がふ**［上合］（名）【天】遊星又は衞星が、太陽と同一方向に來りて太陽より遠きにあるときの稱、內遊星には上合に對して下合あれど、外遊星には上合のみあり。

しやう-が-ゆ［生薑湯］（名）生薑の根莖をすり碎(クダ)きて、これに熱湯を注(ソソ)ぎたるもの。

（**しやう-かん**［傷寒］（名）烈(ハゲ)しき熱病、即ち今の「チフス」の類。

（**しやう-かん**［賞鑑］（名）書畫又は骨董などを賞翫して鑑定すること。——**か**［賞鑑家］（名）賞鑑を好む人。又、賞鑑に巧なる人。

（**しやう-き**［正忌］（名）祥月命日。

（**しやう-き**［祥氣］（名）めでたき氣。（瑞氣）。

（**しやう-き**［正氣］（名）つねの精神。本心。

（**しやう-き**［詳記］（名）くはしく記すこと。又、くはしき記錄。

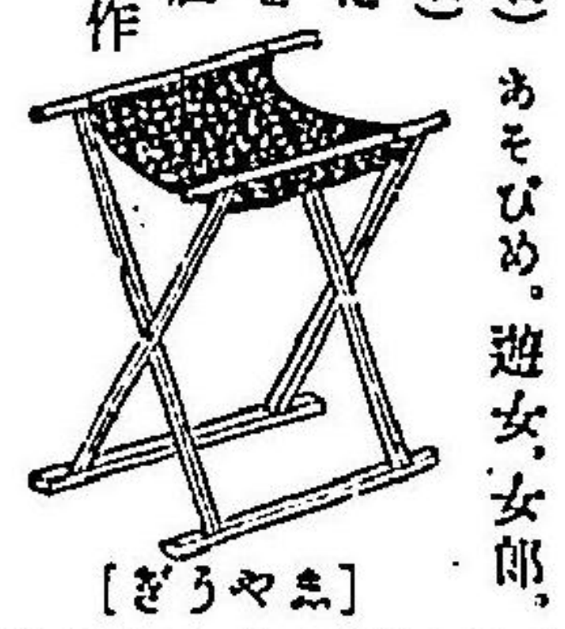
（**しやう-き**［將器］（名）大將たるべき人物。

（**しやう-き**［相器］（名）宰相たるべき人物。

（**しやう-ぎ**［商議］（名）相談すること。はなしあふこと。（評議、協議）。

（**しやう-ぎ**［娼妓］（名）あそびめ。遊女。女郎。

（**しやう-ぎ**［牀机］（名）昔時、陣屋などにて用ひたる腰掛、尻の當る所に革を張り、脚を打違(ウチチガ)へに組みて、携帶に便なるやう作る。胡床。（床机、將几）。



［しやうぎ］

（**しやう-ぎ**［將棊］（名）㊀二人にて行ふ一種の遊戲、將棊盤上に於て、互に駒を使用してなすもの、駒に王將・角行・飛車（以上一個宛）、金將・銀將・桂馬・香車（以上二個宛）、步兵九個宛二組ありて、二人各其一組を式の如く排列し、交互に其駒を鬪(カク)はす、敵の王を擒(トリコ)にするをつめるといひ、つめたる方を勝となす。（象棋）。㊁將棊の駒。——**だふし**［將棊倒］（名）將棊の駒を少しづゝ間を置きて一行に立て並(ナラ)べ、其一端を推せば次第に皆な倒るゝこと。轉じて、一方崩るゝにつれ全體の崩れたふるゝにいふ語。——**のこま**［將棊駒］（名）將棊をさすに用ふるもの、將棊（一）を見よ。——**ばん**［將棊盤］（名）將棊をさす盤、盤面上に縱橫各十行の線ありて、八十一の目をなすもの。（象棋盤）。

（**しやう-き**［上氣］（名）㊀のぼせ。逆上。㊁狂氣。發狂。

（**しやう-き**［常規］（名）つねの規則。常例。

（**しやう-ぎ**［情誼］（名）㊀人情の義理。又、交遊の情愛。（情義）。㊁したしみ。よしみ。

（**しやう-きふ**［上級］（名）上なる等級。「—官府」。「—官廳」。

（**しやう-きやう**［商況］（名）商界のありさま、商業のありさま。

（**しやう-きやう**［惝怳］（名）㊀きぬけすること、自失。㊁のぞみをうしなふこと。失意。

（**しやう-きやう**［猖狂］（名）たけりくるふこと。

（**しやう-きやう**［上卿］（名）「しやうけい」に同じ。

（**しやう-きやう**［上京］（名）みやこへのぼること。（出京）。

（**しやう-きやう**［常況］（名）つねのありさま。

（**しやう-きやう**［狀況］（名）ありさま。やうす。（情況）。

（**しやう-きやく**［償却］（名）つくのひかへすこと。返濟。

（**しやう-きやく**［正客］（名）おもなる客。

（**しやう-きやく**［上客］（名）㊀上座に就かすべき客。㊁大切なる客。優待すべき客。

（**しやう-きやく**［常客］（名）よく來る顧客。とくい。

（**しやう-きやく-し**［掌客使］（名）古昔、大臣の饗應のとき、客を迎へにゆきて、其前驅などをなしゝもの。

（**しやう-きよく**［唱曲］（名）うたふうたひもの。又、うたふふし。

（**しやう-ぎ-ゐん**［商議員］（名）或事を商議するために設置する委員。

（**しやう-ぎ-ゐん**［常議員］（名）常に議員として設けおかるゝもの。

（**しやう-きん**［償金］（名）損害の賠償として支拂ふ金。つぐなひきん。

（**しやう-きん**［賞金］（名）賞與として渡す金。

（**しやう-きん**［正金］（名）㊀金銀貨幣。紙幣の對。㊁現金。目錄などの對。——**ぎんかう**［正金銀行］（名）普通銀行の營業外に、特に外國爲替・外國荷爲替及貨幣の交換等を營業とし、專ら正金の取引をなす銀行、外國貿易上に於ける重要の機關にして、現時本店は橫濱に設置せられ、支店又は出張所は內外國に於て貿易上要用なる地に、設置せらる。

（**しやう-く**［章句］（名）文章の句。又、章と句と。

（**しやう-くわ**［紫陽花］（名）【植】「あぢさゐ」に同じ。

（**しやう-くわ**［漿果］（名）【植】多肉にして漿質なる果實、葡萄・柿の類の果實これなり。

（**しやう-くわ**［唱和］（名）㊀うたをうたひはじむるとこれに和してうたふこと。㊁はじめに詩歌をつくるとこれに和して詩歌をつくること。

（**しやう-くわ**［情火］（名）感情の起りあがるさまを火にたとへていふ語。

（**しやう-くわい**［商會］（名）商業のために結べる組合。（商社）。

（**しやう-くわい**［情懷］（名）おもひ。こゝろ。

（**しやう-くわい**［城外］（名）城のそと。

（**しやう-くわう**［上皇］（名）天皇の御讓位あらせられたる後の稱。

（**しやう-くわう**［城隍］（名）しろのほり。

（**しやう-くわく**［城郭］（名）㊀城のくるわ。㊁しろ。とりで。㊂しきり。へだて。「人に接するに—を設けず」。

‡**しやう-ぐわち**［正月］（名）「しやうぐわつ」の轉。「ころは、—三ぐわち、四五月」。

（**しやう-ぐわつ**［正月］（名）㊀陰曆にて、年の第一月。㊁正月は喜ばしく樂しきより、喜ばしく樂しき場合にいふ語。「目の—」。

（**しやう-くわん**［莊官］（名）㊀莊司。㊁莊屋。

（**しやう-くわん**［將官］（名）陸海軍武官の大

將・中將・少將の稱。

(しやう-くわん)【奬勸】(名) すゝめはげますこと。すゝむること。

(しやう-くわん)【掌管】(名) つかさどること。

(しやう-くわん)【商館】(名) 商人の營業する家。特に、外國商人の營業する家。「横濱英國—」。

(しやう-くわん)【娼館】(名) ぢよらうや。遊女屋。

(しやう-くわん)【償還】(名) ㊀つくのひかへすこと。あがなひかへすこと。㊁返濟すること。かへすこと。

(しやう-ぐわん)【賞翫】(名) ㊀めでてもてあそぶこと。もてはやすこと。㊁【哲】美を知覺してこれを考察すること。

(しやう-くわん)【政官】(名) 太政官の官吏。

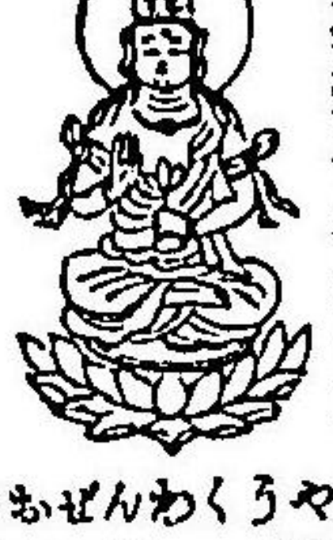
(じやう-くわん)【上浣】(名) 月の上旬。(上澣)。

(じやう-くわん)【上官】(名) 上級の官。うはやく。「—に抵抗す」。

(じやう-ぐわん)【情願】(名) 情實を陳(の)べてねがふこと。たんぐわん。(請願)。

(しやうくわん-ききん)【償還基金】(名) 公債の償還にあておきて、他に流用せざる基金。

(しやうくわんぜおん)【聖觀世音】(名)【佛】左手に未敷の蓮華を把(と)り、一切衆生の妙法蓮華の未敷なるを敷(ひら)かしめんとの意を表したる像の觀音。


[しやうくわんぜおん]

(しやうくわんしふ)【商慣習】(名) 商業上のならはし。商人社會のしきたり。

(しやう-ぐん)【將軍】(名) ㊀一軍の指揮統率をつかさどる人。軍の大將。㊁征夷大將軍又は鎭守府將軍の略言。㊂將官の稱。「山地—」。—け【將軍家】(名) 國政をあづかる征夷大將軍の稱。

(しやうくん-きよく)【賞勳局】(名) 内閣に屬し、勳位・勳章・記章・褒章・其他の賞件に關する事務及外國の勳章・記章の受領及佩用に關する事項等を掌る一局、總裁及議定官等を置く。

(しやう-け)【生氣】(名) 陰陽家にて、十二支を十二箇月に配し、正月を子(ね)とし順次、十二月に至り、これを八卦の方位に當て、其人の其年に吉凶なる方角を指し、又、これに關して吉なる方向に適應したる衣の色などを定むること。「—の色」。

(しやう-げ)【障礙】(名) さゝはり。さはり。(障碍)。

(じやう-げ)【上下】(名) ㊀かみとしも。うへとしたと。㊁のぼりくだり。あがりおり。㊂往きと返りと。「—人力車」。㊃かみしも。

(じやう-けい)【上卿】(名) ㊀古昔、禁中の公事のとき、大臣又は大中納言等が臨時に奉行をつとめしときの名目。又、其日の議事の頭となる公卿。㊁記錄所の長官。㊂上位にある卿。

(しやう-けい)【商計】(名) ㊀はかること。㊁商業上のてだて。

(しやう-けい)【昌慶】(名) はえあること。めでたきこと。

(しやう-けい)【晶形】(名) 結晶したるかたち。

(しやう-けい)【象形】(名) 物のかたち。物のありさま。—もじ【象形文字】(名)「しやうけいもんじ」に同じ。—もんじ【象形文字】(名) ものゝかたちを描寫して成立したる文字、漢字の大部分は殆どこれに屬す、例へば日月の二字の原形は⊙☽にして、⊙は日の形象を☽は月の形象を描寫したるものなり。

(じやう-けい)【上計】(名) よきはかりごと。すぐれたるはかりごと。

(じやう-けい)【情景】(名) ㊀情と景と。「—兼至」。㊁ありさま。やうす。㊂感じたるありさま。

(しやう-げう)【聖教】(名) たふとく善(ヨキ)き敎、即ち佛敎の稱。

(しやう-けつ)【猖獗】(名) たけくするどきこと。わるづよきこと。

(じやう-けつ)【淨潔】(名) きよきこと。いさぎよきこと。

(じやう-けつ)【城闕】(名) 宮城。皇居。

(しやう-げふ)【商業】(名) 經濟上にては、貨物の轉換を媒介し又はこれを補助するによりて利益を營む業務、法律上にては、商行爲の業務。あきなひのわざ。—がくかう【商業學校】(名) 實業學校の一、商業に從事せんとするもの又は簡易なる商業敎育の敎員たらんとするものに須要なる學科を敎授する所。—ぎんかう【商業銀行】(名) 一に普通銀行ともいふ、短期の信用の媒介をなし、割引・貸付・預金・爲替等の業務を營む銀行。—くみあひ【商業組合】(名) 貨物の供給又は生産の獨占等を目的として組織したる商人の團體。—くわいぎしよ【商業會議所】(名) 農商務大臣の認許によりて設立し、商業會議所議員を以て組織する商業者の公共團體、其設置せられたる地方の商工業一般の利を圖り、又、商工業に關し、官廳に對して其意見を報告し、經濟上の行政を補助する機關なり。—じだい【商業時代】(名)【經】社會が農業時代より進歩して、商業ますます盛大となり、分業の法漸く行はれ、手工業は重要なる地位を占め、人々各其長ずる所を生産し交換し、遂に經濟的階級をなし、海岸又は河川に沿(ソ)ひて繁盛なる都會を起し、鑛山は採掘せられ、貨幣の使用始めて普及し、國民の經濟の活動が有機的となれる時代。—しようけん【商業證

券】(名) 商業上の取引に使用する證券、即ち、株券・保險證書其他各種の手形等これなり。—しようにん【商業使用人】(名)【法】商人に代はりて其營業に關する法律行爲をなすがために傭(やと)はれたるもの、即ち支配人・番頭・手代等これなり。—ちやうぼ【商業帳簿】(名)【法】商法の規定により、商人が其財産の状況を明瞭ならしむるために、作成せざるべからざる帳簿、現時の規定にては日記帳・財産目録・貸借對照表の三種なり。—ちり【商業地理】(名) 貨物の製造・産出・分配・交換其他内外の運輸交通等の状態に關する地理。—とうき【商業登記】(名)【法】商人が法律上の關係其他變更・廢止等を公示し、世間公衆をしてこれを知らしむるための制度、當人の營業所在地の區裁判所に備へ置ける商業登記簿に登記してこれをなす。

(しやう-けん)【商權】(名) 商業上の勢力。

廿**(しやう-げん)**【將監】(名) 古昔、近衞府の判官。

(しやう-げん)【昌言】(名) よきことば。

(しやう-げん)【詳言】(名) つまびらかにいふこと。

(しやう-げん)【彰顯】(名) あきらかにあらはるゝこと。又、あきらかにあらはすこと。

(しやう-げん)【莊嚴】(名)「さうごん」に同じ。

(しやう-げん)【象限】(名)【數】圓の四分の一の稱、直線一點の周圍に廻轉するとき、首線より九十度までを第一象限といひ、九十度より百八十度までを第二象限といひ、百八十度より二百七十度までを第三象限といひ、二百七十度より三百六十度までを第四象限といふ。

(じやう-けん)【上件】(名) 前述の事柄。かみのくだり。「すべて—の如し」。

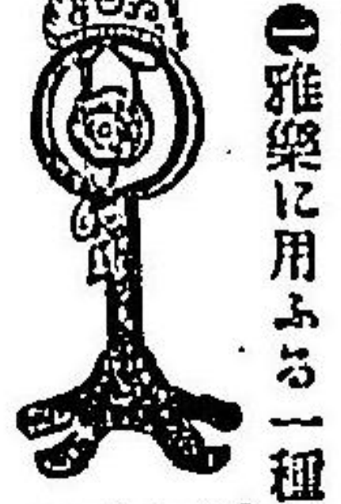
(じやう-げん)【上元】(名) 陰暦正月十五日の稱、昔時、疫病除のまじなひとて、當日亥(ゐ)の刻に、赤小豆の粥を食ひたり。

(じやう-げん)【上弦】(名)【天】新月より滿月に至る間に、太陽よりの角距離九十度となりたるときの太陰の稱、太陰の半面見え、上方に其直徑あるが故に此名あり、陰暦毎月七日八日の頃なり。

(じやう-げん)【狀元】(名) 首席にて進士の試驗に及第したるもの。

(しやう-げんぎ)【象限儀】(名)【天】角度を測る器械、圓周の四分の一より成る。

(しやう-こ)【鉦鼓】(名) ㊀雅樂に用ふる一種の樂器、多くからかねにて作り、形圓くして皿に似る、物に懸けて扣(たゝ)く。㊁かねとたいこと。


[しやうこ(一)]

(しやう-こ)【商賈】(名) あきびと。あきうど。あきんど。

(しやう-こ)【尚古】(名) ㊀むかし、いにしへ。㊁むかしの文物をたふとぶこと。

(しやう-ご)【正午】(名) 太陽が子午線を經過する時刻。ひるなか。まひる。

(じやう-こ)【上古】(名) ㊀おほむかし。かみつよ。たいこ。「—の風俗」。(上世)。㊁我國にては、神武天皇より大化新政の前頃までの稱。西洋にては、有史以後より羅馬の東西分裂頃までの稱。

(じやう-ご)【漏斗】(名) 金屬又は木などにて作り、上開き下細くして孔通り、その形朝顏の花に似たるもの、徳利などの口に嵌(は)めて、酒水などを中へ注(ツ)ぎ入るゝに用ふ。

(じやう-ご)【上戸】(名) 酒を多く飲む人、酒量の多き人。げこの對。

(しやう-こう)【相公】(名) 宰相の敬稱。

(しやう-こう)【彰功】(名) 功を世にあらはすこと。

(しやう-こう)【商工】(名) あきうどと職人と。又商業と工業と。—きよく【商工局】(名) 農商務大臣の統轄の下に屬し、其意思を受けて、商事・工業及度量衡に關する事務を取扱ふ農商務省の一局。

(しやうこう-げふ)【商工業】(名) 商業と工業と。—じだい【商工業時代】(名)【經】商業時代と工業時代とを合せての稱。

(しやうこう-ねつ)【猩紅熱＝Scarlet fever】(名)「マラリヤ」性の一種の熱病、體溫烈(はげ)しく昇り、身體の各所に赤色の發疹を生ず。

(しやう-こく)【相國】(名) 宰相の一名。

(しやう-こく)【生國】(名) 生れたる本國。

(じやう-こく)【上國】(名) かた田舍より都の近方をさしていふ語。

(じやう-こく)【上刻】(名) 刻の條を見よ。

(じやう-こく)【讓國】(名) くにゆづり。

(じやう-こく)【上告】(名) ㊀上に申立つること。㊁【法】第二審の判決(第一審が區裁判所ならば地方裁判所の判決、第一審が地方裁判所ならば控訴院の判決)に對し、法律の違背を理由として、其判決の破棄又は變更を上告裁判所に申立つること。—きかん【上告期間】(名) 上告の有効なる期間、刑事訴訟にては、判決の言渡ありたる日より三日間とし、民事訴訟にては、判決の送達ありたる日より一個月間とす。—さいばんしよ【上告裁判所】(名)【法】上告を審判する裁判所の稱、第一審の裁判所が區裁判所なる上告にては控訴院をいひ、第一審の裁判所が地方裁判所なる上告にては大審

院をいふ。——**しん**[上告審](名) 上告裁判所に於ける上告の審理。

(**しやう-ご-ぐわつ**[正五九月](名) 正月と五月と九月との稱、古來傳へてめでたき月といふ。

(**しやう-こ-し**[上古史](名) 上古の歴史。

(**しやう-こ-しゆぎ**[尚古主義=Classicism](名) 古代の文物を模範標準とする主義。

(**しやう-こり**[性懲](名) 心の底より懲(コ)りたると、眞にこりたると。——**もなく**[性懲無] こりずまに。こりずに。

(**しやう-こん**[傷痕](名) きずあと。

(**しやう-こん**[上根](名) 根機のすぐれまさりたると、性質のまさりたると。

(**しやう-こん**[上紺](名) 上等のこん色。

(**しやう-ざ**[上座](名) かみざ。かみくら。

(**しやう-さい**[詳細](名) くはしく、こまかきと、つぶさ。委細。

(**しやう-さい**[上裁](名) かみの御裁斷。

(**しやう-さい**[城塞](名) しろ、としろと。しろとりでと。(城砦)。

(**しやう-ざい**[淨財](名) 寺院などに寄附したる金錢。又、慈善のために義捐したる金錢。

(**しやう-さう**[將曹](名) 近衞府の主典(サクワン)。

(**しやう-さう**[章草](名) 草書の一體、後漢の章帝の創始せしものといふ。

(**しやう-さう**[傷創](名) きず。けが。

(**しやう-さう**[傷愴](名) かなしみいたむと。

(**しやう-さう**[情操](名) 【心】最も複雜なる感情にして、其發作のおもに精神に關するもの、即ち、眞理をたふとび美を愛するが如き感情をいふ。

(**しやう-さく**[匠作](名) 修理職の唐名。

(**しやう-さく**[上作](名) ㊀好き出來。㊁作物のみのりゆたかなると。ほうねん。

(**しやう-さく**[上策](名) 最もよきはかりごと。

しやう-さし[狀差](名) 書狀を差し置く具、てがみばさみ。(挿狀函)。

(**しやう-ざ-せき**[上座石](名) 梁山に據(ス)うるひらたくしてひろき石。

(**しやう-さつ**[詳察](名) つまびらかにみあきらむると。

しやう-さま[上樣](名) 勘定書・領收書などに客の姓名の不明なるときに用ふる充名。

(**しやう-さん**[賞讚](名) ほむると、もてはやすと。

(**しやう-し**[正士](名) 【佛】「ボサツ」に同じ。

(**しやう-し**[尚齒](名) 齡の高きを尚ぶと。老年を尊敬すると。

(**しやう-し**[賞詞](名) ほむることば。ほめことば。

(**しやう-し**[賞賜](名) ほめて賜はると。又、其品。

(**しやう-し**[尚子](名) 長子。

(**しやう-し**[生死](名) ㊀いくると死ぬると。又、いくるか死ぬるか。㊁【佛】生・病・老・死の終始の稱、これを分段生死と變易生死とに分つ、前者は、六道の衆生が、其業果により身壽に長短壽夭ありて生死に流轉するをいひ、後者は菩薩が分段生死を離れたれど、尚は迷悟の漸次推移するをいふ。

(**しやう-し**[殤死](名) わかじに。はやじに。

(**しやう-し**[將指](名) なかゆび。

(**しやう-し**[正子](名) 【天】太陽が地平線下の最下點を通過する時刻。まよなか。

(**しやう-じ**[障子](名) 室內の隔(シキリ)に立つるもの、種類多し、現時はおもに、あかり障子の稱にいふ。(莞隔)。

┼**しやう-じ**[莊司](名) 古昔、莊園の所有主の命をうけて、其莊園の事を掌りし者。

(**しやう-じ**[尚侍](名) 宮中の女官。ないしのかみ。

(**しやう-じ**[掌侍](名) 宮中の女官。ないしのじよう。

(**しやう-じ**[床子](名) しやうぎ。イス。

(**しやう-じ**[生死](名) 「しやうし」に同じ。

(**しやう-じ**[賞辭](名) ほめことば。

(**しやう-じ**[商事](名) 商行爲に屬する事項。「―契約」。

(**しやう-じ**[上司](名) 上級の官廳、又、上位の官吏。

(**しやう-じ**[上梓](名) (もと版木は、おもに梓(アヅサ)を材とせしよりいふ)文書を版木にきざむと。又、文書を出版すると。

(**しやう-し**[上使](名) かみよりの使者。

(**しやう-し**[情史](名) 情愛に關したる事の記錄。

(**しやう-し**[情思](名) ㊀こゝろもち。おもひ、㊁こひのこゝろ。情愛のおもひ。

(**しやう-し**[情死](名) しんぢゆう。あひたいじに。

(**しやう-し**[上巳](名) 五節句の一、陰曆三月三日の稱、おもに女兒の祝ふものにして、雛(ヒナ)をかざり、これに白酒・桃花・草餅などを供して雛遊をす、古昔には、曲水宴などの公事もありたり。じやうみ。ちようさん。ひなのせっく。

(**しやう-し**[城址](名) しろあと、(城跡)。

(**しやう-し**[城市](名) しろうち。まち。

(**しやう-し**[狀師](名) 他人の訴訟を代理して取扱ふを業とするもの。又、辯護士の異稱。

(**しやう-じ**[情事](名) 男女間の愛情に關する事。

(**しやう-じ**[常事](名) 普通の事。不要なる事。

つねの事。

(**しやう-じ**[常時](名) つね、ふだん、へいぜい。

(**しやう-しう**[商秋](名) (秋)の異稱。

(**しやう-しき**[常式](名) つねのしかた、つねのおきて。

(**しやう-しき**[常識=Common sense](名) 健全なる普通一般の理解又は道義心、常規にはづれず時代に適應したる識見又は思想。

(**しやう-じ-がみ**[障子紙](名) あかり障子に張る用紙。

(**しやう-し-くわい**[尚齒會](名) 高年の人の寄り集まる雅會、齡の高きを上座とす。しやうしゑ。

(**しやう-じ-くわいしや**[商事會社](名)【法】商行爲を業務とする目的を以て設立したる社團法人、即ち、合名・合資・株式及株式合資の會社の總稱。

(**しやう-じ-くわん**[掌璽官](名) 昔時、天子の御印を掌りし官職、即ち今の內大臣。

(**しやう-じ-けいやく**[商事契約](名)【法】商行爲の契約。

しやう-しこ[上鉋](名) 仕上に用ふる鉋(カンナ)。

しやう-じ-ごし[障子越](名) 障子のこなたよりかなたに打越して事をなすと。

(**しやう-じせい-たい**[常磁性體](名)【理】磁石の附近に鐵片を持ち來るとき、感應によりて、鐵片の磁石に向へる端に異名の極生じ反對の側に同名の極生じて、磁石に牽引せらるゝをいふ。

(**しやう-じ-ぢやうや**[生死長夜](名)【佛】人世を長き夜にたとへいふ語。

(**しやう-しつ**[詳悉](名) つまびらか、ゐさい。

(**しやう-じつ**[情實](名) ㊀實際のわけがら。まことの事實。㊁人情上斷然たる處置をなしかぬることがら。私情のからまりたる事實。

(**しやう-じつ**[上日](名) 「ぐわんじつ」(元日)に同じ。

(**しやう-じつ**[常日](名) へいぜい。ふだん。(平生)。

(**しやう-じつ**[成實](名) 【佛】「じやうじつしゆう」の略言。——**しゆう**[成實宗](名) 【佛】佛教の一派、訶梨跋摩の成實論を所依とす、四諦眞實の正理を顯(ア)はし、人法二空の義を成立するを以て旨とす、南都の僧道昭といふもの敕命を受けて入唐し、長安にて玄奘三藏より傳授をうけ、歸りてこれを傳へたるもの。

(**しやう-じ-はん**[常事犯](名) 國事犯以外の犯罪の總稱。

(**しやう-しふ**[常習](名) つねのならはし、つねのならひ。

(**しやう-しや**[商社](名) 商業の組合、商會。

(**しやう-しや**[廠舍](名) こや。かりや。

(**しやう-しや**[盛者](名) さかんなるもの。「―必衰」。

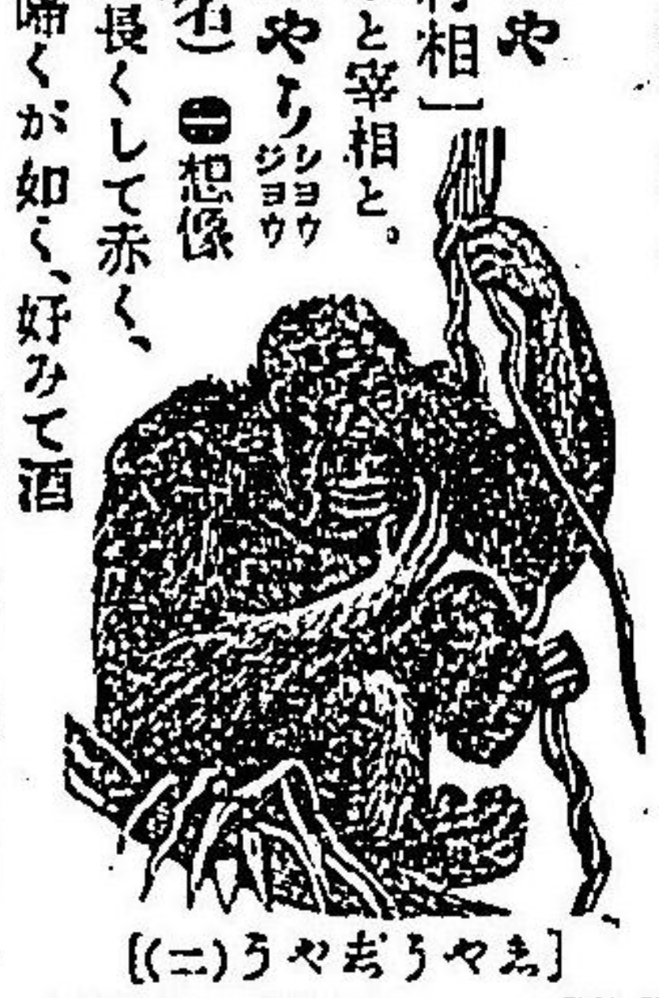
(**しやう-じや**[生者](名) 生ある者。生じたる者。「―必滅」。

(**しやう-じや**[精舍](名) (精練行者の舍の意) 寺院の異稱。「祇園―」。

(**しやう-じや**[聖者](名) 「しやうにん」(聖人)に同じ。

(**しやう-しや**[淨寫](名) きれいにうつしかふると。

(**しやう-しやう**[將相](名) 將軍と宰相と。



〔しやうじやう（二）〕

(**しやう-じやう**[猩猩](名) ㊀想像上の獸、髮長くして赤く、聲小兒の啼くが如く、好みて酒を飲むといふ。㊁【動】猿猴類に屬する獸、「スマトラ」及「ボルネオ」等の諸島に產す、口闊くして突き出て、身長四尺許、赤褐色にして、性質緩慢なり。㊂【動】「さし」の一名。㊃好く酒を飲む人の稱。

(**しやう-じやう**[清淨](名) ㊀きよくしてよごれなきと。いさぎよくしてけがれなきと。㊁煩惱なきと、私慾なきと、罪惡なきと。㊂【佛】人我の執を脫したると。

(**しやう-じやう**[上聲](名) 漢字の四聲の一、董・腫・講・紙・尾・語・麌・薺・蟹・賄・軫・吻・阮・旱・潸・銑・篠・巧・晧・哿・馬・養・梗・迥・有・寑・感・琰・豏の二十九に分つ、これに屬する字はすべて仄字なり。

(**しやう-じやう**[城將](名) 城を守る大將。

(**しやう-じやう**[上將](名) 上級の將軍。

(**しやう-じやう**[穰穰](名、副) ㊀みのりのゆたかなるさまにいふ語。㊁數多きさまにいふ語。

(**しやう-じやう**[上上](名) 此上もなくよきと。「―吉日」。

(**しやう-じやう**[常狀](名) つねのさま。さだまりたるさま。

(**しやう-じやう**[常情](名) 人生普通の情。

(**しやう-じやう**[情狀](名) ㊀ありさま、わけがら。㊁情實。

しやうじやう-がに[猩猩蟹](名) 【動】「あさひがに」の一名。

しやうじやう-ぎく[猩猩菊](名) 【植】菊の一種、花紅色にして瓣頭尖(トガ)る。

(**しやうじやう-しやくりやう**[情狀酌量](名) 裁判官が、犯罪人の情狀の憐むべき點をくみて、刑罰を減等すると、即ち、裁判上の減刑なり。

(**しやうじやう-しん**[清淨心](名) 妄惑を斷じ去りて明潔なる眞心。「山色豈無―」。

⌒じやう-しやう-じん[常精進](名) 常に精進すること。

⌒しやう-じやう-ぜ-ぜ[生生世世](名、副) 現世と後身との義にいふ語。生きかはり死にかはる義にいふ語。

しやう-じやう-のり[猩猩海苔](名) 紅色に染めたるうりうと。

⌒しやう-しやう-は[尚商派](名)【經】經濟の政策上、商業を主とする學派。

しやう-じやう-ばかま[猩猩袴](名)【植】百合(リユ)科に屬する草、葉は蘭に似て短く、花は櫻草に似て小さし。

⌒しやう-じやう-ひ[猩猩緋](名) 極めて鮮(アザヤ)かなる紅色、きらめくが如き鮮紅色。「—の陣羽織」。

⌒しやう-じや-ひっ-すゐ[盛者必衰](名)【佛】盛んなる者は必ず衰ふる時ありといふこと。

⌒しやう-じや-ひつ-めつ[生者必滅](名)【佛】生ある者は必ず滅ぶといふこと。

⌒じやう-しゆ[城主](名) 城の持ちぬし。城將。

⌒じやう-しゆ[城守](名) ㊀城をまもる人。㊁城を持てる大名。

⌒じやう-しゆ[上酒](名) よきさけ。上等のさけ。

⌒じやう-しゆ[情趣](名) おもむき。あぢはひ。

⌒じやう-じゆ[成就](名) しあがること。できあがること。なりとゝのふこと。(成功)。

⌒しやう-じゆ[聖衆](名)【佛】佛教に歸依する人々。

⌒じやう-じゆん[上旬](名) 月の十日より以前の稱。

⌒しやう-しよ[象胥](名) つうべん。つうじ。

⌒しやう-しよ[尚書](名) 詔勅を施行することを掌る支那の官名。

⌒しやう-じよ[庠序](名) まなびどころ。學校。

⌒じやう-しよ[上書](名) 意見を記して上に奉る文。(上疏)。

⌒じやう-しよ[淨書](名) 淸書。淨寫。

⌒じやう-しよ[情緒](名) ㊀思ひにつれて起る情。おもひ。「—纏綿」。㊁【心】稍や複雜なる感情にして、主に生理上に起因するもの。

⌒じやう-しよう[上衝](名) ㊀のぼせあがること。㊁つきあがること。

⌒じやう-じよう[上乘](名) 最もすぐれてあること。第一なること。

⌒じやう-しよく[常食](名) ㊀一定の食事。㊁つねの食物。

⌒じやう-しよく[常職](名) ㊀一定の職業。㊁つねの職業。

⌒しやう-しん[正眞](名) いつはりなきこと。まこと。

⌒しやう-しん[正身](名) まことのからだ。

⌒しやう-しん[正信](名) たゞしき信仰。

⌒しやう-しん[傷心](名) 心をいたますること。悲哀を感ずること。(傷神)。

⌒しやう-しん[詳審](名) くはしきこと。つまびらか。

⌒しやう-じん[精進](名) ㊀【佛】精神をこめて餘念を雜(マジ)へず、行を修めて退轉せざること。一心に道を修むること。㊁身を淨(キヨ)め潔齋すること。㊂肉類を食せざること。

——あげ[精進揚](名) 野菜類の揚物。

——おち[精進落](名) 精進を止めて肉食すること。

——び[精進日](名) 精進する一定の日。

——もの[精進物](名) 菜類・穀類のみの食物。肉類を雜へざる食物。

——れうり[精進料理](名) 肉類を用ひずして、おもに菜類・穀類を材料としたる料理。(精饌)。

⌒じやう-しん[上申](名) 上へ申上ぐること。

⌒じやう-じん[情人](名) 思ふ人。こひしき人。こひびと。

⌒じやう-じん[常人](名) 普通一般の人。つねのひと。なみのひと。

しやう-しん-ぼく[正眞木](名) 庭などに一つ目につきやすくたてたる大樹。

⌒じやう-しん-しよ[上申書](名) 事情を上申する文書。

しやう-す[賞](他、さ變) ほむ。たゝふ。

しやう-ず[生](自、さ變) ㊀おふ。はゆ。㊁できる。㊂うまる。

しやう-ず[生](他、さ變) ㊀そだつ。はやす。㊁でかす。㊂うむ。

しやう-ず[請](他、さ變) 請ひ招く。しやうだいす。まねく。(招待)。

十じやう-ず[上衆](名) 身分高き人。貴人。げすの對。

じやう-ず[上手](名) 巧なること。手際(テギハ)よきこと。こうしや。又、其人。——のてからみづがもる 如何に上手なりとも、萬事完全に出來かぬるにいふ。

⌒じやう-すう[常數](名) ㊀自然の運命。自然の結果。㊁規定の數量。一定のかさ。㊂【數】一定の數値、例へば $3x^2+2x+8$ に於ける 8 の如し、即ち始めの二項は x に與ふる値によりて變ずれど、8は一定して變ずることなき故にいふ。又、文字といへども一定の數値を代表するものとせば、また常數なり、例へば $3x+a$ に於ける a の如きこれなり。㊃【理】一定の狀態に於ける物質の性質に關する量を示す數、即ち比熱・比重・屈折・率等の如し。

⌒じやう-ず-ごかし(名) おためごかし。「厄介恐皆むくりこくし—」。

⌒しやう-すゐ[將帥](名) 全軍をひきゐる大將。

⌒しやう-ずゐ[祥瑞](名) めでたきさが。よろこばしきしるし。吉瑞。

⌒じやう-すゐ[上水](名) 飲料に供する水を通ずる溝。

⌒じやう-すゐ[淨水](名) てあらひみづ。

⌒しやう-せい[昌世](名) おだやかに治まる世。さかゆる御世。(昌代)。

⌒しやう-せい[昌盛](名) さかんなること。さかゆること。

⌒しやう-せい[彰旌](名) よき德行などをあまねくあらはししめすこと。

⌒しやう-せい[將星](名) 天にありて大將の象ありといふ星。——おつ[將星落](諸葛孔明が五丈原にて死歿せるときの故事に出づ)大將の死歿にいふ。

⌒しやう-ぜい[正稅](名) さだまりたる租稅。一定のねんぐ。

⌒じやう-せい[上製](名) 上等の製造。

⌒じやう-せい[上世](名) おほむかし。かみつよ。じやうだい。(上古)。

⌒じやう-せい[情勢](名) ありさま。いきほひ。「情況」。

⌒じやう-せき[上席](名) ㊀かみざ。上座。㊁等級の上なること。「—檢事」、「—判事」。

⌒しやう-せつ[詳說](名) くはしく說(ト)くこと。つまびらかに說くこと。(詳辨)。

⌒じやう-せつ[常設](名) つねに設けてあること。

⌒しやう-せん[商船](名) 商業の目的を以て航海の用に供する船舶。あきなひぶね。——がくかう[商船學校](名) 實業學校の一、船舶の航海・運用又機關に關する學術・技藝を敎授する學校。

⌒しやう-ぜん[生前](名) 死後に對して、生きて居る間の稱。せいぜん。(生時)。

⌒じやう-せん[上船](名) 船に乘ること。(乘船)。

⌒じやう-せん[上僊](名) (天に上(ノボ)りて仙人となる義)死ぬること。

⌒しやう-ぜん-げん[將然言](名)【文法】動詞・助動詞の活用の一、これに助動詞を添へて未來又は否定等を表はすもの、例へば「行かん」又は「押さず」などの「行か」「押さ」の類。

しやう-せん-の-たんざく[成選短册](名) 選定したる人の名をしるしたる短册。

⌒しやう-そ[障阻](名) さゝはり。さまたげ。邪魔。

⌒じやう-そ[上疏](名) 書狀を上(タテマツ)ること。又、上る書狀。(上書)。

⌒じやう-そ[上訴](名) ㊀上に訴(ウッタ)ふること。㊁【法】民事又は刑事の判決又は決定に對し、一定の期間内に、其取消を上級裁判所に求むる不服の訴、即ち、控訴・上告及抗告などの總稱。

⌒しやう-そう[尚崇](名) たふとびあがむること。うやまふこと。

⌒しやう-そう[將送](名) おくること。

⌒じやう-そう[上奏](名) 主上に申上ぐること。天子に奏聞すること。——あん[上奏案](名) 帝國議會などにて、上奏の意見を具して討論に付する案文。

⌒じやう-そう[上層](名) ㊀うへなるかさなり。㊁うへなる部分。うへなる階段。——しやくわい[上層社會](名) 身分高き方々。うへつがた。

⌒しやう-ぞく[裝束](名) ㊀よそほひ。みじたく。㊁衣冠。又、禮服。

⌒しやう-ぞく[戕賊](名) きりて人をそこなふこと。ころすこと。

⌒じやう-そく[上足](名) 上席の門弟。高弟。

⌒しやう-そつ[將卒](名) 將校と兵卒と。

⌒じやう-そん[讓遜](名) 自ら卑下して人にゆづること。へりくだること。

⌒しやう-たい[正體](名) ㊀まことの身。まさしき身。「幽靈の—見たり枯尾花」。(本體)。㊁正氣なるさま。本心のやうす。「酒に溺れて—無し」。

⌒しやう-だい[請待](名) 請(コ)ひて招くこと。來臨を請ふこと。

⌒しやう-だい[掌大](名) 手のひらばかりの少しのひろさ。

⌒じやう-たい[狀態](名) ありさま。やうす。

⌒じやう-たい[常態](名) つねのさま。(恒態)。

⌒じやう-だい[上代](名) おほむかし。じやうこ。じやうせい。かみつ世。

⌒じやう-だい[城代](名) ㊀昔時、主君に代りて其城を守りし人。㊁「じやうだいがらう」の略言。——がらう[城代家老](名) 昔時、城持大名の家老の中にて、大名の留守中に、城を守り、かねて一切の政事を掌りしもの。「—大石内藏助」。

⌒しやう-だい-じやう[請待狀](名) 請待せんとする人に、其旨を通ずる書狀。

しやう-たい-な-し[正體無し](くしきけれ)(形、二) ㊀分別なし。思慮なし。㊁本心なし。正氣なし。

⌒しやう-たう[正當](名) ㊀理に當ること。すぢみちに違(タガ)はぬこと。あたりまへ。たうぜん。㊁偏り飾らざること。質直なること。

⌒しやう-たう[傷悼](名) 人の死をかなしみいたむこと。

⌒しやう-だう[唱道](名) となへいふこと。廣くいひつぐこと。

(しやう-だう)[唱導](名) さきだちとなりて他をさそふこと。となへ始むること。

(しやう-だう)[聖道](名) 【佛】(い)天台及眞言の兩宗の稱。(ろ)寺の兒童の異稱。

(じやう-たう)[常套](名) つねのしかた。きまりたる範圍。

(じやう-だう)[常道](名) ㊀一定して變(カ)はらざるみち。定まりて動かぬみち。「天地の—」。㊁常に履(フ)み行ふべきみち。一般の必ず由るべきみち。「人生の—」。

(しやう-たく)[請託](名) ないないのたのみ。情實上のねがひ。せいたく。

(じやう-たつ)[上達](名) 學問又は技藝等の進歩すること。巧になること。「技藝の—」。

(しやう-たふ)[牀榻](名) ねだい。又、こしかけ。

(じやう-だま)[上玉](名) ㊀上等なるもの。㊁上等の寶玉。

(しやう-たん)[唱彈](名) 自らうたをうたひ且つ樂器をかなづること。

(しやう-たん)[賞嘆](名) 感心すること、ほむること、(頌賞)。

(じやう-だん)[上段](名) ㊀上の段、高き段。㊁かみくら。上座。㊂室內に、他より牀を一段高くしてある所。㊃劍術又は槍術にて、手を高くあげて武器を持ち身構すること。

(じやう-だん)[常談](名) ㊀當前のはなし。つねの談柄。㊁たはむれのはなし、わけもなきはなし。

(じやう-ち)[上地](名) ㊀官に上納したる土地。㊁上等の土地。

(じやう-ち)[淨地](名) 淸淨なる土地、即ち佛寺などのある地所。(聖地)。

(じやう-ち)[上智](名) 智慧のすぐれてあること。又、其人。「—と下愚とは移らず」。

(じやう-ち)[情致](名) おもむき、趣致。

(じやう-ち)[城池](名) しろのほり。

(じやう-ち)[城地](名) しろと領地と。「—を沒收す」。

(じやう-ち)[常置](名) つねに設けおくこと、組織しておくこと。

(しやう-ぢき)[正直](名) すなほにて正しきこと。根性のねぢけぬこと。かげひなたのなきこと。いつはりなきこと。「—者」。

(じやう-ちやう)[上聽](名) かみのおきゝ、しやうぶん、。

(じやう-ちやうくわん)[上長官](名) 陸海軍の佐官又は將官の稱。

(しやう-ちゆう)[撐柱](名) つっかひぼう。つっぱり。(支柱)。

(しやう-ちゆう)[掌中](名) ㊀手の中。たなごころのうち。㊁手の中にて扱はるゝこと。「—假名遣」。㊂獲得又は領有の範圍。「—に歸す」。——の-たま[掌中珠](名) (手の中にあるたまの義)最も鍾愛する子供。

(じやう-ちゆう)[城中](名) しろのなか。

(じやう-ぢゆう)[常住](名、副) ㊀つね、不斷。㊁生滅なく遷變なくつねに存在すること。——ざ-ぐわ[常住坐臥](名、副) つね、不斷。——ふだん[常住不斷](名、副) 前條に同じ。

(しやう-ぢよ)[倡女](名) うたひ女。

(しやう-ぢよ)[娼女](名) ぢよらう、遊女。

(しやう-ちよう)[象徵=Symbol](名) 其もの自身が說明を要せずして直接に或意義を發揮すること。——しゆぎ[象徵主義=Symbolism](名) 文藝にて、言語文字は思想感情の媒介物にあらずして直接に思想感情其ものなりとし、これを音樂的に排列し、以て讀者の感情を動かし、超自然又は美妙の天地に接せしめんとする主義。

(じやう-ち-ゐん)[常置員](名) 常置してある委員。

しやう-つき[祥月](名) 死者の一周忌以後の當月。「—命日」。

(しやう-てい)[祥禎](名) めでたきこと。めでたきしるし、

(しやう-でい)[障泥](名) あふり。

(じやう-てい)[上帝](名) ㊀天の主宰。てんのかみ。㊁宇宙を經營する絕對惟一にして全智全能の神。ざうぶつしや。てんてい。

(しやう-てん)[賞典](名) 褒美に賜はるもの。はうび。

(しやう-てん)[掌典](名) ㊀つかさどること。㊁式部職の職員、祭典の事を掌るもの。

(しやう-てん)[商店](名) あきなひする店。あきなひみせ、(商廛)。

(しやう-でん)[詳傳](名) つまびらかなる傳記。

(しやう-でん)[聖天](名) 【佛】歡喜天の一名。

(じやう-てん)[常典](名) きまりたるのり。

(じやう-てん)[上天](名) ㊀あめ、そら。㊁上帝。造物者。㊂四天の一、冬の天。

(じやう-でん)[上田](名) 上等の田地。

しやうでん-ぶし[正傳節](名) 舊幕の頃、一時上方に流行したる俗謠の節。

(しやうてん-ろく)[賞典祿](名) 明治維新の初め、國家に勳功ありたる公卿・大名又は士族に、從來の秩祿外に賞典として賜はりたる秩祿。

(しやう-ど)[性土](名) 【佛】法性の理に於て存する依所、一切處にあまねく局する所なく指すべき所なし、

(じやう-と)[上途](名) 出立、發足。

(じやう-と)[城都](名) みやこ、とくわい。

(じやう-ど)[壤土](名) ㊀つち。とち。㊁埴土よりは粘分少なく砂土よりは濕潤多き土壤、最も耕作に適したるもの。

(じやう-ど)[淨土](名) 【佛】(い)三毒五濁の業なき淸淨なる國土、即ち、佛の居所といふ淸淨の世界。極樂。(ろ)淨土宗の略言。

(しやう-とう)[正統](名) 正しき血統。又、正しき系統。

(しやう-どう)[章動](名) 【天】黃道軸の周圍に於ける地軸の回轉にて、太陰或は太陽の作用によりて起る變化。

(じやう-とう)[上騰](名) たちのぼること。あがること。「雲氣—」。

(じやう-とう)[上棟](名) むねあげ。

(じやう-とう)[上等](名) ㊀等級の上位なること。㊁すぐれてよきこと。(上品)。——へい[上等兵](名) 陸軍に於ける兵卒の最上級。

(じやう-とう)[常燈](名) ㊀神佛の前に常に點ずる燈火。㊁街上などに終夜點じおく燈火。——みやう[常燈明](名) 前條に同じ。

(しやう-とく)[生得](名) うまれつき。

(しやう-とく)[彰德](名) 德をいちじるしくあらはすこと。又、いちじるしくあらはれたる德。

(じやうど-しゆう)[淨土宗](名) 【佛】佛敎の一派、源空和尙が、自力の所修は聖者を待つ門にして末法に於ては難行たりとて、創始したる凡夫に適する他力行修の易行道、天台宗より出づ、无量壽經・觀无量壽經・阿彌陀經を所依として、南無阿彌陀佛の六字の名號を唱(ナ)ふるもの。

(じやうど-しんしゆう)[淨土眞宗](名) 【佛】眞宗の別稱、淨土宗より分派したればいふ。

じやうど-せんねん-しゆう[淨土專念宗](名) 【佛】淨土宗の別稱。

(じやうど-の-あるじ)[淨土主](名) 阿彌陀の稱。

(しやう-ない)[莊內](名) 領分の內。莊園の內。

(じやう-ない)[城內](名) 城の內、城中。

(しやう-なう)[樟腦](名) 樟木の碎片を水蒸氣と共に蒸溜して得たる六角形の結晶體、白色にして強き香氣を有し、防腐劑又は興奮劑等に使用せらる。——じむきよく[樟腦事務局](名) 大藏大臣の管理に屬し、樟腦及樟腦油の製造・收納・賣渡・輸出・取締等に關する事務を掌る所。——の-き[樟腦樹](名) 【植】「くすのき」(樟木)に同じ。——ゆ[樟腦油](名) 樟木を蒸溜して得たる油、特殊の香氣を有し、石鹼製造又は防臭劑に使用せらる。

(じやう-なふ)[上納](名) 官へ物を納(オサ)むること。

(しやう-にち)[正日](名) ㊀喪(モ)に當りて四十九日目。㊁一周忌の當日。㊂年々の忌日。

(しやう-にん)[上人](名) (い)【佛】智德を具し一心に佛道を行ずる人。(ろ)僧位。(法橋)。

(しやう-にん)[聖人](名) 【佛】智慧は大道に通じて究(キハ)まらず且慈悲の深大なる人の稱。

(しやう-にん)[商人](名) 商業を營むもの、商行爲を業とする者。あきびと。あきんど、商買。

(じやう-にん)[上人](名) 氣立の善き人、正直にて柔和なる人。

しやう-ね[性根](名) こんじやう。——だま[性根玉](名) 前條に同じ。

(じやう-ねい-でん)[常寧殿](名) 古昔、禁中にありし御殿の名。

(じやう-ねつ)[情熱](名) おこり荐ふ感情の勢力。

(しやう-ねん)[生年](名) よはひ、年齡。

(じやう-ねん)[情念](名) 感じて起りたる想念。

(じやう-ねん-ブツ)[常念佛](名) 絕えず念佛を唱(ナ)ふること。

(しやうのう-は)[尙農派](名) 【經】經濟の政策上農業を主本とする學派、農は天下の大本なりといふ語は、即ち其意なり。

(しやう-の-こと)[箏](名) 「さう」に同じ。

(しやう-の-ふえ)[笙](名) 「しやう」に同じ。

(しやう-はい)[賞牌](名) 賞罰の表とする記章、多くは金屬を質としてつくりたる圓形のもの。

(しやう-はい)[賞盃](名) 善行又は功勞の賞として賜はる盃。

(しやう-ばい)[商賣](名) ㊀あきなひ。うりかひ。(貿買)。㊁營業、職業。㊂藝娼妓のよすぎ。——あがり[商賣上](名) 藝娼妓のあがり。——かたき[商賣敵](名) 互に自家の商賣を盛大になさんとあらそふ同商賣のもの。職業上の競爭者。——かたぎ[商賣氣質](名) 商賣人が其商賣上より受くる特種の性質、金錢上の利害に明かなる氣習。——にん[商賣人](名) ㊀商賣に從事する人。㊁其物事を職業とする人。㊂藝妓又は娼妓の稱。——や[商賣屋](名) 商賣する家。あきうどや。

(じやう-はい)[攘排](名) おひはらふこと、はらひのくること。

(じやう-はい)[上輩](名) ㊀身分の貴き人。㊁先輩。

(しやう-はう)[詳報](名) くはしきしらせ。

(しやう-ばう)[障防](名) しきり、又、つゝみ。

(じやう-はう)[情報](名) 事情のしらせ。

(じやう-はう)[城堡](名) しろ。とりで。

(じやう-ばう)[狀貌](名) みめかたち、なり。ふり。やうす。(容貌)。

(じやう-ばう)[淨房](名) かはや。せつゐん。

(しやう-はく)[商舶](名) あきうどぶね。

(しやう-はく)（ジョウ）[上膊]（名）上肢のひぢより上の稱。——こつ[上膊骨]（名）【生】上膊を形成せる柱狀の骨、上は肩胛骨と連り、下は尺骨及び橈骨と接す。

しやう-ばこ（ジョウ）[狀箱]（名）書狀を入れて持たせやる小さき箱。

(しやう-ばつ)（ショウ）[賞罰]（名）賞と罰と。

(しやう-はふ)（ショウホウ）[商法]（名）㊀あきなひのみち。あきなひ。しやうばい。㊁【法】廣義にては、商に關する各種の法律の總稱。狹義にては、商に關する私權の關係を規定したる法律の特稱。

(しやう-はふ)（ショウホウ）[正法]（名）「しやうぼふ」に同じ。

(しやう-はふ)（ジョウホウ）[常法]（名）きまりてある法。變ざざる法。つねののり。

しやう-ハリ（ジョウ）[淨玻璃]（名）「しやうハリのかがみ」の略言。——のかがみ[淨玻璃鏡]（名）㊀【佛】地獄の閻魔の廳にありといふ鏡、これに照らせば、亡者生前の善惡の所業は其儘に映出すといふ。㊁轉じて、紛らはしくらますを能はざる眼識。

(しやう-ばり)（ジョウ）[情張]（名）強情を張ること。

(しやう-ばん)（ショウ）[相伴]（名）㊀正客に陪(ハン)り、其相手となりて、共に饗應を受くること。座に陪りて酒宴の興を助くること。又、其人。(陪食)。㊁さしたる技能又ははたらきなく、たゞ他人の側にあるがため其利益を共にすること。又、其人。——しゆう[相伴衆]（名）室町時代にありたる軍職の名、將軍御成(リオナ)の節に、其相伴をつとめしもの。——にん[相伴人]（名）相伴する人。

(しやう-ばん)（ジョウ）[城番]（名）城に在番して警固する兵士。しろのばんにん。

(しやう-び)（ショウ）[賞美]（名）ほめたゝふること。もてはやすこと。

(しやう-び)（ショウ）[薔薇]（名）【植】「いばら」に同じ。——くわ[薔薇科]（名）【植】櫻・梅・桃・枇杷等の如き多年生植物、葉は完全なる羽狀複葉にして、花冠は花瓣五合す、果實は核果なり、此科に屬する植物は美麗なる花と食用となる果實とを有するもの多し。——ゆ[薔薇油]（名）ばらの花より取りたる香油。

(しやう-ひ)（ジョウ）[常費]（名）つねの費用。

(しやう-び)（ジョウ）[常備]（名）常に備(ソナ)へ置くこと。平時にもまうけ置くこと。——ぐん[常備軍]（名）㊀常備兵を以て組織したる軍隊。㊁平時にも備へ置く軍隊。——へい[常備兵]（名）㊀前條(二)に同じ。㊁常備兵役に服する兵。——へいえき[常備兵役]（名）現役及豫備役の總稱。

(しやう-ひつ)（ショウ）[正筆]（名）眞筆。又、肉筆。

(しやう-ひやう)（ジョウヒョウ）[上平]（名）漢字の平聲を兩分したるものゝ一、これを東・冬・江・支・微・魚・虞・齊・佳・灰・眞・文・元・寒・删の十五に區別す。

(しやう-ひん)（ショウ）[商品]（名）店頭に排列し若しくは倉庫に藏置して、客の需要を待つ物品。商業の目的に提供する物品。あきなひのしな。——がく[商品學]（名）商品に關する諸種の事項に就きて研究する學。——ちんれつくわん[商品陳列館]（名）㊀農商務省商工局の管理に屬し、廣く内外の商品の見本をあつめて、これを陳列し、諸人の縱覽及參考に供する所。㊁すべて商品を陳列する所の稱。

(しやう-びん)（ショウ）（名）【動】「そに」の異稱。(四國地方の方言)。

(しやう-ひん)（ジョウ）[上賓]（名）大切にすべきお客。よきまらうど。

(しやう-ひん)（ジョウ）[上品]（名）㊀いやしからざること、けだかきこと。又、其もの。㊁できのよきこと。又、其もの。

(しやう-ふ)（ショウ）[娼婦]（名）あそびめ。女郎。娼妓。

(しやう-ふ)（ショウ）[生麩]（名）麩を製するとき、水底によどみたる粉を乾したるもの、多くは糊(ノリ)にす。(小麥粉、姫粉)。

(しやう-ぶ)（ショウ）[尚武]（名）武事を尚(タフト)ぶこと、又、軍備を盛んにすること。

(しやう-ぶ)（ショウ）[菖蒲]（名）【植】「あやめぐさ」の一名、古來、五月五日即ち端午の節句に、其葉を軒などに挿(ハサ)めば、邪氣を攘(ハラ)ふといひ傳ふ。(水劍草)。——うち[菖蒲打]（名）古昔、五月五日に、童子などが小石を投げ打ちて戲れし遊戲、いんぢうち。——がたな[菖蒲刀]（名）古昔、端午に、童子のもてあそびたる木刀、もとは菖蒲にて卷きたるを後には紙又は布にて卷く。——かたびら[菖蒲帷子]（名）古昔、五月五日に京都祇園町の遊女の着たる帷子。——がは（ガワ）[菖蒲革]（名）地を藍にし、菖蒲の花又は葉などの形を白く染め出だしたる鹿のなめしがは、山城八幡の神官が内職に染めしものなりといふ。

(しやう-ふ)（ジョウ）[城府]（名）㊀市街のかこひ。くるわ。まちなか。まち。㊁しきり。かこひ。へだて。「人に接するに——を設けず」。

(しやう-ふ)（ジョウ）[上布]（名）上等の麻布。

(しやう-ふ)（ジョウ）[情婦]（名）いろをんな。

(しやう-ふ)（ジョウ）[情夫]（名）いろをとこ。

(しやう-ぶ)（ジョウ）[上部]（名）うへの部分。うへのかた。

(しやう-ふう)（ショウ）[昌風]（名）秋の風。

(しやう-ふう)（ショウ）[正風]（名）㊀たゞしき風體。㊁俳諧にて、松尾芭蕉の創始せし流派の稱、情懷の眞面目にして用辭の滑稽的ならざるもの、談林風の對。

(しやう-ふきやう)（ジョウフキョウ）[常不輕]（名）【佛】法華經の不輕品の二十四字の偈(ゲ)を誦しつゝ、こゝかしこをあるきまはること。

(しやう-ふく)（ジョウ）[常服]（名）ふだん着る衣服。ふだんぎ。

(しやう-ふく-だう)（ショウフクドウ）[昌福堂]（名）古昔、禁中の大極殿の東南にありたる堂。

しやう-ぶくろ（ジョウ）[狀袋]（名）書狀を封入して發送する紙袋。(封筒)。

しやう-ぶ-ざけ（ショウ）[菖蒲酒]（名）五月節句に用ふる菖蒲の根を刻みて浸(ヒタ)したる酒。

しやう-ふだ（ショウ）[正札]（名）㊀品物にかけねなき正價を記してつけたる札。㊁かけねなきこと。——つき[正札附]（名）㊀正札の附きてある商品。㊁評判と相違なき物事。

しやう-ぶ-たたき（ショウ）[菖蒲叩]（名）昔時、端午に童子等が菖蒲にて太き繩を綯(ナ)ひ、往來の子供に打ちかゝりて下座せしめたる遊戲。

(しやう-ふだん)（ジョウ）[常不斷]（名、副）つね。ふだん。始終。

(しやう-ぶつ)（ショウ）[正物]（名）まさしきもの。まことのもの。ほんもの。

(しやう-ブツ)（ジョウ）[成佛]（名）㊀【佛】煩惱を解脱して佛果を得ること。㊁死ぬること。

しやう-ぶみ（ジョウ）[狀文]（名）てがみ。書狀。

しやう-ぶ-ゆ（ショウ）[菖蒲湯]（名）端午の節などに、菖蒲の葉を入れて沸(ワカ)したる風呂の湯。

(しやう-ぶん)（ショウ）[性分]（名）うまれつき。もちまへ。たち。性質。

(しやう-ぶん)（ジョウ）[上聞]（名）君主のおきき。又、君主へのきこえ。

(しやう-ぶん)（ジョウ）[上文]（名）前に陳述せる文言。

(しやう-ぶん)（ジョウ）[滋養分]（名）滋養となる成分。

しやうふん-の-と（ショウ）[嘗糞徒]（名）(唐の郭弘覇が魏元忠にこびへつらひて、其病時の糞をなめたりといふ故事に出づ)恥辱を知らぬへつらひもの。

(しやう-ふんべつ)（ジョウ）[上分別]（名）すぐれたるかんがへ。最もよき分別。

(しやう-へい)（ショウ）[昌平]（名）國運さかえて世の中の平かなること。太平。「——百年」。

(しやう-へい)（ショウ）[障蔽]（名）かこひ。おほひ。

(しやう-へい)（ジョウ）[城兵]（名）城を守る兵。

しやう-へい-がは（ショウガワ）[正平革]（名）唐草・獅子・牡丹などの模樣及正平六年六月一日といふ文字等を白くすり出し、地を赫色に染めたる革。

(しやう-へい-さう)（ジョウソウ）[常平倉]（名）古昔、民間に於ける米價の平均を得しめんがために官の設置せる倉、米價安きときは、官にて糴(カヒヨネ)してこれをこゝに藏め置き、米價高きときはこれを糶(ウリヨネ)する仕組なり。

(しやう-へい-もん)（ショウ）[昌平紋]（名）きりつけもん。

(しやう-へう)（ショウヒョウ）[商標]（名）自己の商品を表彰するため、これに附する一定の標章。商品のしるし。——とうろく[商標登錄]（名）規定に從ひて、商標の登錄を受くること、かくてこれを專用する權利を生ず。

(しやう-へう)（ジョウヒョウ）[上表]（名）表をたてまつること。又、たてまつる表。(上書)。

(しやう-へき)（ショウ）[障壁]（名）㊀しきりのかべ。かこひのかべ。㊁しきり。かこひ。

(しやう-へき)（ジョウ）[城壁]（名）しろのかべ。

(しやう-ほ)（ショウ）[商舖]（名）みせ。たな。

(しやう-ほ)（ジョウ）[讓步]（名）㊀路をゆづりて、人を先に行かすること。㊁自家の主張を曲げて、相手の意見に從ふこと。

(しやう-ほう)（ジョウ）[穰豐]（名）作物のみのりゆたかなること。豐年なること。

(しやう-ぼく)（ジョウ）[上木]（名）圖書を版木にほること。圖書を出版すること。(上梓)。

(しやう-ほくめん)（ジョウ）[上北面]（名）古昔、北面の侍(サムラヒ)となりて、院の昇殿を許されたる四位・五位の諸太夫の稱。

(しやう-ほふ)（ショウホウ）[正法]（名）㊀たゞしきみち。まことのみち。㊁たゞしきかた。たゞしき手段。——じ[正法時]（名）【佛】教法の正しき時、普通に、佛入滅後五百年間を指していふ。

(しやう-ぼふ-げんざう)（ショウボウゲンゾウ）[正法眼藏]（名）【佛】釋迦牟尼の成覺せし甚深秘密の正藏、即ち直指人心見性成佛の妙理を觀ずる深趣。

(しやう-ほん)（ショウ）[正本]（名）㊀「せいほん」に同じ。㊁演劇の臺帳。

(しやう-ぼん)（ジョウ）[上品]（名）【佛】極樂淨土の三等級の最上級、これを更に上・中・下に三區分す。

(しやう-ほんゐ)（ショウ）[飼養本位]（名）飼養する各種の家畜に就きて、それ〴〵に要する一定の滋養分の量及率。

(しやう-まい)（ショウ）[正米]（名）實際に取引する米。又、現在の米。

(しやう-み)（ショウ）[正味]（名）㊀外表を取り去りたるなかみ。内容。㊁風袋のかけめを引き去りたるなかみのかけめ。㊂まことの物事。

(しやう-み)（ショウ）[賞味]（名）賞美して味(アヂハ)ひ食ふこと。

しやう-み（ジョウ）[上巳]（名）「じやうし」に同じ。

(しやう-みつ)（ショウ）[詳密]（名）くはしくこまかきと。つまびらかにしておちなきこと。

(しやう-みやう)（ショウミョウ）[唱名]（名）【佛】佛の名號を唱(トナ)ふること。

(しやう-みやう)（ショウミョウ）[聲明]（名）㊀五明の一、音

部及音韻の原理を研究する學。⊜「ボンパイ」(梵唄)の一名。

(しやう-みやく)（ジヨウ）[靜脈](名)「せいみやく」に同じ。——くわん[靜脈管](名)「せいみやくくわん」に同じ。

(しやう-む)（ジヨウ）[常務](名)つねの業務。不斷の業務。——ゐゐん[常務委員](名)つねの事務を取扱ふ委員。

(しやう-め)（ジヨウ）[上馬](名)よくはしる馬。駿馬。

(しやう-めい)（シヨウ）[詳明](名)くはしくあきらかなること。つまびらかなること。

(しやう-めい)（シヨウ）[正銘](名)まことのものなること。いつはりならぬこと。(正眞)。

(しやう-めつ)（シヨウ）[生滅](名)生ずると滅すると。——めつい[生滅滅已](名)【佛】生と滅と共に存せざること。現象を離れて眞如に入ること。

(しやう-めん)（シヨウ）[正面](名)まむき。まとも。

(しやう-めん)（ジヨウ）[上面](名)上の表面。

(しやう-めん-こんがう)（シヨウ）[靑面金剛](名)【佛】帝釋天の使者、その像は靑色にして六臂あり、弓・箭・寶劍を執り、怒髮して足に一鬼を踏む。

(しやう-もん)（シヨウ）[聲聞](名)【佛】佛の說法を聞きて、苦・集・滅・道を觀ずる地位。

(しやう-もん)（シヨウ）[相門](名)大臣宰相の家柄。

(しやう-もん)（シヨウ）[將門](名)大將の家がら。

(しやう-もん)（ジヨウ）[城門](名)しろの門。

(しやう-もん-し)（シヨウ）[唱門師](名)人の門に立ち鐘を鳴らして錢を乞(コ)ふ僧。

しやう-や（シヨウ）[庄屋](名)德川時代に、領主が土民の中より命じて、一村又は數村の事を統轄せしめしもの。一村の長。なぬし。

(しやう-やう)（シヨウ）[賞揚](名)ほめたゝふること。

(しやう-やう)（シヨウ）[徜徉](名)たちもとほること。

しやう-やど（ジヨウ）[常宿](名)常にやどるやど。きまりてやどるやど。きまりのやどや。

(しやうや-とう)（ジヨウ）[常夜燈](名)暮方より夜明まで點火しおく燈明。

(しやう-ゆ)（シヨウ）[醬油](名)大麥大豆を醱(モヤ)して、これを搾(シボ)りたる汁、味からくして食物を調理するに用ふ。したぢ。むらさき。——のみ[醬油實](名)炒(イ)りて碾(ヒ)きたる大麥と、蒸たる大豆とを合はせて麴(カウヂ)とし、これに鹽水を和し、數十日の間攪(カ)き廻してならしたるもの。——もろみ[醬油諸味](名)前條に同じ。

(しやう-ゆ)（ジヨウ）[上諭](名)おかみのおさとし。

(しやう-よ)（シヨウ）[稱譽](名)はめたたふること。ほめそやすこと。(獎譽)。

(しやう-よ)（シヨウ）[賞與](名)ほめて物を與(アタ)ふること。又、其與ふる物。

(しやう-よ)（ジヨウ）[讓與](名)物を讓(ユヅ)りあたふること。

(しやう-よう)（ジヨウ）[常用](名)⊖つねに使用すること。不斷用ふること。⊜繼續して使役すること。——たいすう[常用對數](名)【數】10を底數とする對數の稱、普通計算に用ふる對數なり。

(しやう-よく)（ジヨウ）[情慾](名)⊖情と慾と。⊜色情のこゝろ。「貫。「—の强い男」。

(しやう-らい)（シヨウ）[生來](名)うまれつき。性分。性來。

(しやう-らい)（シヨウ）[將來](名)⊖將に來らんとする時。のち。未來。⊜ゆくへ。前途。「—恐るべき小兒」。

〜(しやう-らい-むし)（シヨウ）(名)【動】「げら」の一名。(京都地方の方言)。

(しやう-らく)（ジヨウ）[上洛](名)貴人の都へ上(ノボ)ること。「將軍家御—」。(上京)。

〜(しやう-らく-む)（ジヨウ）[illegible](自、ま四)ひざをくむ。あぐらに坐す。

廿しやう-らふ（ジヨウロウ）[上臈](名)⊖二位又は三位の典侍の稱。⊜一位又は二位となりたる大臣家の娘。⊜身分貴き婦人の稱。——のずゐじん[上臈隨身](名)「ばんちやう」(番長)に同じ。

(しやう-らん)（ジヨウ）[上覽](名)貴人の御覽になること。

(しやう-り)（シヨウ）[商利](名)あきなひの利益。

(しやう-り)（シヨウ）[掌理](名)つかさどりをさむること。

(しやう-りう)（ジヨウ）[上流](名)⊖かはかみ。みなかみ。⊜上なる地位。上なる階級。——しやくわい[上流社會](名)地位上なる人々の社會。うへつがた。

(しやう-りく)（ジヨウ）[上陸](名)船より陸にのぼること。——ぜい[上陸稅](名)外國に上陸したるとき、荷物に課せらるゝ關稅などの稱。——ちてん[上陸地點](名)上陸する場所。

(しやう-りつ)（ジヨウ）[滋登率](名)生物の種類・年齡又は勞働の如何によりて必要とする滋養分の割合。

(しやう-りつ)（ジヨウ）[常律](名)つねのゝり。

(しやう-りやう)（シヨウリヨウ）[商量](名)はかりかんがふること。はかること。(較量)。

(しやう-りやう)（シヨウリヨウ）[精靈](名)【佛】死人の靈魂。たま。(生靈)。——おくり[精靈送](名)盂蘭盆の末日に、精靈のかへるをおくるといふ儀式。——とんぼ[精靈蜻蛉](名)【動】とんぼの一種、體翅共に赤色にして美麗なり。——まつり[精靈祭](名)「しやうりやうゑ」に同じ。——むかへ[精靈迎](名)盂蘭盆の初日に、精靈の來るを迎ふといふ儀式。——ゑ[精靈會](名)「ウラボン」(盂蘭盆)に同じ。

(しやう-りやく)（シヨウ）[商略](名)商賈のてだて。あきなひのかけひき。

(しやう-りやく)（シヨウ）[詳略](名)くはしきとあらましなること。

(しやう-りやく)（シヨウ）[省略](名)はぶくこと。——さん[省略算](名)【數】端數を切捨て又は切上ぐる計算。

(しやう-りやく)（ジヨウ）[上略](名)其書出(カキダシ)の所より前の文句を省(ハブ)くこと。其中を省くを中略といひ、末を省くを下略といふ。

(しやう-りよく)（ジヨウ）[常綠](名)四時落葉せずして綠色なること。——ぼく[常綠木](名)常綠の樹木、即ちまつ・つばき・さざんくわ等。ときはぎ。

(しやう-るり)（ジヨウ）[淨瑠璃](名)⊖三味線に合はする一種の語物。永祿年間に、小野通といふ婦人が、源牛若丸(義經)東下のとき、三河矢矧の宿にて、兼高長者の娘淨瑠璃姬の許に通ひたりといふ事實を、脚色して十二段の物語となし、慶長年間に、岩船檢校これを琵琶に合せて語り始め、其後更に瀧野檢校又は角澤檢校などがこれを三味線に合はせて語り弘めたるに起りたるもの、流派多し。⊜義太夫節の特稱。——かたり[淨瑠璃語](名)淨瑠璃を語る人。

(しやう-るゐ)（シヨウ）[生類](名)生あるもの。いきもの。

(しやう-るゐ)（ジヨウ）[城壘](名)とりで。しろ。

(しやう-れい)（シヨウ）[奬勵](名)すゝめはげますこと。又、すゝみはげむこと。

(しやう-れい)（シヨウ）[省令](名)【法】各省大臣が其權限によりて發する行政命令。

(しやう-れい)（ジヨウ）[常例](名)常のならはし。

(しやう-れい-どく)（シヨウ）[傷冷毒](名)風濕又は「リウマチス」等の如く關節不隨の病氣の總稱、漢方にては、山林又は沼澤等の惡氣に觸れて發すといへり。(疝癖毒)。

(しやう-れん)（シヨウ）[湘簾](名)湘竹を以て織りたるすだれ。

〜(しやう-れん)（ジヨウ）[常連](名)⊖常に相伴ふ連中。⊜定まりて興行場に來る連中。ぢやうれん。

(しやう-ろ)（シヨウ）[正路](名)⊖人の履(フ)むべき正しき路。(正道)。⊜正直なること。

(しやう-ろく)（シヨウ）[賞祿](名)賞與の秩祿。又、其もの。

(しやう-ろん)（シヨウ）[詳論](名)くはしく論ずること。つまびらかに說くこと。(細論)。

〜(しやう-わる)（シヨウ）[性惡](名)性分のよからぬこと。

(しやう-ゐ)（ジヨウ）[讓位](名)君位を讓(ユヅ)らせらるゝこと。みくにゆづり。

(しやう-ゐ)（ジヨウ）[上位](名)上のくらゐ。

(しやう-ゐき)（ジヨウ）[淨域](名)寺院又は靈地などの稱。

(しやう-ゐん)（ジヨウ）[上院](名)二院制の國會にて、貴族若しくは勳功者を以て組織せられたるものゝ稱。我國の貴族院の如きこれなり。下院の對。

(しやう-ゑん)（シヨウ）[莊園](名)「さうゑん」に同じ。

(しやう-をん)（ジヨウ）[常溫](名)⊖一年中の平均の溫度。春秋の頃の溫度。⊜つねにきまりたる溫度。——そう[常溫層](名)【地】數十尺の地下にて四時同溫度なる箇處。

(しや-うん)[社運](名)會社のありさま。

(しや-おん-もじ)[寫音文字](名)思想を代表せる言語の聲音を寫す文字、歐米の「アルハベット」、朝鮮の諺文等これなり。

(しや-が)[車駕](名)天子のめさせて行幸したまふ御車。

しやが[胡蝶花](名)【植】鳶尾科に屬する草、葉は劍狀をなし、花冠は靑色にして、花蕊は黃色なり。

(しや-かい)[射界](名)彈丸の到達する範圍。

(しや-がい)[車蓋](名)くるまのかさ又はおほひ。

〜ジヤガ-いも(名)【植】「ジヤガタラいも」の略言。

(しや-かう)[車行](名)⊖車にのりて行くこと。⊜車のすゝみのほど。

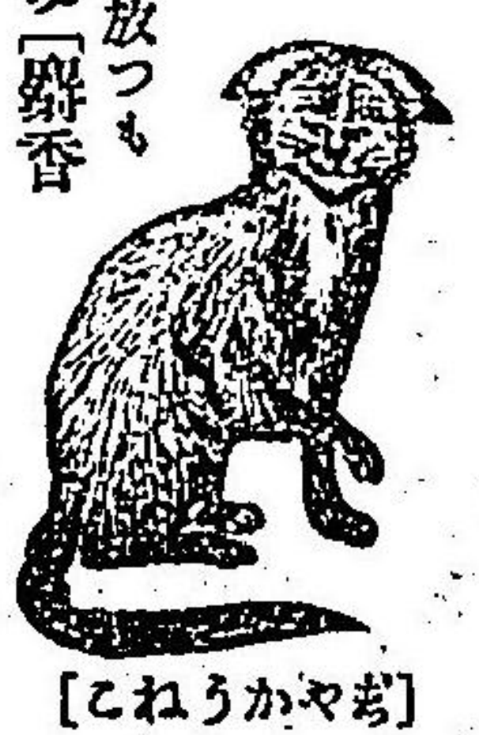
(しや-かう)[射倖](名)偶然の事實によりて利益を取得せんとすること。僥倖をめどとすること。——けいやく[射倖契約](名)【法】全部又は一部の效力が偶然の事實にかゝる契約、例へば保險契約の如きこれなり。

(しや-かう)[社交](名)⊖人々相集まりて互に交際すること。⊜社會の交際。世の中のつきあひ。——てき-どうぶつ[社交的動物](名)社交の本能を有すとする側(ガハ)より觀たる人類の稱。

(しや-かう)[邪行](名)⊖よこしまの行爲。⊜なゝめに行くこと。

(しや-かう)[蛇行](名)はらばひ行くこと。又、くねりまがりて行くこと。「彌伏—」。

(しや-かう)[麝香](名)麝の腹部にありて鷄卵大の塊狀をなす皮腺、香氣甚だはげし、採(ト)りて香料又は藥用とす。——しか[麝香鹿](名)【動】「しや」(麝)に同じ。——ねこ[麝香猫](名)【動】熱帶地方に産する小形の肉食獸、麝香の香を放つもの。(靈猫)。——ゆ[麝香油](名)にほひ油。



[しやかうねこ]

しやかう-の-ま[麝香間](名)宮中の御間の稱。——しこう[麝香間祗候](名)時々麝香

間に祇候し、錦雞間祇候の如き待遇を受くるもの。

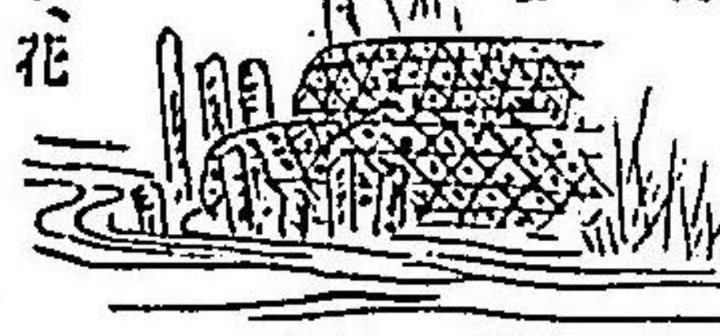
（**しやかく**「社格」（名）　神社の格式。

（**しやかく**「射角」（名）　彈丸の射線と水平線とのなす角。

（**しやかくさう**「斜角塔」（名）【數】側稜が端面に斜なる角塔。

しやかご「蛇籠」（名）　長く粗く編（ア）みたる竹籠、中に石を充（ミ）たし、河岸に積みて水を塞（フサ）ぐもの。（石籠）。

〔**しやかしやか**（名、副）　三味線などをかきまびすしく彈（ヒ）き鳴らす音にいふ語。


〔しやかご〕

ジヤガタラいも「馬鈴薯」（名）【植】（南洋諸島中の「acatra」より渡來せしが故に此名あり）茄科に屬する草本、葉は羽狀複葉なり、花は帶紫色若しくは白色にして、聚繖花序に排列す、地下莖は塊狀をなし、食用に供せらる。

ジヤガタラおま（名）　古昔、「ジヤガタラ」島より渡來したりといふ織物。

ジヤガタラみかん「大柚」（名）【植】芸香科に屬する木、もと舶來の植物にして橙に似る、果實は黄色にして酸味強き肉を有す、觀賞用として栽培せられ、果皮は藥用となる。

（**しやかつ**「蛇蝎」（名）（へびとさそりとの義）甚だ忌（イ）みきらふ物事にいふ語。

しやがばな「胡蝶花」（名）【植】「しやが」に同じ。

〔**しやがむ**（自、ま四）　うづくまる。かゞむ。

〔**しやがむる**（他、下二）　かゞます。

〔**しやがれごゑ**「嗄聲」（名）　しはがれたる音聲。

〔**しやがるる**「嗄」（自、ら下二）　しはがる。

（**しやかん**「舍監」（名）　寄宿舍などの監督。

（**しやかん**「左官」（名）「さくわん」の訛。

（**しやかん**「斜眼」（名）　❶よこめ。❷やぶにらみ。

（**しやかんせう**「遮眼燈」（名）　ガンダウチヤウチン。

（**しやき**「斜暉」（名）　ゆふひ。いりひ。

（**しやぎ**「謝儀」（名）　謝意を表する禮儀、又は贈物。

（**しやき**「邪鬼」（名）　❶あしき怨靈、たゝりをなす神。ものゝけ。❷すべて正しからぬ神靈の稱。

（**しやき**「邪氣」（名）　❶身體を害し疾病を釀（カモ）す外氣。❷風邪。感冒。

（**しやきう**「砂丘」（名）　❶砂より成りたるをか。すなやま。❷【地】海又は湖等の沿岸に平行して連亙する砂のをか、其沿岸の砂が風のために運搬せられて堆積するによりて成る。

〔**しやきしやき**（名、副）　❶物を嚙（カ）むに快き齒ごたへあるさまにいふ語。❷物をいさましく細く切りなどするさまにいふ語。

〔**しやぎしやぎ**（名、副）　❶物を嚙（カ）むに不快なる齒ごたへあるさまにいふ語。❷剪刀（ハサミ）にて物をつむ音などにいふ語。

（**しやきやう**「舍兄」（名）「しやけい」に同じ。

（**しやきよ**「射御」（名）　弓をいるわざと馬をあつかふわざと。射術と馬術と。

（**しやきよく**「邪曲」（名）　よこしま。不正。非道。

〔**しやぎり**（名）　劇場の終演又は幕切若しくは打出などに行ふ一種の囃子。

〔**しやぎる**（自、ら四）　しやぎりを行ふ。

（**しやきん**「謝金」（名）　謝禮に送る金錢。れいきん。

（**しやきん**「砂金」（名）【鑛】河床の砂礫中にありて黄金を含みたる砂粒又は砂粒の如き黄金、即ち黄金を包藏せる岩の崩壞して、其中の金分が雨水に流され、砂礫に混入して河床に沈みたるもの。——**せき**「砂金石」（名）【鑛】石英の一種、茶褐色にして、雲母を含み黄金の光を放つ。すなごいし。

（**しやく**「尺」（名）　❶我國にて、長さの基本單位、即ち農商務省に保管せる白金と「イリヂウム」との合金の棒上に劃せる二標線間の溫度攝氏〇・一五度に於ける長さの三十三分の十。❷たけ。長さ。「―が短い」。❸ものさし。さし。——**をとる**　さしを以て長さをはかる。

（**しやく**「勺」（名）　❶容量の單位、一升の百分の一。❷地積の單位、坪の百分の一。

（**しやく**「笏」（名）（笏の本音は「こつ」なれど、其音骨に通ずるを忌み、尺の音を借りていふ）古昔、束帶の時、右の手に持ちたるもの、長さ一尺二寸幅二寸ばかりあり、もとはこれに事を記しおきて備忘に供したるものなりしが、後世は全く儀式の物となれり。

（**しやく**「杓」（名）　ひしやく。

（**しやく**「酌」（名）　酒を酌（ク）むこと。酒を杯につぐこと。

（**しやく**「爵」（名）　❶さかづき。酒器。❷支那の古代に於ける、諸侯又は臣僚の世襲の身分、即ち、周時代の公・侯・伯・子・男・卿・大夫・士の類。❸明治十七年に始めて創設せられたる華族の世襲階級、これを公・侯・伯・子・男の五等に分ち、これを授くるには、勅旨によりて宮內大臣これを奉行し、男子嫡長の順序によりてこれを襲（ツ）がしむる定めなり。

（**しやく**「癪」（名）　❶痙攣を起し胸部又は腹部はげしく痛み、甚しきに至りては人事不省となる病氣、婦人に多し。❷かんしやく。いきどほり。りつぷく。——**にさはる**　腹がたつ。いきどほる。

（**しやく**「釋」（名）　文義の解說。ときあかし。

（**シヤク**「釋」（名）（梵語、Śākya）一般に用ふる佛の姓。

〔**しやく**（名）【動】「しやこ」の訛。

（**しやく**「寂」（名）　❶僧侶の死去、轉じて、俗人の死去にもいふ。❷【佛】有無の境を離るゝこと。

（**しやく**「弱」（名）　❶よわきこと、よわきもの。「―の肉は強の食」。❷しなやかなること。しなやかなるもの。❸年齡二十前後の稱。❹としわか。幼年。❺【數】示されたる數は、切上げて得たる概算にして、實際の數より小なること。「九百―」。

（**しやくか**「借家」（名）　しやくや。かりいへ。

（**シヤクか**「釋家」（名）　寺院又は僧侶。

（**しやくかい**「釋解」（名）　ときあかし。

（**しやくかう**「釋講」（名）　意義をときあかすこと。

（**しやくがう**「綽號」（名）　あだな。（渾名）。

（**しやくがう**「爵號」（名）　爵位の稱號。

（**しやくかう**「弱行」（名）　實行力のにぶきこと。活動力のよわきこと。

（**しやくかん**「若干」（名）　そこはく。そくばく。いくら。

（**しやくき**「癪氣」（名）　しやくのやまひ。

（**しやくぎ**「釋義」（名）　意義をときあかすこと。かいしやく。ときあかし。

（**しやくきよ**「借居」（名）　かりずまひ。

（**しやくきよ**「若許」（名）　そこばく。（若干）。

（**しやくきよく**「積極」（名）「せききよく」に同じ。

（**しやくきん**「借金」（名）　金錢を借（カ）ること、又、借りたる金。

（**しやくぎん**「借銀」（名）　前條に同じ。

（**しやくく**「借區」（名）　借りてゐる區域。

（**しやくくにち**「赤口日」（名）　陰陽家にて、萬事に凶なりといふ日、即ち正・七月の三・九・十五・二十一・二十七日、二・八月の二・八・十四・二十・二十六日、三・九月の朔・七・十三・十九・二十五日、四・十月の六・十二・十八・二十四・晦日、五・十一月の五・十一・十七・二十三・二十九日、六・十二月の四・十・十六・二十二・二十八日をいふ。

（**しやくくわう**「寂光」（名）「しやくくわうど」の略言。——**ど**「寂光土」（名）【佛】衆生の機根を離絶して究竟に到達したる境界。无相无形なる法身所依の理土。——**じやうど**「寂光淨土」（名）【佛】前條に同じ。

（**しやくくわん**「借款」（名）　負債を起すこと。又、借金の條件。

（**しやくくわん**「弱冠」（名）（禮記に出づ、支那の古代に、男子二十歳にて元服する定めなりしよりいふ）二十歳の異稱。

（**しやくくわんべうしきたんゐ**「尺貫秒式單位」（名）　長さの單位を尺とし、質量の單位を貫とし、時間の單位を秒としてすべての量を表はすこと。

（**シヤクけう**「釋教」（名）　釋迦の教。佛教。

（**しやくけう**「石橋」（名）　能樂の曲、石橋の邊に牡丹を多く植ゑたる景の場所にて、獅子の裝束を着けて舞ふもの。

（**しやくこく**「弱國」（名）　劣（オト）れる國。よわきくに。

（**しやくこつ**「尺骨」（名）　下膊骨の一、一端は腕骨の中小指に近きものに接して他の一端は肘（ヒヂ）をなすもの。

（**しやくさい**「借債」（名）　おひめ。かり。

（**しやくざい**「借財」（名）　しやくせん。借金。

（**シヤクし**「釋氏」（名）　佛家。佛氏。

（**しやくし**「杓子」（名）　❶飯又は汁などを抄（スク）ふ具、頭は皿の如く、柄あり。❷「しやくしの頭の如く圓くして中の凹（クボ）みたるものゝ稱。❸「しやくしがた」の略言。——**がた**「杓子形」（名）　杓子に似たる形。——**ぢやうぎ**「杓子定規」（名）　❶杓子の如き正しからぬ定規。❷用途一定して他に應用し難き標準。正しからぬ標準。

（**しやくし**「弱志」（名）　意志弱きこと。「―薄行」。

（**しやくし**「弱翅」（名）　かよわきはね。

（**しやくじつ**「赤日」（名）「しやくにち」（赤口日）に同じ。

しやくじめ「尺〆」（名）　材木の體積の單位、方一尺長二間の體積の稱。

（**しやくしや**「錫砂」（名）【鑛】錫を含有する岩石の壞崩して、雨水のために砂粒となりたるもの、砂金の如く多く河床に發見せらる。

（**しやくじやう**「寂靜」（名）　❶ものしづかなること。ひつそりしたること。❷【佛】身心一切の活動を止息して、しづかに觀念すること。

（**しやくしやく**「灼爍」（名、副）　かゞやくさまにいふ語。（灼灼）。

（**しやくしやく**「綽綽」（名、副）　ゆつたりして餘地あるさまにいふ語。「―餘裕あり」。

（**しやくしん**「弱震」（名）【地】一般の人に感ぜられ、垂下物又は液體の動搖を目擊し、且戶障子の動搖の音を聞くほどの地震。

しやくす「釋す」（他、さ變）　說明す。ときあかす。とく。

しやくす「寂す」（自、さ變）　死ぬ。（おもに、僧侶にいふ）。

（**しやくせう**「弱小」（名）　❶よわくしてはかなきこと。❷年わかきこと。年わかきもの。

（**しやくせき**「錫石」（名）【鑛】錫の自然に現出せるもの、酸化して黝色をなす。

（**しやくせつ**「所切」（名）　きること。たつこと。

（**しやくぜつにち**「借舌日」（名）「しやくにち」（赤口日）に同じ。

(しやく-せん[借錢](名) しやくぜん。借財。

(しやく-せん[灼然](名、副) ㊀かゞやくさまにいふ語。㊁いちじるしきさまにいふ語。㊂あきらかなるさまにいふ語。

(しやく-せん[綽然](名、副) ゆるやかなるさまにいふ語。又、餘裕あるさまにいふ語。

(しやく-せん[釋然](名、副) うたがひのとくるさまにいふ語。「―たり」。

(しやく-せん[灼燃](名) もゆること。やくること。

(しやく-そつ[弱卒](名) よわき兵卒。

(しやく-たいげ[赤帶下](名) ながち。

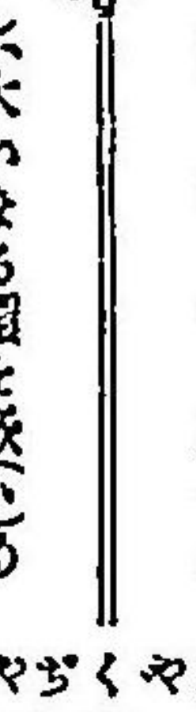
(しやく-だう[若道](名) (若衆の道を略して音讀したる語)少年を愛すること。

(しやく-たく[借宅](名) かりや。かりずまひ。

(しやく-だん[尺斷](名) こまかくきりたつこと。

(しやく-ち[借地](名) 地を借(カ)ること。又、借りたる地。――れう[借地料](名) 經濟上よりいへば、土地といふ資本に對する利子の稱。又、法律上よりいへば、借地に對して其所有主に支拂ふ報酬の稱。

しや-ぐち[蛇口](名) ㊀水の流れ出づる金屬製の口。㊁蛇の口の如く鋭角に開きたるもの。(多くは插花などにいふ語)。


[しやくぢやう]

(しやく-ぢやう[錫杖](名) ㊀僧侶などが智徳の表として持つ杖、上部は錫、中部は木、下部は牙又は角にてつくる、杖頭は塔婆の形をなし、大いなる鐶を嵌(ハ)めて其鐶に數個の小なる鐶をかく、これを振れば聲をなす。(聲杖)。㊁祭文語の振り鳴らして調子をとるに用ふるもの、其形恰も僧侶の持つ錫杖の大小の鐶を去りたる上部の狀をなす。

(しやく-ちん[借賃](名) かりちん。

(しやく-てん[釋奠](名) (菜を釋(オ)き幣を奠(オ)きて祭る義、又、祭るに用ふる供物の義)支那の上代には、先師の靈に供物をさゝげてまつるとなりしが、後漢以後は、孔子及其門人を祭るとの專稱となれり、我國にても、古昔は公事として、二月及八月の上の丁(ヒノト)の日に、大學寮にて行はせられ、當日は上卿・辨及少納言なども參拜し、文章博士題を出し論議述作などせり、後其儀廢(スタ)れたりしかど、德川氏に至り再びこれを興(コオ)し、明治維新前までは各藩の間に行はれたり。せきてん。(釋典)。

(しやく-てん[弱點](名) ㊀うしろぐらき個所。又、よわき箇所。㊁不足なる箇所。缺點。

(しやく-ど[尺度](名) ㊀ものさし。さし。㊁ながさ。たけ。㊂計量の標準。「貨幣は物價の―」。

(しやく-どう[赤銅](名) 【化】銅百分と金一乃至十分より成る紫黑色の合金、これを或防腐劑と煮るときは、紫色を帶びたる青黑色の美しき面を生ずるが故に裝飾に用ひらる、(紫銅、烏銅)。

しやく-とり[酌取](名) 宴會にて、酒の酌をする人。

しやくとり-むし[尺取蟲](名) 【動】蝶蛾類の幼蟲の總稱、形細長くして二三寸許、首尾相接して屈伸するさま恰も尺を取るが如くなれば名づく、すんとりむし、つゑつきむし。(尺蠖)。

しやく-なげ[石楠花](名) 【植】石南科に屬する灌木、深山に自生す、葉は長楕圓形にして下面に褐色の密毛生ず、花は紅白色にして枝頭に攢簇す。さくなんげ。(石南、石楠、石楠草)。

〔しやく-なぎ(名) 【動】「しやこ」(蝦蛄)に同じ。

(しやくにく-きやうしよく[弱肉強食](名) 弱きもの、肉は強きもの、食となること。弱きもの、強きものに併吞せらるゝこと。

(しやく-にん[酌人](名) ㊀しやくとり。(行觴者)。㊁藝妓の特稱。

(しやく-ねつ[灼熱](名) やけてあつくなること。

(しやく-ねん[弱年](名) としわかなること。(青年)。――もの[弱年者](名) としわかなるもの。わかもの。

しやく-の-ひ[赤日](名) 「しやくにち」(赤口日)に同じ。

(しやく-ば[借馬](名) 馬を借(カ)りて乘ること。又、借りて乘る馬。――や[借馬屋](名) 料をとりて馬を貸すことを業とする家。

(しやく-はい[弱輩](名) ㊀青年者。㊁未熟者。

(しやく-はう[釋放](名) 拘禁をときてゆるすこと。束縛をときてはなちやること。

(しやく-はち[尺八](名) 竪(タテ)にして吹く一種の笛、長さ一尺八寸を定めとし、前面に四つ背面に一つの孔ありて、筒の上端を歌口とせるもの、おもに淡竹(ハチク)の根もとにて作る。さくはち。(竪笛)。――いか[尺八烏賊](名) 【動】いかの一種、體細狹長にして尺八の如き形をなす、おもに乾してするめとす。

卄しやく-びやうし[笏拍子](名) 「さくはうし」に同じ。

(しやく-ふ[酌婦](名) ㊀酒宴にて酒の酌をする婦人。㊁田舍の料理屋などに傭(ヤト)はれて、遊客の酒の相手をなす婦人。

〔しやく-ふ〔はひふへ〕(他、は四) 汲(ク)み取る。すくふ。「水を―」。

(しやく-ぶく[折伏](名) 敵をくじきて我にしたがはすること。ときふせてしたがはすること。

しや-ぐま[赤熊](名) ㊀染めて赤くしたるはぐまの毛。㊁縮毛(チヂレゲ)にて作りたる入毛、もゝわれ髷(マゲ)などに用ふるもの。

しや-ぐま(名) 【植】「おきなぐさ」の一名。

(しやく-まく[寂寞](名) 「せきばく」に同じ。

(しやく-む(自、ま四) 中くぼむ。

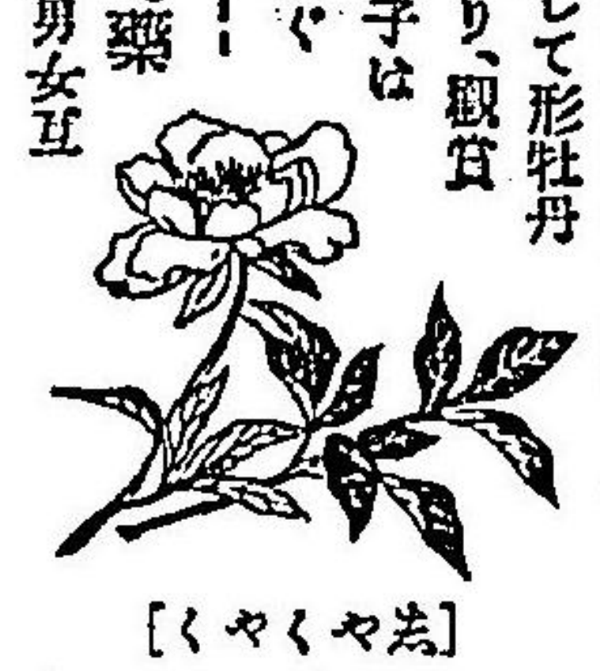
(しやく-めい[釋明](名) ときあかすこと。ときあかし。

(しやく-めつ[寂滅](名) ㊀【佛】未來をして生滅の法に應ずる生を得ざらしむること。无明煩惱の境界を離れたること、涅槃。㊁死ぬること。――ゐらく[寂滅爲樂](名) 【佛】寂滅に到達して始めて眞樂ありといふこと。

(シヤク-もん[釋門](名) 佛門。

しやく-や[借屋](名) 借(カ)りて住む家。しやくか。しやくたく。(借宅)。

(しやく-やく[芍藥](名) 【植】毛茛科に屬する宿根草、花は大形美麗にして形牡丹の花に似る、雌蕊數箇あり、觀賞用として栽培せられ、種子は藥用に供せらる。えびすぐすり。ぬみぐすり。――の-たはむれ[芍藥の謔](名) (詩經に出づ)男女互に情を通ずること。


[しやくやく]

(しやく-やく[綽約](名) 風姿(スガタ)のたをやかなること。しなやか。「―たる美人」。

(しやく-やく[雀躍](名) こをどりして喜ぶこと。

(しやく-よう[借用](名) 借(カ)りて使用すること。――しようしよ[借用證書](名) 物を借りたることを證明するための證書。

(しやく-ら[雀羅](名) 張りて雀などを捕(ト)る網。「門前―を張るべし」。

(しやく-らん[灼爛](名) きらめくこと。あきらかなること。

(しやく-らん[借覽](名) 書物などを借(カ)りて覽(ミ)ること。

(しやく-り(名) ㊀すくひとること。㊁中の凹(ボク)むやうに刳(ソ)ぐこと。

〔しやく-り(名) ㊀あやつること。操縱。㊁おだて、そゝのかし。教唆。煽動。

〔しやくり[噦](名) 「さくり」に同じ。(噦噎)。――あ-ぐ[噦上](自、か下二) 「さくりあぐ」に同じ。――あげる(自) 「さくりあげる」に同じ。――なき[噦泣](名) 「さくりなき」に同じ。(歔欷)。

(しやく-り[赤痢](名) 「せきり」に同じ。

(しやく-りやう[酌量](名) くみはかること、くみとること。「情狀を―す」。――げんけい[酌量減刑](名) 【法】裁判官が刑事被告人の情狀を諒察して、其職權を以て本刑より一等若しくは二等を減ずること、卽ち裁判上の減刑をいふ。

〔しやく-る[噦](自、ら四) ㊀しやくりをなす。

〔しやく-る(他、ら四) ㊀中の凹(ボク)むやうに刳(ソ)ぐ。㊁しやくふ。すくふ。

〔しやく-る(他、ら四) ㊀操縱す。あやつる。㊁煽動す。教唆す。おだつ。そゝのかす。

(しやく-れう[借料](名) かりちん。かりれう。

(しやく-ろ[借廬](名) かりたく。借宅。

〔しやく-ろ[石榴](名) 【植】「ざくろ」の轉。――ぐち[石榴口](名) 「ざくろぐち」の轉。

(しやく-ろく[爵祿](名) 爵と祿と。くらゐとふち。「―共に高し」。

(しや-くわい[社會](名) ㊀相互作用又は共同生活をなす組織又は團體。㊁同種類の範圍、同一の仲間。――いし[社會意思=Collective will](名) 統一せられ組織せられたる社會一般の意思、卽ち社會の多數の人の知識經驗が皆より或は衝突し或は融合し或は同化して成立したる結果をいふ、個人はこれに感化せられ支配せらる、我國の武士道の如きも其一例なり。――がく[社會學=Sociology](名) 社會の構造・形式及發達・變遷等を研究する科學。――きようさん-しゆぎ[社會共產主義](名) 【經】社會の財產は各人の私有に屬すべきものにあらずとし、土地資本等を社會の共有となさんとする主義、其極端なるものに至つては、革命の手段により、今日の社會を打破して根本的組織を一變せんとするものあり。――きようさん-たう[社會共產黨](名) 社會共產主義を執(ト)る黨派。――けういく[社會教育](名) ㊀【教】社會主義によりて行ふ教育。㊁社會一般の人に教育を施すこと。――けいざい[社會經濟](名) 【經】人類が社會をなし、經濟的活動を營むこと。――しゆぎ[社會主義=Socialism](名) ㊀【經】社會に於ける貧富の隔絕を救濟し、財の分配をして宜しきを得しめんことを目的となす主義の總稱、其方法は、學者の見解一ならざれど、生產の手段を共有とすといふに至りては相一致す。又、普通には社會共產主義の特稱。㊁【教】個人と社會との調和を保たしめ、公共的精神を啓發せしめ、獨立的品性を發達するとを目的とする教育上の主義。――せいさく[社會政策](名) 社會問題を解釋せんために施行する國家の政策、現今に於て既に實行せられ若しくは學說として有力なるものは、相續法・租稅法・工場法・小作法等の改良又

は組合設置・普通教育普及等これなり。――せいしん[社會精神=Collective will](名) 社會意思に同じ。――せいど[社會制度](名) 社會の財産又は階級等に關する國家の制度。――たう[社會黨](名) 社會主義を執れる黨派。特に、社會共産主義を執れる黨派。――てきかんじやう[社會的感情=Social feeling](名) 愛情・同情等の如き社會を結合する自然の情。――もんだい[社會問題](名) 社會の經濟上に於ける強者と弱者との利害衝突を和し、貧富の隔絶を救濟し、以て貧者弱者を保護せんとするに關する問題。

(しやくわう[砂鑛](名) 【鑛】砂金・砂錫・砂鐵等の總稱。「―採取」。

(しやくわうおう[石王寺](名) 丹波國の石王寺山より出づる一種の石、白色にして模様あり、硯材などにす。

(しやくゐ[爵位](名) 爵と位と。――きよく[爵位局](名) 爵位及華族に關する事務を掌る宮内省の一局。

(しやくん[斜曛](名) ゆふひ。いりひ。

(しやけ[社家](名) かんぬし。(神職)。

(しやけ[捨家](名) 出家して僧侶となること。

しやけ[鮭](名) 【動】「さけ」の訛。

(しやけい[斜傾](名) なゝめにかたむくこと。

(しやけい[舍兄](名) 自分の實兄。あに。(家兄)。

(しやげい[射藝](名) 弓を射(イ)る藝術。しやじゆつ。(射術、射法)。

(しやけい[邪計](名) わるだくみ。

(しやけう[邪教](名) よこしまなるをしへ。不正なる宗教。

(しやげき[射擊](名) 大砲又は小銃をうつこと、彈丸を發射すること。

[ジヤケツ](名) 「ジヤケット」に同じ。

ジヤケット[Jacket](名) 洋服の上衣の短かくして僅かに腰部に及ぶもの。短衫。

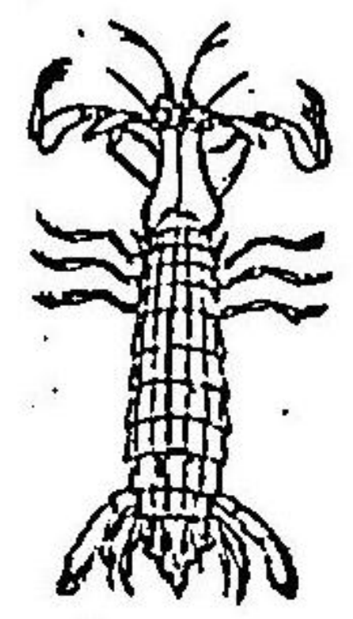
(しやけん[邪險](名) むごくして陰惡なること。無慈悲。

(しやけん[邪見](名) よこしまなるみかた。不正なる見解。

(しやこ[硨磲](名) 七寶の一、蛤類の至大なるものにして、外殼厚く白色の光澤あり、琢(ミガ)きて裝飾に用ふ。

(しやこ[鷓鴣](名) 【動】鶉雞類に屬する鳥、多く支那に產す、形は鶉(ウヅラ)に似て稍や大なり、背部は灰蒼色にして柿色の斑點あり、腹部は灰白なり。

しやこ[蝦蛄](名) 【動】甲殼類中胸甲類に屬する節足動物、胸部の最後の四環節は自在にして胸甲に累(カサ)ならず、八對の脚ありて、其一對は西洋剃刀の如し、又、別に三對の細小なる脚あり、體長大いなるは四五寸に達す、魚を釣る餌(エ)とし、又、大いなるは食用とす。――でたひをつる わづかなるものを以て人を誘ひ、よりて大いなる利益を獲取するにいふ。


[しやこ]

(しやこ[這個](代) これ。この。

[しやこ[雜魚](名) 「ざこ」に同じ。

(しやこう[射侯](名) 的(マト)のほし。

しやこたんだけ[積丹竹](名) 【植】竹の一種、幹に斑點あり、多く北海道積丹半島地方に產するより此名あり。(虎斑竹)。

(しやこつ[蛇骨](名) ㊀蛇の骨。㊁温泉の鹽分の結晶物、白色なり。

++しやざ[謝座](名) 古昔、元日の節會などに、御禮を申して殿上の座につきし儀式。

(しやさい[社祭](名) 土地の神のまつり。

(しやさい[社債](名) 【法】株式會社又は株式合資會社が債券を發行して募集する金錢に對する債務。

(しやざい[社財](名) 會社の財產。

(しやざい[謝罪](名) 罪をわぶること。わび。

(しやざい[赦罪](名) 罪をゆるすこと。しや。

(しやざい[瀉劑](名) くだし藥。下劑。

(しやさいけん[社債券](名) 社債を證明する證券。

(しやさいとりやう[車載斗量](名) (車につみますにて量る意)其數のいと多きこと。又、平凡なること。「―の人」。

しやさう[莎草](名) 【植】「くぐ」に同じ。

(しやざう[寫象](名) 【心】知覺又は思考によりて、過去の對象が再現せられたる意識の狀態。

(しやさふ[斜插](名) ㊀なゝめにさすこと。よこあひよりさすこと。㊁漢文にて、一段落の中、文意を補足するため又は將來をつくるために、前節と後節との間に挿入する一節の稱。

(しやさん[社參](名) 神社へまうづること。かみまゐり。みやまうで。

(しやざん[赭山](名) 草木なき山。はげやま。

(しやし[社祠](名) ほこら。やしろ。

(しやし[社司](名) 府社・縣社又は鄕社にて、神事一切を管理するもの。かんぬし。(神官)。

(しやし[奢侈](名) 度に超(コ)えて物事を誇大にすること。分限に超(コ)えたる欲望を充(ミ)たさんとすること。おごること。

(しやし[斜視](名) ㊀ながしめに見ること。よこめをつかふこと。㊁やぶにらみ。

(しやし[砂嘴](名) 【地】潮流又は風向等によりて、砂洲の一方に延長したるもの。

(しやじ[寫字](名) 文字を寫(ウツ)すこと。

(しやじ[謝辭](名) 禮意をのぶることば。又、罪をわぶることば。

(しやじ[社寺](名) 神社と佛寺と。(寺社)。

(しやし[邪視](名) よこめ。ながしめ。

(しやしう[砂洲](名) 【地】流水又は波浪のために運搬せられたる土砂が堆積してなりたるしま。

(しやじせい[寫字生](名) 文字を書き寫(ウツ)すことをつとめとする書生。

(しやじつ[社日](名) 「しやにち」に同じ。

(しやじつ[斜日](名) ゆふひ。入りひ。

(しやじつ[寫實](名) ㊀實際の狀態をうつすこと。㊁寫實主義なること。――しゆぎ[寫實主義](名) 思想の案出よりも實際の狀態をうつし出すことをむねとする主義。「―の小說」。

(しやしひん[奢侈品](名) 分限に過ぎて、必要のなき品。おごりのしな。

(しやしやう[車掌](名) 汽車・電車又は乘合馬車などの中にありて、車中の萬事をとりあつかふ職務のもの。

(しやしやう[社掌](名) 縣社及鄕社などにては、社司の下に屬する神官。村社にては、一切の事を掌る神官。

(しやしやう[寫象](名) 「しやざう」に同じ。

(しやしやう[赦狀](名) 刑罰を免ずる書面。

(しやしやう[謝狀](名) おれいじやう。おれいのてがみ。

(しやしやう[邪正](名) よこしまとたゞしきと。惡人と善人と。よしあし。(善惡、曲直)。

[しやしやうま(名) ㊀はね馬。あばれ馬。㊁あばれて人の妨害をなすもの。

(しやしやらくらく[洒洒落落](名、副) 性狀又は擧動のさつぱりとして、執着する所なきさまにいふ語。

(しやしゆ[社主](名) 其社の持主。

(しやしゆ[射手](名) 弓箭を發射する人。又、彈丸を發射する人。

(しやしゆう[邪宗](名) 正しからざる宗旨。

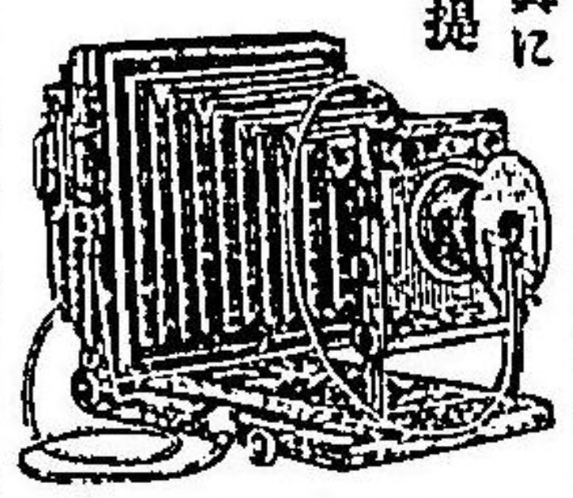
(しやしゆつ[射出](名) ㊀弓箭若しくは彈丸を發射すること。㊁一點より他に向つて直線狀に出づること。――ずゐ[射出髓](名) 【植】樹木の幹の木質部にある中心より諸方へ射出せる細線。

(しやじゆつ[射術](名) 弓を發射する技術。

(しやしよく[社稷](名) ㊀支那にて、建國の時に、壇を築きて祀(マツ)りし土地の神と穀類の神と。㊁朝廷又は國家の稱。

(しやしん[捨身](名) ㊀【佛】形身を捨離すること。㊁身命を斷(タ)つこと。

(しやしん[寫眞](名) ㊀實際の狀相をうつし出だすこと。又、其撮影したる形像。㊁寫眞器械にかけて、もの、形像を撮影すること。――きかい[寫眞器械](名) 物の形像を寫眞にとる器械、据置用・携帶用・手提用等ありて、据置用は撮影場の室上に据ゑ置くもの、携帶用は二つ折になし得る三脚架を備ふるもの、手提用は手提のまゝ撮影し得らるゝものなり。何れも主要部は暗箱(其條參照)にして、撮影せんとするときは、其前壁の「レンズ」の蓋(フタ)を開きて撮影物に向はしめ、蛇腹(バシヤ)は後より黑布をかけ、これを伸縮し後壁の摺硝子(スリガラス)上の映像鮮明となるを待ちて「レンズ」の蓋をなし、摺硝子の取枠(トリワク)を取りはづして、感光板を入れたる取枠を嵌(ハ)め、取枠の內方の蓋を引出し、「レンズ」の蓋を放ちて露出せしむるなり。――じゆつ[寫眞術](名) 寫眞をとる方法、これに濕法と乾法との二様あり、感光板として、濕法には沃化銀を含ませたる「コロヂオン」の皮膜を塗りたる硝子板を多量の硝酸銀液に浸(ヒタ)して膜質を濕(ウルホ)したるものを用ひ、乾法には臭化銀を膠(ニカハ)に混じて製したる皮膜を塗附したる硝子板又は「セルロイド」を用ひ、現像液として、濕法には硫酸第一鐵溶液に醋酸を加へたる液などを用ひ、乾法には沒食子酸液・蓚酸鐵液・「メトル」液「ハイドロキノン」液などを用ひ、定着液として、濕法には青酸加里の水溶液を用ひ、乾法には「チオ」硫酸「ソヂユーム」液を用ふ、斯く現像・定着を經て陰畫となし種板を得、これを感光紙に燒附け、其燒附したるものを更に寫眞鍍金等にかけて陽畫となす、濕法にては、陰畫の裏面に黑色の布を敷き、表面より見るときは、陽畫となる。――せきばん[寫眞石版](名) 印刷せんとするものゝ寫眞を一定の方法によりて石版に轉寫し、藥品を用ひてこれを腐蝕せしめて製したる印刷版。――ばん[寫眞版](名) 硝子又は銅若しくは亞鉛等の平滑なる表面に感光性の薄膜を塗布し、其上に印刷せんとするものゝ寫眞の種板を載せ、これを日光に曝(サ)らして感光したる部分を不溶解性に變ぜしめて後、藥品を用ひ腐蝕せしめて製したる印刷版、寫眞銅版・寫眞亞鉛版・「アートタイプ」・「コロタイプ」等種々あり。――めつき[寫眞鍍金](名) 寫眞術にて種板を感光紙に燒附したるものを、稀薄


[しやしんきかい]

なる鹽化金の溶液に小量の炭酸「ソヂューム」又は硫酸「アンモニア」などを加へて鹽基性としたる鍍金液に浸(ひた)して陽極となすと、斯くて紙面は暗紫色を帶びて、鮮明なる畫像を生ず。

(しや-しん[舍人](名) ㊀めしつかひ。けらい。㊁とねり。

(しや-しん[沙參](名) [植]桔梗科に屬する草、高さ一二尺、葉は輪生して緣邊に鋸齒を有し、萼は線形の長き裂片を有す、秋の頃、葉腋に五瓣にして鐘狀なる小花開く。つりがねにんじん。つりがねさう。きゝやうもどき。(白參、知母)。

(しや-しん[邪心](名) よこしまなるこゝろ。

(しや-しん[邪神](名) 不正なる神。

(しや-しん-ブッこう[蛇心佛口](名) 心の陰險にして口さきの親切なると。

しや・す（せしすするすれせよ）[舍](自、さ變) ㊀やどる、とまる。㊁すむ、ゐる。

しや・す（せしすするすれせよ）[舍](他、さ變) ㊀やどす、とゞむ。㊁かくす。かくまふ。㊂おく。

しや・す（せしすするすれせよ）[瀉](自、さ變) ㊀そゝぐ。㊁下痢す。くだる。

しや・す（せしすするすれせよ）[瀉](他、さ變) そゝぐ。

しや・す（せしすするすれせよ）[謝](他、さ變) ㊀あやまる、わぶ。㊁ことわる。㊂禮をいふ。

しや・す（せしすするすれせよ）[謝](自、さ變) ㊀いとまごひして歸る。㊁たちさる。去りぞく。㊂しぼむ。おとろふ。「花—」。

(しや-すゐ[砂水](名) 砂ごしの水。

(しや-すゐ[邪推](名) わる推量。よこしまなるうたぐり。(猜疑)。——ぶかし（くしく、けれ）[邪推深](形、こ) 邪推の念深し。

(しや-せい[寫生](名) もの、生きたるさまを寫(ウツ)すと。其狀態のまゝを寫すと。いきうつし。——ぐわ[寫生畫](名) 寫生の繪畫。

(しや-せき[赭石](名) ㊀「にいし」に同じ。㊁赤色の石。

(しや-せき[砂石](名) まさご。すな。

(しや-せつ[社說](名) 新聞・雜誌等に、其社の主張として揭ぐる議論、起草者の名を記せざるもの。

(しや-ぜつ[謝絕](名) 辭(イナ)みことわると。こばみて引受けざると。

(しや-せつ[邪說](名) よこしまなる說。不正なる說。異端の說。

(しや-せん[射線](名) 發射したる彈丸の進行する線。

(しや-せん[斜線](名) [數]一つの平面に出會して且これに垂線ならざる直線。斜に引きたる線。

(しや-そ[社鼠](名) (やしろに巣くふねずみの義) 主君のおそばの小人にいふ語。

(しや-ソウ[社僧](名) 昔時、神社に仕へし僧。

(しや-そく[社則](名) 社の規則。組合の規約。

(しや-そく[蛇足](名) (蛇を畫きて足を着けたりといふ故事に出づ) つけ加へずともよき餘計なる物事。つけ加へて用なき物事。だそく。

(しや-だ[射垜](名) あづち。

(しや-だい[車臺](名) 車の一部分にして、ものを入るゝ箱をのするところ。くるまのだい。

(しや-たい[蛇體](名) 蛇のかたち。蛇のからだ。

(しや-だう（ドウ）[車道](名) 道路を區劃して、車の通行するみちと定めたる部分の稱。

(しや-だう（ドウ）[邪道](名) ㊀よこしまなる道、不正なるをしへ。邪教。㊁魔法。妖法。

(しや-だつ[洒脫](名) さっぱりとして俗習なきと。

(しや-だん[社段](名) 神社の階段。

(しや-だん[遮斷](名) さへぎりたつと、ふさぎとゞむると。「交通—」。

(しや-だん[社團](名) [法]二人以上のものが共同の目的を以て設立したる團體。財團の對。——はふしん（ホウ）[社團法人](名) [法]法律上人格を有する社團、即ち、商事會社の類。財團法人の對。

(しや-ち[社地](名) 神社の地域。又、神社の領地。

(しや-ち[砂地](名) すなば。すなぢ。

(しやち[鯱](名) 「しやちほこ」の略言。

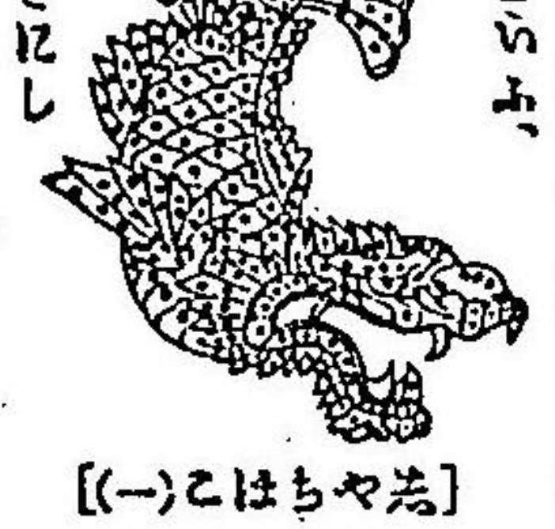
(しや-ち[車地](名) 重き物を動かし運(ハコ)ぶに用ふる大きなる轆轤(ロクロ)、これを地に据(ス)ゑ付けて、動かし運ばんとする重き物にかけたる綱を其軸に纏(マト)ひ、軸を廻轉して牽(ヒ)く。

(しや-ち[邪智](名) わるぢゑ。ねぢけたるちゑ。

しやち-ガハラ（ガワラ）[鯱瓦](名) しやちほこの形の瓦、屋根の端につけて火防の符とす。おにガハラ。

(しや-ぢく[車軸](名) ㊀車の軸。しんぎ。心棒。㊁[植]「しやぢくさう」の略言。——さう（ソウ）[車軸草](名) [植]荳科に屬する草、葉は通常五個の小葉より成り、花は淡紅色若しくは白色を呈す、家畜の食料に供せらる。——をながす 大雨の降(フ)るさまを形容していふ語。

しやち-ほこ[鯱](名) ㊀伊勢の海にありといふ海獸の名、頭は虎の如く背上に鋭(スルド)き刺あり、猛烈にして鯨をも刺(サ)し殺すといふ、古來其形を模して宮殿又は櫓門などの棟(ムネ)の端につく。㊁[動]「さかまた」の一名。——だち[鯱立](名) ㊀足を上に頭を下に向け、體をさかさにして直立すると。さかだち。㊁あらん限りの力を盡


[しやちほこ(一)]

くしておくせくするとにいふ語、「—しても追附かぬ」。——ばる（らりるるれれ）(自、ら四) ㊀鯱の如くいかめしく構(カマ)ふ。㊁屈(カガ)まぬやうになる。かたくなる。

(しや-ちやう（チョウ）[社長](名) ㊀社の主宰者。社の代表者。㊁神社にて、辨務署長の指揮を受けて、社の事務を取扱ふもの。

(しや-ぢやう（ジョウ）[砂場](名) ㊀すなはら。すなぢ。㊁しやばく。「醉臥—君莫笑」。

(しや-ぢやう（ジョウ）[射場](名) 射術を學ぶ場所。弓を射(イ)る所。

(しや-ちゆう（チュウ）[社中](名) 社の中。又、社の仲間。

(しや-ちゆうたい[斜柱體](名) [數]直柱體にあらざる柱體。

(しや-ぢん[砂塵](名) すなぼこり。すなけむり。

シヤツ(名) (「イギリス」語 Shirt の轉訛) 西洋風の筒袖の襦袢。つゝそでのはだぎ。(襯衣)。

(しやつ[奴](代) のゝしりていふ第三人稱の人代名詞。きやつ。

(しやっ-くり[噦](名) 「さくり」に同じ。

シヤッター[Shutter](名) 寫眞器械の附屬具、手を用ひずして、迅速に「レンズ」の蓋(フタ)を開閉するために裝置したるもの。

(しやっ-つら(名) 顏をのゝしりていふ語。

シヤップ[洋帽](名) (「フランス」語 Chapeau の訛) 西洋風のかぶりもの。ばうし。——のだい[洋帽臺](名) 首の稱。

シヤッポ(名) 前條に同じ。

(しや-てい[舍弟](名) 自分のおとうと。(家弟)。

(しや-てき[射的](名) 小銃にて的(マト)をうつと。

(しや-てつ[車轍](名) ㊀車輪の痕(アト)。わだち。㊁巡遊經過したるあと。

(しや-てつ[砂鐵](名) [鑛]崩壞したる磁鐵鑛の細粒が、雨水のために流されて、河床又は海岸の砂に混入して存在するもの。

(しや-でん[社殿](名) みや。やしろ。

(しや-でん[社田](名) 神社附屬の田地。

(しや-ど[赭土](名) あかつち。

(しや-ど[砂土](名) 多量の砂を含みて質鬆粗なる土壤、水分又は空氣の流通よろしくして耕すに易く、植物の根もまた自由に蔓延するとを得れど、養分少なくして乾燥し易し。

(しや-とう[社頭](名) 神社の邊、みやのまへ。

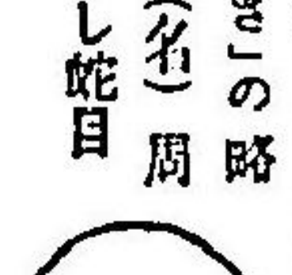
(しや-にち[社日](名) 春分及秋分に最も近き戊(ツチノエ)の日、春のを春社といひ、秋のを秋社といふ。

(しや-に-むに[遮二無二](副) わちやくちやに。めったやたらに。「—飛び付く」。

(しや-にん[社人](名) 神社に仕ふる人。かんぬし。

(しや-ねん[邪念](名) ㊀よこしまのおもひ。わだかまりたるこゝろ。(惡念)。㊁純粹ならざる念慮。みだれたる俗念。

しや-の-め[蛇目](名) ㊀太き環の形、紋所などにす。(蛇眼)。㊁「しやのめがさ」の略言。——がさ[蛇目傘](名) 周邊を黑く又は赤く、中を白くし蛇目の形をあらはしたる傘。


[しやのめ(一)]

(しや-ば[車馬](名) ㊀車と馬と。㊁馬車とこれを牽(ヒ)く馬と。

シヤバ[娑婆](名) ㊀[佛](梵語Saha、忍土又は忍界と譯す)內には三毒煩惱等の苦を外には風雨寒暑等の苦を忍ばざるべからざる國土の義にして、此世即ち現世の稱。㊁獄內に對して、獄外の自由の世界の稱。「—の風」。

(しや-はう（ホウ）[斜方](名) [數]斜方形の略言。——けい[斜方形](名) [數]各邊互に平行して各角の直角ならざる四邊形。

(しや-ばう（ボウ）[砂防](名) ㊀砂石を以て築(ツ)きたるどて。㊁堤防などの水に流れぬためのふせぎ。

(シヤバ-き[娑婆氣](名) 世間に對し我儘面を張らんとする意氣。かちき。いきぢ。

(しや-ばく[沙漠](名) 一面砂石に蔽(オホ)はれて水草なき大原野。おほすなばら。すなはら。さばく。

(しや-ば-だう（ドウ）[車馬道](名) 車馬のみの通行するために區劃したる街路の一部。

(しや-はふ（ホウ）[射法](名) 弓を射(イ)る術。

(しや-はふ（ホウ）[邪法](名) よこしまなる道。又、魔法。「—をつかふ」。(邪道)。

(シヤバ-ふさぎ[娑婆塞](名) 次條に同じ。

(シヤバ-ふさげ[娑婆塞](名) 無益に生存して、此世の邪魔となるもの。

しや-ばら[蛇腹](名) ㊀「しやばらぶせ」の略言。㊁しやばらぶせの模樣。㊂暗箱(アンバコ)の側壁、皮又は布にて、伸縮するやうにつくりたるもの。——いと[蛇腹絲](名) より強くかけたる絲、蛇腹伏に用ふ。——ぶせ[蛇腹伏](名) 左縒(ヨリ)の絲と右縒の絲とを合はせて伏縫にしたるもの。

(しや-はん[這般](代) この。これらの。

(しや-ひ[奢靡](名) おごりて浪費すると。

(しや-ひ[社費](名) 社團の費用。又、神社の費用。

(しや-び[蛇皮](名) 蛇(ヘビ)の表皮。——せん[蛇皮線](名) 琉球の樂器、えらぶうなぎの皮にて胴を張る、形三味線の如し、三味線はこれより出でたるなりといふ。

(しや-びやう ヨ-ビ［寫瓶］(名)（かめの水をうつす義）【佛】佛法の奧義の皆傳。

(しや-ふ［車夫］(名) くるまひき。くるまや。(車子)。

(シャブル(名)「シャベル」の訛。

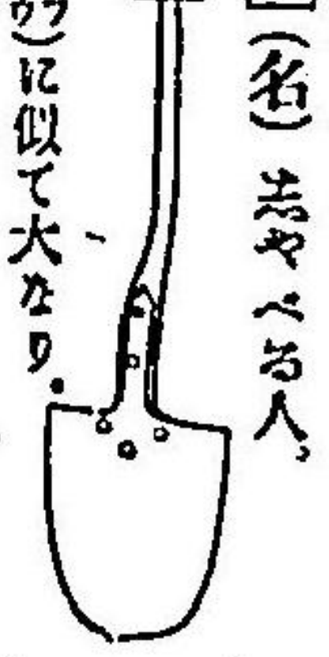
(しやぶ・る らり、る、るれ、れ(他、ら四) なむ。ねぶる。

(しや-へき［邪僻］(名) よこしま。ひがみ。

(しや-べつ［差別］(名) わかち。けぢめ。わいだめ。區別。――かい［差別界］(名) 個々のもの、差別ある世界、即ち現象の世界。

(しやべりて［喋手］(名) しやべる人。

シャベル［Shovel］(名) 土砂を抄(スク)ふに用ふる具、形火斗(ノウフ)に似て大なり。


［シャベル］

(しやべ・る らり、る、るれ、れ［喋］(自、ら四) ㊀口數多くいふ。うるさく辯ず。(饒舌)。㊁巧に說く。うまくいふ。

(しや-へん［斜邊］(名) ㊀傾斜せる側邊。㊁【數】直角三角形の直角に對する邊。又、直圓錐の母線。

(しや-ぼう［邪謀］(名) よこしまのはかりごと。わるだくみ。

(シャボテン(名)【植】「サボテン」の訛。

(しや-ほん［寫本］(名) 書物を寫(ウツ)すこと。又、寫したる書物。版本の對。

シャボン［石鹼］(名)（「フランス」語Savon）苛性曹達加里と脂肪又は油とを原料として製し固(カタ)めたるもの、化粧品又は洗濯用等に供せらる。――だま［石鹼球］(名) 石鹼を水に溶(ト)き、其滴(シヅク)を細き管の一方の口につけ、これを他方の口より吹きて生ぜしむる氣球、小兒の遊戲に行ふもの。

(しや-ま［邪魔］(名) ㊀【佛】妄見を談論して、菩提の道のさまたげをなすもの。㊁障碍をなす惡魔。㊂さまたげ。さはり。

シャミ［沙彌］(名)【佛】（梵語Sramanera、求寂の義）佛門に入りて得度式を經(ヘ)たるばかりの小僧。僧行未だ熟せざる初心の僧。――ニ［沙彌尼］(名)【佛】佛門に入りて剃髮したるばかりの女子。修行未だ熟せざる初心の尼。

(しや-み［三味］(名)「しやみせん」の略言。――せん［三味線］(名)「さみせん」の訛。

(しや-む［社務］(名) 神社又は會社の事務。――しよ［社務所］(名) 神社の事務を取扱ふ所。

ジャム［Jam］(名) 果實を火にかけ砂糖にて煉(子)りて製したる餡、西洋風の菓子に用ふ。

シャム-がは ワ-ガ［暹羅革］(名) 昔時、「シャム」國より渡來したる革、主に足袋などに用ひたり。

シャム-ぞめ［暹羅染］(名) サラサぞめ。

(しや-めん［斜面］(名) ㊀水平ならざる面。㊁【數】角錐又は截頭角錐の側面。㊂【理】水平面に對して傾斜をなす平面、物體を高所に引きあぐるために用ふるもの。

(しや-めん［赦免］(名) 罪を赦(ユル)すこと。ゆるし。

シャモ［暹羅鳥］(名)（「シャムどり」の訛）【動】雞の一種、初め「シャム」國より渡來したるものにして、體幅巨大、頸長く尾短し、古來鬪雞に用ひらる。(鬪雞、反毛雞)。

シャモ(名)（「アイヌ」語）蝦夷(エゾ)人の內地人を指していふ語。

(しや-もじ［杓文子］(名)（「しやくもじ」の義）めし杓子。いひがひ。

(しや-もつ［謝物］(名) 謝禮の贈物。むくりもの。

(しや-もん［借問］(名) ちよっととふこと。たづぬること。「――酒家何處在」。

シャモン［沙門］(名)【佛】（梵語Sramana、勤息の義）善を勤(ツト)め惡を息(ヤ)むる人。出家して道を修する人。僧侶。(桑門、僧門)。

(しやもん-せき［蛇紋石］(名)【鑛】角閃石・輝石及橄欖石の分解變質によりて成りたる石、綠色若しくは黃色にして、白色の條痕あり、恰も蛇皮の如きより名づく、裝飾品又は建築材に用ひらる。

(しや-やう ヤ-ヨー［斜陽］(名) ゆふひ。夕陽。

(しや-よ［車輿］(名) ㊀車と輿(コシ)と。㊁車の箱。

(しや-よう［社用］(名) 神社の用務。又、會社の用務。

(しや-よく［邪慾］(名) ㊀よこしまなる慾望。㊁肉體上の慾望。

(しや-らい［射禮］(名) ㊀弓術の儀式。㊁古昔、禁中にて正月に行はれし弓術の公事、十五日に兵部省にて射手を選へて順番を定めおき、十七日に建禮門にて行はれたり。

(しやらか・す さし、す、すせ、せ［戲］(他、さ四) しやらす。

(しや-らく［洒落］(名) 物事に執着せず度量ひろきこと。胸中あらふが如くさっぱりしてあること、「風流――の人」。(洒々落々)。

(しやら-くさい［洒落臭］(形) きいたふうなり。なまいきなり。

(しやら-くら(名、副) あだ〳〵しきさま又はいやらしきさまにいふ語、「――した婦人」。

シャラ-じゆ［沙羅樹］(名)【植】「サラじゆ」に同じ。

(しやら-しやら(名、副) ㊀「しやらくら」に同じ。㊁くだらぬこと、又はバカらしきことにいふ語。(京阪地方の方言)。

(しやら・す さし、す、すせ、せ(他、さ四) しやる、やうにす。「猫なー」。

シャラ-そう-じゆ［沙羅雙樹］(名)「サラそうじゆ」に同じ。

(しやら-つ・く か、き、く、く、け、け(自、か四) ㊀しやらくらす。「心任せなるやうにしやらつきて」。㊁たはむる。しや

やれる。

(しやり(名) 純粹の錫。たうす。

シャリ［舍利］(名) ㊀死骸を火葬に附して殘りたる骨、碎(クダ)けず朽(ク)ちず永く殘存せる骨。㊁（梵語Sarira、骨・身の義）「ブッシャリ」(佛舍利)の特稱。㊂陸奧國津輕地方より出だす一種の白石。㊃十分成長したる蠶の、絲を吐出せずして白く固(カタ)まりて死にたるもの。㊄米粉の異稱。

(しやり［射利］(名) 手段の如何に關せず、たゞ利を得んとのみ心をかくること。又、確(シク)かなる目的なく、たゞ偶然に利を得んともくろむこと。

(しやり［瀉痢］(名) はらくだし。はらくだり。

(しやり［砂利］(名)「さり」の訛。(沙礫)。

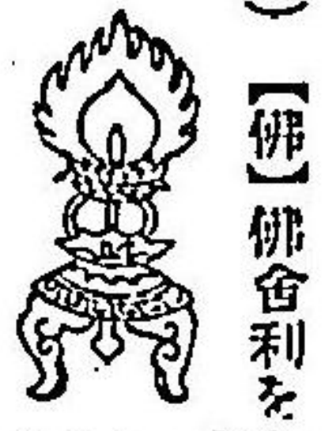
(しや-りう［者流］(名) 其たぐひ。其なかま。「長袖――」。

(しやり-えん［瀉利鹽］(名)【化】硫酸「マグネシウム」の通稱。

(しやり-かうべ ウ-ベ［髑髏］(名)「されかうべ」に同じ。

(しやり-き［車力］(名) 大八車などを挽(ヒ)きて、荷物を運ぶことを業とする人。

シャリ-タフ ウ-ト［舍利塔］(名)【佛】佛舍利を安置する塔形の小龕。


［シャリタフ］

シャリベツ［舍利別］(名)（「ラテン」語Sirupos）砂糖又は砂糖分を煮詰めたるもの。

(しやり-やう リ-ヨウ［車輛］(名) ㊀くるまのかず。㊁くるま。

(しやり-やう リ-ヨウ［社領］(名) 神社の領地。社地。

(しやり-よう［斜稜］(名)【數】角錐又は截頭角錐の相隣れる二斜面の會する線。

シャリ-ゑ［舍利會］(名)【佛】佛舍利の供養。

(しや-りん［車輪］(名) ㊀車の輪。㊁役者などが一生懸命になりて、藝をつとむること。

(しや・る れ、れ、る、るる、るれ、れよ［曬］(自、ら下二)「さる」に同じ。

(しや-るゐ［蛇類］(名)【動】爬蟲類に屬する動物、體は圓筒形にして、尾長く四肢なし、皮面に鱗を被る、背部の鱗は小さくして數列をなし、腹部はたゞ一列の大鱗あるのみ、脊椎骨及肋骨の數極めて多く、肋骨の末端と腹部の鱗とによりて爬行す。へび。

(しやれ［洒落］(名) ㊀あだめきたる身なり。はなやかなるよそほひ。㊁氣のきゝたるさま。下俗ならぬさま。㊂きいたふう。なまいき。㊃座興にいふ滑稽の文句、即ち或文句をもぢりていふ地口の類。

(しや-れい［謝禮］(名) 禮儀をのべいふこと。又、禮意を表したる贈物。

しやれ-いた［曬板］(名) 風雨にさらされたる板。

しやれ-かうべ ウ-ベ［曬首］(名)「されかうべ」に同じ。どくろ。

しやれ-がひ イ-ガ［曬貝］(名) 水にさらされたる貝。

しやれ-き［曬木］(名) 風雨にさらされたる材木。

(しや-れき［砂礫］(名) すなこいし。

(しやれ-もの［洒落者］(名) ㊀はなやかに着かざる人。㊁氣のきゝたる事をなす人。㊂滑稽をいふ人。又、滑稽に巧なる人。

(しや・れる れ、れ、る、るる、るれ、れよ［洒落］(自、ら下二) ㊀あだめきたる身なりをなす、はなやかなるよそほひをなす。㊁氣のきゝたる事をなす、下俗ならぬふるまひをなす。㊂きいたふうをなす。なまいきなるさまをなす。㊃しやれをいふ。滑稽をいふ。

(しや・れる れ、れ、る、るる、るれ、れよ［戲］(自、ら下二) たはむる。なれてとりつく。

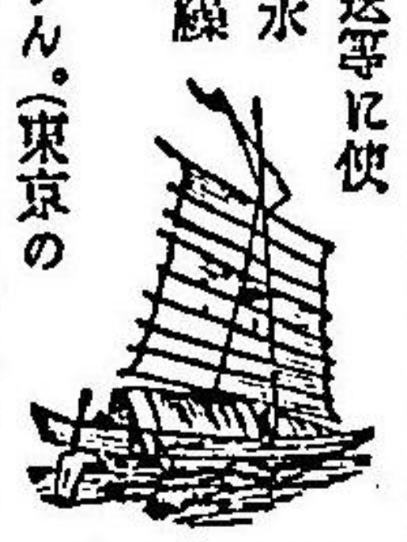
(しや-ろう［沙漏］(名) すなどけい。

(しや-ろん［邪論］(名) よこしまなる論。不正なる說。へきろん。

(しや-ゐん［社員］(名) 其社を組織する人。又、其社につとむる人。

シャン［靑素＝Cyanogen］(名)【化】無色にして桃仁の如き臭氣ある瓦斯、毒性あり。

ジャンク［Junk］(名) 支那人が沿海又は河川等にて乘客又は荷物の搭載運送等に使用する船、狹長にして高く水上に出づ、帆又は櫓にて操(アヤツ)るもの。


［ジャンク］

(しやん-けん(名) いしけん。(東京の方言)。――ぽい(名) 前條に同じ。又、いしけんのかけ聲。

(しやん-こ(名) あばた。いもがほ。(東京の方言)。

(しやん-しやん(名、副) ㊀鈴などの音。㊁すばやくふるまふさまにいふ語。

(シャン-ス［情人］(名)（相思の唐音）こひびと。(九州の方言)。

(しやん-す(助)「なさいます」に同じ。多く打消又は命令などに用ふ。「あれ見やしやんせ海晏寺」。

シャント［Shunt］(名)【理】電路の中央に作りたる岐路、本電路を通過する電流強きに失して、電流計の感ずる所強きに過ぐるか若しくは他に害を及ぼす恐あるとき、強き電流を通過せしめざらんために附するもの。

シャンパン［三鞭酒］(名)「フランス」國Champagneより製出する美酒、洋酒中最も高價なるもの。

シャンペン［三鞭酒］(名) 前條に同じ。

(しゆ［朱］(名) ㊀【化】硫化第二水銀の稱、古來赤色の顏料に供せらる。㊁あけ。㊂朱墨の略言。㊃銖の略字。

(しゆ［銖］(名) ㊀秤の名、兩の二十四分の一。㊁舊

貨幣一歩の四分の一即ち兩の十六分の一、銀目の三匁七分五厘にあたる。

(しゆ)[主](名) ㊀ぬし。あるじ。㊁しゆう。主君。㊂きみ。君王。㊃かみ。神靈。㊄かたしろ。位牌。「殷文王之木—」。㊅つかさ。をさ。主宰。㊆おも。もと。「榮辱之—也」。㊇其もの自身。㊈行動を受くるもの。受動者。「彼は客たり我は—たり彼は勞し我は逸す」。㊉行動を起すもの。起動者。⑪「キリスト」教にて、耶蘇基督の稱。「—子を愛す」。

(しゆ)[首](名) ㊀かしら。㊁はじめ。㊂もと。

(しゆ)[種](名) ㊀たね。㊁たぐひ。㊂しな。

(しゆ)[取](名) 【佛】二十歳以後、愛欲の念さかんにして諸法に執着し、四方に馳せ求むると。

(しゆ)[脂油](名) 【化】脂肪に類する成分にして、通常溫度にて液狀なるもの。

(—しゆ)[首](接尾) 詩歌を數ふる[illegible]詞。「十—[illegible]歌を咏ず」。

(しゆ)[儒](名) ㊀儒者。「小人—」。㊁儒教、儒學。「—を掲げて老佛を排す」。

(しゆ)[樹](名) たちき。き。

(しゆ)[壽](名) ㊀いはひ、ことほぎ。㊁とし。よはひ。(年齡)。㊂ながいき。長生。

(しゆ)[綬](名) ㊀支那にて、官職の標章たる印を佩ぶるに用ふるくみひも。㊁我國にて、勳章・褒章又は紀念章・從軍記章等を佩用するに用ふるひも。

(しゆ)[頌](名) 【佛】德を稱する詞。じゆ。しよう。

(しゆ)[受](名) 【佛】幼時たゞ目前のものを取るのみにて、執着心を生ぜざると。

(しゆ)[呪](名) ㊀のろひ。まじなひ。㊁【佛】陀羅尼。

(しゆ—)[從](接頭) 同位階にて、正の下に位するもの。「—五位」。

(しゆ・あく)[首惡](名) 犯罪の張本人。はっとうにん。

(しゆ・あふ)[手押](名) ぼいん。つめいん。

(しゆ・い)[殊異](名) ㊀ことなると。ちがふと。㊁かくべつ。とくべつ。

(しゆ・い)[主意](名) おもなるこゝろ。ほんい。

(しゆ・い)[趣意](名) おもひ。かんがへ。むね。意見。——**がき**[趣意書](名) 趣意を記したる文書。——**しよ**[趣意書](名) 前條に同じ。

(しゆ・いう)[酒友](名) さけのみともだち。

(しゆ・いつ)[主一](名) ㊀心を一方にのみ注(ソ)ぐと。專一に思ふと。熱中。㊁精神を收拾して散亂せしめざると。——**むてき**[主一無適](名) 精神を收拾して、外物に心をなやましめざると。

(しゆい・てんさう)[朱衣點頭](名) (宋の人がうなづく義、歐陽修の故事に出づ)文詞の選拔にあふと。

(しゆ・いん)[主因](名) おもなる原因。

(しゆ・いん)[朱印](名) ㊀朱字の印。又、朱肉の印。㊁「ごしゆいん」に同じ。——**ち**[朱印地](名) 「ごしゆいんち」に同じ。——**ぶね**[朱印船](名) 「ごしゆいんぶね」に同じ。

(しゆ・いん)[樹蔭](名) 樹木のかげ。こかげ。

(しゆう)[宗](名) ㊀宗教、宗門。㊁宗教の分派、わかれ。「禪—」、「淨土—」。

(しゆう)[衆](名) ㊀もろ〳〵のひと。おほくのひと。もろびと。㊁多人數のもの。「—寡敵せず」。

(しゆう)[主](名) わがつかふるあるじ。しゆくん。

(しゆう)[雌雄](名) ㊀めとをと。めすとをすと。㊁まけとかちと。「—を決す」。㊂おとるとまさると、又、弱きと強きと。——**いしゆ**[雌雄異株](名) 【植】雌花と雄花と株(カブ)を異にして各生すると。——**いたい**[雌雄異體](名) 【動】雌と雄と各體の異なると、脊椎動物・節足動物等は皆なこれなり。

(しゆう)[從](名) ㊀とも、けらい。㊁主たるもの、附屬。

(しゆう)[縱](名) ㊀たて。㊁南北。

(しゆう)[銃](名) 小銃又は維銃、即ち銃器。

(しゆう・い)[戎衣](名) いくさごろも。ぐんぷく。

(しゆう・いつ)[充溢](名) みちあふるゝと。

(しゆう・えい)[充盈](名) みつると。いっぱい。

(しゆう・えん)[終焉](名) 死に瀕せるとき。いまは。末期。最期。斷末魔。

(しゆう・か)[銃架](名) 小銃をのせ置く臺。

(しゆう・かう)[崇高](名) 「すうかう」に同じ。

(しゆう・かいがん)[縱海岸](名) 【地】山脈の主軸と相併行する海岸。

(しゆうか・ぜい)[從價稅](名) 品物の價格を標準として徵收する關稅。——**りつ**[從價稅率](名) 從價稅を課する一定の割合。

(しゆう・がん)[銃眼](名) 小銃を發射するため障壁などに穿(ウガ)ちたる孔。

(しゆう・ぎ)[衆議](名) 多人數の評議。又、多數者の議論。

(しゆう・き)[終期](名) 或事柄のをはるとき。

(しゆう・き)[戎器](名) 戰爭に使用する目的の器具器械。

(しゆう・き)[銃器](名) 小銃又は維銃の類。

(しゆう・きよく)[終極](名) はて。つめ。をはり。

(しゆう・きよく)[終局](名) 事件の落着。しまひ。はて。——**はんけつ**[終局判決](名) 【法】訴訟事件の全部若しくは一部を終局せしむる判決、確定判決と異なり。中間判決の對。

(しゆうぎ・ゐん)[衆議院](名) 帝國議會の一部、臣民の公選により當選したる衆議院議員を以て組織せらる、豫算案は貴族院より先にこゝに提出せらるゝを先例とす、議員の任期(解散なき場合)は四年とし、年齡廿五歳以上の帝國臣民たる男子にして、選擧人名簿調製の期日前滿一年以上其選擧區內に住所を有し、且直接國稅十圓以上を有するものは、普通(規定の制限なき限り)これが選擧權を有し、年齡三十歳以上の帝國臣民たる男子は、納稅の有無多寡を論ぜず普通(規定の制限なき限り)これが被選擧權を有す。

(しゆう・ぐ)[衆愚](名) おほくのバカもの。

(しゆう・ぐ)[戎具](名) 戎器其他軍事に要する一切の用具。いくさだうぐ。

(しゆう・くわ)[衆寡](名) 人數の多きと少きと。

(しゆう・くわ)[銃火](名) 銃器の發火。

(しゆう・くわん)[縱貫](名) たてにつらぬくと。南北につらぬくと。——**てつだう**[縱貫鐵道](名) 地域の南北に貫通する鐵道。

(しゆう・ぐわん)[銃丸](名) 小銃[illegible]丸。てっぱうだま。

(しゆう・ぐん)[從軍](名) 軍隊に從ひて出陣すると。——**きしや**[從軍記者](名) 新聞社又は雜誌社等より派出せられ、軍隊に從ひて出陣せる記者。——**きしやう**[從軍記章](名) 軍功の有無を論ぜず、從軍したるものに賜はる記章。

(しゆう・けい)[銃刑](名) 小銃にて打殺す刑罰。

(しゆう・けい)[從兄](名) 年上の男のいとこ。

(しゆう・けいてい)[從兄弟](名) いとこ。

(しゆう・けう)[宗教](名) 吾人が人生に超越せる崇高偉大なるものを提欲する感情に起因し、これを人格化して崇拜し信仰し、迎(ヨ)りて慰藉・安心・幸福を得て以て人生の缺陷を補はんとするもの、從ひて一面には禮拜の儀式を生じ他面には命令の權威を生ず、今日に於て最も勢力あるは佛教・「キリスト」教・「フヰフヰ」教・「ユダヤ」教等とす。——**か**[宗教家](名) 宗教を信仰する人。又、宗教を宣傳する人。——**きやう**[宗教狂](名) 宗教に熱心のあまり、常識を失したるかと見ゆる擧動あると、又、其人。——**きよく**[宗教局](名) 內務大臣の統轄の下に屬し、其意思を受けて、神佛各派・寺院又は宗教の用に供する堂宇其他宗教及僧侶等に關する事項を取扱ふ內務省の一局。——**てつがく**[宗教哲學](名) 【哲】宗教の原因・成立・發展等を考察し研究する哲學。

(しゆう・げき)[銃擊](名) 小銃を打ちかくると。

(しゆう・けつ)[終決](名) きまりのつくと。

(しゆう・けつ)[終結](名) ㊀しまひ。はて。をはり。㊁【數】定理を搆成する第二の部分、即ち假設より起り來るべしと主張する所のもの。——**やどぬし**[終結宿主](名) 【動】條蟲が先づ鰓脚類に寄生し後人體に入りて成熟するが如く、先づ或動物を宿主としたる寄生蟲が最後に宿主とするものの稱。

(しゆう・けつ)[充血](名) 身體の或部局に血液が過度にみつると。

(しゆう・けん)[戎軒](名) 戰場にて將校の乘る車。又、戰鬪に從事すると。「投筆事—」。

(しゆう・げふ)[終業](名) 業ををふると。

(しゆう・けん)[銃劍](名) ㊀銃と劍と。㊁銃のさきにつくる劍。㊂けんつきてっぱう、しゆうさう。——**しゆつ**[銃劍術](名) 銃槍を使用して己を防ぎ敵を擊つ術。

(しゆう・こ)[終古](名) 長き年月。永遠。

(しゆう・こう)[衆口](名) 多くの人のいふ所、多くの人の評判。——**きんをとろかす**[衆口鑠金] 多くの人のことばは、人の心を動かすとの大なるにいふ。

(しゆう・こう)[銃口](名) 銃器の筒口。

(しゆう・こく)[縱谷](名) 【地】山脈と平行する谷。

(しゆう・ころし)[主殺](名) 主君を弑すると。又、其者。

(しゆう・さい)[終歳](名) 一年中。

(しゆう・さう)[戎裝](名) 出陣のしたく。戎衣のよそほひ。

(しゆう・さう)[銃創](名) 銃丸のために受けたる創(キズ)。てっぱうきず。

(しゆう・さう)[銃槍](名) 銃のさきに劍をつけたるもの。けんつきてっぱう。——**しゆつ**[銃槍術](名) けんつきてっぱうを使用して、己を防禦し敵を刺擊する術。

(しゆう・さんか)[從參加](名) 【法】他人間の訴訟に、權利上利害の關係を有する第三者が、自己の利益のために、當事者の一方を補助せんとして其訴訟に參加すると。

(しゆう・し)[宗旨](名) ㊀宗門のおもなる趣旨。㊁宗門。㊂商賣又は職業などの稱にいふ語。

(しゆう・し)[螽斯](名) 【動】「きりぎりす」に同じ。

(しゆう・し)[終始](名) ㊀をはりとはじめと。㊁關係して其經過消長を同じくすると。

(しゆう・し)[終止](名) をはり。はて。しまひ。——**げん**[終止言](名) 【文法】活用言語尾變化の一にして、文の終に用ひらるゝ形、例へば、「道を行く」「花を見る」「子を育つ」の「行く」「見る」「育つ」の類。

(しゆう・し)[從姉](名) 年上の女のいとこ。

(しゆう・し)[從子](名) をひ。

(しゆう・し)[從士](名) つきそふさむらひ。とものさむらひ。

(しゆう・じ)[從事](名) ㊀其事をなすと。其事をつとむると。㊁自分の仕事となすと。

(しゆう-し[戎事](名) 戰爭に關する事。
(しゆう-しつ[終日](名) いちにち。ひねもす。
(しゆう-しつ[充實](名) すきまなくみちてあること。みちふさがること。缺陷なきこと。
(しゆう-しや[從者](名) ともびと。ずさ。
(しゆう-しやう[銃傷](名) てっぱうきず。
(しゆう-しやう[銃床](名) 小銃の銃身を裝置する部分、木材にて作る。てっぱうのだい。
(しゆう-しゆ[銃手](名) 小銃をうつもの。
(しゆう-しゆう[主從](名) 主君と從者。しゆうとけらいと。「—共に落ち行く」。
(しゆう-しゆん[從順](名) すなほにしてさからはぬこと。やさしきこと。
(しゆう-しよ[衆庶](名) もろびと。人民。
(しゆう-しん[終審](名) ㊀最後のしらべ。㊁[法]上訴の途なき裁判所の審問及裁判。
(しゆう-しん[終身](名) 身まかるまでの間。一生涯。 —ぎゐん[終身議員](名) 本人の辭職せざる限りは解職せらるゝことなき議員、即ち勅選又は學識によりて勅任せられたる貴族院議員の如きこれなり。 —くわん[終身官](名) 有罪の宣告又は懲戒處分の外、自ら辭職せざる限りは免ぜらるゝことなき官、裁判官又は陸海軍武官の如きこれなり。 —ていきん[終身定期金](名) [法]當事者の一方が、自己又は相手方若しくは第三者の死亡まで、定期給與せんことを契約したる金。 —ちようえき[終身懲役](名) 以前の刑名、今の無期徒刑にあたる。 —ねんきん[終身年金](名) 勳章に附屬して、其勳章受領者に、終身の間給與せらるゝ年金。
(しゆう-じん[衆人](名) おほくの人。もろびと。

(しゆう-しん[銃身](名) 銃の主要部にして、彈丸をこめて發射する部分、鋼を以て作り、圓筒狀をなすもの、下尾底に機關を裝置し、上面の先端に照星等を裝置す。
(しゆう-しん[縱震](名) [地]山脈に並行して地殼に生ずる斷層のために起る地震。
(しゆう-せい[終生](名) いのちの終(ヲ)はるまでの間。しやうがい。(一生涯)。
(しゆう-せい[終成](名) できあがること。
(しゆう-せい[銃聲](名) 銃にて彈丸を發射する聲。
(しゆう-せう[終宵](名) よもすがら。
(しゆう-せき[終夕](名) 前條に同じ。
(しゆう-せつ[衆說](名) 諸人の說。又、多數の說。
(しゆう-せん[縱線](名) たてのすぢ。
(しゆう-せん[銃戰](名) 敵と小銃のうちあひ。
(しゆう-ぜん[從前](名、副) まへかた。以前。「—の通り」。
(しゆう-そく[充塞](名) みたしふさぐこと、又、みちふさがること。
(しゆう-そく[充足](名) みたしたすこと。又。みちたること。 —げんり[充足原理＝Principle of sufficient reason](名) 「物あれば必ず其成立の理由又は原因存す」といふ原理。
(しゆう-ぞく[從屬](名) したがひつくこと。又、つきしたがふもの。
(しゆう-そつ[從卒](名) ㊀從屬する兵卒。㊁一將校に專屬して、其使役に服する兵卒の特稱。
(しゆう-そつ[銃卒](名) 銃を執(ト)る兵卒。
(しゆう-そふ[從祖父](名) 父のいとこ。
(しゆう-そぼ[從祖母](名) 從祖父の妻。
(しゆう-たい[銃隊](名) 銃卒を以て組織したる軍隊。
(しゆう-たい[縱隊](名) 縱列にくみたる隊形。

(しゆう-だい[銃臺](名) 銃をのせおく臺。
(しゆう-たい-せき[終堆石](名) [地]氷河の堆石が、氷河の雪線以下に下りて融解するとき、殘留して沈積したるもの。
(しゆう-たう[充當](名) あてはまること。あたること。
(しゆう-たう-た[雌雄淘汰＝Sexual selection](名)[動]きじ・やまどり・孔雀等の雄(ヲス)が、其雌(メス)よりも形狀彩色の格別にすぐれたる今日の狀態は、雌がすぐれたる雄を選擇する事例の幾百代間繼續したるによりて成りたりといふこと。
「しゆう-だふし[主倒](名) 主人の迷惑になるべきことをしむくること。「親方思ひの—」。
(しゆう-たん[絨毯](名) 舶來の花毛氈、敷物とす。
(しゆう-だん[銃彈](名) 銃器の彈丸。
(しゆう-だん[縱斷](名) たてにたちきること。
(しゆう-ちゆう[衆中](名) 多人數のなか。
(しゆう-ぢん[銃陣](名) 銃隊を以て組織したる陣。
(しゆう-てい[從弟](名) 年下の男のいとこ。
(しゆう-てう[終朝](名) 朝一ぱい。朝の間。
(しゆう-てき[戎狄](名) えびす。(夷狄)。
(しゆう-てん[終點](名) をはりとなる箇所。
(しゆう-てん[充塡](名) つむること、又、つまること。
(しゆう-と[宗徒](名) 宗門の信者。信徒。
(しゆう-どう-しゆ[雌雄同株](名)[植]雌花と雄花とが同一の株にあること。
(しゆう-どう-たい[雌雄同體](名)[動]一個の動物が、雌雄兩性の生殖器を具有すること。
しゆう-どり[主取](名) 召抱へられて其人の臣下となること。あらたに主人をとること。
(しゆう-ねん[終年](名) 一年中。又、一生涯。

いう

(しゆう-は[宗派](名) 宗門の分派。
(しゆう-は[縱波](名) ㊀船の首尾の方向に平行してうつ水波。㊁[理]波動の進む方向と媒體各部の振動の方向と一致する波。
(しゆう-は[銃把](名) 銃床の手に把る所。
(しゆう-はい[崇拜](名) あがめたふとぶこと。歸依すること。信仰すること。そうはい。「英雄—」。
(しゆう-はう[銃砲](名) 小銃と大砲と。
(しゆう-はふ[從法](名) [法]主法を實行する方法を規定したる法律、即ち手續法。
(しゆう-はん[從犯](名) [法]正犯が重罪又は輕罪を犯す情を知り、これに器具を供與し又は其犯人を誘導指示し若しくは豫備の所爲を以てこれを幇助したるもの。
(しゆう-び[終尾](名) をはり。しまひ。
(しゆう-び[衆美](名) おほくのうつくしきもの。
(しゆう-び[崇美](名) 「そうび」に同じ。
(しゆう-び[充美](名) たりとゝのひて美なること。
(しゆう-び[充備](名) 十分にとゝのひそなふこと。又、十分にとゝのへそなふること。
(しゆう-ひやう[衆評](名) おほくの人の批評。又、世間の評判。
(しゆう-ふ[從父](名) をぢ。
(しゆう-ふく[戎服](名) 軍服。
(しゆう-ふけい[從父兄](名) 從兄。
(しゆう-ぶつ[從物](名) 主物に附屬するもの。ふぞくぶつ。
(しゆう-ふてい[從父弟](名) 從弟。
(しゆう-ぶん[充分](名、副) 物ごとのたりとゝのひて不足なきさまにいふ語。(十分)。
(しゆう-へい[從兵](名) つき從ふ兵卒。手勢。
(しゆう-へい[戎兵](名) むしや。ぐんびやう。

(しゆう-ぼ[從母](名) 母方のをば。
(しゆう-ぼく[從僕](名) つかひをとこ。しもべ。
(しゆう-まい[從妹](名) 年下の女のいとこ。
(しゆう-まう[衆盲](名) ㊀おほくのめくら。㊁おほくの愚者。
(しゆう-まつ[終末](名) をはり。終尾。
(しゆう-まん[充滿](名) 充分に滿つること。のこるくまなくみつること。いっぱい。
(しゆう-めい[主命](名) 主君のおほせ。
(しゆう-もうふ[絨毛布](名) 毛織の布。
(しゆう-もく[衆目](名) 多くの人の目。多くの人の觀察。「—の見る所」。
しゆう-もち[主持](名) 主人に事(ツカ)へてある身分。又、其身分のもの。
(しゆう-もん[宗門](名) 其教義を崇重して歸依する人の入る所、即ち宗教の端緒又は區別。
(しゆう-や[終夜](名) よもすがら。
(しゆう-よう[主用](名) 主君の用事。
(しゆう-らい[從來](副) まへかたより、以前より。
(しゆう-らん[縱覽](名) 思ふまゝに見ること。隨意に見物すること。
(しゆう-りう[衆流](名) ㊀多くの水流。㊁多くの流儀。
(しゆう-りやう-ぜい[從量稅](名) 貨物の數量を標準として賦課する關稅。 —りつ[從量稅率](名) 從量稅を課する一定の割合。
(しゆう-れう[終了](名) をはり。しまひ。はて。
(しゆう-れつしや[終列車](名) 當日の最後に發する列車。
(しゆう-れふ[銃獵](名) 小銃を以て鳥獸を打ちとる獵。
(しゆう-ろん[宗論](名) 宗派の優劣又は眞僞の議論。

(しゆう-ろん[衆論](名) 衆人の論。
(しゆう-わう[縱橫](名) ㊀たてとよこと。㊁自由自在。 —か[縱橫家](名) ㊀國と國との離合の計策を立つるもの、即ち蘇秦・張儀の類。㊁轉じて、中間に立ちて術略を用ふる人。 —むげ[縱橫無礙](名) 自由自在にして何等のさはりもなきこと。「—に切りまくる」。 —むじん[縱橫無盡](名) 自由自在にして究極なきこと。
(しゆう-ゐん[充員](名) 補充する人員。 —せうしふ[充員召集](名) 充員の必要により、在鄕軍人を召集すること。
(しゆ-えい[輸贏](名) かちまけ。しようぶ。
(しゆ-えい[孺嬰](名) ちのみご。赤子。乳兒。
(しゆ-えう[主要](名) おも。かなめ。かんえう。
(しゆ-えう[需要](名) ㊀もとむること。もとめ。㊁[經]財を獲得しこれが報酬として支拂ふべき他の財を有する者がその財を獲得して慾望を充さんとする願望、供給の對。
(しゆ-えき[受益](名) 利益をうくること。
(しゆ-えふ[樹葉](名) 樹木の葉。「—繁茂」。
(しゆ-えん[酒宴](名) さかもり。
(しゆ-えん[壽宴](名) ㊀いはひの酒宴。㊁としいはひの酒宴。
(しゆ-おん[主恩](名) 主人の恩。
(しゆ-おん[受恩](名) 恩をうくること。又、うけたる恩。
(しゆ-か[首夏](名) ㊀夏のはじめ。㊁陰曆四月の稱。
(しゆ-か[主家](名) 主人の家。
(しゆ-か[酒家](名) ㊀さかや。さかみせ。㊁さけのみ。
(しゆ-が[主我](名) ㊀[哲]思惟し經驗する吾人自身、即ち主觀的自己。㊁[倫]他人の利害如何に關

せず、たゞ自己の慾情願望を遂(ト)げんとすること、何事も自己の利害より割り出すこと。利己。

じゆ-か【樹下】(名) 樹木のもと。「一石上」。

じゆ-か【儒家】(名) 儒道。又、儒者。

しゆ-かい【酒海】(名) 昔時、酒を盛りたる一種の器。

しゆ-かい【手械】(名) てかし。

じゆ-かい【授戒】(名) 始めて佛門に入る者に戒を授(サヅ)くること。

じゆ-かい【受戒】(名) 始めて佛門に入る者の戒を受(ウ)くること。

じゆ-がい【孺孩】(名) あかご。ちのみご。

しゆ-かう【趣向】(名) ㊀おもむき。こゝろざし。㊁おくみ。かんがへ。工夫。意匠。

しゆ-かう【酒肴】(名) さけとさかなと。

じゆ-かう【壽考】(名) ながいき。長命。

しゆ-かく【酒客】(名) さけのみ。

しゆ-かく【主客】(名) 主と客と。

しゆ-かく【主格】(名) ㊀【文法】主語を示す格。㊁主體。

しゆ-かく【手格】(名) 拳(コブシ)をかためてうつこと。

しゆ-がく【朱學】(名) 「しゆしがく」(朱子學)に同じ。

じゆ-がく【儒學】(名) 孔子の説きたる道を奉じ、傍ら子思・孟子のこれを敷衍したる言に據り、四書・五經等を所依とする學問の總稱。倫理を修め品性を養ひ、完全なる人格を現成せんことを旨とするもの。

じゆか-せきしやう【樹下石上】(名) (樹の下と石の上との義)山野又は路傍などにやどること。

しゆ-かん【手簡】(名) てがみ。

しゆ-かん【主幹】(名) とりしまり。しゆにん。(主監)。

しゆ-がん【主眼】(名) 肝心の所。主要の點。かなめ。

しゆ-がん【朱顏】(名) あかきかほ。

しゆ-がん【首頷】(名) うなづくこと。

じゆ-かん【樹幹】(名) 樹木のみき。

しゆ-き【酒氣】(名) ㊀酒のかをり。酒のあぢ。㊁酒を飲みたるけはひ。酒に醉(ヱ)ひたるにほひ。

しゆ-き【手記】(名) てづから記しおくこと。おぼえがき。

しゆ-き【酒器】(名) 酒を酌(ク)むに用ふる器、即ち杯の類。

しゆ-き【酒旗】(名) さかばた。(酒帘)。

しゆ-き【珠璣】(名) 大小のたま。轉じて、長短の名句。

しゆ-ぎ【手技】(名) 手にてするわざ。

しゆ-ぎ【主義】(名) 執(ト)り守る一定の方針。旨として主張する標準。

じゆ-き【壽器】(名) 棺の異稱。

じゆ-き【受寄】(名) 【法】寄託をうくること。「一者」、「一物」。

しゆ-きう【守舊】(名) 舊習を守ること。(保守)。

しゆ-ぎう【種牛】(名) たねうし。

じゆ-きう【需求】(名) もとむること。もとめ。

しゆ-きふ【首級】(名) (支那の古代に、戰ひて敵の首一つとれば級一つ上りたるよりいふ)討ち取りたる首。しるし。(頭)。

じゆ-きふ【需給】(名) 需要と供給と。

しゆ-きやう【酒狂】(名) 酒に醉(ヱ)ひてくるふこと。又、其性質。

しゆ-ぎやう【執行】(名) ㊀事務を取扱ふこと。㊁寺院にて、事務を總理する職名。「吉野山の一」。

しゆ-ぎやう【修行】(名) ㊀佛門の法を修(サフ)め行ふこと。㊁をさめ研(ミガ)くこと。きたひ練(ネ)ること。つとめまなぶこと。㊂研究練磨のために、諸國をへめぐること。「武者一」。——じや【修行者】(名) 佛道を修行する人。又、武術を修行する人。

しゆ-きゆう【守宮】(名) 【動】「やもり」に同じ。

しゆ-きよ【狩漁】(名) かりとすなどりと。——じだい【狩漁時代】(名) 【經】「ぎよれふじだい」(漁獵時代)に同じ。

じゆ-ぎよ【入御】(名) 天子などの禁内に入らせらるゝこと。

しゆ-きよう【酒興】(名) 酒に醉(ヱ)ひての興。又、酒宴の坐興。

じゆ-きよう【入輿】(名) 輿に入ること。

しゆ-ぎよく【珠玉】(名) ㊀眞珠と玉と。「金銀一」。㊁美(ウツク)しきもの又は貴きものにいふ語。

しゆ-きん【手巾】(名) てぬぐひ。「ハンケチ」。

しゆく【宿】(名) ㊀やどること。とまること。㊁やど。はたごや。㊂とのゐ。とまり。㊃しゆくえき。しゆくば。うまや。「藤澤の一」。㊄ほしのやどり。星座。㊅久しきこと。又、ふるきこと。㊆一よさ。一夜。

しゆく【叔】(名) ㊀父母の弟妹。をぢ。をば。㊁おとうと。小舅。㊂同胞の第三番目のもの。㊃すゑ。をはり。

じゆく【塾】(名) ㊀門の側(ワキ)にある屋舍。もんながや。㊁修學の子弟の寄宿所。又、子弟を教授する學舍。

しゆく-あ【宿痾】(名) 久しく治(ナホ)らぬ病氣。(宿疾)。

しゆく-あく【宿惡】(名) ふるき惡事。舊惡。

しゆく-い【祝意】(名) 祝(イハ)ひことほぐこゝろ。

しゆく-い【宿意】(名) ㊀かねての意見。かねての見込。「一をのぶ」。㊁かねてのうらみ。以前の遺恨。

しゆく-いん【宿因】(名) 前世の因緣。

しゆく-う【宿雨】(名) ㊀連日ふりつゞくあめ。㊁ぜんやよりの雨。宵(ヨヒ)ごしの雨。

しゆ-ぐう【殊遇】(名) 特別のてあつきもてなし。

++しゆく-え【宿衣】(名) うへのきぬとさしぬきと。

しゆく-えい【宿營】(名) とまりて居る營所。又、とのゐの營所。

しゆく-えう【宿曜】(名) ㊀二十八宿と九曜星との稱。㊁二十八宿と九曜星とによりてなす一種のト占(ウラナヒ)。「一師」。

しゆく-えき【宿驛】(名) 街道の旅客をやどし又は荷物の運搬に要する人馬をつぎたつる設備のある所。しゆくば。しゆく。

しゆく-えん【祝宴】(名) いはひの酒宴。(祝筵)。

しゆく-えん【宿緣】(名) 前世の因緣。

しゆく-が【祝賀】(名) ことぶきいはふこと。——じやう【祝賀狀】(名) 祝賀の意をのぶる書狀。「新年の一」。

しゆく-かう【淑行】(名) 婦人のたゞしきおこなひ。

じゆく-かう【熟考】(名) 深く考(カンガ)ふること。つくづく考ふること。(熟慮)。

しゆく-がく【宿學】(名) むかしより名望ある學者。

じゆく-かく【熟客】(名) なじみきやく。

しゆく-き【夙起】(名) 朝はやく起(オ)くること。

しゆく-き【宿耆】(名) としより。老人。

しゆく-き【祝祈】(名) いはひて未來の幸福をいのること。

しゆく-き【淑氣】(名) 新春の氣。「一催黄鳥」。

じゆく-ぎ【熟議】(名) ㊀つくづくと評議すること。㊁評議のよくとゝのふこと。

じゆく-くわ【熟果】(名) 熟したるくだもの。

しゆく-くわん【宿患】(名) ㊀むかしよりのうれひ。㊁久しき前からの病氣。

しゆく-ぐわん【宿願】(名) 年來の願。かねてののぞみ。(希望)。

しゆく-けい【肅敬】(名) つゝしみてみだりがはしからざること。つゝしみうやまふこと。

しゆく-けい【肅啓】(名) ㊀つゝしみて申上ぐること。㊁書狀の起首にかく語。

じゆく-ご【熟語】(名) 二つ以上の語を合して、一つの意義となすもの。又、普通に用ひられて、其使用の場合のおよそ定まれる語。

しゆく-こう【夙興】(名) 朝早く起くること。

しゆく-こう【宿構】(名) かねてこしらへおくこと。以前につくりおきしこと。

しゆく-こつ【倏忽】(名) たちまち。にはか。

しゆく-ごふ【宿業】(名) 宿世の因業。過去のむくい。

しゆく-こん【宿根】(名) 【植】莖枝は其年に枯(カ)るれど、根は殘りて明年又芽を出だすもの。——さう【宿根草】(名) 【植】宿根を有する草本。

しゆく-さい【祝祭】(名) いはひのまつり。又、いはひとまつりと。「一日」。

しゆく-ざい【宿罪】(名) 「げんざい」(原罪)に同じ。

しゆく-さつ【肅殺】(名) 秋氣の草木などを枯(カ)らすこと。

じゆく-さつ【熟察】(名) よくよくみきはむること。つまびらかにかんがふること。

しゆく-し【宿志】(名) かねての志望。

しゆく-し【夙志】(名) 早くより立てたる志。幼時よりの志。

しゆく-し【祝詞】(名) 賀意をのぶることば。

しゆく-し【宿紙】(名) 「すきかへし」に同じ。

しゆく-じ【祝辭】(名) 「しゆくし」(祝詞)に同じ。

しゆく-じ【宿次】(名) ㊀やどり。㊁しゆくば。

じゆく-し【熟思】(名) つらつらおもひめぐらすこと。つくづくと考ふること。

じゆく-し【熟視】(名) つくづくとみること。みつむること。

じゆく-し【熟柿】(名) きざはしの柿。

じゆく-じ【熟字】(名) 二つ以上の漢字合して一つの意義となるもの。又、普通に用ひられて、其使用の場合の多く定まれる漢字。

しゆく-しう【縮收】(名) ちゞまりをさまること。又、ちゞめをさむること。

しゆく-しつ【宿疾】(名) もちまへのやまひ。久しくなほらぬ病氣。(宿痾、持病)。

しゆく-じつ【祝日】(名) いはひ日。

しゆく-しふ【宿習】(名) ふるき風習。(舊習)。

しゆく-しふ【宿執】(名) ㊀前世の因緣。㊁以前からの執着。㊂むかしよりの友人。㊃むかしよりのうらみ。

しゆく-しや【宿舍】(名) ㊀やどる場所。やどる屋舍。やど。㊁宿直所。

しゆく-しや【縮寫】(名) 原形を小さく縮(チヂ)めて寫すこと。

じゆく-しや【塾舍】(名) 學生の寄宿所。

しゆく-しやう【宿將】(名) 老功の大將。久しく名望ある大將。

しゆく-しやく【縮尺】(名) 製圖上、原形より縮小したる圖を畫くとき、其縮小すべき一定の比例。

しゆく-しゆ【祝酒】(名) いはひに飲む酒。

しゆく-しゆ【宿主】(名) 【動】寄生動物の寄生する動物の稱。

しゆく-じゆ【宿儒】(名) 老功の學者。老儒。

じゆく-しゆ【熟手】(名) 其事になれてゐる人。

しゆく-しゆく【肅肅】(名、副) ㊀おごそかなるさま又はしめやかなるさまにいふ語。㊁おごそかなるさま又はとゝのひたるさまにいふ語。㊂つゝしみかしこむさまにいふ語。

しゆく-しよ【宿所】(名) やどる所。やど。

しゆく-しよう【祝勝】(名) 「しゆくせふ」(祝捷)に同じ。

しゆく-じん【淑人】(名) よき德行ある人。

しゆく·す（せ、し、す、する、すれ、せよ）[宿](自、さ變) やどる。とまる。

しゆく·す（せ、し、す、する、すれ、せよ）[祝](他、さ變) ことぶく。いはふ。賀す。

じゆく·す（せ、し、す、する、すれ、せよ）[熟](自、さ變) ㈠にえとほる。よくにゆ。にゆ。㈡よくみのる。「稻―」。㈢うむ。「果實已に―」。㈣調和す。とゝのふ。「相談―」。㈤適當の切となる。「機いまだじゆくせず」。㈥十分の度に達す。「睡―」。㈦なれて巧になる。上達す。

(**しゆく-すゐ**[宿醉](名) ふつかゑひ。

(**じゆく-すゐ**[熟睡](名) よく寐入ること。うまい。

(**じゆく-すゐ**[熟醉](名) 十分に醉(ヱ)ふこと。

(**しゆく-せ**[宿世](名) すくせ。まへのよ。

(**しゆく-せい**[肅靜](名) しづかなること。

(**しゆく-せい**[叔世](名) すゑのよ。まっせ。

(**じゆく-せい**[塾生](名) 塾にゐる書生。寄宿舍にある生徒。

(**じゆく-せい**[熟成](名) 熟して出來上がること。

(**しゆく-せう**[縮小](名) ちゞまりて小さくなること。又、ちゞめて小さくすること。

(**しゆく-せき**[宿昔](副) むかしから。以前から。「―青雲志」。

(**しゆく-せき**[宿碩](名) 名望ある其道の大家。

(**しゆく-せふ**[祝捷](名) いくさの勝利をいはふこと。――**くわい**[祝捷會](名) 祝捷の意を表するために催す集會。

(**しゆく-ぜん**[肅然](名、副) つゝしみておごそかなるさま又はしづかなるさまにいふ語。

(**しゆく-ぜん**[倏然](名、副) にはかに狀態をかふるさまにいふ語。

(**しゆく-たい**[縮退](名) ちゞまりひくこと。ちゞみしりぞくこと。

(**しゆく-だい**[宿題](名) 數日前より示し置きて作らせ又は答(コタ)へさする問題。

(**しゆく-だく**[宿諾](名) 承諾したる事柄を猶豫して實行せぬこと。又、以前に承諾したる事柄を未だ實行せざること。

(**じゆく-たつ**[熟達](名) なれて其道に上達すること。じやうずになること。

(**じゆく-だん**[熟談](名) ㈠よく談じ合ふこと。はなしあひ。㈡はなしあひにて物事をきむること。をりあひばなし。和談。

しゆく-ち[縮地](名) (費長房の故事に出づ)仙術によりて、地脈をちゞめへだゝりを近くすといふこと。轉じて、汽車・汽船等の便によりて、遼隔なる地方とたやすく交通し得ること。――の-**じゆつ**[縮地術](名) 漢の費長房が壺公といふ仙人より授かりたりといふ仙術、地脈をちゞめて千里の遠きをも目前の近きに探むといふこと。轉じて、汽車を通じ汽船を馳せて、交通の便を開くこと。

(**じゆく-ち**[熟知](名) よく知ること。くはしく知ること。「天下の理を―す」。(明知)。

(**じゆく-ち**[熟地](名) よく樣子を知りてゐる地。

(**しゆく-ぢく**[縮恧](名) 恥(ハ)ぢ入ること。はぢらふこと。

(**じゆく-ちやう**[塾長](名) 塾生のかしら。

(**しゆく-ぢよ**[淑女](名) 德行のそなはりたる婦人。又、品格高き婦人。

(**しゆく-ちよく**[宿直](名) 官衙などに夜間更番にとまりて守ること。又、其番に當りたる人。とのゐ。

(**しゆく-ちん**[宿賃](名) やどちん。とまりちん。

(**しゆく-づ**[縮圖](名) 原形を縮小して描寫したる作圖。

(**じゆく-つう**[熟通](名) よく通達してゐること。くはしく知りてゐること。

しゆく-つぎ[宿繼](名) 宿場より宿場へ、つぎつぎに人馬にて荷物などを送(オク)ること。(驛遞、遞送)。

(**しゆく-てい**[肅呈](名) 「しゆくけい」(肅啓)に同じ。

(**しゆく-てい**[宿酲](名) ふつかゑひ。

(**しゆく-てう**[宿鳥](名) ねとり。

(**しゆく-てき**[宿敵](名) 年來の敵。ふるき仇敵。

(**じゆく-てつ**[熟鐵](名) よくきたひたる鐵。

(**しゆく-てん**[祝典](名) いはひの儀式。

(**しゆく-でん**[祝電](名) いはひの電報。

(**じゆく-でん**[熟田](名) よく耕作してある田。

(**じゆく-と**[熟圖](名) つくづくと考ふること。よく思ひはかること。

(**じゆく-と**[塾徒](名) じゆくせい。

(**じゆく-とう**[塾頭](名) 塾生のかしら。塾長。

(**しゆく-とく**[淑德](名) たゞしき婦德。

(**じゆく-どく**[熟讀](名) 十分に味ひて讀むこと。よく意味を考へて讀むこと。「―玩味」。

しゆく-ば[宿場](名) うまや。しゆく。宿驛。――**ぢよらう**[宿場女郎](名) 道中の宿場にてかせぐ下等の女郎。

(**しゆく-はい**[祝杯](名) いはひに酌(ク)む酒杯。

(**しゆく-はい**[肅拜](名) ㈠うやうやしく拜すること。㈡敬意を表するために、書狀の末尾に書く語。

(**しゆく-はう**[祝砲](名) いはひに放つ大砲。

(**しゆく-ばう**[宿坊](名) ㈠やどるへや。㈡寺院に參詣して休泊する僧坊。

(**しゆく-ばう**[宿望](名) ㈠かねてよりのねがひ。久しき間ののぞみ。(宿志、宿願)。㈡以前よりの名望。

(**しゆく-はく**[肅白](名) 「しゆくけい」(肅啓)に同じ。

(**しゆく-はく**[叔伯](名) 弟と兄と。又、はらから。

(**しゆく-ばく**[菽麥](名) まめとむぎと。――**べんぜず**[菽麥不辨] 愚昧にして物事の差別を知らぬにいふ。

(**しゆく-はつ**[祝髮](名) 方外の人となりたるしるしに、髮を剃(ソ)ること。落飾。(剃髮)。

(**じゆく-ばん**[熟蕃](名) やゝ王化に歸服してゐる蕃族。

(**じゆく-ひ**[熟否](名) 熟すると熟らざること。

(**しゆく-びやう**[宿病](名) 久しくいえぬ病。

(**しゆく-ふ**[叔父](名) 父母の弟。をぢ。

(**しゆく-ふく**[祝福](名) よろこび。さいはひ。いはひ。

(**しゆく-ぶん**[祝文](名) 祝意を記せる文。

(**しゆく-へい**[宿弊](名) 年來の弊害。又、よからぬ習慣。

(**しゆく-ぼ**[叔母](名) 父母の妹。をば。

(**しゆく-ぼう**[宿謀](名) かねてよりのたくらみ。以前よりのはかりごと。

(**しゆく-まう**[宿望](名) 「しゆくばう」に同じ。

(**しゆく-みやう**[宿命](名) 「しゆくめい」に同じ。

(**じゆく-みん**[熟眠](名) よくね入ること。

(**しゆく-めい**[宿命](名) 前世より定まりたる運命。――**せつ**[宿命說=Fatalism](名) 【哲】人生の行爲境遇は、すべて其人の宿命によりあらかじめ定められたるものにして、これを避(サ)くること能はずといふ說。

(**じゆく-めん**[熟面](名) よく知りてゐるかほ。

(**しゆく-や**[夙夜](名、副) あけくれ。あさゆふ。「―思之」。(朝暮、日夜)。

(**しゆく-ゆう**[祝融](名) ㈠支那にて、火の神の稱。㈡くわじ。火災。

(**しゆく-らう**[宿老](名) ㈠年功ある老人。㈡幕時、老中・家老・年寄役などの稱。「藩府の―」。

(**じゆく-らん**[熟覽](名) つらつら覽ること。よく目をとほすこと。

(**じゆく-らん**[熟爛](名) ㈠うみてつひゆること。㈡なれて格別の感を起さぬこと。

(**じゆく-りよ**[熟慮](名) よく思ひはかること。深く考(カンガ)ふること。(熟考)。

(**しゆく-れう**[宿料](名) 旅宿又は下宿などにやどりたる料金。やどちん。

(**じゆく-れん**[熟練](名) 熟して巧なること。じやうずなること。

(**じゆく-ろ**[熟路](名) なれたる路。勝手の知れたる路。

(**しゆ-くわい**[首魁](名) ㈠さきがけ。㈡かしら。張本人。

(**しゆ-くわん**[首卷](名) はじめの卷。

(**しゆ-くわん**[主管](名) ㈠支配人。番頭。㈡つかさどること。「―大臣」。

(**しゆ-くわん**[主觀=Subject](名) ㈠知覺し思考し又は感動する自身。客觀の對。㈡其もの自身。――**てき**[主觀的](名) 其もの自身にかけて觀察するにいふ。

(**じゆ-くわん**[儒冠](名) 儒者のかぶる冠。學者のかぶる冠。

(**じゆ-くわん**[儒官](名) 儒學を以て官につかふるもの。

(**しゆく-ゑい**[宿衞](名) とのゐして護衞すること。又、其人々若しくは兵士。

(**しゆく-ゑん**[宿怨](名) 年來のうらみ。かねてよりのうらみ。(舊怨)。

(**しゆ-くん**[主君](名) わがつかふる君。主人。

(**しゆ-くん**[酒醺](名) 酒にゑひて心地よきこと。

(**しゆ-くん**[殊勳](名) 他よりきはだちてすぐれたるいさを。

じゆ-げ[頌偈](名) 【佛】佛德をたゝへたる偈。

(**しゆ-けい**[主刑](名) 【法】刑罰の區別の一、即ち生命刑・身體刑・自由刑・財產刑・榮譽刑等の稱。附加刑の對。

(**しゆ-けい**[主計](名) ㈠會計。勘定。㈡會計官。勘定方。㈢海軍にて、會計給與等の事項を取扱ふ高等官。――**きよく**[主計局](名) 大藏大臣の統轄の下に屬し、其意思を受けて、總豫算・總決算其他會計上の重要なる事項を取扱ふ大藏省の一局。――**くわん**[主計官](名) 主計の官吏。――**ぼ**[主計簿](名) 大藏省に備へおきて、歲入歲出の豫算額其他出入を記入する帳簿。

(**しゆ-げい**[手藝](名) 手さきにてするわざ。

(**しゆ-げい**[種藝](名) 作物の植(ウ)ゑつけ。

(**じゆ-けい**[受刑](名) 刑罰の處分を受くること。

(**じゆ-げい**[樹藝](名) 樹木の植(ウ)ゑつけ。

(**じゆ-けう**[儒教](名) ㈠儒學のをしへ。㈡儒學にて說く所の人生と天又は祖先との關係若しくはこれに關する儀式などを一の宗敎として見ての稱。

(**じゆ-けう**[受教](名) 敎授をうくること。

(**しゆ-げふ**[修業](名) 業ををさめ習ふこと。

(**じゆ-げふ**[受業](名) をしへを受くること。

(**じゆ-げふ**[授業](名) 學業などををしへさづくること。――**れう**[授業料](名) 授業の報酬。

(**しゆ-けん**[殊眷](名) 特別のひいき。格別のかへりみ。

(**しゆ-けん**[主權](名) ㈠【法】人民と土地とによりて組織せられたる共同團體即ち國家を統治する最高且固有なる權力、惟一にして分つべからず侵すべからざるもの。㈡おもなる權力。――**しや**[主權者](名) 【法】國家の主權を有する有形人、我國

にては天皇陛下なり。

(じゆ-けん[授權](名)【法】代理權をさづくると。

(じゆ-けん[受驗](名)試驗をうくると。——しかく[受驗資格](名)試驗をうくるを得る資格。——しや[受驗者](名)試驗をうくる人。——れう（リヨウ）[受驗料](名)試驗をうくるにつきて納むる手數料。

(しゆ-げん[修驗](名)「しゆげんじや」又は「しゆげんだう」の略言。——じや[修驗者](名)修驗道を修行する人、被髮して兜巾(トキン)を戴(イタダ)き、篠懸(スズカケ)及袈裟等を著け、大刀を佩(オ)び金剛(コンガウ)杖をつき、螺(ホラ)を吹らし諸方を修行す。——だう（ドウ）[修驗道](名)役小角(エンノヲヅヌ)の開きし一種の教法、護摩を焼き又は呪文をとなへて祈禱を行ひ、山中に入りて難行苦行するとを業とす、其法眞言に本づき其說道家に似て神佛何れにも事ふ、小角これを創發に唱へ、其後しばらく中絶したりしが、醍醐帝の時、僧聖寶これを再興し勝覺其流を傳ふ、明治五年に至りて其特立を禁ぜられしが、同十八年更に復興を許さる。

(しゆ-こ[酒戶](名)㊀さかや。さかみせ。㊁飲酒の量。

(しゆ-こ[酒壺](名)酒を入るゝつぼ。

(しゆ-こ[主顧](名)とくい。

(しゆ-こ[守戶](名)世々御陵を守る家筋。

(しゆ-ご[主語](名)㊀【文法】文章の主題となる語、例へば「鳥は鳥なり」といふ文章にて、鳥は主語なり。㊁【論】命題の主題となる名辭。

(しゆ-ご[守護](名)㊀まもると。まもり。けいご。㊁源頼朝の創(ハジ)めし職名、警備のために諸國の國司に副屬して其事務を執行せしめたるもの。——いし[守護石](名)庭園の泉中にて主眼たる石、樹石を配置するに要(カナメ)となるもの。——し[守護使](名)田畝の調査又は年貢の催促などに、守護職の發せし使。——しよく[守護職](名)守護の職。しゆご。——だい[守護代](名)守護職の代官。——ぶぎやう（ギヨウ）[守護奉行](名)守護の事をつかさどりし武家の職名。

(しゆ-こう[首肯](名)うなづくと。うけがふと。

(しゆ-こう[手工](名)手さきにてする工藝。

(しゆ-こう[殊功](名)人にすぐれたるてがら。

(しゆ-こう[主公](名)だんな。主人。

(じゆ-ごう[准后](名)㊀(皇后に准ずる意)昔時女官の皇子又は皇女を生みし時、天子のこれに賜はりし稱號。㊁准三宮(ジユサングウ)。

(じゆ-ごゐ[從五位](名)(華族の嫡男は、二十歳即ち丁年に達すれば、從五位を授けらるゝさだめなるよりいふ)華族の若殿。

(しゆ-こん[酒痕](名)酒にしみたるあと。

(しゆ-こん[種根](名)もと。たね。

(しゆ-こん[主根](名)【植】植物の種子より萌芽するとき、莖の下より始めて地中に下垂する根の直出するもの。

(しゆ-こん[鬚根](名)【植】いね・むぎ等の根の如く、莖の本より數多生ずる絲狀の根。

(じゆ-こん[樹根](名)樹木のね。きのね。

(じゆ-こん[入魂](名)こんい。しんみつ。

(しゆ-さ[主查](名)主となりてとりしらぶると。又、其役。

(しゆ-ざ[朱座](名)德川時代に、官の監督を受けて朱を調進せし所。

(しゆ-ざ[首座](名)㊀かみの席次。かみざ。上座。㊁かみざに就く資格の人。——けうゐん（キヨウ）[首座教員](名)數多の敎員中にて、最も上位に立つものゝ稱。

(しゆ-さい[酒債](名)酒代のかけ。

(しゆ-さい[主宰](名)つかさどると。つかさどるもの。つかさ。

(しゆ-さい[主裁](名)主となりてきりもりすると、又、其人。

(しゆ-さい[殊才](名)すぐれたる才智。

(しゆ-ざい[首罪](名)㊀數多の犯罪中にて、最も大いなる犯罪。㊁共犯者中の發頭人。

(しゆ-さう（ソウ）[酒槽](名)さかぶね。

(しゆ-ざう（ゾウ）[鑄造](名)鑄(イ)てつくると。

(しゆ-ざう（ゾウ）[酒造](名)酒を造り醸(カモ)すと。——か[酒造家](名)酒を醸造する人又は家。——くみあひ（イア）[酒造組合](名)營業上の弊害を矯正し信用を保持するとを目的として、酒造家の組織する公共團體、府縣又は其所轄稅務署管內を一區域とす。——ぜい[酒造稅](名)酒造の石數に應じ一定の稅率によりて徵收する稅。——ねんど[酒造年度](名)酒造稅法にて、酒造に關して定めたる年度、十月一日より翌年九月三十日までの期間。

(じゆ-ざう（ゾウ）[儒葬](名)儒教の儀式によりてなす葬式。

(じゆ-ざう（ゾウ）[受贓](名)贓物を受くると。

(じゆ-ざう（ゾウ）[壽藏](名)㊀棺を入るゝ墓場の穴の稱。㊁生てゐる中につくれる墓所。(生壙)。

(しゆ-さつ[手札](名)㊀てふだ。㊁てがみ。

(しゆ-さつ[手册](名)てちやう。

しゆ-ざや[朱鞘](名)刀の鞘の朱塗なるもの。「——の大小」。

(しゆ-さん[趨參](名)いそぎてまかり出づると。早速の參上。すうさん。

(しゆ-さん[珠簪](名)たまのかんざし。

(しゆ-さん[珠算](名)算盤(ソロバン)を用ひてする算術。たまざん。和算。

(じゆ-さん[授產](名)產業をさづけて、生活の道をたてさすると。——きん[授產金](名)㊀授產のために資本として貸す金。㊁明治維新後、生活に窮する藩士に授產するとを目的として、政府縣に積立て置きし基金。——ば[授產場](名)仕事を敎へ又は仕事をなさしめて、其生活を立てさする場所。

(しゆ-さんか[主參加](名)【法】第三者が、自己の權利を保持するため、他人間の訴訟に參加すると、其訴訟の目的物を請求するか又は自己の權利に損害を及ぼすべきときに於てするもの。

卄じゆ-さんぐう[准三宮](名)古昔、攝政・關白又は大臣などに、三宮即ち太皇太后宮・皇太后宮・皇后宮に准じて祿を賜はりしと。

卄じゆ-さんごう[准三后](名)前條に同じ。略して「じゆごう」といふ。

(しゆ-さんぶつ[主產物](名)生產物の主要なるもの。

(しゆ-し[種子](名)㊀【植】子房內の胚珠の成熟したるもの。たね。み。「稻の—」。㊁すべて物の發生するもとの稱。

(しゆ-し[趣旨](名)しゆい。ことわけ。むね。(趣意)。

(しゆ-し[殊死](名)必死になると。しにぐるひ。

(しゆ-し[銖錙](名)僅少なる目方にいふ語。

(しゆ-し[主司](名)つかさ。

(しゆ-し[酒資](名)さかだい。

(しゆ-し[鬚髭](名)くちひげ。

(しゆ-し[手指](名)手のゆび。

(しゆ-じ[取次](名、副)次第を追ひてすゝみ行くさまにいふ語。

(しゆ-じ[主事](名)主として事を取扱ふと、又、其人。

(しゆ-じ[朱字](名)㊀朱にてしるしたる文字。㊁朱肉にて印を捺(オ)せば文字の朱色に出づるもの、即ち凸(ナカダカ)く刻(ホ)りたる文字。

(しゆ-じ[主辭](名)【論】「しゆご」(主語)(二)に同じ。

(じゆ-し[孺子](名)㊀こども。わらべ。(豎子)。㊁未熟者をのゝしりていふ語、「—敎ふべし」。

(じゆ-し[壽詞](名)ことぶきの詩歌、としいはひの詩歌。

(じゆ-し[樹脂](名)樹木より分泌する粘液。樹のやに。

(しゆ-しがく[朱子學](名)宋の朱熹の唱へし儒學、宇宙に理と氣との二元あり、萬物は氣を稟(ウ)けて形をなし理を稟けて性をなす、人性に本然と氣質との別あり、本然は善にして聖凡殊(コト)ならざれど、氣質の淸濁によりて聖凡分かるゝと說き、居敬即ち思慮を愼み精神をして外物のために亂れしめず、窮理即ち學問によりて事物の理を窮め以て德器を成就するとを旨とするもの。

(しゆ-しぶん[手指文](名)手指にあるすぢの模樣。

(しゆ-しや[守者](名)まもるもの。ばんにん。

(しゆ-しや[取捨](名)㊀取ると捨(ス)つると。用ふると用ひざると。㊁えらびとると。よりとると。

(しゆ-しや[趨舍](名)おもむき向ふと、すてやむると。

(しゆ-しや[手寫](名)てづからうつすと。

(じゆ-しや[儒者](名)㊀儒學を講ずる人。㊁學者。

(しゆ-しやう（ヨウ）[首唱](名)唱(ト)へはじむると。又、唱へはじめたるもの。

(しゆ-しやう（ヨウ）[手掌](名)てのひら。たなごゝろ。

(しゆ-しやう（ヨウ）[首相](名)總理大臣。

(しゆ-しやう（ヨウ）[主將](名)總大將。(首將)。

(しゆ-しやう（ヨウ）[主上](名)天子を申し奉る語。

(しゆ-じやう（ヨウ）[衆生](名)【佛】世上一切の生物、又、世上一切の人類。——さいど[衆生濟度](名)【佛】衆生を濟度して解脫を得しむると。

(しゆ-じやう（ヨウ）[守城](名)しろをまもると。——はう（ホウ）[守城砲](名)守城に使用する大砲、攻城砲に敵する威力あるもの。

(しゆ-じやく[朱雀](名)四神の條を見よ。

(じゆ-しやく[授爵](名)爵をたまはりて華族に列せらるゝと。

(しゆ-じゆ[侏儒](名)㊀身長の低き人。一寸法師。㊁識見なき人をのゝしりていふ語。㊂うだち。

(しゆ-じゆ[種種](名、副)くさ〴〵。いろ〴〵。さま〴〵。しな〴〵。——ざつた[種種雜多](名)いろ〴〵まじりたるさまにいふ語。

(じゆ-しゆ[壽酒](名)ことぶきの酒。としいはひの酒。

(じゆ-じゆ[授受](名)さづくるとうくると。とりやり。うけわたし。

しゆ-しゆつ[輸出](名)內國の生產物を外國へ送り出だすと。——ぜい[輸出稅](名)輸出品に賦課する從價稅又は從量稅等の稱。——てうくわ（チヨウ）[輸出超過](名)或期間に於て、輸出品の總價格が輸入品の總價格よりも多きと。——にふ（ニウ）[輸出入](名)輸出と輸入と。——ひん[輸出品](名)輸出する物品。

(しゆ-じゆつ[手術](名)㊀てさきのわざ。㊁醫術にて、患部を切斷し又は切開して、療治すると。

(じゆ-じゆつ[呪術](名)㊀魔法。㊁まじなひ。

(しゆ-しよ[手書](名)自筆の書簡。

(しゆ-しよ[朱書](名)しゆがき。

(しゆ-しよう[殊勝](名)㊀【佛】最も勝(スグ)れた

る德。㊁めんめう、けなげ。奇特。

（しゆ-しよく［殊色］（名）婦人のすぐれて容貌のよきこと。

（しゆ-しよく［酒食］（名）酒と膳部と。「ーを設けてこれを待つ」。

（しゆ-しよく［酒色］（名）酒と女色と。「ーに耽る」。

（しゆ-しよく［手燭］（名）てしよく。ぼんぼり。

（しゆじ-りつ［受磁率］（名）【理】磁性體が磁場に於て感應して受くる磁氣量と磁場の強さとの割合。

（しゆ-じん［主人］（名）㊀あるじ。ぬし。㊁自分のつかふる人。ダンナ。

（しゆ-しん［儒臣］（名）文事を以てつかふる臣下。

（しゆ-しん［受信］（名）他より發する音信を受くること。——**き**［受信機］（名）電信機の發する音信を受けとる器械。——**でんぱう**［受信電報］（名）電報を發したる人が其受信する人の許に到達したる日時の報知を受くる手段の電報。郵便にて其報知を受くるには、和文「ツ」歐文「PP」の略符を用ひ、電報にて其報知を受くるには、和文「ツ」歐文「PC」の略符を用ふ。——**にん**［受信人］（名）電信若しくは手紙を受けとる人。發信人の對。

シユ-ス［繻子］（名）一種の綾織物。緯(ヌキ)絲を以て織り、地厚く滑(ナメ)かにして光澤艶美なり。多く帶地に用ふ。天正年間京都の職工が支那の法に倣(ナラ)ひてこれを織り創(ハジ)めたりといふ。（八絲緞）。

†しゆ-す（せしすするすれせよ）［誦］（他、さ變）うたふ。よむ。

†しゆ-す（せしすするすれせよ）［修］（他、さ變）をさむ。おこなふ。まなぶ。「法をー」。（修）。

しゆ-ず［珠數］（名）念珠。ずず。——**かけばと**［珠數掛鳩］（名）【動】「ずずかけばと」に同じ。——**だま**［珠數玉］（名）「ずずだま」に同じ。

しゆ-すずり［朱硯］（名）朱墨をする硯。

†しゆ-すびん［繻子鬢］（名）比久尼の異稱。繻子の頭巾を被(カ)ぶるより此の名あり。

しゆ-ずみ［朱墨］（名）朱を膠(ニカハ)を以て煉(ネ)りて製したる墨。すりて使用するもの。

（しゆ-すゐ［入水］（名）水に身を投(ナ)ぐること。みなげ。

（しゆ-せい［守成］（名）創業の後を承(ウ)けて、其基礎を固(カタ)め守ること。

（しゆ-せい［趨勢］（名）おもむき向ふいきほひ。おもむき。いきほひ。すうせい。「天下のー」。

（しゆ-せい［酒精］（名）「アルコホル」に同じ。——**ぶん**［酒精分］（名）「アルコホル」の成分。

（しゆ-せい［酒稅］（名）酒に課する稅。酒造稅。

（しゆ-せい［儒生］（名）㊀儒者。㊁學生。

（しゆ-せい［壽星］（名）㊀老人星の一名。㊁陰曆八月の異稱。

（しゆ-せい［受精］（名）【動】雌體の卵巣內にある卵子と雄體の睪丸內にある精蟲との合體すること。これによりて一の動物を生ず。

（しゆぜい-きよく［主稅局］（名）大藏大臣の統轄の下に屬し、其意思をうけて、國稅の賦課徵收・稅務の管理監督其他租稅上の事に關する諸種の事項を取扱ふ大藏省の一局。

（しゆ-せいぶん［主成分］（名）其物質のおもなる成分。

（しゆ-せう［手抄］（名）てづからかきぬくこと。又、てづからかきぬきたる記錄。

（しゆ-せう［樹梢］（名）樹木のこずゑ。

（しゆせう-てん［主焦點］（名）【理】平行光線が反射又は屈折の後に集まる點。單に焦點ともいふ。

（しゆ-せき［殊績］（名）すぐれたるいさを。

（しゆ-せき［手跡］（名）書きたる文字。筆跡。

（しゆ-せき［酒席］（名）さかもりの席。

（しゆせき-えい［酒石英］（名）【化】酸味ある結晶體。少しく水に溶解す。染料及藥用に供せらる。

（しゆせき-さん［酒石酸］（名）無色透明の結晶體。水に溶(ト)け易く酸味強し。「カルシウム」又は「カリウム」鹽となりて種々の果實中に存する二鹽基酸なり。

（しゆ-ぜつ［殊絕］（名）普通とかけはなれてすぐれたること。

（しゆ-せん［酒仙］（名）大酒する人の稱。

（しゆ-せん［酒戰］（名）互に酒をのみあひて、酒量の優劣をあらそふこと。

（しゆ-せん［主戰］（名）戰爭すべしと主張すること。「ー黨」。「ー論」。

（しゆ-せん［守戰］（名）敵の侵擊をふせぎてたゝかふこと。

（しゆ-せん［首線］（名）【數】直線が一點の周圍に廻轉するとき、其出發の位置を定むる一定の直線の稱。

（しゆ-ぜん［修繕］（名）しゆふく。なほし。つくろひ。

†しゆ-ぜん［主膳］（名）「かしはで」に同じ。

（しゆ-ぜん［鬚髯］（名）うはくちひげとしたくちひげと。くちひげ。

（しゆ-ぜん［受禪］（名）君主の位をゆづり受けて即位したまふこと。

†しゆぜん-かん［主膳監］（名）古昔、春宮坊の所屬にして、皇太子の御膳を掌りし職名。

†しゆせん-し［鑄錢司］（名）古昔、錢を鑄(イ)る事をつかさどりし所。

（しゆせん-ど［守錢奴］（名）やぶさかなるかねもち。吝嗇なる富豪。

（しゆせん-どうめい［守戰同盟］（名）二國以上

が、相助けて同盟外の敵國の侵擊を防がんために結ぶ同盟。

（しゆ-そ［首鼠］（名）進退又は去就を決し得ざること。こゝろのきまらぬこと。

（しゆ-そ［呪詛］（名）㊀まじなひ。㊁のろひ。

（しゆ-そう［趨走］（名）おもむきはしること。

（しゆ-そう［輸送］（名）はこびおくること。

（しゆ-そく［手足］（名）㊀てとあしと。㊁てした。部下。——**ところをことにす**［手足異處］斬り殺さるゝにいふ。

（しゆ-そく［手捉］（名）手づからとらふること。

（しゆ-ぞく［種屬］（名）同一の部類に屬するもの。たぐひ。ともがら。やから。（種族）。

（しゆ-そつ［守卒］（名）まもる兵卒。ばんぺい。

（しゆ-そつ［戍卒］（名）とりで又は關所などをまもる兵卒。番兵。

しゆそ-りやうたん［首鼠兩端］（名）首鼠していづれの方に屬せんかと觀望すること。うちまたがうやく。

（しゆ-そん［酒樽］（名）さかだる。（酒罇）。

（しゆ-たい［主體］（名）㊀他のものに對して意思又は行爲を及ぼす其もの自身。例へば國家は國土及臣民の主體にして、權利者は義務者の主體なり。㊁おもなるもの。ほんぞん。

（しゆ-だい［主題］（名）おもなる題目。

（しゆ-たい［受胎］（名）みごもり。みもち。

（しゆ-だい［入內］（名）皇后又は中宮などが册立の前に、式を具(ソナ)へて內裏に入りたまふこと。

（しゆ-たう［手套］（名）手ぶくろ。

（しゆ-だう［儒道］（名）㊀儒學に說く所の倫理道德。㊁儒教と道教と。

（しゆ-たく［手澤］（名）其ものを手にするがため、其ものにうつる手のつや。

（しゆ-たく［受託］（名）㊀囑託を受くること、たのまるゝこと。㊁寄託を受くること。あづかること。——**さいばんしよ**［受託裁判所］（名）【法】或裁判所が他の裁判所の囑託により、其管轄內に於ける證據調又は訊問若しくは送達等をなす場合の稱。——**はんじ**［受託判事］（名）【法】或裁判所の判事が、他の裁判所の判事の囑託により、其管轄內に於て證據調又は訊問等をなす場合の稱。

（しゆ-だく［受諾］（名）うけがふこと。ひきうくること。

（しゆたく-ぶつ［受託物］（名）あづかりたるもの。——**せうひ**［受託物消費］（名）あづかりたる財貨を私に消費すること。

（しゆ-だん［手談］（名）碁をうつこと。圍碁。

（しゆ-だん［手段］（名）てだて。しかた。しやう。

（しゆ-ぢ［主治］（名）㊀きゝめ。（効能）。㊁おもなる療治。——**い**［主治醫］（名）おもに其ものゝ病氣の療治にあたる醫者。

（しゆち-にくりん［酒池肉林］（名）酒をたゝへたる池と肉をかけたる林との義。奢侈を極めたる大仕掛の酒宴。

（しゆ-ちやう［守長］（名）ばんにんのかしら。

（しゆ-ちやう［主張］（名）㊀いひはること。とのふること。㊁おもにのべいふこと。

（しゆ-ちやう［朱錠］（名）しゆずみ。

（しゆ-ちよう［壽冢］（名）生前にたてゝおくはか。壽藏。

シユ-チン［繻珍］（名）上品なる緞子、即ち數種の色絲を以て織りたる紋織、今は主に帶地又は羽織の裏などに用ふ。シチン。（七絲緞）。

（しゆつ［出］（名）㊀其人の腹よりうまれたるもの。㊁其場所又は其地位より出でたるもの。

（しゆつ［術］（名）㊀學術。技藝。㊁わざ。はたらき。㊂てだて。しかた。方法。手段。㊃はかりごと。ちゑ。巧智。機略。㊄物事の由(ヨ)る所。みち。すぢ。「心ーあらはる」。㊅妖術。魔法。「ーを使ふ」。

（しゆつ［述］（名）のべとくこと。のべあらはすこと。

（しゆつ-いう［出遊］（名）家を出でゝ他處にあそぶこと。國を出でゝ他鄕にあそぶこと。

（しゆつ-いう［卹憂］（名）あはれみうれふること。

（しゆつ-えん［出捐］（名）他人のために自己の金錢を支出すること。

（しゆつ-えん［出演］（名）出席して演ずること。

（しゆつ-が［出芽］（名）芽(メ)を出すこと。めぐむこと。又、めぐみたる芽。

（しゆつ-かう［出行］（名）いでゆくこと。でゆくこと。

（しゆつ-かう［出港］（名）船舶の港(ミナト)を出づること。ふなで。

（しゆつ-かく［出格］（名）掟(オキテ)に拘(カカ)はらぬこと。別格。「ーの處置」。

（しゆつ-きう［卹救］（名）あはれみてたすくること。にぎはしすくふこと。（恤救）。

（しゆつ-きやう［出鄕］（名）故鄕をたちいづること。

（しゆつ-きやう［出京］（名）都を出でゝ田舍へ行くこと。又、田舍より都に到着すること。

（しゆつ-ぎよ［出御］（名）天子の外へ出で給ふこと。おでまし。いでまし。

（しゆつ-きん［出勤］（名）其職に勤(ツト)めに出づること。又其職に勤めて居ること。

（しゆつ-きん［出金］（名）金錢を出だすこと。又、出だす金錢。

（しゆつ-ぎん［出銀］（名）前條に同じ。

（しゆつ-くわ［出火］（名）火災を起すこと。火事を出すこと。

(**しゆっ-くわい**[出會](名) であふこと。であひ。面會。邂逅。

(**じゆっ-くわい**[述懷](名) おもふ所をのべいふこと。おもひのたけをのぶること。

(**しゆっ-くわん**[出棺](名) 葬式に、死者の屍(カバネ)ををさめたる棺を其家より送り出すこと。

(**しゆつ-ぐわん**[出願](名) 官へねがひ出づること。ねがひいで。

(**しゆつ-ぐん**[出軍](名) ㊀召集せられて軍隊に入ること。又、軍人となりて戰場に出づること。㊁軍隊をくり出すこと。

(**しゆつ-ぐん**[出群](名) むはくのうちよりぬけいでたること。すぐれいづること。

(**しゆっ-け**[出家](名) ㊀家を出づること。㊁家を出て、佛門に入ること。僧侶となること。㊂僧侶の稱。

(**じゆっ-けい**[術計](名) はかりごと。てだて。

(**しゆつ-げき**[出擊](名) 出て、敵をうつこと。

(**しゆつ-げん**[出現](名) あらはれいづること。

(**じゆつ-ご**[術語](名) ㊀科學にて特に使用する

(**じゆつ-ご**[述語](名)【文法】「せつめいご」に同じ。

(**しゆつ-ごく**[出獄](名) 放免せられて獄舍を出づること「—人」。

(**じゆっ-こん**[入魂](名)「じっこん」に同じ。

(**しゆっ-さ**[出差](名)【天】太陰が其軌道を運行するに、太陽の影響を受けて、速(ハヤ)さが周期的に變ずること。

(**しゆつ-ざ**[出座](名) 座に出づること。

(**しゆつ-ざ**[出坐](名) 座に出づること。

(**じゆっ-さく**[術策](名) はかりごと。謀計。

(**じゆっ-さく**[述作](名) のべつくること。著述。

(**しゆっ-さつ-しよ**[出札所](名) 札を出す場所。切符を賣る場所。

(**しゆっ-さん**[出產](名) 子の生まるゝこと。(出生)。

(**しゆっ-し**[出仕](名) ㊀出て、官に仕(ツカ)ふること。㊁つとめに出づること。出勤。

(**しゆっ-し**[出資](名) 資本の全部又は幾部を提供すること。

(**じゆっ-し**[術士](名) ㊀よくはかりごとをたつる人。さくし。㊁曲藝をする人。てづまつかひの類。

(**しゆっ-しやう**(シヨウ)[出象](名)【天】金星經過又は水星經過のをはりの稱。

(**しゆっ-しやう**(シヨウ)[出生](名) ㊀胎兒が母體を出て、此世の人となること。㊁其土地のうまれ。「都の—」。㊂生れたる土地。——**ち**[出生地](名) 其人の出生したる土地。

(**しゆっ-しよ**[出處](名) ㊀でどころ。「—を正す」。㊁官途に仕(ツカ)ふると仕へざること。「—進退」。

(**じゆっ-しよく**[述職](名)（職事を申上ぐる義）諸侯の參內。

(**しゆっ-しん**[出身](名) 其土地又は其位地より出世すること。

しゆっ-す(せ・し・す・する・すれ・せよ)[卒](自、さ變) 我國にては五位以上の人の死ぬるにいひ、支那にては大夫の死ぬるにいふ。

(**じゆっ-すう**[術數](名) はかりごと。たくらみ。「權謀—」。

(**しゆっ-すゐ**[出水](名) でみづ。こうずゐ。

(**しゆっ-せ**[出世](名) ㊀【佛】「しゆつせけん(出世間)」に同じ。㊁世に成り出づること。はえあらはるゝこと。立身。(發跡)。

(**しゆっ-せい**[出精](名) 精を出すこと。はげみて事に當ること。はたらくこと。勵精。黽勉。

(**しゆっ-せい**[出征](名) ㊀軍人が戰地につかはさるゝこと。征伐の軍隊に列して戰地におもむくこと。㊁出軍して敵を征伐すること。出陣して敵を征伐すること。——**ぐん**[出征軍](名) 出征してある

軍隊。——**ぐんじん**[出征軍人](名) 出征してある軍人。戰時に召集せられて、軍隊に編入せられたるものをいふ。

(**しゆっ-せき**[出席](名) 其席に出づること。其座に列なること。

(**しゆっ-せけん**[出世間](名)【佛】(い)俗界を出離して僧となること。「釋尊—」。(ろ)現象界を超越して眞如界に入ること。有爲の世間を出離すること。——**だう**(ドウ)[出世間道](名)【佛】有爲(ウヰ)の世間を出離する道。菩提。

(**しゆっ-せん**[出船](名) ㊀ふなで。㊁でふね。

(**しゆっ-そ**[出訴](名) 訴訟を提起すること。訴(ウツ)へ出づること。

(**しゆっ-たい**[出來](名)「しゆつらい」に同じ。

しゆっ-たつ[出立](名) いでたつこと。たびだち。ほっそく。

(**しゆっ-ちやう**(チヨウ)[出張](名) 職務によりて出行くこと。用務のために派出せらるゝこと。でばり。——**じよ**[出張所](名) 主たる事務所と異なる場所に於て事務を取扱ふ所。——**てん**[出張店](名) 本店と異なる場所に於て營業する店。本店より派出してある店。でみせ。

(**しゆつ-ぢん**[出陣](名) 陣に臨むこと。戰に出づること。戰地に向ふこと。

(**しゆっ-てい**[出廷](名) 法廷に出頭すること。

(**じゆっ-てき**[怵惕](名) おそれあやぶむこと。

(**しゆっ-てん**[出典](名) 或事柄につきその出處たる書物を示すこと。又、其出處。

(**しゆっ-と**[出途](名) ㊀たびだち。かどで。㊁費用のでみち。

(**しゆっ-とう**[出頭](名) ㊀或處に出て行くこと。㊁他より超(コ)えまさりたること。㊂頭をいだす

こと。——**ち**[出頭地](名) 他より超(コ)えまさりたること。——**にん**[出頭人](名) ㊀出頭してある人。㊁古昔、君側にありて政務にあづかりし武家の職名。——**のてん**[出頭天](名) 夫(トツ)の字の隱語。

(**しゆつ-どう**[出動](名) 出て、行動すること。

じゆつ-な・し(く・き・けれ)[術無](形、二) ㊀せんすべなし。しかたなし。㊁苦痛に堪(タ)へがたし。

(**しゆつ-なふ**(ノウ)[出納](名)「すゐたふ」に同じ。

(**しゆつ-にふ**(ニウ)[出入](名) 出づると入ること。ではひり。でいり。——**こう**[出入口](名) 出入する所。ではいりぐち。

(**しゆつ-ば**[出馬](名) ㊀乘馬にて臨場すること。㊁轉じて、自身に其場に臨むこと。

(**しゆつ-ばい**[出梅](名) 梅雨(ツユ)のあがる日。

(**しゆっ-ぱつ**[出發](名) いでたつこと。でたち。

(**しゆっ-ぱん**[出版](名) 文書・圖畫等を印刷して世に公にすること。(刊行、印行)。

(**しゆっ-ぱん**[出帆](名) 帆を上げて出船すること。船舶の港を出發すること。ふなで。(出船)。

(**しゆっ-ぴ**[出費](名) 出だす費用。又、入費を出だすこと。

(**しゆっ-ぴん**[出品](名) 品物を差出すこと。

(**しゆっ-ぷ**[出府](名) 地方より都に出づること。(出京)。

(**しゆっ-ぺい**[出兵](名) 軍兵をくり出すこと。

(**じゆっ-ぺい**[卹兵](名) 金錢又は物品を寄送して兵士をねぎらふこと。(恤兵)。——**ぶ**[卹兵部](名) 卹兵の事務を取扱ふ所。

(**しゆつ-ぼ**[出母](名) 父に離別せられたる實母。

(**しゆつ-ぼつ**[出沒](名) あらはるゝとかくるゝこと。或はあらはれ或はかくるゝこと。(隱顯)。

(**しゆっ-ぽん**[出奔](名) 逃(ニ)げて跡(アト)をくらま

すこと。かけおち。ちくてん。(逃亡)。

(**しゆつ-やく**[出役](名) 役目のために出張すること。又、其出張したる人。

(**しゆつ-らい**[出來](名) できあがること。成就。

(**しゆつ-らう**(ロウ)[出牢](名) ひとやよりいづること。しゆつごく。(出獄)。

(**しゆつ-らん**[出藍](名)（荀子の「靑出于藍而靑于藍」の語に出づ）弟子の師よりまさること。又、子の父よりまさること。「—の才あり」。

(**しゆつ-り**[出離](名) ㊀出て、離(ハナ)るゝこと。㊁【佛】煩惱又は火宅をはなるゝこと。

(**しゆ-てつ**[鑄鐵](名) 鑄(イ)たる鐵。

(**しゆ-てん**[酒店](名) さかや。さかみせ。

(**しゆ-と**[酒徒](名) 酒のみなかま。

(**しゆ-と**[首途](名) かどで。でたち。

(**しゆ-とう**[種痘](名) 天然痘の豫防法、天然痘の病毒を取りて其たやすく癒(イ)ゆる動物(多くは牝牛)に植(ウ)ゑ、更に其動物の病毒を取りてこれを人體に植うること、斯くすれば人體の血液中に一種の抗毒素を生ずるが故に、天然痘の感染を免(マヌカ)る、此法は西洋紀元千七百九十七年、「イギリス」國人「ジェンナー」の發明にかゝる。うゑばうさう。

(**しゆ-どう**[主動](名) 行動をおこすこと。おもにはたらくこと。——**しや**[主動者](名) 主動の地位にあるもの。

(**じゆ-どう**[豎童](名) 給仕の少年。

(**じゆ-どう**[受動](名) 他のはたらきを受くること。うけみになること。——**しや**[受動者](名) うけみのもの。

(**しゆ-とく**[取得](名) 我ものとなすこと。とること。得ること。——**じかう**(コウ)[取得時效](名)【法】

或期間其ものを占有するによりて其權利を取得する時效、例へば、或不動產を平穩且公然に占有したる結果、自己の所有となるが如し。

(**しゆ-どく**[酒毒](名) 飲酒の毒。

(**しゆ-なう**(ノウ)[首腦](名) おもなること。おもなるもの。

(**しゆ-なう**(ノウ)[酒囊](名) さかぶくろ。——**はんたい**[酒囊飯袋](名) いたづらに酒食するのみにて、はたらきなき人をあざけりていふ語。

(**しゆ-なふ**(ノウ)[收納](名)「しうなふ」に同じ。

(**じゆ-なふ**(ノウ)[受納](名) おくられたる物を受をさむること。

(**しゆ-にく**[朱肉](名) 朱色の印肉。

(**しゆ-にく**[酒肉](名) さけさかな。酒餚。

(**しゆ-にふ**(ニウ)[輸入](名) 外國の生產物を自國にはこび入るゝこと。——**ぜい**[輸入稅](名) 輸入品に賦課する從量稅・從價稅等の總稱。——**てうくわ**(チヨウカ)[輸入超過](名) 或期間に於ける輸入品の總價格が輸出品の總價格よりも多きこと。——**ひん**[輸入品](名) 外國より輸入する物品。

(**じゆ-にゆう**[授乳](名) 幼兒に乳(チ)をのますること。

(**しゆ-にん**[主任](名) 專ら其任務にあたること。其事務を管掌すること。又、其人。「—大臣」。——**しや**[主任者](名) 主任の人。

(**じゆ-にん**[受任](名) 任務をうくること。

しゆ-ぬり[朱塗](名) 朱色の漆にて赤く塗(ヌ)ること。又、其塗物。

(**しゆ-のう**[主能](名) おもなるはたらき。

(**しゆ-ば**[種馬](名) たねうま。

(**しゆ-はい**[手背](名) てのかふ。

(**しゆ-はい**[酒杯](名) さかづき。

(**しゆ-ばう**(ボウ)[酒坊](名) さかや。さかみせ。(酒屋)。

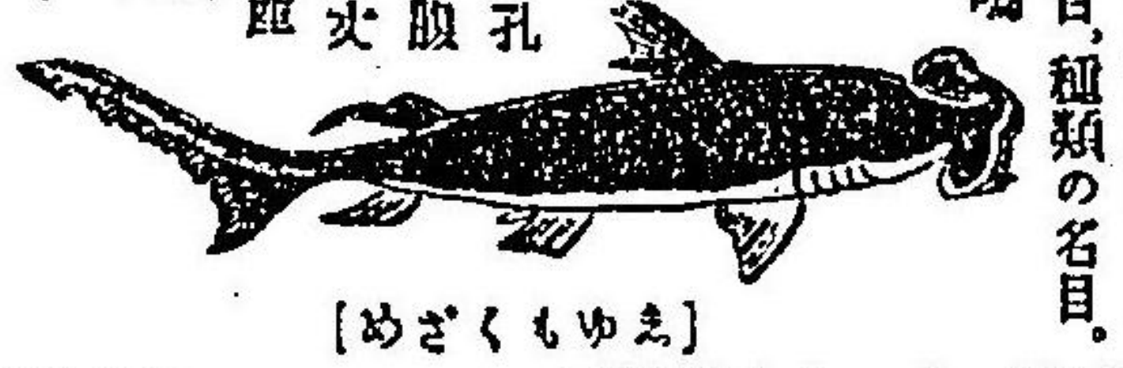
(**しゆ-ばう**(ボウ)[守防](名) まもり。ふせぎ。かため。

(しゆ-はふ（ウホ）[主法](名)〔法〕權利義務を規定する法律、卽ち民法・商法の類。助法の對。
(しゆ-はん [首班](名) 席次の第一。
ジユバン [襦袢](名)〔ポルトガル語 (Gibão)〕直に肌(ハダ)に着くる衣、多くは丈短きもの。はだぎ。
(しゆ-ひ [種皮](名)〔植〕種子の外皮。
(しゆ-ひ [樹皮](名) 樹木の幹莖の外皮。
(しゆ-び [首尾](名) ㊀かしらとをと。㊁前と後と。又、初めと終(ヲハ)りと。㊂ことの顚末。もの〻なりゆき。㊃計畫又は都合。「――して會ふ」。
(しゆ-び [麈尾](名)〔麈は大いなる鹿の稱にして、群鹿其尾の向ふ方に從ひ往くといふより、もと支那にて、其尾をとりて柄をつけ、譚談などするもの〻持ちしに起るといふ〕白旄(ハグマ)の毛を束ねてこれに柄をつけたるもの。ホッス。しゆみ。
(しゆ-び [守備](名) まもり。そなへ。かため。――せんりやう（ヨウリ）[守備占領](名) 守備上の必要より、敵國又は第三國の或地域を占領すること。
――たい [守備隊](名) 守備にあたる軍隊。
しゆ-びき [朱引](名) ㊀朱にて線を引くこと。㊁昔時、地圖に朱線を以て區劃をつけしより、專ら東京にて、府內府外の區域の稱。「――內」「――外」。
(しゆ-ひつ [主筆](名) 一の新聞社又は雜誌社に屬する記者の中、社說其他主要なる記事論說等を擔當するもの。
(しゆ-ひん [主賓](名) ㊀主と賓と。主人と客人と。㊁おもなるきやく。しやうきやく。
(シユ-ビン [溲瓶](名)〔字の唐音〕座側に備へ置きて小便するに用ふる陶製の器。シビン。(尿器)。
(しゆ-ひん [需品](名) 需要の物品。
(しゆ-ふ [首府](名) 其國の中央政府の在る都會。

其國の宮城ある都會。
(しゆ-ふ [主婦](名) 其家の主人の妻。又、其家の女主人。
(しゆ-ぶ [首部](名) はじめの部分。
(しゆ-ぶ [主部](名) 主要なる部分。
(しゆ-ふ [授付](名) さづけわたすこと。
(しゆ-ふう-かん [酒風癱](名)「アルコール」中毒にて身體不隨となりたるもの。
(しゆ-ぶく [首服](名) 自狀して罪に服すること。(首伏)。
(しゆ-ふく [修復](名) つくろひ。なほし。
(しゆ-ふく [儒服](名) 學者の着る衣服。
(しゆ-ぶつ [主物](名)〔法〕獨立して其效用をなすもの。從物の對。
しゆ-ふで [朱筆](名) 朱墨をすりたる液又は朱を溶(ト)きたる液をつけて書く筆。
(しゆ-ぶん [主文](名) ㊀一文章の中の主要なる部分。㊁判決主文。
(しゆ-ふん [受粉](名)〔植〕雄蕊の花粉が、蟲媒又は風媒等によりて、雌蕊の柱頭に附着すること。
(しゆ-へき [酒癖](名) ㊀酒に醉(ヱ)ひたるときの癖。さかくせ。㊁さかくせのよからぬ性質。
(しゆ-べつ [種別](名) 種類による區別。しなわけ。
(しゆ-ほ [酒舖](名) さかみせ。さかや。
(しゆ-ほ [酒保](名) ㊀さかやのやとひ人。㊁軍隊の中にて、軍人に飲食物をひさぐ所、請負又は官設とす。
(しゆ-ぼ [主母](名) 其家の主婦。
(しゆ-ぼ [酒母](名) 酒のもと。酛母。
(しゆ-ぼ [主簿](名) ㊀帳面を掌る人。㊁秘書又は書記。
(しゆ-ぼ [珠母](名)〔動〕「あこやがひ」に同じ。
(しゆ-ぼう [首謀](名) 惡事などのくはだての發頭人。張本人。(主謀)。――しや [首謀者](名) 惡事の首謀たる人。

(しゆ-ぼく [主僕](名) 主人とめしつかひと。(主從)。
(しゆぼく-だう（ウド）[入木道](名)〔書道の宗主とせる晉の王羲之の筆跡は木に入ること三寸なりといふ故事より出づ〕書道の異稱。
(しゆ-み [麈尾](名)「しゆび」に同じ。
(しゆ-み [趣味](名) 人の感興をひきおこすべき狀態。あぢはひ。おもむき。
シユミ-ざ [須彌座](名) ㊀兜(カブト)のはちまんざ。㊁佛像を安置する座。
シユミ-せん [須彌山](名)〔佛〕(梵語 Sumeru、妙高山の譯) 大海の中にありて金輪の上に據り、日月これによりて回(メグ)り諸天これによりて居る、高さ八萬四千由旬にして縱橫もまた同じ、中央に須彌海ありて、其幅四萬由旬長さ十六萬由旬なりといふ。
シユミ-だん [須彌壇](名)〔佛〕佛像を安置する壇。
(しゆ-みやう（ヨウミ）[壽命](名) いのち。
(しゆ-む [主務](名) 其もの〻管掌に專屬する事務、其もの〻主任たる事務。――くわん [主務官](名) 其事務の主任の官。――くわんちやう（ロウチ）[主務官廳](名) 或事務の管掌が其權限職務に專屬する官廳、例へば宗教事務の主務官廳は內務省なるが如し。――しやう（ヨウシ）[主務省](名) 主務大臣の事務を取扱ふ所。――だいじん [主務大臣](名) 或事務が其權限職務に專屬する大臣、例へば教育行政の主務大臣は文部大臣なる類。
(しゆ-めい [主命](名)「しゆうめい」に同じ。
(しゆ-めい [受命](名) 命令をうくること。――はんじ [受命判事](名) 合議裁判の部員たる判事が、命令により、單獨にて證據調又は訊問等をなすときの稱。
(しゆめ-れう（ヨウリ）[主馬寮](名) 宮內省の一局、車

馬・乘具・調馬及牧場に關する事務を取扱ふ所。
(しゆ-もく [種目](名) 種類の項目、種類の名目。
(しゆ-もく [撞木](名) 鉦(カネ)を打鳴らすに用ふる丁字形の棒、かねたたき。(丁)。――がた [撞木形](名) 丁字の形。――ざめ [撞木鮫](名)〔動〕板鰓類中橫口類に屬する魚、軀幹は紡錘形にして頭部は撞木形なり、眼は其左右兩端に突出し、鼻孔は其前端にあり、口は新月形にして腹面にあり、軀部は灰色にして軀長二丈許に達す、多く溫暖なる地方の海に産す。かせぶか。(雙髻鯊)。――づゑ [撞木杖](名) 頭の丁字形なる杖。
(しゆ-もく [樹木](名) たちき。き。
(しゆ-もつ [腫物](名) できもの。はれもの。
(しゆ-もん [手紋](名) 掌(テノヒラ)のすぢ。てすぢ。
(しゆ-もん [朱門](名) ㊀朱塗の門。㊁富貴の家。
(しゆ-もん [呪文](名) まじなひの文句。又、のろひの文句。「――を唱ふ」。
(しゆやく-ゆうずゐ [聚葯雄蕊](名)〔植〕葯相合して管狀をなし、雌蕊を圍めるもの、菊の雄蕊の如きこれなり。
(しゆ-ゆ [茱萸](名)〔植〕山茱萸科に屬する木、多く溫帶地方に産す、花は黃色にして暗色の總苞を有す、觀賞用として栽培せられ、果實は食用に供せらる。――せつ [茱萸節](名) 九月九日の節句の異稱、昔時、支那にては、當日茱萸を頭に挿(ハサ)みしより此名あり。
(しゆ-ゆ [須臾](名) しばらくのあひだ。暫時。
(しゆ-よ [入輿](名) 貴人のこしいれ。



〔しゆもくざめ〕

(しゆ-よ [授與](名) さづけ與(アタ)ふること。
(しゆ-よう [主用](名) ㊀主人の用事。㊁おもなる用事。
(しゆ-よう [需用](名) いりよう。もとめ。
シユラ [修羅](名)〔佛〕阿修羅の略音。――ぐるま [修羅車](名) 大石を引くに用ふる車。――だう（ウド）[修羅道](名) ㊀〔佛〕「アシユラだう」に同じ。㊁戰鬪又は爭亂の場所。――のちまた [修羅街](名) 前條(二)に同じ。――のまうしふ（シウモウ）[修羅妄執](名) ねたみ。いかり。うらみ。――ば [修羅場](名) 戰鬪の場所。たゝかひ。――をもやす ねたむ。いかる。うらむ。
(しゆ-らい [集禮](名) 定まりて拂ふべき代金。(元祿時代の語)。
(しゆ-らい [入來](名) 來り訪(ト)ふこと。おいで。
(しゆ-らう（ウロ）[入牢](名) 獄舍に入れらるゝこと、牢に入ること。入獄。
(しゆ-らう（ウロ）[壽老](名) いのちながきこと。又、いのちながき人。
(しゆ-らう-じん（ウロ）[壽老人](名) 七福神の一、壽星の化身にて支那の宋の元祐年中の人なりといふ、白髮を垂れ杖を携へ團扇を持ち、鹿を伴(トモナ)ふものを描(ヱガ)きて其像とす。(福祿壽、南極老人)。
(しゆ-らく [入洛](名) 貴人の入京。
(しゆ-らん [朱蘭](名)〔植〕蘭科に屬する草、葉は長くして潤(ヒロ)く、花は通常紅紫色を呈し、長き花莖の上部に總狀に排列す、觀賞用として栽培せらる。
(しゆ-らん [酒亂](名) 酒に醉(ヱ)ひて狂ふこと。
(しゆ-り [修理](名) つくろひ。なほし。
(しゆ-り [主理](名) 海軍の軍法會議を組織する文官、豫審をなし、會議に列席し、判決書に署名捺印する等の職務あるもの。

(しゆ-り [侏離](名) 言語異なりて、其意味通ぜざること。
(しゆ-り [主吏](名) 頭立つ役人。おもなる官吏。
(しゆ-り [手裏](名) 手のうち。手のはら。――けん [手裏劍](名) 手の裏に持ちて、敵に投(ナ)げかくる小さき劍。(鏢鋧)。
(しゆ-り [胥吏](名) 小役人。
(しゆ-り [受理](名) うけをさむること。うけつくること。「文書の――」。「訴訟の――」。
卄しゆり-しき [修理職](名) 古昔、宮中一切の修理を掌りし職名。をさめつくるつかさ。
(しゆ-りつ [竪立](名) おこりたつこと、たてにたつこと。又、おこしたつること、たてにたつること。
(しゆ-りつ [樹立](名) たつこと。うわること。又、たつること。うゝること。
(しゆ-りやう（ヨウリ）[首領](名) をさ。かしら。
(しゆ-りやう（ヨウリ）[銖兩](名) はかりめ。
(しゆ-りやう（ヨウリ）[受領](名) ㊀うけをさむること。㊁國司に任ぜらるゝこと。㊂國司の官職。くにのかみ。――しよ [受領書](名) 次條に同じ。――しよう [受領證](名) 或ものを受領したる旨を認めたる文書。
(しゆ-りよく [主力](名) おもなる力。又、其もの。
(しゆ-るゐ [種類](名) しな。たぐひ。(屬、物類)。
(しゆ-るゐ [酒類](名) 酒の種類、酒造稅法にては、淸酒・濁酒・白酒・味醂・燒酎及酒精をいふ。
(しゆ-るゐ [殊類](名) ことなる一種類。
(しゆ-れい [壽齡](名) ㊀長きいのち。㊁いのち。よはひ。
(しゆ-れふ（ヨウリ）[狩獵](名) 鳥獸をかること。かり。――じだい [狩獵時代](名)「ぎよれふじだい」(漁獵時代)に同じ。――めんじやう（ヨウ）[狩

獵免狀」(名) 狩獵の免許狀、出願によりて地方長官より下付するもの、甲乙二種ありて、甲種は銃器を用ひざるもの、乙種は銃器を用ふるもの。

(しゆれふ-きよく（ウーリヨ）[主獵局](名) 狩獵及獵場に關する事務を管理する宮內省の一局。

(しゆれふ-くわん（ウーリヨ）[主獵官](名) 主獵局の職員、狩獵に從事するもの。

(しゆ-れん[手練](名) 練磨の手ぎは、鍛錬の手なみ。

(しゆ-ろ[棕櫚](名)【植】棕櫚科に屬する木、幹は圓柱形にして、其先端に掌狀に分裂して大形の羽團扇に似たる葉を簇け、其周圍に褐き葉柄の脚部を具す、木材は種々の用に供せられ、葉柄の脚部の纖維は箒・刷子・繩等に用ひらる、又、觀賞用として栽培せらる。すろ。(椶櫚)。 ——かさ[棕櫚笠](名) 暖地産の棕櫚の葉にて製したる笠、元祿の頃に行はれしもの。 ——さう（ワーソ）[棕櫚草](名)【植】百合(ユリ)科に屬する草、花は紫黑色にして複總狀花序に排列し、地上莖は數個の長き葉を有す、有毒植物なれども藥用に供せらる。 ——ちく[棕櫚竹](名)【植】棕櫚科に屬する植物、形しゆろに似て葉細長なり、掌狀に分裂したる大形の葉を有し、三個の萼片と瓣片とを具へたる黄色小形の花より成る複肉穗花序を生ず、觀賞用として栽培せらる。 ——はうき（ワーボ）[棕櫚箒](名) 棕櫚の葉柄の脚部の纖維を束ねてつくりたる箒。 ——なは（ワーナ）[棕櫚繩](名) 棕櫚の葉柄の脚部の纖維を用ひてなひたる繩。

(しゆ-ろ[手爐](名) てあぶりの火鉢、特に、其上に蓋(フタ)あるもの、稱。

(しゆ-ろ[朱鷺](名)【動】「とき」に同じ。

(しゆ-ろう[鐘樓](名) 鐘を吊(ツ)り置きてつき鳴らす樓。たかどのにつくりたるかねつきだう。

(しゆ-ろう[酒樓](名) 料理屋。ちやや。

(しゆ-わ-き[受話機](名) 電話機の電話を聞きとる器械。

(しゆ-わん[手腕](名) ❶うで、かひな。❷てなみ。わざまへ。はたらき。 ——か[手腕家](名) 手腕に富みたる人、はたらきある人。

(しゆ-ゐ[首位](名) 第一の位。「—を占む」。

(しゆ-ゐ[受遺](名) 遺產又は遺物をうくること。

(しゆ-ゑい[守衛](名) ❶まもり。警固。❷貴族院及衆議院の事務局に附屬して、院內の取締に從事するもの。

(しゆん[旬](名) ❶古昔、禁中にて行はれし一種の儀式、臣下に御酒を賜ひ政をきこしめす儀にして、內裏新しく造られて後始めて南殿にて行はせらるゝを新所の旬といひ、位に即(ツ)かせ給ひて行はせらるゝを萬機の旬といひ、夏の始めに行はせらるゝを孟夏の旬といひ、冬の始めに行はせらるゝを孟冬の旬といへり。❷もの、よく熟してるとき又はもの、最も味よきときの稱。

(しゆん[俊](名) すぐれたること、又、すぐれたる人。

(しゆん[駿](名) 馬の走るにはやきこと、又、走ることはやき良馬。

(しゆん[順](名) ❶正しきこと。なほきこと。❷穩和なること。しとやかなること。❸さからはぬこと。よくしたがふこと。「長上に—」。❹物事の次第、しゆんじよ。❺しゆんじよのたがはぬこと。次第の正しきこと。

(しゆん[純](名) ❶夾雜のもののなきこと、まじりけなきこと。❷專一なること。もっぱらなること。❸いつはりなきこと。わだかまりなきこと。❹自然のまゝなること。かざりなきこと。❺よきこと。完全なること。❻うつくしきこと。精好。

(しゆん[醇](名) ❶酒味のまじりものなくして濃厚なること。❷まじりものなき濃厚の酒。「酌—」。❸まじりけなきこと。又、もっぱらなること。(純)。❹人情あつきこと。篤實。❺すなほなること。質朴。❻くはしきこと。精密。❼つゝしみ深きこと。謹厚。

(しゆん[閏](名) ❶うるふどし、うるふづき。❷正統ならぬ君位。❸附加、「—刑」。

(しゆん[旬](名) ❶一ヶ月を三分して十日を一期としたる稱、月の一日より十日までを上旬、十一日より二十日までを中旬、二十一日以後を下旬といふ。❷由旬の略言。

(しゆん[巡](名) めぐり。まはり。「盃の—」。

(しゆん—[準、准](接頭) 或語に冠して準ずる意を表はす語。「—士官」「—現行犯」。

(しゆん-あい[春靄](名) はるがすみ。

(しゆんあう-てん（ウーオ）[春鶯囀](名) 雅樂にて壹越(イチコツ)調の曲の名。

(しゆん-い[春衣](名) はるぎ。

(しゆん-い[俊異](名) すぐれてあること、又、其もの。

(しゆん-い[鶉衣](名) 《「うづら」の羽毛の如き衣の義》やぶれ衣。つぎ〳〵の衣。

(しゆん-い[準依](名) 標準としてより行ふこと。

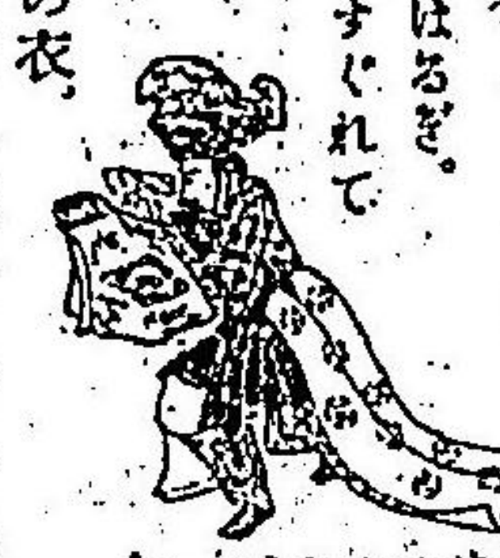
(しゆん-いう[春遊](名) はるの野邊のあそび。

(しゆん-いう[準由](名) したがひよりて行ふこと。

(しゆん-いう[巡遊](名) 國々又は方々をめぐりあそぶこと。

(しゆん-いく[馴育](名) ならしそだつること。

(しゆん-いつ[俊逸](名) すぐれてするどきこと。又、其もの。



[しゆんあうてん]

(しゆん-いつ[純一](名) ❶まじりけ無きこと、又、もっぱらなること。❷いつはりなきこと。又、かざりけなきこと。

(しゆんいん-しうじや[春蚓秋蛇](名) 《春のみゝずと秋のへびとの義》字體の形態にいふ語。

(しゆん-う[春雨](名) はるさめ。

(しゆん-う[俊宇](名) たかきのき、たかきいへ。

(しゆん-えい[俊英](名) すぐれひいでたる人。

(しゆん-えき[純益](名) 總利益の中より諸雜費を引き去りて殘りたるもの。純粹の利益。

(しゆん-えつ[巡閱](名) みまはりてあらためしらぶること。

(しゆん-えん[順延](名) 順ぐりに期日を延(ノ)ばすこと。「雨天—」。

(しゆん-えん[順緣](名) 親の子より先だち、老者の少者より先だちて死ぬること。

(しゆん-おう[順應](名) ❶障碍なく應ずること、又、順序をたがへず應ずること。❷[Adaptation]生物の生活が外界の狀態に適應して變化すること。

(しゆん-かい[悛改](名) 既往の罪過をあらためて性行をかふること。

(しゆん-かう（ウーコ）[春郊](名) はるののべ。

(しゆん-がう（ウーゴ）[俊豪](名) 器量すぐれたること。

(しゆん-かう（ウーコ）[純孝](名) 極めて篤(アツ)き孝行。

(しゆん-かう（ウーコ）[醇厚](名) 人情の深くして澆き風習をまじへざること。

(しゆん-かう（ガーコ）[循行](名) 命のまゝに行ふこと。

(しゆん-かう（ウーコ）[巡幸](名) 天子の御巡回。

(しゆん-かう（ウーコ）[巡航](名) 方々を航海すること。

(しゆん-かう（ウーコ）[順行](名) ❶順をおひて行くこと。❷よりしたがひて行ふこと。❸あたりまへの行動。❹【天】遊星の西より東に向ふ運動。

(しゆん-かう（ウーコ）[準行](名) 或法規又は或事柄を標準として、これによりて行ふこと。

(しゆん-がう-かん（ウーガ）[準强姦](名)【法】十二歳未滿の少女を其承諾を得て姦淫したる罪。

(しゆん-がう-たう（ゴウ）[準强盜](名)【法】竊取したる財物の取還を拒(コバ)むために、暴行強迫をなすこと、又、藥酒等を用ひ人を昏迷せしめて、其財物をぬすむこと。

(しゆん-か-しう-とう[春夏秋冬](名) 四時、四季。

(しゆん-かん[春寒](名) 春の寒さ。「—料峭」。

(しゆん-かん[瞬間](名) またゝく間。暫時の間。

(しゆん-き[春氣](名) 春の氣候。

(しゆん-き[春季](名) 春の時節、(春期)。 ——くわうれいさい（ウーレイ）[春季皇靈祭](名) 春の彼岸の中日に行はせらるゝ皇靈祭。

(しゆん-き[春機](名) 男女間の情慾。いろけ。 ——はつどうき[春機發動期](名) いろけの催すところ。

(しゆん-き[準規](名) 標準としてより行ふきそく。

(しゆん-ぎく[春菊](名)【植】菊科に屬する草、一回花を開けば枯死す、葉は羽狀に深裂し、花は黄色又は白色なり、嫩葉は食用に供せらる。

(しゆん-ぎやく[順逆](名) ❶したがふとそむくと。❷正しきと正しからぬと。順と逆と。

(しゆん-きやう（ヨウ）[順境](名) ❶萬事都合よき場合。❷得意の境遇。

(しゆん-きよ[准許](名) ゆるし。許可。

(しゆん-きよ[準據](名) ❶のっとること。よること。❷のり。へうじゆん。

(しゆん-きん[純金](名) まじりものなき黄金。

(しゆん-ぎん[純銀](名) まじりもののなき銀。

(しゆん-きん-ちさん[準禁治產](名)【法】心神喪失せるにあらざれど、意思能力不十分にして、利害の關係ある法律行爲を其獨斷に任すときは、往々意外の不利益を受くるもの、即ち、心神耗弱者・聾者・啞者・盲者及浪費者等が、法律上自由に治產することを禁ぜらるゝこと、本人・配偶者・四親等內の親族、戶主・後見人又は檢事の請求によりて、本人の普通裁判籍を有する區裁判所これを宣告す。 ——しや[準禁治產者](名)【法】準禁治產の宣告を受けたるもの、保佐人を置くことを得、若しこれを置きたるときは、財產に關する重大なる行爲に就きては、保佐人の同意を要し、其同意を得ざりし行爲はこれを取消し得るものとす。

(しゆん-ぐ[蠢愚](名) 蟲けらの如く極めておろかなること。

(しゆん-ぐう[春宮](名) 皇太子の宮。とうぐう。

しゆん-ぐり[順繰](名) 順序を追ひてものをなすこと。順序を追ひて繰(ク)ること。順番。

(しゆん-くわ[蕣花](名) むくげの花。又、あさがほの花。

(しゆん-ぐわ[春畫](名) 男女肉交の狀態などを描(ヱガ)きたる淫猥なる畫。まくらゑ。

(しゆん-くわ[醇化=Idealization](名)【哲】(い)雜駁なる知識を分類して系統を立て、以て不純粹なる分子を除去すること。(ろ)感興ある實體より、作者の思想に從ひて藝術上無用の分子を除去し、成るべく其實體の本性を發揮すること。

(しゆん-くわい[巡廻](名) みまはり、みめぐり。 ——けうし（ウーキョ）[巡廻教師](名) 巡回して到る處に或事を教へさづくるもの。

(しゆん-くわう（クワウ）[春光](名) 春の景色。はるげしき。

(じゆんくわう-づきん)[順光頭巾](名)「じゆんこうづきん」に同じ。

(じゆん-くわん)[循環](名) 輪をめぐるが如く、めぐりて復もとにかへること。――きふすう[循環級數](名)【數】無限級數の一、同一の項か、數項を隔て、常にあらはるゝもの。――けいとう[循環系統](名)【動】全身に血液を循環せしめて身體の各組織に營養を供給し、同時に老廢物を收容する作用の組織、心臟・靜脈・動脈・毛細管等これなり。――すう[循環數](名)【數】循環小數の中、同一の順序に繰返へしてあらはるゝ數字。――せうすう[循環小數](名)【數】小數の或桁(ケタ)より先は、若干の數字が同一の順序に幾回も繰返へしあらはれて際限なきもの。――りう[循環流](名)【地】方向を轉じてもと來し方へめぐり流るゝ海流。――ろんぱふ[循環論法=Circulus in probando](名) 一の立言を論證せんがために、其立言と同一の立言をなすこと。一の理由によりて斷案を證明し、更に其斷案によりて其理由の證明をなすこと。

(じゆん-くわんり)[准官吏](名) 官吏にあらずして官吏の取扱を受くるもの。

(じゆん-げ)[巡化](名) 僧侶が、說法して處々をめぐりあるくこと。

(しゆん-けい)[春景](名) はるのけしき。

(しゆん-けい)[春慶](名)「しゆんけいやき」の略言。――ぬり[春慶塗]又は(名) 漆の塗方、材は檜・樅等を用ひ、木地の見ゆる樣に塗るもの、黃褐色なり、和泉國堺の漆工春慶の發明にかゝる。――やき[春慶燒](名) 一種の陶器、黃色の釉(クスリ)をかけて春慶塗の如く燒きたるもの、尾張國瀬戸村の陶工加藤四郎入道春慶の燒き始めたるものといふ。

(じゆん-けい)[閏刑](名) 昔時、士人又は爵位ある者若しくは僧徒・婦女・老・幼・癈疾者などに、本刑に代へて科せし刑。

(じゆんけい-るゐ)[鶉鷄類](名)【動】「さうはつるゐ」(搔撥類)に同じ。

(しゆん-げう)[春曉](名) はるのあかつき。

(じゆん-けう)[殉教](名) 宗敎のために、身命をなげうつこと。「――者」。

(じゆん-けうゐん)[准教員](名) 小學校の正敎員を補助する敎員。

(しゆん-けつ)[俊傑](名) 器量すぐれたる人、すぐれびと。(豪傑)。

(じゆん-けつ)[純潔](名) ㊀いといさぎよきこと。㊁邪念又は私慾を懷(イダ)かず、心の極めて潔白なること。

(しゆん-げつ)[春月](名) はるの夜の月。

(じゆん-げつ)[旬月](名) ㊀十日と一月と。㊁短き日數。㊂十ケ月。

(じゆん-げつ)[閏月](名) うるふづき。

(じゆん-けつぞく)[準血族](名) 實際の血族にあらざれども、法律の規定によりて血統たるもの、繼子と繼親及其血族等との關係の如きこれなり。

(じゆん-げふ)[巡業](名) 興行して方々をめぐること。

(じゆん-けん)[巡檢](名) みまはりてとりしらぶること。(巡察)。

(じゆん-けん)[巡見](名) みまはり。見分。(巡視)。

(じゆん-げんかうはん)[準現行犯](名)【法】現行犯にあらざれど、現行犯とみなさるゝもの。現行犯の條を見よ。

(じゆん-げん-ごふ)[順現業](名)【佛】善惡作業の應報が現世に於てあらはるゝこと。

(じゆん-こ)[醇乎](名) 純粹にして非難する箇所なきさまにいふ語。「――として醇なるもの」。

(しゆん-こう)[竣功](名) 仕事のできあがりたること。できあがり。(竣工)。

(じゆん-こう)[准后](名)「じゆさんぐう」に同じ。

(しゆん-こく)[峻酷](名) 過度にきびしくして、なさけ容赦のなきこと。(峻刻)。

(じゆん-こく)[純黑](名) 全體の黑きこと。眞の黑色なること。まっくろ。

(じゆん-ご-ごふ)[順後業](名)【佛】現世に於ける善惡作業の應報が三生以後にあらはるゝこと。

(じゆん-さ)[巡査](名) 警部の下に屬する警察官。――ぶちやう[巡査部長](名) 巡査の首班にして部下の巡査の監督をなすもの。

(しゆん-さい)[俊才](名) 俊(スグ)れたる才智、又、其才智ある人。

(じゆん-さい)[蓴菜](名)【植】睡蓮科に屬する草、水澤に生ず、嫩(ワカ)き莖及葉は粘液を以て被(オホ)はれ、莖及花瓣は赤褐色にして、雄蕊は紫色なり、嫩き葉は食用に供せらる。ぬなは。

(じゆん-さつ)[巡察](名) みまはりて事情をとりしらぶること。(巡閱)。――し[巡察使](名) 古昔、諸國を巡りて、風俗及政事の善惡等を視察せし職。

‡(じゆん-さんぐう)[准三宮](名)「じゆさんぐう」に同じ。

‡(じゆん-さんごう)[准三后](名)「じゆさんぐう」に同じ。

(しゆん-し)[俊士](名) すぐれたる人士。

(しゆん-し)[瞬時](名) またゝく間。しゆんかん。

(しゆん-じ)[春時](名) ㊀はるの時節。㊁田畝にたねまきする時節。

(しゆん-じ)[蠢爾](名) ㊀蟲のうごめく狀にいふ語。㊁取るに足らぬものゝ反抗するさまにいふ語。

(じゆん-し)[殉死](名) 主君の死にたるあとをおひて自殺すること。おひばら。「――を禁ず」。

(じゆん-し)[詢諮](名) はかりとふこと。さうだん。

(じゆん-し)[巡視](名) めぐり見ること。(巡閱)。

(じゆん-じ)[順次](名) じゆんぐり。じゆん。順番。

(しゆん-しう)[俊秀](名) 才智の秀でゝあること。又、其人。(俊秀)。

(しゆん-しう)[春愁](名) 春の日にものうくて何となく氣のふさぐこと。

(しゆん-じう)[春秋](名) ㊀春と秋と。㊁一箇年。㊂よはひ。年齡。㊃支那の魯國の歷史、轉じて、歷史の稱。㊄支那の周の平王より威烈王に至るまでの間の稱。――じふにれつこく[春秋十二列國](名) 周の春秋の時代にありし十二國諸侯の稱、即ち魯・衞・晉・鄭・曹・蔡・燕(以上周と同姓)、齊・宋・陳・楚・秦(以上周と異姓)の稱。――たかし[春秋高] 年老いてあり。――にとむ[富春秋] 年わかくして行先長し。

(じゆん-しゆ)[巡狩](名) 天子が諸侯の國又は地方官の任地をみめぐりたまふこと。

(じゆん-しうえき)[純收益](名)「じゆんえき」(純益)に同じ。

(じゆん-しくわん)[准士官](名) 陸海軍にて、少尉に次ぎ下士官の上に位する官等、即ち陸軍の特務曹長又は海軍の上等兵曹等の類。

(じゆん-じごふ)[順次業](名)【佛】善惡作業の應報が次第〳〵にあらはるゝこと。

(しゆん-じつ)[春日](名) はるのひ。

(じゆん-じつ)[旬日](名) 十日。

(しゆん-しや)[春社](名) ㊀春季の社日。㊁春の鎭守祭。

(しゆん-じやう)[春情](名) いろけ。いろごゝろ。(春心)。

(じゆん-しやく)[巡錫](名) 高僧などの處々をめぐるにいふ語。

(じゆん-しゆ)[遵守](名) したがひまもること。より行ふこと。

(じゆん-しゆ)[醇酒](名) 味の濃厚なる酒。又、まぜものなきよき酒。

(じゆん-じゆう)[順從](名) さからはずしてしたがふこと。

(しゆん-じゆん)[逡巡](名) ㊀しりごみ、あとずさり。躊躇。㊁思ひきって斷行せず、空しくぐづ〳〵すること。

(じゆん-じゆん)[順順](名、副) 順序を追ふさまにいふ語。つぎ〳〵。(循循)。

(じゆん-じゆん)[諄諄](名、副) ねんごろにくりかへして說くさまにいふ語。

(じゆん-じゆんくわんせうすう)[純循環小數](名)【數】小數點の直右即ち分位の數字より始まる循環小數の稱。

(じゆん-じよ)[順序](名) とゝのひ定まりたるすぢみち。ならび。ついで。しだい。(順次、順敍)。

(じゆん-じよう)[準繩](名) ㊀みづもりとすみなはと。㊁のり。きそく。

(しゆん-しよく)[春色](名) 春の景色。はるげしき。

(じゆん-しよく)[潤色](名) 文采を加ふること。つやを添ふること。飾(カザ)ること。

(しゆん-しん)[春心](名) ㊀春らしきやうす。㊁「しゆんじやう」(春情)に同じ。

(しゆん-しん)[春信](名) 春のおとづれ。梅花などのおとづれ。

じゆん-ず[準、准](自、さ變) ㊀なぞらふ、「三宮に――」。㊁のっとる。

じゆん-ず[殉](自、さ變) ㊀死者のあとをおひて自殺す。㊁自分の生命を其物事のためになげだす。「道に――」。

(しゆん-すゐ)[春水](名) 春になり、氷とけて流るゝ水。

(じゆん-すゐ)[純粹](名) ㊀すこしも夾雜なきこと、眞底まじりけなきこと。㊁もっぱらなること。專一。㊂まったきこと。完全。㊃ひとしきこと。齊一。㊄すこしも邪念又は私慾なきこと。㊅雜駁なる知識の存せざること。又、經驗の要素を存せざること。

(じゆん-せい)[純正](名) ㊀純一にしてたゞしきこと。㊁學理の研究を主とし、應用の事項に及ばざること、「――化學」「――經濟學」。――てつがく[純正哲學=Metaphysics](名)【哲】一切現象の皆體原理を研究する哲學。形而上學。

(しゆん-せう)[春宵](名) 春の夜。

(しゆん-せつ)[浚渫](名) 水底をさらひて深くすること。――せん[浚渫船](名) 蒸氣力によりて水底の泥土をさらふ機械を裝置したる船、河口又は港頭に浮べて、港河を深くするに使用す。

(じゆん-せつたう)[準竊盜](名)【法】典物としたる自己の所有物を竊盜したるなどの類。

(じゆん-ぜん)[純然](副) 全くそれにたがひなきさまにいふ語。

(じゆん-せんいう)[準占有](名)【法】權利の占有、即ち自己のためにする意思を以て財產權の行使をなすこと、占有の規定を適用するものとす。

(じゆん-そうにん)[準奏任](名) 奏任官にあらずして奏任官の待遇をうくるもの。

(しゆん-そく)[瞬息](名) (またゝきといきとの義)またゝくま。わづかのひま。

(しゆん-そく［駿足］(名) 足はやき馬。駿馬。
(じゆん-そく［準則］(名) のっとるべき規則。
(じゆん-ぞく［醇俗］(名) ㊀世なれぬ風俗、朴直なる風俗。㊁醇一なると雜駁なると。けだかきといやしきと。
(じゆん-だいじん［准大臣］(名) 昔時、大臣の祿を受けて内大臣の下に列せし官、大納言中の故參者中より撰び、大臣の闕官なき時に置く。
(じゆん-たう［順當］(名) 順序の適當なると。
(じゆん-だう［殉道］(名) 道義のため又は宗敎のために、其生命をなげうちて盡くすと。
(じゆん-たく［潤澤］(名) ㊀つや。いろ。㊁うるほひ。ぬめり。㊂めぐみ。なさけ。㊃まうけ。利益。㊄物事のゆたかなると。
(じゆん-たつ［順達］(名) 廻狀などを順々に達すると。
(しゆん-だん［春暖］(名) 春のあたゝかさ。
(じゆん-ち［馴致］(名) ㊀なれてなつかしむると。なじましむると。㊁次第に現前の事情に到達せしむると。
(じゆん-ちゆう［純忠］(名) 毫も自家の私慾なく、もっぱら忠義を盡くすと。
(じゆん-てき［準的］(名) まと。又、めど。
(じゆん-てつ［純鐵］(名) まじりもののなき鐵。
(じゆん-てん［順天］(名) 天道にしたがひてそむかざると。(循天)。
(しゆん-どう［蠢動］(名) ㊀うごめくと。㊁取るに足らぬもの、反抗すると。
(しゆん-どう［俊童］(名) 才智すぐれたるこども。
(じゆん-とう［準等］(名) ㊀あてはまると。㊁相當する等級。
(じゆん-どう［純銅］(名) まじりもののなき銅。

(しゆん-とく［俊德］(名) すぐれて大いなる德。
(じゆん-な-ゐん［淳和院］(名) 古昔、源家の子弟の學を修めし私學校。
(じゆん-なん［殉難］(名) 國家又は社會の事變のために、身を殺して義を盡くすと。公共の困難のために、身を犧牲に供すると。
じゆん-に［順］(副) 順序を追ひて、次第に。順次に。
(じゆん-ねん［閏年］(名) うるふどし。
(しゆん-ば［駿馬］(名) すぐれて良(ヨ)き馬。しゆんめ。(名馬)。
(じゆん-ぱい［巡拜］(名) 巡(メグ)りあるきて、寺社などを禮拜すると。
(しゆん-ばう［俊髦］(名) すぐれたる人。
(じゆん-ぱく［純白］(名) まっしろ。ましろ。(醇白)。
(じゆん-ばん［順番］(名) 順序を追ひて、かはる〴〵其事にあたると。又、其順序。(輪番、交代)。
(じゆん-はんにん［准判任］(名) 判任官にあらずして、判任官の待遇を受くると。
(じゆん-び［純美］(名) ㊀まじりものなくしてうつくしきと。㊁【哲】美的形象がたゞ快樂又は苦痛の感情のみを起さしむると。
(じゆん-び［準備］(名) ㊀そなへ。用意。支度。㊁或物事に到達する前に、あらかじめ要する手段。——きん［準備金］(名) ㊀或必要のためにそなへおく金。㊁「せいくわじゆんびきん」(正貨準備金)の略言。——しよめん［準備書面］(名)【法】合議裁判に於ける民事訴訟の口頭辯論の準備として要する書面、即ち、訴狀及答辯書其他口頭辯論中に新に主張せんとする事實又は證據方法若しくは其他の材料を記載したる書面の總稱、當事者はこれを作製して當該裁判所に提出し、口頭辯論期日前に、送達によりて互に交換するものとす。——てつづき［準備手續］(名) 或主なる事件に到達する前になすべき手段。

(じゆん-ぴつ［潤筆］(名) ㊀書又は畫をかくと。㊁書畫をかきたる報酬。——れう［潤筆料］(名) 書又は畫をかきたる報酬。
(じゆん-ぶ［巡撫］(名) ㊀めぐりあるきて、人心をなだめ安んずると。㊁支那の現今、各省に設けたる官、一省の政治の得失又は民間の疾苦等を觀察するとを本務とし、兼て一省の軍務又は糧餉等を治むるもの、中央政府の官職を帶ぶ。
(しゆん-ぷう［春風］(名) 春の風。はるかぜ。——くん［春風君］(名) たこ。いかのぼり。(紙鳶)。
(じゆん-ぷう［順風］(名) 船の行かんとする方へ吹く風。追手の風。おひて。——じ［順風耳］(名) 秘密の事をもよく聞き出すと。
(じゆん-ぷう［醇風］(名) すなほなる風俗。
(しゆん-ぷく［春服］(名) 春きる衣服。はるぎ。
(じゆん-ぷく［順服］(名) つきしたがひてそむかざると。
(しゆん-ぶん［春分］(名)【天】太陽が春分點に達したるときの稱、即ち三月の廿一日若しくは廿二日にして、太陽は赤道上を直射し、南北兩半球各平等に日光を受け、全地球上晝夜長短の差なし。——てん［春分點］(名)【天】太陽の視運動に於て、南より北に向ひて黃道を通過する點。
(じゆん-ぶんがく［純文學］(名) 文學に關する諸種の學科に對して、おもに詩歌文章等に關する方面の稱。
(しゆん-べつ［峻別］(名) 明確なる區別。わかち。
(じゆん-ぽう［遵奉］(名) したがひ奉ずると。まもりよると。

(じゆん-ぼう［詢謀］(名) とひはかると。
(じゆん-ぼく［純樸］(名) いつはりなくかざりなきと。すなほなると。(醇樸)。
(しゆん-みん［春眠］(名) 春の夜のねむり。
(じゆん-みん［順民］(名) 政化にしたがふ人民。
(しゆん-む［春夢］(名) ㊀春の夜のゆめ。㊁人生のはかなきさまにいふ語。
(しゆん-め［駿馬］(名) 「しゆんば」に同じ。
(しゆん-めい［峻命］(名) 主君のまうしつけの敬稱。
(じゆん-もんぜき［准門跡］(名) 門跡に准ぜらるゝ寺格のもの、即ち本願寺の類。
(しゆん-やう［春陽］(名) はるのひ。
(じゆん-やう［馴養］(名) ならしやしなふと。
(じゆん-やう-かん［巡洋艦］(名) 軍艦の一種、裝甲と非裝甲との二樣あれど、何れも速力は迅速、運轉は輕快にして、石炭の搭積量多く、遠く本國を離れたる海洋の行動に適するもの。
(じゆん-やうし［順養子］(名) 弟が兄の嗣子となりて、兄の子を又其嗣子とするなどの稱。
(じゆん-よ［閏餘］(名) 實際の日時が、曆上の一年より餘分あるもの。うるふのあまり。
(じゆん-よう［準用］(名) 標準として適用すると。よりもちふると。
(じゆん-ら［巡邏］(名) みまはり。又、其役人。
(しゆん-らん［春蘭］(名)【植】蘭科に屬する草、葉は狹くして長く、春の初花開く、花は帶綠色にして一箇づゝ花莖の頂上に生ず、稀に二箇あり、觀賞用として栽培せらる。
(じゆん-り［純利］(名) じゆんえき。
(じゆん-り［純理］(名) ㊀純粹の學理。㊁純粹の理性。——ろん［純理論＝Rationalism］(名)【哲】眞理の認識は知覺經驗を離れたるものにして、全く先天的理性の作用なりといふ說。

(じゆん-りつ［準率］(名) 標準とする割合。
(じゆん-りやう［順良］(名) 性質のすなほなると。(循良)。
(じゆん-りやう［純良］(名) 純粹にして善良なると。
(じゆん-りん［純林］(名) 全く一種類の樹木より成りたる森林。
(じゆん-れい［準例］(名) 標準とするためし。
(じゆん-れい［巡禮］(名) ㊀國々を巡(メグ)りて、處々の神社佛閣に參詣すると。㊁處々を順禮する人、普通笈摺(オヒズリ)を背にし菅笠(スゲガサ)を戴(イタゞ)き、脚絆(キヤハン)甲掛(カフカケ)を着け草鞋(ワラヂ)を穿ち、詠歌などうたひて人の門に錢を乞ふ。——やど［巡禮宿］(名) 巡禮を泊(ト)むる木賃宿。
(じゆん-れつ［順列］(名)【數】數個のものゝ中或數だけのものを適宜に探出して、順序にならべたる配置、n個のものをr個宛採りたる順列の數は、$n(n-1)(n-2)\cdots\cdots(n-r+1)$なり。
(しゆん-ろ［峻路］(名) けはしき路。
(じゆん-ろ［順路］(名) ほんすぢみち。順序よき路。みちじゆん。(順道)。
(じゆん-ろく［馴鹿］(名)【動】偶蹄類中麋鹿科に屬する獸、牝牡共に長大なる角を有す、「アジア」「ヨーロッパ」の北地及樺太等に産し、其地の人民に須要なる動物なり。
(しよ［暑］(名) ㊀夏のあつさ。㊁小暑及大暑の總稱。㊂夏の土用十八日間の特稱。
(しよ［書］(名) ㊀文字。㊁筆跡。書法。「—を學ぶ」。㊂はん。書物。㊃てがみ。しよじやう。

(しよ［初］(名) はじめ。うひ。
(しよ［署］(名) ㊀くらゐ。坐位。㊁つかさ、やくしよ。公廨。㊂やくわり。てわけ。㊃しるし。表記。
(しよ［庶］(名) ㊀もろ〳〵。㊁めかけばら、庶腹。㊂わかれ。支族。㊃しも〴〵。人民。
(しよ—［諸］(接頭) 或語に冠してもろ〳〵の意を表はす語。「—國」。
(しよ—［所］(接頭) ㊀或語に冠して其事を指す意を表はす語。ところ。「—有」。「—持」。「—行」。㊁或語に冠して受動の意を表はす語。「—相」。「—動」。
(—しよ［所］(接尾) 或語に添へて其物事のある場所を表はす語。ところ。「學問—」。
(じ-よ［自餘］(名) このほか。そのほか。(爾餘)。
(じよ［序］(名) ㊀屋敷中にて、内外の區別に設けたる牆。かき。㊁ひさし。(廂)。㊂まなびどころ。學校。㊃はしがき。はしぶみ。(叙)。㊄人の行くを送るに臨み、自己の感想をのべて、これに與ふる文書。㊅ついで。次第。順序。㊆はし。いとぐち。端緒。
ショール［Shawl］(名) 「かたかけ」に同じ。
しよ-あたり［暑中］(名) 暑氣に觸(フ)れて病をおこすと。
(しよ-いう［所有］(名) ㊀【法】或物に對して、其所有權を有すると。又、其物。㊁所持すると。もってゐると。又、其物。——けん［所有權］(名)【法】物權の一、法律の範圍内に於て、自由に其物の使用・收益・處分をなし得る權利。——しゆ［所有主］(名) 其ものを所有する名前主。——ち［所有地］(名) 其人の所有權ある土地。——ぶつ［所有物］(名) 其人の所有する物件。——ぶぶん［所有部分］(名)【法】二人以上にて、一個のものを區分して所有とする場合に、其所有に屬する部

分の稱。

（しよ-いちねん[初一念]（名） 思ひ立ちたる初めの一念。

（しよ-いん[書淫]（名） 書物を讀むをいたく好みふける性質。又、其人。

（し-よう[使用]（名） つかひ用ふること。つかふこと。

（し-よう[私用]（名） ㊀わたくしに用ふること、「官金を－す」。㊁自分一己の用事。

（し-よう[試用]（名） こゝろみ用ふること、ためしに用ふること。

（しよう[升]（名） 容量の單位、一斗の十分の一にして一合の十倍、即ち六萬四千八百二十七立方分。

（しよう[稱]（名） ㊀となへ。名目。㊁ほまれ、名聲、

（しよう[證]（名） あかし、しるし。しようこ。

（しよう[衝]（名） ㊀とほりみち、通路。「天下之－」。㊁むかひて對する方、むかひ。㊂もの、つきあたる處、つきあたり。㊃敵陣又は敵艦に向ひて、突貫する兵車又は兵船。㊄[天]遊星又は衛星が地球に對して太陽と正反對の位置に來ること。

（しよう[勝]（名） ㊀しようり。かち。㊁形勢又は景色のすぐれたること。又、其土地。「天下の－」。

（しよう[頌]（名） 盛德を稱述する詞。

（じ-よう[自用]（名） 自分の使用。自分のもちひ。

（じよう[乘]（名） ㊀のりもの。のりうま。「罷氏の－ぞ」。㊁歴史。又、記錄。㊂[佛]衆生を載(ノ)せて、生死の苦界を出離し涅槃の彼岸に到達せしむる教、佛教の經緯にいふ語。㊃[數]乘法の略言。

†しよう[判官]（名） 古昔の官制にて、次官(スケ)の下にして主典(サクワン)の上なりしもの、諸官にて各其文字を異にすれど、訓はすべて同じ、神祇官にては祐をいひ、太政官にては少納言・辨をいひ、省にては丞をいひ、彈正臺にては忠をいひ、使にては判官をいひ、職にては進をいひ、寮にては允をいひ、司にては令をいひ、近衛府にては將監をいひ、衛門府・兵衛府・檢非違使などにては尉をいひ、内侍所にては掌侍をいひ、大宰府にては監をいひ、鎭守府にては軍監をいひ、國にては掾をいへり。

しよう[尉]（名） ㊀古昔、衛門府・兵衛府・檢非違使などの官名、前條を見よ。㊁おきな、老翁。㊂白き灰になりたる炭火の稱「－になる」。

（－じよう[乘]（接尾） 車の數をかぞふるにいふ語、「百－」「千－」。

（しよう-あい[鍾愛]（名） 最もあつく愛情をそゝぐこと、最も寵愛すること。

（しよう-いん[承引]（名） うけひくこと。しようち。しようだく。

（しよう-いん[證印]（名） 證據に捺(オ)す印判。

（しよう-えい[誦詠]（名） 詩歌をよみうたふこと。

（しよう-えき-ち[承役地]（名） [法]地役權によりて使用せらるゝ土地。

（しよう-か[頌歌]（名） 功德をほめたゝへたる歌。

（しよう-か[升遐]（名） （はるかの處にのぼる義） 貴人の死去にいふ語。

（しよう-かう[松膏]（名） まつやに。

（しよう-かう[昇降]（名） のぼりくだり。あがりおり。（登降）。——き[昇降器]（名） 人を乘(ノ)せて高處と低處とにあがりおりをなさしむる器械。——ぐち[昇降口]（名） 昇降の出入口。

（しよう-がう[稱號]（名） となへ。

（じよう-がう[乘號]（名） [數]掛算(カケザン)に用ふる符號即ち×。

（しよう-かう-せき[松香石]（名） [鑛]黑耀石の一種、質脆(モロ)くして多くは鼠色なり、綠色の硝子を製するに用ふ。

（しようかう-てん[昇交點]（名） [天]遊星が南より北に向ひて黄道を通過する點。

（しよう-かかく[使用價格]（名） [經]「いうようかかく」（有用價格）に同じ。

（しよう-かく[衝角=Ram]（名） 軍艦の艦首に裝置したる鋼鐵の尖角、敵艦に衝突して、これを突き破るもの。

（じよう-かく[乘客]（名） 船又は車にのる客。のりて。

（じよう-が-ひげ[尉鬚]（名） [植]百合(ユリ)科に屬する草、葉は狹くして長く、花は淡紫色にして短き柄を有し總狀に排列す、人家の軒下などに植う。りうのひげ。（沿階草）。

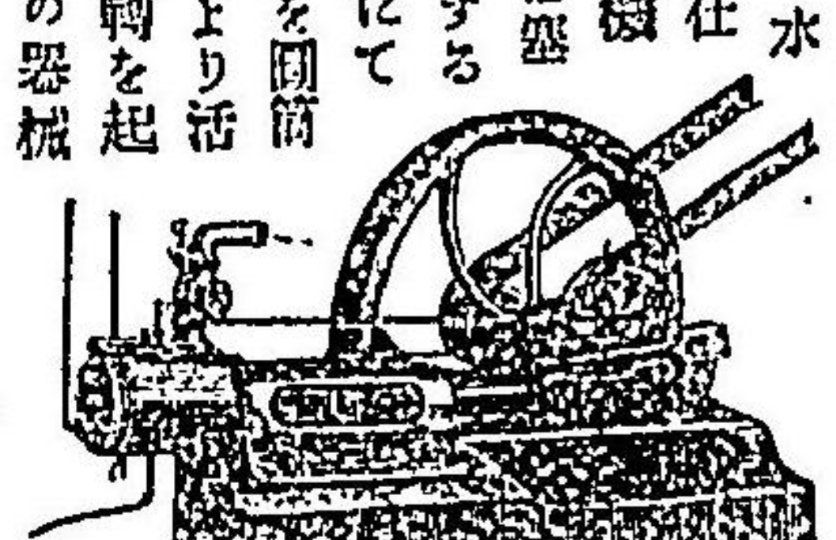
（しよう-き[聳起]（名） そびえたつこと、又、そびえたゝしむること。

（しよう-き[誦記]（名） 文句をよく記憶し、そらにてよむこと。

（じよう-き[繩規]（名） ㊀すみなはとぶんまはしと。㊁のり。さだめ。

（しよう-き[鍾馗]（名） 支那にて、疫病の鬼を驅(カ)るといふ神、其像は眼太く髯多く、黑き冠を戴(イタダ)き長き靴を穿ち、拔劍して鬼をつかふ、我國にては、これを五月幟に描(エガ)き又は五月人形に作りなどす、唐の玄宗がわらはやみに犯(オカ)されしとき、大鬼が小鬼を驅ると夢みたりしかば、其狀を吳道子に描かしめて、これを鍾馗と呼びしに創(ハジ)まるといひ、又、同じく玄宗の夢に、藍袍を着けたる鬼あらはれて、臣は終南山の進士鍾馗にて、よく天下のわらはやみを除くといひたりしかば、其狀を吳道子に描かしめしに創まるともいふ、一說に、唐の前六朝頃に、已に其像は描かれたりともいへり。——だいじん[鍾馗大臣]（名） 前條に同じ。

（じよう-き[蒸氣]（名） ㊀[理]蒸發したる氣體、通常溫度にて液體に化し得るもの、ゆげ。㊁「蒸汽船」の略言。「－出て行く煙は殘る」。——がま[蒸氣釜]（名） 「きくわん」（汽罐）に同じ。——きかい[蒸氣機械]（名） 水蒸氣を使用して器械的仕事をなさしむる裝置の機械、其主要部は汽罐と活塞を供へたる圓筒と運轉する機械とより成り、汽罐にて發生せしめたる水蒸氣を圓筒內に送り、其膨脹力により活塞を動かして機械の運轉を起さしめ、其動力を種々の器械に與へて種々の仕事をなさしむるもの。——きくわん[蒸氣機關]（名） 前條に同じ。——くわん[蒸氣罐]（名） 「きくわん」（汽罐）に同じ。——しや[蒸氣車]（名） 蒸氣機械を裝置し、其動力により車輪回轉して、「レール」の上を走る車。汽車。（火輪車）。——せん[蒸氣船]（名） 蒸氣機械を裝置し、其動力により推進螺旋回轉して、水上を走る船。汽船。（火輪船）。——ポンプ[蒸氣喞筒]（名） 蒸氣機關によりて運轉する「ポンプ」、消火用蒸氣喞筒は其一なり。——よく[蒸氣浴]（名） 水蒸氣にかけて熱する裝置、蒸風呂(ムシブロ)の如きは其一例なり。



[しようききかい]

（しよう-きふ[昇級]（名） 等級の昇(ノボ)ること。

（しよう-きふ[昇給]（名） 給料の昇(ノボ)ること。

（じよう-きやく[乘客]（名） じようかく。のりて。

（しよう-ぎよ[松魚]（名） [動]「かつを」に同じ。

（じよう-きん[剩金]（名） あまりたるかね。

（しよう-く[勝區]（名） 風景のすぐれたる所。又、物貨のあつまる所。

（しよう-く[承句]（名） 漢詩にて、絕句の第二句の稱。

（しよう-く[悚懼]（名） おそれをのゝくこと。

（じよう-く[冗句]（名） ありてむだなる句。

（じよう-ぐ[乘具]（名） 馬などに乘るための具、即ち鞍又はたづなの類。

（しよう-くわ[昇華]（名） [化]熱するときは固體より直に氣化し、これを冷(ヒ)やせば直ちに凝結すること。

（しよう-くわ[松火]（名） たいまつ。

（じよう-くわ[剩過]（名） 一定の數量に過ぎてあまること。ありあまること。

（じよう-くわん[冗官]（名） むだで益なき官職又は官吏。

（しよう-ぐん[勝軍]（名） かちいくさ。——ぢざう[勝軍地藏]（名） 軍の勝利をいのる地藏尊。——ぼく[勝軍木]（名） [植]「ぬるで」の一名。

（しよう-けい[勝景]（名） すぐれて好きけしき。

（しよう-けい[憧憬]（名） 心はるかにおもひよること。あこがること。

（しよう-けい[承繼]（名） うけつぐこと。

（しよう-けん[證權=Authority]（名） 一般のものをして服從又は信仰せしむる權威又は典據。

（しよう-けん[證券]（名） ㊀てがた。證文。㊁[法]債權を證明する證書、即ち法律上其債權の利用に缺き、其證書の占有を必要とするもの。

（しよう-げん[證言]（名） ㊀言詞を以て或事實を證明すること。㊁證人の陳述したる言。

（しようけん-いんし[證券印紙]（名） 收入印紙の發行以前に、專ら證書に貼用せし印紙。

（しよう-こ[稱呼]（名） となへ。よびな。稱號。

（しよう-こ[鉦鼓]（名） かねとたいこと。「－の響」。

（しよう-こ[證據]（名） 物事を證明する根據、眞實なることを知らしむる依所。あかし。しるし。（證左）。——かうべん[證據抗辯]（名） [法]訴訟上にて、相手方の學證に對してなす抗辯。——さいばん[證據裁判]（名） 證據をもとゝする裁判。——しよるゐ[證據書類]（名） 或事實の證據となる書類。——しらべ[證據調]（名） 證據方法をなすこと。證據のとりしらべ。——だつ[證據立]（他、た下二）（てて、てつ、つる、つれ、てよ） 其物事の眞實なることを證明す。あかす。——だて[證據立]（名） 證據だつること。證明。——にん[證據人]（名） 或事實のあかしを立つる人。證明人。——はうはふ[證據方法]（名） 或事實の證據を得る手段。——ぶつけん[證據物件]（名） 或事實の證據となる物件。——ほぜん[證據保全]（名） [法]證據の堙滅するおそれあるか若しくはこれを使用すること困難なりと思料する場合に、未だ訴訟を提起せず又は訴訟を提起すとも未だ證據調に至らざるに、あらかじめ證據調をなしおく手續。

（しよう-ご[證悟]（名） 實際に經驗してさとること。

（じよう-ご[冗語]（名） むだなことば。くだ。

（しよう-こう[昇汞]（名） [化]鹽化第二水銀の稱。

（じよう-こん[乘根]（名） [數]甲數を幾個か連乘して乙數を得たるとき、甲數の乙數に對する稱、a の n 乘根を表はすには、$\sqrt[n]{a}$ 又は $a^{\frac{1}{n}}$ を以てす。

（しようこん-ゆ[松根油]（名） [化]特異の香氣を有する無色の液體、空氣に觸るれば、漸々酸素を吸收して粘質となり樹脂狀に變ず、「ペンキ」「ワニス」等の塗料を製するに用ひらる。

（しよう-さ[證左]（名） あかし。證據。

（じよう-ざつ[冗雜]（名） くだくだしく入りまじること。又、無用なるまざりもの。

(しよう-さん)［稱讃］(名) ほめたゝふること。ほめそやすこと。

(しよう-さん)［勝算］(名) 勝利を得る目的又は謀策。

(じよう-ざん)［乘算］(名) かけざん。(乘法)。

(しよう-し)［松脂］(名) まつやに。

(しよう-し)［承嗣］(名) あとつぎ。うけつぎ。

(しよう-じ)［承仕］(名) 古昔、剃髮して仙洞又は攝家の雜役をつとめしもの。――ほふし（ウ―ホ）［承仕法師］(名) 前條に同じ。

(じよう-しや)［自用車］(名) 貸して料金をとり又は挽(ヒ)きて賃錢を受くるためにあらずして、たゞ自分の使用のためにつくりたる車。

(じよう-しや)［乘車］(名) くるまにのること。

(じよう-しやう)（ヨウ―シヤウ）［丞相］(名) ㊀「しようしやう」に同じ。㊁我國にて執政の大臣の異稱。「菅―」。

(しよう-しやう)（ヨウ―シヤウ）［丞相］(名) 古昔、支那にて、天子をたすけて大政を執行せし最高官。

(じよう-しやう)（ヨウ―シヤウ）［繩床］(名) 繩の床。

(しよう-しよ)［證書］(名) 或事實の證明となる文書、證文。――そしよう［證書訴訟］(名)【法】一定の金額の支拂其他代替物又は有價證券の一定の數量の給附を目的とする訴訟にして、且其事實が證書によりてすべて證明せらるゝ場合になすことを得る一種の簡易なる訴訟手續。――めん［證書面］(名) 證書の文面。

(しよう-じよ)［陞敍］(名) 上級の官等に敍せらるること。

(じよう-しよ)［烝庶］(名) もろびと。たみ。(庶民)。

(じよう-しよ)［蒸暑］(名) 蒸(ム)しあつきこと。

(じよう-じよう)［烝烝］(名、副) ㊀かず多きさま。㊁すゝむさま又はのぼるさまにいふ語。

(しよう-しん)［衝心］(名) 脚氣の痲痺が、上りて內臟に衝(ツ)き迫(セ)ること。「脚氣―」。

(しよう-しん)［昇進］(名) 官位又は位地の昇(ノボ)り進むこと。

しよう・す（せ・し・す・する・すれ・せよ）［稱］(他、さ變) ㊀となふ。いふ。よぶ。㊁たゝふ。ほむ。

しよう・す（せ・し・す・する・すれ・せよ）［證］(他、さ變) ㊀證據立つ。證明す。あかす。㊁保證す。

しよう・す（せ・し・す・する・すれ・せよ）［誦］(他、さ變) よむ。となふ。

しよう・す（せ・し・す・する・すれ・せよ）［頌］(他、さ變) その功德を文詞にのべてほめたゝふ。

じよう・ず（ぜ・じ・ず・ずる・ずれ・ぜよ）［乘］(自、さ變) ㊀のる。よる。㊁かこつく。つけこむ。

じよう・ず（ぜ・じ・ず・ずる・ずれ・ぜよ）［乘］(他、さ變) 掛算をなす。かく。

(じよう-すう)［乘數］(名)【數】或數に乘ずる數。

(しよう-せい)［鐘聲］(名) かねのこゑ。

(しよう-せき)［蹤跡］(名) ㊀あしあと。あと。㊁ゆくへ。ゆきがた。

(しよう-せき)［證跡］(名) 證據となるべきあとかた。

(じよう-せき)［乘積］(名)【數】二個以上の數をかけ合はせて得たる數値。

(しよう-ぜつ)［勝絕］(名) ㊀最もすぐれてあること。㊁十二調子の一。

(しよう-ぜん)［悚然］(名、副) おそれてぞよっとするさまにいふ語。

(しよう-ぜん)［承前］(名) 前の文面をうけつぐこと。つゞき。

(じよう-せん)［剩錢］(名) ㊀あまりてのこるかね。㊁つり。つりせん。

(じよう-せん)［乘船］(名) ふねに乘(ノ)ること。

(しよう-そ)［訟訴］(名) うったへ。あらそひ。

(しよう-そ)［勝訴］(名) 訴訟の勝となること。

(じよう-そん)［仍孫］(名) 曾孫の曾孫。

(じよう-た)［冗多］(名) くだ／＼しく多きこと。

(しよう-たいしやく)［使用貸借］(名)【法】當事者の一方が無償にて相手方より或物を受取り、これを使用及收益したる後返還することの契約。

(しよう-たう)（ウ―ト）［松濤］(名) 松風の聲を波濤の音にたとへていふ語。まつかぜ。

(しよう-だう)（ウ―ド）［唱道］(名) となへいふこと。

(しよう-だく)［承諾］(名) うけひくこと。うべなふこと。承知。(承引)。

(じよう-だん)［冗談］(名) むだばなし。

(しよう-ち)［勝地］(名) 風景のすぐれてよきところ。めいしよ。(勝跡、勝蹟、名區)。

(しよう-ち)［承知］(名) ㊀旨(ムネ)をうけたまはること。㊁うべなふこと。うけがふこと。うけひくこと。(承引、納得)。㊂知りてゐること。存知。

(じよう-ちやう)（ヨウ―チヤウ）［冗長］(名) いたづらに長(ナガ)たらしきこと。くだ／＼しく長きこと。

(じよう-ぢよ)［乘除］(名) ㊀かくることとわることと。又、乘法と除法と。㊁みたすこととかくこと。ふやすこととへすこと。「天地の―」。

(じよう-ぢん)［承塵］(名) なげし。又、布を天井の如く張りたるものともいふ。

(しよう-てい)［訟廷］(名) おしらす。法廷。

(しよう-てん)［昇天］(名) ㊀天に昇(ノボ)ること。㊁「キリスト」教にて、信者の死去にいふ語。

(しよう-でん)［昇殿］(名) 古昔、四位以上及藏人の六位のものが禁裏の御殿にのぼるをゆるされしこと、昇殿をゆるされたる人を殿上人といふ、昇殿をゆるされざる人は地下といひて、白砂(シラス)に居たり。

(しよう-でん)［承傳］(名) うけつたふること。うけつぐこと。

(しよう-とう)［昇等］(名) 等級ののぼること。

(しよう-どう)［聳動］(名) おそれうごくこと。

(しよう-どう)［衝動］(名) ㊀つきうごかすこと。㊁【心】［Impulse］目的を意識することなく、たゞ何等かの行動をなさんとする心の活動、對象の觀念を有すれど、これに對して何等の思慮もなさずになす活動、何物かを取り又は何事かをなさんとするとき、追ひせまられ又は押しやらるゝが如く感ずる心の活動。

(しよう-どう)［鐘銅］(名)【化】銅百分と錫二十分乃至二十五分との合金、鐘を鑄(イ)るに用ふ。

(しよう-とく)［頌德］(名) 功德をほめたゝふること。――へう（ヨ―ヒ）［頌德表］(名) 功德をほめたゝへて上(タテマツ)る表。

(しよう-どく)［誦讀］(名) 聲高くよむこと。又、單に、よむこと。

(しよう-とつ)［衝突］(名) ㊀つきあたること。ぶっつかること。㊁互に相反すること。㊂互に相爭ふこと。

(しよう-にゆう-せき)［鍾乳石］(名)【地】方解石が石灰洞內に氷柱(ツラヽ)の如く垂下したるもの、石灰質を含める水の洞內に流れ來りて上より滴下するとき、水分漸く乾きて石灰質の固(カタ)まるによりて生ず。つらゝいし。

(しよう-にん)［證人］(名) ㊀證據に立つ人。しようこにん。㊁保證に立つ人。うけにん。㊂【法】或事實の證明のために、裁判所に呼び出され、實驗の上訊問を受くる人。

(しよう-にん)［承認］(名) ㊀其事柄の正當なることを認めて承知すること。㊁うべなふこと。きゝいるゝこと。

(しよう-にん)［使用人］(名) ㊀或ものを使用する人。㊁人に使用せらるゝ人。

(しよう-ねん)［稱念］(名) 佛の名號を口にとなふること。

(じよう-ば)［乘馬］(名) ㊀馬に乘(ノ)ること。㊁のるべき馬。のりうま。じようめ。

(しよう-はい)［勝敗］(名) かちまけ。勝負。(贏輸)。

(しよう-はく)［松柏］(名) ㊀まつとかしはと。㊁松と柏とが四時色をかへぬより、守りて變ぜざる義にたとへていふ語。「―の節」。――くわ［松柏科］(名)【植】喬木若しくは灌木にして、葉は針狀若しくは披針狀をなし叢生若しくは散生す、花は單性にして雌雄同株若しくは雌雄異株なり、果實は毬果にして種子を裸出す、「まつ・かしは」等これに屬す。

(じよう-はつ)［蒸發］(名)【理】液體の表面より液の氣化して上騰すること。――き［蒸發氣］(名)【理】蒸發する氣體。――ねつ［蒸發熱］(名)【理】「きくわねつ」(氣化熱)に同じ。

(じよう-はふ)（ウ―ホ）［乘法］(名)【數】二個或は二個以上の數をかけあはすること。かけざん。

(しよう-び)［鍾美］(名) 美をあつむること。

(しよう-び)［稱美］(名) ほむること。たゝふること。

(じよう-ひ)［冗費］(名) ㊀無益の入費。むだなる費用。㊁無益に費すこと。むだつかひ。(冗糜)。

(しよう-ひよう)［證憑］(名) 證明のよりどころとなるもの。又、其もの。

(しよう-ぶ)［勝負］(名) ㊀かちまけ。(勝敗)。㊁かちまけを決すること。㊂しようぶ事。――ごと［勝負事］(名) かけごと又はばくちの類。――なし［勝負無］(名) あひこ。ごぶ／＼。

(しよう-ふく)［承服］(名) 承知して其言に從ふこと。納得。(承伏)。

(じよう-ぶん)［冗文］(名) むだなる文句。

(しよう-へい)［昇平］(名) 世のおだやかに治まれること。太平。

(じよう-べい)［蒸餠］(名) ㊀麵包。㊁饅頭。

(しよう-へう)（ヨウ―ヒヨウ）［證票］(名) 或事柄の證として渡すふだ。

(しよう-べき)［昇羃］(名)【數】同一文字の種々の羃を有する多くの項より成る式に於て、其最も低き羃の項より順次に高き羃の項を右方へ列ねたるもの、例へば、$3-2x+5x^2-6x^3$ の如し。

(じよう-べき)［乘羃］(名)【數】「べき」(羃)に同じ。

(じよう-ぼく)［繩墨］(名) ㊀すみなは。㊁きそく。のり。

(じよう-まん)［冗漫］(名) くだ／＼しくしてしまりのなきこと。

シヨウマン-アイゼン-ゑ［勝曼愛染會］(名) 陰暦六月朔日、大坂島の內にて行ふ祭禮。

(しよう-みやう)（ヨウ―ミヤウ）［稱名］(名) 佛の名號を稱(トナ)ふること。念佛。(唱名)。

(じよう-みん)［烝民］(名) 萬民。庶民。

(じよう-め)［乘馬］(名) 人の乘(ノ)る馬。のりうま。

(しよう-めい)［證明］(名) 或物事又は判斷の眞僞を明かにすること。――しよ［證明書］(名) 或物事を證明したる文書。

(しよう-もん)［證文］(名) あかしぶみ。證書。

(しよう-やう)（ウ―ヨ）［稱揚］(名) ほめたゝふること。

(しよう-ゆう)［慫慂］(名)「しようよう」に同じ。

(じよう-よ)［乘輿］(名) 天子の車駕。おのりもの。「―吉野に幸す」。

(じよう-よ)［剩餘］(名) あまり。のこり。(餘分)。――きん［剩餘金］(名) 餘分の金。のこりの金。

(しよう-よう)［慫慂］(名) 傍よりすゝめこむこと。

(しよう-よう)［從容］(名、副) 擧動のゆったりとして迫(セマ)らざるさまにいふ語。「―死に就く」。(自若)。

(じよう-よう)［冗用］(名) むだなる用事又は費用。

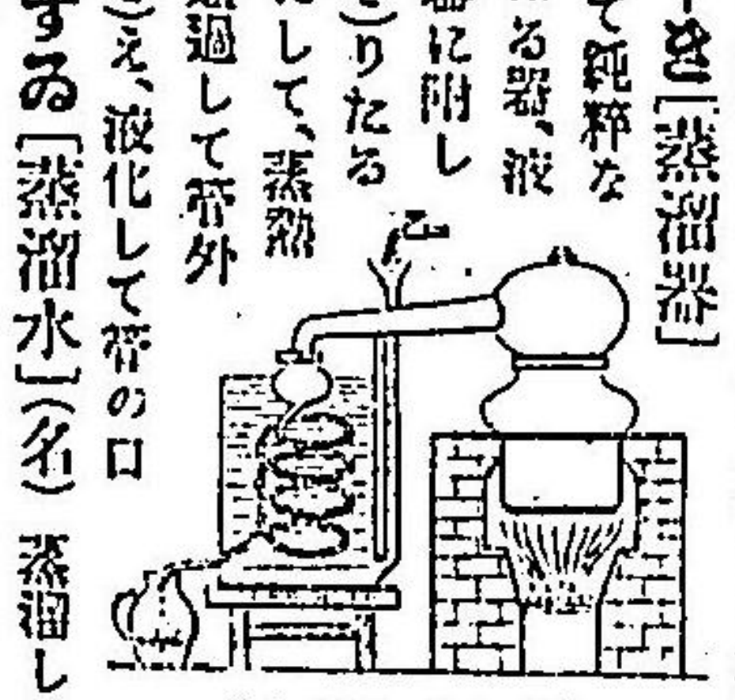
(しよう-ら)［松蘿］(名) ㊀【植】「さがりごけ」に同

じ。㊁まつの木にからむつたかづら。

(**しよう-らい**[松籟](名) まつかぜ。(松韻)。

(**しよう-り**[勝利](名) 戰ひて勝つこと、爭ひて優(サマ)ること。かち。「—を得」。

(**じよう-りう**[蒸溜](名) 蒸發及凝結の理を應用して、蒸發し易き液體を蒸發し易からざる液體より分離せしむること、即ち、液體を熱して蒸發せしめ、其氣を冷(ヒ)やして再び液體となし、以て其中の夾雜物を去るなり。——**き**[蒸溜器](名) 液體を蒸溜して純粹なるものを得るに用ふる器、液體を入れて熱する器に附したる管を冷水を盛(モ)りたる器中に通ずる裝置にして、蒸發したる氣は此管を通過して管外の冷水のために冷(ヒ)え、液化して管の口より滴下す。——**する**[蒸溜水](名) 蒸溜して夾雜物を去りたる水。


[じやうりうき]

(**しよう-りつ**[繩律](名) のり。きそく。

(**しよう-りやう**[承領](名) うけとること、うけたまはること。しようちすること。

(**しよう-れう**[承了](名) しようち。なつとく、

(**しよう-れう**[使用料](名) 或ものを使用するためになす酬報。

(**しよう-れつ**[勝劣](名) 「いうれつ」(優劣)に同じ。

(**しよう-ろ**[松露](名) ㊀松の蕊におく露(ツユ)。㊁[植]菌類に屬する植物、球形にして傘・柄等の區別なし、春夏の交、海邊又は砂地の松樹の下に生ず、土中にあるものは白色にして、土上に出でたるものは褐色なり、食用に供せらる。(麥蕈)。——**カン**[松露羹](名) 古代の一種の菓子。

(**じよう-ろ**[如雨露](名) 草木などに水を注(ソ)ぐために用ふる器、銅又は錻葉などにて製し、形短かき柄杓子の如く、其柄狀をなす所は中空にして末端稍や大く、其端面に數多の小孔を穿ちて水を漏出せしむ。じよろ。

(**しよう-ろう**[鐘樓](名) しゆろう。かねつきだう。

(**じよう-ろ-くわん**[蒸露罐](名) 「じようりうき」(蒸溜器)に同じ。

(**じよう-わ**[冗話](名) むだばなし。

(**しよう-ゐん**[松韻](名) 松風のおと。

(**しよう-ゐん**[承允](名) ゆるすこと。うけがふこと。

(**じよう-ゐん**[冗員](名) 有て益なき人員。

(**しよ-え**[所依](名) よる所。たよる所。よりどころ。

(**しよ-えん**[初緣](名) 始めての緣組。

(**しよ-えん**[所緣](名) ゆかり。たより。

(**しよ-か**[書家](名) 文字を巧に書く人。書道に達したる人。

(**しよ-か**[初夏](名) ㊀夏のはじめ。㊁陰曆四月の異稱。

(**しよ-か**[書架](名) 書物をおく棚(タナ)。書棚。

(**しよ-かう**[初更](名) 今の夜の八時。

(**しよ-がう**[初號](名) 第一號。

(**じよ-かう**[徐行](名) しづかにゆくこと。ゆるやかにすゝむこと。

(**しよ-かうかい**[初航海](名) 其船又は其人の初めての航海。

(**しよ-かく**[書閣](名) しよもつだな。

(**しよ-かく**[書額](名) 文字を記したる額。

(**しよ-がく**[初學](名) ㊀其道をまなびはじめたること。うひまなび。㊁其道をまなびはじめたる人。「—入德之門」。

(**しよ-かつ**[所轄](名) 其事物又は其土地等を管轄すること。「—警察署」。

(**しよ-かん**[所感](名) 感じておこりたるおもひ。感ずるところ。「—を述ぶ」。

(**しよ-かん**[書翰](名) てがみ。書狀。(書簡、書束)。——**し**[書翰紙](名) はんきり。狀紙。(尺牘紙)。——**せん**[書翰箋](名) 書翰を認(シタ)むる紙、詩箋の如くこしらへたるもの。——**ぶくろ**[書翰袋](名) 書翰を入れておくる袋。ふうぶくろ。封筒。——**ぶん**[書翰文](名) 書翰を認むるに用ふる文體、又、其文體を用ひて認めたる文、我國普通には、候の字を使用するより、一に候文といふ。

しよかん-ひら[暑寒平](名) 一種の袴地、絹絲に麻絲をまじへて織り、夏冬共に用ふるもの。

(**しよ-き**[暑氣](名) 夏のあつさ。(炎暑)。

(**しよ-き**[署記](名) 名前をかきしるすこと。

(**しよ-き**[庶幾](名) ㊀こひねがふこと。㊁其物事のほとんど近似してあること。

(**しよ-き**[初虧](名) [天]日蝕又は月蝕の初まること。

(**しよ-き**[初期](名) 其物事の生じて間もなき時。

(**しよ-き**[所期](名) かくあるべしとよちまうくること。「—にたがはず」。

(**しよ-き**[書記](名) ㊀文字を書きしるすこと。㊁文字を書きしるす役。かきやく。ものかき。いうひつ。㊂上官の指揮を受けて庶務に從事する判任官。「裁判所—」、「郡—」。——**くわ**[書記課](名) 書記の事務を取扱ふ所。——**せい**[書記生](名) 大使館・公使館又は領事館若しくは貿易事務館に附屬して、庶務を取扱ふ判任官。——**ちやう**[書記長](名) 大審院及控訴院にて、書記課の事務を指揮監督する高等官。

(**しよ-きう**[雎鳩](名) [動]「みさご」に同じ。

(**しよき-くわん**[書記官](名) 所屬長官の命を受けて事務を掌り又はこれを補助する高等官。——**ちやう**[書記官長](名) 部下の書記官を指揮して、其事務を總轄するもの。「內閣—」。

(**しよ-きふ**[書笈](名) 書物を入るゝおひ。

(**しよ-きふ**[初級](名) 最初の等級。最も低き等級。

(**しよ-ぎやう**[所行](名) しわざ。ふるまひ。おこなひ。(行爲)。

(**しよ-ぎやう**[諸行](名) [佛]萬物。萬有。——**むじやう**[諸行無常](名) [佛]萬有の變遷流轉してしばらくも常住せざること。

(**し-よく**[私欲](名) ㊀自分の利益をむさぼる心。自己のためを思ふいやしき慾望。㊁自我を中心として起るすべての妄念の稱。

(**し-よく**[嗜欲](名) 好み嗜(タシナ)むこと。又、其情。

(**しよく**[職](名) ㊀擔當してある事務。㊁生計のためにする仕事。㊂其官に配當せられたる政務を取扱ふ地位、例へば、たゞ判事といふは官なれど、地方裁判所判事といへば職なるが如し。㊃官とその官に配當せられたる政務を取扱ふ地位とを合しての稱。㊄みつぎもの。貢物。

(**しよく**[燭](名) ともしび。

(**しよく**[食](名) [天]一つの天體が他の天體に遮(サヘギ)られて見えぬこと。(蝕)。

(**しよく**[屬](名) 「ぞく」に同じ。

(**しよく**[觸](名) [佛]「そく」に同じ。

(**しよく**[食](名) ㊀くらふこと。㊁食事。めし。㊂くひ物。しよく物。㊃ふちまい。ふち。——**あたり**[食中](名) 食物にあてられて、腹痛又は吐瀉などを催すこと。(食傷)。

(**しよく-いう**[職由](名) もつぱらもとづきよること。

(**じよく-いう**[辱友](名) かたじけなく交際を受くる友の意。目上の友に對して、自分の地位をいふ謙遜の語。

(**しよく-いふ**[食邑](名) 知行所。采邑。

(**しよく-いん**[職印](名) 其職を表する印。

(**しよく-えん**[屬饜](名) 十分に馳走になること。腹に足る程馳走になること。

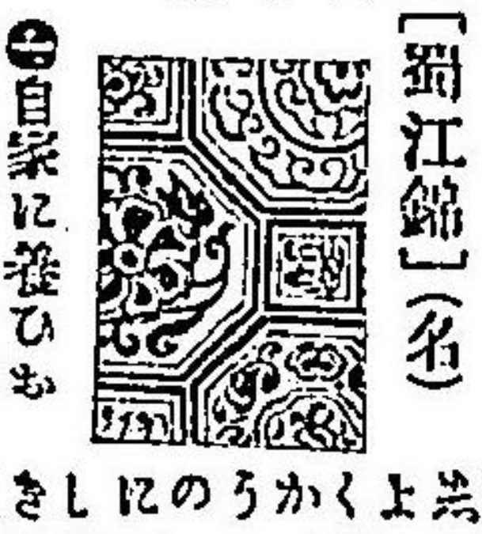
(**しよく-えん**[食鹽](名) [化]食用の鹽、即ち鹽化「ナトリウム」の稱、人體の營養に最も必要なる食料たるのみならず、防腐力を有し諸種の食品を漬(ツ)けて貯藏すべし、また工業上の原料に使用せらる。

(**しよく-か**[燭架](名) 蠟燭たて。燭臺。

(**しよく-かう**[織耕](名) ㊀おるとたがやすこと。㊁他の供給によらずして、自分にて衣食の材料をつくること。

(**じよく-かう**[辱交](名) かたじけなく交際をかうむること。

しよくかう-の-にしき[蜀江錦](名) ㊀古昔、支那の蜀江より產出せし極めて上品なる錦。㊁きりこの模樣を織り出したる錦の總稱。


[しよくかうのにしき]

(**しよく-かく**[食客](名) ㊀自家に養ひおく客人。「—三千人」。㊁ゐさふらふ。かゝりうど。

(**しよく-かく**[觸覺](名) [動]動物が觸官の直接に外物に觸るゝによりて、其外物の存在又は硬軟等を感覺すること、人類のは、皮膚にある末梢神經の外物に觸れて受くる刺戟が大腦の神經細胞に傳はるによりて起る。

(**しよく-かく**[觸角](名) [動]或下等動物の觸覺をつかさどる角、かたつむりの角の類これなり。

しよく-かたき[職敵](名) 同職業のものが互に相にくみ又は相きそふこと。又、其相手。

(**しよく-かん**[觸感](名) 「しよくかく」(觸覺)に同じ。

(**しよく-き**[食氣](名) くひけ。(食慾)。

(**しよく-き**[織機](名) 布帛を織る器械。はた。

(**しよく-き**[食器](名) 食物を入るゝうつは。

(**しよく-き**[食旣](名) [天]日食にて、太陽の形が全く太陰に蔽(オホ)はれたるときの稱、又、月食にて、太陰の形が全く地球に蔽はれたるときの稱。

(**しよく-きやく**[食客](名) 「しよくかく」に同じ。

(**しよく-きん**[贖金](名) つくのひきん。

(**しよく-くわ**[殖貨](名) 財貨をふやすこと。

(**しよく-くわ**[燭火](名) ともしび。

(**しよく-くわう**[燭光](名) ㊀燭火(シヨクビ)の光。㊁[理]光度の單位、鯨油蠟燭が一時間に百二十「グレイン」宛燃(モ)ゆるときに放つ光度。

(**しよく-くわん**[職官](名) 職と官と。「—表」。

(**しよく-くわん**[觸官](名) [動]動物の觸覺をつかさどる器官、即ち人の皮膚又はかたつむりの觸角の類これなり。

(**じよく-げつ**[蓐月](名) うみづき。(臨月)。

(**しよく-げふ**[職業](名) なりはひ。家業。生業。

(**しよく-けん**[職權](名) 官吏の職務を行ふ權限。官吏の命令し又は處分する權力。——**しよぶん**[職權處分](名) 職權の範圍內にて、自由に行動する處分。

(**しよく-げん**[食言](名) 言をはむこと。約束を違(タガ)ふること。

(**しよく-げん**[囑言](名) ㊀ことづて。傳言。㊁口づから後事をたのみおくこと。又、其言。

(**しよく-ご**[食後](名) 食事の後。

(**しよく-こう**[職工](名) 貨物の製作に從事す

る人。特に、資本主にやとはれてする人。——**どうめい**［職工同盟］（名）職工が共同の利益を保護し進捗せしめんために結びたる團體。

（**しよく-こん**［蜀魂］（名）（蜀帝の魂化してなりたりとの故事に出づ）【動】「ほとゝぎす」の異稱。

（**しよく-ざい**［殖財］（名）資財をふやすこと。

（**しよく-ざい**［贖罪］（名）㊀財物を以て罪過をあがなふこと。㊁「キリスト」教にて、諸人は基督によりて罪業より救濟せられ、基督は諸人に代りて其罪業を贖（アガナ）ひたりといふこと。——**きん**［贖罪金］（名）罪過をあがなふ代金。

（**しよく-さん**［殖産］（名）生産物をふやすこと。

（**しよく-し**［食指］（名）ひとさしゆび。——**うごく**［食指動］（左傳に出づ）饗膳にあふ前兆あるにいふ。

（**しよく-し**［贖死］（名）死罪を財などにてあがなふこと。

（**しよく-じ**［食事］（名）飯を食（ク）ふこと。け。

（**しよく-じ**［職事］（名）つとめ。しごと。

（**しよく-じ**［食餌］（名）くひもの。じば。

（**しよく-じ**［植字］（名）活字を植（ウ）うること。——**ばん**［植字板］（名）活字を植ゑ活版を組む板。

（**しよく-しやう**［食傷］（名）しよくあたり。くひすぎ。

（**しよく-しやう**［職掌］（名）擔當の職務。つとめ。役目。「すること。

（**しよく-じやう**［拭淨］（名）ぬぐひてきよくすること。

（**しよく-しゆ**［觸鬚］（名）【動】下等動物の觸覺をつかさどる鬚、蜘蛛の口顎にある鬚などこれなり。

（**しよく-しゆ**［觸手］（名）【動】下等動物の觸覺をつかさどる手、水母の口の周圍にある手の如きものこれなり。

（**じよく-しよ**［溽暑］（名）むしあつきこと。

（**じよく-しよく**［蓐食］（名）朝早く蓐（子）どこにゐて飯を食ふこと。

（**しよく-じん**［食甚］（名）【天】日食の際、太陽の最も多く虧（カ）くること。

しよく-す せしすれせよ［食］（自、さ變）㊀しよく事をなす。㊁生活を立つ。くらす。㊂養はる。「門下に—」。㊃祭らる。「鬼神しよくせず」。㊄ふちを受く。㊅乳を吞む。「—於其死母」。㊆をかされてかく。（蝕）。

しよく-す せしすれせよ［食］（他、さ變）㊀くらふ。はむ。かむ。㊁くひ物とす。「易子而—之」。㊂をかしそこなふ。そこなひかく。（蝕）。

しよく-す せしすれせよ［食］（自、さ變）㊀一の天體が他の天體に蔽（ホオ）はれて見えず。㊁をかされて缺く。

しよく-す せしすれせよ［食］（他、さ變）㊀一の天體が、他の天體を蔽（ホオ）ひかくす。㊁をかしそこなふ。かく。

しよく-す せしすれせよ［囑］（他、さ變）㊀たのむ。㊁ことづく。

しよく-す せしすれせよ［屬］（自、さ變）「ぞくす」に同じ。

しよく-す せしすれせよ［屬］（他、さ變）「ぞくす」に同じ。

しよく-すん-の-し［燭寸詩］（名）蠟燭が一寸燃（モ）ゆる間に作る詩。

（**しよく-せい**［職制］（名）職務分配上の規定。

（**しよく-せき**［職責］（名）職務上の責任。

（**しよく-せつ**［觸接］（名）ふれてつくこと。

（**しよく-せん**［觸線］（名）【數】曲線に觸れ、且これを延長すとも更に其曲線を截（キ）ることなき直線。（切線）。

（**しよく-ぜん**［食前］（名）㊀食事する前。㊁食事する席の前。「—方丈」。

（**しよく-そ**［食素］（名）食物のもとをなすものにして、これを無機性と有機性とに分つ、無機性は水・鹽類・鐵等にして有機性は蛋白質・「ペプトン」・膠素・脂肪・含水炭素・砂糖・木纖維素・有機性酸類等なり。

（**しよく-たい**［食滯］（名）食物の消化せずして、胃に滯（トドコホ）ること。

（**しよく-だい**［燭臺］（名）蠟燭を立て、火を點ずる臺。らふそくたて。燭架。

（**しよく-だう** ウード［食道］（名）【動】高等動物の消化器系統の初部にして、嚥下する食物の通過する經路、氣管の後方にありて頸部を直走し、下方は胃に通ず、鳥類には、其中間に食物を貯ふる嗉囊あり。

（**しよく-だう** ウード［食堂］（名）食事する部屋。——**つき-れつしや**［食堂附列車］（名）食堂の設備ある鐵道列車。

（**しよく-たく**［食卓］（名）食事盤。チヤブだい。

（**しよく-たく**［囑託］（名）㊀たのむこと。ゆだぬること。㊁雇傭又は任命にあらずして、或業務を取ることをたのむこと。㊂或事をたのみゆだねたる人。

しよ-くち［諸口］（名）もろもろの口座。

しよ-くち［初口］（名）はじまり。はじめ。いとぐち。

（**じよく-ち**［辱知］（名）（知を辱（カタジケナ）うすとの意）知りあひの人に對して、其人と交際あることにいふ謙稱。「—某生筆記」。

（**しよくちゆう-しよくぶつ**［食蟲植物］（名）【植】葉面より昆蟲の液汁を吸收して營養となす植物。まうせんごけの類これなり。

（**しよくちゆう-るゐ**［食蟲類］（名）【動】蟲類を求め食ふ獸、小形にして土中に穴居し、脚短くして各五趾を具へ、爪鋭（スルド）くして地を堀（ホ）るに適す、口吻長く眼至つて小なり、むぐらもち・ぢねずみ等の類これに屬す。

（**しよく-ぢよ**［織女］（名）㊀はたをりの女。㊁たなばた。「牽牛—」。

（**しよく-ど**［埴土］（名）構成の粒子極めて細小なる土、粘質に富み、濕潤すれば粘着し、乾燥すれば固（カタ）まりて硬（カタ）くなる。

（**しよく-にん**［職人］（名）㊀手藝にて物を製作することを業とするもの。㊁職工。

（**しよく-のう**［職能］（名）つとめのはたらき。

（**しよく-はつ**［觸發］（名）ものにふれて發すること。「—水雷」。

（**じよく-ひ**［蓐被］（名）しとねとかいまきと。

（**しよく-ひん**［食品］（名）粗生物に多少の調理を加へて食料としたるもの。

（**しよく-ふ**［織婦］（名）はたをりの女。

（**しよく-ぶつ**［贖物］（名）あがなひのために出だすもの。

（**しよく-ぶつ**［植物］（名）【植】生物の一、其基部は土地又は或ものに着き、自在に動く能はず、又、自ら枝葉を動かす能はず、おもに液體又は氣體を營養物として吸收す、無機物を攝取して體質を生成する力あれど知覺なし、即ち、樹木・草本などの總稱。動物・鑛物の對。——**かい**［植物界］（名）自然界に於て植物と名づけらるゝものゝ範圍。——**がく**［植物學］（名）【植】植物界に於ける諸種の狀態・事項を研究する學の總稱、植物の內部の構造を研究するを植物解剖學といひ、植物の外部の形態を研究するを植物形態學といひ、植物の諸器官の作用を考察し其生活の原理を研究するを植物生理學といひ、外界の狀態に適應して植物の生存する狀態を研究するを植物生態學といひ、系統を立てゝ植物の類別を研究するを植物分類學といふ。——**がん**［植物岩］（名）【地】植物體の沈積又は變化によりて成りたる岩石。——**くけい**［植物區系］（名）【植】植物の分布が、諸種の理由によりて、氣候及溫度の同一なるにも關せず、異なる地方に異なる群をなす狀態。——**しつ**［植物質］（名）植物體を組成する物質。——**たい**［植物體］（名）植物と稱する物體。——**ぶんぷ**［植物分布］（名）【植】植物の種類が森羅萬象にして、地球上到る處に特異の種類を生ずる狀態、溫度と氣候とはこれと最大の關係を有す。

（**しよく-ぶん**［織文］（名）おり出したる模樣。

（**しよく-ぶん**［職分］（名）㊀職務上の本分。㊁自身の爲すべき又は爲さゞるべからざる本分。——**でん**［職分田］（名）古昔、官職に應じて、官より給與せられし田。しきでん。

（**しよく-ほう**［食封］（名）ちぎやうしよ。食邑。封土。

（**しよく-ほう**［食俸］（名）ふち。ちぎやう。

（**しよく-みん**［殖民］（名）外國の一定の地に、多數の內國人民を移住せしむること。又、其移住したる人民。（植民）。——**ち**［殖民地］（名）殖民する地。殖民の住む地。（植民地）。

（**しよく-む**［職務］（名）擔任する事務又は其事務の處理。つとめ。——**こころえ**［職務心得］（名）㊀假に其職務を取扱ふ地位。㊁職務上心得おくべき事柄。——**さいそく**［職務細則］（名）其職務の執行に關する規定。——**ほう**［職務俸］（名）或職務にあたるにつきて、特別に給與せらるゝ俸給。

（**しよく-もく**［屬目］（名）目をつくること。（囑目）。

（**しよく-もつ**［食物］（名）くらふべきもの。又、くひもの。

（**しよく-やすみ**［食休］（名）食事するための休憩時間。食事のやすみ。

（**しよく-よう**［食用］（名）食物に用ふること。食物に用ふるもの。食料。——**ひん**［食用品］（名）「しよくひん」（食品）に同じ。

（**しよく-よく**［食欲］（名）食ひたく思ふ欲情。

（**しよく-り**［殖利］（名）利益をふやすこと。

（**しよく-りやう** ヨーリ［食糧］（名）食用とするかて。又、食物。

（**しよく-りよく**［燭力］（名）燭光の力。

（**じよく-れい**［縟禮］（名）くだくだしき禮儀。こまかき事にわたりたる儀式。

（**しよく-れう** ヨーリ［食料］（名）㊀食ふべきもの。食物。食品。㊁食物の代金。食事の報酬。

（**しよく-ろく**［食祿］（名）ふち。ちぎやう。

（**しよ-ぐわ**［書畫］（名）書と畫と。

（**しよ-くわい**［所懷］（名）心におもふ所。おもひ。

（**しよ-くわい**［初會］（名）㊀初めて會（ア）ふこと。初對面。㊁遊客の初めて其遊女をかひて遊ぶこと。「—の客」。——**きやく**［初會客］（名）其遊女には初會なる客。（生客）。

（**しよ-くわう** ヲーク［曙光］（名）㊀よあけのひかり。㊁暗黑の中に光明のあらはれそむること。「平和の—」。

（**しよぐわ-くわい**［書畫會］（名）書畫を書くために催（モヨホ）す會合。

（**しよぐわ-てふ** ヨーチ［書畫帖］（名）書畫をまじへてかきたる折手本の類。

（**しよ-くわん**［所管］（名）管理すること。あづかること。又、其範圍。——**ちやう** ヨーチ［所管廳］（名）其事務を所管する官廳。

(しよ-くわん[書卷](名) しよもつ。ふみ。
(しよ-ぐわん[所願](名) 願(ネガ)ひのすぢ。願ふ所。
(しよ-くわん[舒緩](名) ゆるやかなること。
卄しよく-ゐ[即位](名)「そくゐ」の訛語。
(しよく-ゐん[職員](名) ㊀或職務を擔任する人。㊁庶務を取扱ふ人。「教—」。—ろく[職員錄](名) 國家の職務に從事するもの、官職・姓名等を記錄せるもの、毎年内閣印刷局にて編輯發行す。
(しよく-ゑ[觸穢](名) 服忌・產穢・月經などの穢(ケガレ)に觸るゝこと、古昔、其時には神社神事に立ち寄ることを許さゞりき。
(しよ-くん[諸君](代) 多くの人に對していふ敬稱。みなさん。
(しよ-くん[敍勳](名) 勳等に敍し勳章を賜はること。
(しよ-け[所化](名) 僧侶の弟子の稱。なっしよ。能化の對。
(しよ-けい[庶兄](名) 妾腹に生れたる兄。
(しよ-けい[書契](名) 文字を以て物事をしるしおくこと。
(しよ-けい[書檠](名)「しよとう」(書燈)に同じ。
(しよ-けい[處刑](名) 處分して刑罰を科すること。
(しよ-げい[諸藝](名) いろ／＼の藝道。
(しよ-けい[敍景](名) 景色をのべいふこと。
(しよ-けう[助教](名) ㊀教授を補助する職。㊁古昔の大學寮の屬、すけはかせ。
(しよ-けうじゆ[助教授](名) 教授の補助たる職名。
(しよ-けうゆ[助教諭](名) 教諭の補助たる職名。
(しよ-けつ[處決](名) ㊀判斷をつくること。さばくこと。「罪を—す」。㊁覺悟を定むること。
(しよ-げつ[初月](名) みかづき。(新月)。
(しよ-げつ[暑月](名) なつ。

(しよ-げつ[庶孽](名) めかけばらの子供。
(しよ-げつ[如月](名) 陰曆二月の異稱。きさらぎ。
(しよ-げふ[所業](名) しわざ。ふるまひ。
〔しよ-げる(自、か下二) 失望してうつとりすること。あてはづれて呆(キア)る。興さむ。
(しよ-けん[書見](名) 書を讀(ヨ)むこと。書物を見ること。
(しよ-けん[所見](名) ㊀見たる所。見たる物。㊁かんがへ。おもひ。意見。
(しよ-けん[諸賢](代) 多くの人に對していふ敬稱。
(しよ-げん[緒言](名) まへがき。はしがき。
(しよ-げん[諸彥](代) 多くの人に對していふ敬稱。
(しよ-げん[序言](名) まへがき。はしがき。
(しよ-げん[助言](名)「しよごん」に同じ。
(しよ-こ[書賈](名) 書籍をあきなふ人。
(しよ-こ[庶姑](名) しうとめ。
(しよ-こ[書庫](名) しよもつぐら。
〔しよ-ご[助語](名) ㊀[文法]弖爾乎波と助動詞との稱。しよじ。㊁「しよじ」(助辭)(二)に同じ。
(しよ-こう[諸侯](名) (侯は射術の「まと」、支那の古代に、射術の巧拙を以て賢を擇び、射て「まと」に中てたるものに、封土を與へしよりいふ)封建制度にて、一定の封土を有し其封土内の人民を支配する一切の權力あるもの。だいみやう。
(しよ-こう[助攻](名) 本攻を容易ならしむるための攻擊。
(しよ-こく[諸國](名) もろ／＼のくに。
(しよ-こく[初刻](名)「しよはん」(初版)に同じ。
(しよ-こつ[蹠骨](名) 足の骨。
〔しよ-こと(名) しかた。せんかた。「—なし」。
(しよ-こん[初婚](名) はじめての結婚。
(しよ-こん[初獻](名) 酒宴にて、始めて杯をさすこと。

(しよ-こん[如今](名、副) たゞいま。いま。(今時)。
(しよ-ごん[助言](名) 傍より口を出して助くること。言葉を添へて助くること。しよげん。
(しよ-さ[所作](名) ㊀しわざ。ふるまひ。「不法の—」。㊁身體のこなし。㊂をどり。まひ。
(しよ-さい[書齋](名) 書を讀み又は文を書きなどする室。學問する部屋。
(しよ-さい[處裁](名) 處置をつくること。
(しよ-ざい[所在](名) 其ものゝ存在する所。ありか。すみか。—ち[所在地](名) 其ものゝ存在する土地。—な・し[所在無](形、二) たいくつなり。つれ／＼なり。
〔しよさい-な・し[如才無](形、二)(諺語の如在より出づといふ、「なし」は助語)ぬけめなし。ぬかりなし。
(しよ-ざい[恕罪](名) 罪をゆるして問はざること。
(しよ-さう[書窓](名) 書齋の窓。
(しよ-さう[所相](名) [文法]うけみ。受動。
(しよ-ざう[所藏](名) 我物としてをさめおくこと。又、其物。
〔しよさ-ごと[所作事](名) ㊀をどりををどること。㊁狂言にをどりを含みてあるもの。
(しよ-さつ[書札](名) かきつけ。手紙。
(しよ-さつ[書冊](名) しよもつ。ふみ。
(しよ-さん[初三](名) 月のはじめの第三日。—のつき[初三月](名) みかづき。
(しよ-し[庶子](名) ㊀妾腹の子。㊁[法]父の認知したる私生子。
(しよ-し[處士](名) 民間にありて仕官せぬ人。
(しよ-し[處子](名) きむすめ。をとめ。(處女)。
(しよ-し[書肆](名) 本屋。書林。

(しよ-し[書史](名) 書籍。書物。
(しよ-し[所司](名) 足利時代の侍所の長官。
(しよ-し[諸司](名) もろ／＼のつかさ。
(しよ-し[諸士](名) おほくの人士。
(しよ-し[諸子](名) 韓非子又は荀子等の如く、子と名づくる書類及其學說。「—百家の說」。
(しよ-し[所思](名) おもふ所。おもひ。
(しよ-し[諸子](代) ものゝがた。しよくん。(諸氏)。
(しよ-じ[處事](名) 事をとりはからふこと。
(しよ-じ[諸事](名) いろ／＼の事柄。よろづの事。
(しよ-し[序詞](名) はしがき。(敍詞)。
(しよ-し[助詞](名) [文法]てにをは。
(しよ-じ[助辭](名) ㊀[文法]「しよご」に同じ。㊁漢文にて、他の語に附屬して其意味を助くる語、例へば矣・焉などの類。(助字)。
(しよ-じ[敍事](名) 事實をのべ記すること。
(しよ-じ[序次](名) ついで。じゆんじよ。しだい。
(しよ-しう[初秋](名) ㊀秋の初。㊁陰曆七月の異稱。(孟秋)。
(しよ-しき[諸式](名) もろ／＼。しなじな。「—高直」。(諸色)。
(しよ-しき[書式](名) 證書又は願書などの規定の文體。(文例)。
(しよじ-し[敍事詩](名) 事實をのべ記したる韻文。抒情詩の對。
(しよし-だい[所司代](名) ㊀足利時代に、侍所の所司の家人が主人の代理として事を取扱ひしときの稱。即ち、所司の名代。㊁織田氏以後に、京都に置きて、禁裏に係かる一切の事務を掌らしめし職名。「京都—」。
(しよじ-たい[敍事體](名) 議論をさしはさまずして、もとに事實をのべあらはす文體。

(しよ-しちにち[初七日](名) しよなのか。
(しよ-じつ[初日](名) ㊀其物事のあるはじめての日。㊁あさひ。旭日。
(しよじ-ぶん[敍事文](名) 敍事體の文章。
(しよ-しや[書寫](名) 書(カ)き寫(ウツ)すこと。
(しよ-じやう[書狀](名) てがみ。ふみ。書簡。
(しよ-じやう[如上](名) 上に述(ノ)べたる所をさしていふこと。
(しよ-じやう[抒情](名) 自家の感想をのべあらはすこと。—し[抒情詩](名) 自家の感想を述べあらはす韻文。
(しよ-じやく[書籍](名)「しよせき」に同じ。—くわん[書籍館](名)「しよせきくわん」に同じ。
(しよ-じやく[敍爵](名) ㊀昔時、始めて從五位下に敍せられしとの稱。㊁爵位に敍せらるゝこと。
(しよ-しゆ[諸種](名) いろ／＼。くさ／＼。
(しよ-しゆ[助手](名) ㊀仕事のたすけをする人。すけ。㊁大學にて、教官の指揮を承けて學術技藝に關する職務に服する人。
(しよ-しゆつ[庶出](名) 妾腹に生まれたること。又、其人。
(しよ-じゆつ[敍述](名) 次第を追ひて述(ノ)べいふこと。
(しよ-しゆん[初春](名) ㊀春のはじめ。はつはる。㊁陰曆正月の異稱。
(しよ-じゆん[初旬](名) 月の初の十日。上旬。
(しよ-しよ[處暑](名) 二十四氣の一、秋の氣節にして、八月廿三日頃にあたる。
(しよ-しよ[處處](名) こゝかしこ。ところどころ。そこらこゝら。
(しよ-しよ[沮洳](名) 土地低くして常に水にひたりうるほふこと。又、其土地。

(しよ-じよ[徐徐](名、副) ㊀しとやかに歩むさま又はもちつきてなすさまにいふ語。㊁急ならざるさま又ははげしからぬさまにいふ語。—に(副) しづかに。おもむろに。
(しよ-しよう[書證](名) [法]文書を以てする證據方法。
(しよ-しん[書信](名) 手紙のたより。ふみのおとづれ。
(しよ-しん[處身](名) きむすめの身。
(しよ-しん[所信](名) 信ずる所。「—を曲げず」。
(しよ-しん[初審](名) 第一回の審判。はじめてのしらべ。
(しよ-しん[初心](名) ㊀未だ其物事に慣(ナ)れざること。未熟。㊁未だ世に慣れざること。うぶ。—もの[初心者](名) 未熟なる者。うぶなる者。
(しよ-じん[庶人](名) たみ。庶民。人民。
(しよ-じん[諸人](名) おほくの人。もろ／＼の人。
しよ・す[處](自、さ變) ㊀をる。又、すむ。「世に—」。㊁とゞまる。又、いこふ。
しよ・す[處](他、さ變) ㊀判別す。わかつ。わく。㊁さだむ。きむ。㊂きりもりす。とりさばく。はからふ。
しよ・す[署](他、さ變) 自ら姓名を記す。
しよ・す[書](他、さ變) 文字を記す。文字にて記す。かく。しるす。
しよ・す[恕](他、さ變) 思ひやりて罪過を見(ユル)す。ゆるす。
しよ・す[敍](他、さ變) 爵を授く。又、位を授く。
しよ・す[序、敍](他、さ變) ㊀文章又は詩歌にのべあらはす。㊁はしがきをかく。しよぶんをかく。㊂ついづ。
(しよ-せい[處世](名) 世に處すること。よわたり。

よすぎ、「—の法」。

(しよ-せい)[所生](名) ㊀生みたる親。㊁生みたる子。

(しよ-せい)[諸生](名) おほくの生徒。

(しよ-せい)[庶生](名) ㊀めかけばら。㊁人民。

(しよ-せい)[書生](名) ㊀未だ官に就かず又は職に就かずして、勉學の時期にある人。學生。㊁かたはら家事を手傳ひかたはら學問する食客。——しばゐ[書生芝居](名)「さうしばゐ」(壯士芝居)に同じ。——ばおり[書生羽織](名) 普通のものより丈長き羽織。——やくしや[書生役者](名)「さうしやくしや」(壯士役者)に同じ。

(しよ-せい)[助勢](名) 力を添ふること。たすくること。又、其もの。

(しよ-せい)[助成](名) 助けて成就せしむること。——ひん[助成品](名)【經】生產物の原料にあらずして、生產物を助成する物品、即ち肥料・藥品等の類これなり。

(しよ-せき)[書跡](名) 書きたる筆跡。ふでのあと。筆跡。

(しよ-せき)[書尺](名) てがみ。書狀。

(しよ-せき)[書籍](名) 綴(ツヅ)りて册子となしたる文書。しよもつ。ほん。——くわん[書籍館](名) おほくの書籍を備へおきて、衆人の閲覽に供する所。

(しよ-せつ)[諸說](名) いろ〳〵の意見。又、いろ〳〵の取沙汰。「—紛々」。

(しよ-せつ)[絮雪](名) 柳の花。(柳絮)。

(しよ-せつ)[敍說](名) 其次第をのべとくこと。(敍說)。

(しよ-せん)[所詮](名、副) つまる所。つまり。ひつきやう。

(しよ-せん)[緒戰](名) 敵の部隊と我部隊との交戰の始期の稱。

(じよ-せん)[如船](名) うきぐつ。うきぶくろ。

(しよ-そく)[初足](名) 貴人などのそゞろあるき。

(しよ-ぞく)[所屬](名) 附屬してあること。又、附屬してあるもの。

(しよ-ぞく)[庶族](名) ㊀平民。㊁別家。

(しよ-そん)[書損](名) かきそこなひ。

(しよ-ぞん)[所存](名) 心中に存ずる所。みこみ。かんがへ。おもひ。(思慮)。

(しよ-たい)[處待](名) もてなし。待遇。

(しよ-たい)[書體](名) 文字の體裁。又、文字の書方。

(しよ-たい)[所帶](名) ㊀身代。身上。家產。「—を潰す」。㊁一家を構(カマ)へてなす獨立の生計。くらし。なりはひ。——くづし[所帶崩](名) 一旦立てたる所帶を解き、家族と離れ孤獨にて世をわたるもの。——だうぐ[所帶道具](名) 一家の生計をたつるに必要なる道具。

(しよ-だい)[初代](名) 一系統の最初に立つ人。又、其人の世。

(しよ-だいぶ)[諸大夫](名) 古昔、五位の人の通稱。

(しよ-たいめん)[初對面](名) 始めての對面。はつたいめん。しよくわい。(初會)。

(しよ-たう)[書刀](名) 紙を切(キ)る小刀。

(しよ-たう)[蔗糖](名) 普通の砂糖の稱。甘蔗又は甜菜等の液汁に石灰を加へ、これを熱して凝結したる蛋白質を除き、蒸發結晶せしめて製す、其褐色液の粗製品を白下(シロシタ)といひ、白下を壓搾して糖蜜を除き去りたるものを白砂糖といひ、更に獸炭を用ひて其色素を去り純白の結晶形となしたるものを三盆といふ。

(しよ-だう)[書堂](名) しよさい。

(しよ-だう)[書道](名) 文字を書く道。

(しよ-だう)[諸道](名) ㊀よろづの事。ばんじ。「貧は—のさまたげ」。㊁いろ〳〵のみち又はわざ。「—に通ず」。㊂もろ〳〵の方面。

しよ-だし[序出](名) かきはじめ。くちきり。發端。

しよ-だな[書棚](名) 書物を載(ノ)する棚。(書架)。

(しよ-だん)[初段](名) ㊀はじめの段。㊁碁又は將棊等の位附の名目。

(しよ-だん)[處斷](名) 裁決すること。さばくこと。

(しよ-たん)[助炭](名) (炭の質を助くる義)框(ワク)に紙を張り、火鉢などの上に被(オホ)ひて、火氣を散らしめぬやうにする具。

(しよ-ち)[處置](名) はからひ。あつかひ。さばき。きりもり。

(しよ-ち)[所知](名) 知行所。所領。

(しよ-ぢ)[所持](名) 携帶すること。所有すること。持ちてあること。——ひん[所持品](名) 所持してあるしなもの。

(しよ-ちつ)[書帙](名) ㊀書物をつゝむちつ。㊁しよもつ。ほん。

(しよ-ちやう)[所長](名) 所と名のつく場所の事務を總理するもの。

(しよ-ちやう)[署長](名) ㊀署と名のつく場所の事務を總理するもの。㊁警察署長。

(しよ-ちゆう)[暑中](名) ㊀夏の暑さの間。㊁夏の土用十八日間の稱。

(しよ-ちゆう)[書中](名) 手紙の文句の中。又、文書の文句の中。

(しよ-ぢよ)[處女](名) 初心の女。きむすめ。をとめ。(處子)。「始如—後如脫兎」。——えんぜつ[處女演說](名) 其人の初めて公衆に對してなす演說。——さく[處女作](名) 其人の初めて世に出だす製作。

しよ-づくゑ[書机](名) 書物を載(ノ)する日本風の机。ふみづくゑ。

しよつ-ちゆう(名、副) つね。不斷。(東京の方言)。

しよつ-ぱい[鹹](形) しははゆし。(東北の方言)。

しよ-て[初手](名) はじめ。最初。

(しよ-てい)[書體](名)「しよたい」に同じ。

(しよ-てい)[處體](名) なりふり。とりなし。

(しよ-てつぺん)[初天邊](名) 最上。又、最初。

(しよ-てん)[所天](名) をつと。亭主。

(しよ-てん)[書店](名) 書籍を賣る店。ほんや。

(しよ-てん)[書典](名) しよもつ。文書。

(しよ-でん)[初傳](名) 最下級の傳授。最初の傳授。

(しよ-でん)[所傳](名) 口碑又は文書によりて、後世に傳ふる所。「—に據れば」。

(しよ-と)[書蠹](名) ㊀書物の中に生ずるしみ。㊁たゞ讀書にのみふける人、又いたづらに讀書して、其意義を消化するを能はざる人にいふ語。

(しよ-ど)[初度](名) ㊀はじめ。初回。㊁たんじやうび。「六十の—」。

(しよ-とう)[初冬](名) ㊀冬の初め。㊁陰曆十月の異稱。

(しよ-とう)[書燈](名) 書を讀む燈火(トモシビ)。

(しよ-とう)[初等](名) 最初の等級。はじめ。——へいめん-きかがく[初等平面幾何學](名)【數】點・直線及圓より成る平面形のみに就きて研究する幾何學。

(しよ-とう)[諸等](名)【數】「しよとうすう」の略言。——すう[諸等數](名)【數】もろ〳〵の等級の單位の名稱によりて表はさるゝ名數、例へば一里二町三間又は四圓五十六錢等の類これなり。單名數の對。——つうはふ[諸等通法](名)【數】諸等數を單名數に化する計算、例へば、一里二町三間を化して二千二百八十三間となすが如し。——めいはふ[諸等命法](名)【數】單名數を諸等數に直す計算、例へば、二千二百八十三間を化して一里二町三間となすが如し。

(しよ-どう)[所動](名)「しゆどう」(受動)に同じ。

(しよ-どう)[助動](名)「しよどうし」の略言。——し[助動詞](名)【文法】獨立して使用せらるゝことなく、必ず動詞稱には形容詞・名詞等に結びつきて、これに意義を添ふる詞、「聞くなり」「行きけり」などの「なり」「けり」の類にして、分つて所相・勢相・使役相・指定・推量・打消・時・希望・比況の九種とす、所相及勢相は「る」「らる」、使役は「す」「さす」「しむ」、指定は「なり」「たり」、推量は「む」「らむ」「めり」「まし」「らし」「べし」「けん」、打消は「ず」「まじ」「じ」、時は「つ」「ぬ」「たり」「り」「けり」「き」「らむ」、希望は「なん」、比況は「ごとし」なり。

(しよ-とく)[所得](名) ㊀我身に得る所。㊁收入。利益。㊂【經】生產に關係したるものが一定の期間に受くる報酬、即ち分配の分前(ワケマヘ)。——きん[所得金](名) 所得となる金。收入の金。——ぜい[所得稅](名) 一ケ年の所得額を標準とした一種の直接國稅、分つて三種とす、第一種は法人の所得、第二種は所得稅法施行地に於て支拂をなす公債社債の利子、第三種は第一種第二種に屬せざるものにして、一ケ年三百圓以上の所得あるものに賦課し、等級を分け累進稅法による。

(しよ-とく)[書牘](名) てがみ。ふみ。書簡。書面。——たい[書牘體](名) 書牘に書く文體。しよかんたい。——ぶん[書牘文](名) 書牘體の文。さふらふぶん。(書簡文)。

しよ-なのか[初七日](名)【佛】人の死したる日より第七日にあたる日。しよしちにち。

(しよに)(名)【動】「かはせみ」の一名。

(しよ-にち)[初日](名) 物事を始むる日。はじめての日。「芝居の—」。

(しよ-にふよう)[諸入用](名) 次條に同じ。

(しよ-にふひ)[諸入費](名) いろ〳〵の物事のつひえ。

(しよ-にん)[庶人](名) しもじも。人民。

(しよ-にん)[諸人](名) もろびと。

(しよ-にん)[初任](名) 初めて其官に任ぜらるゝこと。

(しよ-にん)[敍任](名) 位に敍し又は官に任ぜらるゝこと。

(しよ-ねつ)[暑熱](名) 夏のあつさ。(炎暑)。

(しよ-ねん)[初念](名) はじめのおもひ。「—を翻す」。

(しよ-ねん)[所念](名) おもひ。かんがへ。

(しよ-はう)[諸方](名) あちこち。こゝかしこ。あちらこちら。

(しよ-はう)[處方](名) ㊀てだて。しかた。㊁病氣に應じてなす配劑。——せん[處方箋](名) 醫師の處方を記したる書きつけ。

(しよ-ばう)[書房](名) ㊀しよさい。㊁しよてん。

(しよ-はつ)[初發](名)「しよはつ」に同じ。

(しよ-ばつ)[處罰](名) 罰に處すること。罰すること。

(しよ-はふ)[書法](名) 文字を書く法。字の書きかた。

(しよ-はふ)[助法](名)【法】方法及手續を規定したる法律、即ち、刑事訴訟法・民事訴訟法の類。

(しよ-はん)[諸般](名) いろ〳〵。くさ〴〵。「—の品」。(百般、萬般)。

(しよ-はん)[初版](名) 書籍の第一版。

(しよ-はん)[初犯](名) 曾て罪を犯(ヲカ)したることなきものが、はじめて罪を犯すこと。

(しよ-はん)[所犯](名) 犯(ヲカ)せるところの罪。

(しよ-ばん[初番](名) ㊀順番のはじめ。㊁はじめてあたりたる番。㊂さいしよ。はじめ。

(しよ-ひ[書皮](名) 書物の表紙。

(しよひ-あげ（シヨ）[脊負上](名) 婦人が帶の結目を高くするために締(シ)むるもの。(負揚)。

(しよ-び-く（かきくくけけ）(他、か四) 連れ來る。ともなふ。

(しよひ-こみ（シヨ）[脊負込](名) しよひこむこと。

(しよひ-こ-む（シヨ）（まみむむめめ）[脊負込](他、ま四) 總てよからぬ事を負擔するにいふ。ひきうく。

(じよ-ひつ[助筆](名) 他人の文案に文句をかき加ふること。筆を添(ソ)ふること。

(しよひ-なげ（シヨ）[脊負投](名) ㊀相撲(スマフ)の手、敵の手を執(ト)り、其體を自分の脊にひきのせて投(ナ)ぐること。㊁うまく術略におちいりて、からき目にあふこと。

(しよ-びやう（ヒヤウ）[諸病](名) もろもろの病氣。

じよ-びらき[序開](名) はじめ。はじまり。發端。

(しよ-ふ（シヨウ）（はひふふへへ）[脊負](他、は四) 「せおふ」の約言。

(しよ-ぶ[所部](名) 其管轄範圍に屬すること。又、其もの。

(しよ-ふう[書風](名) 筆跡のさま。書きぶり。

(しよ-ぶつ[諸物](名) もろもろのもの。いろいろのもの。(庶物)。

(しよ-ぶん[處分](名) ㊀わくること。きむること。㊁とりはからひ。さばき。處置。㊂[法]特定の場合に特定の人に對して、法規を適用すること。

(じよ-ぶん[序文](名) はしがき。はしぶみ。(叙文)。

(しよ-へき[書癖](名) 書を好む癖(クセ)。

(しよ-べん[處辨](名) ㊀分別。決定。㊁はからひ。さばき。

(しよ-ほ[書舖](名) 書物を賣る店。ほんや。書肆。

(しよ-ほ[初歩](名) てはじめ。(初學)。

(しよ-ぼ[庶母](名) 父の妾。

(じよ-ほ[徐歩](名) しづかに歩(アユ)むこと。しとやかに歩むこと。

(しよぼ-しよぼ(名、副) ㊀小雨のしげく降(フ)るさま又はうるほひしとるさまにいふ語。㊁力拔け氣弱りたるさまにいふ語。——あめ(名) しよぼしよぼふる小雨。

(しよ-ほつ[初發](名) 始めて發ること。おこり。はじめ。(初起)。

(しよ-まい[精米](名) くましね。

(しよ-まう（ウモ）[所望](名) ㊀望みねがふ所。のぞみ。㊁このみ。注文。

(じよ-まく[序幕](名) ㊀芝居の口あけの幕。㊁物事のはじまり。

(しよ-みん[庶民](名) ㊀もろもろの民。㊁平民。——ゐん[庶民院](名) 國會の一、庶民の公選せる議員を以て組織せらるゝ議院。衆議院。下院。

(しよ-む[庶務](名) 特別の名目なき一般の事務。種々雜多の事務。

(しよ-む[處務](名) 事務の處置、事務の處理。

(しよ-む[所務](名) つとめ。やくめ。——きてい[處務規程](名) 或事務の處理に關する一定の規則。

(しよ-めい[署名](名) 姓名を記すること。「—調印」。

(じよ-めい[助命](名) 命をたすくること。

(しよ-めん[書面](名) ㊀文書のおもて。ぶんめん。(文面)。㊁かきもの。文書。——けいやく[書面契約](名) [法]書面の作成を成立の要件とする契約。——ゐにん[書面委任](名) [法]委任の意思を書面によりて表示するもの。

(じよ-めん[恕免](名) ゆるしてとがめざること。

(しよ-もく[書目](名) 書籍の名目。又、其名目の記錄。

(しよ-もつ[書物](名) 綴(ト)ぢて冊子としたる本。とぢほん。ふみ。(書籍)。

(しよ-や[初夜](名) 昔時は、夜半より明までの稱。近時は、夕方より夜半までの稱。

(しよ-やく[諸役](名) いろいろの役前。

(じよ-やく[助役](名) ㊀主任者の補佐。㊁市又は町村に置く吏員、市長又は町村長を補助するもの、市の助役は市參事會員なり。

(しよ-よ[緒餘](名) あまり。はし。

(しよ-よ[薯蕷](名) [植]「やまのいも」に同じ。——カン[薯蕷羹](名) 一種の菓子、やまのいもの根をすりて、道明寺と饂飩粉とを混じ、これに砂糖を加へて蒸(ム)したるもの。——マンジユウ[薯蕷饅頭](名) 一種の饅頭、やまのいもの根をすり、餡をつゝみて蒸(ム)したるもの。

(しよ-よう[所用](名) ㊀用ふること。又、用ふるもの。㊁用事。用件。

(しよ-らう（ウロ）[初老](名) 四十歳の異稱。

(しよ-らう（ウロ）[所勞](名) わづらひ。やまひ。いたつき。(病患)。

(じよ-らう（ウロ）[助老](名) 老僧坐禪のとき、脇をかけて休むに用ふるもの、形脇息(ケフソク)に類す。

(しよ-り[書吏](名) ㊀事務を取扱ふ屬官。㊁古昔、親王家につとめし職員、家從の下なりしもの。

(しよ-り[處理](名) 事件又は事務を裁斷して、其始末をつくること。しよぶん。とりはからひ。(處置)。

(しよ-りう[諸流](名) ㊀おほくのながれ。いろいろのながれ。㊁おほくの流派。いろいろの流儀。

(じよ-りき[助力](名) たすけ。てつだひ。すくひ。助勢。加勢。

(しよ-りやう（リヨウ）[所領](名) 自分の領有する土地。領地。

(しよりよう-れう（リヨウ）[諸陵寮](名) 宮内大臣の統轄に屬し、陵墓に關する事務を管理する局。

(じよ-りよく[助力](名) 「じよりき」に同じ。

(しよ-りん[書林](名) ほんや。書肆。

(じよ-りん[如輪](名) ㊀[動]頰白(ホホジロ)と同類の小鳥、背部は茶褐色にして側部は暗灰色なり、喉部に多少の黑色部あり。㊁鱗又は輪の如き狀をなす木目。「—の重箱」。(如鱗)。——もく[如輪木](名) 如輪の木目。(如鱗目)。

(しよ-るゐ[庶類](名) ㊀おほくの品類。萬物。㊁いろいろの種類。諸種。

(しよ-るゐ[書類](名) 文字を以て記したるものゝ總稱。かきつけ。文書。

(しよ-れい[諸禮](名) もろもろの禮式。おほくの作法。

(しよ-れい[書例](名) 「しよしき」(書式)に同じ。

(しよ-れう（リヨウ）[庶僚](名) もろもろの官吏。

(じよ-れつ[序列](名) ㊀次第をおひて列すること。㊁順序。次第。

(じよ-れん[如簾](名) 簾(シ)を編みてつくり、どんぶりなどの蔽(オホ)ひにするもの。

(じよ-れん[鋤簾](名) 土砂を搔(カ)き寄せ又は搔き均(ナラ)すに用ふる具、淺き齒を刻みたる板に柄をつけたるもの。

(じよ-ろ[如露](名) 「じようろ」(如雨露)に同じ。

(しよ-ろう[書樓](名) 讀書する所と定めたる樓。

(しよ-ろく[書錄](名) かきしるすこと。かきのすること。

(しよ-ろん[緒論](名) 最初に說く議論。

(じよ-ろん[序論](名) 前條に同じ。

(しよ-わう（ワウ）[諸王](名) 親王宣下のなき皇子・皇孫の稱。

しよ-わけ[諸譯](名) ㊀こみ入りたる事情。㊁必要なる細々の個條。

(しよ-ゐ[所爲](名) ㊀爲す所。しわざ。㊁おこなひ。ふるまひ。

(しよ-ゐ[暑威](名) あつさ。

(しよ-ゐ[初位](名) 古昔、最下級の位階、八位の下なりしもの。そゐ。

(じよ-ゐ[敍位](名) ㊀位に敍せらるゝこと。㊁古昔、正月五日若しくは六日に行はれし禁中の公事、天皇親しく五位以上の位階を授け賜ひたり。

(しよ-ゐん[署員](名) 署と名のつく役所に出勤する人。

(しよ-ゐん[所員](名) 所と名のつくところにつとむる人。

(しよ-ゐん[書院](名) ㊀學者の居所。「陽明—」。㊁讀書勉學する所。書齋。㊂貴人の屋敷の客間。おもてざしき。——ばん[書院番](名) 德川時代に、殿中の書院を守りし武士。

(じよ-ゑん[助援](名) たすけ。かせい。

(しよ-をく[書屋](名) 讀書勉學するための家。

シヨンス井[祥瑞](名) 伊勢國の住人五郎太夫が明國より傳へたる磁器の製法、頗る上品にして釉(クスリ)白く質甚だ密なり。

(しよん-ぼり[蕭然](名、副) 淋(サビ)しくわびしきさまにいふ語。「—坐す」。

(しら(名) 知りてゐながら知らぬさまをなすこと。關係してゐながら關係せぬさまをなすこと。——をきる　しらぬふりをなす。

しら—[白](接頭) (白(シロ)の轉) ㊀或語に冠して其色の白き意を表はす語。「—髮」。㊁或語に冠してきぢその儘の意を表はす語。「—木」。

(—しら(接尾) 「知らぬ」の略言にして、推測していふ場合に用ふる語。「行くか—」。

しら-あへ（エア）[白齏](名) 一種の料理、白胡麻と豆腐とをすりまぜてこしらへたるあへもの。(白韲)。

しら-あり[白蟻](名) [動]白蟻科の蟻、質白色、圓筒狀をなす、頭大にして、複眼なく、上腮發達し、腹部は十節あり、雌には翅あり、社會組織をなし、木材の内部に巢を營み、往々建築物を倒すことあり。

(しら-い[子來](名) 子の親を慕ふが如く集まり來ること。

(じ-らい[爾來](副) そのゝち。以來。

しら-いと[白絲](名) 染めざる白き絲。(素絲)。——もち[白絲餅](名) 白絲の束(タバ)の如く捩(ネヂ)りたるしんこの餅。

(じ-らう（ウロ）[次郎](名) 第二の男子。次男。

しら-うめ[白梅](名) かさねの色目。ひとへうめ。

しら-うを[白魚](名) [動]喉鰾類中しらうを科に屬する魚、體は細長くして脊部扁(ヒ)し、體色は白くして微靑を帶び、體長大なるは三寸餘に達す、我國沿岸多少これを產す。(鱠殘魚)。

しら-が[白髮](名) ㊀「しらかみ」の略言、即ち白き毛髮。(素髮、皓髮)。㊁廿木綿の異稱。㊂婚禮の贈物にて、麻の異稱。——あたま[白髮頭](名) 頭髮の白きこと。又、其ひと。——いと[白髮絲](名) すがいと。——かづら[白髮鬘](名) 芝居に用ふる白髮の鬘。——こぶ[白髮昆布](名) 毛髮の如く、細く刻みたる白色の昆布。

しら-かげ[白鹿毛](名) 馬の毛色、鹿毛に白き毛の雜(マジ)りたるもの。

しら-がさね[白重](名) 夏季の衣服にして、うへしたとも白色のかさね。

しら-かし[白橿](名) [植]殼斗科に屬する木、葉

は披針形にして葉柄を具し、縁邊の上部に鋸齒有りて、下面は帶白色なり、果實は數箇穗狀に排列し、木材は白色にして種々の用に供せられ又、觀賞用として栽培せらる。（栲櫨）。

廿**しら-かす**【醂】（名）（白糟の義）あまき白酒の類。

〔**しらか・す**【白】（他、さ四）興（キヨウ）をさます。感情をそこなふ。

〔**しらか・す**（すさしすせ）（他、さ四）「しらす」に同じ。

しらかは-いし（ワーカ）【白川石】（名）山城國愛宕郡白川村の山中より出だす石、色白くして、橋又は燉石などに用ふ。

しらかは-よふね（ワーカ）【白河夜船】（名）（京を見たるふりするもの白河のこと問はれ、夜船にて通りたれば知らずと答へしに出づといふ、白河には舟通ぜず）前後を知らぬさまにいふ語、多く熟睡のときに用ふ。

しら-かべ【白壁】（名）白く塗（ヌ）りたる壁。（粉壁）。

しらが-まじり【白髮雜】（名）白髮に黑髮の雜（マジ）りて生えたること。又、其もの。（頒白、斑髮）。

しらが-まつ【白髮松】（名）【植】松の變種、葉の半白半綠なるもの。

しら-かみ【白紙】（名）㊀色白き紙。㊁何ものも書きてなき紙。

しら-かゆ【白粥】（名）他に何物をも雜（マジ）へざる白米のかゆ。（殘飯）。

しら-かんば【白樺】（名）【植】樺の一名、其皮の白きより名づく。

しら-き【白木】（名）㊀塗（ヌ）り飾らぬ木地のまゝの材。㊁【植】大戟科に屬する木、葉は掌狀脈なれども分裂せず、花は通常雌雄同株にして雄蕊は二三個あり、種子より油を製し、鐵器を塗るに用ふ。（婆羅得）。——づくり【白木作】（名）木地のまゝの材にて、ものをつくりこしらふること。又、其つくりこしらへたるもの。

シラギ-ごと【新羅琴】（名）十二絃の琴、初め新羅國より渡來したるものにして、絃（ト）に十干及天地の名目あり。

しら-きじ【白雉子】（名）【動】鶉雞類に屬する鳥、支那に產し、體形は我國の雉に似る、羽毛白色なり。

しら-ぎり【白桐】（名）【植】「きり」の一名。（白桐）。

〔**しら-く**【絲絡】（名）いとまき。

〔**しら-く**【刺胳】（名）漢方にて、手足の動脈を刺して惡血を取ること。

しら-く（けけくくるくれけよ）【白】（自、か下二）㊀白くなる。㊁興さむ、「一座しらけて」。㊂まけ色たつ。

しら-ぐ（げげぐぐるぐれげよ）【精】（他、が下二）㊀玄米を搗（ツ）き、もみぬかをはがして白くす。㊁粗末なる部分を取り去りて、麗（ウル）しくよくす。

しら-くじ【白籤】（名）何もしるしてなきくじ。

しらくち【獼猴桃】（名）【植】獼猴桃科に屬する木、葉は楕圓形にして尖（トガ）り、花は白色を呈す、果實は楕圓形にして大さ鶏卵の如く、甘味ありて食用に供せられ、木材及樹皮の纖維は種々の用に供せらる。

廿**しら-くぼ**（名）「しらくも」（二）の古稱。

しら-くも【白雲】（名）㊀白く見ゆる雲。㊁小兒の頭に出づる一種の皮膚病、黴菌によりて起り傳染す、毛髮脫落して跡白くなる。（白禿瘡）。

しらげ【精】（名）しらぐること。又、しらぐる法。——かんな【精鉋】（名）粗板（アライタ）などを滑（ナメ）らかにするに用ふる刃の薄（ウス）き鉋。廿——よね【精米】（名）しらげて白くしたる米。せいまい。はくまい。

廿**しらげ-うた**【後擧歌】（名）雅樂の名、末の節を高くうたひしもの。

〔**しらける**（自）「しらく」の訛。

〔**しらげる**（他）「しらぐ」の訛。

しら-こ【白子】（名）㊀雄魚の腹にある白き餬（コ）の如きもの、卽ち、其精液なり。㊁生れ付きて、毛髮ことごとく白く、體色もまた普通にすぐれて白き人。

〔**しら-こかし**（名）おためごかし。（元祿頃の語）。

しら-ごけ【白苔】（名）【植】地衣類に屬する下等植物、山中に生ず、葉は圓形白色にして高さ二三寸許に達し、花は白色を呈す。はなごけ。

しら-さぎ【白鷺】（名）【動】「さぎ」の稱、其羽毛の白きよりいふ。

しら-さや【白鞘】（名）刀の鞘及柄（ツカ）の白木作のもの。（素鞘）。

しら-しぼり【白搾】（名）白胡麻の種子より搾（シボ）り採りたる油。

しら-しら【白白】（名、副）しろくなり行くさまにいふ語。又、あきらかになり行くさまにいふ語。——あけ【白白明】（名）あけがた。拂曉。昧爽。

しら-しらし（しくしくしきしけれ）【白白】（形、二）㊀廿白く見ゆ。㊁廿興さむるさまなり。㊂知りてゐながら知らぬさまなり。關係してゐながら關係せぬさまなり。

しら-す【白洲】（名）㊀白き砂の洲。㊁白き砂のしきてある所。㊂訴訟を審理する場所。罪人を糺問する場所。裁判廷。（法庭）。

しら-す【白子】（名）【動】「いさざ」の一名。

廿**しら-す**（さしすすせせ）【知】（他、さ四）しろす。しろしめす。

しら-す（せせすするすれせよ）【知】（自、さ下二）㊀通告す。通知す。㊁他の知るやうにす。他の氣づくやうにす。

〔**しら-す**（さしすすせせ）（他、さ四）たはむれて待遇く思はしむ。からかひていらだたしむ。しらかす。

しらず-がほ（オーガ）【不知顏】（名）知りてゐて知らぬさまをよそほふこと。

しら-すな【白砂】（名）白き砂。

しらす-ぼし【白子乾】（名）乾（ホ）したるしらす。ちりめんざこ。

しら-すみ【白炭】（名）えだずみ。しろずみ。

しら-ずみ【白墨】（名）胡粉を固（カタ）めて製したる墨、白色の顏料なり。

しら-すり【白磨】（名）銀にて磨りたる器具。

しらせ【知】（名）㊀告げて知らすること、通知、報知。㊁きざし。前表。前兆。「勝利の―」。㊂芝居にて、あひづに打つ木、「―が入る」。

しら-た（名）（白肌の義）㊀材の白き杉。㊁樹木の幹の中、新たなる年輪の白色なる部分。（邊材）。

しら-たか【白鷹】（名）【動】猛禽類中たか科に屬する鳥、羽毛白色にして少しく背色を帶ぶ。

しら-たき【白瀧】（名）㊀瀧の流れ落つるさまを遠くより見ていふ語。㊁「いとごんにやく」の一名。

しら-たけ【白茸】（名）色の白ききのこ。

しら-たづ【白田鶴】（名）「しらつる」に同じ。

しら-たへ（エーク）【白妙】（名）「しろたへ」に同じ。

しら-たま【白玉】（名）㊀色の白き玉。㊁廿「あこやだま」の一名。㊂【動】廿「あはび」の異稱。㊃白玉粉を水にてこね、これを小さく圓めて茹（ユ）でたるもの、水にて冷やし砂糖をつけて食ふ。——こ【白玉粉】（名）糯（モチ）米の粉と粳（ウルチ）米の粉とを混じて、水にさらしたるもの。——つばき【白玉椿】（名）【植】つばきの變種、白き花のさくもの。（千葉白）。廿——ひめ【白玉姬】（名）「かすみ」の異稱。

廿**しら-たみ**【痼】（名）腹中の急に痛（イタ）む病氣。

しら-ち【白血】（名）婦人の子宮病の一、無色の液の下るもの。（白帶。白淫）。

〔**しら-ち**【仕埒】（名）とりかたづけ。しまつ。處置。

しら-ぢ【白地】（名）㊀瓦又は陶器などのまだ燒かぬもの。㊁しろぢ。

しら-ちや【白茶】（名）淡（ウス）き茶色。

しら-つち【白土】（名）㊀色の白き土。㊁陶土の稱。㊂「シックヰ」の一名。

しら-つゆ【白露】（名）白く凝（コ）りたる露。つゆ。——の【白露】（枕）露の消（ケ）易きより「け」に冠らする詞。

しら-つる【白鶴】（名）羽毛の白き鶴。

〔**しら-つるばみ**【白橡】（名）白色を帶びたるつるばみ色。

しら-と【白砥】（名）粗砥（アラト）と合砥（アハセド）との間に用ふる砥石、色白し、伊豫國宇和島の名產。

しら-とり【白鳥】（名）羽毛白き鳥。

廿**しら-なは**（ワーナ）【白繩】（名）古昔、鵜川（ウカハ）などに、魚を逃（ニガ）さぬためひきはへし繩。

しら-なみ【白波】（名）㊀打ち寄せて白く見ゆる波。（白浪）。㊁（後漢の靈帝の時、張角かいふ盜賊の白波谷に立て籠りし故事に出づ）盜賊の異稱。——の【白波】（枕）「よる」「かへる」に冠らする詞。

〔**しらぬ-かほ**（オーカ）【不知顏】（名）知りて知らぬさまをよそほふこと。

しらぬ-ひ（イーヌ）【不知火】（名）（古昔、景行天皇の海路筑紫に行幸ましゝとき、暗夜何とも知れぬ火の海上にあらはれたりといふ故事に出づ）九州の筑紫潟卽ち有明沖のあたりにて、夏の暗夜に見ゆる燐光、俗に千燈籠ともいふ。——の【下知火】（枕）「筑紫」に冠らする詞。

しら-ね【白根】（名）植物の莖又は根の土中にありて白色をなせる部分。

しら-は【白齒】（名）㊀黑く染（ソ）めぬ齒。（皓齒、皓齒）。㊁（昔時、嫁入（ヨメイリ）すれば齒を黑く染むる習慣なりしよりいふ）未だ結婚せざる婦人。

しら-は【白刃】（名）鞘より拔（ヌ）き放（ハナ）ちたる刃。ぬきみ。はくじん。

しら-は【白羽】（名）純白なる矢の羽。

〔**しらばっくれる**（れれるるれれよ）（自、ら下一）知りて知らぬふりをなす。關係して關係せぬふりをなす。

しら-はた【白旗】（名）白色の旗、「源氏の―」。

しら-はだ【白肌】（名）しろなまづ。（白癜）。

〔**しら-はへ**（エーハ）（名）六月末の南風。

〔**しら-ば・む**（まみむむめめ）【白】（自、ま四）白くなる。

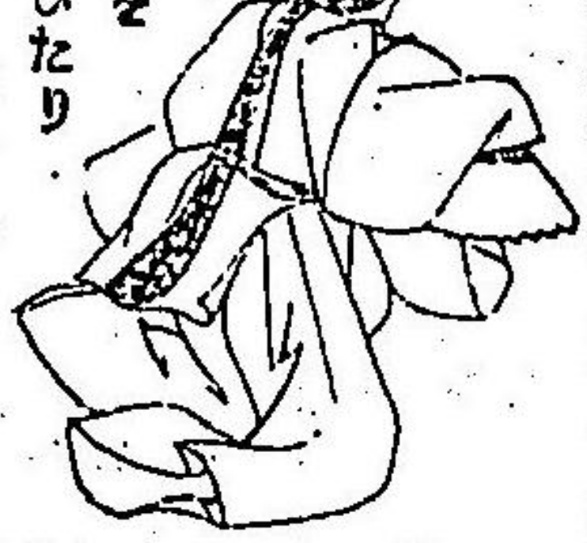
しら-はやし【白囃子】（名）芝居の囃子、擊劍・相撲などの科（シグサ）ある場合に行ふもの。

しら-はり【白張】（名）㊀かたき糊（ノリ）をつけたる白き布の狩衣。はくちやう。㊁「しらはりチヤウチン」の略言。——じちやう（ヨーヂ）【白張仕丁】（名）白張を着たる仕丁。——チヤウチン（ヂョウチン）【白張提燈】（名）白紙をはりたる提燈、葬式に用ふ。

しら-ひげ【白髭】（名）白色の髭、しろきくちひげ。

廿**しら-ひと**【白人】（名）しろなまづのある人。

しら-びやうし（ビヨーシ）【白拍子】（名）㊀古昔、遊女の舞の名、又、其舞をなしゝ遊女の稱、鳥羽院の頃、島の千歳及和歌の前といふ二人の女の舞ひ始めたるもの、始めは水干を着け立烏帽子を戴（イタダ）き白鞘卷さして舞ひたりしが、後には水干ばかり着て舞へり。㊁舞妓又、藝妓。



〔しらびやうし〕

しら-ふ【白斑】（名）白色の斑（フ）、「―の鷹」。

しら-ふ[白面](名)　酒を飲まずにあるときのこと。

卄しら・ふ（は、ひ、ふ、ふ、へ、へ）[合](自、は四)　互に事をなしあふ。「言ひ―」「恥ぢ―」。

しら・ぶ（ぶれ、べ、ぶ、ぶる、ぶれ、べよ）[調](他、は下二)　㊀音律の調子を合はす。㊁かなづ。奏す。「琴を―」。㊂照らし合はせて考ふ。點檢す。㊃罪狀をたゞす。罪人を糺問す。㊄せんぎす。(査)、㊅搜索す。さがす。㊆研究す。

しら-ぶぢ[白藤](名)　㊀【植】「しろふぢ」に同じ。㊁かさねの色目、表は薄紫にして裏の濃紫なるもの。

シラブル[Syllable](名)　「せつおん」に同じ。

しら-べ[調](名)　㊀音律の調子を合はすること。㊁音律又は語句の調子。音調。㊂かなづること。奏すること。㊃照合。點檢　㊄詮議。糺問。㊅搜索。又、研究。㊆「しらべいと」の略言。――**いと**[調絲](名)　紡錘(ツム)にかけて絲縷(イトクリ)車の周圍にまとひたる絲、車の廻轉につれて紡錘を動かすもの。――**かは**[調革](名)　機械の車輪の周圍にまとひたる革、主動たる車輪の廻轉につれて、他の車輪に動力を與ふるもの。――**のを**[調緒](名)　鼓の兩面の緣にかけて胴に引き寄せ纏(マト)ふ紐(ヒモ)、鼓を擊(ウ)つ時、手にてこれを締(シ)め又は緩(ユル)めて調子を取る。――**やく**[調役](名)　取調の役目。

しら-ぼし[白點](名)　兜(カブト)に打つ色の白き鋲。

しら-ぼし[白乾](名)　肉又は菜などを其儘乾(ホ)したるもの。すぼし。

しら-ま・す（さ、し、す、す、せ、せ）[白](他、さ四)　しらむやうにす。

しら-ま-ゆみ[白眞弓](名)　白木にてつくりたる眞弓。

卄しら-ま-ゆみ[白眞弓](枕)　「引く」「張る」「射る」に冠らする詞。

しら-み[蝨](名)　（白蟲(シラムシ)の約言）【動】有吻類に屬する小形の昆蟲、觸角短くして五節より成り、胸部の環節は判然せず、腹部は大にして七節乃至九節あり、跗節二個より成りて内方に彎曲せる一個の爪あり、十分の生長を遂(ト)ぐる迄には、三回の脫皮をなす、全體灰白色にして、哺乳動物に寄生し、其血液を吸收す、種類多し。(虱)。

しら・む（ま、み、む、む、め、め）[白](自、ま四)　㊀白くなる。あかるくなる。㊁萎ふ。すさむ。㊂弱る。負けかゝる。

卄しら・む（め、め、む、むる、むれ、めよ）[調](他、ま下二)　「しらぶ」に同じ。

しら-むし[白蟲](名)　【動】「しらみ」に同じ。

しら-むし[白蒸](名)　赤小豆を加へずして白く炊(カシ)ぎたる強飯。こはめし。

しら-め[白眼](名)　「しろめ」に同じ。

しら-も[白藻](名)　おごのりを晒(サ)らして白くしたるもの。

しら-やき[白燒](名)　魚肉などを何もつけずにやくこと。又、其燒方にしたる魚肉。

しら-ゆ[白湯](名)　さゆ。

しら-ゆき[白雪](名)　ゆき。

卄しら-ゆふ(ユウ)[白木綿](名)　色白きゆふ。――**なみ**[白木綿浪](名)　白木綿を浪にたとへいふ語。――**はな**[白木綿花](名)　白木綿を用ひてつくりたる花。

しら-らか[白](名)　白くしてあざやかなること。

⌒しら-らん[紫蘭](名)　【植】蘭科に屬する草、莖は濶(ヒロ)くして長く、夏の頃花開く、花は通常紅紫色を呈し、長き花莖の上部に總狀に排列す、葯は一個あり、觀賞用として栽培せらる。(朱蘭、白及)。

しり[尻](名)　㊀腰の後方の下、肉の多く滿ちたる所。ゐさらひ。おゐど。ゐしき。けつ。㊁うしろ。あと。のち。すゑ。(後)。㊂器物の地面に附く所。㊃物事の餘波。とばしり。㊄物事の結局。をさまり。㊅すゑ。はし。㊆〜つゝみかくしたる本性又は事柄。〜――**がおもい**　たちゐの氣おもなるにいふ。〜――**がかるい**　たちゐのかひ〴〵しきにいふ。又、女の浮氣なるにいふ。〜――**がすわらぬ**　一處におちつきて居らず。〜――**がすわる**　一處におちつきて居る。〜――**がわれる**　惡事のたくらみなどの露顯するにいふ。〜――**にしく**　妻の夫をないがしろにするにいふ。〜――**につく**　他の配下となる。又、他の後に從ひ行く。〜――**にほをかく**　逸早くにげ出すにいふ。〜――**をぬぐふ**　結末をつく。〜――**をはしよる**　しりからげをなす。又、切りあげて短くする。〜――**をわる**　惡事のたくみなどを露顯せさす。

⌒しり[至理](名)　至極最もなる道理。

⌒しり[私利](名)　自分一己の利益。

⌒しり[支離](名)　つがひめのはなるゝこと。又、わかれてばら〳〵になること。「―滅裂」。

⌒しり[事理](名)　㊀物事のすぢみち又は道理。㊁ことわけ。なすわざと其道理と。

しり-あし[後足](名)　あとあし。

しり-あて[尻當](名)　單衣などの尻にあたる處の裏につくる切地。

しり-あひ(アイ)[知合](活名)　知り合ふこと。又其人。(相識)。

しり-あ・ふ(アウ)（は、ひ、ふ、ふ、へ、へ）[知合](自、は四)　互に相知る。まじはる。ちかづく。

⌒しり-う[支流](名)　㊀えだがは。支川。㊁分家又は分派。わかれ。

⌒しり-う[緇流](名)　黑染(スミゾメ)の衣を著てゐる人の社會、即ち僧侶の社會。

⌒しり-う[時流](名)　㊀當時の普通一般のものども。㊁當時の風潮。

卄しりう-ごと[後言](名)　かげごと。かげくち。

卄しりう-たげ[臀打上](名)　兩脚を投げ出だして坐すること。(箕踞)。

卄しりう-た・ぐ（げ、げ、ぐ、ぐる、ぐれ、げよ）[臀打上](自、か下二)　しりうたげをなす。

卄しりう-ど[知人](名)　（「しりびと」の音便）まじはりて知れる人。しりあひ。

しりう-ま[尻馬](名)　㊀人の騎(ノ)りたる馬の後に騎ること。㊁人の後に附きて物事をすること。

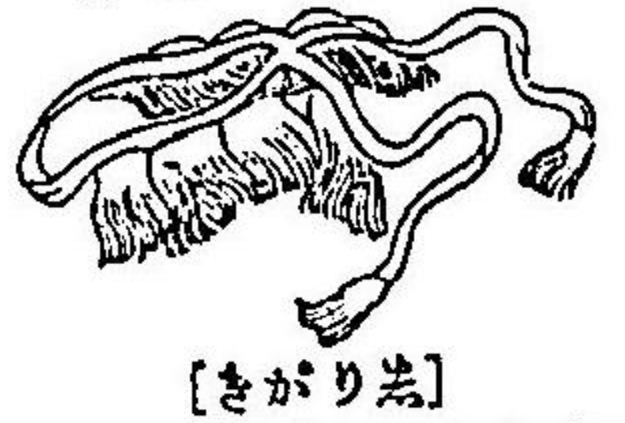
〜しり-おし[尻押](名)　うしろより助勢すること。かげにて煽動すること。又、其人。

卄しり-おも[尻重](名)　赤翔・白翔の古言。

〜しり-おも[尻重](名)　たちゐの不活潑なること。

しり-がい(名)　[鞦]「しりがき」の音便。

しり-がき[鞦](名)　（尻懸(シリガケ)の義）馬具の名、おもがけの一部分にして、尾より鞍にかくる組緒。



[しりがき]

しり-がほ(ガオ)[知顏](名)　知りて居るふう。

〜しり-からげ[尻紮](名)　衣の裾(スソ)をまくりて、其端を帶にはさむこと。

〜しり-がる[尻輕](名)　㊀たちゐの活潑なること。㊁女の浮氣なること。

⌒しり-き[自力](名)　㊀自身一己の力。みづからのちから。㊁【佛】自己の作行修福によりて、往生得脫すること。他力の對。――**しゆう**[自力宗](名)　【佛】自力を宗とする宗派、即ち禪宗の如く、自己の往生得脫は自己の作行修福によるとなすもの。

しり-きり[尻切](名)　㊀「しりきれ」に同じ。㊁僅かに尻の上迄とゞくこと。〜――**とんぼ**[尻切蜻蛉](名)　物事の長つゞきせぬ性質の人にいふ語。――**ばんてん**[尻切半纏](名)　僅かに尻の上迄とゞく短き半纏。

しり-きれ[尻切](名)　㊀尻のきれてあること。又、其もの。㊁「しりきれざうり」の略言。――**ざうり**(ゾーリ)[尻切草履](名)　㊀後の方の切れたる如き作方の短かき草履。あしなか。㊁後のやぶれてきれたる草履。

卄しり-くべ-なは(ナワ)[注連](名)　「しりくめなは」に同じ。

卄しり-くめ-なは(ナワ)[注連](名)　神前に引きたる繩、なひたる藁の尻をふさの如く所々に下げ垂らしたるもの。しりくべなは。しめなは。

〜しりくらゐ-くわんおん(イ-カンノン)[尻暗觀音](名)　（六觀音の緣日は十八日より配當して二十三日に終るにより、其の緣日の尻は暗夜なり、故にいふと云ぞ）㊀觀音の稱。㊁恩を仇に返へして後を顧(カヘリミ)ぬにいふ語。

しり-げ[尻毛](名)　尻に生じたる毛。――**をぬく**　油斷に乘じて驚かす。

しり-ごみ[後込](名)　あとしざり。(退步、逡巡)。

しり-ざや[尻鞘](名)　虎・豹・熊・鹿などの皮にて作りたる袋、太刀鞘の雨露にあたるをふせぐためにかけて用ふるもの。

[しりざや]

卄しり-ざら[後盌](名)　杯を据(ス)うる盌。(盌字)。

〜しり-しり(名、副)　㊀ゆる〳〵進みて近づくさまにいふ語。㊁次第にいらだちおこるさまにいふ語。

〜しり-すぼまり[尻窄](名)　㊀口廣くして尻の方の狹くなること。㊁始め盛にして終りの衰ふること。

しり-ぞ・く（か、き、く、く、け、け）[退](自、か四)　（後退の義）㊀あとへ引く。ひく。㊁しざる。さがる。㊂去る。かへる。㊃官を辭す。野に下る。「功成り身―」。㊄謙遜す。へりくだる。

しり-ぞ・く（け、け、く、くる、くれ、けよ）[退](他、か下二)　㊀あとへ引かす。ひかす。㊁おひやる。おひかへす。㊂さく。かへす。㊃とほざけて用ひず。㊄地位をおとす。㊅受けず。ことわる。

〜しりぞける[退](他)　「しりぞく」の訛。

卄しり-たぶら(名)　尻の肉多き部分。しりべた。

卄しり-たむら(名)　前條に同じ。

⌒しり-つ[私立](名)　私人の設立維持すること。公立の對。「―學校」。

⌒しり-つ[市立](名)　市の費用にて設立維持すること。

⌒しり-つ[詩律](名)　詩の規則。又、詩の音調。

⌒しり-つ[自律](名)　自ら自分の慾情を制すること。

⌒しり-つ[自立](名)　㊀自分一己の力によりて、生計を立つること。㊁服從者たる關係を脫して、自主の地位に立つこと。

〜しり-つき[尻附](名)　㊀しりのやうす。㊁他の配下につくこと。他の後につき從ふこと。

〜しりつ-ぱね[尻跳](名)　尻の方のあがること。

〜しりつ-ぽ[尻方](名)　㊀しりへの方。㊁尻毛又は尾。㊂はし。すゑ。「言葉の―」。㊃つゝみかくしたる本性又は事柄。

しり-とり[尻取](名)　二人以上のものが、順次に前の人のいひしことばの尻を頭とせることばをいひあふこと、例へば、一人が「ひと」といへば、次の人が「とり」といひ、又其次の人が「りんご」といふが如きこれなり。――**もんく**[尻取文句](名)　尻取にいふ文句。

（しり-ぬ・く（かきくくけけ）［知拔］（他、か四）深く知る。つまびらかに知る。
（しり-ぬぐ・ひ（グイス）［尻拭］（名）㊀尻を拭（グ）ふこと。㊁後（ト）始末を付くること。「借金の―」。
（しり-ぬけ［尻拔］（名）㊀ものわすれすること。㊁てぬかりあること。㊂あと始末のつかぬこと。
卄しり-はら［後腹］（名）產後の腹痛。（後痛）。
卄しり-び［尻干］（名）末の弱くして力無きこと。
しり-び［尻火］（名）㊀風上の方へ燒け移る火。㊁火災の移り行く端末の稱。
しり-びと［知人］（名）相識の人。しりあひ。（知己）。
卄しり-ぶり［後振］（名）うしろすがた。
しり-へ（エ）［後方］（名）うしろの方。しりのかた。のち。うしろ。しりも。しりた。「垣の―」（後）。――ざま［後方樣］（名）しりへ。――で［後方手］（名）うしろて。「―にしばり」。
（しり-ぼね［尻骨］（名）尻の骨。
（しり-まひ（イーマ）［尻舞］（名）人のしりへにつきて事をなすこと。又、人のしりへにつきて其まねをすること。
卄しり-むた（名）「しりたぶら」に同じ。
しり-め［後目］（名）眼球のみを動かして、後方を見やること。（偸眼、流盼）。――づかひ（カイーツ）［後目遣］（名）しりめをつかふこと。
（しり-めつれつ［支離滅裂］（名）はなれ〴〵になりて、すぢみちの少しも立たぬこと。
（しり-もち［尻餅］（名）（尻にて餅を搗（ツ）く意）後方へ倒れ、尻にて地を衝（ツ）くこと。しりゐ。――をつく　倒れて尻を地につく。
（しり-やう（ヨウ―リ）［死靈］（名）死人の怨靈。いきりやうの對。「―のたゝり」。「ふること。
（しり-やう（ヨウ―リ）［思量］（名）思ひ量（ハカ）ること。かんが

（しりやう（ヨウ―リ）［私領］（名）自分の領地。
（しりやう（ヨウ―リ）［寺領］（名）寺院の領地。
（しりやく［史略］（名）略して記したる歷史。
（しりやく［誌略］（名）略したる記錄。
（しりよ［思慮］（名）思想をはたらかして考へ思ふこと。おもんぱかり。かんがへ。
（しりよく［死力］（名）必死の力。
（しりよく［資力］（名）㊀もととなるちから。原動力。㊁資本。資產。「―無し」。
（しりよく［視力］（名）眼の物を視（ミ）る力。
（しりよく［磁力］（名）磁氣の作用。磁場の強さ。――けい［磁力計］（名）磁場の強さを計るための裝置。通常薄き鏡の裏に小さき磁石をはりたるものを吊（ツル）してこれを磁場に置き、望遠鏡にて望むか若しくは細隙より光を送りて反射せしめ、鏡の傾斜を檢して磁場の強さを測る。
（しりよく-せん［指力線］（名）［理］磁場又は電場に於て、磁氣作用又は電氣作用の方向を示す線の稱。磁氣指力線及電氣指力線の條を見よ。
しり-ゐ［尻居］（名）しりもち。
しり-を［尻尾］（名）㊀獸類などの尻に生じたる尾。㊁つゝみかくしたる本性又は事柄。
（しりん［四隣］（名）四方の隣。あたりきんじよ。
（しりん［詞林］（名）詩人文士などの仲間。
（しりん［士林］（名）士たるものゝ仲間。
（しりん［辭林］（名）ことばをあつめて解釋したるもの。じしよ。
（しりん-しや［四輪車］（名）車輪の四つある車。
シリンドル［Cylinder］（名）機械の中に裝置したる圓柱體の稱。
しる［汁］（名）㊀ものゝ中より出づる液體。（液）。㊁つゆ。吸物。㊂味噌しる。㊃〻おかげによりて受くる利益。「うまい―」。

卄しる［醨］（名）薄き酒。もそろ。
し・る（らりるるれれ）［知］（他、ら四）㊀認識す。みとむ。㊁辨別す。わきまふ。㊂交はる。親しむ。㊃記憶す。しるす。㊄見聞す。經驗す。㊅修得す。をさむ。㊆管掌す。つかさどる。「政を―」。
し・る（れれるるるるれれよ）［知］（自、ら下二）しらる。「ものがありかを人に知れつゝ」。
卄し・る（れれるるるるれれよ）［痴］（自、ら下二）愚痴になる。ぼける。
しる-あめ［汁飴］（名）水飴。
卄しる-から（ウ―コ）［汁漿］（名）「いつすもの」に同じ。
卄しる-がゆ［汁粥］（名）「かゆ」の古稱。
しる-こ［汁粉］（名）「しるこもち」の略言。――もち［汁粉餅］（名）餡（アン）を溶（ト）かしたる汁を煮て、これに餅を入れたるもの。
しるし［標］（名）㊀他とまぎれざるために心覺えとなすもの。㊁あひづ。㊂あかし。證據。㊃紋所。㊄敵の首級。㊅意思を表するに用ふるもの。
しるし［徵］（名）㊀きゝめ。効驗。㊁きざし。兆候。
しるし［印］（名）おしで。いん。「るし（徵）」。
しる・し（く、しき、けれ）［著］（形、一）あきらかなり。いちじる
卄しるし-の-おび［標帶］（名）いはたおび。
卄しるし-の-けむり［標煙］（名）のろし。
卄しるし-の-すず［標鈴］（名）古昔、鳥狩のとき、鷹につけて標（シル）とせし鈴。
しるし-ばた［標旗］（名）しるしをつけたる旗。又、しるしにたつる旗。
しるし-ばかり［標許］（名、副）わづかに其物事のしるしたるに止まるさまにいふ語。すこしばかり。わづか。いさゝか。

しる・す（さしすすせせ）［記］（他、さ四）㊀書きつく。かき載（ノ）す。（書、誌、錄）。㊁記憶す。おぼゆ。㊂文字にあらはし述（ノ）ぶ。
卄しる-たより［知便］（名）しるべ。
卄しる-ところ［知所］（名）ちぎやうしよ。
しるべ［導］（名）みちびき。てびき。案內。
しる-べ［知邊］（名）㊀たより。ゆかり。㊁相識れる人。ゆかりある人。「―を便る」。
卄しるまし［怪］（名）あやしむべき前兆。
シルリング［志＝Shilling］（名）「イギリス」國銀貨の一、「ポンド」の二十分の一、約我國の四十八錢八厘にあたる。
（しれい［使令］（名）指圖してつかふこと。
（しれい［指令］（名）㊀願書又は伺書などに對する官の通知又は命令。㊁［法］法律命令其他諸規則の適用又は解釋に關して、下級行政官より出したる伺書に對し、上級行政官のなす答辯。――しよ［指令書］（名）指令を認（シタタ）めてある文書。
（しれい［司令］（名）軍隊又は艦船の指揮統率をつかさどること。――くわん［司令官］（名）陸軍にて軍の司令、海軍にて艦隊の司令に任ずる官職。――タフ（ウート）［司令塔］（名）艦船にて、其司令の任にあたる人の登りて指揮する小高き所。又、陸軍にて、其部隊の司令の任にあたる人の登りて指揮するための高塔。――ちやうくわん（チヨ―ウー）［司令長官］（名）數多の司令官の上に立ちて、これを指揮統率する官職。「聯合艦隊―」。――ぶ［司令部］（名）司令官の事務を取扱ふ所。
（しれい［辭令］（名）㊀應對する言語。ことばづかひ。あいさつ。㊁官職などに任命する時、其人に朝廷又は官府より交附する文書。――しよ［辭令書］（名）前條㊁に同じ。

（しれい［時令］（名）年中の行事。
（しれい［事例］（名）事柄の前例。
（しれう（ヨウ―リ）［史料］（名）歷史の材料。
（しれう（ヨウ―リ）［詩料］（名）詩歌に詠ずべき材料。
（しれう（ヨウ―リ）［資料］（名）もとで。しろ。
（しれう（ヨウ―リ）［思料］（名）おもひはかること。おしはかること。かんがふること。
（しれう（ヨウ―リ）［飼料］（名）家畜のかひれう。
卄しれ-がま・し（しく、しく、し、しき、しけれ）［痴］（形、二）おろかなり。
卄しれ-じれ（名、副）おろかなるさまにいふ語。――・し（しく、しく、し、しき、しけれ）（形、二）愚鈍なり。おろかなり。
（しれつ［齒列］（名）ならぶこと。
卄しれ-つた・い（く、い、い、けれ）（形、一）いらだちて心もとなし。
卄しれ-ば・む（ま、み、む、む、め、め）（自、ま四）おろかに見ゆ。
卄しれ-びと［痴人］（名）おろかなる人。
しれ-もの［痴者］（名）㊀愚鈍なるもの。あはう。（痴漢、愚者）。㊁手にあはぬもの。もてあましもの。
（しれ・る（れれるるるるれれよ）［懊］（自、ら下二）せきこみてもだゆ。いらだつ。（惱、憤、悶）。
卄しれ-わらひ（ライ―ツ）［痴笑］（名）あざわらひ。せゝらわらひ。
卄しろ［質］（名）威儀。
しろ［城］（名）㊀周圍に障壁を設けて、一區劃をなす都邑。㊁軍兵を屯し兵器糧食を貯へ、敵を防ぐため周圍に土石を積み築きて堅固に構（カマ）へたる一區の土地。㊂昔時、將軍又は諸侯の居住せし所。
しろ［代］（名）㊀もと。材料。「壁―」。「食ひ―」。㊁かはり。代用。㊂つくのひ。代價。「身の―」。㊃古昔、地積五步の稱。㊄苗を植（ウ）うる田。
しろ［白］（名）雪のごとき色、卽ち、總ての色の光線をことごとく反射するによりて見ゆる色。

（しろ［支路］（名）えだみち。
（しろ［仕路］（名）官に仕ふる手つゞき。
しろ-あづき［白小豆］（名）［植］小豆の一種、種子の白色なるもの。
しろ-あと［城趾］（名）城のありし舊跡。
しろ-あぶら［白油］（名）白胡麻の種子より製したる油。
しろ-あり［白蟻］（名）［動］「しらあり」に同じ。
しろ-うと［素人］（名）㊀其物事に未熟なる人。㊁其物事を職業とせぬ人。㊂藝娼妓などに對し普通の婦人の稱。かたぎの女子。――げい［素人藝］（名）其藝を職業とせざるものゝ藝。
しろ-うま［白馬］（名）㊀毛の白色なる馬。あをうま。㊁にごり酒の異稱。（濁酒）。
しろ-うり［白瓜］（名）［植］胡瓜科に屬する蔬菜、果實は冬瓜に似て小さく、白綠色の表皮を有す、食用に供せらる。あさうり。（早瓜、越瓜）。
しろ-えり［白襟］（名）㊀襟の色の白きもの。㊁下着・肌着等の襟の白き服裝。「―紋附」。
しろ-かうぢ（ウ―コ）［白麴］（名）米を以て製したる白色の麴（カウヂ）。
しろ-かみ［白髮］（名）しらが。
しろ-がね［銀］（名）（白金の義）「ぎん」の一名。「對
卄しろ-き［白酒］（名）あまざけ。醴酒。「くろき」の對。
卄しろ-きぬ［白衣］（名）俗人の衣服。墨染衣の對。
卄しろき-もの［粉］（名）おしろい。
（しろく［尸祿］（名）役にたゝずして俸祿を受くること。
（しろく［四六］（名）㊀四つと六つと。㊁「しろくばん」又は「しろくぶん」の略言。――しちゆう［四六時中］（名）㊀二十四時間。一晝夜。㊁ししゆう。始終。――ばん［四六版］（名）長さ三尺六寸、巾二尺六寸の洋紙を三十二に切りたるもの。――

ぶん［四六文］（名）漢文の一體、おもに四字句若しくは六字句より成る對句を排列したるもの。

しろ・くくり［白括］（名）白く括（クク）りたるしぼり。

〔しろ・くび［白首］（名）白粉をよそほひ客に媚（コビ）を呈する茶屋の女中など。淫賣婦。

しろ・くま［白熊］（名）【動】熊の一種、北極地方に産す、毛色純白にして、よく海洋を泳ぎ、又よく氷上を疾走す、性猛烈にして人を襲ふ。

しろ・くれなゐ［白紅］（名）半は白く半は赤く染めたるみづひき。

しろ・こ［白子］（名）「しらこ」に同じ。

しろ・ごま［白胡麻］（名）【植】胡麻の一種、種子の白色なるもの。

しろ・さ［白］（名）しろきこと。しろくある度合。

しろ・ざけ［白酒］（名）白色をなす一種の濁酒、普通に、蒸（ム）したる糯（モチ）米と麹（カウヂ）とを適分に味醂又は燒酎に浸（ヒタ）し、適當の時期にこれを其儘石臼にかけて、少許の甜酒を加へつゝ碾（ヒ）きて製す。

しろ・ざたう［白砂糖］（名）白色の砂糖。

しろ・さんご［白珊瑚］（名）白色の珊瑚。

しろ・し［白］（形、二）白色なり。

しろ・した［白下］（名）「しよたう」（蔗糖）の條を見よ。

廿しろしめ・す［知食］（他、さ四）「しろす」の敬語。

しろ・しろ［白白］（名、副）いと白きさまにいふ語。

〔しろ・じろ（名、副）目をつけて見まはすさまにいふ語。「—見る」。

廿しろ・す［知］（他、さ四）㊀知りたまふ。㊁領したまふ。をさめたまふ。

しろ・ずみ［白炭］（名）石灰にて白く染めたる枝炭、茶湯などに用ふるもの。

廿しろ・たへ［白妙］（名）㊀栲（タク）の布、其色白ければ名づく。（白栲）。㊁白色。「雲の羽に泡雪ぞ降る」。——ごろも［白妙衣］（名）白妙にて仕立てたる衣。——の［白妙］（枕）「衣」「袖」「たすき」「雲」「雪」に冠らする詞。

しろ・ぢ［白地］（名）㊀織地の白色なるもの。「—の浴衣」。㊁すべて地の白色なるもの。

しろ・つつじ［白躑躅］（名）㊀【植】躑躅の一種、花の白色なるもの。㊁かさねの色目、表は白くして裏の紫なるもの。

しろ・づる［白鶴］（名）【動】つるの一種、全身白くして翅端僅かに黑し、眼邊淡紅色にして、脚・嘴稍や赤色を帶ぶ。

しろ・で［白手］（名）釉（クスリ）の白色なる磁器。

しろ・とり［白鳥］（名）【動】（い）游水類中扁嘴類に屬する鳥、羽毛は白色にして頭長し、嘴は軟皮を被りてたゞ其末端のみ硬（カタ）し、脚は短くして後方に位す、海川池沼に棲息する候鳥なり。はくてう。（ろ）「ほとゝぎす」の異稱。

しろ・なす［白茄］（名）【植】次條に同じ。

しろ・なすび［白茄］（名）【植】なすびの一種、果實の色白きもの。

しろ・なまづ［白癜］（名）一種の皮膚病、なまづの患部の白色なるもの。（白斑風）。

廿しろ・なまり［白鉛］（名）㊀「すゞ」の一名。㊁「しろめ」の一名。

しろ・ぬの［白布］（名）白色の布。さらしたる布。

しろ・ぬり［白塗］（名）白色に塗（ヌ）ること。又、其塗方のもの。

しろ・ねずみ［白鼠］（名）㊀【動】鼠の一種、毛色白きもの。（銀鼠）。㊁主家に忠實にして功勞多き番頭などの稱。

しろ・はら［白保］（名）あさくさ紙の一種、色の稍や白きもの。

しろば・む［白］（自、ま四）白色を帶（オ）ぶ。

しろ・びかり［白光］（名）白色にしてひかりあると。

廿しろ・びと［白人］（名）しろと。しらひと。

廿しろ・ふ［添］（自、は四）耳になす。なしあふ。「いひ—」。

しろ・ふぢ［白藤］（名）【植】ふぢの一種、花の白色なるもの。

しろ・ぶち［白斑］（名）白色の部分多きぶち。

しろ・ぼけ［白木瓜］（名）【植】ぼけの一種、花の白色なるもの。

しろ・ぼり［城壕］（名）城のまはりに設けたるほり。

しろ・まなこ［白眼］（名）「しろめ」に同じ。

しろ・まめ［白豆］（名）【植】荳科に屬する有毛の草本、花は甚だ小形にして帶紫色又は白色なり、花柱は通常平滑にして、或は通常くびれを有す、種子は白色なり、食用植物中の著名なるものにして、種子は味噌・醤油・豆腐・湯葉・菓子等を製する原料に用ひられ、豆葉は家畜の食料に供せらる。

しろ・み［白身］（名）㊀材木又は肉の白き部分。㊁卵の中の白き部分。㊂すべてもの、白色なる部分の稱。

しろみ［白鑞］（名）「しろめ」に同じ。

しろ・ミソ［白味噌］（名）白色にして甘味ある味噌、白麴と白豆とを以て製したるもの。

しろ・みつ［白蜜］（名）砂糖蜜に對して、蜂蜜の稱。

しろ・みづ［白水］（名）米をとぎたる水の白く濁れるもの。（潘、米汁）。

しろ・む［白］（自、ま四）白色となる。

しろ・む［白］（他、ま下二）白色となす。

しろ・むく［白無垢］（名）全部白色の衣服。

しろ・め［白眼］（名）眼球の白き部分、即ち鞏膜。しろまなこ。

しろめ［白鑞］（名）【化】錫と鉛との合金、其割合は一定せず、銅或は靑銅（カラカネ）製の鍋又は藥罐などの内部に塗抹して緑靑（ロクシヤウ）を防ぎ、又孔（アナ）のあきたるとき、其孔を塞ぐに用ふるもの。

しろ・めだま［白目玉］（名）「しろめ」（白眼）に同じ。

しろ・もち［白餅］（名）たゞ燒きたるのみの餅。

しろ・もち［城持］（名）昔時、大名が其領地内に城郭を持ちしこと、又、其大名。

しろ・もの［代物］（名）㊀賣買する貨物、商品。㊁もと、原料、材料。

〔しろり（名、副）眼を轉じてちよつと見るさまにいふ語。

しろ・れんぐわ［白煉瓦］（名）白色の煉瓦。

廿しろ・を［白魚］（名）【動】「しらうを」に同じ。

（しろん［私論］（名）㊀自分一己の議論。㊁世人の公認せぬ議論。

（しろん［史論］（名）歴史に關する論說。

（しろん［詩論］（名）詩につきての議論。

（しろん［時論］（名）㊀時事の議論。㊁其時の輿論。

しわ［皺］（名）表面にたるみを生じて、細かき條（スヂ）のちゞまり寄るもの。

（しわ［詩話］（名）詩につきての談話。

（しわ［私和］（名）當事者雙方がおもて沙汰にせず示談にて事を濟（ス）ますこと。

（しわう［雌黄］（名）㊀一種の顔料、砒素と硫黄との混合より成る固形體、黄色の光澤を有し、碎（クダ）け易し、藥用にも供せらる。㊁一種の顔料、樹脂より製したる赤黄色の固形體。㊂支那の古昔、詩文の添削に雌黄を用ひしより、詩文の添削にいふ語。

しわ・く［仕分］（他、か下二）しわけをなす。區別す。わく。（仕譯）。

〔しわ・くた（名）ひどく皺（シワ）の寄りてあること。

〔しわ・くちや（名）前條に同じ。

しわ・ぐ・む［皺］（自、ま四）皺（シワ）よる。しわむ。

しわ・け［仕分］（名）㊀しわくること。區別。㊁簿記にて、口座を設け貸借を分くること。（仕譯）。——ちやう［仕分帳］（名）簿記にて、つけこみの日記帳より、仕譯して記入する帳簿。（仕譯帳）。——にっきちやう［仕分日記帳］（名）簿記にて、日記帳と仕譯帳とをかねたる帳簿、即ち仕分して記入する日記帳。（仕譯日記帳）。——にっきぼ［仕分日記簿］（名）前條に同じ。（仕譯日記帳）。——ぼ［仕分簿］（名）「しわけちやう」に同じ。

しわ・ざ［仕業］（名）なすわざ。するわざ。所業。行爲。

〔しわ・し［吝］（形、一）やぶさかなり。りんしよくなり。

〔しわ・しわ（名、副）㊀寒又は恐の爲に身に慄ずるさまにいふ語。㊁物をよく煮つめるさまにいふ語。㊂漸を追ひて進むさまにいふ語。

しわ・のばし［皺伸］（名）寄りたる皺をのばすこと。

〔しわ・はふ［視話法］（名）英國人「ベル」が發音器官の形狀に基きて創案したる一種の文字を以て正確なる發音をなさしむる法。

廿しわ・ぶ［爲侘］（自、は上二）爲しあぐむ。もてあます。

しわ・む［皺］（自、ま四）皺（シワ）寄る。

しわ・む［皺］（他、ま下二）皺（シワ）をよらす。

〔しわり（名、副）「しわしわ」に同じ。

しわ・る［撓］（自、ら四）たわみまがる。たわむ。しなふ。

（しゐ［思惟］（名）㊀かんがへおもふこと。おもふこと。㊁【心】寫象の分離し又は結合する心的作用。

（しゐ［尸位］（名）㊀支那の上代に、祖先を祭るとき、其血統を受けたるものが、假に神のかたしろとなりしこと。又、其もの。㊁其位地にありて其職責を盡さゞること。

（しゐ［四維］（名）㊀乾（西北）・坤（西南）・艮（東北）・巽（東南）の四隅。㊁禮・義・廉・恥の四道。

（しゐ［示威］（名）威力をしめすこと。——うんどう［示威運動］（名）相手に威力を示すための運動。相手をおどかすための運動。

（しゐ［辭彙］（名）辭書。辭典。

（しゐ［字彙］（名）じびき。字書。

（しゐ［自爲］（名）自らなすこと。自ら作用すること。

（しゐぎ［四威儀］（名）【佛】行・住・坐・臥の稱。

（しゐしゆ［思惟修］（名）【佛】「ぜん」（禪）に同じ。

（しゐそさん［尸位素餐］（名）其職責を盡さず徒（イタヅラ）に其位に在りて祿を受くること。

廿しゐ・の・たいふ［四位大夫］（名）古昔、位は四位なれど未だ昇殿を許されざるものゝ稱。

（しゐん［四韻］（名）㊀四つの韻脚。又、其詩。㊁平・上・去・入の四聲。

（しゐん［子韻］（名）「しいん」（子音）に同じ。

（しゐん［市尹］（名）市のつかさ。

（しゐん［次韻］（名）他人の作詩の韻字を用ひて詩作すること。

（しゐん［寺院］（名）テラ。

（しゑ［四衞］（名）左右の衞士府と左右の兵衞府との稱。

（しゑい［侍衞］（名）おそばをまもること。又、其ものども。

（しゑい［自衞］（名）自己の防衞。ふせぎ。

（しゑん［私怨］（名）わたくしのうらみ。

（しゑん［自園］（名）自分の庭園又ははたけ。「—の茶」。

〔しを・しを［悄悄］（名、副）力脫（ヌ）け勢挫（クジ）けてあはれなるさまにいふ語。

廿しを・に［紫菀］（名）【植】「しをん」の古名。

しをら・し（しく・しく・しき・しけれ）(形、二) あはれむべし。かはゆらし。

しをり［枝折］(名) ㊀山路などにて、木の枝を折りて路のしるべとなすこと。(栞)。㊁しるべ。あんない。㊂讀みかけたる書物の間に挿(ハサ)みてしるしとし、又は書を讀むときに、字をつくために用ふるもの、薄き板又は厚き紙若しくは竹などにてつくる。――ど［枝折戸］(名) 木の枝を折かけてつくれる戸。

‡しを・る（ら・り・る・る・れ・れ）［栞］(他、ら四) ㊀木の枝を折りて、路のしるべとす。㊁あんないす。みちびく。

‡しを・る（ら・り・る・る・れ・れ）［責］(他、ら四) いましめこらす。せっかんす。きうめいす。

しを・る（れ・れ・る・るる・るれ・れよ）［萎］(自、ら下二) ㊀よわりたわむ。たわみしぼむ。㊁力脱(ヌ)けて弱る。氣挫(クジ)けて沮(ハ)む。

‡しを・る（ら・り・る・る・れ・れ）［萎］(他、ら四) たわましむ、まぐ。

〜しをれる［萎］(自) 「しをる」の訛。

しをん［紫菀］(名) ［植］菊科に屬する草本、山地に自生す、花は頭狀花にして紫色又は白色を呈し、冠毛あり、觀賞用として栽培せらる、(鬼醜女草)。

(しん［心］(名) ㊀こゝろ。㊁しんのざう。心臟。㊂むね。胸部。㊃たゞなか。まんなか。中心。「日出當ー」。㊄もの丶中心にあるもの。㊅根柢。又、原因。㊆行動の主たるもの。機軸。㊇心打の略言。

(しん［信］(名) ㊀あざむかざること、いつはらざること。言をたがへざること、忠實なること。まこと。㊁疑はざること。㊂歸依すること。㊃おとづれ。たより。音信。「古郷のー」。㊄しるし、効驗。㊅あかし。符契。㊆あひづ。信號。

(しん［神］(名) ㊀かみ。㊁靈妙なること。不可思議なること、變化極りなきこと。㊂たふとくして侵すべからざること。人生に超越したる威あること。㊃こゝろ。たましひ。㊄かむながらのみち。神道。「ー儒佛」。

(しん［臣］(名) 君に仕(ツカ)ふる者。けらい。

(しん［眞］(名) ㊀虛僞にあらざること。いつはりにあらざること。たゞしきこと。㊁迷妄にあらざること。まよひにあらざること。あやまりにあらざること。㊂まじりけなきこと。純粹なること。㊃天然。自然。「ーに反る」。㊄みち。妙理。㊅もと。原質。「其ーを失す」。㊆たましひ。神氣。㊇道家にて、修行足りて道成ることにいふ語。㊈楷書。

(しん［新］(名) ㊀あたらしきこと。又、あたらしきもの。㊁今年の收穫。又、其もの。

(しん［親］(名) ㊀したしみ。よしみ。㊁おや。父母。「ーに事ふ」。㊂しんぞく。えんるゐ。みより。

(しん［瞋］(名) いかり。にくみ。うらみ。

(しん［箴］(名) ㊀はり。(鍼)。㊁いましめ。規戒。「坐右のー」。

(しん［臣］(代) 臣下が君主に對し、卑下していふ自稱の代名詞。

(じん［仁］(名) ㊀儒家にて、道德の樞機・人生の達道の稱、愛を體とし義を用とす。㊁愛情を他に及ぼすこと。利澤を他に及ぼすこと。いつくしみ。なさけ。あはれみ。おもひやり。㊂仁の道を行ふ人。「ーを親しむ」。㊃さね。たね。㊄ひと。(人)。

(じん［尋］(名) 一尺の八倍。ひろ。(仞)。

(じん［人］(名) ひと。「此のーと共に行く」。(仁)。

(じん［腎］(名) しんのざう。腎臟。

(しん-あい［親愛］(名) したしみ。いつくしみ。

(じん-あい［仁愛］(名) めぐみ。いつくしみ。なさけ。

(しん-あう（ウーオ）［震央］(名) ［地］震源の直上なる地表の稱。

(しん-あう（ウーオ）［深奥］(名) ㊀おく深きこと。㊁おくそこ。おく。

(しん-あん［新案］(名) 新規なる工夫。あたらしき考案。

(しん-あん［審案］(名) とりしらぶること。

(しん-あん［診案］(名) 診察して其病氣をしらぶること。

(しん-い［深意］(名) 深き意義。そこい。

(しん-い［神意］(名) かみのみこゝろ。神の意思。

(しん-い［鍼醫］(名) はりい。

(しん-い［眞意］(名) まことのこゝろ。まことの意義。

(しん-い［寢衣］(名) ねまき。

(しん-い［襯衣］(名) はだぎ。

(しん-い［新衣］(名) あたらしき衣服。したておろしの衣服。

(しん-い［辛夷］(名) ［植］「こぶし」に同じ。

(しん-い［瞋恚］(名) 己を是とし他を非として起る心のなやみ、即ち、怒りて他をうらみにくむこと。――のほむら［瞋恚炎］(名) 燃(モ)ゆるが如くあらだついかり又はうらみ。

(しん-いう［親友］(名) したしき友人。

(しん-いう［深憂］(名) 永遠のうれひ。ふかきうれひ。

(しん-い-せつ［神意說］(名) 國家又は法律は、神意によりて成るといふ說、分つて直接と間接との二とす、直接神意說は、神は國家を創造し其意思を法律に發現せしむといひ、間接神意說は、神は直接に國家を創造し意思を法律に發現するにあらざれど、其根源は神意にありといふ。

しん-いり［新入］(名) 新に其仲間に加はり入ること。又、其入りたるもの。

(しん-いん［親姻］(名) 結婚によりて結ばれたる親族。えんつゞき。

(しん-いん［浸淫］(名) ㊀ひたること。又、ひたすこと。㊁おぼれすさむこと。

(じん-う［甚雨］(名) おほあめ。大雨。(洪雨)。

〜しん-うち［心打］(名) 落語又は講釋など順次に演藝するもの、中、最後に演じて一座に主たるものゝ稱。(眞打)。

(しん-うん［進運］(名) 進歩する運命。

(しん-えい［神影］(名) 神の影像。

(しん-えい［眞影］(名) まことの形像。

(しん-えい［神詠］(名) 神の詠(ヨ)みたりといふ歌。

(じん-えい［人影］(名) ひとかげ。

(しん-えき［津液］(名) ㊀つばき。㊁物の内部よりしみ出づるしる。

(じん-えき［尋繹］(名) たづぬること、研究すること。

(しん-えふ-じゆ（ヨー）［鍼葉樹］(名) ［植］松杉などの如く其葉の針狀なる樹木。

(しん-えん［親緣］(名) ㊀親族の緣。㊁近き血統。

(じん-えん［人煙］(名) 人家の竈(カマド)にたつ炊煙。

(しん-か［臣下］(名) 君主に奉仕するもの。けらい。

(しん-か［眞假］(名) まことなると然らざること。

(しん-か［眞價］(名) まことの價値。(眞價)。

(しん-か［身價］(名) 身のしろ。身のねうち。

(しん-が［新芽］(名) あたらしきめばえ。

(じん-か［人家］(名) 人の住む家屋。

(しん-かい［新開］(名) 荒地を新に開墾すること。又、新に開墾せられたる土地。(新墾)。

(しん-かい［心界］(名) こゝろの範圍。

(しん-かい［深海］(名) ㊀ふかきうみ。㊁［地］海中高原より海底の一段深くなりたる所、即ち海の深さ二百米突以上の所。

(しん-かい［箴誡］(名) いましめ。いひきかせ。

(しん-がい［侵害］(名) おかしそこなふこと。

(しん-がい［潯涯］(名) きし。ほとり。

(しん-がい［震駭］(名) ふるひおどろくこと。

(しん-かう（ウーコ）［進行］(名) すゝみゆくこと。

(しん-かう（ウーコ）［深耕］(名) 土壤を深く耕すこと。

(しん-かう（ウーコ）［深坑］(名) 底ふかきあな。

(しん-かう（ウーコ）［深更］(名) よのふけたること。よふけ。

(しん-かう（ウーコ）［信仰］(名) ㊀宗敎上の客體に歸依すること。「ーの自由」。㊁信じてうやまふこと。眞心より信ずること。

(しん-かう（ウーコ）［進講］(名) 貴人の前に出でゝ講義すること。

(しん-かう（ウーコ）［親交］(名) 親しく交(マジ)はること。

(しん-かう（ウーコ）［深交］(名) ふかきまじはり。

(しん-がう（ウーゴ）［神號］(名) 神の名目。

(しん-がう（ウーゴ）［信號］(名) 或しるしを以て事を問ひ又は告ぐること。あひづ。――き［信號旗］(名) 艦船が其檣桁に掲(カカ)げて信號に用ふる旗。――へう（ヒョウ）［信號標］(名) 信號に用ふるしるし。――ラッパ［信號喇叭］(名) 信號に吹きならす喇叭。又、信號をなさんとするとき吹く喇叭。

(じん-かう（ウーコ）［贐行］(名) たびだちのはなむけ。

(じん-がう（ウーゴ）［人豪］(名) 器量の高くすぐれたる人。すぐれびと。

しん-かき［眞書］(名) 楷書にて細字をかくに用ふる小筆。

(しん-かく［新客］(名) 「しんきやく」に同じ。

(しん-がく［神學］(名) 宗敎上の神につきて組織的研究をなす科學。特に、「キリスト」敎を組織的に研究する科學。

(しん-がく［心學］(名) 一種の敎義、神・儒・佛の三道を綜合して建設したるもの、平易なる言語と通俗なる譬喩とを以て、善心を啓發し道德を進捗するを目的とす、德川吉宗の時代に、石田梅巖これを唱へ、傳へて手島堵庵・中澤道二に至り大いに擴張せられたり、一に道學といふ。

(じん-かく［人格］(名) ㊀獨立して思考し行動し得る個體。㊁［倫］精神の統一を持續して意圖的行動をなし、道德上の責任をも受け得らるゝ資格ある個體。㊂［法］自己の生存發達を營み得る能力を有する權利の主體。――くわ［人格化］(名) 人類以外の事物を、人類の如く意思あるものと見做すこと。――けん［人格權］(名)［法］人類の生存上に必要なる權利、例へば生命・名譽・自由等に關する權利の如きこれなり。――せい［人格性］(名) 人格の個性。

しんかげ-りう［眞影流］(名) 劍術の一派、元龜天正の頃、信濃國の住人上泉秀綱の創始せしもの、其流派多し、もと愛洲惟孝の神人より授かりたりといふ陰(影)流に本づきたるものといふ。

しん-がた［新形］(名) 從來のかたと異なるかた。あたらしきかた。

しん-かたかな［眞片假名］(名) 漢字と片假名とを混じて記したる文字。

‡しんか-でん［神嘉殿］(名) 古昔、大内裏の中和院の正殿の稱、神事の行はれしところ。

しん-かぶ［新株］(名) 會社の新に募りし資金の株式又は株券。

〜しん-がほ（オーガ）［新顏］(名) 在來の人の外に、新に加はりし人。

〜しん-から［心］(副) 心のそこから。「ーうれしい」。

しん-がら［新柄］(名) 在來のがらと異なるがら。あたらしきがら。

しん-がり［殿］(名) ㊀(後驅(シリガリ)の音便)軍列の最後にありて、追ひ來る敵を防ぐこと。又、其軍隊。しつぱらひ。(後殿)。㊁すべて隊列又は序次の最後につくこと。又、其もの。

(しん-かん［宸翰］（名）　主上のみづからかき給ひし文書。

(しん-かん［震撼］（名）　ふるひうごかすこと。又、ふるひうごくこと。

(しん-かん［心肝］（名）　しんざうとかんざうと。轉じて、こゝろ。「ーに徹す」。

(しん-かん［新刊］（名）　書物をあらたに刊行すること。又、あらたに刊行せられたる書物。　ーーせうかい［新刊紹介］（名）　新刊の書物を、新聞又は雜誌などにて世間に披露すること。

(しん-がん［眞贋］（名）　まことゝにせと。

(しん-がん［心眼］（名）　物事を觀察又は鑑別する心のはたらき。

(じん-かん［甚寒］（名）　甚しく寒きこと。ひどいさむさ。

(しん-かん-と［深閑］（副）　ひっそりと。しづかに。

(しん-き［神器］（名）　㊀神をまつるに用ふる器具。㊁神よりうけ傳へたるもの。㊂神聖にして侵(ヲカ)すべからざるもの。㊃天子の位。みくらゐ。㊄國家ををさむる大權。㊅三種神器の略言。㊆精神、器量「ー不凡」。

(しん-き［神氣］（名）　㊀萬物を組成する原素。「地載ー」。㊁不思議なる雲氣。㊂身體又は精神の勢力、たましひ。㊃こゝろ、こゝち。

(しん-き［心氣］（名）　こゝろもち。こゝろ。

(しん-き［神機］（名）　靈妙なる活動。變化極りなきはたらき。「ー妙算」。

(しん-き［心機］（名）　心のはたらき。心のうごき。「ー一轉」。

(しん-き［晨起］（名）　あさおき。はやおき。

(しん-き［新規］（名）　あたらしきこと。

(しん-き［神奇］（名）　くしきこと。不思議なること。

(しん-き［新奇］（名）　新しくめづらしきこと。

(しん-き［神鬼］（名）　㊀かみとおにと。㊁みたま。

(しん-き［振起］（名）　㊀ふるひおこすこと。おこりふるはすること。㊁ふるひおこること。おこりふるふこと。

(しん-き［振氣］（名）　意氣をふるひおこすこと。

(しん-き［新禧］（名）　新年の祝賀。あたらしき年のいはひ。

(しん-き［辛氣］（名）　心のはれ〴〵せざること。又、しれったきこと。

(しん-ぎ［信義］（名）　信を守り義を行ふこと。いつはりあざむかざること。こゝろねのたゞしきこと。

(しん-ぎ［眞僞］（名）　まことといつはりと。（眞偽）。

(しん-ぎ［信疑］（名）　信ずると疑ふと。又、信ずべきと疑はしきと。

(しん-ぎ［審議］（名）　つまびらかに討議すること。又、とりしらべて評議すること。

(しん-ぎ［眞義］（名）　まことの意義。

(しん-ぎ［新義］（名）　㊀あたらしき意義。㊁【佛】眞言宗にて、根來(ネゴロ)の僧覺鑁の所說を遵奉するもの。古義の對。

しん-ぎ［心木］（名）　㊀車の軸。ぢく。しんぼう。㊁中心となりて其物事の活動を支持するもの。

(じん-き［人氣］（名）　㊀世間一般の感情又は景況。「ーに障る」。㊁其土地一般の氣象又は風習。「ーのあらい所」。

(じん-ぎ［仁義］（名）　㊀仁愛と義理と。あはれみとすぢみちと。仁と義と。㊁人生の履行せざるべからざる道德の總稱。

(じん-ぎ［神祇］（名）　天津神及國津神の汎稱。「ーをまつる」。

(じん-ぎ［贐儀］（名）　はなむけ。又、おくりもの。

(しん-きう［新舊］（名）　㊀あたらしきとふるきと。㊁太陽暦と太陰暦と。

(しん-きう［賑救］（名）　ものをめぐみてすくふこと。にぎはしたすくること。（振救）。

(しん-きう［審究］（名）　つまびらかに研究すること。

(しん-きう［審糺］（名）　つまびらかに罪狀をとりしらぶること。（審糾）。

(じん-きう［尋究］（名）　たづねきはむること。

(しん-きく［審鞫］（名）　「しんきう」（審糺）に同じ。

(しん-きく（名）【俗】「しゆんぎく」の訛。

(しん-き-くさ-し［辛氣臭］（形、二）　思ふにまかせず心いらだつ。しれったし。

(じんぎ-くわん［神祇官］（名）　古昔、神祇に關する一切の事務をつかさどりし官。太政官の上にありしもの、維新以後にも、一時太政官と對立して設置せられたり。かみづかさ。

(しん-きぢく［新機軸］（名）　在來のものと異なりたるくみたて。あたらしき方法。

(しん-きつ-れう［秦吉了］（名）　【動】「きうくわんてう」（九官鳥）に同じ。

じんき-とり［人氣取］（名）　自家の名望を博せんとする手段。又、其手段に巧なる人。

廿じんぎ-はく［神祇伯］（名）　古昔、神祇官の長官。かみづかさのかみ。

(しん-きふ［賑給］（名）　㊀ほどこしにぎはすこと。めぐみあたふること。（振給）。㊁古昔、五月に賤民に米鹽などを施しゝ公事。

(しん-きふ［進級］（名）　等級をすゝむること。

(じん-きふ［迅急］（名）　すみやかなること。はやきこと。

(しん-きやう［震驚］（名）　ふるひおどろくこと。

(しん-きやう［進境］（名）　進歩の境遇。

(しん-きやう［神鏡］（名）　㊀神前にかけおく鏡。㊁三種神器の一なる八咫鏡(ヤタノカガミ)の稱。

(しん-きやく［新客］（名）　あたらしく來りたる客。

(しん-きゆう［賑窮］（名）　窮民にものをめぐみあたふること。

(しん-きゆう［深宮］（名）　おく深き宮殿。

(しん-きゆう［寢宮］（名）　みたまや。おたまや。

(しん-きよ［新居］（名）　あらたに建築したる住居。

(じん-きよ［腎虛］（名）　精液の虛耗より生ずといふ身體の衰弱。

(しん-きよう［心胸］（名）　むね。こゝろ。

(しん-きよく［新曲］（名）　あらたに作られたる歌曲。

(しん-きよく［心曲］（名）　心中のいちぶしじゆう。

しん-きり［心切］（名）　蠟燭の心のもえさしを切る用具。

(しん-ぎり［新切］（名）　甘鹽にして輕く日に乾(ホ)したる魚肉。

(しん-きろう［蜃氣樓］（名）　【地】無風平穩の日に、溫度又は濕度の關係より、大氣の密度が層々相異なるとき、光線の屈折并に彎曲の起るがため、地表の物體の像が、海上にては空中に砂磧にては地平下に、或は竪或は倒に現ずるもの、もと支那にて、海上に現ずるものを見て、蜃(チン)の吐(ハ)く氣の作用なりといひ傳へたるより此名あり。海市。

(しん-きん［宸襟］（名）　天子の御心。おほみごゝろ。

(しん-きん［眞金］（名）　じゆんきん。「ー不蝕」。

(しん-きん［親近］（名）　㊀したしみちかづくこと。㊁ごきんじ。おそば。㊂みより。えんぴき。しりあひ。

(しん-きん［愼謹］（名）　つゝしみ。

(しん-ぎん［岑崟］（名）　けはしきみね。

(しん-ぎん［呻吟］（名）　うめくこと。うなること。

(しん-く［辛苦］（名）　くるしみ。なんぎ。しんぱい。

(しん-く［眞紅］（名）　濃(コ)き紅色。（深紅）。

(しん-く［神供］（名）　神の供物。

(じん-く［甚句］（名）　小唄の名、七・七・七・五の四句より成るもの。

(しん-くう［眞空］（名）　㊀他物はいふ迄もなく、空氣さへも存在せざる空虛。㊁【佛】諸法の實相は空なること。　ーーくわん［眞空管］【理】空氣をぬきたる硝子管、陰極線又は「エックス」光線等の實驗に用ふるもの。

(じん-ぐう［神遇］（名）　㊀不思議なる出會。㊁神と出會ふこと。㊂時代又は方處を隔てたる人と精神の相一致すること。

(じん-ぐう［神宮］（名）　㊀神の宮殿。かみのみや。やしろ。㊁伊勢の太神宮。　ーーしちやう［神宮司廳］（名）　伊勢太神宮に附屬して、其神事をつかさどる所。

(しん-くわ［心火］（名）火の燃(モ)ゆるが如く烈(ハゲ)しくおこり立つ忿怒又は怨恨の情。

(しん-くわ［神化］（名）　不思議なる變化。又、自然の變化。

(しん-くわ［進化＝Evolution］（名）　㊀事物の發達に伴ひて漸次に變化すること。㊁外界の影響と內部の發展とにより、世代を經過する間に、もと同一物なりしものが漸次に互の狀態を異にすること。

(しん-くわ［親和］（名）　㊀親しみ和(ヤハ)ぐこと。㊁【化】異種の物質が相化合すること。

(しん-ぐわ［寢臥］（名）　ふすこと。ねること。

(じん-くわ［人和］（名）　衆人の心の和合すること。「地利はーに如かず」。

(しん-くわい［神怪］（名）　不思議なること。あやしきこと。又、其現象。

(しん-ぐわい［心外］（名）　㊀一心の外。「ー無事ー無理」。㊁おもひのほか。意外。㊂意外のことのために心をいたますること。「ーに存ずる」。

(しん-ぐわい［身外］（名）　からだのほか。自己のほか。

(じん-くわい［燼灰］（名）　もえさしとはひと。轉じて、火にやけて原形のきえうすること。

(じん-ぐわい［人外］（名）　「にんぐわい」に同じ。

(じん-くわう［人皇］（名）　現世を統治し給ふ天皇を申し奉る語。「ー百十五代」。

(しん-くわ-りよく［親和力］（名）　【化】異種なる物質の相化合せんとする作用。

(しん-くわ-ろん［進化論＝Evolution theory］（名）　西暦一千八百五十八年「イギリス」國の博物學者「ダーウイン」の始めて稱道したる說にして、世界の生物は千殊萬別にして其狀態習性相異なれども、原始に遡(サカノボ)れば、各個皆な其種源を一にし、極めて簡單なる原始生物より起り、一方に進化したるものは植物となり、他方に進化したるものは動物となり、又、其植物も動物も數多の種類に分岐して、今日の狀態となれりといふこと。

(しん-くわん［神官］（名）　しんしよく。かんぬし。

(しん-ぐわん［心願］（名）　心の中に神佛などに願を立つること。こゝろのねがひ。

(じん-くわん［人寰］（名）　俗人の住まへる範圍。世の中。

(しん-くん［神君］（名）　功德偉大なる祖先の敬稱。

(しん-ぐん［進軍］（名）　軍隊を進むること。

(じん-くん［人君］（名）　きみ。君主。

(じん-くん［仁君］（名）　仁徳ある君主。

(しん-け［新家］（名）　べっけ。ぶんけ。しんたく。

(しん-げ［信解］（名）　【佛】信仰によりて教法を會得すること。

(しん-けい［深閨］（名）　奧ふかきねや。「ーの處女」。

(しん-けい［神惠］（名）　かみのめぐみ。

(しん-けい［眞景］（名）　實際の景色。

(しん-けい［親兄］（名）　自分の兄。

(しん-けい[親系](名) 親族の系統。　「へ。
(しん-けい[心計](名) つもり。もくろみ。かんが
(しん-けい[晨鷄](名) 夜明をつぐるにはとり。
(しん-けい[神經](名) ㊀動物の知覺及運動の傳
達をつかさどる機關、神經細胞と神經纎維とより成
り、神經中樞より分出して身體の各所に分布するも
の。㊁知覺。精神。「幽靈は—の作用」。㊂神經家又
は神經質なること。 ——か[神經家](名) 神經の
過敏若しくは病的なる人。神經質の人。 ——き
ゆう[神經弓](名) 脊椎骨の背側に突起して弧
狀をなす部分の稱。 ——くわい[神經塊](名)
神經細胞より成り、身體の或部分に一個若しくは
數個存在して神經纎維を導くもの。 ——けい
とう[神經系統](名) 神經と神經中樞との總
稱。 ——さいはう[神經細胞](名) 神經塊
を組成する細胞、極めて小さくして多くの突起を有
するもの。 ——しつ[神經質](名) ㊀[心]氣質
の一、事物に感じ易く、敏捷活潑にして急性なれど
も、堅柔不斷なるもの。 ㊁普通、神經の過敏又は病
的にして、よく感動しよく掛念する性質の稱。 ——
すゐじやく[神經衰弱](名) 過勞等により
て神經系統に衰弱を來たせる疾病、苦悶・懷疑を起
し、眩暈することあり。 ——せんゐ[神經纎
維](名) 神經塊によりて導(ミチ)かるゝ絲狀のも
の、其狀恰も海底電線の如く、中心に軸索あり、この
軸索は即ち傳達をなす主要部にして、他は保護用の
ものなり。 ——ちゆうすう[神經中樞](名)
腦髓・脊髓又は神經塊の總稱にして、神經の傳達を
受け又は神經に傳達を命ずる作用をなす機關。 ——
つう[神經痛](名) 神經に疼痛を感ずる疾病。
——びやう[神經病](名) 神經系統の疾病。

(しん-げい[親迎](名) みづから出迎すること。
(じん-けい[仁惠](名) めぐみ。いつくしみ。
(じん-けい[仁兄](代) 同輩を親みて呼ぶ稱。
(しんけい-くわ[唇形科](名) [植]通常、花冠の
唇形をなす草本、各國多少これを産す、此科に屬す
る植物は多くは芳香を有す、じふにひとへ・あづさ
等これに屬す。
(しん-けう[新教](名) 「キリスト」教の一派、「カ
ルビン」「ルーテル」等の唱導したる宗教革命の主旨
に遵由するもの、總稱、分派多し。「プロテスタン
(しん-けう[眞教](名) まことのをしへ。「ト」。
(しん-けう[信教](名) 宗教の教義を信仰する
こと「—の自由」。　「てある橋。
(しん-けう[神橋](名) 神殿などにかけわたし
(しん-げき[進擊](名) 進みて敵を攻擊すること。せ
めかゝること。　「ること。
(しん-げき[侵擊](名) 敵地に入りこみて攻擊す
(しん-げつ[新月](名) ㊀[天]太陰が太陽に對し
て合(ガフ)にあるとき、即ち太陰が太陽と反對に來り
たるときの稱、故に地上よりは見えず。又、太陰が日
沒後太陽の東に僅に見ゆるときの稱。㊁陰曆にて
月の初めの月。三日月。
(じん-けつ[人傑](名) すぐれたる人物。　「つ。
(しん-けん[神譴](名) かみのとがめ。かみのば
(しん-けん[神劍](名) ㊀神より授(サヅ)かりたる
劍。又、神に供へたる劍。㊁三種神器の一なる草薙
(クサナギ)劍の稱。
(しん-けん[眞劍](名) ㊀竹刀又は木刀に對して、
まことの刀の稱。㊁眞面目。ほんたう。眞正。
(しん-けん[神權](名) ㊀神の權威。㊁神より授
(サヅ)かり又は委任せられたる權。

(しん-けん[進獻](名) 貴人に物を呈上すること。ま
ゐらせたてまつること。獻上。
(しん-けん[親見](名) したしく引見すること。
(しん-けん[親眷](名) ㊀したしみかはゆがること。
㊁みうち。けんぞく。
(しん-けん[親權](名) [法]親たるものが子たる
ものゝ監護及教育をなし、其財產の管理をなす權
利にして、子たるものゝ利益の保護を目的となすも
の、これを行ふものは通常父なれど、父の知れざる
とき若しくは死亡したるときは母これを行ふ、然れ
ども親が子と家を同じうせざるときは、これを行ふ
ことを得ず。
(しん-けん[信驗](名) きゝめ。しるし。
(しん-けん[審檢](名) つまびらかにとりしらぶ
ること。ぎんみ。とりしらべ。「捕獲—所」。
(しん-げん[箴言](名) いましめのことば。
(しん-げん[震源](名) [地]地下に於ける地震の
(しん-げん[信言](名) 信用すべき言。　「起點。
(しん-げん[森嚴](名) 秩序いとたゞしくしてお
ごそかなること。ぞっとする程おごそかなること。
(じん-けん[人權](名) [法](い)債權の稱。(ろ)人
格權の稱。　「さ。
(じん-げん[人言](名) 世人のことば。世のうは
(しんけん-しようぶ[眞劍勝負](名) ㊀眞劍の
果合(ハタシアヒ)。㊁眞面目になす勝負。
(しんけん-せつ[神權說](名) 君主の統治權は
神の授任に基くといふ說。
しんげん-ぶくろ[信玄袋](名) 手に提(サ)げて
[illegible]る一種[illegible]底を設け口を紐にてしめくゝるも
[illegible]

(しん-こ[新古](名) あたらしきとふるきと。
しん-こ[糝粉](名) 粳(ウルチ)の粉を水にてこね、こ
れを蒸(ム)して餅の如くしたるもの。
(しん-こ[眞個](副) まことに。
(しん-ご[神語](名) ㊀かみのおことば。又、かみ
のおつげ。㊁神來の語。
(じん-ご[人後](名) 他人のあとへ。他人の下。
(じん-ご[人語](名) 人のことば。人のはなし。
(じん-ご[盡期](名) 事物の盡くる時期。つくると
き。かぎり。さいげん。
ジンゴイズム[Jingoism](名) 他國を侵略して
領土を擴張せんとする主義。理非を論ぜず國勢を張
らんとする主義。　「靈妙なる功力。
(しん-こう[神功](名) 神の功力。又、神のごとく
(しん-こう[神工](名) 神の製作。又、神のごとく
靈妙なる製作。　「ること。
(しん-こう[愼厚](名) つゝしみ深くして篤實な
(しん-こう[振興](名) ふるひおこすこと。又、ふる
ひおこること。「士氣を—して」。
(しん-こう[進攻](名) すゝみて攻むること。
(しん-こう[侵寇](名) 犯しあだすること。
(しん-こう[進貢](名) たてまつりみつぐこと。
(しん-こう[鍼孔](名) はりのあな。(針孔)。
(しん-こう[鍼功](名) さいほう。ぬひもの。
(しん-こう[深紅](名) こきくれなゐ。
(しん-こう[深厚](名) ふかくあつきこと。「德を樹
つること—なり」。
(じん-こう[人工](名) 人間の作業。ひとのしわ
ざ。じんざう。 ——こきふはふ[人工呼吸
法](名) 氣絕したるものなどの呼吸を誘導するた
めに、理學的作用によりて呼吸をなさしむる法。

(じん-こう[人口](名) ㊀ひとかず。人頭。㊁世
のものいひ。衆人のうはさ。 ——ろん[人口論]
(名) [經]「イギリス」國の經濟學者「マルサス」の唱
へし說にして、「一社會の人口は、障礙なきときは、二
十五年にして二倍となり、食物の等差級數的增加を
なすに反して、等比級數的增加をなす」といふこと。
(しん-こきふ[深呼吸](名) 肺臟內の空氣をな
るたけ多量に出入せしむるやう、深大になす呼吸。
(しん-こく[神國](名) ㊀神の開き給ひし國、即ち
我國の稱。「日本は—なり」。㊁支那人が自國の尊稱
にもいふ語。(中華)。　「おこすこと。
(しん-こく[新刻](名) 書籍圖畫等を新に版木に
(しん-こく[深刻](名) 極めて殘忍なること。むご
(しん-こく[深谷](名) 底深き谷。　「きこと。
(しん-こく[深黑](名) まっくろ。(眞黑)。
(しん-こく[新穀](名) 今年收穫したる穀物。
(しん-こく[申告](名) 申上ぐること。申出づること。
(しん-こく[親告](名) ㊀みづから告ぐること。㊁
[法]被害者の告訴。 ——ざい[親告罪](名)
[法]被害者の告訴を待ちて始めて辨理する犯罪、例
へば、有夫姦又は誹毀の如きこれなり。
しんこ-ざいく[糝粉細工](名) 糝粉を用ひて
花鳥其他種々の形をつくること。又、其もの。　「じ。
しんこ-もち[糝粉餅](名) 「しんこ」(糝粉)に同
(しん-こん[神魂](名) たましひ。(心魂)。
(しん-こん[新墾](名) 新に荒地を開拓すること。
(しん-こん[新婚](名) 新に婚禮したること。
(しん-ごん[眞言](名) [佛](い)眞實なる言語。梵
語。梵字。(ろ)呪文。神呪。(は)眞言宗の略言。 ——
しゆう[眞言宗](名) [佛]佛教の一派、大日經・
三部經等を所依とし、胎藏・金剛の兩部を立て、陀羅

[illegible]部より成りし、　宗旨とす。
[illegible]菩薩[illegible]塔より此秘密を受けしより一派
をなせりといふ、我國にては道慈法師始めて唐より
此法を齎(モタラ)し、空海に至りて大にこれを弘通せ
り、故に我國にては空海を始祖とす、後に古義と新
義とに分れたり。 ——ひみつ[眞言秘密](名)
[佛]陀羅尼の秘密。呪文の秘密。 ——りやうぶ
[眞言兩部](名) [佛]胎藏界と金剛界と、即
ち理と智と。 ——ゐん[眞言院](名) 古昔、禁
內にありて僧の參集して修法せし所。
卄じん-こん-じき[神今食](名) 古昔、陰曆六月
及十二月の兩度に行はれし神事、その月十一日の
夜、主上親しく伊勢の太神に齋膳を供へ給ふ。
(しんこん-りよかう[新婚旅行](名) 新婚
の男女が相携へて旅行すること、西洋の風俗を移した
るものにて、互の親睦を溫かにするためといふ。
(しん-さ[參差](名、副) 「しんし」に同じ。
(しん-さ[審査](名) しらべさだむる事。
(しん-さい[震災](名) 地震の災害。
(しん-さい[親祭](名) 陛下の親ら神を祭りたま
ふこと。　「こと。
(しん-さい[親裁](名) 陛下の親ら裁決したまふ
(しん-さい[新歲](名) はつはる。新年。
(しん-さい[心材](名) [植]樹幹の年輪の年を經
て赤褐色となりたる部分の稱、固着して水液なく、
幹を保持する用をなすもの。あかみ。
(じん-さい[人才](名) 才智ある人物。役に立つ人
物。 ——とうよう[人才登用](名) 人才を
上に採用して、これに官職を授くること。
(しん-さう[神葬](名) 神道の式を用ふる葬式。
(しん-さう[神草](名) [植]人參の稱。

(しん-さう[眞相]（名）眞實のありさま。
(しん-さう[新裝]（名）あたらしき服裝。あたらしきよそほひ。
(しん-さう[深窓]（名）おくふかきまど。おくふかきねや。
(しん-さう[心想]（名）こゝろ。おもひ。
(しん-ざう[心像]（名）【心】過去に於て意識に映じたる外物の像が、更に意識中に現出したるもの。
(しん-ざう[神像]（名）神のかたち。かみの像。
(しん-ざう[新造]（名）㊀新につくること。「—の船」。㊁二十歳前後の女。年若き女。
(しん-ざう[心臟]（名）血液分配の機能をつかさどる機關、胸腔内にありて嚢狀をなし筋肉質より成る。内腔は隔壁によりて左右に分かれ、又、左右兩腔は瓣膜によりて各上下に分かる。——びやう[心臟病]（名）心臟の作用常態を失して、脈搏の不齊なるもの。——まひ[心臟痲痹]（名）心臟の痲痹して脈搏不能となりたるもの。
(しん-ざう[腎臟]（名）高等動物の排泄器の一、腹腔の奥に左右一對ありて皮質及髓質の二部より成り、血液中より尿を濾過して、これを膀胱に送りて、體外に排泄する作用をなすもの。——びやう[腎臟病]（名）腎臟の作用が常態を失して、尿の濾過及排泄に故障を生ずること。
(しん-ざう[人造]（名）人工を以て製作すること。又、其もの。——けんし[人造絹絲]（名）綿絲に化學作用にて光澤を加へたるもの。——じやかう[人造麝香]（名）黄白色の結晶物、おもに化粧又は服粧の香料に使用せらる。——せき[人造石]（名）セメント・石灰・砂礫等を石の如く固めたるもの。——りん[人造林]（名）種子を林地に下し、又は苗木を植付けて仕立てたる森林。

(しんざう-がん[深造岩]（名）【地】火成岩の一、地下より迸發する岩漿が、地表の附近にて凝固して成りたるもの。
(しん-さく[振作]（名）ふるひおこすこと。又、ふるひおこすこと。
(しん-さく[新作]（名）あたらしき製作。
(しん-さく[神策]（名）㊀靈妙なるはかりごと。㊁易(エキ)に用ふるめどぎの稱。
(しん-さく[人作]（名）人工にてつくること。又、其つくりたるもの。
(しんさ-くわん[審査官]（名）或事物の審査をつかさどる職名。
しん-ざしき[新座敷]（名）あたらしくつくりたる座敷。
(しん-さつ[審察]（名）つまびらかにみきはむること。
(しん-さつ[診察]（名）醫者が患者の疾病をうかがひ見ること。
(しん-さん[心算]（名）豫め定めたる心中の目算。むなづもり。
(しん-さん[神算]（名）靈妙なるはかりごと。
(しん-さん[辛酸]（名）つらきこと。苦しきこと。——をなむ[甞辛酸]つらきめに遭ふ。
(しん-ざん[深山]（名）やまおく。みやま。
(しん-ざん[晉山]（名）僧侶が新に一寺院の主となること。——しき[晉山式]（名）僧侶が晉山につきて擧行する儀式。
(しん-ざん[神山]（名）㊀仙人の棲むといふ山。㊁神をまつりてある山。㊂いとくすしき高山。
(しん-ざん[新參]（名）㊀新に仕(ツカ)ふるもの。いまゐり。㊁新に加入したるもの。しんいり。——まひ[新參舞]（名）昔時、大名又は旗本などの一部に儀式として行はれし舞、新參のものゝ舞ひしより此名あり。
しんし[籡]（名）布を洗張などするとき、其兩縁にさしわたす竹の串。

(しん-し[神祠]（名）神のやしろ。ほこら。
(しん-し[宸旨]（名）天子のおぼしめし。
(しん-し[親子]（名）親と子と。おやこ。
(しん-し[震死]（名）雷に打たれて死ぬること。
(しん-し[浸死]（名）水波にひたされて死ぬること。
(しん-し[心思]（名）おもひ。こゝろ。
(しん-し[心志]（名）こゝろざし。
(しん-し[新誌]（名）新聞及雜誌などの稱。
(しん-し[進仕]（名）官途に出でつかふること。
(しん-し[振子]（名）【理】重心より上の點を支(サヽ)へたるものにして、自由に振動し得る物體。さげふり。「時計の—」。
(しん-し[眞摯]（名）心のまっすぐにして敦篤の氣象に富むこと。
(しん-し[脣齒]（名）（くちびるとはとの意）互に相依り相輔けて生存する關係あること。
(しん-し[進止]（名）たちゐ。ふるまひ。
(しん-し[進士]（名）支那にて、人才登用の試驗に及第せしもの、稱。
(しん-し[信士]（名）㊀つかひ。使節。㊁信義にあつき人士。㊂【佛】（清信士の略）俗人にして佛門に入りたる男子又は佛式に依りて葬られたる男子の戒名にいふ語。信女の對。
(しん-し[紳士]（名）㊀氣風け高くして禮儀厚き人。道德正しくみやびやかなる人。㊁上流社會の人。富貴なる人。
(しん-し[參差]（名、副）㊀高下相齊(ヒト)しからざるさまにいふ語。㊁互に相交(マジ)はるさまにいふ語。
(しん-じ[神璽]（名）八尺瓊曲玉(ヤサカニノマガタマ)の稱。
(しん-じ[心事]（名）㊀心に思ふ事。こゝろのほど。㊁おもふ所と事柄と。

(しん-じ[臣事]（名）臣として事(ツカ)ふること。
(しん-じ[眞事]（名）まことの事實。
(じん-し[人士]（名）敎育又は地位ある人。
(じん-じ[仁慈]（名）いつくしみ。めぐみ。なさけ。
(しん-じ[神事]（名）神を祭ること。まつり。
(じん-じ[人事]（名）㊀人間社會にあらはるゝ事柄。㊁一身上に關したる事項。人の身分能力に關したる事項。㊂人間のなし得る事。にんげんわざ。㊃おくりもの。——きよく[人事局]（名）陸軍省及海軍省にて、將校及將校相當官及准士官の一身上に關する事務を取扱ふ一局。——そしよう[人事訴訟]（名）【法】婚姻又は離婚等の如く、人の身分能力に關する訴訟。
(しん-じう[深愁]（名）ふかきうれひ。
(しん-じう[新秋]（名）㊀秋のはじめ。㊁陰曆七月の稱。
(しん-じき[審識]（名）つまびらかにしること。
(しん-じき[深識]（名）おくふかき見識。
(しん-じき[新式]（名）㊀あたらしき法式。㊁あたらしきかた。
卄しん-じち[眞實]（名）「しんじつ」に同じ。
(しん-じつ[寢室]（名）寢(イヌ)る室。ねま。
(しん-じつ[新室]（名）あたらしくつくりたるへや。
(しん-じつ[心室]（名）【生】心臟の左右腔の上下に分かれたるもの、下腔。
(しん-じつ[信實]（名）まめやかにていつはりかざりのなきこと。正直なること。
(しん-じつ[眞實]（名）いつはりにあらざること。まこと。
(しん-じつ[迅疾]（名）ときこと。はやきこと。
(じん-じつ[人日]（名）五節句の一、正月七日。
(じん-じつ[盡日]（名）㊀ひねもす。終日。㊁月の末日。又、年の末日。晦日。又、大晦日。

(しん-じふ[震慴]（名）おそれてふるひをのゝくこと。
(しんじふ-けう[神習敎]（名）神道の一派、加茂規清の創說にかゝる。
(じんじふ-せい[人事不省]（名）昏絶又は身體いたく衰弱して、人事をわきまへざること。全く無感覺なること。
(しん-じまり[眞締]（名）表面はしまりなきやうに見えて、心の底にはしめくゝりあること。
(しん-じや[親炙]（名）「しんせき」に同じ。
(しん-じや[辰砂]（名）【化】水銀と硫黄との化合物、多くは土狀をなして存在す、通常濃紅色又は赤褐色なり、水銀を獲(ウ)る原料に供せられ、又、精製して顏料若しくは藥劑に供せらる。
(しん-じや[信者]（名）其宗敎を信仰する人。信徒。
(じん-しや[人車]（名）㊀人力車の稱。㊁人車鐵道の車の稱。
(じん-しや[仁者]（名）㊀仁の道に到りたる人。道德の成就したる人。「—は憂へず」。㊁仁惠の心深き人。なさけ心の厚き人。
(じん-じや[神社]（名）かみのやしろ。ほこら。みや。
(しん-じやう[信賞]（名）賞すべき功績あるものは、必ずこれを賞すること。
(しん-じやう[心匠]（名）つもり。たくみ。かんがへ。
(しん-じやう[鍼匠]（名）鍼(ハリ)を作る職人。
(しん-じやう[紳商]（名）上流の地位にある商人。紳士と稱せらるゝ商人。
(しん-じやう[神漿]（名）㊀神に供(ソナ)へたる飲物。㊁不思議に湧(ワ)き出でたる飲物。又、不思議の功力ありといふ飲物。
(しん-じやう[身上]（名）㊀一身の關係。みのうへ。㊁しんだい。資産。「—を潰す」。

(しん-じやう[身上]（名）㊀前條に同じ。㊁芝居の給金。㊂とりえ。ねうち。「あの女が彼奴の—」。
(しん-じやう[心情]（名）こゝろ。おもひ。
(しん-じやう[心狀]（名）心のありさま。
(しん-じやう[眞情]（名）㊀まことのこゝろ。かざらぬおもひ。㊁まことのありさま。いつはりなき事實。實際の狀態。（眞狀）。
(しん-じやう[進上]（名）まゐらすること。さしあぐること。たてまつること。
(じん-じやう[尋常]（名）㊀八尺と一丈六尺と。轉じて、わづかの長短。「—を爭ふ」。㊁よのつね。あたりまへ。つねなみ。㊂目立たずして品格好きこと。「—なる物言」。㊃すなほなること。殊勝なること。——いちやう[尋常一樣]（名）つねなみにして格別他とかはりなきこと。「—窓前月」。——えふ[尋常葉]（名）【植】扁平にして綠色を帶ぶる葉。——かうとう-せうがくかう[尋常高等小學校]（名）尋常小學校と高等小學校とを併置したる學校。——けいさつ[尋常警察]（名）平時に於ける普通の警察の稱。非常警察の對。——せうがくかう[尋常小學校]（名）小學校の一種、滿六年以上の兒童に普通敎育を施す所にして、修業年限を六ケ年とし、主要科目を修身・國語・算術及體操とす。——に[尋常]（副）㊀あたりまへに。普通に。㊁殊勝に。すなほに。
(しんじやう-さい[新嘗祭]（名）「にひなめまつり」に同じ。
(しんじやう-さい[神嘗祭]（名）「かむなめまつり」に同じ。
(しんじやう-ひつばつ[信賞必罰]（名）賞

すべきは賞し罰すべきは罰して、賞罰を嚴重にすること。

(しんじやう-れんがふ[身上聯合](名) 【法】二個以上の國家が同一の君主を戴(イタダ)くこと、此事實あるは君主を以て國家の機關となす國家にのみ限るものにして、其各國は共に純然たる獨立國なり。

(じんじや-きよく[神社局](名) 內務大臣の統轄に屬し、其意思を受けて、神社及神官・神職に關する事項を取扱ふ內務省の一局。

(しん-しやく[斟酌](名) ㊀水又は飲料などをくみわくること。㊁彼此を參照して、其善惡を取捨すること。㊂ほどよくとりはからふこと。㊃事情を推量すること。心狀をくみとること。(參酌)。

(じんしや-てつだう[人車鐵道](名) 人力を動力として車を鐵軌の上に走らする裝置、規模狹小にして、車體の轉力と土地の傾斜とを利用するもの。

(しん-しゆ[新酒](名) 今年釀造せる酒。古酒の對。

(しん-しゆ[神酒](名) 神に供する酒。みき。

(しん-しゆ[進取](名) ㊀すゝみ出でゝとること。すゝみ出でゝなすこと。㊁前途の困難又は故障を排し進みて事をなすこと。「—の氣象に富む」。

(しん-しゆ[眞趣](名) まことのおもむき。

(しん-しゆ[身首](名) からだとくびと。——ところをことにす[身首異處] 首をきらるゝにいふ。

(しん-しゆ[浸種](名) 種子を水にひたすこと。

(しん-じゆ[神樹](名) 神社の境內などにある樹木。又、神靈の憑(ヨ)るといひ傳ふる樹木。(神木)。

(しん-じゆ[新樹](名) 若葉の芽を發して綠色をなす樹木。

(しん-じゆ[神授](名) 神よりさづかること。

(しん-じゆ[眞儒](名) 世道人心を稗益する儒者。世の中の役に立つ學者。

(しん-じゆ[眞珠](名) おもに眞珠貝より出づる一種の珠、貝の膜より分泌する殼質の物質が膜と殼との間に入りたる砂などの面を蔽(オホ)ふによりて生ず、銀色にして五色の光彩を放ち、形圓し、裝飾品又は藥用品として珍重せらる。しらたま。あこやだま。

(じん-しゆ[人主](名) きみ、君主。

(じん-しゆ[人種](名) 地球上人類の種族、骨格・皮膚又は言語等の異同により、或は黑人種・黃人種・白人種の三つに區別し、或は黃人種・白人種・銅色人種・黑色人種・褐色人種の五つに區別す。

(しん-しゆう[眞宗](名) 【佛】「いつかうしゆう」(一向宗)に同じ。

(しん-じゆう[臣從](名) 臣下としてつきしたがふこと。

しんじゆ-がひ[眞珠貝](名) 【動】「あこやがひ」の一名、其眞珠を產するより此名あり。

(しん-しゆく[辰宿](名) ほしのやどり。

(しん-しゆく[信宿](名) 二よさどまり。

(しん-しゆく[振肅](名) 物事のゆるみおとろへたるをふるひおこしておごそかにすること。

(しん-しゆく[伸縮](名) ㊀のぶとちゞむと。㊁のばすとちゞむること。

(しんじゆ-くわう[眞珠光](名) 眞珠に似たる光澤。

(じんしゆ-しんりがく[人種心理學](名) 【心】各人種の心理上の特殊狀態を研究する學。

(しんじゆ-せき[眞珠石](名) 【鑛】玻璃質火山岩の一、質脆(モロ)くして眞珠に似たる光澤と珠粒狀の裂罅とのあるもの。

(しん-しゆつ[進出](名) すゝみいづること。

(しん-じゆつ[心術](名) 心のよる所。こゝろだて。

(しん-じゆつ[賑恤](名) ものをめぐみあたふること。貧窮をすくひたすくること。(振恤)。

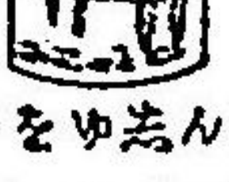
(しん-じゆつ[鍼術](名) 漢方の醫術の一、邪氣又は惡血を泄(モラ)すと稱へ、細小なる鍼を人身の患部に挿入して疾患を治療すること、其鍼を挿入する箇處は二百四十餘あり、支那太古の發明にして、古代これに使用せし砭(ハリ)は即ち石器時代の遺物なり、後其範圍を擴張して、殆ど今日の外科醫術の事にも及びたりといふ。

(じん-じゆつ[仁術](名) 人を治療して仁惠を施す術、即ち、醫術の稱。

(しんしゆつ-きぼつ[神出鬼沒](名) 忽ちあらはれ忽ちかくるゝこと。出沒の不思議なること。

しん-じゆ-ブツ[神儒佛](名) 神道と儒道と佛道と。

しんしゆ-をけ[神酒桶](名) 神酒をもるをけ。



[しんしゆをけ]

(しん-しゆん[新春](名) あたらしき春。はつはる。しんねん。

(しん-じゆん[浸潤](名) ㊀ぬれうるほふこと。㊁次第にしみこむこと。「—之譖」。

(しん-しよ[眞書](名) 眞體の文字。楷書。

(しん-しよ[信書](名) 或人が特定の人に對して音信を通じ又は意思を告げ若しくは事情を報ずる等の書面。てがみ。書狀。「—の秘密」。

(しん-しよ[讖書](名) 未來の豫言をかきてある文書。未來記。

(しん-しよ[新書](名) あらたに編纂著作せられたる書籍。

(しん-しよ[親署](名) 天皇みづから署名したまふこと。

(しん-じよ[糝薯](名) 一種の料理、たゝきたる魚肉に、饂飩粉又は擂薯(イスリ)などを加へて煮たるもの、吸物の實に用ふ。

(しん-じよ[寢所](名) ねどこ。ねや。ふしど。臥床。

(じん-じよ[甚暑](名) 甚だしきあつさ。

(じん-じよ[仁恕](名) ㊀あはれみ深くしておもひやり厚きこと。㊁あはれみて其罪過を問はざること。

(しん-しよう[心證](名) 心中の確信。「判事の—」。

(じん-しよう[人證](名) 【法】證人を以てする證據方法。

(しん-しよく[寢食](名) 寢(イヌ)ると食事すること。「—を廢す」。

(しん-しよく[神色](名) かほいろ。「戰經—變ぜず」。

(しん-しよく[神職](名) 神社の祭事に從事するもの。かんぬし。

(しん-しよく[侵蝕](名) 次第にをかしそこなふこと。

(しん-しよく[浸蝕](名) 水の次第にひたし入りてそこなふこと。——こく[浸蝕谷](名) 【地】山中より流出する水が地表を浸蝕するがために出來たる谷。——さんがく[浸蝕山岳](名) 【地】既成の高地が、水の浸蝕により、其一部を分離せられて、別に山岳となりたるもの。

しん-しよたい[新所帶](名) あらたに構(カマ)へたる所帶。

(しん-しん[津津](名、副) 內部より湧(ワ)きいづるさまにいふ語。「興味—」。

(しん-しん[駸駸](名、副) はやく進むさまにいふ語。「歲月—たり」。

(しん-しん[申申](名、副) 容儀のゆったりとして迫(セマ)らざるさまにいふ語。

(しん-しん[新新](名、副) 漸を追ひて次第にあたらしくなるさまにいふ語。

(しん-しん[深深](名、副) ㊀夜の深くなり行くさまにいふ語。「夜は—と更けわたる」。㊁奥深きさまにいふ語。

(しん-しん[搢紳](名) 官位又は身分の高き人。

(しん-しん[眞心](名) まことのこゝろ。まごゝろ。

(しん-しん[眞信](名) まことの信仰。

(しん-しん[新進](名) あらたに進み出でたること。「—作家」。

(しん-しん[信臣](名) 使者として差遣したる臣下。

(しん-しん[心身](名) こゝろと身體と。

(しん-しん[心神](名) こゝろ。精神。

(しん-じん[神人](名) ㊀神と人と。㊁神通(ジンヅウ)を得たる人。仙人。

(しん-じん[信心](名) ㊀信仰の念。㊁信仰して祈念すること。

(しん-じん[新人](名) ㊀新婚の人。㊁悔いあらためて新生命を得たる人。肉の生活に死にて靈の生活に入りたる人。(「キリスト」敎にていふ)。

(しん-じん[眞人](名) ㊀道家にて、道德の成就したる人の稱。㊁まことの道を體得したる人の稱。

(しん-じん[審訊](名) つまびらかにとひたゞすこと。くはしく吟味すること。

(じん-しん[盡心](名) 心のほどをつくすこと。おもひのたけをつくすこと。

(じん-しん[甚深](名) いと深きこと。

(じん-しん[人心](名) ㊀私慾に蔽(オホ)はれたる心。又、天性の本然ならぬ心。「—維危道心維微」。㊁人々の心。「—恟々たり」。

(じん-しん[人臣](名) けらい。臣下。

(じん-しん[仁心](名) ㊀仁愛の心。㊁人の心。

(じん-しん[人身](名) ㊀人の身體。㊁一個人の身分。——きうり[人身究理](名) 【生】人身の組織・機關等を研究する科學即ち生理學。——けん[人身權](名) 【法】人格權と身分權との總稱にして生來の私權をいふ、即ち身體・名譽・自由等に關する權利及親子・夫婦等に關する權利これなり。——こうげき[人身攻擊](名) 一個人の私行を攻擊すること。

(じん-じん[仁人](名) 「じんしや」(仁者)に同じ。

(しんしん-さうくわん[心身相關](名) 【心】心理と生理とは其作用活動の互に相關すといふこと、例へば、心に怒を生ずれば身體にもそれに適應したる狀のあらはるゝ等これなり。

ジンジンビア(名) 《「イギリス」語 Ginger-beer の訛》生姜を原料として醱(カモ)したる淸涼劑。

(しん-じんぶつ[新人物](名) あらたに加はり入りたる人物。

(しんしん-へいかう[心身並行](名) 【心】心理の過程と生理の過程とは互に相伴うて起伏生滅すといふこと。

しん-ず[信](他、さ變)（せ・じ・ず・ずる・ずれ・ぜよ） ㊀まことゝ思ふ。疑はず。㊁歸依す。信仰す。

しん-ず[進](他、さ變) たてまつる、さしあぐ。

(しん-すゐ[薪水](名) ㊀たき木と水と。㊁たき木をひろひ水を汲(ク)むこと、又、しもべのするわざ。「—の勞」。

(しん-すゐ[神水](名) ㊀神前にそなへたる水。㊁靈驗ある水。

(しん-すゐ[心醉](名) 深く心を傾けて其事に耽(フ)けること。又、深く心を傾けて其人を信ずること。